

山王遺跡VII

—三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書—

第三分冊

平成三十年三月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

山王遺跡VII

—三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書—

第3分冊

M区、N区の調査、自然科学分析、総括編

平成30年3月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

山王遺跡VII

—三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書—

第3分冊

M区、N区の調査、自然科学分析、総括編

例　　言

- 本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所が担当する復興関連事業の、三陸沿岸道路仙塩道路4車線化と多賀城IC建設工事に伴い、平成24年度から平成26年度に実施した山王遺跡・市川橋遺跡八幡地区的発掘調査成果をまとめたものである。本書の題名は、2遺跡が隣接して同一の性格をもつことから、山王遺跡としたが、本文中では遺跡地図に準拠してそれぞれの遺跡名を使用している。なお、地区名は小字に準拠した。調査区との関係は、G区が伏石地区、それ以外の調査区は八幡地区である。
- 調査成果は、現地説明会、宮城県遺跡成果発表会、古代城柵官衙遺跡検討会、多賀城市遺跡成果報告会、文化財保護課ウェブサイトなどで、その内容の一部を公開しているが、本書と内容が異なる場合は、本書がこれに優先する。
- 発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。調査にあたっては、他県市からの自治法派遣職員と宮城県多賀城跡調査研究所職員、東北歴史博物館職員の協力を得ている。
- 発掘調査と報告書作成にあたっては、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、会津若松市教育委員会、多賀城市教育委員会、東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所から多大な協力をいただいた。また、以下の方からご指導・ご助言を賜った（敬称略、所属は当時）。
相沢清利（多賀城市埋蔵文化財調査センター）、今泉隆雄（東北歴史博物館）、及川規（東北歴史博物館）、大橋泰夫（島根大学）、佐川正敏（東北学院大学）、高橋義行（利府町教育委員会）、千葉孝弥（多賀城市教育委員会）、辻秀人（東北学院大学）、芳賀文絵（東北歴史博物館）、林部均（国立歴史民俗博物館）、松崎哲也（奈良文化財研究所）、松本秀明（東北学院大学）、箕浦幸治（東北大学）、山田努（東北大）学、吉野武（宮城県多賀城跡調査研究所）
- 本書の遺跡位置図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図を複製して使用した。
- 本書における平面図は、東日本大震災後の世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。方位Nは座標北を表す。
- 本書で使用した遺構略号は、以下の通りである。
SA：柵跡・材木堆跡　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡・河川跡　SE：井戸跡　SF：畝跡（小溝状遺構群）　SI：竪穴住居跡　SK：土坑　SP：ピット・柱穴　SX：道路跡・整地層・その他遺構
- 掘立柱建物跡の柱穴の位置は、東西南北の側柱列をそれぞれE・W・S・N、隅柱を1とし、両者の組合せで表している。たとえば、南東隅柱はS1E1で、東側柱列の北から3個目の柱穴はE1N3となる。
- 土色の記載は、「新版標準土色帳」（小山忠・竹原秀雄 1973、農林水産省農林水産技術会議事局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修・日本色研事業株式会社発行）に依拠した。
- 遺構図および遺物図の縮尺は、それぞれスケールを付して示している。

11. 土師器の記述にある「ロクロ調整」とは、製作に際してロクロを使用したことを意味し、「非ロクロ調整」とは、製作に際してロクロを用いなかったことを意味する。

12. 土器実測図のうち、黒色処理・煤痕・被熱痕などの表現は以下のとおりである。また、礫石器・転用砥の矢印は磨面の範囲を示している。

[遺構]	灰白色火山灰堆積層	柱痕跡	抜取穴	焼面	柱材
	カマド構築土	カマド構築材（土器）	カマド構築材（瓦）		
	カマド構築材（切石）				
[遺物]	黒色処理	赤彩・赤色 （外面の僅りは赤色、内面僅りは赤色）	油煙・煤	剥離・欠損	墨痕
	被熱痕	漆付着・漆仕上げ	鉄滓付着	赤漆	黒漆

13. 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の分類と記載は、同一の瓦類が出土してその基準となっている多賀城跡分類（多賀城跡調査研究所 1982a『多賀城跡 政府跡本文編』）に依拠している。

14. 文中・表中の「大戸産」とは、福島県会津若松市大戸窯跡群の製品を指す。

15. 大戸産須恵器の同定は、会津若松市教育委員会から提供を受けたサンプルと照合しながら行った。また、その一部は同教委の承諾のもと、第14章第14節（4）に写真を掲載している（平成29年9月7日付け 29会教文第503号）。

16. 出典のうち、特に引用の多い機関名については以下のとおり記載している。

「宮城県教委」：宮城県教育委員会

「多賀研」：宮城県多賀城跡調査研究所

「多賀城市教委」：多賀城市教育委員会

「多賀城市埋文センター」：多賀城市埋蔵文化財調査センター

17. 註は各節の末尾に記載している。

18. 航空写真撮影と遺物写真撮影は、以下の機間に委託して行った。

航空写真：（株）日本特殊撮影

遺物写真：（株）アートプロフィール、（株）仙台ばど

19. 本書の自然科学分析は以下の機間に委託して行った。

火山灰分析：火山灰考古学研究所

種子同定：古代の森研究室

20. 本書の整理作業は、村田晃一・熊谷宏規・齋藤和機・黒田智章（当課職員）、高橋透（宮城県多賀城跡調査研究所職員）、岡本泰典（岡山県教育委員会）のほか、安齊香・伊藤幸恵・伊藤康子・大沼美代子・長田由佳・岸柳あきら・木村奈保美・小林由美・佐々木みゆき・佐藤沙織・佐藤せい子・柴田とみ子・高橋智佳子・瀧澤恵子・只木一美・千田敦子・千葉栄子・千葉千恵・遠山寛美・長沼雅子・中島敦子・伏見裕味子・古川史佳・真壁智美・山中留理・與名本京子・渡邊祐子（当課臨時職員）が行った。

21. 本書の執筆は担当職員の協議を経て以下の分担で行い、村田晃一が編集した。

第Ⅰ章：齋藤和機

第Ⅱ章：齋藤和機（1節）

　　村田晃一（2節）

第Ⅲ章：齋藤和機

第Ⅳ章：村田晃一・齋藤和機

第Ⅴ章：村田晃一・齋藤和機（1～9・11節）

　　西村力（10節・動物遺存体）

　　齋藤和機（10節・木製品、骨角製品）

　　村田晃一（その他の10節）

第VI～XⅠ章：村田晃一・齋藤和機

第XⅡ章：齋藤和機

第XⅢ章：火山灰考古学研究所（1節）

　　古代の森研究室 吉川純子（2節）

第XⅣ章：村田晃一（1～4・12・14節）

　　西村力（5節）

　　村田晃一・齋藤和機（6節・11節（2））

　　齋藤和機（7～9・13節）

　　齋藤和機・村田晃一（10・11節（1））

第XⅤ章：村田晃一

22. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目 次

(第1分冊)

例言

調査要項

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
-------------	---

第Ⅱ章 遺跡の概観

1. 遺跡の位置と地理的環境	2
2. 歴史的環境	2

第Ⅲ章 調査の方法と経過

1. 東日本大震災の復興事業に伴う調査基準の弾力的運用について	13
2. 平成 24 年度の調査経過	16
3. 平成 25 年度の調査経過	17
4. 平成 26 年度の調査経過	19
5. 基本層序	19
6. 発見した遺構と遺物	21

第Ⅳ章 道路跡

1. 北 2 道路跡	25
2. 北 2a 道路跡	33
3. 西 6a 道路跡	47
4. 西 4 道路跡	53
5. 西 5 道路跡	74
6. その他の道路跡	83
7. 道路上の第 II 層出土遺物	84

第Ⅴ章 D 区

1. 整地層	89
2. 区画施設跡	105
3. 溝跡	112
4. 掘立柱建物跡・掘立柱塙跡	120
5. 竪穴住居跡	133
6. 竪穴建物跡	150
7. 井戸跡	160
8. 土坑	167
9. 畑跡	173

10. SD100・SD2050B 河川跡	
(1) 古墳時代中期と後期の河川跡の概要	175
(2) 調査概要	175
(3) 層序	177
(4) 出土遺物	
A. 土器	187
B. 土製品	247
C. 石製品	252
D. 凝灰岩切石	252
E. 木製品・樹皮製品	252
F. 骨角製品	274
G. 動物遺存体	299
11. 遺構外出土遺物	331

(第2分冊)

第VI章 F区

1. 溝跡	3
2. 掘立柱建物跡	3
3. 壇穴住居跡	19
4. 土坑	45
5. 遺構外出土遺物	45

第VII章 G区

1. 区画施設跡	51
2. 溝跡	69
3. 掘立柱建物跡	73
4. 壇穴住居跡	83
5. 井戸跡	84
6. 土坑	90

第VII章 J区

1. 整地層	97
2. 区画施設跡	99
3. 溝跡	115
4. 掘立柱建物跡・掘立柱廻跡	117
5. 周溝をもつ建物跡	149
6. 壇穴住居跡	152

7. 円形周溝跡	166
8. 井戸跡	168
9. 土坑	180
10. 煙跡	195
第IX章 L区	
1. 整地層	205
2. 区画施設跡	223
3. 溝跡	262
4. 掘立柱建物跡・掘立柱塀跡	268
5. 壁穴住居跡	298
6. 円形周溝跡	326
7. 井戸跡	326
8. 土器埋設遺構	345
9. 土坑	345
10. 煙跡	366
11. 遺構外出土遺物	370
 (第3分冊)	
第X章 M区	
1. 区画施設跡	5
2. 溝跡	22
3. 掘立柱建物跡	23
4. 土坑	27
5. 煙跡	30
第XI章 N区	
1. 区画施設跡	35
2. 溝跡	35
3. 煙跡	40
第XII章 第V層の水田跡	
43	
第XIII章 自然科学分析	
1. 山王遺跡から出土した火山灰分析	
(1) はじめに	51
(2) テフラ検出分析	51
(3) テフラ組成分析(火山ガラス比分析・重鉱物組成分析)	52
(4) 屈折率測定(火山ガラス・屈折率測定)	56

(5) 考察	58
(6)まとめ	59
2. 山王遺跡から出土した大型植物遺体	
(1)はじめに	61
(2)試料と同定結果	61
(3)考察	65
(4)出土した大型植物遺体の特筆すべき分類群の形態記載	67
第 XIV 章 総括	
1. 古墳時代中期の土器	
(1) 土師器の分類	75
(2) 土器の共伴関係と年代	79
(3) 七北田川下流域における古墳時代中期土器の変遷	84
2. 古墳時代後期の土器	
(1) 土師器の分類	93
(2) 土器の共伴関係と年代	98
(3) 7世紀から8世紀の土師器製作について	109
(4) 仙台平野北東部における7世紀の須恵器生産	115
3. 奈良・平安時代の土器	
(1) 主な遺構出土土器の年代	120
(2) 多賀城周辺における5世紀から10世紀の土器変遷	138
4. 奈良・平安時代の土石製品	
(1) 研	140
(2) 凝灰岩切石と切石組カマド	140
5. 動物資源利用の特徴と古墳時代後期の生業	
(1) 動物遺存体群の構成	144
(2) 貝層の形成と漁撈環境の変化	148
(3) 大型獣の処理と廃棄	148
(4) 山王・市川橋遺跡における古墳時代後期生業の特徴	149
6. 遺構の特徴と年代	
(1) 道路跡	151
(2) 区画施設跡	152
(3) 掘立柱建物跡	158
(4) 竪穴住居跡	166
(5) 竪穴建物跡	171
(6) その他の建物跡	171

(7) 井戸跡	172
(8) 溝跡	176
(9) 土器埋設遺構	177
(10) 土坑	177
(11) 番跡	179
7. 古墳時代前期の八幡・伏石地区	
(1) 水田の構造	180
(2) 水田の形態	183
(3) 水田域の広がりと居住域	183
8. 古墳時代中期の八幡・伏石地区	
(1) 区画施設の検討	188
(2) 「布掘り底面から支柱掘方を掘り下げる」堀跡について	190
(3) 竪穴鍛冶遺構について	191
(4) 東北地方の古墳時代中期鍛冶遺構	192
(5) 竪穴鍛冶遺構と区画施設の関係	195
(6) 出土遺物からみた区画内の生産活動	196
(7) 古墳時代中期の八幡・伏石地区的歴史的評価	196
9. 古墳時代後期の八幡・伏石地区	
(1) 集落の区画	198
(2) 竪穴住居跡	201
(3) 集落の生業活動	208
(4) 集落の存続年代	209
10. 古代（方格地割成立以前）の八幡・伏石地区	
(1) 区画Ⅰ期の様相	210
(2) 区画Ⅱ期の様相	213
11. 古代（方格地割成立以後）の八幡・伏石地区	
(1) 道路について	216
(2) 街区の様相	227
12. 古墳時代の七北田川下流域と砂押川流域	
(1) 前期	243
(2) 中期	249
(3) 後期	256
(4) まとめ—古墳時代における七北田川下流域と砂押川流域の動態—	263
13. 多賀城南面の国府域について	
(1) 多賀城南面方格地割の検討	266

(2) 陸奥国府域の建物配置	271
(3) 方格地割施工後の竪穴住居	281
(4) 水田・畑	281
14. 出土遺物からみた陸奥国府	
(1) 官衙的器種	282
(2) ミガキ須恵器	283
(3) 須恵器壺G	289
(4) 大戸産須恵器	291
(5) 碗	302
(6) 腰帶具	319
(7) まとめ	323
第XV章 まとめ	325
引用・参考文献	331
報告書抄録	349

付図

図版目次

第1分冊

巻頭図版1 航空写真1

巻頭図版2 航空写真2

巻頭図版3 土器・土製品・石製品

巻頭図版4 古墳時代後期河川跡出土骨角製品

図版1 道路周辺の微地形分類図	3
図版2 仙台平野北部の微地形環境と主な遺跡の位置	4
図版3 陸奥府国多賀城跡と方格地割、遺跡の分布	6
図版4 調査区の位置	16
図版5 調査と現地説明会の様子	18
図版6 基本順序1—模式図	21
図版7 基本順序2—写真	22
図版8 SX12221東西道路跡（北2道路）・12100東西道路跡断面図1	26
図版9 SX12221東西道路跡（北2道路）・12100東西道路跡断面図2	27
図版10 SX12221東西道路跡（北2道路）・12100東西道路跡平面図1（J区）	28
図版11 SX12221東西道路跡（北2道路）・12100東西道路跡平面図2（J区）	29
図版12 SX12221東西道路跡（北2道路）・12100東西道路跡	30
図版13 SX12221東西道路跡（北2道路）出土遺物1	32
図版14 SX12221東西道路跡（北2道路）出土遺物2	33
図版15 SX390・710東西道路跡（北2a道路）断面図	34
図版16 SX390・710東西道路跡（北2a道路）	35
図版17 SX710東西道路跡（北2a道路）	36
図版18 D区平面図1	37
図版19 D区平面図2	38
図版20 SX390東西道路跡（北2a道路）出土遺物1	39
図版21 SX390東西道路跡（北2a道路）出土遺物2	40
図版22 SX390東西道路跡（北2a道路）出土遺物3	41
図版23 SX390東西道路跡（北2a道路）出土遺物4	42
図版24 SX390東西道路跡（北2a道路）出土遺物5	43
図版25 SX390東西道路跡（北2a道路）出土遺物6	44
図版26 SX710東西道路跡（北2a道路）出土遺物	46
図版27 SX12092道路跡（西6a道路）1	48
図版28 SX12092道路跡（西6a道路）、SD5601D溝跡断面図	49
図版29 SX12092道路跡（西6a道路）、SD5601D溝跡平面図（J区）	50
図版30 SX12092道路跡（西6a道路）2	51
図版31 SX12092道路跡（西6a道路）出土遺物	52
図版32 SX2652南北道路跡断面図	53
図版33 SX700・750南北道路跡（西4道路）断面図1	54
図版34 SX700・750南北道路跡（西4道路）断面図2	55
図版35 SX750南北道路跡（西4道路）	56
図版36 SX700・750南北道路跡（西4道路）	57
図版37 D区平面図3	58
図版38 D区平面図4	59
図版39 D区平面図5	60
図版40 SX750南北道路跡（西4道路）出土遺物1	62
図版41 SX750南北道路跡（西4道路）出土遺物2	63
図版42 SX750南北道路跡（西4道路）出土遺物3	64
図版43 SX750南北道路跡（西4道路）出土遺物4	65
図版44 SX750南北道路跡（西4道路）出土遺物5	66
図版45 SX750南北道路跡（西4道路）出土遺物6	67
図版46 SX700南北道路跡（西4道路）出土遺物1	70
図版47 SX700南北道路跡（西4道路）出土遺物2	71
図版48 SX700南北道路跡（西4道路）出土遺物3	72
図版49 SX700南北道路跡（西4道路）出土遺物4	73
図版50 SX400南北道路跡（西5道路）断面図	75
図版51 SX400南北道路跡（西5道路）	76
図版52 SX400南北道路跡（西5道路）平面図1（M区）	77
図版53 SX400南北道路跡（西5道路）平面図2（M区）	78
図版54 SX400南北道路跡（西5道路）出土遺物1	80
図版55 SX400南北道路跡（西5道路）出土遺物2	81
図版56 SX11794波板状凸凹面	82
図版57 SX11794波板状凸凹面出土遺物	83
図版58 SX12100東西道路跡出土遺物	83
図版59 西4道路・北2a道路上堆積層出土遺物1	84
図版60 西4道路・北2a道路上堆積層出土遺物2	85
図版61 SX12221東西道路跡（北2道路）上堆積層出土遺物	86
図版62 整地層・道路跡と河川跡の関係	89
図版63 SX7001整地層	90

图版64 D区全体图	91 • 92	图版101 SI821A • B竖穴住居跡 2	135
图版65 SX7001整地層出土遺物 1	93	图版102 SI821竖穴住居跡出土遺物 1	136
图版66 SX7001整地層出土遺物 2	94	图版103 SI821竖穴住居跡出土遺物 2	137
图版67 SX7001整地層出土遺物 3	95	图版104 SI821竖穴住居跡出土遺物 3	138
图版68 SX7001整地層出土遺物 4	96	图版105 SI823竖穴住居跡	140
图版69 SX7001整地層出土遺物 5	97	图版106 SI823竖穴住居跡出土遺物	140
图版70 SX7001整地層出土遺物 6	98	图版107 SI827 • 839竖穴住居跡 1	141
图版71 SX7001整地層出土遺物 7	99	图版108 SI827 • 839竖穴住居跡 2	142
图版72 SX7025 • 7033整地層	99	图版109 SI705 • 715 • 716 • 737竖穴住居跡出土遺物	143
图版73 SX7025整地層出土遺物 1	101	图版110 SI884 • 886 • 7005 • 7043竖穴住居跡出土遺物	144
图版74 SX7025整地層出土遺物 2	102	图版111 SI705 • 715 • 716 • 737 • 886 • 7043竖穴住居跡出土遺物	145
图版75 SX7033整地層出土遺物	102	图版112 D区平面圖11	146
图版76 SX7026整地層斷面圖	103	图版113 D区平面圖12	147
图版77 SX7026整地層出土遺物	104	图版114 D区平面圖13	148
图版78 SD7007区画溝跡、SX7010洪水層	105	图版115 SX7013竖穴建物跡	151
图版79 SD7007区画溝跡出土遺物 1	106	图版116 SX7013竖穴建物跡出土遺物 1	152
图版80 SD7007区画溝跡出土遺物 2	107	图版117 SX7013竖穴建物跡出土遺物 2	153
图版81 SD7007区画溝跡出土遺物 3	108	图版118 SX7013竖穴建物跡出土遺物 3	154
图版82 SD7007区画溝跡出土遺物 4	109	图版119 SX7013竖穴建物跡出土遺物 4	155
图版83 SD7007区画溝跡出土遺物 5	110	图版120 SX7013竖穴建物跡出土遺物 5	156
图版84 SD7007区画溝跡出土遺物 6	111	图版121 SX7013竖穴建物跡出土遺物 6	157
图版85 D区溝跡斷面圖1	112	图版122 SX7013竖穴建物跡出土遺物 7	158
图版86 D区溝跡斷面圖2	113	图版123 SX7013竖穴建物跡出土遺物 8	159
图版87 D区溝跡出土遺物 1	114	图版124 SE709井戸跡	160
图版88 D区溝跡出土遺物 2	115	图版125 SE709井戸跡出土遺物	160
图版89 D区溝跡出土遺物 3	116	图版126 SE712井戸跡	161
图版90 D区溝跡出土遺物 4	117	图版127 SE712井戸跡出土遺物	162
图版91 SB7086掘立柱建物跡出土遺物	121	图版128 SE798井戸跡	163
图版92 SB1605 • 1606 • 7086 • 7153掘立柱建物跡	123	图版129 SE798井戸跡出土遺物	163
图版93 D区平面圖6	124	图版130 SE837井戸跡	164
图版94 SB7035 • 7040 • 7155 • 7156 • 7157 • 7160掘立柱建物跡	125	图版131 SE837井戸跡出土遺物	165
图版95 D区平面圖7	126	图版132 SE844井戸跡出土遺物	165
图版96 D区平面圖8	127	图版133 SE844井戸跡	166
图版97 D区平面圖9	128	图版134 D区土坑	169
图版98 SB7045 • 7161 • 7162掘立柱建物跡斷面圖	129	图版135 D区土坑出土遺物 1	170
图版99 D区平面圖10	130	图版136 D区土坑出土遺物 2	171
图版100 SI821A • B竖穴住居跡 1	134	图版137 D区土坑出土遺物 3	172

図版138	SF809烟跡出土遺物	173	図版176	SD2050B河川跡2層上面出土土器5	220
図版139	SF801・809煙跡	174	図版177	SD2050B河川跡2層上面出土土器6	221
図版140	SD100・2050B河川跡と周辺遺構	176	図版178	SD2050B河川跡2層上面出土土器7	222
図版141	SD100・2050B河川跡断面図1	178	図版179	SD2050B河川跡2層上面出土土器8	223
図版142	SD100・2050B河川跡断面図2	179	図版180	SD2050B河川跡2層上面出土土器9	224
図版143	SD100・2050B河川跡1	180	図版181	SD2050B河川跡1層出土土器1	227
図版144	SD100・2050B河川跡2	181	図版182	SD2050B河川跡1層出土土器2	228
図版145	SD100・2050B河川跡3	182	図版183	SD2050B河川跡1層出土土器3	229
図版146	SD100・2050B河川跡4	183	図版184	SD2050B河川跡1層出土土器4	230
図版147	SD100・2050B河川跡5	184	図版185	SD2050B河川跡1層出土土器5	231
図版148	SD100・2050B河川跡6	185	図版186	SD2050B河川跡1層出土土器6	232
図版149	SD100・2050B河川跡7	186	図版187	SD2050B河川跡1層出土土器7	233
図版150	SD2050B河川跡4・5層出土土器1	189	図版188	SD2050B河川跡1層出土土器8	234
図版151	SD2050B河川跡4・5層出土土器2	190	図版189	SD2050B河川跡1層出土土器9	235
図版152	SD2050B河川跡4・5層出土土器3	191	図版190	SD2050B河川跡1層出土土器10	236
図版153	SD2050B河川跡4・5層出土土器4	192	図版191	SD2050B河川跡1層出土土器11	237
図版154	SD2050B河川跡4・5層出土土器5	193	図版192	SD2050B河川跡1層出土土器12	238
図版155	SD100河川跡4層出土土器1	195	図版193	SD2050B河川跡1層出土土器13	239
図版156	SD100河川跡4層出土土器2	196	図版194	SD2050B河川跡1層出土土器14	240
図版157	SD2050B河川跡3層、4層上面出土土器1	197	図版195	SD100・2050B河川跡堆積土出土土器1	242
図版158	SD2050B河川跡3層、4層上面出土土器2	198	図版196	SD100・2050B河川跡堆積土出土土器2	243
図版159	SD2050B河川跡3層、4層上面出土土器3	199	図版197	SD100・2050B河川跡堆積土出土土器3	244
図版160	SD2050B河川跡3層、4層上面出土土器4	200	図版198	SD100・2050B河川跡遺構確認出土土器1	245
図版161	SD100河川跡3層出土土器	202	図版199	SD100・2050B河川跡遺構確認出土土器2	246
図版162	SD100・2050B河川跡合流地点3層出土土器1	203	図版200	SD100・2050B河川跡出土ミニチュア土器1	248
図版163	SD100・2050B河川跡合流地点3層出土土器2	204	図版201	SD100・2050B河川跡出土ミニチュア土器2	249
図版164	SD100・2050B河川跡合流地点3層出土土器3	205	図版202	SD100・2050B河川跡出土土玉1	250
図版165	SD100・2050B河川跡合流地点3層出土土器4	206	図版203	SD100・2050B河川跡出土土玉2	251
図版166	SD2050B河川跡2層出土土器1	208	図版204	SD100・2050B河川跡出土土石製品1	253
図版167	SD2050B河川跡2層出土土器2	209	図版205	SD100・2050B河川跡出土土石製品2	254
図版168	SD2050B河川跡2層出土土器3	210	図版206	SD100・2050B河川跡出土土石製品3	255
図版169	SD2050B河川跡2層出土土器4	211	図版207	SD100・2050B河川跡出土土石製品4	256
図版170	SD2050B河川跡2層出土土器5	212	図版208	SD100・2050B河川跡出土土石製品5	257
図版171	SD100河川跡1・2層出土土器	214	図版209	SD100・2050B河川跡出土土石製品6	258
図版172	SD2050B河川跡2層上面出土土器1	216	図版210	SD100・2050B河川跡出土土石製品7	259
図版173	SD2050B河川跡2層上面出土土器2	217	図版211	SD100・2050B河川跡出土土石製品8	260
図版174	SD2050B河川跡2層上面出土土器3	218	図版212	SD100・2050B河川跡出土木製品1	261
図版175	SD2050B河川跡2層上面出土土器4	219	図版213	SD100・2050B河川跡出土木製品2	262

図版214	SD100・2050B河川跡出土木製品3	263
図版215	SD100・2050B河川跡出土木製品4	266
図版216	SD100・2050B河川跡出土木製品5	267
図版217	SD100・2050B河川跡出土木製品6	268
図版218	SD100・2050B河川跡出土木製品7	269
図版219	SD100・2050B河川跡出土木製品8	270
図版220	SD100・2050B河川跡出土木製品9	271
図版221	SD100・2050B河川跡出土木製品10	272
図版222	SD100・2050B河川跡出土木製品11	273
図版223	SD100・2050B河川跡出土骨角製品1	277
図版224	SD100・2050B河川跡出土骨角製品2	278
図版225	SD100・2050B河川跡出土骨角製品3	279
図版226	SD100・2050B河川跡出土骨角製品4	280
図版227	SD100・2050B河川跡出土骨角製品5	281
図版228	SD100・2050B河川跡出土骨角製品6	282
図版229	SD100・2050B河川跡出土骨角製品7	283
図版230	SD100・2050B河川跡出土骨角製品8	284
図版231	SD100・2050B河川跡出土骨角製品9	285
図版232	SD100・2050B河川跡出土骨角製品10	286
図版233	SD100・2050B河川跡出土骨角製品11	287
図版234	SD100・2050B河川跡出土骨角製品12	288
図版235	SD100・2050B河川跡出土骨角製品13	289
図版236	SD100・2050B河川跡出土骨角製品14	290
図版237	SD100・2050B河川跡出土骨角製品15	291
図版238	SD100・2050B河川跡出土骨角製品16	292
図版239	SD100・2050B河川跡出土骨角製品17	293
図版240	SD100・2050B河川跡出土骨角製品18	294
図版241	SD100・2050B河川跡出土骨角製品19	295
図版242	SD100・2050B河川跡出土骨角製品20	296
図版243	SD100・2050B河川跡出土骨角製品21	297
図版244	SD100・2050B河川跡出土骨角製品22	298
図版245	SD100・2050B河川跡出土動物遺存体1—貝類	303
図版246	SD100・2050B河川跡出土動物遺存体2—魚類・ウニ・カニ・両生類・爬虫類	306
図版247	SD100・2050B河川跡出土動物遺存体3—鳥類・中小型哺乳類	312
図版248	SD100・2050B河川跡出土動物遺存体4—ニホンジカ(1)	322
図版249	SD100・2050B河川跡出土動物遺存体5—ニホンジカ(2)・ウマ・ウシ・ウミガメ	323
図版250	SD100・2050B河川跡出土動物遺存体6—イノシシ	326
図版251	D区遺構外出土遺物1	331
図版252	D区遺構外出土遺物2	332
図版253	D区遺構外出土遺物3	333
第2分冊		
図版254	SD11537溝跡出土遺物	3
図版255	F区全体図	4
図版256	SB5300掘立柱建物跡	5
図版257	SB5300掘立柱建物跡基礎板1	6
図版258	SB5300掘立柱建物跡基礎板2	7
図版259	SB5300掘立柱建物跡基礎板3・柱材	8
図版260	SB5302・11601・11602・11603・11604・11605・11606掘立柱建物跡断面図	10
図版261	SB11603・11604・11605・11606掘立柱建物跡面写真	11
図版262	F区平面図1	13
図版263	F区平面図2	14
図版264	F区平面図3	15
図版265	F区平面図4	16
図版266	F区全景	17
図版267	SI11503竪穴住居跡1	20
図版268	SI11503竪穴住居跡2	21
図版269	SI11503竪穴住居跡3	22
図版270	SI11503竪穴住居跡出土遺物1	23
図版271	SI11503竪穴住居跡出土遺物2	24
図版272	SI11503竪穴住居跡出土遺物3	25
図版273	SI11503竪穴住居跡出土遺物4	26
図版274	SI11503竪穴住居跡出土遺物5	27
図版275	SI11503竪穴住居跡出土遺物6	28
図版276	SI11503竪穴住居跡出土遺物7	29
図版277	SI11503竪穴住居跡出土遺物8	30
図版278	SI11503竪穴住居跡出土遺物9	31
図版279	SI11503竪穴住居跡出土遺物10	32
図版280	SI11503竪穴住居跡出土遺物11	33
図版281	SI11503竪穴住居跡出土遺物12	34

图版282	SI11503竖穴住居跡出土遺物13	35	图版319	G区平面图5	78
图版283	SI11503竖穴住居跡出土遺物14	36	图版320	G区平面图6	79
图版284	SI11503竖穴住居跡出土遺物15	37	图版321	G区平面图7	80
图版285	SI11503竖穴住居跡出土遺物16	38	图版322	G区掘立柱建物跡1	81
图版286	SI11501竖穴住居跡1	40	图版323	G区掘立柱建物跡2	82
图版287	SI11501竖穴住居跡2	41	图版324	SI11172·11173竖穴住居跡	83
图版288	SI11501竖穴住居跡出土遺物1	42	图版325	SI11173竖穴住居跡出土遺物	83
图版289	SI11501竖穴住居跡出土遺物2	43	图版326	SE11001井戸跡	84
图版290	SI11502竖穴住居跡出土遺物	44	图版327	SE11001井戸跡出土遺物1	85
图版291	F区遺構外出土遺物1	45	图版328	SE11001井戸跡出土遺物2	86
图版292	F区遺構外出土遺物2	46	图版329	SE11016井戸跡	88
图版293	G区全体圖	49·50	图版330	SE11016井戸跡出土遺物	88
图版294	SA3158木材斷跡	51	图版331	SE11061井戸跡	89
图版295	G区平面圖1	52	图版332	SE11061井戸跡出土遺物	90
图版296	SA11170掘立柱断跡1	53	图版333	SE11174井戸跡	91
图版297	SA11170掘立柱断跡2	54	图版334	SE11174井戸跡出土遺物	91
图版298	G区平面圖2	55	图版335	SK11017·11207土坑出土遺物	92
图版299	SA11170掘立柱断跡出土遺物	56	图版336	J区全體圖	95·96
图版300	SA11170掘立柱断跡出土柱材	57	图版337	SX11900·12089整地層斷面圖	97
图版301	SD11011区画溝跡	58	图版338	SX11900·12089整地層出土遺物	98
图版302	SD11011区画溝跡出土遺物	58	图版339	SA12612木材斷跡	99
图版303	SD11007A·B区画溝跡	60	图版340	SA12614木材斷跡	100
图版304	G区北西部全景	60	图版341	SA12614木材斷跡出土遺物	100
图版305	SD11007A·B区画溝跡出土遺物1	61	图版342	SD12324A·B区画溝跡	101
图版306	SD11007A·B区画溝跡出土遺物2	62	图版343	SD12324A·B区画溝跡出土遺物	102
图版307	SD11007A·B区画溝跡出土遺物3	63	图版344	SD12613区画溝跡	103
图版308	SD11007A·B区画溝跡出土遺物4	64	图版345	SD12613区画溝跡出土遺物	104
图版309	SD11008区画溝跡出土遺物	65	图版346	SD12113A·B区画溝跡斷面圖	105
图版310	SD11008区画溝跡·SD11009堀跡	66	图版347	SD12113A·B区画溝跡出土遺物	106
图版311	SD11164区画溝跡	66	图版348	SD12161·12162区画溝跡斷面圖	106
图版312	SD11164区画溝跡出土遺物	68	图版349	J区平面圖1	107
图版313	SD11009堀跡出土遺物	69	图版350	J区平面圖2	108
图版314	G区溝跡	70	图版351	SD11910区画溝跡	109
图版315	G区溝跡出土遺物	71	图版352	SD11910区画溝跡出土遺物	110
图版316	SB11065·11067·11301·11303·11304· 11306掘立柱建物跡	75	图版353	SD12337·12338区画溝跡	111
图版317	G区平面圖3	76	图版354	SD12337区画溝跡出土遺物	111
图版318	G区平面圖4	77	图版355	J区平面圖3	112
			图版356	J区溝跡斷面圖	113

图版357	J区溝跡断面写真	114	图版391	SI12305A・B竪穴住居跡1	156
图版358	SB11924・12091・12616掘立柱建物跡、SA12617 掘立柱跡断面図	117	图版392	SI12305A・B竪穴住居跡2	157
图版359	J区平面図4	118	图版393	SI12305A・B竪穴住居跡3	158
图版360	J区平面図5	119	图版394	SI12305竪穴住居跡出土遺物	159
图版361	J区平面図6	121	图版395	SI12331竪穴住居跡1	160
图版362	SB12258・12267・12279・12497・12498掘立柱 建物跡	122	图版396	SI12620・12621竪穴住居跡	161
图版363	SB12585・12586・12615・12643掘立柱建物跡	124	图版397	SI12331竪穴住居跡2	162
图版364	SB12586掘立柱建物跡出土遺物	124	图版398	SI12331B竪穴住居跡出土遺物	163
图版365	SB12584・12618・12619掘立柱建物跡断面図	125	图版399	SI12333竪穴住居跡	165
图版366	J区北東部全景1	125	图版400	SI12333竪穴住居跡出土遺物	165
图版367	J区平面図7	126	图版401	SX11905・12173・12538円形周溝跡断面図	167
图版368	SB12638掘立柱建物跡	128	图版402	SX12538円形周溝跡出土遺物	168
图版369	J区北東部全景2	128	图版403	SE12164戸門跡	169
图版370	J区平面図8	129	图版404	SE12164戸門跡出土遺物	170
图版371	J区平面図9	130	图版405	SE11934戸門跡	171
图版372	SB12563・12564・12632掘立柱建物跡、SA12640 掘立柱跡	131	图版406	SE11934戸門跡出土遺物	172
图版373	SB12563掘立柱建物跡出土遺物	131	图版407	SE11935戸門跡	172
图版374	J区平面図10	133	图版408	SE11935戸門跡出土遺物	173
图版375	SB11970・12022・12023掘立柱建物跡	134	图版409	SE11967戸門跡	173
图版376	SB12024・12026・12027・12039・12040・12041・ 12053・12056・12059掘立柱建物跡断面図	137	图版410	SE11967戸門跡出土遺物	174
图版377	SB11981・12031・12045・12046・12048掘立柱 建物跡	139	图版411	SE12192戸門跡	174
图版378	J区平面図11	140	图版412	SE12192戸門跡出土遺物	175
图版379	J区平面図12	141	图版413	SE12205戸門跡	175
图版380	SB12216掘立柱建物跡断面図	143	图版414	SE12205戸門跡出土遺物1	177
图版381	SB12217・12218掘立柱建物跡断面図	143	图版415	SE12205戸門跡出土遺物2	178
图版382	J区平面図13	144	图版416	SE12205戸門跡出土遺物3	179
图版383	J区南部空撮写真	145	图版417	J区土坑1	181
图版384	SB12150掘立柱建物跡断面図	145	图版418	J区土坑2	182
图版385	J区平面図14	146	图版419	J区土坑3	183
图版386	SB11938建物跡	150	图版420	J区土坑4	184
图版387	SX12566外周溝跡	151	图版421	J区土坑5	185
图版388	SI11978・11979竪穴住居跡1	153	图版422	J区土坑6	186
图版389	SI11978・11979竪穴住居跡2	154	图版423	J区土坑出土遺物1	187
图版390	SI11978・11979竪穴住居跡出土遺物	155	图版424	J区土坑出土遺物2	188
			图版425	J区土坑出土遺物3	189
			图版426	J区土坑出土遺物4	190
			图版427	J区土坑出土遺物5	191
			图版428	J区土坑出土遺物6	192

图版429	SF12085烟道断面图	196
图版430	SF12085·12232烟道	196
图版431	SF12237烟道	198
图版432	SF12238烟道断面图	198
图版433	J区平面图15	199
图版434	SF12149烟道断面图	200
图版435	L区全体图	203·204
图版436	SX7103·7124·7128整地槽断面图	205
图版437	SX7103整地槽出土遗物1	207
图版438	SX7103整地槽出土遗物2	208
图版439	SX7103整地槽出土遗物3	209
图版440	SX7103整地槽出土遗物4	210
图版441	SX7103整地槽出土遗物5	211
图版442	SX7103整地槽出土遗物6	212
图版443	SX7103整地槽出土遗物7	213
图版444	SX7103整地槽出土遗物8	214
图版445	SX7103整地槽出土遗物9	215
图版446	SX7103整地槽出土遗物10	216
图版447	SX7128整地槽出土遗物1	217
图版448	SX7128整地槽出土遗物2	218
图版449	SX7128整地槽出土遗物3	219
图版450	SX7128整地槽出土遗物4	220
图版451	SX7124整地槽、SK7125土坑出土遗物	220
图版452	L区平面图1	221
图版453	L区平面图2	222
图版454	SA7784木材烟道	223
图版455	L区平面图3	224
图版456	L区平面图4	225
图版457	L区平面图5	226
图版458	SA7781木材烟道	227
图版459	L区西部空撮写真	227
图版460	SA7781木材烟道出土遗物	227
图版461	SA7782木材烟道	228
图版462	SA7782木材烟道出土遗物	228
图版463	SA7838木材烟道	229
图版464	SA7839木材烟道	230
图版465	SA7621木材烟道	230
图版466	L区平面图6	231
图版467	SA7176·7755·7756木材烟道	233
图版468	SA7176·7155·7756木材烟道出土遗物	234
图版469	SA7176木材烟道出土遗物	234
图版470	SD2561区画溝断面图	236
图版471	SD7940区画溝	236
图版472	L区平面图7	237
图版473	SD7940区画溝出土遗物	238
图版474	SD7836A·B区画溝	238
图版475	SD7836A·B区画溝出土遗物	239
图版476	SD7847·7848区画溝	240
图版477	L区平面图8	241
图版478	SD7848区画溝出土遗物	242
图版479	SD7842·7844·7845·7881区画溝	243
图版480	SD7881·7842·7844·7845区画溝出土遗物1	244
图版481	SD7881·7842·7844·7845区画溝出土遗物2	245
图版482	SD461区画溝	246
图版483	SD461区画溝出土遗物1	247
图版484	SD461区画溝出土遗物2	248
图版485	SD461区画溝出土遗物3	249
图版486	SD461区画溝出土遗物4	250
图版487	SD461区画溝出土遗物5	251
图版488	SD461区画溝出土遗物6	252
图版489	SD461区画溝出土遗物7	253
图版490	SD461区画溝出土遗物8	254
图版491	SD461区画溝出土遗物9	255
图版492	SD461区画溝出土遗物10	256
图版493	SD461区画溝出土遗物11	257
图版494	SD461区画溝出土遗物12	258
图版495	SD7100区画溝	259
图版496	L区平面图9	260
图版497	SD7100区画溝出土遗物1	261
图版498	SD7100区画溝出土遗物2	262
图版499	L区溝I	263
图版500	L区溝2	264
图版501	L区溝出土遗物1	265
图版502	L区溝出土遗物2	266
图版503	L区溝出土遗物3	267

図版504	LIX溝跡出土遺物 4	268	図版540	SI7221・7257竪穴住居跡 2	315
図版505	SB7822・7828掘立柱建物跡	271	図版541	SI7221竪穴住居跡出土遺物	316
図版506	SB7659・7660・7763・7764・7900・7926掘立柱 建物跡	272	図版542	SI7364竪穴住居跡	317
図版507	LIX平面図10	274	図版543	SI7364竪穴住居跡出土遺物	318
図版508	LIX西部の建物跡	275	図版544	SI7212竪穴住居跡出土遺物	319
図版509	SB7760・7776掘立柱建物跡	277	図版545	SI7212竪穴住居跡	320
図版510	LIX平面図11	278	図版546	LIX竪穴住居跡出土遺物 1	323
図版511	SB7251・7283・7454・7757・7927・7932・ 7951掘立柱建物跡断面図	279	図版547	LIX竪穴住居跡出土遺物 2	324
図版512	LIX平面図12	281	図版548	SI7098竪穴住居跡出土遺物	325
図版513	LIX平面図13	282	図版549	SE7105戸跡	327
図版514	SB7295・7330掘立柱建物跡	283	図版550	SE7105戸跡出土遺物 1	328
図版515	LIX平面図14	285	図版551	SE7105戸跡出土遺物 2	329
図版516	SB7347・7448・7682・7933・7935掘立柱建物跡 断面図	286	図版552	SE7105戸跡出土遺物 3	330
図版517	LIX平面図15	287	図版553	SE7105戸跡出土遺物 4	331
図版518	SB7286・7308・7901掘立柱建物跡断面図	288	図版554	SE7105戸跡出土遺物 5	332
図版519	LIX平面図16	290	図版555	SE7105戸跡出土遺物 6	333
図版520	SB7380・7381・7409掘立柱建物跡断面図	291	図版556	SE7105戸跡出土遺物 7	334
図版521	LIX平面図17	292	図版557	SE7105戸跡出土遺物 8	335
図版522	LIX平面図18	294	図版558	SE7105戸跡出土遺物 9	336
図版523	SB7144・7233・7241・7267掘立柱建物跡	295	図版559	SE7258・7434戸跡	337
図版524	SB7180・7236・7266・7272掘立柱建物跡	295	図版560	SE7258戸跡出土遺物	338
図版525	SI7171竪穴住居跡	299	図版561	SE7292戸跡	339
図版526	SI7171竪穴住居跡出土遺物	300	図版562	SE7292戸跡出土遺物	340
図版527	SI7172竪穴住居跡	301	図版563	SE7758戸跡	341
図版528	SI7172竪穴住居跡出土遺物	301	図版564	SE7758戸跡出土遺物 1	342
図版529	SI7173竪穴住居跡出土遺物	301	図版565	SE7758戸跡出土遺物 2	343
図版530	SI7173・7174竪穴住居跡	302	図版566	SE7758戸跡出土遺物 3	344
図版531	SI7208竪穴住居跡 1	304	図版567	LIX土器埋設遺構	346
図版532	SI7208竪穴住居跡 2	305	図版568	LIX土坑 1	348
図版533	SI7208竪穴住居跡出土遺物	306	図版569	LIX土坑 2	349
図版534	SI7219竪穴住居跡 1	308	図版570	LIX土坑 3	350
図版535	SI7219竪穴住居跡 2	309	図版571	LIX土坑 4	351
図版536	SI7219竪穴住居跡出土遺物 1	310	図版572	LIX土坑 5	352
図版537	SI7219竪穴住居跡出土遺物 2	311	図版573	LIX土坑出土遺物 1	353
図版538	SI7219竪穴住居跡出土遺物 3	312	図版574	LIX土坑出土遺物 2	354
図版539	SI7221・7257竪穴住居跡 1	314	図版575	LIX土坑出土遺物 3	355
			図版576	LIX土坑出土遺物 4、土器埋設遺構出土遺物	356
			図版577	LIX土坑出土遺物 5、土器埋設遺構出土遺物	357

図版578 L区土坑出土遺物6	358	図版613 SB11772掘立柱建物跡出土遺物	24
図版579 L区土坑出土遺物7	359	図版614 M区平面図5	25
図版580 L区土坑出土遺物8	360	図版615 M区平面図6	26
図版581 L区土坑出土遺物9	361	図版616 M区中央東側全景	27
図版582 L区土坑出土遺物10	362	図版617 SK11726・11769土坑	28
図版583 L区土坑出土遺物11	363	図版618 SK11726・11769土坑出土遺物	29
図版584 L区土坑出土遺物12	364	図版619 M区平面図7	31
図版585 SF7277・7802・7803烟跡	367	図版620 SF11791烟跡	32
図版586 L区平面図19	368	図版621 SF11793烟跡	32
図版587 L区出土動物遺存体	369	図版622 N区全体図	36
図版588 L区遺構外出土土器1	370	図版623 N区土層断面図1	37
図版589 L区遺構外出土土器2	371	図版624 N区土層断面図2	38
図版590 L区遺構外出土土器3	372	図版625 SD11854溝跡断面図	39
図版591 L区遺構外出土土器4	373	図版626 SD11855区画溝跡、N区遺構外出土遺物	39
第3分冊			
図版592 M区全体図	3・4	図版627 N区全景	40
図版593 M区平面図1	6	図版628 J区第V層水田跡平面図	44
図版594 M区平面図2	7	図版629 SF12230水田跡1	45・46
図版595 SD180A・B区画溝跡断面図	8	図版630 SF12230水田跡2	47
図版596 SD180区画溝跡	9	図版631 山王遺跡火山灰分析写真1	53
図版597 SD180B区画溝跡出土遺物1	10	図版632 山王遺跡火山灰分析写真2	54
図版598 SD180B区画溝跡出土遺物2	11	図版633 山王遺跡のテフラ組成ダイヤグラム	55
図版599 SD180B区画溝跡出土遺物3	12	図版634 古墳時代後期の集落と試料採取地点	61
図版600 SD180B区画溝跡出土遺物4	13	図版635 山王遺跡出土の大型植物遺体1	68
図版601 SD180B区画溝跡出土遺物5	13	図版636 山王遺跡出土の大型植物遺体2	69
図版602 SD180B区画溝跡出土遺物6	14	図版637 メロン仲間種子長3型の出土比率	70
図版603 SD180B区画溝跡出土遺物7	15	図版638 古墳時代中期土器分類図1	76
図版604 SD180B区画溝跡出土遺物8	16	図版639 古墳時代中期土器分類図2	77
図版605 SD180B区画溝跡出土遺物9	17	図版640 八幡地区SI11503壁穴住居跡出土土器	80
図版606 M区平面図3	18	図版641 八幡地区SI5287・5288・5306住居跡出土土器	81
図版607 M区平面図4	19	図版642 八幡地区SX230遺物包含層出土土器1	82
図版608 SD11739A・B区画溝跡	20	図版643 八幡地区SX230遺物包含層出土土器2	83
図版609 SD11739B区画溝跡出土遺物	20	図版644 町地区SI1234・2983・3012・3022住居跡出土土器	86
図版610 SD11781A・B・C区画溝跡断面図	21	図版645 館前地区SX1744・1745落ち込み、SX5025廻廻跡出土土器	87
図版611 SD11781A・B・C区画溝跡出土遺物	21	図版646 鴻ノ巣遺跡SI6・8住居跡出土土器	88
図版612 SB11770・11771・11772・11773掘立柱建物跡	24	図版647 鴻ノ巣遺跡SI9・11住居跡出土土器	89
		図版648 鴻ノ巣遺跡1号柱、SI10・13住居跡出土土器	90

図版649	鴻ノ巣遺跡SI19・20住居跡出土土器	91	図版678	山王遺跡多賀前地区SK503土器窪、千刈田地区SX543土器窪出土土器	135
図版650	古墳時代後期土器分類図1	94	図版679	八幡地区KSE12205井戸跡出土土器	136
図版651	古墳時代後期土器分類図2	95	図版680	多賀城跡鴻の池地区第7層出土土器	137
図版652	SD2050B河川跡 平成4・5年調査第6・7層出土土器	100	図版681	多賀城政庁跡SK058土坑出土土器	138
図版653	SD2050B河川跡 平成4・5年調査第1層出土土器	101	図版682	凝灰岩切石組カマドと切石	142
図版654	SD100・2050B河川跡出土土器1~4層上面・4・5層	102	図版683	古墳時代後期集落と河川跡の位置	148
図版655	SD100・2050B河川跡出土土器2~3層	103	図版684	SD180A区画溝跡出土土器	155
図版656	SD100・2050B河川跡出土土器3~1層・2層上面・2層	104	図版685	古墳時代中・後期における主要遺構の変遷	169
図版657	SD100・2050B河川跡出土土器4~1層・2層上面・2層	105	図版686-I	古代における主要遺構の変遷 (D・F・G・M区)	174
図版658	八幡地区SI491・2246住居跡、SK7102土坑出土土器	106	図版686-II	古代における主要遺構の変遷 (J・L区)	175
図版659	伏石地区SD6517区画溝跡出土土器	107	図版687	古墳時代前期の水田跡	181
図版660	伏石地区SD6517区画溝跡出土須恵器	108	図版688	山王遺跡の水田模式図	182
図版661	伏石地区SK6777大土坑出土土器	109	図版689	古墳時代前期の山王・市川橋遺跡	183
図版662	土器師食器の製作痕跡	110	図版690	水田跡柱状図	185
図版663	土器師跡・壺・甕・壺の器形1	112	図版691	古墳時代中期の遺構配置図	187
図版664	土器師跡・壺・甕・壺の器形2	113	図版692	東日本の堀・溝を有する豪族居館と竪穴鍛冶遺構 (古墳時代中期)	189
図版665	土器師における器形の共有	114	図版693	八幡・伏石地区出土の鉄製品と鍛冶関連遺物	191
図版666	高崎古墳群SR32窓跡、高崎遺跡SR1678窓跡出土須恵器	117	図版694	北関東・東北地方における古墳時代中期の竪穴鍛冶遺構	194
図版667	御菴遺跡1~4号墳、八幡崎B遺跡III層出土須恵器	119	図版695	山王遺跡における古墳時代後期の集落	200
図版668	八幡地区SD180B区画溝跡出土土器	121	図版696	竪穴住居の規模とカマド位置	204
図版669	八幡地区SD461区画溝跡出土土器	123	図版697	八幡地区の大型竪穴住居跡	205
図版670	八幡地区SK7090土坑、SX7124・7128整地層出土土器	124	図版698	大型竪穴住居跡の出土遺物	206
図版671	八幡地区SD180B区画溝跡 平成2年度調査出土土器	126	図版699	大型と中小型竪穴住居と井戸の関係	207
図版672	八幡地区SD677溝跡、SD2124区画溝跡出土土器	127	図版700	区画I期の様相	211
図版673	八幡地区SI7043・7212竪穴住居跡、SE11001井戸跡、SK7093土坑、SD786溝跡出土土器	128	図版701	区画II期の様相	214
図版674	館前地区SX1351C河川跡2層出土土器	130	図版702	D区整地層と道路との関係	219
図版675	高平地区SK236土坑、館前地区SX1351D河川跡3層出土土器	131	図版703	西5道路における側溝の対応関係	221
図版676	多賀城跡大畑地区SE2101B井戸跡第3層、五万崎地区SK2272土坑出土土器	132	図版704	北3西5区・北3西6区の変遷	222
図版677	多賀城跡五万崎地区SK2270土坑、大畑地区SK231土坑4~6層出土土器	134	図版705	方格地割I期の様相	230
			図版706	方格地割II-A期の様相	233
			図版707	方格地割II-B期の様相	236
			図版708	II-B期における道路・区画施設の変化	236
			図版709	方格地割III期の様相	239
			図版710	八幡・伏石地区的変遷一区画I期~方格地割III期	241・242
			図版711	古墳時代前期の七北田川下流域遺跡群	244

図版712 沼向遺跡古墳時代前期の集落	246	図版731 陸奥国府出土のミガキ須恵器	284
図版713 沼向遺跡SI904・1011堅穴住居跡、SI928堅穴遺構出土土器	246	図版732 陸奥国府域におけるミガキ須恵器・壺G・大戸産須恵器の分布	285
図版714 古墳時代前期における周溝をもつ建物跡	248	図版733 多賀城跡におけるミガキ須恵器・壺Gの分布	286
図版715 町・町浦地区出土古墳時代中期の須恵器と続縄文土器	250	図版734 陸奥国府出土の壺G	289
図版716 古墳時代中期の七北田川下流域遺跡群	251	図版735 大戸窯跡群の変遷1—MH33・KA12期	294
図版717 古墳時代中期の埋納施設	252	図版736 大戸窯跡群の変遷2—MH19～KA112期	295
図版718 山王SX230遺物包含層出土骨角製品・木製品	253	図版737 大戸窯製品の特徴・胎土1	296
図版719 古墳時代後期の七北田川下流域遺跡群	257	図版738 大戸窯製品の特徴・胎土2	297
図版720 山王・市川橋遺跡出土古墳時代後期の木製品	258	図版739 陸奥国府域出土の大戸産須恵器	298
図版721 山王・市川橋遺跡出土古墳時代後期の骨角製品	259	図版740 円面鏡の各部名称	303
図版722 山王・市川橋遺跡出土古墳時代後期の須恵器	260	図版741 陸奥国府および窯跡出土の円面鏡	304
図版723 沼向遺跡出土古墳時代後期の須恵器	262	図版742 陸奥国府出土の風字鏡	307
図版724 方格地割造営の検討1	268	図版743 陸奥中部の城柵・官衙・居宅跡および窯跡出土の風字鏡	308
図版725 方格地割造営の検討2	270	図版744 陸奥国府域における硯・腰帶具の分布	310
図版726 方格地割造営の検討3	270	図版745 陸奥国府域出土の形象硯	313
図版727 方格地割の変遷	272	図版746 多賀城跡における硯・腰帶具の分布	316
図版728 建物配置の類型1	274	図版747 陸奥国府出土の腰帶具1—鈎帶	320
図版729 建物配置の類型2	275	図版748 陸奥国府出土の腰帶具2—石帶	321
図版730 多賀城南面国府域の様相（9～10世紀）	279・280		

表目次

第1分冊

表1 図版3掲載遺跡地名表	7
表2 山王・市川横道跡の大規模発掘調査一覧	13
表3 八幡・伏石地区的調査面積	14
表4 東日本大震災による八幡・伏石地区的地盤変動量	15
表5 D区溝跡属性表	118~120
表6 D区掘立柱建物跡属性表	131~133
表7 D区掘立柱塗跡属性表	133
表8 D区豎穴住居跡属性表	149・150
表9 D区井戸跡属性表	166
表10 D区土坑属性表	167・168
表11 D区烟跡属性表	174
表12 土壌サンプル採取状況	300
表13 詳細分析サンプルと分析率	300
表14 出土種名表	301
表15a 貝類出土状況（N I S P）	304
表15b 貝類出土状況（重量）	304
表16 目視／4 mm試料における各魚種出土状況	305
表17a 細分析サンプルにおける各魚種出土状況（1）	307
表17b 細分析サンプルにおける各魚種出土状況（2）	308
表18 爬虫類・両生類・ウニ・カニ出土状況	311
表19 鳥類出土状況	311
表20 ニホンジカ各部位におけるMNI	311
表21 ニホンジカ船構成	311
表22a ニホンジカ頭蓋骨出土状況	314
表22b ニホンジカ下顎骨出土状況	316・317
表22c ニホンジカ部位出土状況	318・319
表23 ニホンジカ各部位におけるダメージ	320・321
表24 その他の哺乳類出土状況	321
表25a イノシシ下顎骨出土状況	324
表25b イノシシ部位出土状況	325
表25c イノシシ頭蓋骨出土状況	325
表26 イノシシ各部位におけるダメージ	327
表27a ウマ出土状況（1）	328
表27b ウマ出土状況（2）	329

表28 遺構出土その他の動物	329
表29 ウマ各部位におけるダメージ	329
表30a 計測値表（1）	329
表30b 計測値表（2）	330

第2分冊

表31 F区掘立柱建物跡属性表	18
表32 F区豎穴住居跡属性表	44
表33 F区土坑属性表	45
表34 G区溝跡属性表	72
表35 G区掘立柱建物跡属性表	82
表36 G区豎穴住居跡属性表	83
表37 G区井戸跡属性表	92
表38 G区土坑属性表	92
表39 J区溝跡属性表	115・116
表40 J区掘立柱建物跡属性表	147・148
表41 J区掘立柱塗跡属性表	149
表42 J区豎穴住居跡属性表	166
表43 J区周溝をもつ建物跡・円形周溝跡属性表	168
表44 J区井戸跡属性表	176
表45 J区土坑属性表	193~195
表46 J区烟跡属性表	200
表47 L区溝跡属性表	269・270
表48 L区掘立柱建物跡属性表	296・297
表49 L区掘立柱塗跡属性表	298
表50 L区豎穴住居跡属性表	320~323
表51 L区井戸跡属性表	344
表52 L区土坑・土器埋設遺構属性表	364~366
表53 L区烟跡属性表	369

第3分冊

表54 M区溝跡属性表	22
表55 M区掘立柱建物跡属性表	27
表56 M区土坑属性表	29
表57 M区烟跡属性表	32
表58 N区溝跡属性表	39
表59 山王遺跡のテフラ検出分析結果	51
表60 火山ガラス比分析結果	56

表61 重鉱物組成分析結果	56	表85 山王・市川橋遺跡における古墳時代後期の竪穴住居跡2	203
表62 扇形率測定結果	57	表86 古墳時代後期集落から出土した各種遺物	209
表63 山王遺跡出土大型植物遺体一覧表1	62	表87 8世紀の竪穴住居跡	212
表64 山王遺跡出土大型植物遺体一覧表2	63	表88 8世紀後半の井戸跡	216
表65 山王遺跡出土大型植物遺体一覧表3	64	表89 西4道路跡側溝と北2a道路跡側溝の対応関係	220
表66 山王遺跡出土大型植物遺体 地点・層位別集計表	66	表90 北2道路跡側溝と西6a道路跡側溝の対応関係	225
表67 山王・市川橋遺跡と浦ノ果遺跡における古墳時代中期の主要遺構出土土器	85	表91 八幡・伏石地区における道路の変遷	226
表68 古墳時代後期土師器分類と宮城県文化財報告書第186集、村田分類2007との対応関係	97	表92 古墳時代前期から奈良時代における七北田川下流域と砂押川流域道路群の動態	245
表69 古墳時代後期の主要遺構出土土師器	98	表93 古墳時代前期の周溝をもつ建物跡	249
表70 多賀城周辺における5~10世紀の土器変遷	139	表94 古墳時代中期における集落の特徴	254
表71 本書で報告した硯	141	表95 区画施設の比較	254
表72 詳細分析サンプルにおける主要貝殻生息域別NISP	144	表96 陸奥国府における地区別・街区別ミガキ須恵器出土数	286
表73 各地点における全4mm試料貝類の分類群構成	145	表97 陸奥国府出土のミガキ須恵器1	287
表74 目視・4mm試料における魚種組成	145	表98 陸奥国府出土のミガキ須恵器2	288
表75 詳細分析サンプルにおける魚種組成	145	表99 陸奥国府出土の壺G	290
表76a 各詳細分析サンプルにおける魚類出土量(復元NISP)	146	表100 陸奥国府における地区別・街区別壺G出土数	290
表76b 貝組成タイプごとにみた各魚種復元NISPと海水/淡水比	146	表101 大戸窓跡群における生産器種	292
表77 時期別鳥櫛類出土量	147	表102 八幡・伏石・多賀前地区出土の大戸產須恵器1	299
表78 時期別鳥櫛類組成	145	表103 八幡・伏石・多賀前地区出土の大戸產須恵器2	300
表79-1 振立柱建物跡・塙跡の時期と方向(区画I期~方格地割II~A期)	164	表104 陸奥国府城における街区別大戸產須恵器出土数	301
表79-2 振立柱建物跡・塙跡の時期と方向(方格地割II~B期~中世)	165	表105 陸奥国府出土円筒瓦の分類	305
表80 山王遺跡と新田遺跡における古墳時代前期の水田跡	184	表106 図版741觀察表	305
表81 東日本の堀・溝を有する豪族居館	190	表107 陸奥国府城における街区別壺出土数	311
表82 東北地方の竪穴鍬冶遺構	193	表108 多賀城跡における地区別硯出土数	317
表83 古墳時代中期前葉の豪族居館から出土した各種遺物	197	表109 陸奥国府出土の腰帶具	322
表84 山王・市川橋遺跡における古墳時代後期の竪穴住居跡1	202	表110 陸奥国府における地区別・街区別腰帶具出土数	323

調査要項

遺跡名：山王遺跡八幡・伏石地区（宮城県遺跡地名表登載番号：18013）

市川橋遺跡八幡・伏石地区（宮城県遺跡地名表登載番号：18008）

遺跡記号：山王遺跡 FI

市川橋遺跡 ES

所在地：宮城県多賀城市南宮字八幡、山王字伏石、市川字中谷地

調査原因：三陸沿岸道路仙塩道路4車線化建設工事・多賀城IC建設工事（復興事業）

調査面積：山王遺跡 15,200m²

市川橋遺跡 9,400m²

調査期間：平成24年（2012）3月26日～平成25年（2013）3月7日

平成25年（2013）3月16日～平成26年（2014）3月28日

平成26年（2014）4月7日～6月27日

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：〔平成24年度調査〕

文化財保護課職員：古川一明、村田晃一、白崎恵介、齋藤圭一、濱中一道、大坂拓、鈴木啓司

東北歴史博物館（協力）：柳澤和明

宮城県多賀城跡調査研究所（協力）：三好秀樹

自治法派遣職員：阿部明彦（山形県）、高橋保雄（新潟県）、末木啓介（埼玉県）、伴瀬宗一（埼玉県）、田口明子（山梨県）、小淵忠司（岐阜県）、家原圭太（京都市）、上田健太郎（兵庫県）、西岡誠司（神戸市）、西岡巧次（神戸市）、中川寧（島根県）、山下平重（香川県）、遠藤武（愛媛県）

：〔平成25年度調査〕

文化財保護課職員：生田和宏、山中信宏、齋藤和機、傅田惠隆

東北歴史博物館（協力）：相原淳一

自治法派遣職員：阿部明彦（山形県）、矢口裕之（群馬県）、佐々木好直（奈良県）、鈴木久史（京都市）、岡本泰典（岡山县）、上山佳彦（山口県）、藏本晋司（香川県）、和田理啓（宮崎県）、中村幸弘（熊本県）

：〔平成26年度調査〕

文化財保護課職員：遠藤則靖、齋藤和機

宮城県多賀城跡調査研究所（協力）：高橋透

自治法派遣職員：西口正純（埼玉県）、井上主税（奈良県）、岡本泰典（岡山県）

調査協力：国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、多賀城市教育委員会、東北歴史博物館、

宮城県多賀城跡調査研究所

整理作業：〔平成 26 年度整理作業〕

文化財保護課職員：村田晃一、西村力、齋藤和機

自治法派遣職員：岡本泰典（岡山県）

：〔平成 27 年度整理作業〕

文化財保護課職員：熊谷宏規、齋藤和機、高橋透（多賀城跡調査研究所協力）

：〔平成 28 年度整理作業〕

文化財保護課職員：村田晃一、西村力、熊谷宏規、齋藤和機、黒田智章

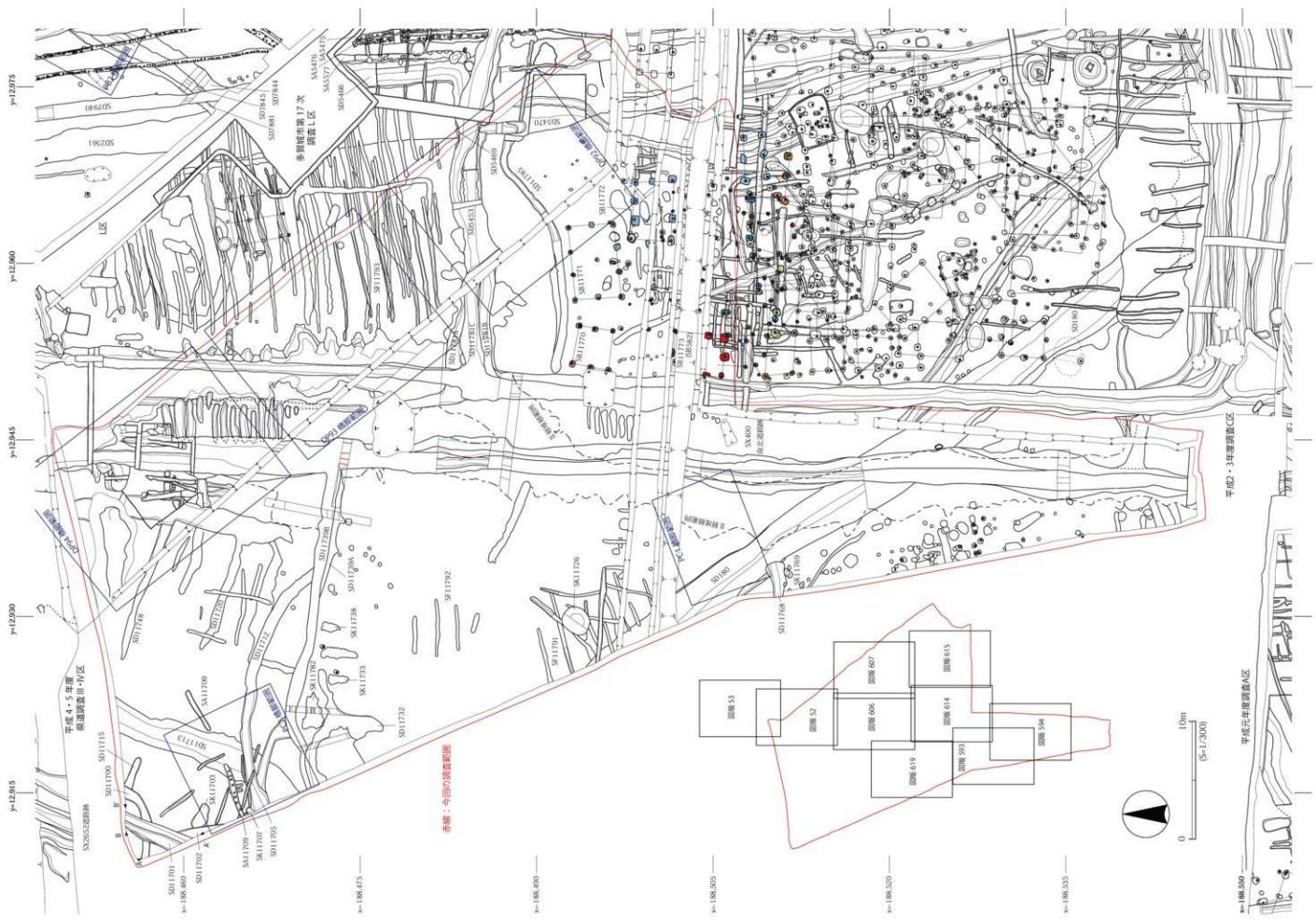
：〔平成 29 年度整理作業〕

文化財保護課職員：村田晃一、西村力、齋藤和機

第X章 M 区



M区全景（北西から）



M区では道路跡2条、区画溝跡7条（掘直しを含む）、溝跡10条、材木塀跡1条、掘立柱建物跡4棟、土坑10基、畑跡3面などを確認した（図版592）。本区は橋脚DP92～94・PC1・PC2部分のみが本発掘調査の対象であり、他は遺構確認にとどめ、必要に応じて断ち割りを行っている。なお、個別記載を行った遺構の説明で〔重複〕の（古）・（新）は、記述した遺構に対しての新旧関係を表している。

1. 区画施設跡

材木塀跡1条、区画溝跡7条（掘直しを含む）を確認した。

〈材木塀跡〉

【SA11709材木塀跡】（図版592）

調査区北西部で確認した、布堀り掘方の中に材木を立て並べた東西方向に延びる材木塀跡である。検出長は中央の途切れた部分の西側が4.6m、東側は4.7mで、方向はE-18°-Nである。本塀は、県道調査区のSA2564の延長上にあることから同一遺構であり、西側のJ区で確認したSA12614とは、同区北側付近で接続したとみられる。また、SA11709は、SA2564の約235m南側に位置するSA3158・SA5636と方向が同じである。こうしたことから、本塀はSA549・2564・3158・5226・5636・7839とともに方形区画施設を構成していたと考えられる。

〔重複〕（古）SD11713

〔掘方〕上幅0.4m、下幅0.2m、深さは0.2m前後で、断面はU字形である。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

〔材痕跡〕直径0.1m前後の円形で、間隔は0.1～0.2m前後である。

〔出土遺物〕なし。

〈区画溝跡〉

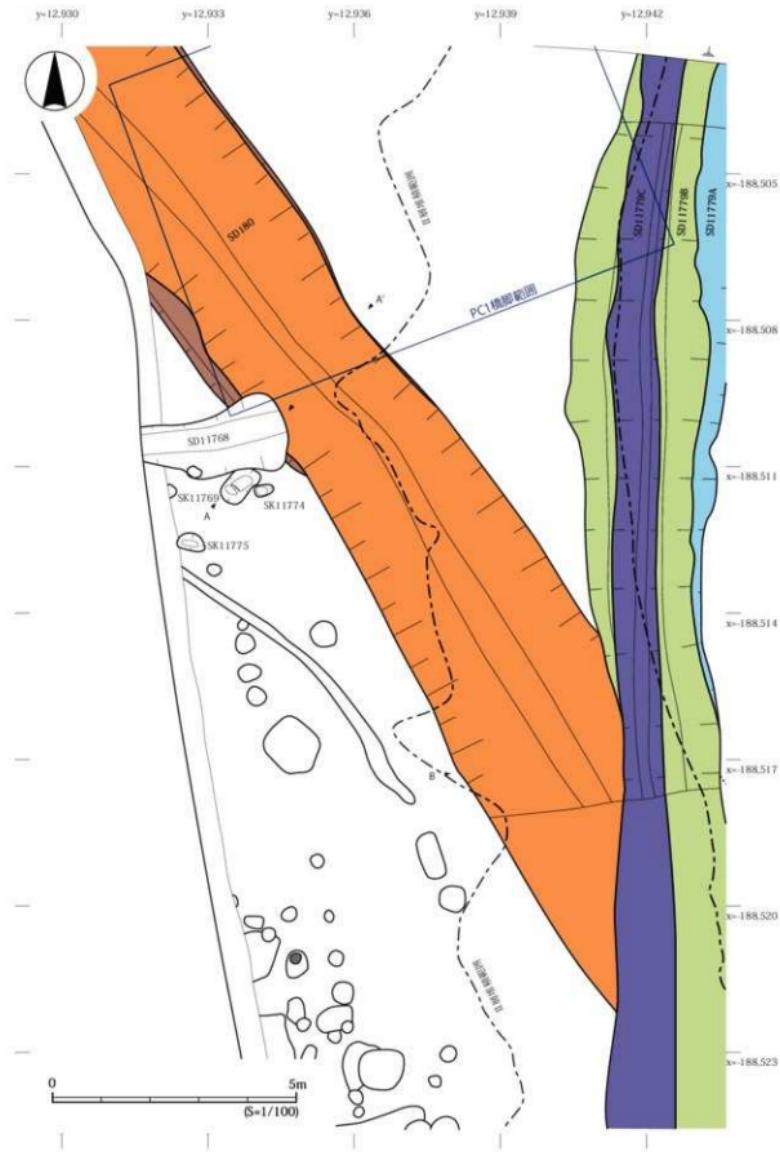
【SD180A・B区画溝跡】（図版593～596・619）

調査区南部で確認した南北溝跡である。検出長は37.0mで、方向はN-37°-Wである。A・B2時期あり、B期が新しい。県道調査Ⅲ・Ⅳ区のSD2552は同一遺構で、G区のSD3014は、規模や断面形から一連の遺構と考えられる（宮城県教委1997・2009）。その場合、区画の規模は東西が230m以上、南北が288m以上となる。西辺南側と南辺では、それぞれSA5226・SA5636材木塀を伴うが、本調査区では塀跡が確認できなかった。

なお、過去の調査では、B期2層から天平5年（733）または天平12年（740）の陸奥国戸口損益帳、1層から天平宝字7年（763）の具注曆といった実年代が記された漆紙文書が出土している（多賀城市埋文センター1991b・1992b）。

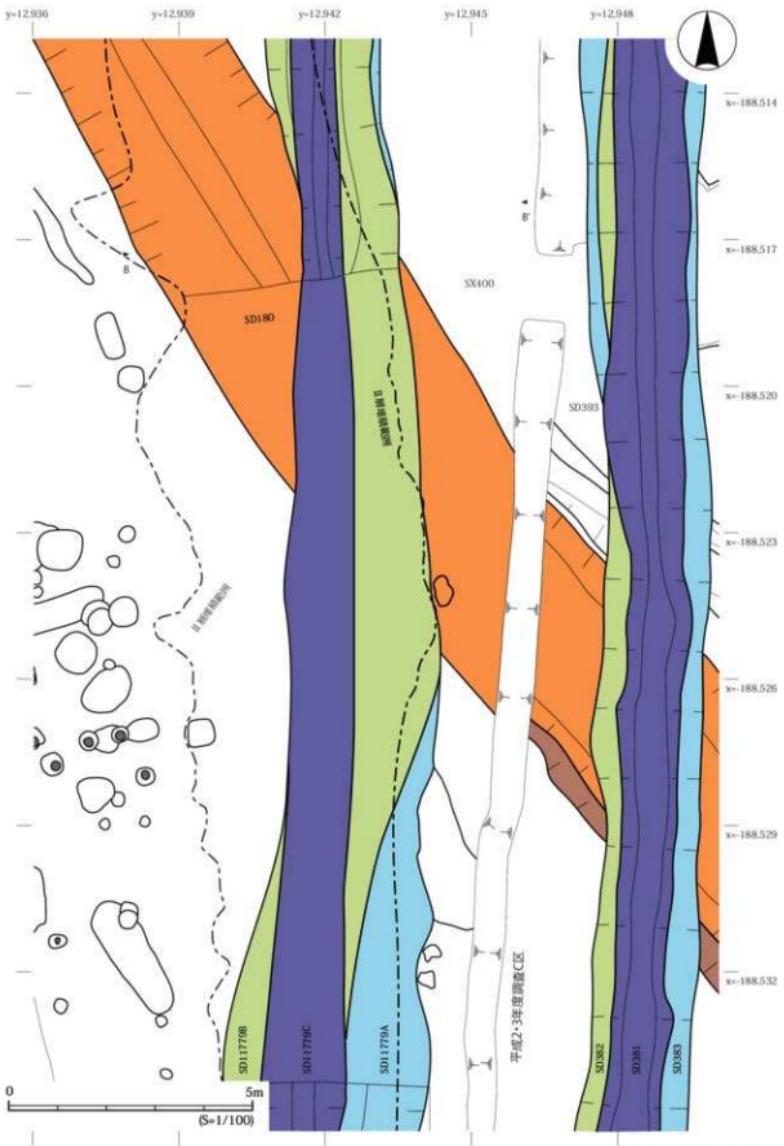
〔重複〕（新）SX400、SD11768、SF11791

〔規模・堆積土〕B期は上幅3.1～3.7m、下幅1.1m、深さは0.7m、断面は皿形で、中央が凹む。堆積土は黒褐色シルトなどで、自然堆積である。A期は上幅が不明で、下幅2.3m、深さは0.5m、断面は台形である。堆積土は地山ブロックを含む褐灰色のシルト質細粒砂などで、自然堆積である。



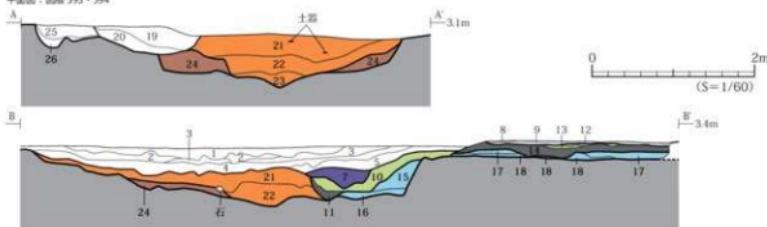
図版593 M区平面図1

(M区の回割は図版592を参照)



図版594 M区平面図2

S D 180・S X 400(西5道路)南端
平成区: 国版 593・594



遺構名	層位	土色	土性	遺物など	備考
第Ⅰ層	1 に少し褐色 (10YR6/4)	中粒～細粒砂			
	2 褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	地山ブロックを含む		
第Ⅱ層	3 黒褐色 (10YR3/1)	シルト混じり粘土			
	4 灰黃褐色 (10YR8/2)	シルト混じり中粒～細粒砂	灰褐色シルトブロックを含む		
道路上堆積層	5 灰褐色 (10YR5/2)	シルト混じり砂			
SD11779C (内5道路西側溝C期)	6 に少し褐色 (10YR5/3)	シルト質細粒砂			
	7 褐灰色 (10YR5/1)	シルト質中粒～細粒砂	灰褐色シルトブロックを含む		
SX400 (内5道路路面C期)	8 褐灰色 (10YR6/1)	丸く成ったシルト混じり砂			
	9 褐灰色 (10YR5/1)	丸く成ったシルト混じり中粒砂			
SD11779B (内5道路西側溝B期)	10 褐灰色 (10YR5/1)	シルト質砂			
	11 褐灰色 (10YR4/1)	シルトブロック混じり細粒砂	灰褐色シルトブロックを含む。底白色大山灰の薄層を含む。		
	12 灰白色 (10YR8/1)	細粒～中粒砂	細粒砂を含む		
SX400 (内5道路路面B期)	13 褐灰色 (10YR6/1)	丸く成ったシルト質砂	灰褐色大山灰を最も厚さ40mmのブロック状に含む		
	14 灰白色 (10YR7/2)	丸く成ったシルト質砂	灰褐色大山灰を含む		
SD11779A (西5道路西側溝A期)	15 に少し褐色 (10YR5/3)	シルト混じり砂	地山ブロックを含む		
SX400 (西5道路路面A期)	16 灰黃褐色 (10YR5/2)	シルト質細粒～中粒砂	シルトブロックを含む		
SD11768	17 褐灰色 (10YR6/1)	シルト混じり砂	地山ブロックをブロック状に含む		
	18 に少し褐色 (10YR7/2)	シルト質細粒砂	均等地下、下位に地山ブロックを含む		
	19 灰黃褐色 (10YR6/2)	シルト質細粒砂	地山ブロックを多く含む		
SD180B	20 灰黃褐色 (10YR6/2)	シルト質細粒砂	地山ブロックを多く含む		
	21 褐灰色 (10YR4/1)	砂利シルト～粘土			
	22 黑褐色 (10YR3/1)	シルト質細～中粒砂	地山ブロックを下位に含む		
SD180A	23 に少し褐色 (10YR7/2)	シルト～細粒砂	地山ブロックをブロック状に含む		
	24 褐灰色 (10YR4/1)	シルト質細～細粒砂	地山ブロックを含む		
SK11769	25 褐灰色 (10YR4/1)	シルト質中～細粒砂	地山ブロックを含む。下位ほど粗粒		
	26 褐灰色 (10YR6/1)	シルト質中粒砂	地山ブロックを多く含む		

図版595 SD180A・B区画溝断面図

〔出土遺物〕(国版597~601)

B期堆積土から土師器壺(1~6)・塊(7)・小型甕(8)・大型甕(9~10)・須恵器壺(12~20)・小型壺(11)・高台壺(21)・稜塊(23~24)・盤(33)・長頸壺(26~27)・短頸壺(31~32)・壺(34)・甕(35~37)・転用硯(22)・丸瓦(39~41)・平瓦、刀子(42)、つけ木、砥石(38)、確認面から須恵器長頸壺(25・28~30)などが出土した。

土師器壺・甕は全て非クロコ調整である。壺は有段平底と無段丸底があり後者が多く、大型甕の胴部は上半に最大径がある。須恵器壺はヘラ切りが主体で、ほかに回転ヘラケズリがある。高台壺や稜塊は回転ヘラケズリである。また、確認面出土の長頸壺には大戸産が含まれる。長頸壺(25)は、内面や割れ口に漆が付着することから、最終的に漆容器となったと考えられる。丸瓦は、多賀城第II期のII B類で、凸面に刻印「占」や「伊」が認められる。



完掘全景(南から)



断面(南から)



SD180、SX400 西側溝断面(南から)

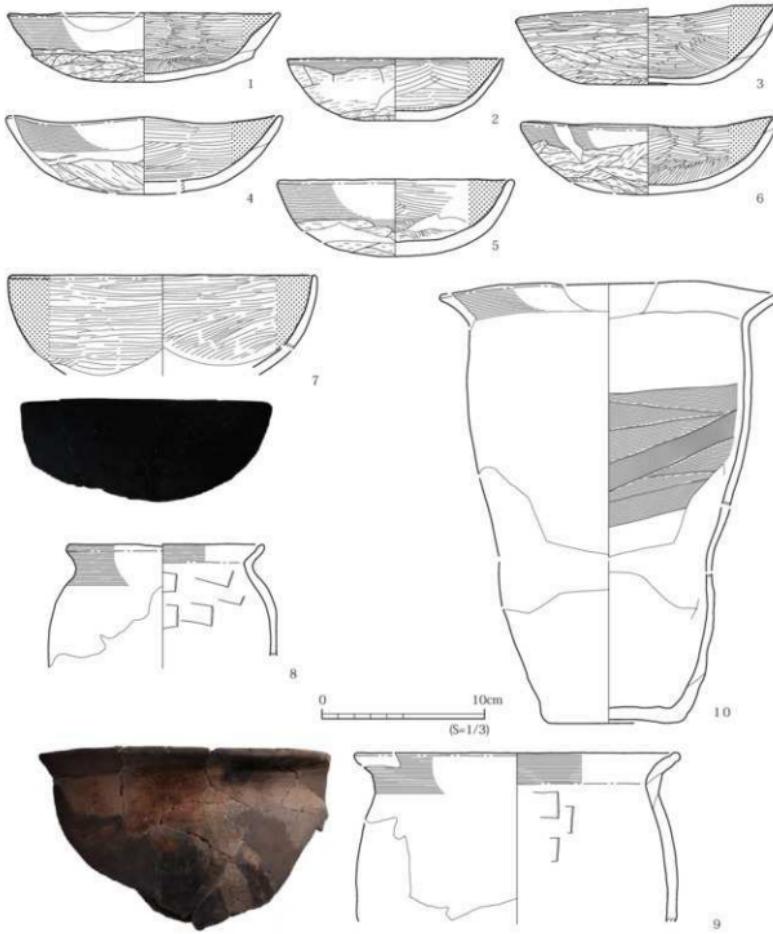


遺物出土状況1(南から)



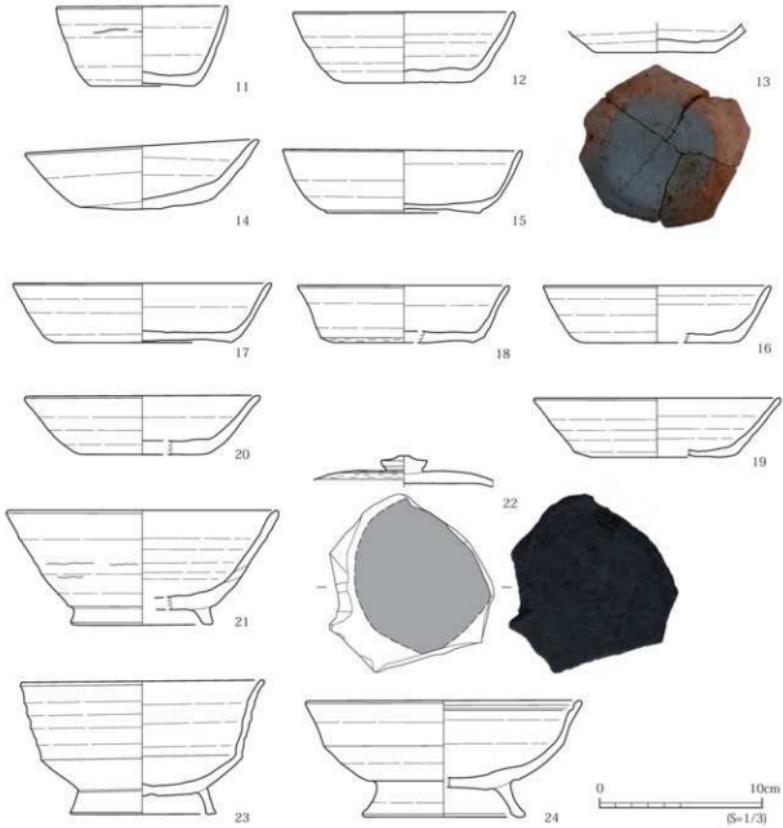
遺物出土状況2(南から)

図版596 SD180区画溝跡



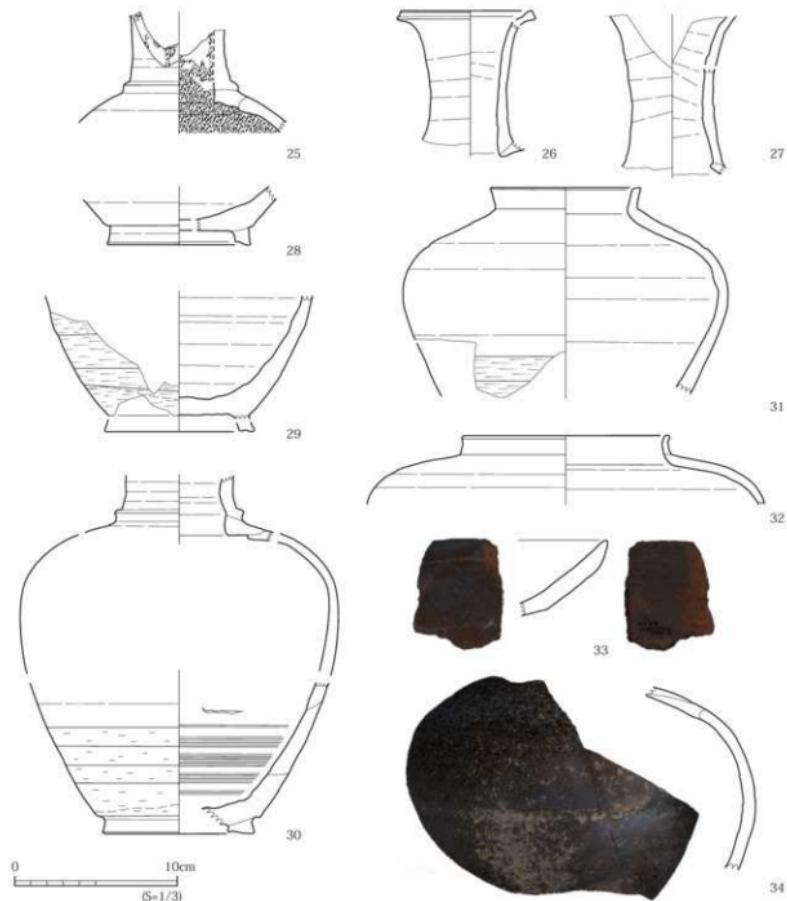
No.	器種	層位	調整	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	残存	備考	登録
1	土師器・环球	堆	外面：ヨコナデ→手持ちハラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色施墨	16.4	—	4.2	3/4		3183
2	土師器・环球	堆	外面：ヨコナデ→手持ちハラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色施墨	(13.2)	(5.2)	3.8	1/3		3182
3	土師器・环球	堆	外面：ヨコナデ→手持ちハラケズリ→ヘラミガキ 西面：ヘラミガキ→黒色施墨	16.3	8.4	4.8	完形		3197
4	土師器・环球	堆	外面：ヨコナデ→手持ちハラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色施墨	(17.0)	—	4.7	一部		3200
5	土師器・环球	堆	外面：ヨコナデ→手持ちハラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色施墨	(14.6)	—	(4.7)	1/2		3198
6	土師器・环球	堆	外面：ヨコナデ→手持ちハラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色施墨	15.9	—	4.8	4/5		3196
7	土師器・环球	堆	外外面：ヘラミガキ→黒色施墨	(19.0)	—	—	1/4		3199
8	土師器・小切妻	堆	外面：ナデ→ヨコナデ 内面：ヨコナデ→ハラナデ	12	—	—	1/4		3192
9	土師器・大切妻	堆	外面：ヨコナデ→ナデ 内面：ヨコナデ→ハラナデ	(20.0)	—	—	一部		3191
10	土師器・大型器	堆	外面：(左)ハケヌメ→(右)ヨコナデ 内面：ヘラナデ	(20.8)	8.0	—	1/3		3209

図版597 SD180B区画溝跡出土遺物 1

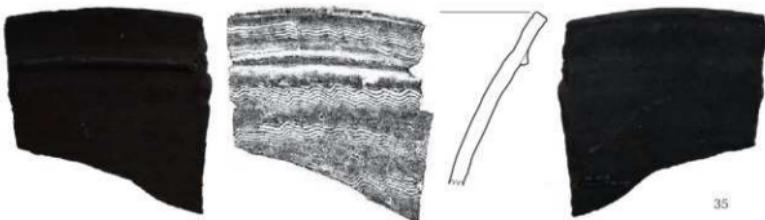


No.	器種	部位	調整	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	残存	備考	登錄
11	圓底器・小切付	堆	内外面：ロクロナデ 底部：へラ切り→ナデ	10.6	6.4	4.9	1/3		3178
12	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：へラ切り→ナデ	(13.4)	(7.4)	4.3	1/3		3175
13	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：へラ切り	—	—	7.4	—	一部 底部にへラ書き「—」	3179
14	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：へラ切り→ナデ	(14.4)	(7.4)	3.3	4/5		3173
15	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：へラ切り→ナデ	14.7	9.4	3.9	2/3		3185
16	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：へラ切り→ナデ	(14.0)	(9.0)	3.5	1/4		3180
17	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：削輪棒切り→削輪棒ヘラヶズリ	(16.0)	(10.8)	3.6	1/4 内外面に火滓		3177
18	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：切離し下明→削輪棒ヘラヶズリ	(13.0)	(8.4)	3.5	—部		3202
19	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：へラ切り→ナデ	(15.0)	(8.2)	3.6	—部		3176
20	圓底器・坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：切離し下明→ナデ	(14.6)	(7.6)	3.6	1/4		3201
21	圓底器・前坪	堆	内外面：ロクロナデ 底部：切離し下明→削輪棒ヘラヶズリ→高台削付→ナデ	(16.8)	(8.8)	7.0	1/3		3232
22	圓底器・中凹面	堆	外面：ロクロナデ→削輪棒ヘラヶズリ→ツマ貼付→ナデ 内面：ロクロナデ	—	—	—	1/2 环状器転用。 複数個ツマミ往：2.9m		3193
23	圓底器・純縫	堆	外面：ロクロナデ→削輪棒ヘラヶズリ→ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底部：へラ切り→削輪棒ヘラヶズリ→高台削付→ロクロナデ	(15.0)	9.0	8.2	2/3		3203
24	圓底器・純縫	堆	外面：ロクロナデ→削輪棒ヘラヶズリ→高台削付→ナデ 内面：ロクロナデ 底部：切離し下明→削輪棒ヘラヶズリ→高台削付→ナデ	(17.0)	(5.0)	7.2	1/4		3204

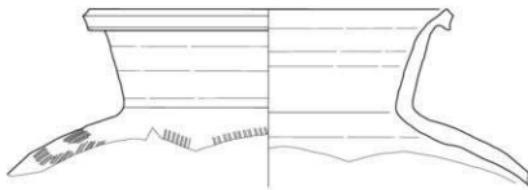
図版598 SD180B区画溝跡出土遺物 2



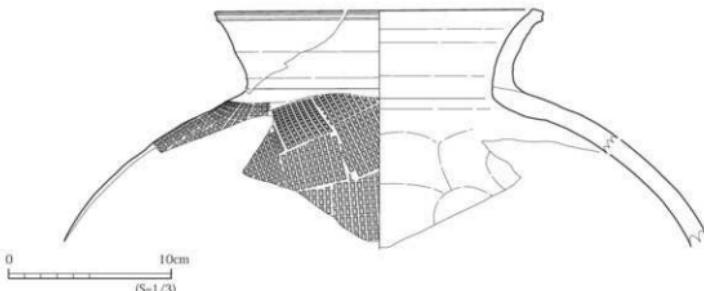
図版599 SD180B区画溝跡出土遺物 3



35



36



37

No.	器種	層位	摘要	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	既存	参考	登録
35	須臾器・甕	堆	[内外面：ロクロナデ]	—	—	—	一部		3206
36	須臾器・甕	堆	外面：ロクロナデ・平行タタキ 内面：ロクロナデ	(22.0)	—	—	一部		3205
37	須臾器・甕	堆	外面：[面] ロクロナデ (体) 格子タタキ→頸部接合に伴うロクロナデ 内面：[面] ロクロナデ (体) 無絞アテ具→一部ナデ→瓶頸接合に伴うロクロナデ	20.2	—	—	一部		3190

図版600 SD180B区画溝跡出土遺物 4



37

図版601 SD180B区画溝跡出土遺物 5



图版602 SD180B区画溝跡出土遺物 6



15



14



17



16



19



18



21



20

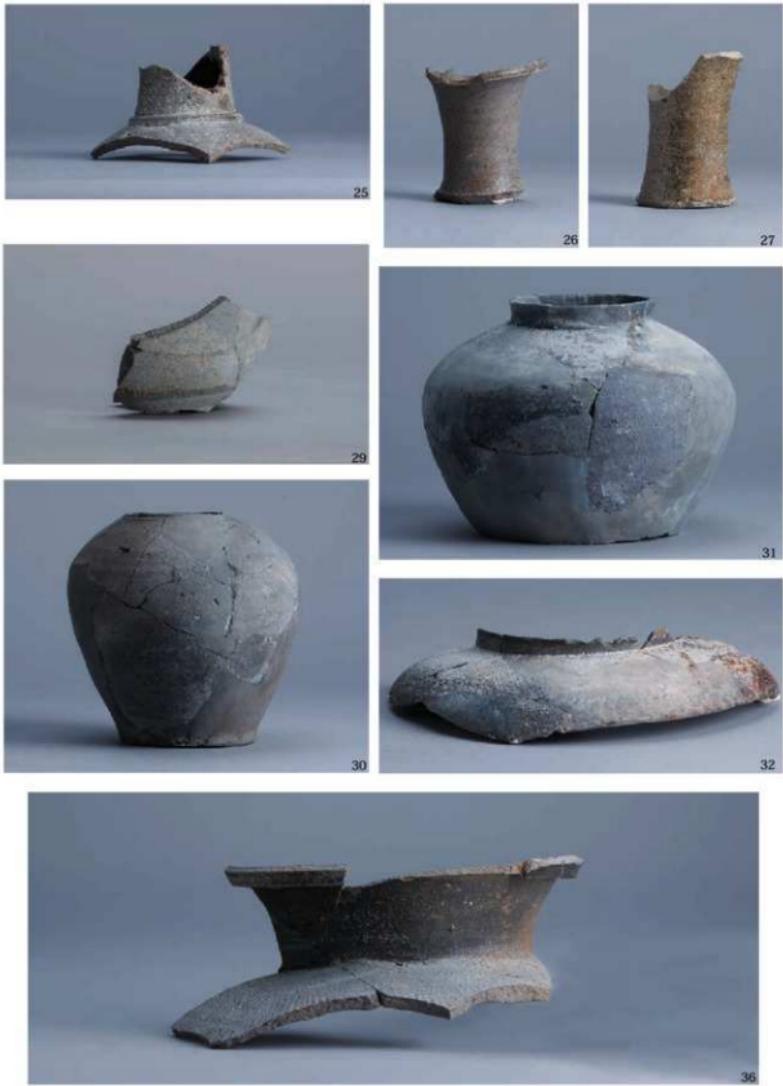


23

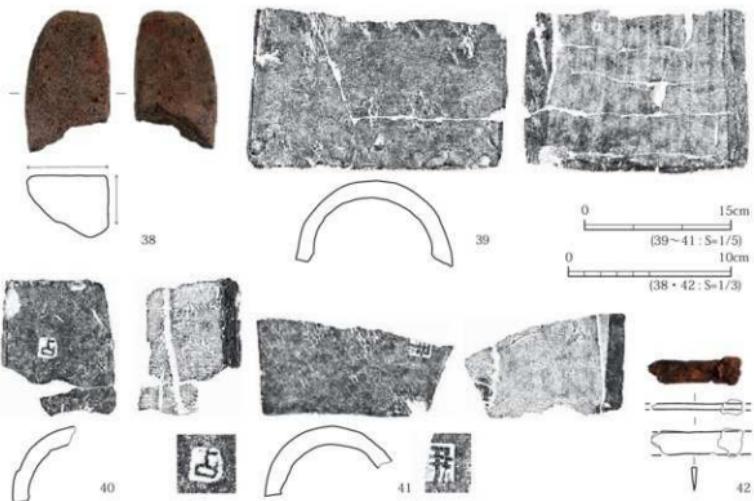


24

图版603 SD180B区画溝跡出土遺物 7



图版604 SD180B区画溝跡出土物 8



No.	器種	層位	測定	奥幅(cm)	前幅(cm)	厚さ(cm)	現存	備考	登録
38	石製品・礫石	用	△8.3	5.0	3.8	一部	高さ:19.5cm		3195
39	瓦・丸瓦	堆	凸面:縁タタキ目→クロコナテ 凹面:布目 側面:ヘラケズリ 粘土組合せ作り	—	—	2.2	1/3 多賀城分類:丸瓦ⅡB類		3194
40	瓦・丸瓦	堆	凸面:縁タタキ目→クロコナテ 凹面:布目 側面:手持ちヘラケズリ 粘土組合せ作り	—	—	1.8	一部 多賀城分類:丸瓦ⅡB類。凸面に削印「古」		3211
41	瓦・丸瓦	堆	凸面:縁タタキ目→クロコナテ 凹面:布目 側面:ヘラケズリ 粘土組合せ作り	—	—	1.3	一部 多賀城分類:丸瓦ⅡB類。凸面に削印「伊」		3171
42	瓦製品・刀子	堆	—	—	1.4	0.3	一部		3212

図版605 SD180B区画溝跡出土遺物 9

【SD11739A・B】区画溝跡（図版592・606～608）

調査区北部で確認した、SX400南北道路跡（西5道路）西側溝に接続する東西溝跡である。A・Bの2時期あり、B期が新しい。検出長は25.0mで、西側で南へ折れる。方向はE-10°-Sで、西側はE-23°-Nである。

A期はSX400のB期西側溝（SD11779）に、B期はSX400のC期西側溝に接続する。本溝はSX299東西道路跡（北2道路）北側溝から約84m離れたところに位置する。なおSX299はSX400との交差点から約45m西側まで路幅を大きく広げており、SX299の平均的な路幅（約5.6m）であるA区西側の北側溝からは、約97m北に離れる。

〔重複〕（古）SD11712 （新）SD11732

〔規模・堆積土〕 A期は上幅0.6m以上、下幅0.4m以上、深さは0.2mで、断面はレンズ形である。堆積土は褐灰色シルトで自然堆積である。B期は上幅1.5m、下幅0.5m、深さは0.4mで、断面は椀形である。堆積土は褐灰色・暗灰色のシルトで、自然堆積である。

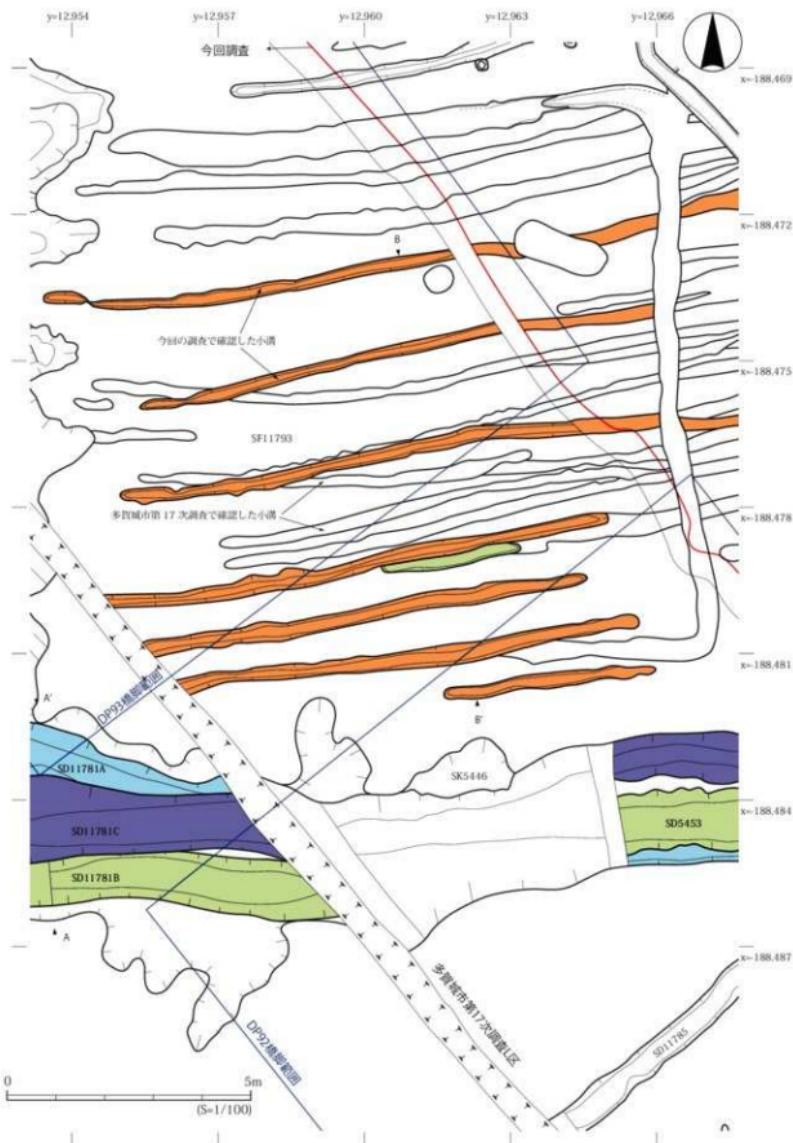
〔出土遺物〕（図版609）

B期堆積土から土師器壺・甕、須恵器壺・壺、赤焼土器壺（1）・穿孔円盤（2）、丸瓦・平瓦、確認面から土師器壺、須恵器壺・須恵器広口壺・甕、赤焼土器壺・台付鉢などが出土した。穿孔円盤は



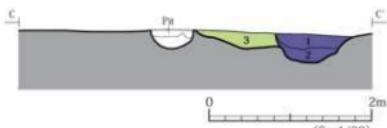
図版606 M区平面図3

(M区の図割は図版592を参照)



図版607 M区平面図4

平面図：図版 606

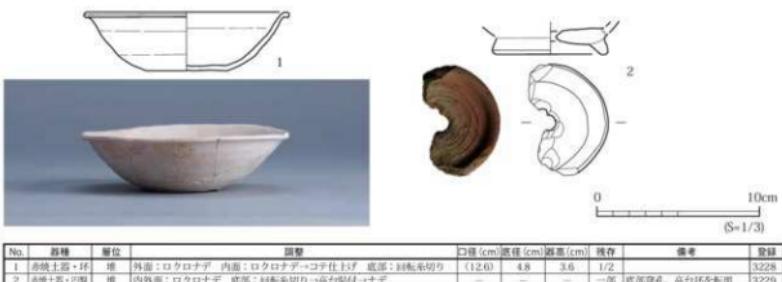


遺構名	層位	土色	土性	遺入物など	備考
SD11739B	1	褐灰色 (7.5YR5/1)	シルト		
SD11739A	2	褐灰色 (5B4/1)	シルト	自然堆積土	
	3	褐灰色 (10YR5/1)	シルト		



SD11739 断面（東から）

図版608 SD11739A・B区画溝跡



図版609 SD11739B区画溝跡出土遺物

高台環を転用している。須恵器広口壺は大戸産で、胴下部に布目が認められる。

〔SD11781A・B・C区画溝跡〕(図版606・607・610)

調査区中央部で確認した、SX400南北道路跡（西5道路）東側溝に接続する東西溝跡である。検出長は9mで、方向はE-5°-Nである。A～Cの3時期あり、C期が新しい。

過去の調査で確認した遺構との関係は、A期が多賀城市第17次調査で確認したSD5469・SD5466と同一で、西端はSX400南北道路跡東側溝（SD11780）A期に接続する。その位置は、SX500東西道路跡（北2a道路）北側溝から北に64.7m、SX300東西道路跡（北2道路）北側溝から北に96.2m離れる。B期は多賀城市第17次調査で確認したSD5453A、L区のSD7100Aと同一で、西端でSX400南北道路跡東側溝B期に接続する。

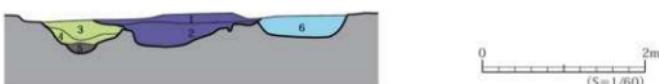
C期は多賀城市第17次調査で確認したSD5453B、L区のSD7100Bと同一で、西端でSX400南北道路跡東側溝C期に接続する。その位置は、南がSX390南北道路跡（北2a道路）北側溝から64.4m、北はSX2651南北道路跡（北3道路）南側溝から37.7m離れる。したがって、本溝は東西を西4道路と西5道路、南北を北2a道路と北3道路で開まれた街区の中央やや北で、南北に分割したと考えられる。

〔規模・堆積土〕C期は上幅1.7m、下幅0.6m、深さは0.3mで、断面はレンズ形である。堆積土は灰色砂質シルトである。B期は上幅1.0m以上、下幅0.3m、深さは0.4m、断面は漏斗形である。堆積土は灰白色火山灰を含む褐色・灰黄褐色などの砂質シルトやシルトである。A期は上幅1.1m、下幅

平面図：図版 607

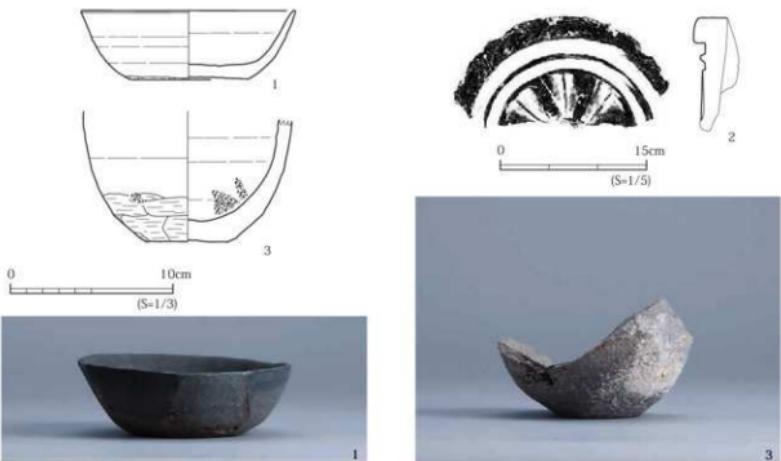
A

A'-3.0m



通称名	層位	土色	土性	混入物など	備考
C期	1	褐灰色 (10YR6/1)	シルト質粘土	地山ブロックを含む	
	2	灰褐色 (7.5YR6/1)	砂質シルト		
B期	3	褐灰色 (10YR6/1)	砂質シルト	灰白色火山灰含む	
	4	灰黄褐色 (10YR7/2)	シルト	にぶい黄褐色 (10YR7/4) 砂質土との互層 (流れ堆積)、灰白色火山灰含む	
	5	明褐灰色 (7.5YR7/1)	シルト	灰白色火山灰含む	2次堆積
A期	6	褐灰色 (7.5YR4/1)	シルト	地山ブロック含む	

図版610 SD11781A・B・C区画溝跡断面図



No.	器種	層位	回数	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	複合	備考	登錄
1	須恵器・环	3~5層 (B期)	内外面: ロクロナデ 底部: 回転軸切り→手持ちヘラケズリ	(13.2)	7.2	4.2	1/3	底面にへラ書き「X」	3224
2	瓦・軒丸瓦	3~5層 (B期)	側面: 平行タキ目・ナデ 内面: ロクロナデ	—	—	—	—	多賀城Ⅰ期、重井蓮花文112、衛士に 海綿骨針を含む	3225
3	須恵器・壺	確認面	外面: ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 内面: ロクロナデ 底面: 切削し不明→手持ちヘラケズリ	—	5.0	—	—	内外面に漆付着(漆容器)	3226

図版611 SD11781A・B・C区画溝跡出土遺物

0.8m、深さは0.3mで、断面は逆台形である。堆積土は地山ブロックを含む褐灰色シルトである。

〔出土遺物〕(図版611)

C期堆積土から土師器甕・須恵器环・甕、B期堆積土から須恵器环(1)・高台环・甕・甕・軒丸瓦(2)・平瓦、確認面から土師器甕・須恵器高台环・甕(3)などが出土した。环は回転糸切り後、手持ちヘラケズリが施され、底面にはヘラ描き「×」が認められる。3の須恵器甕は最終的に漆容器として使われた。軒丸瓦は、多賀城第I期の六葉重弁蓮花纹(多賀城分類112)である。

2. 溝跡

溝跡を10条確認した(図版592)。すべての溝跡の属性は表54にまとめている。

溝跡名	調査	被覆(m)	断面形	上幅(m)	下幅(m)	深度(m)	方向	堆積土	新旧関係	出土遺物	平面	断面
SD180A・B	断面	36.0	A:台形 B:直形	B:3.1 ~3.7	A:2.3 B:1.1	B:0.7	N-37°-W	自然堆積	SD180AB→ [B期堆] 土師器甕口クロ环・甕・大型甕、 小型甕、須恵器环・小型环・高台环・被覆・甕、 甕・長脚甕・短脚甕・脚・軒用瓦、丸瓦(II 期)、平瓦、リフ子、石製瓦砾石、つけ木	593・ 619	595	
SD11700	完掘	6.3	浅い皿形	0.6~ 1.1	0.4~ 0.8	0.1	E-14°-S ~N-38°-E	人为堆積	SD11700→ SD11700→ SK2652		592	-
SD11702	完掘	4.1	浅い皿形	0.9+	0.7+	0.1	N-9°-W	自然堆積	SD11702→ SK2652		592	-
SD11705	完掘	6.9	レンズ形	1.5~ 0.7	0.4~ 1.4	0.9	E-16°-S ~N-16°-W	自然堆積	SD11713→ SD11712→ SD11705		592	-
SD11712	断面	20.7	逆台形	0.6~ 1.0	0.3~ 0.7	0.1	E-3°-N ~E-32°-S	自然堆積	SD11713→ SD11712→ SD11739→ SK11707		592	-
SD11713	完掘	16.7	浅い皿形	3.0~ 2.3	0.9~ 1.6	0.1	N-21°-E	自然堆積	SD11713→ SD11712→ SD11705→ SA11709		592	-
SD11715	完掘	2.7	浅い皿形	0.6~ 0.7	0.5	0.1	E-21°-S	自然堆積	SD11715→ SD11700		592	-
SD11720	確認	9.8	-	0.5~ 0.9	-	-	E-20°-S	-	-		592	-
SD11739A+ B	一部 完掘	A:10.4 B:24.9	A:レンズ形 B:直形	A:0.6+ B:1.5	A:0.4+ B:0.5	A:0.2 B:0.4	E-10°-S ~E-23°-N	自然堆積	SD11712→ SD11739AB →SD11732 [A期堆] 土師器环(破)・甕(破)、須恵器切片(破)・切片(破)・赤燒土器环・ 切片(破)・赤口甕・甕(破)、須恵器口クロ环(破)・甕・須恵器口环(破)・ 切片(破)・赤焼土器环(大口部) [A期堆] 須恵器底(大口部)	606・ 607	608	
SD11732	確認	10.8	レンズ形	0.4~ 1.4	0.5	0.5	E-17°-N ~E-14°-S	自然堆積	SD11739→ SD11732		592	-
SD11768	完掘	2.7	椀形	0.8~ 1.5	0.4	0.4	E-10°-N	人为堆積	SD180+ SK11769→ SD11768		593	595
SD11781A+ B+C	確認	9.0	A:逆台形 B:直形 C:レンズ形	A:1.1 B:1.0+ C:1.7	0.3~ 0.8	0.3~ 0.4	E-5°-N	自然堆積	[C期堆] 土師器底(破)、須恵器へタ切・ ナダ付(破)・甕(破) [B期堆] 須恵器口环(破)・高台环(破)・ 甕(破)・軒丸瓦・平瓦 [A期堆] 土師器底(破)、須恵器高台环(破)・ 甕(破)・甕・平瓦(破) [確認堆] 須恵器底(漆容器)	606・ 607	610	
SD11785	断面	21.7	椀形	0.7~ 1.1	0.6	0.2	E-2°-N ~E-38°-N	人为堆積+ 自然堆積		607・ 615	-	

* 規模が不明なものは、数値に+を加えている

* (出土遺物) [破]: 通構確認面出土。[堆]: 堆積土出土。[磚]: 磚片資料

表54 M区溝跡属性表

3. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡を4棟確認した。これらはSX400西5道路跡の東側に分布する。以下、4棟すべてについて概要を説明し、個々の属性は表55にまとめている。

【SB11770掘立柱建物跡】(図版612・614)

調査区中央部で確認した桁行1間・梁行2間の東西棟建物跡である。

〔柱間寸法・方向〕柱間寸法は、桁行が南側柱列でみると3.4mである。梁行は、西妻でみると1.6m等間で、総長は3.2mである。方向は、南側柱列で測るとE-7°-Sである。

〔柱痕跡〕直径0.2mほどの円形である。

〔柱穴〕一辺0.4～0.6mの隅丸方形で、深さは0.3mである。掘方埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

〔出土遺物〕なし。

【SB11771掘立柱建物跡】(図版612・615)

調査区中央部で確認した桁行3間・梁行2間の東西棟建物跡である。

〔柱間寸法・方向〕柱間寸法は、桁行が北側柱列でみると西から2.2m・1.9m・2.1mで、総長は6.2mである。梁行は、西妻でみると北から2.0m・1.9mで、総長は3.9mである。方向は、北側柱列で測るとE-5°-Nである。

〔柱痕跡〕直径0.2m前後の円形で、北側の柱穴は抜き取られている。

〔柱穴〕一辺0.4m前後の不整形で、深さは0.3mである。掘方埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

〔出土遺物〕なし。

【SB11772掘立柱建物跡】(図版612・615)

調査区中央部で確認した桁行3間・梁行2間の東西棟建物跡である。

〔柱間寸法・方向〕柱間寸法は、桁行が北側柱列でみると西から3.2m(2間分)・1.6mで、総長は4.8mである。梁行は、西妻でみると3.4m(2間分)である。方向は、北側柱列で測るとE-6°-Sである。

〔柱痕跡〕直径0.2m前後の円形で、すべて抜き取られている。

〔柱穴〕一辺0.5～0.8mの隅丸方形で、深さは0.4mである。掘方埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

〔出土遺物〕(図版613)

確認面から土師器壺(1)が出土した。

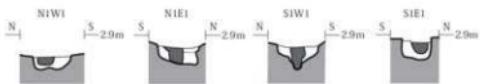
【SB11773掘立柱建物跡】(図版612・614)

調査区中央で確認した桁行3間・梁行2間の南北棟建物跡である。

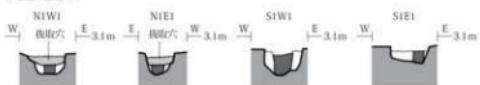
〔重複〕(古) SB1546 (新) SD384

〔柱間寸法・方向〕柱間寸法は、桁行が東側柱列でみると北から2.9m(2間分)・1.4mで、総長は4.3mである。梁行は、南妻でみると1.7m等間で総長は3.4mである。方向は、東側柱列で測るとN-5°-Eである。

SB11770
平面図: 図版 614

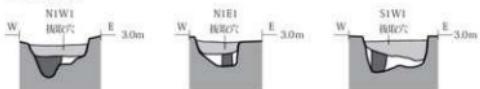


SB11771
平面図: 図版 615



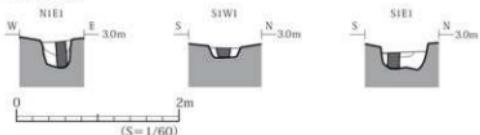
SB11770-51W1 断面 (西から)

SB11772
平面図: 図版 615

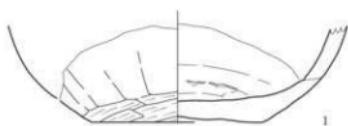


SB11771-N1E1 断面 (北から)

SB11773
平面図: 図版 614

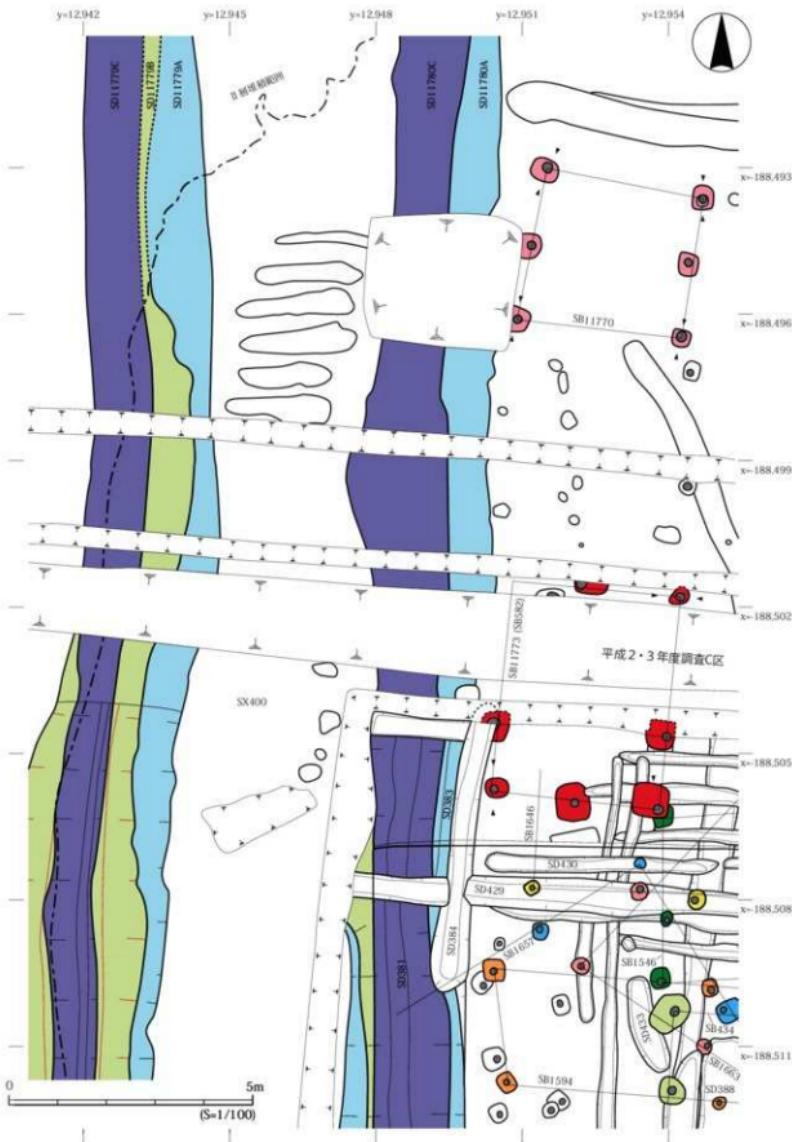


図版612 SB11770・11771・11772・11773掘立柱建物跡



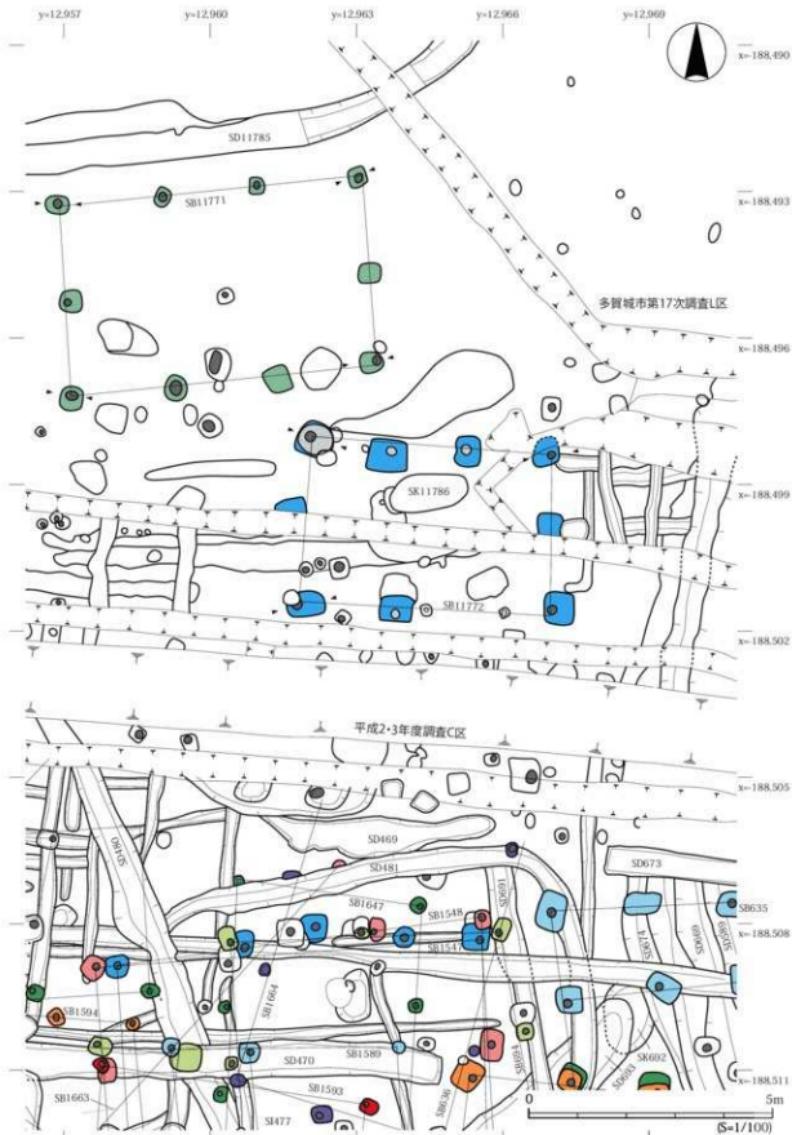
No.	器種	層位	調整	口径(cm)/底径(cm)/器高(cm)	残存	備考	No.
1	土師器・甕	縦坑面	外面: 手持ちハラケズリ・ヘラナデ 内面: ナデ 底部: 木型組	— / (10.4) / —	一部		3330

図版613 SB11772掘立柱建物跡出土遺物



(M区の図剖は図版592を参照)

図版614 M区平面図 5



図版615 M区平面図6

(M区の調査結果は図版592を参照)



図版616 M区中央東側全景

構築名	調査 面	建物間隔		平面規模 (m)				建物方向		柱穴部		新旧関係	面積			
		東西	南北	縦長 測定	柱間寸法	東西	南北	角度	柱距 柱径	柱穴 (m)	柱頭 (m)		平面 面積			
SB11770	平置	1	2	東西	3.4	南	—	3.2	西	1.6等間	E - 7° - S	南	0.2	0.4 ~ 0.6	隅丸方形	614 612
SB11771	平置	3	2	東西	6.2	北	2.2+1.9+2.1	3.9	西	2.0+1.9	E - 5° - N	北	0.2	0.4	不整方形	615 612
SB11772	平置	3	2	東西	4.8	北	(3.2 [2間分]) +1.6	3.4	西	—	E - 6° - S	北	0.2	0.5 ~ 0.8	隅丸方形	615 612
SB11773	平置	3	2	南北	4.3	東	(2.9 [2間分]) +1.4	3.4	南	1.7等間	N - 5° - E	東	0.3	0.4 ~ 0.8	隅丸方形	SB11546 → SB11773 → 3D384 614 612

・柱間寸法は東西方向が西から5、南北方向は北から行った。ただし、西側や北側が不明な場合は東から、南から計測している。

・柱頭跡が無い。また柱頭跡が1つ以上ある場合は、2箇所（場合によっては3箇所）の地和を表記している。

・柱頭跡が2箇所以上ある場合は、最も大きいものを書きとしている。

・建物全体の面積が不明なものは、該字前に「?」を加えている。

表55 M区掘立柱建物跡属性表

【柱痕跡】直径0.3m前後の円形である。

【柱穴】一辺0.4~0.8mの隅丸方形で、深さは0.4mである。掘方埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトである。

【出土遺物】なし。

4. 土坑

10基確認した。以下、SK11726・11769について概要を説明し、個々の属性は表56にまとめている。

【SK11726土坑】(図版617・619)

調査区中央部西側で確認した円形の土坑である。

【重複】(古) SF11791

〔規模・堆積土〕直径2.1～2.3mの円形、深さは0.9mで、断面は楕円形である。堆積土は褐色の粗粒砂・シルト質砂などで、自然堆積のち埋め戻され、その後窪んだ部分に灰白色火山灰が堆積した。

〔出土遺物〕(図版618)

3層から土師器壺(1)、須恵器壺・甕、丸瓦、確認面から土師器壺・甕、須恵器壺・横瓶(2)・甕、楕円形甕などが出土した。土師器壺・甕はロクロ調整で、須恵器横瓶は大戸産である。

〔SK11769 土坑〕(図版593・617)

調査区南部西側で確認した不整楕円形の土坑である。

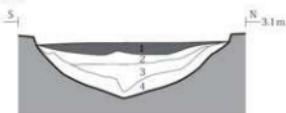
〔重複〕(新) SD11768

〔規模・堆積土〕長軸0.9m、短軸0.5mの楕円形で、深さは0.3mである。断面は皿形で西側が少し深い。堆積土は地山ブロックを多く含む褐色のシルト質中～細粒砂などで、人為堆積である。

〔出土遺物〕(図版618)

埋土から土師器壺・甕、須恵器壺・壺(4)、ミガキ須恵器高盤(3)、縁軸陶器塊(5)、丸瓦、製塙土器などが出土した。土師器壺は回転糸切りで、須恵器壺は猿投産とみられる。

SK11726
平面図: 図版619

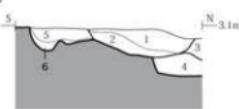


層位	土色	土性	遺入物など	備考
1	褐色 (10YR5/1)	シルト質砂 (中～細粒)	灰白色火山灰プロック タ合む。液状化	自然堆積土
2	褐色 (10YR6/1)	中～細粒砂	地山ブロック合む	人為堆積土
3	褐色 (10YR4/1)	中粒砂		
4	褐色 (10YR5/1)	シルト質砂～中粒砂	粘性土。遺物合む	



SK11726 断面(南から)

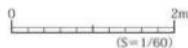
SK11769
平面図: 図版593



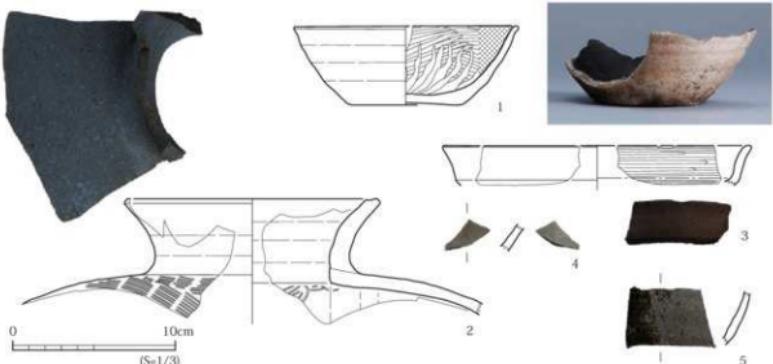
層位名	層位	土色	土性	遺入物など	備考
SD11768	1	黒褐色 (10VR3/2)	シルト質細粒砂	均質。下部に地山ブロック合む	
	2	黄褐色 (10YR6/2)	シルト質細粒砂	地山ブロックを多く含む	
SD180B	3	褐色 (10YR4/1)	砂質シルト～粘土		
SD180A	4	褐色 (10YR4/1)	シルト質砂～細粒砂	地山ブロック合む	
SK11769	5	褐色 (10YR4/1)	シルト質砂～細粒砂	地山ブロック合む。下位ほど粗粒	
	6	褐色 (10YR6/1)	シルト質中粒砂	地山ブロックを多く含む	人為堆積土



SK11769 断面(南から)



図版617 SK11726・11769土坑



図版618 SK11726・11769土坑出土遺物

遺構名	調査	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	堆積土	新旧関係	出土遺物	図版	
										平面	断面
SK11703 完整 不整相円形 逆台形	—	2.1+	1.2	0.1	人為堆積	SK11703 → SD11702			[3期] 土師器口輪・系切环・須恵器環・甕(破)。	592	—
SK11707 完整 不整相円形 蓋斗形	—	0.6+	0.5+	0.2	自然堆積	SK11707 → SD11712			丸瓦(破)。	592	—
SK11726 平底 円形 梶形	平底	2.3	2.1	0.9	自然堆積	SK11791 → SK11726			[3期] 土師器口輪・系切环・須恵器環・甕(破)。	619	617
SK11733 碓頭 不整相円形 —	—	1.7	0.9	—	—				丸瓦(破)。	592	—
SK11738 碓頭 不整相円形 —	—	1.6	0.8	—	—				須恵器(人骨)・甕(破)・瓶(破)・楕円片	592	—
SK11789 完整 不整相円形 蓋斗形	—	0.9	0.5	0.3	人為堆積	SK11769 → SD11768			[埋] 土師器口輪・系切环・甕(破)・須恵器(猪食骨)・甕(破)・瓶(破)・三足牛首壺蓋高盤・縁飾陶器壺・丸瓦(破)・剪口土器	593	617
SK11774 完整 不整相円形 逆台形	—	0.4	0.3	0.1	人為堆積					593	—
SK11775 完整 不整相円形 梶形	—	0.6	0.3	0.2	自然堆積					593	—
SK11782 断跡 不整相円形 梶形	—	2.9	1.8	0.2	自然堆積					592	—
SK11786 碓頭 不整相円形 —	—	1.7	0.8	—	—					615	—

* 規模が不明なものは、数値に * を加えている

* (出土遺物) (破)：遺構確認出土。(埋)：堆積土出土。(鏡)：鏡片資料

表56 M区土坑属性表

5. 番跡

調査区西側で2面（SF11791・11792）、東側で1面（SF11793）確認した（図版592）。概要は以下のとおりで、表57に属性をまとめている。

【SF11791 番跡】（図版619・620）

調査区中央部西側で確認した東西15.0m・南北10.2mに広がる番跡である。小溝跡は14本確認した。小溝の方向と重複関係からA群とB群の2グループに分けられ、後者が新しい。

〔重複〕（古）SD180 （新）SK11726

〔規模・堆積土〕A群は東西方向にのびる8本の小溝で構成される。小溝跡は長さ2.2～7.1m、幅0.1～0.3m、深さ0.1mで、断面は逆台形である。堆積土は褐色シルト質細粒砂である。B群は南北方向にのびる6本の小溝で構成される。小溝跡は長さ0.9～5.1m、幅0.2～0.3m、深さは0.1mで、断面は楕円形である。堆積土は褐色シルト質砂である。

〔方向〕A群はE-14°～15°-N、B群はN-1°～12°-Eである。

〔出土遺物〕なし。

【SF11792 番跡】（図版619）

調査区の北部西側で確認した東西5.0m・南北6.0mに広がる番跡である。小溝跡は4本確認しており、東西方向に延びる。

〔規模・堆積土〕長さ1.7～4.4m、幅0.2～0.4mである。確認調査にとどめたため、深さと断面形は不明である。

〔方向〕E-3°-N～E-13°-Sである。

〔出土遺物〕なし。

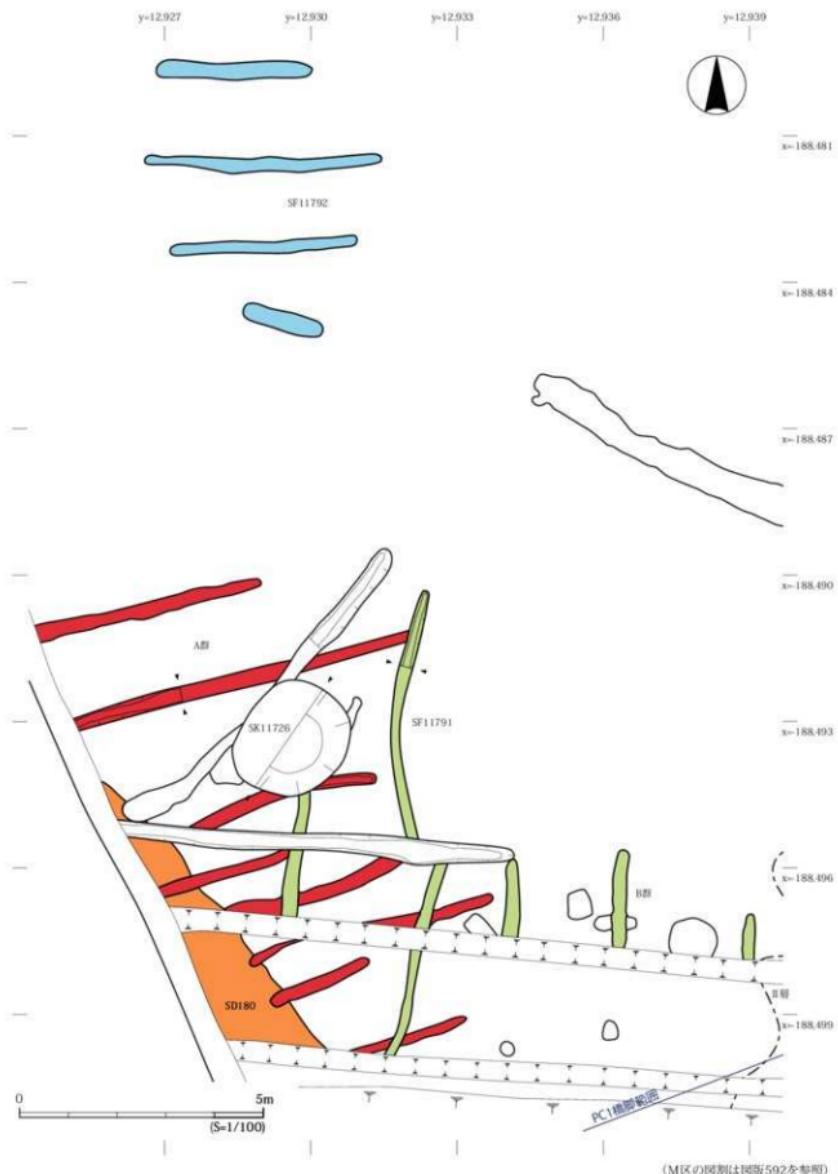
【SF11793 番跡】（図版607・621）

調査区北部西側で確認した東西、南北とも15.0m以上に広がる番跡である。小溝跡は東西方向に延びており、多賀城市第17次調査L区で確認した小溝跡と同一遺構である。今回は、8本の小溝跡を確認した。これらは、方向と重複関係から少なくともA・Bの2グループに分けられ、後者が新しい。

〔規模・堆積土〕A群は、1本の小溝跡を確認した。長さ2.9m、幅0.2m、深さは0.1mで、断面は逆台形である。堆積土は、灰黄色砂質シルトである。B群は7本の小溝跡を確認した。長さ4.4～15.0m以上、幅0.2～0.4m、深さは0.2mで、断面は楕円形である。堆積土は、にぶい黄色や浅黄色砂質シルトである。

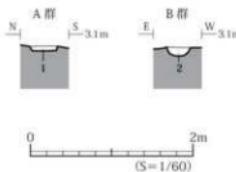
〔方向〕A群はE-8°-N、B群がE-14°～21°-Nである。

〔出土遺物〕なし。



図版619 M区平面図7

平面図：図版619



SF11791・A群断面(西から)



SF11791・B群断面(北から)

図版620 SF11791烟跡

平面図：図版607



地層名	層位	土色	土性	遺物など	備考
B群	1	褐色(10YR5/1)	シルト質粘粒砂		
B群	2	褐色(10YR5/1)	シルト質砂		



SF11793 完掘状況(南から)



SF11793 断面(東から)

図版621 SF11793烟跡

測量番号	調査	範囲 東西×南北(m)	輪郭		方向	幅員(m)	断面形	出土遺物	図版	
			グループ	検出层数					平面	断面
SF11791	一部 新削	15.0 × 10.2	A	8	E - 14° ~ 15° - N	2.2 ~ 7.1	0.1 ~ 0.3	0.1	平行帯	—
			B	6	N - 1 ~ 12° - E	0.9 ~ 5.1	0.2 ~ 0.3	0.1	複帯	—
SF11792	確認	5.0 × 6.0	A	4	E - 3° - N ~ E - 13° - S	1.7 ~ 4.4	0.2 ~ 0.4	—	—	619
SF11793	一部 (山崎南区含む)	15.0+ × 15.0+	A	1	E - 8° - N	2.9	0.2	0.1	平行帯	—
			B	7	E - 14° ~ 21° - N	4.4 ~ 15.0	0.2 ~ 0.4	0.2	複帯	607 621

* 幅員が不明なものは、数値に+を加えている

表57 M区烟跡属性表

第X I 章 N 区



N区全景（南東から）

N区では区画溝跡1条、溝跡6条（掘直しを含む）、畝跡4面、性格不明遺構1基などを確認した（図版622）。以下、主要なものについて説明する。本区の調査は遺構確認にとどめ、必要に応じて断ち割りを行っている。なお、個別記載を行った遺構の説明で〔重複〕の（古）・（新）は、記述した遺構に対する新旧関係を示している。

1. 区画施設跡

【SD11855区画溝跡】（図版29・622～624）

調査区南部で確認したL字形の区画溝跡である。多賀城市第24次調査で確認したSD5061Dと同一遺構である（多賀城市教委1997d）。検出長は19.5mで、J区や多賀城市分を含めると62.5mになる。方向は南北方向がN-5°-E、東西方向がE-1°-Sである。

SD5601Dは、多賀城市調査でSX5600南北道路跡のD期東側溝とされたが、今回のJ区の調査で西6a道路跡（SX12092）より新しい遺構であることが判明した。また、本溝の南で西6a道路（SX12092）も東へ方向を変えること、本溝の北側は平成4・5年度の県道調査で建物跡が認められなかったことから、SD11855は西6a道路廃絶後の居住域の北を画した溝とみられる。

〔重複〕（古）SD11850・11851・11854

〔規模・堆積土〕上幅1.8m、下幅0.4m、深さ0.7mで、断面はレンズ形である。堆積土は灰色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕J区で調査したSD5601Dの堆積土から土師器壺・甕、須恵器壺・甕・転用硯（図版626-1）、動物遺存体（馬歯）、丸瓦・平瓦などが出土した。

2. 溝跡

溝跡は6条（掘直しを含む）を検出しており、このうち4条について説明を行う。すべての属性は表58にまとめている。

【SD11850溝跡】（図版622～624）

調査区中央部で確認した南北溝跡で、北半は西へ緩やかな弧を描きながら西へ傾く。平成4・5年度調査で検出したSD2585と同一遺構とみられる（宮城県教委1994c）。検出長は23.0mで、SD2585を含めると33.0mになる。方向は南半がN-1°-Wで、北半はN-27°-Wである。本溝は南側のJ区で確認できなかったことから、西6a道路（SX12092）北側溝に接続していた可能性がある。

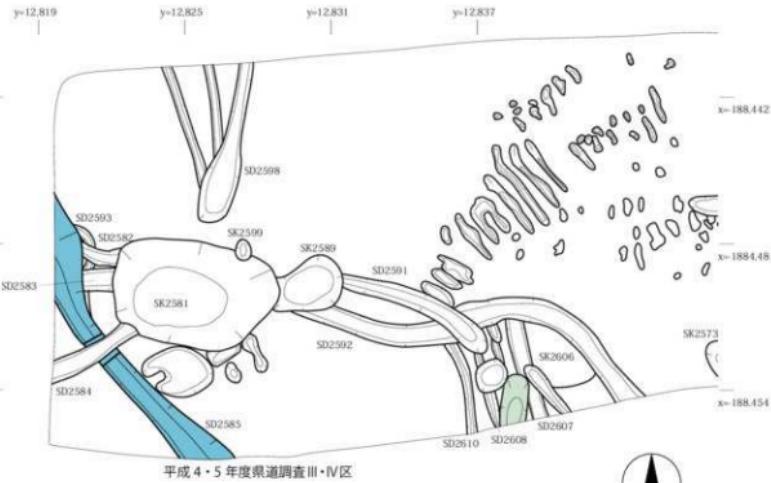
〔重複〕（古）SD11854・11856・11864 （新）SD11851・11855、SX11853

〔規模・堆積土〕上幅1.1～2.1m、下幅0.5～0.7m、深さ0.4～0.7m。堆積土は黒褐色シルト質粘土で、下層は壁崩落土を多く含んでおり、自然堆積と考えられる。断面は残りの良い北側で逆台形である。

〔出土遺物〕土師器壺・甕などが少量出土している。

【SD11851A・B溝跡】（図版622～624）

調査区中央部で確認した南北溝跡で、一度掘直されている（A→B）。北側の平成4・5年度調査区のSD2608は同一遺構とみられる（宮城県教委1994c）。検出長は21.0mで、SD2608を含めると



多賀城市第24次調査N区

0 10m
(S=1/200)

赤線：今回の調査範囲

x=188.466

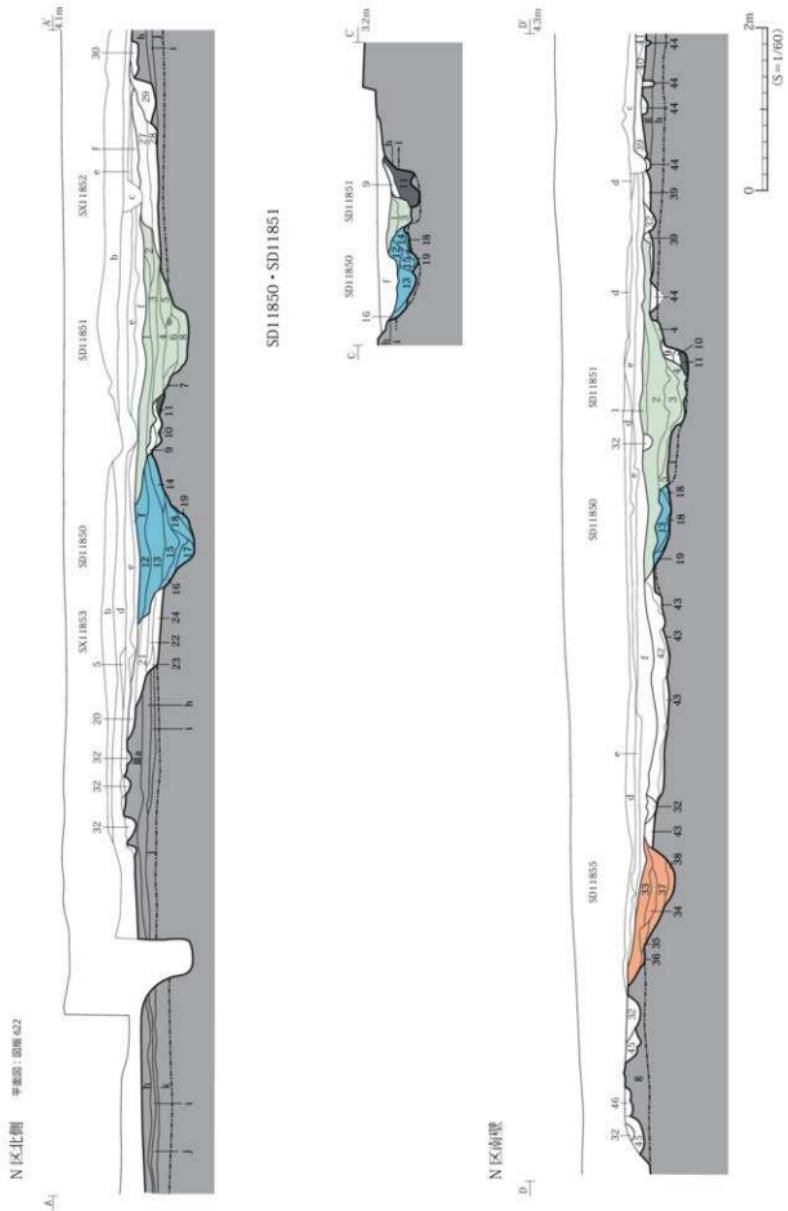
x=188.472

x=188.478

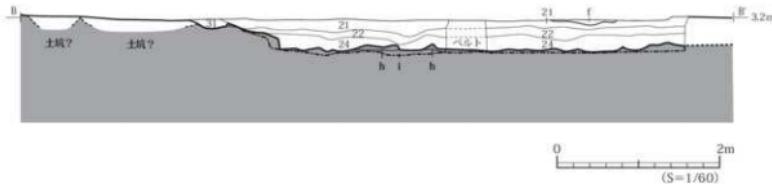
x=188.484

図版622 N区全体図

圖版623 N區土層斷面圖1



SX11853 平面図：図版622



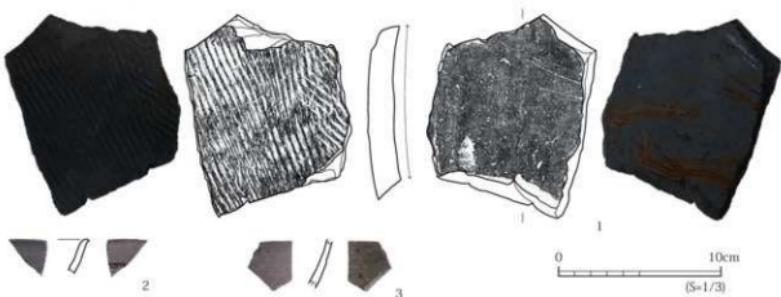
層構名	層位	土色	土性	遺留物など	備考
丸瀬畠	a				
現代地表面	b				
	c				
第Ⅰ層	d				多賀城市農委試掘埋没層
第Ⅱ層	e				
	f				
第Ⅲ層	g				
	h				
第Ⅳ層	i				
第Ⅴ層	j				
	k				古墳前期水山耕作土
SD11851B	1	褐色 (10YR4/1)	シルト質粘土		
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土		
	3	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト	地山砂をわずかに含む。灰白色火山灰含む	
	4	灰黃褐色 (10YR6/2)	砂質シルト	地山砂を少し含む	
	5	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト		
	6	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	地山砂をわずかに含む	
	7	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山砂を多く含む	
	8	黒色 (10YR2/1)	粘土	地山ブロックを多く含む	
	9	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	地山砂をわずかに含む。灰白色火山灰を少し含む	
SD11851A	10	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土	地山砂を多く含む。灰白色火山灰をわずかに含む	
	11	灰オーリーブ (5YV6/2)	砂質シルト	灰白色火山灰を含む	2.3堆積
	12	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山ブロックをわずかに含む	
SD11850	13	灰黃褐色 (10YR5/2)	シルト質粘土	地山砂をわずかに含む	
	14	にごり黒褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト		
	15	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山ブロックをわずかに含む	
	16	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山ブロックをわずかに含む	
	17	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山ブロックを多く含む	
	18	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	
	19	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土	地山ブロックを少し含む	
	22	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	地山ブロックをわずかに含む	
	23	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山ブロックをわずかに含む	
SK11853	24	褐灰色 (10YR4/1)	シルト質粘土	地山砂をやや多く含む	
	25	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	地山ブロックをわずかに含む	
	26	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山ブロックを多く含む	
	27	黒褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山砂を少し含む	
	28	褐褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山砂をやや多く含む	
土坑	29	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	地山砂を少し含む	
	30	にごり 黄褐色 (10YR6/3)	シルト	地山ブロックを少し含む	
	31	黄褐色 (2.5Y6/1)	砂質シルト		
SF11862	32	褐灰色 (10YR5/1)	シルト	地山ブロックを少し含む	
	33	浅黄色 (5Y7/3)	シルト	「マンガン」含む	
SD11855	34	灰褐色 (5Y4/1)	シルト	「マンガン」含む	
	35	灰色 (5Y5/1)	砂質シルト	「マンガン」含む	
	36	湖褐色 (2.5Y6/1)	シルト	「マンガン」含む	
	37	灰褐色 (2.5Y7/2)	シルト	「マンガン」含む	水成堆積層
	38	灰白色 (10Y7/1)	シルト	「マンガン」含む	
	39	オリーブ黒色 (5Y3/1)	砂質シルト		
SD11867	40	褐灰色 (10YR4/1)	砂質シルト		
	41	灰褐色 (10YR4/1)	砂質シルト		
	42	黄褐色 (2.5Y6/1)	シルト	「マンガン」含む	
堆積層	43	灰色 (5Y6/1)	シルト		
	44	オリーブ黒色 (5Y3/1)	砂質シルト		
	45	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	「マンガン」と鉄鉱を含む	
鉄鉱	46	褐灰色 (10YR6/1)	シルト	「マンガン」含む	
	47	褐灰色 (10YR5/1)	シルト	「マンガン」含む	

図版624 N区土層断面図

平面図: 国版 622



図版625 SD11854溝跡断面図



No.	名様	遺構	層位	調整	口径(cm)底径(cm)高さ(cm)	残存	備考	登録
1	浴槽器・転用窓	SD11855	堆積土		— — —	一部	便を転用。内面: 使用痕。旧道横石: JIKSD5601D	3341
2	灰坩埚器・焼	第Ⅱ層	内外面: ロクロナデ・陶輪		— — —	一部	留設段	3457
3	灰坩埚器・焼	城壁面	内外面: ロクロナデ・陶輪		— — —	一部	留設段	3458

図版626 SD11855区画溝跡、N区遺構外出土遺物

遺構名	調査	標高(m)	断面形	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	方向	堆積土	新旧関係	出土遺物	平面	断面
SD11850	新削	23.0	逆台形	1.1 ~ 2.1	0.5 ~ 0.7	0.4 ~ 0.7	南北: N - 1° - W. 北北: N - 27° - W	自然堆積	SD11854 + 11856 + 11864 → SD11850 → SD11851 → SX11853 → SD11855	[堆] 土師器群・甕	622	623
SD11851A + B	新削	21.0	逆台形	B: 3.5 ~ 4.2	B: 0.4 ~ 0.6	B: 0.4 ~ 0.6	E - 1 ~ 4° - E	自然堆積	SD11854 + 11864 → SD11850 + SD11851 → SX11853 + SD11855	—	622	623
SD11854	新削	20.5	浅い面部	0.6	0.4	0.1	N - 45° - E	自然堆積	SD11854 + SD11850 → SD11851 → SD11855	—	622	625
SD11855	完削	19.5	レンズ形	1.8	0.4	0.7	南北: N - 3° - E. 東西: E - 1° - S	自然堆積	SD11854 + SD11850 → SD11851 → SD11855	—	622	623
SD11864	確認	19.2	—	0.5 ~ 0.8	—	—	E - 15° - N	—	SF11850 + SD11864 → SD11850 + SD11851 → SD11855	—	622	—
SD11867	確認	6.5	—	0.6	—	—	E - 26° - N	自然堆積	—	—	622	623

* 断面が不明なものは、数値に * を加えている

* (出土遺物) [堆]: 遺構確認面出土。[堆]: 堆積土出土。[破]: 破片資料

表58 N区溝跡属性表

32.5mになる。方向はN-1~4°-Eである。本溝は南側のJ区で確認できなかったことから、西6a道路(SX12092)北側溝に接続していた可能性がある。

〔重複〕(古) SD11850・11854・11864 (新) SD11855、SX11853

〔規模・堆積土〕B期は上幅3.5~4.2m、下幅0.4~0.6m、深さ0.4~0.6mで、断面は逆台形である。

堆積土は黒褐色の砂質シルトなどで、A期堆積土に灰白色火山灰が認められる。

〔出土遺物〕なし。

【SD11854 溝跡】(国版 622・625)

調査区中央部から東部で確認した北東へ延びる溝跡である。多賀城市第24次調査のSD5606は同一遺構とみられる(多賀城市教委1997d)。検出長は20.5mで、SD5606を含めると47.5mになる。方向

はN-45°-Eである。SD5604・11854の西側に畝跡が集中することから、耕作域の区画溝とみられる。

〔重複〕(新) SD11850・11851・11855

〔規模・堆積土〕上幅0.6m、下幅0.4m、深さ0.1mで、断面は浅い皿形である。堆積土は褐色灰色砂質シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕なし。SD5606からは、回転糸切りの土師器壺などが出土した。

3. 畝跡

【SF11861 畝跡】(図版622)

調査区西部で確認した南北方向の小溝跡である。小溝は8本あり、SX11853で壊される。多賀城市第24次調査で検出されたSX5990小溝群D期(多賀城市教委1997d)にあたるとみられる。方向はN-3~10°-Wである。

〔重複〕(新) SX11853

〔規模・堆積土〕長さ1.0~2.5m、上幅0.2~0.3mである。確認にとどめたため、下幅と深さは不明である。堆積土は地山ブロックを含む灰黄褐色粘土である。

〔出土遺物〕なし。

【SF11862 畝跡】(図版622)

調査区南西部で確認した南北方向の小溝跡である。小溝は4本あり、多賀城市第24次調査で検出されたSX5990小溝群C期にあたるとみられる(多賀城市教委1997d)。方向はN-25~30°-Wである。

〔規模・堆積土〕長さは1.6~2.3mで、上幅0.2~0.5m、下幅0.1~0.2m、深さは0.1~0.2mである。堆積土は褐色シルトである。

〔出土遺物〕なし。



図版627 N区全景(南東から)

第XII章 第V層の水田跡



古墳時代前期の水田跡 (SF12230) (南西から)

J区の基本層位第V層でSF12230水田跡を確認した。本水田跡は、西側に多賀城市第24次調査J区で検出された水田跡と同一である。また、多賀城市的調査では、同じ遺構面の非耕作域から古墳時代前期の土師器鉢・壺・甕が出土しており、水田跡は古墳時代前期と考えられた（多賀城市教委1997d）。

古墳時代前期の水田跡は、本遺跡の別地点や新田遺跡でも確認されており、広い範囲が耕作地として利用されたことが分かっている（宮城県教委1995・1998、多賀城市教委2006aほか）。八幡・伏石地区では、J区以外に水田耕作にかかる遺構を確認したのは、伏石地区的橋脚DP84で、畦畔の可能性がある土盛り遺構を確認したのみである。一方、八幡・伏石地区的砂押川に近い地域では、橋脚DP95と橋脚PB2を調査したところ、湿地性の堆積層を確認した。こうしたことから、八幡・伏石地区における水田耕作域と非耕作域の境界は、J区東側付近であったとみられる。

【SF12230水田跡】（図版628～630）

基本層位第V層で確認した水田跡である。17区画を確認しており、多賀城市教委分と合わせると37区画になった。そのうち面積がわかるは3区画である。

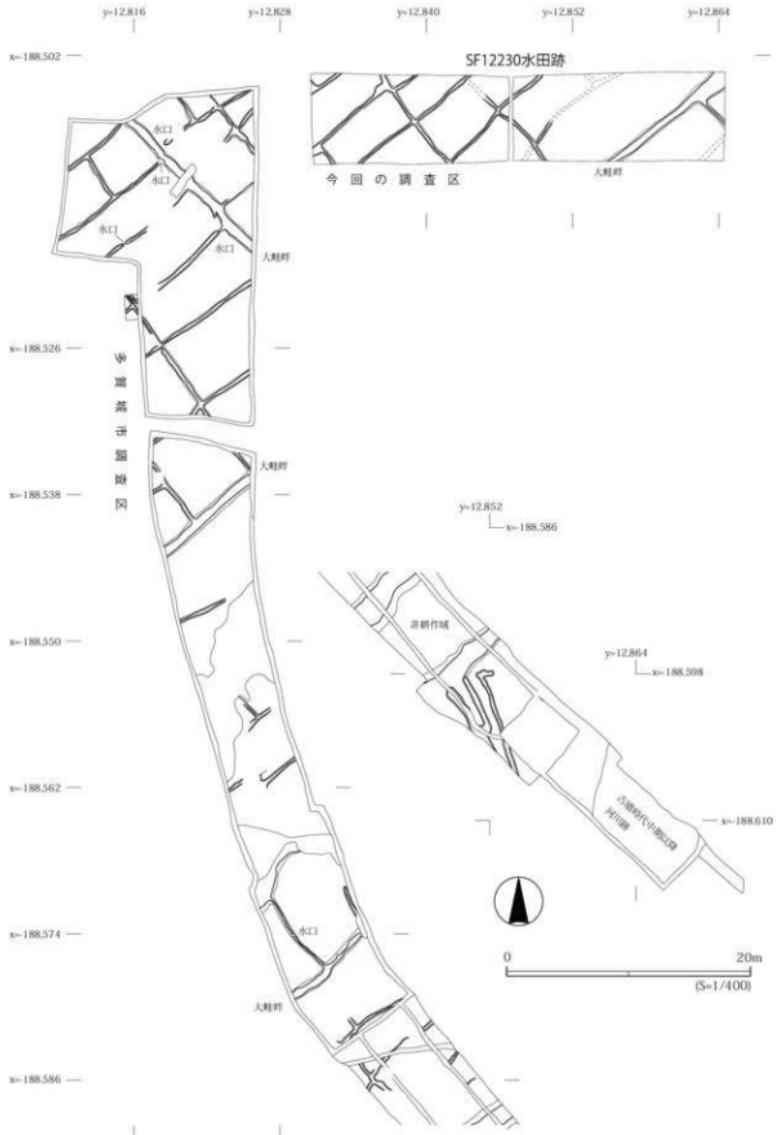
〔区画の平面形・面積〕 平面形は長方形で、面積は最も広い区画で24.5m²以上、最も狭い区画で22.4m²である。

〔畦畔・水口〕 畦畔は多賀城市調査区で土盛りであったが、今回の調査ではすべて耕作土と同じ黒色粘土であった。このため、確認したのは水田畦畔直下で耕作の影響を受けなかった高まりである「擬似畦畔」（仙台市教委1987a）と考えられる。擬似畦畔は北東から南西方向のもの6条と、これに直交する6条がある。このうち調査区東側の3本は、調査区壁面の土層観察から擬似畦畔とした。

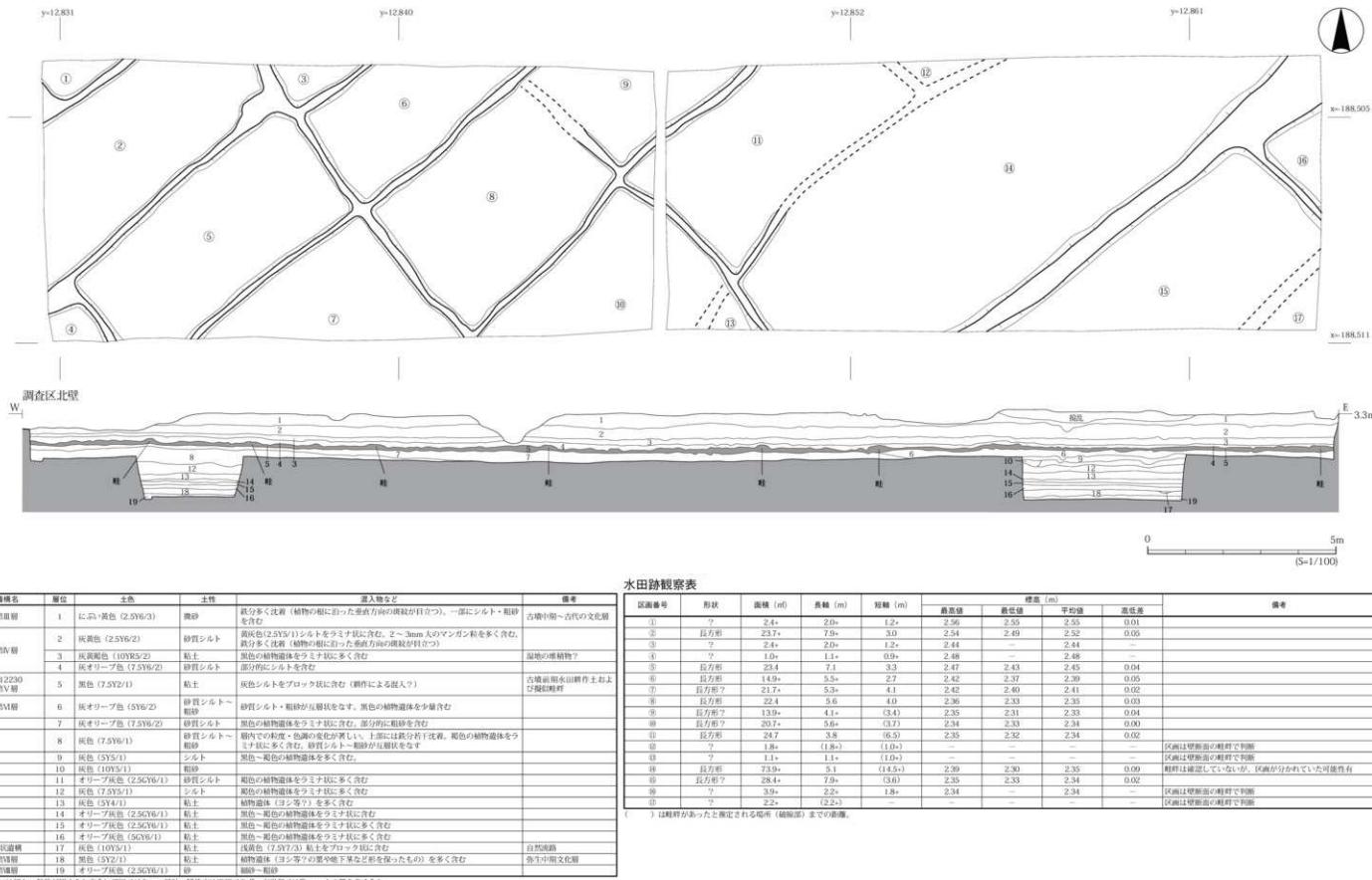
〔耕作土〕 耕作土は基本層位第V層の黒色粘土で、耕作に伴う搅拌に起因する灰色シルトの小ブロックを含む。耕作土の厚さは0.2mほどである。なお、直上に灰オーリーブ色砂質シルトが認められるが、畦畔が残存しないこと、多賀城市調査区では、両層の間に間層が介在することから、耕作時の洪水砂層ではないと考えられる。

〔水田面の標高と傾斜〕 水田面の標高は、平均値で最も高いところが2.55m、最も低いところが2.33mである。水田面は調査区の西側から東側へ緩やかに下がっており、水は西から東へ流していたと考えられる。

〔出土遺物〕 なし。



図版628 J区第V層水田跡平面図



図版629 SF12230水田跡



SF12230 水田跡完掘状況（西から）



SF12230 水田跡完掘状況（東から）



SF12230 水田跡検出状況（南西から）



調査区北壁堆積状況（南から）

図版630 SF12230水田跡2

第XⅢ章 自然科学分析



G 区 SI11501 穹穴住居跡に堆積した火山灰



D 区 SD100・2050B 河川跡合流部の貝層状況

1. 山王遺跡から出土した火山灰分析

株式会社 火山灰考古学研究所

(1) はじめに

東北地方中部に位置する仙台平野とその周辺に分布する地層や土壤の中には、鳴子、藏王、肘折、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、榛名、御岳、三瓶、阿蘇、姶良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる（早田1989aなど）。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井1992, 2003, 2011）などに収録されており、考古遺跡などで調査分析をおこない年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

多賀城市山王遺跡における発掘調査でも、層位や年代が不明な凝灰質堆積物が検出されたことから、発掘調査担当者により採取された6試料（試料1～6）を対象に、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析、テフラ組成分析、火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラとの同定をおこなうことになった。

(2) テフラ検出分析

① 分析試料と分析方法

6試料に含まれる比較的粗粒のテフラ粒子の特徴や量を定性的に把握するために、次の手順でテフラ検出分析を実施した。

- 1) 試料を詳細に観察し、テフラ（火山灰）層の可能性がより高い部分から高純度で分析対象試料を採取。
- 2) 試料10gを秤量。
- 3) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 4) 80°Cで恒温乾燥。
- 5) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の相対的な量や特徴を観察。

② 分析結果

テフラ検出分析の結果を表59に示す。実体顕微鏡下では、試料4をのぞき、火山ガラスを認めることができた。なお、とくにこの試料4と試料5の粒子については非常に細粒のために、テフラ粒子の

試料名	採取場所・層	年 代	試料乾燥量 (最終乾燥量)	軽石・スコリア		火山ガラス		非磁性鉱物以外	
				量	色調	量	形態	色調	量
試料1	F区 SH11501-2層	5世紀前葉以降	10g (16g)	*** pm (fb, sp)> fm	無色透明、白。(淡褐色)	(*)	cpx, (am)		
試料2	F区 SH11501-2層	5世紀前葉以降	10g (41g)	*** pm (fb, sp)> fm	無色透明、白。(淡褐色)				
試料3	G区IV層・SD11011壁面	古墳崩壊～5世紀前葉	10g (20g)	**** pm (fb, sp)	無色透明、白。(淡褐色)				
試料4	G区IV層・溝西区西壁	古墳崩壊～5世紀前葉	10g (50g)						
試料5	G区IV層・溝西区西壁	古墳崩壊～5世紀前葉	10g (100g)	(*) md	無色透明				
試料6	G区IV層・溝西区西壁	古墳崩壊～5世紀前葉	10g (20g)	*** pm (fb)	無色透明				

***: とくに多い。**: 多い。*: 中程度。*: 少ない。(*): 非常に少ない。最大径の単位は、mm。
bm: バル型。pm: 軽石型。md: 中間型。sp: スボンジ状。ch: 繊維束状。md: 中間型。
ol: オランジ。cpx: 鉄角輝石。cpx: 単斜輝石。am: 角閃石。bt: 黒雲母。

表59 山王遺跡のテフラ検出分析結果

詳細観察に関しては、テフラ組成分析に譲る。

試料1には、スponジ状や纖維束状に発泡した軽石型のほか、平板状のいわゆるバブル型ガラスが多く含まれている。それらの色調は無色透明や白色で、わずかに淡褐色のものも認められる。強磁性鉱物以外の重鉱物の量は少ないが、斜方輝石のほかに角閃石がごく少量含まれている（図版631）。

試料2には、スponジ状や纖維束状に発泡した軽石型のほか、分厚い中間型の火山ガラスが多く含まれている。それらの色調は無色透明や白色で、わずかに淡褐色のものも認められる（図版631）。試料3には、スponジ状や纖維束状に発泡した軽石型の火山ガラスがとくに多く含まれている。それらの色調は無色透明や白色で、わずかに淡褐色のものも認められる（図版631）。試料5では、無色透明の中間型ガラスが少量認められる（図版632）。また、試料6には、纖維束状に発泡した無色透明の軽石型が多く含まれている（図版632）。

（3）テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）

①分析試料と分析方法

テフラ検出分析の対象となった6試料に含まれるテフラ粒子の特徴や量を、より高倍率の顕微鏡下で詳しく、また定量的に把握するために、次の手順でテフラ組成分析を実施した。テフラ組成分析とは、火山ガラスの形態色調別含有率と重鉱物や軽鉱物の含有率を合わせて求める火山ガラス比分析と、重鉱物組成分析を合わせたものである。分析の手順は次のとおりである。

- 1) テフラ検出分析終了後の試料から、分析篩により1/4～1/8mmと1/8～1/16mmの粒子を篩別。
- 2) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mm粒径の250粒子を観察し、火山ガラスの形態（一部色調）別含有率ならびに軽鉱物や重鉱物の含有率を求める。
- 3) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mm粒径の重鉱物を観察し、重鉱物組成を明らかにする（註1）。計数は250粒子を目標とするが、砂分や重鉱物の含有率が低い場合にはそれを下回ることがある（註2）。

②分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図版633に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を表60と表61に示す。

試料1に含まれる火山ガラスの割合は35.2%である。その内訳は、含有率が高い順に纖維束状軽石型および中間型（各16.0%）、バブル型（無色透明、2.0%）、スponジ状軽石型（1.2%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、順に36.4%と2.0%である。不透明鉱物を除く重鉱物としては、含有率が高い順に斜方輝石（28.4%）、単斜輝石（12.0%）、角閃石（10.8%）で、ほかにわずかに黒雲母（0.4%）が含まれている。

試料2に含まれる火山ガラスの割合は42.8%である。その内訳は、含有率が高い順に纖維束状軽石型（20.4%）、中間型（16.8%）、バブル型（無色透明、3.2%）、スponジ状軽石型（2.4%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、順に37.2%と1.6%である。不透明鉱物を除く重鉱物としては、含有率が高い順に斜方輝石（17.2%）、角閃石（7.6%）、単斜輝石（6.4%）が認められる。

試料3に含まれる火山ガラスの割合は52.4%で、6試料の中でもっとも火山ガラスの含有率が高い。

写真1 試料1の顕微鏡写真(透過光)
中央下・中央右上など：織維束状軽石型ガラス
中央上(平板状有色鉱物)：斜方輝石

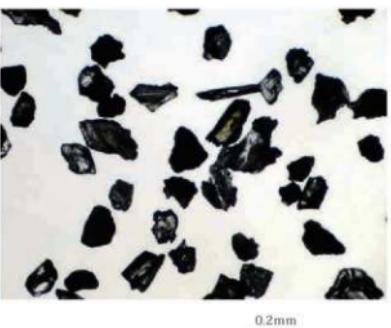
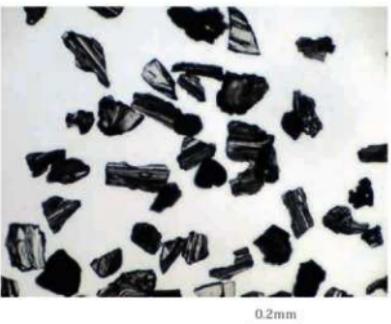


写真2 試料2の顕微鏡写真(透過光)
中央下・中央左下など：織維束状軽石型ガラス
中央左：高温型石英
中央(長柱状有色鉱物)：斜方輝石



写真3 試料3の顕微鏡写真(透過光)
中央など多数：織維束状軽石型ガラス



図版631 山王遺跡火山灰分析写真1



0.2mm

写真4 試料4の顕微鏡写真（透過光）
中央など多數：纖維束状軽石型ガラス



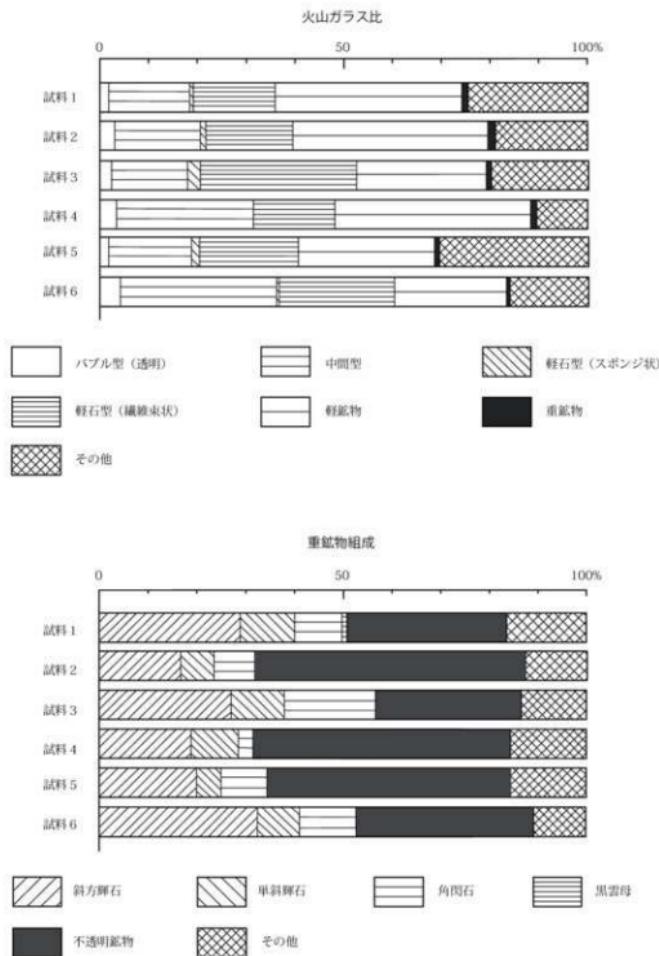
0.2mm

写真5 試料5の顕微鏡写真（透過光）
中央左・中央右など多數：纖維束状軽石型ガラス



0.2mm

写真6 試料6の顕微鏡写真（透過光）
中央など多數：纖維束状軽石型ガラス
中央下など：バブル型ガラス



図版633 山王遺跡のテフラ組成ダイヤグラム

試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	rmd	pm (sp)	pm (fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
試料1	5	0	0	40	3	40	91	5	66	250
試料2	8	0	0	42	6	51	93	4	46	250
試料3	7	0	0	38	8	78	71	1	47	250
試料4	9	0	0	67	0	41	106	2	25	250
試料5	5	0	0	41	4	49	77	2	72	250
試料6	11	0	0	77	1	57	64	1	39	250

bw : バブル型。rmd : 片側型。pm : 軽石型。cl : 無色透明。pb : 淡褐色。br : 褐色。sp : スポンジ状。fb : 織維束状。数字は粒子数。

表60 火山ガラス比分析結果

試料	cl	opx	cpx	am	ts	opn	その他	合計
試料1	0	71	30	27	1	81	40	250
試料2	0	43	16	19	0	142	30	250
試料3	0	30	11	20	0	35	15	111
試料4	0	6	3	1	0	18	5	33
試料5	0	24	6	11	0	65	19	125
試料6	0	20	6	7	0	25	6	64

cl : カンラン石。opx : 斜方輝石。cpx : 単斜輝石。am : 角閃石。ts : 黒雲母。opn : 不透明鉱物。数字は粒子数。

表61 重鉱物組成分析結果

その内訳は、含有率が高い順に織維束状軽石型（31.2%）、中間型（15.2%）、バブル型（無色透明、2.8%）、スponジ状軽石型（3.2%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、順に28.4%と0.4%である。不透明鉱物を除く重鉱物としては、含有率が高い順に斜方輝石（27%）、角閃石（18%）、単斜輝石（10%）が認められる。

試料4に含まれる火山ガラスの割合は46.8%である。その内訳は、含有率が高い順に中間型（26.8%）、織維束状軽石型（16.4%）、バブル型（無色透明、3.6%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、順に42.4%と0.8%である。不透明鉱物を除く重鉱物としては、含有率が高い順に斜方輝石（18%）、単斜輝石（9%）、角閃石（3%）が認められる。

試料5に含まれる火山ガラスの割合は39.6%である。その内訳は、含有率が高い順に織維束状軽石型（19.6%）、中間型（16.4%）、バブル型（無色透明、2.0%）、スponジ状軽石型（1.6%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、順に30.8%と0.8%である。不透明鉱物を除く重鉱物としては、含有率が高い順に斜方輝石（19%）、角閃石（9%）、単斜輝石（5%）が認められる。

試料6に含まれる火山ガラスの割合は58.4%である。その内訳は、含有率が高い順に中間型（30.8%）、織維束状軽石型（22.8%）、バブル型（無色透明、4.4%）、スponジ状軽石型（0.4%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、順に25.6%と0.4%である。含有率が高い順に斜方輝石（31%）、角閃石（11%）、単斜輝石（9%）が認められる。

(4) 屈折率測定（火山ガラス・屈折率測定）

①測定試料と測定方法

考古遺跡や露頭などで検出されたテフラについて、日本列島に分布する指標テフラとの同定を実施する場合、火山ガラスや斜方輝石などの鉱物の屈折率測定（新井1962, 1993, 墓原1993など）がよく実施されている。そこで、6試料の含まれる火山ガラス、および6試料のうちの2試料に含まれる鉱物の屈折率測定をおこなって、指標テフラとの同定精度の向上を図った。

測定には温度変化型屈折率測定法（墓原1993）を用い、火山ガラスについては1/8～1/16mm粒子の中の火山ガラスを、鉱物に関しては、>1/4mm粒子中の斜方輝石を50粒程度実体顕微鏡を用いな

がらピッキングして、軽く粉碎したものを測定対象とした。測定に際しては、30粒子以上についての測定を実施した。なお、鉱物の屈折率測定に関しては、希望のあった試料5に含まれる砂分と斜方輝石の含有率が非常に低いために測定ができず、代わりに試料1に含まれる斜方輝石を測定の対象とすることとなった。

②測定結果

屈折率の測定結果を表62に示す。この表には、宮城県北部周辺の後期更新世以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。

試料1に含まれる火山ガラス (n , 33粒子) と斜方輝石 (γ , 30粒子) の屈折率は、各々 1.497 – 1.508 と 1.707 – 1.717 である。それぞれの値は bimodal 組成となっており、前者は 1.497 – 1.503 (25粒子) と 1.505 – 1.508 (8粒子) からなる。また、後者は、1.708 (2粒子) と 1.711 – 1.717 (28粒子) からなる。

試料2に含まれる火山ガラス (36粒子) と斜方輝石 (30粒子) の屈折率は、各々 1.496 – 1.508 と 1.711 – 1.724 である。試料3、試料4、試料5、試料6に含まれる火山ガラスの屈折率は、順に 1.497 – 1.508 (36粒子)、1.499 – 1.507 (32粒子)、1.498 – 1.506 (36粒子)、1.498 – 1.507 (37粒子) である。

試料	火山ガラス		斜方輝石		文献
	屈折率 (n)	測定点数	屈折率 (γ)	測定点数	
山王遺跡・試料1	1.497 – 1.508 (1.497 – 1.503) (1.505 – 1.508)	33 (25) (8)	1.708 – 1.717 (1.708) (1.711 – 1.717)	30 (2) (28)	本報告
山王遺跡・試料2	1.496 – 1.508	36	1.711 – 1.724	30	本報告
山王遺跡・試料3	1.497 – 1.508	36			本報告
山王遺跡・試料4	1.499 – 1.507	32			本報告
山王遺跡・試料5	1.498 – 1.506	36			本報告
山王遺跡・試料6	1.498 – 1.507	37			本報告

仙台平野周辺の指標テフラ（後期更新世以降）

浅間和田 (As – Kh)	未詳	1.706 – 1.710	早田 (1996)
十和田山 a (To – a)	岩子周辺 宮城周辺	1.500 – 1.508 1.503 – 1.507	町田・新井 (2011)
雄名二ツ添伊香保 (Hr – FP)		1.501 – 1.504	町田・新井 (2011)
雄名二ツ添湯治 (Hr – FA)		1.500 – 1.502 1.498 – 1.505	町田・新井 (2011)
沼沢湖 (Nm – N)		1.500 – 1.505	町田・新井 (2011)
十和田山塊 (To – Cu)		1.508 – 1.512	町田・新井 (2011)
駒折尾花沢 (Hj – O)		1.499 – 1.504	町田・新井 (2011)
十和田八ツ (To – H)		1.502 – 1.509	町田・新井 (2011)
浅間和田黄色 (As – YP)		1.501 – 1.505	町田・新井 (2011)
鳴子湯治上原 (Nk – U)		1.492 – 1.500	町田・新井 (2011)
始良田 (AT)		1.498 – 1.501	町田・新井 (2011)
十和田大不動 (To – Of)		1.505 – 1.511	町田・新井 (2011)
鳴子鶴沢 (Nr – Y)		1.500 – 1.503	町田・新井 (2011)
阿蘇 4 (Aso – 4)		1.506 – 1.510	町田・新井 (2011)
鳴子鶴沢 (Nr – N)		1.500 – 1.502	町田・新井 (2011)
駒折尾花沢 (Hj – Kth)		1.499 – 1.502	町田・新井 (2011)
三瓶木次 (SK)		1.496 – 1.498	町田・新井 (2011)
洞爺 (Toya)		1.494 – 1.498	町田・新井 (2011)

本報告における屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定法 (増原 1993) による。

表62 屈折率測定結果

(5) 考察

テフラ分析の対象となった試料1～6には、含まれるテフラ粒子が、1) 非常に細粒である、2) 火山ガラスの形態が多様である、3) 火山ガラスの中に巨大噴火に由来する可能性が高いバブル型ガラスが含まれている、4) 重鉱物として斜方輝石や單斜輝石のほかに角閃石が含まれる、5) 火山ガラスの屈折率のrangeが広い、という共通した特徴が認められる。試料1～6が採取された凝灰質堆積物がテフラの一次堆積層とすると、今回の分析で明らかになった特徴をもつテフラ層は、これまでに仙台平野周辺では知られていない。

火山ガラスの形態組成や屈折率特性、そして重鉱物の中で斜方輝石や單斜輝石が比較的高率を占める点をみると、915年に十和田火山から噴出した十和田a火山灰 (To-a, 大池1972, 町田ほか1981)、あるいはそれに由来するテフラ粒子が多く含まれる二次堆積物の可能性が考えられる。火山ガラスの水和が進んでいない場合には、低い屈折率をもつ火山ガラスが残存していることがある。仙台平野周辺において、To-aはもっともよく認められるテフラであることから、ほかの土層あるいは遺物包含層や遺構との層位関係の検証を実施する必要がある。

しかしながら、1)～6)の特徴のほかに、試料中の角閃石の中に青緑色のものや、カミングトン閃石が少量含まれることなどを合わせて、総合的に考えると、試料1～6は複数のテフラに由来するテフラの二次堆積物の可能性が高いように思われる。

宮城県北部の中期更新世以降のテフラについては、層序や岩石記載の特徴の把握がおこなわれている(早田2002)。しかしながら仙台平野周辺では、後期更新世以降のテフラの層序や岩石記載の特徴についてはほぼわかっているものの(町田・新井2011など)、中期更新世以前のテフラに関しては不明な点が多い。そこで、ここでは、後期更新世以降のテフラの特徴と比較しながら、試料1～6に含まれるテフラ粒子の起源を探ることにする。

試料1～6に含まれる火山ガラスの形態や屈折率特性、さらに重鉱物の組み合わせから、試料に含まれる可能性がもっとも多いテフラは、約4.1～6.3万年前に鳴子火山から噴出した鳴子柳沢テフラ (Nr-Y, 早田1989a, 町田・新井1992, 2003, 2011) であろう。とくに、試料2には、Nr-Yに含まれる比較的屈折率が高い角閃石も含まれている。また、Nr-Yよりやや屈折率が低い火山ガラスの存在や、斜方輝石の屈折率特性からは、約1～2万年前の鳴子潟沼上原テフラ (Nr-KU, 早田1989a, 町田・新井1992, 2003, 2011) や、約1.1～1.2万年前の肘折尾花沢テフラ (Hj-O, 豊島・石田1983, 早田1989a, 町田・新井1992, 2003, 2011) の混在していることが示唆される。

これらのほかにも、火山ガラスの形態組成や、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率特性からは、約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間草津黄色軽石 (As-K, 荒牧1968, 新井1979, 町田・新井1992) を含む浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井1962, 町田・新井1992など)、約6,000年前に十和田火山から噴出した十和田中振テフラ (To-Cu, 大池ほか1966, 早川1983, 町田・新井1992など)、約5,000年前に沼沢火山から噴出した沼沢湖テフラ (Nm-N, 只見川第四紀研究グループ1966a, 1966b, 町田・新井1992, 山元1995など)、また無色透明のバブル型ガラスの存在と火山ガラスの屈折率特性からは、約2.8～3万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰 (AT, 町田・

新井1976, 1992, 2003, 2011など)などが混在している可能性が指摘される。

ほかに、試料1については、ごくわずかではあるが白色のスponジ状軽石型ガラスや褐色の角閃石が含まれていること、さらに斜方輝石の中に屈折率(γ)が1.708程度のものが認められることから、古墳時代の榛名系テフラが混在している可能性を指摘できる。すでに、本遺跡周辺では6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ッ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井1962, 坂口1986, 早田1989b, 町田・新井2011など)が発見されている(町田ほか1984)。その詳細に関しては不明な点が多いが、ほかに、報告者が分析した例では、仙台市沼向遺跡において、古墳の周溝覆土中に、Hr-FPに同定される可能性が高い桃白色細粒火山灰層(層厚0.2cm)を認めたことがある(早田2000)。

以上のことから、試料1が採取されたF区SI11051については、仮に試料1付近に降灰層準があるとすれば、Hr-FAより下位の可能性が考えられる。ただし、濃集の程度は低く、また同定精度は高くなないことから、火山灰層様の層相をもつ堆積物に限らず、クリプト・テフラとして指標テフラの降灰層準を検出するために、今後は、堆積物の状況が良い地点において、連続的に採取した試料からテフラの降灰層準を求める分析法を検討する必要がある。もちろん、試料採取に合わせて、調査地点周辺のテフラの層相に詳しい人材との共同での土層や堆積物の詳細観察が必要である。

(6)まとめ

多賀城市山王遺跡の発掘調査の際に検出された凝灰質堆積物6試料を対象に、テフラ検出分析、テフラ組成分析(火山ガラス比分析・重鉱物組成分析)、火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定を実施した。その結果、採取された試料については、十和田系テフラのほか、鳴子系、肘折系、沼沢系、浅間系などのテフラ粒子が混在している可能性が指摘された。そのうち、F区SI11051覆土から採取された試料1については、同定精度が高いとはいえないものの、榛名二ッ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)が混在している可能性がある。

註

註1 黒色で全体的に光沢をもつものを不透明鉱物とした。その大部分は磁鉄鉱と考えられる。

註2 実際には、検鏡の段階で、多くの試料において砂分や重鉱物の含有率が非常に低いことが判明したことから、純度は落とさずさらにより多量の試料の洗浄・乾燥処理をおこなった。最終的な試料の処理量を表59に示した。そして得られた1/4-1/8mm粒子全体の検鏡を実施しても、試料3~6については砂分や重鉱物の含有率が低いことから、重鉱物の計数目標である250粒子の検鏡を実施できなかった。そのため、これらの試料における重鉱物の含有率記載に際して、1%未満を四捨五入している。

引用文献

- 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10 pp.1~79
- 新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』No.53 pp.41~52
- 新井房夫 1993 「温度一定型屈折率測定法」『第四紀試料分析法2』日本第四紀学会編 東京大学出版会 pp.138~149

- 荒牧重雄 1968「浅間火山の地質」『地団研専報』No.14 pp.1~45
- 壇原 徹 1993「温度変化型屈折率測定法」『第四紀研究試料分析法2』日本第四紀学会編 pp.149~158
- 早川由紀夫 1983「十和田中擴テフラ層の分布、粒度、組成、年代」『火山』28 pp.263~273
- 町田 洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義—」『科学』46 pp.339~347
- 町田 洋・新井房夫 1992「火山灰アトラス」東京大学出版会 pp.276
- 町田 洋・新井房夫 2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版会 pp.336
- 町田 洋・新井房夫 2011『新編火山灰アトラス』(第2刷) 東京大学出版会 pp.336
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51 pp.562~569
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984「テフラと日本考古学」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』古文化財編集委員会編 pp.865~928
- 大池昭二 1972「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』11 pp.232~233
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之 1966「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究』5 pp.29~35
- 坂口 一 1986「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会編 pp.103~119
- 早田 勉 1989a「テフロクロノロジーによる前期旧石器時代遺物包含層の検討」『第四紀研究』28 pp.269~282
- 早田 勉 1989b「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27 pp.297~312
- 早田 勉 1996「関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて－」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』7 pp.256~267
- 早田 勉 2000「沼向遺跡、中野高柳遺跡におけるテフラ分析」『沼向遺跡第1～3次調査』仙台市教育委員会編 pp.108~111
- 早田 勉 2002「火山灰層序からみた築館町上高森遺跡における石器検出層準の層位」『宮城県築館町上高森遺跡発掘調査報告書』 pp.69~85
- 早田 勉 2014「渋川市有馬寺畠遺跡におけるテフラ分析」『有馬寺畠遺跡』渋川市教育委員会編 pp.197~211
- 只見川第四紀研究グループ 1966a「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の¹⁴C年代－日本の第四紀層の¹⁴C年代XXVI－」『地球科学』82 pp.8~9
- 只見川第四紀研究グループ 1966b「只見川・阿賀野川流域の第四系の編年－とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について」『第四紀』8 pp.76~79
- 豊島正幸・石田琢二 1983「座敷乱木遺跡周辺の地形地質および火山灰」『宮城県岩出山町座敷乱木遺跡発掘調査報告書III』石器文化談話会編 pp.72~79
- 山元孝弘 1995「沼沢火山における火碎流噴火の多様性：沼沢湖および水沼火碎堆積物の層序」『火山』40 pp.67~81

2. 山王遺跡から出土した大型植物遺体

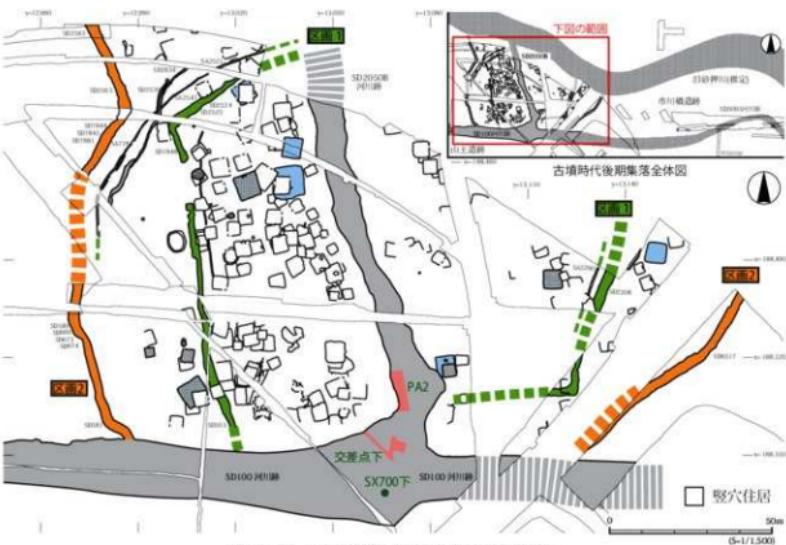
吉川純子（古代の森研究会）

（1）はじめに

山王遺跡は多賀城市南宮八幡一帯に位置する弥生時代から江戸時代の集落跡である。本遺跡の古墳時代後期（7世紀前半頃）には100軒を越える竪穴住居を有する大集落が形成された。この集落は東西方向に流れる旧砂押川の流路にはさまれ、西は北の河川から分岐した支流により東西に分割されている。本遺跡の南の河川SD100と旧砂押川から分岐した支流SD2050Bとの合流点付近を調査したところカキを主体とする貝層（3層）が確認され、木製品や骨角器とともに果実や種子などが多数検出された。そこで7世紀前半頃の植物利用状況と集落周辺の環境を解明する目的でこれら大型植物遺体の分析をおこなった。

（2）試料と同定結果

分析試料はSD100河川跡のSX700下地点の3層が2試料、SD100の交差点下地点の3層が26試料、SD100の交差点下地点の4層（青灰色砂層で本層も7世紀前半）が2試料、SD2050BのPA2地点の3層が2試料、合計32試料である（図版634）。分析に供した試料は、採取された堆積物を発掘担当者により4mmと2mmの篩を用いて水洗され植物部位と思われる遺存体が選別された状態である。大型植物遺体は肉眼及び実体顕微鏡で観察・同定した。本遺跡から出土した大型植物遺体の同定結果を表63～65に示す。表示は2mmと4mmのメッシュ別にし、数値は完形種実の個数、括弧内の数値



図版634 古墳時代後期の集落と試料採取地点

分類群名	試料番号	38	41	56	77	97	116	124
		過溝 SD100	SD100	SD100	SD100	SD100	SD100	SD100
	地点 SK700 下	SK700 下	交差点下	交差点下	交差点下	交差点下	交差点下	交差点下
	層位 3層	3層	3層	3層	3層	3層	3層	3層
	出土部位 / 種目	2mm	2mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm
木本								
マツ臘單維管束垂葉	種子	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	葉	-	-	-	-	-	-	-
ネズミサシ属	種子	-	-	-	-	-	-	-
ホオノキ	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-
アワガキ属	種子	-	-	-	-	-	-	-
ヤマツドウ	種子	-	-	-	-	-	1	-
ブナ属	種子	-	-	-	-	-	(1)	-
ノブドウ	種子	-	-	-	-	-	(1)	-
フジ属	芽	-	-	-	1	-	-	-
モモ	核	-	-	-	(1)	(1)	-	-
ウメ	核	-	-	(1)	-	-	-	(1)
サクラ属	核	-	-	(1)	-	-	-	-
クマガヤ属	内果皮	-	-	1	-	-	-	-
クリ	果皮	-	-	-	-	(7)	-	-
アズ科	果皮	-	-	-	-	-	-	-
オニグルミ	内果皮	-	-	-	(2)	-	(1)	-
サワルムジ	内果皮	-	-	-	-	-	-	-
アサガ	果実	-	-	-	1	-	1	-
サンショウ	内果皮	-	-	2	8 (9)	33 (3)	3	1
カラマツサンショウ	内果皮	-	-	1	2	1 (1)	-	(2)
ミズキ	内果皮	-	-	-	-	-	1	-
クマツミズキ	内果皮	-	-	-	-	1 (1)	-	-
エゴノキ	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	-
ガム樹	芽	-	-	-	-	-	-	-
草本								
コウホネ属	種子	1	1	-	-	-	-	-
ヒルムシロ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-
ミクダ属	内果皮	-	-	-	1	-	-	-
ウキヤガラ	果実	-	-	-	-	-	-	-
イヌ	炭化頸果	-	-	-	-	-	1	-
	炭化胚乳頸残	-	-	-	3	-	-	-
	炭化胚乳	-	1	-	1	-	-	3
	炭化胚乳頸鰓	-	-	-	11 (12)	5	10 (1)	1 (3)
オオムギ	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-
コムギ	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-
キビ	炭化頸果	-	-	-	-	-	-	-
カナダグラ	果実	-	1	-	1	-	2	2
スマツメ属	炭化種実	-	-	-	-	-	-	-
ヒョウタン	種子	(1)	-	-	1	29	-	4
メロン仲間	種子	(1)	1	1	2	15	5	2 (2)
トウガラ	種子	-	-	-	-	-	-	2
ヤナギタデ	果実	-	-	-	-	-	-	-
ハバチア近似種	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-
イシグロカワ	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	炭化果実	-	-	-	1	-	-	-
ツワツネソウ	種子	-	-	1	-	-	-	1
エゴマ	果実	-	-	-	-	-	-	-
オモモミ	種子	-	-	-	-	-	-	-
その他								
桃葡萄	子座	-	-	-	-	-	1	-
不明 A	炭化種実	-	-	-	-	-	-	-
不明 C	種子	-	-	-	-	-	-	-

表63 山王遺跡出土大型植物遺体一覧表1

分類群名	試料番号 遺構 地点 層位 出土部位	125		160		172		190		207		210	
		SD100 交差点下 3層		SD100 交差点下 3層		SD100 交差点下 3層		SD100 交差点下 3層		SD100 交差点下 3層		SD100 交差点下 3層	
		2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	2mm	2mm	2mm	2mm	4mm
木本													
マツノ單離管束葉腋属	種子	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モミ属	葉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ネズミサシ属	種子	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ホオノキ属	炭化種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アワブキ属	種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヤマブドウ属	種子	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	1	—
ブドウ属	種子	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
ノブドウ属	種子	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
フジ属	芽	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モモ属	核	—	(2)	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
ウメ属	核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サクラ属	核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クマガナギ属	内果皮	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	1	—
クリ属	果皮	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ブナ科	果皮	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オニグルミ属	内果皮	—	(2)	—	4	—	(11)	—	—	—	—	—	—
サワグルミ属	内果皮	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アサガ	果実	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サンショウ属	内果皮	5	—	21 (3)	—	77 (15)	—	—	—	4 (4)	17 (14)	—	—
カラマツサンショウ属	内果皮	—	—	1 (1)	—	4 (2)	—	—	1	—	—	—	—
ミズキ属	内果皮	—	(1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タマノミズキ属	内果皮	3	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—
エゴノキ属	炭化内果皮	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ガマズミ属	内果皮	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
広葉樹	芽	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—
草本													
コウホネ属	種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヒルムシロ属	内果皮	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ユリ科	炭化種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミクダ属	内果皮	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
ウキナガラ	果実	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
イネ	炭化穀果	—	—	1	—	5	—	—	—	—	—	—	—
	炭化胚乳	—	—	4	—	9	—	—	—	—	—	1	—
	炭化胚乳	4	—	4	—	34	—	—	—	—	—	4	—
	炭化胚乳殘部	8	—	23 (8)	—	84 (37)	—	3 (1)	—	9 (9)	—	—	—
オオムギ	炭化種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
コムギ	炭化種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
エノコログサ属	炭化穀果	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カナヅチ属	果実	—	—	2 (4)	—	10 (21)	—	(1)	(1)	3 (1)	—	—	—
ソラマメ属	炭化種子	—	—	3	—	1	—	—	—	—	—	—	—
ヒヨウタン	種子	—	2	—	5 (1)	—	35	—	—	—	—	15	—
メロコ仲間	種子	1	1	4	4 (1)	336 (73)	69 (2)	(1)	4 (1)	60 (12)	5	—	—
トウガラシ	種子	—	—	—	1	—	—	—	—	—	(1)	—	—
ヤナギタデ	果実	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハナタデ近似種	炭化果実	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イシノカワ	炭化果実	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—
タデ属	炭化果実	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツワツキソウ属	種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
エゴマ属	果実	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オナモミ	種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他													
核果類	子座	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明A	炭化種子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明C	種子	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—

表64 山王遺跡出土大型植物遺体一覧表2

分類群名	試料番号	223		231		240		283		288	
		遺構	SD100	遺構	SD100	遺構	SD100	遺構	SD2050B	遺構	SD100
	地点	交叉点下		交叉点下		交叉点下		交叉点下	PA2	交叉点下	
	層位	4層		3層		3層		3層		3層	
	出土部位	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm
木本											
マツ属単被果束葉属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	葉	-	-	-	-	-	-	-	-	(1)	-
ネズミサシ属	種子	-	-	-	-	(1)	-	1	-	-	-
ホウノキ属	炭化種子	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
アブチキ属	種子	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヤマフク属	種子	9	-	-	-	-	-	3	-	1	-
ブドウ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	1 (1)	-
ノブドウ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブジ属	芽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モモ	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウメ	核	-	-	-	-	-	-	2 (3)	-	-	-
サクラ属	核	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
クワヤナギ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ	果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ科	果皮	-	-	(7)	-	-	-	-	-	-	-
オニグルミ属	内果皮	-	-	-	-	-	(2)	-	(5)	-	-
サワグルミ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	2 (1)	-	-	-
アサガ	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	内果皮	36 (18)	-	3	-	16	-	81 (6)	1	19 (3)	-
カラマツサンショウ属	内果皮	2 (1)	-	1	-	4	-	1 (2)	-	-	-
ミズキ	内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマノミズキ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	1 (1)	-	1	-
エゴノキ属	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	(1)	1	-	-
ガマズミ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	(1)	-
広葉樹	芽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本											
コウホネ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒムシロ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ユリ科	炭化種子	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミクリ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ウカヤガラ	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ	炭化穀類	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	炭化胚乳類	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
	炭化胚乳	17	-	3	-	-	-	13	-	2	-
オオムギ	炭化胚乳類	30 (8)	-	5	(3)	-	10 (14)	-	1 (7)	-	-
コムギ	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	(1)	-	-
エノコログサ属	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	(1)	-	-
カラムグラ	果実	10 (7)	-	-	-	1	-	5 (11)	-	(4)	-
ソラマメ属	炭化種実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒヨウタン	種子	(4)	25 (6)	-	-	1	(3)	125 (7)	-	1	-
メロンズ仲間	種子	96 (40)	4	-	-	5 (4)	-	72 (31)	8	4	3
トウガラ	種子	-	-	-	1	-	1	-	5 (1)	-	-
ヤナギタデ	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	(2)	-
ハバタデ近似種	炭化果実	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イシミカワ	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツリフネソウ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴマ	果実	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
オナモミ	胞子	-	-	-	-	-	-	1 (1)	-	1	-
その他											
核菌類	子座	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
不明A	炭化種実	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-
不明C	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表65 山王遺跡出土大型植物遺体一覧表3

は半分に割れた状態を含む破片の個数である。木本は25分類群、草本は21分類群、菌類は1分類群、不明種を2種出土した。

4層の大型植物遺体：青灰色砂層の4層はSD100河川跡の交差点下地点で1試料分析し、この堆積物からは木本のヤマブドウ、ブナ科、サンショウ、カラスザンショウ、草本のユリ科、イネ、カナムグラ、ヒヨウタン、メロン仲間、ハナタデ近似種を出土し、メロン仲間、ヒヨウタン、サンショウの個数が多かった。

3層の大型植物遺体：カキを主体とした貝塚とされる3層の堆積物はSD100河川跡とSD2050B河川跡から採取された。SD100は2地点の試料があり、SX700下地点からは木本はカラスザンショウのみ、草本はコウホネ属とイネ、カナムグラ、ヒヨウタン、メロン仲間を出土したがいずれも少数である。SD100の交差点下地点からは木本のマツ属単維管束亜属、モミ属、ネズミサシ属、ヤマブドウ、ブドウ属、ノブドウ、フジ属、モモ、ウメ、サクラ属、クマヤナギ属、クリ、オニグルミ、サワグルミ、アサダ、サンショウ、カラスザンショウ、ミズキ、クマノミズキ、ガマズミ属、広葉樹の芽を出土した。草本はミクリ属、ウキヤガラ、イネ、オオムギ、コムギ、キビ、カナムグラ、ヒヨウタン、メロン仲間、トウガン、ヤナギタデ、イシミカワ、タデ属、ツリフネソウ、オナモミ、核菌綱を出土した。この地点ではサンショウ、炭化イネ、カナムグラ、ヒヨウタン、メロン仲間が多かった。

SD2050B河川跡のPA2地点3層からは木本のネズミサシ属、ホオノキ、アワブキ属、ヤマブドウ、ウメ、サクラ属、オニグルミ、サワグルミ、サンショウ、カラスザンショウ、クマノミズキ、エゴノキを出土し、草本のヒルムシロ属、イネ、カナムグラ、ヒヨウタン、メロン仲間、トウガン、エゴマ、オナモミを出土し、サンショウとイネ、ヒヨウタン、メロン仲間を多く出土した。

(3) 考察

本遺跡で出土した大型植物遺体を地点・層位別に集計し、さらに利用状況や植生などの特性別に表66に示した。その結果山王遺跡の集落に流れる流路からは多数の利用可能植物種実とともに、水域に生育する種類、半日陰の温潤地に生育する種類、落葉広葉樹林を形成する種類、樹木などに絡むる植物、針葉樹など多様な植物の種実が堆積していた。そこでまず人間による植物利用に関して考察を試みる。

植物利用：表66の上段に種実そのものを食用や道具などで利用する種類をまとめた。まず下位の4層では炭化したイネ、ヒヨウタン、メロン仲間とともにサンショウ、ヤマブドウを出土した。イネはすべて炭化しており穎果や焼け膨れた胚乳など様々な状態で出土している。4層は砂層であることから流水による堆積が速く堆積した植物遺体の量が少なかったことが考えられる。これらの植物は利用したあと廃棄ないし砂とともに流れ込んだものと考えられる。3層はカキ主体の土器や動物骨が多い貝塚とされ、出土した種実はほとんどが食料残渣と考えられる。ヤマブドウ、モモ、ウメ、クリ、オニグルミ、サンショウ、メロン仲間、トウガンは可食部利用後の残渣を廃棄したものと考えられ、一方で炭化したイネ、オオムギ、コムギ、エゴマは可食部分がそのまま堆積している。イネは穎果や穎が残っている胚乳も見られることから、穎の状態で保管していたうち不用となった穀類を焼却し廃棄したことと考えられる。

分類群名	遺構 地点 層位 出土部位 / 状況	SD100 交差点下		SD100 SX700 下		SD100 交差点下		SD2050B PA2	
		4層 = 青灰色砂層 完形	半分 / 破片	3層 = 貝層 完形	半分 / 破片	3層 = 貝層 完形	半分 / 破片	3層 = 貝層 完形	半分 / 破片
可食・利用植物									
ヤマブドウ	種子	9	—	—	—	6	—	3	—
モモ	核	—	—	—	—	1	4	—	—
クメ	核	—	—	—	—	—	2	2	3
クリ	果皮	—	—	—	—	—	7	—	—
オニグリミ	内果皮	—	—	—	—	4	18	—	5
サンショウ	内果皮	36	18	—	—	209	51	82	6
イネ	炭化胚乳穀殻	3	—	—	—	7	—	—	—
	炭化胚乳穀殻	—	—	—	—	21	—	—	—
	炭化胚乳	17	—	1	—	55	—	13	—
オオムギ	炭化種子	—	—	—	—	—	1	—	—
コムギ	炭化種子	—	—	—	—	—	1	—	—
キビ	炭化穀殼	—	—	—	—	1	—	—	—
ヒヨウタン	種子	25	10	—	1	95	1	125	10
メロン仲間	種子	100	40	1	1	526	97	80	31
トウウツン	種子	—	—	—	—	5	1	5	1
エゴマ	果実	—	—	—	—	—	—	1	—
園地・水域の植物									
コウセキ属	種子	—	—	2	—	—	—	—	—
ヒルシロ属	内果皮	—	—	—	—	—	—	1	—
ミクリ属	内果皮	—	—	—	—	3	—	—	—
ウサギガラ	果実	—	—	—	—	1	—	—	—
イシシカツ	炭化果実	—	—	—	—	2	—	—	—
ヤナギナデ	果実	—	—	—	—	—	2	—	—
沢原・半日陰の湿潤地の植物									
サワハシ属	内果皮	—	—	—	—	1	—	2	1
ツリハシソウ	種子	—	—	—	—	2	—	—	—
つる植物									
ブドウ属	種子	—	—	—	—	3	2	—	—
ノブドウ	種子	—	—	—	—	2	1	—	—
フジ属	芽	—	—	—	—	1	—	—	—
クマツナギ属	内果皮	—	—	—	—	4	—	—	—
カラムグラ	果実	10	7	1	—	23	32	5	11
針葉樹									
マツモトモチヤマヒ	種子	—	—	—	—	1	—	—	—
モミ属	葉	—	—	—	—	—	1	—	—
ネズミサシ属	種子	—	—	—	—	1	1	1	—
落葉広葉樹									
ホオノキ	炭化種子	—	—	—	—	—	—	2	—
アワガキ属	種子	—	—	—	—	—	—	1	—
サクランボ属	核	—	—	—	—	—	1	1	—
アサガ	果実	—	—	—	—	2	—	—	—
カラスザンショウ	内果皮	2	1	1	—	11	6	1	2
ミズキ	内果皮	—	—	—	—	1	1	—	—
クマツナギ	内果皮	—	—	—	—	7	1	1	1
エゴノキ	炭化内果皮	—	—	—	—	—	—	1	—
ガマズミ属	内果皮	—	—	—	—	1	1	—	—
その他広葉樹									
ブナ科	果皮	—	7	—	—	—	—	—	—
広葉樹	芽	—	—	—	—	2	—	—	—
その他草本									
ユリ科	炭化種子	1	—	—	—	—	—	—	—
ソラマメ属	炭化種子	—	—	—	—	4	—	—	—
ハバタケ近似種	炭化果実	1	—	—	—	—	—	—	—
タデ属	炭化果実	—	—	—	—	1	—	—	—
オナモミ	種包	—	—	—	—	1	—	1	1
その他									
核果屬	子座	—	—	—	—	2	—	—	—
不明A	炭化種子	—	—	—	—	1	—	2	—
不明C	種子	—	—	—	—	1	—	—	—

表66 山王遺跡出土大型植物遺体 地点・層位別集計表

本遺跡の炭化穀類は圧倒的にイネが多く、平成5年度の調査においてもSD2050B河川跡から6世紀後半～7世紀前半に大量のイネが出土しているが雑穀類はキビ属が少量出土したのみであった（阿部・辻2001）。本遺跡の近隣で同時期の耕作地帯とみられる仙台市沼向遺跡では住居跡のほか井戸跡や溝跡、用途不明遺構など多数の遺構の分析をおこなっているが、水田跡とみられる遺構はあるものの古墳時代後期頃には炭化イネはごく一部の住居跡でやや多く検出されるのみでイネの出土数はごくわずかでありオオムギなど雑穀類も少量である（吉川2010）。山王遺跡では大集落成立の前時期である古墳時代中期にはすでに鍛冶施設を中心とした集落が形成されていて、近隣で生産された穀類はこの頃からこうした政治的拠点集落に継続的に運搬され消費されていたと考えられる。

今回は分析試料が少なかったこともありモモの出土数は少数であったが、「山王遺跡八幡地区の調査2」の報告では出土した炭化モモ核が多く（阿部・辻2001）、沼向遺跡では炭化していないモモ核が多いことから、生産地から運ばれたモモが拠点集落で薬用や呪術のために利用されたことが考えられる。またメロン仲間種子も山王遺跡では多く出土するが生産地とみられる沼向遺跡では少量の出土にとどまっている。沼向遺跡では古墳前期後半までは潟湖や湿地が大半を占めているが、山王遺跡で豪族居館が形成され始める古墳中期頃から水田や畑遺構が拡大しており、山王遺跡の拠点集落形成は周辺の土地利用に大きな影響を及ぼしていたことが推測される。

周辺の植生：環境指標種実としては、やや水深がある緩い流速の水域に生育するコウホネ属、ヒルムシロ属と低湿地やごく浅い水域に生育するミクリ属、ウキヤガラ、ヤナギタデ、イシミカワを出土し、これらは溝や流路の浅い部分に少数生育していた可能性もあるが、出土数がかなり少ないとから上流から流されてきたものが堆積したと考えられる。また、山間の沢筋などや半日陰に生育するサワグルミ、ツリフネソウも出土したがこれらも僅かである。つる植物はやや多く、食用のヤマブドウも含め、ノブドウやクマヤナギ属とともにカナムグラを多く出土し、これらはもともと林縁に生育するが人工的な構築物にも絡んで生育し流路周辺の日当たりは良好であったと考えられる。木本の種実は、河川敷などに比較的多いカラスザンショウがやや多いがミズキ、クマノミズキ、ホオノキなど林分を構成する種類が出土するものの個数は少ない。これは堆積物が貝層という人為的廃棄物であることが要因と思われるが、流路周辺にもともと林分面積が少なく種実等の供給量が少なかったことも考えられる。

（4）出土した大型植物遺体の特筆すべき分類群の形態記載（図版635・636）

ヤマブドウ (*Vitis coignetiae* Pulliat ex Planch.)：種子は丸みを帯びた三角形で鈍頭の頂部は少し丸く膨らみ、腹面中央は上下方向に稜状に突出し稜の両側に上下方向に長細い楕円形の孔が2つあり、背面には中央下半分に線状付着物があり先端に円形の盤状付着物がある。ヤマブドウの場合ブドウ属の他種と比較すると盤が整った円で盤内部が丸くへこみ、さらに中心に孔が開いていることが多く、盤の周囲の種子壁がやや盛り上がる場合が多い。

サンショウ (*Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.)：種子はゆがんだ球形で黒褐色、堅くやや厚い壁で薄い外種皮が付着している物も見られる。種子の一端に縱方向に種子長の3分の1程度のやや長い乳状のへそがありへそから長軸方向に丸みを帯びた稜が続く。表面はやや細かいやや揃った網目状で網目



1. マツ属複雑管束亞族・種子 2. モミ属・葉片 3. ネズミサシ属・種子 4. ホオノキ・種子 5. アワブキ属・種子
 6. ヤマブドウ・種子 7. ノブドウ・種子 8. フジ属・芽 9. モモ・核 10. ウメ・核 11. サクラ属・核 12. クマヤナギ属・内果皮 13. クリ・果皮 14. オニグルミ・内果皮片 15. サワグルミ・内果皮 16. アサダ・果実 17. サンショウ・種子 18. カラスサンショウ・種子 19. ミズキ・内果皮 20. クマノミズキ・内果皮 21. エゴノキ・内果皮 22. ガマズミ属・内果皮 4.5,10,11,14,15,18,21はSD2050B、ほかはSD100出土。スケールは1mm、ただし9,10,13,14は10mm。

図版635 山王遺跡出土大型植物遺体



23. コウホネ属・種子 24. ヒルムシロ属・内果皮 25. ユリ科・種子 26. ミクリ属・内果皮 27. ウキヤガラ・果実 28. イネ・半炭化穎果 29. イネ・炭化胚乳 30. イネ・炭化胚乳焼け跡 31. オオムギ・炭化種子 32. コムギ・炭化種子 33. キビ・炭化穎果 34. カナムグラ・種子 35. ヒョウタン・種子 36. メロン仲間・種子 37. トウガン・種子 38. ソラマメ属・炭化種子 39. ヤナギタデ・果実 40. ハナタデ近似種・果実 41. イシミカワ・炭化果実 42. タテ属・炭化果実 43. ツリフネソウ・種子 44. エゴマ・果実 45. オナモミ・総包 46. 核菌属・子座 47. 不明A・炭化種実 48. 不明C・種実 24,34,35,37,44,45 是 SD2050B, 25,28,40 是 SD100 の 4 層、ほかは SD100 の 3 層出土。スケールは 1 mm。

図版636 山王遺跡出土大型植物遺体2

はわずかに突出しているが高さが揃っているため外形はほとんど平滑に見える。

カラスザンショウ (*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.)：種子はゆがんだ球形で種子の腹面ほぼ全長に長い孔状のへそがあく。へそ部分は種子から突出しへそ端はときに瘤状に突出することがある。表面はサンショウよりかなり粗い網目で高さが揃っていないため外形がごつごつして見える。

コウホネ属 (*Nuphar*)：種子は楕円形で基部が盤状に突出し小孔があいている。表面は平滑で光沢がある暗褐色で微細な多角形の網目がある。

ユリ科 (Liliaceae)：出土した種子は炭化していて高さが3.5mm、球形で頂部が少し尖って突出し、基部は破れたような小孔がある。上下方向に大変細く少し波打った筋がやや密に分布する。

オオムギ (*Hordeum vulgare* L.)：種子は上面観が円形で腹面中央に筋状の溝があり頂部が丸い。幅より厚さの方が薄い。完形であれば鋭突した基部に楕円形の胚があるが出土した種子は基部が欠落している。

コムギ (*Triticum aestivum* L.)：種子は上面観が円形で横面観が楕円形厚さと幅がほぼ同じで腹面中央に筋状の溝が走る。

キビ (*Panicum miliaceum* L.)：炭化した穎果で

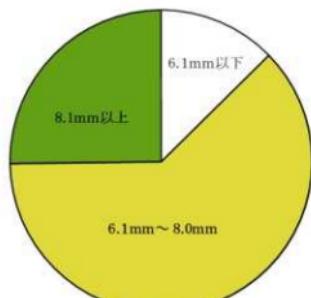
一部内穎が欠落している。高さは2.6mm、卵形で基部はやや膨らみ頂部はやや鋭く尖る。厚さと幅がほぼ同じで、穎表面は平滑で強い光沢がある。

ソラマメ属 (*Vicia*)：炭化した種子は幅2.8mmで3軸が同長のほぼ球形で種子半周に及ぶ帯状のへそがある。焼けて種皮の一部が裂けている。ソラマメ属の草フジ、ヒメヨツバハギなどに似る。

キュウリ属メロン仲間 (*Cucumis melo* L.)：種子は完形であれば下端が細い楕円形で厚さは薄い。白黄褐色で表面に細かい方形の規則正しい網目模様がある。出土した種子103個について種子長を計測した結果、9.5-3.5mmで平均は7.3mmであった。比較的大きい種子が多く、雑草メロン型とされる6mm以下が13%、マクワウリ・シロウリ型が62%、種子が大きいモルディカメロン型が25%とやや多かった（図版637）。阿部・辻2001でメロン仲間の計測をおこなっており、今回の計測値でも3つの型の出現率は類似していた。

ヒヨウタン (*Lagenaria siceraria* L.)：種子は長い逆三角形の基部を平坦に切った形で、やや厚くやや固くざらつき、表面は黄褐色で縦に2本の濃色の稜があり、縫合線上の基部から少し上部両側に突起がある。出土した種子のうち65個について種子長を計測した結果、14.4-9.6mmで平均は11.8mmであった。

トウガラ (*Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn.)：種子はラケット型で周囲に帯状の縁取りがあり、表面はざらついで淡褐色から褐色、基部近くの縁取りの一方が小さく三角形に突出する。出土した種子のうち10個の種子長を計測した結果12.3-8.9mmで平均は11mmであった。



図版637 メロン仲間種子長3型の出土比率

ヤナギタデ (*Persicaria hydropiper* L.)：果実は上下が突出した卵形で2面形、果皮中央がやや膨らみ、果皮は黒色でやや粗い多角形の網目がある。

ツリフネソウ (*Impatiens textorii* Miq.)：種子は楕円形でへそ部分が丸く突出している。表面は黒色で光沢があり、うねるようなやや粗い網目が全面に分布するが網目の途中が切れたようになっている特徴からツリフネソウと同定できる。

エゴマ (*Perilla frutescens* (L.) Britton var. *frutescens*)：果実は球形で全面に紐を貼ったようなやや粗い網目がある。果実基部は鴨の嘴状に突出し、腹面の基部周囲は丸く網目が無い部分がある。エゴマは同属のレモンエゴマ、シソと比較すると果実が大きく、本遺跡で出土した果実は2.1mmでシソより大きい。果実の丸みが強く網目の内部が中に向かって微妙にへこむ。

引用文献

阿部美和・辻誠一郎 2001「山王遺跡の古代植物遺体群」『山王遺跡八幡地区の調査2』宮城県文化財調査報告書第186集 pp.181～206

吉川純子 2010「沼向遺跡出土種実から見た古環境と植物利用」『沼向遺跡第4～34次調査』第9分冊 仙台市文化財調査報告書第360集 pp.171～191

第XIV章 総 括



八幡・伏石地区全景（西から） 左上の丘陵は多賀城跡



古墳時代後期河川跡から出土した骨角製品

今回の調査では、道路跡、堀跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土坑、烟跡など多数の遺構を検出した。また、これらの遺構や河川跡、基本層序から多量の遺物が出土している。ここでは出土遺物、遺構の年代や特徴について、これまでの調査成果を含めた検討を行い、最後に両者を併せた全体的な総括を行う。

出土遺物には土師器・須恵器・陶器・磁器・土製品・石製品・木製品・骨角製品・金属製品などがあり、総量はテンバコで658箱になる。これらは、時代別に古墳時代中期・古墳時代後期・奈良・平安時代・鎌倉・室町時代・江戸時代以降に大別することができるが、遺物量、遺構数ともに古墳時代～平安時代のものが主体を占める。したがって、本章では古墳時代中期・古墳時代後期・奈良・平安時代の遺物について検討を行うこととする。

1. 古墳時代中期の土器

(1) 土師器の分類

山王・市川橋遺跡からは、古墳時代中期の土器が多く出土している。ここでは、今回出土した土器の年代的位置付けを行うとともに、当期における本遺跡周辺の動態も検討するため、中期土師器全体について分類を行う。器種には、壺・塊・高壺・蓋・鉢・小型壺・大型壺・小型甕・大型甕・瓶がある（図版638・639）。当期の土師器の大きな特徴として、内外に赤彩が施された赤彩土器や胎土に赤色粒子を多く含んで橙色を呈した赤色土器が多い点があげられる。

壺：器高に対して口径が大きいものを壺とする。器形の特徴から以下のように分類した。調整はナデ・ヨコナデを基調とするが、B～E類はヘラミガキが施されるものがあり、とくにE類はミガキによる仕上げが丁寧である。また、B～D類の中には内面が暗文風ミガキとなるものがある（4・10）。

【A類】底部から屈曲なく口縁部にいたるもの（1～3）。丸底と小さな平底があり、口縁部は外傾するか弱く外反または内湾する。

【B類】外形はA類と同じであるが、口縁部内面に稜を持つもの（4～6）。

【C類】口縁部がくびれて短く外傾し、内面に稜を持つもの（7～9）。小さな平底と丸底とがある。

【D類】口縁部が短く直立するもの（10・11）。須恵器壺身の模倣である。

【E類】口縁部が長く直立もしくは外傾するもの（12・13）。須恵器壺蓋の模倣である。

【F類】体部に段を持ち、口縁部が長く外反または外傾するもの（14）。須恵器壺蓋の模倣である。

塊：口径と器高がほぼ同じか、器高の方が大きいものを塊とする。丸底と小さな平底があり、体部は深い半球形である。調整はナデ・ヨコナデとなるものが多いが、ヘラミガキも認められる（16）。

【A類】底部から屈曲なく口縁部にいたるもの（15）。口縁部は外傾するか弱く外反または内湾する。

【B類】口縁部がくびれて短く外傾するもの（16・17）。

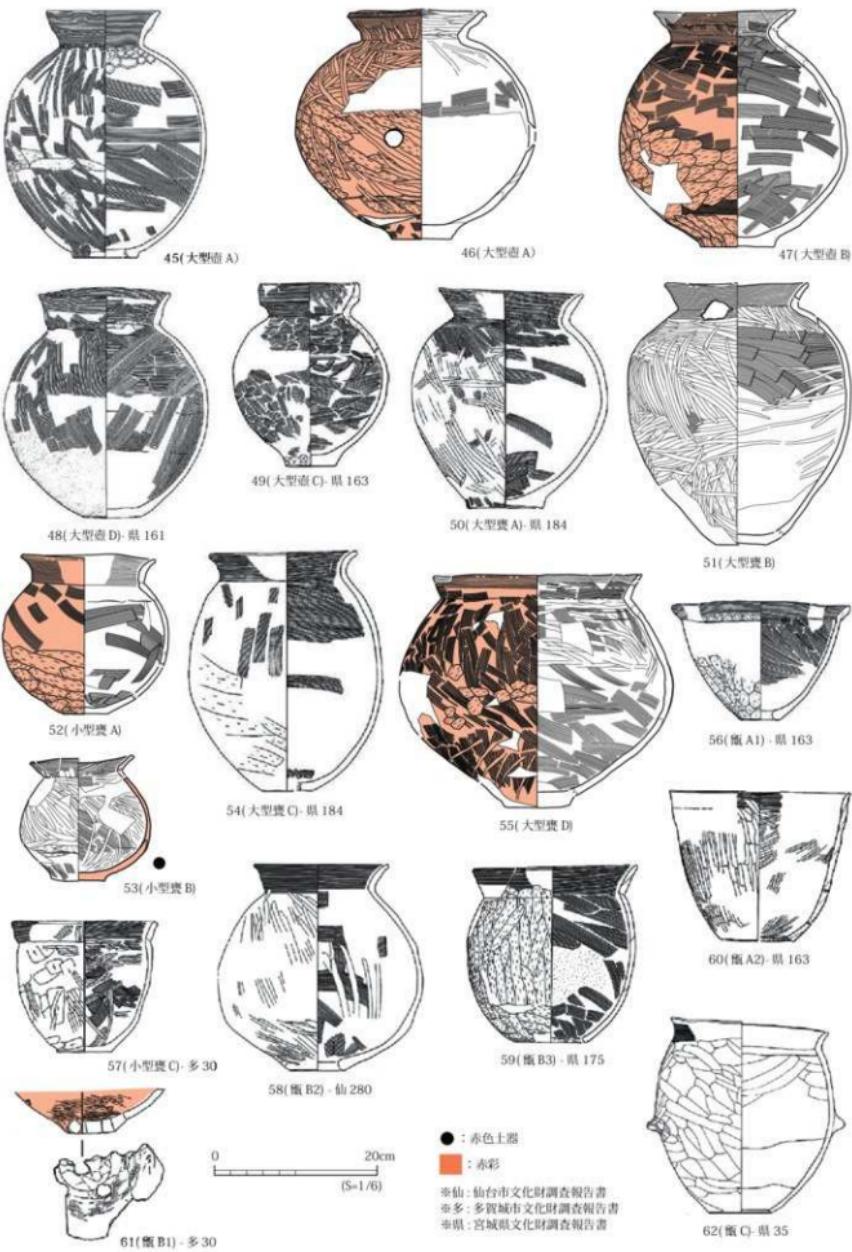
【C類】口縁部がくびれて長く外傾するもの（18）。

【D類】口縁部がくびれて短く直立するもの（19・20）。

高壺：壺部と脚部の特徴から以下のように分類した。調整はナデ・ヨコナデを基調とするが、その後



図版638 古墳時代中期土師器分類図 1



図版639 古墳時代中期土師器分類図2

ヘラミガキが施されるものがある。このうち、A類は壺下部に稜や段を持つもので、脚部の形態から3つに細分できる。

【A1類】壺下部に稜や段を持ち、脚部全体が円錐状で中空のもの（21）。

【A2類】壺下部に稜や段を持ち、脚上部は丸味を持つ円錐形で中空、裾部が広がるもの（22～24）。

【A3類】壺下部に稜や段を持ち、脚上部は棒状・中空で裾部が広がるもの（25・26）。

【B類】口縁部が強く外反し壺下部に突帯があり、裾部に段を持つもの（27）。木器同器種の模倣である。

【C類】壺部の形態が壺Cと類似するもの（28）。

【D類】壺下部に稜がなく、そのまま口縁部にいたるもの（29）。

【E類】壺部の形態が壺D1と類似するもの（30）。

蓋：天井部から口縁部は円錐形で、リング状のつまみが付くもの（31）。高壺とセットになるとみられる。調整はつまみ部がヨコナデ、天井から口縁部はヨコナデのちへラミガキである。

鉢：平底で、器形の特徴から以下のように分類した。調整はA類が口縁部内外ヨコナデで、体部は外面がハケメ、内面ナデである。B・C類はナデ・ヨコナデのち、ヘラミガキで仕上げられるものが多い。

【A類】口縁部が短く外傾するもの（32）。韓式系平底鉢と呼ばれる。

【B類】底部から屈曲なく口縁部にいたるもの（33・34）。

【C類】口縁部がく字状に外反・外傾し、内面に稜を持つもの（35・36）。

小型壺：器高が17cm未満のもので、器形の特徴から以下のように分類した。調整はA類とB・C類で異なり、A類はナデ・ヨコナデ・ハケメであるのに対し、B・C類はナデ・ヨコナデが多く、ヘラミガキで仕上げられるものもある。

【A類】口縁部高と胴部高がほぼ等しい、もしくは口径と胴部径がほぼ等しいか口径が大きいもの（37・38・41・42）。法量に大（41・42）・小が認められ（37・38）、中には口縁部が直立するものがある（38）。

【B類】口縁部高が胴部高より低く、口径が胴部径より小さいもの（39・40・43）。法量に大（43）・小が認められ（39・40）、前者の中には須恵器體を模倣して口縁部が屈折するものがある（43）。

【C類】口縁部高が胴部高より低く、口径が胴部径より小さいもののうち、口縁部が直立気味になるもの（44）。法量の大小は認められない。

大型壺：器高が17cm以上のもので、壺に較べて口縁部が直立気味で頸部のしまりが強い。器形の特徴から以下のように分類した。調整は口縁部ヨコナデ、胴部ナデが多いが、胴部下半の外面にヘラケズリ、胴部外面にヘラミガキが施されるものがある。

【A類】複合口縁もしくは複合口縁状で胴部中央に最大径があるもの（45・46）。

【B類】口縁部がく字状に外反・外傾し、胴部最大径は中央もしくは下半にあるもの（47）。

【C類】口縁下に稜を持ち、胴部最大径は中央にあるもの（49）。

【D類】口縁部が直立もしくは直立気味に外傾し、胴部最大径は中央にあるもの（48）。

小型甕：器高20cm未満のもので、器形の特徴から以下のように分類した。調整はナデ・ヨコナデが多いが、胴部下半の外面にヘラケズリ、胴部外面にヘラミガキが施されるものがある。

【A類】口径と胴部径がほぼ等しいか胴部径が大きく、胴部が球脛のもの（52）。

【B類】口径と胴部径がほぼ等しいか胴部径が大きく、胴部が下膨れのもの（53）。

【C類】口径が胴部径より小さく、鉢状のもの（57）。

大型甕：器高20cm以上のもので、口縁部はく字状に外反・外頸する。胴部の特徴から以下のように分類した。調整は口縁部ヨコナデ、胴部がナデ・ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリを基調とするが、A・B類の胴部はヘラミガキが施されるものが多い。

【A類】胴部の高さと径がほぼ等しく、最大径が胴部中央にあるもの（50）。頸部に隆帯を持つものがある。

【B類】胴部の高さと径がほぼ等しく、最大径が胴上半にあるもの（51）。

【C類】胴部が縦長の楕円形で、最大径が胴中央にあるもの（54）。

【D類】胴部の径が高さより大きく、全体につぶれた球脣状となるもの（55）。

甕：鉢形・深鉢形・壺形がある。調整は口縁部内外がヨコナデで、胴部は外面がヘラケズリもしくはヘラミガキ、内面はナデまたはヘラミガキである。

【A1類】器高20cm未満の鉢形で、単孔のもの（56）。

【A2類】器高20cm未満の鉢形で、無底のもの（60）。

【B1類】器高が20cm以上の多孔のもの（61）。大型壺の底に穿孔したものとみられる。

【B2類】器高20cm以上の大型壺や大型甕を無底としたもの（58）。58の器形は大型壺B類と共通する。

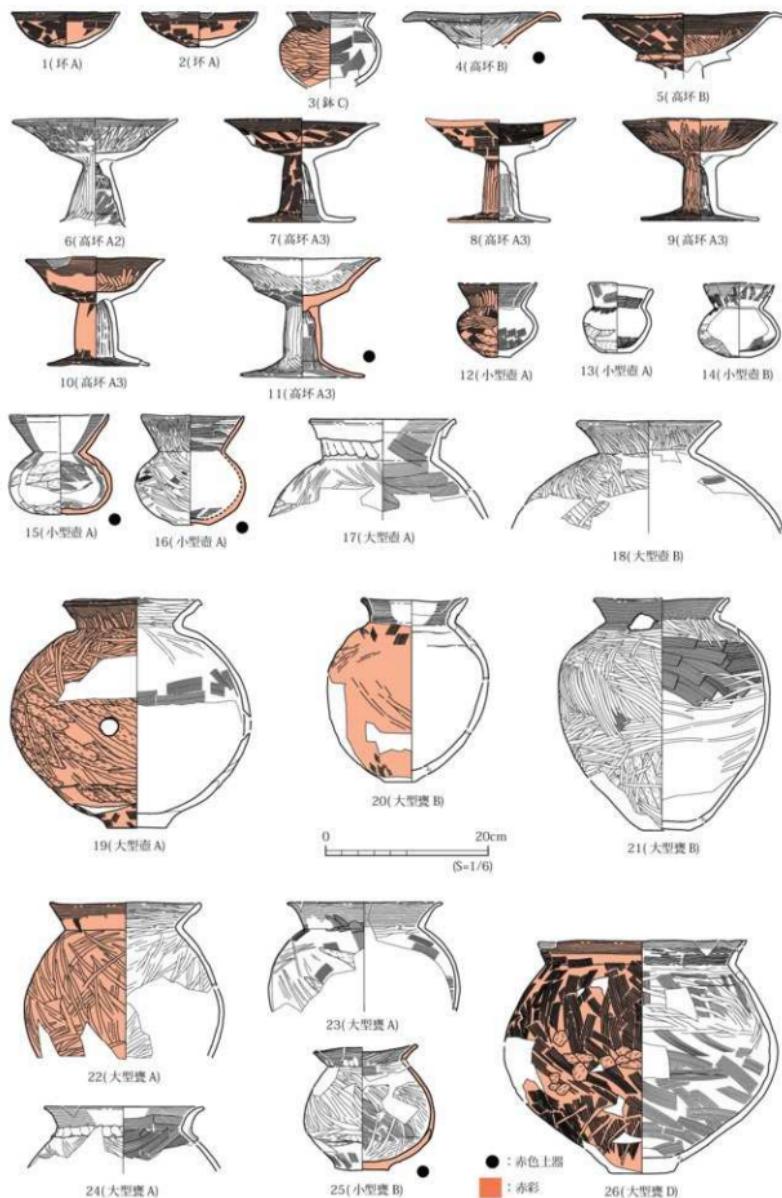
【B3類】器高20cm以上の鉢形で、無底のもの（59）。口径と胴部径はほぼ等しい。

【C類】器高20cm以上の深鉢形で、胴部中央に把手が付くもの（62）。無底と多孔がある。須恵器同器種の模倣である。

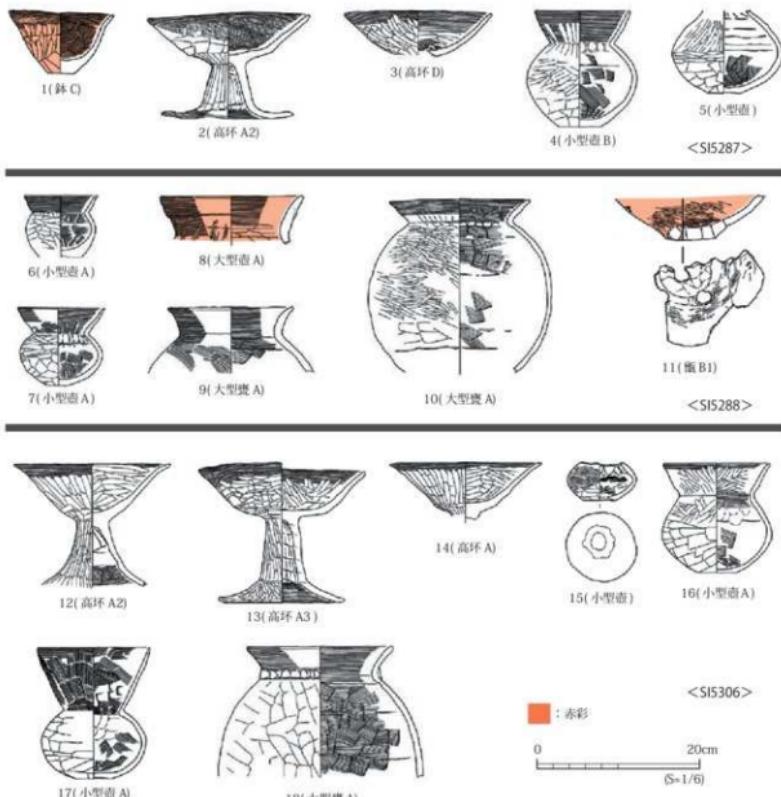
（2）土器の共伴関係と年代

今回の調査で土師器がまとまって出土したのはSI11503竪穴住居跡である。床面と人為堆積土の1・2層から多く出土した。それらの内容は共通することから、まとめて検討する。環A類（1・2）、高环A2（6）・A3（7～11）・B（4・5）、鉢C（3）類、小型壺A（12・13・15・16）・B（14）類、大型壺A（17・19）・B（18）類、小型甕B類（25）、大型甕A（22～24）・B（20・21）・D類（26）などが出土している（図版640）。特徴としては、環が少なく高环が盛行すること、高环は环下部に稜や段を持ち脚裾部が広がるA2・A3類を主体とすること、小型壺は口縁部高が胴部高とほぼ同じか口径が胴部径とほぼ等しいか大きいA類を主体とすること、大型壺は口縁部が複合口縁状となるA類が多いこと、大型甕は胴部が膨らむA・B類で構成されることなどがあげられる。

また、SI11501竪穴住居跡からは高环A・大型壺A、SI11502竪穴住居跡からは高环A・小型壺B・大型甕A、SA11170壙跡からは高环A2・小型壺A・大型壺A・小型甕Aなどが出土した（表67）。こうした土師器は、本遺跡八幡地区SI5287・5288・5306住居跡（図版641）（多賀城市埋文センター



図版640 八幡地区S111503竪穴住居跡出土土器

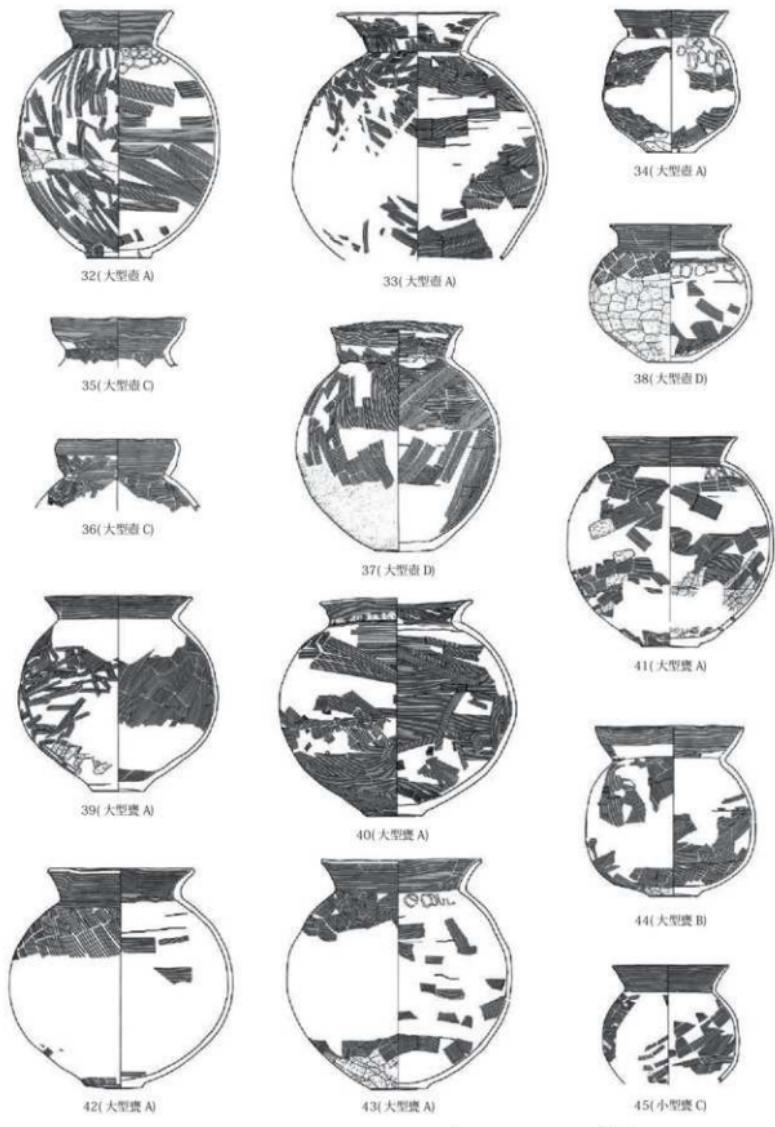


図版641 八幡地区SI5287・5288・5306住居跡出土土器

1992b)、同地区SX230遺物包含層(図版642・643)(宮城県教委1994b)などに類例があり、「南小泉式」(氏家1957)に位置付けられている。さらに、今回報告した他の遺構や過去の調査分を含め、八幡・伏石地区で出土した古墳時代中期の土師器の内容はSI11503出土土器に共通することから、同地区で確認した古墳時代中期の遺構はほぼ同時期のものと判断できる。



図版642 八幡地区SX230遺物包含層出土土器 1



※宮城県文化財調査報告書第 161 集

0 20cm
(S=1/6)

図版643 八幡地区SX230遺物包含層出土土器2

(3) 七北田川下流域における古墳時代中期土器の変遷

山王・市川橋遺跡とそこから西に1km離れた自然堤防に立地する鴻ノ巣遺跡からは、古墳時代中期の土器が多く出土している。前者は段階によって出土する場所が異なることから、これらをみるとことで、古墳時代中期を通した本遺跡の動態を把握するとともに七北田川下流域の土器変遷を検討することができる。

該期の土器は、氏家和典氏によって「南小泉式」と「引田式」が提唱されたが（氏家1957）、岩切鴻ノ巣遺跡（本書では鴻ノ巣遺跡）の報告書で「引田式類似のものを含めて、一括して南小泉式に位置付けることが妥当」（宮城県教委1974）と指摘したのは、南小泉式土器として扱われてきた。その後、辻秀人氏は器種構成の違いから南小泉式を前半段階と後半段階に大別し、そうした変化は汎日本的な現象に対応するとした（辻1989）。藤沢敦氏は辻氏の指摘を受けて「南小泉式」の再検討を行い、「引田遺跡出土資料は時間的に限定できる一括資料」であり、両者は型式的に区別できるという見解を発表した（藤沢1992）。

藤沢氏の指摘は、細別器種の変遷からみても十分な妥当性を持っている。ここではその視点にもとづき、主としてa) 食膳具における高环の盛行と衰退、それに替わる壺・塊類の多量出現、b) 小型壺の器形、c) 豊の長胴化（=大型品における貯蔵具と煮炊具の明確な器形分化）に着目しながら、七北田川下流域の古墳時代中期土器の変遷をみてみたい（表67）。その際、本遺跡の遺構については、遺跡名を省略して地区名との組合せとする。

【A群土器段階】

食膳具は壺が少なく高环が盛行し、後者は壺下部に稜や段を持ち脚据部が広がるA2・A3類を主体とする。小型壺は器高が10cm以下と11cm以上の大小に分かれ、口縁部高が胴部高とほぼ等しいか、口径が胴部径とほぼ等しいか大きいA類を主体とし、B類も共伴する。大型壺は口縁部が複合口縁状となるA類が多く、大型壺は胴部が膨らむA・B類で構成される。

本遺跡では八幡地区に集中しており、代表例としてはSI5287・5288・5306・11503竪穴住居跡、SX230遺物包含層があげられる（図版640～643）。鴻ノ巣遺跡では1期1段階のSI6竪穴住居跡、1期2段階のSI8竪穴住居跡やSK132土坑がこれにあたる（図版646）（仙台市教委2004）。

【B群土器段階】

食膳具は高环と壺・塊の数が拮抗するか、後者が多くなる。前代に較べて壺は須恵器模倣のD・E類、塊は口縁部内面に稜を持つB類や口縁部がくびれて短く直立するD類が増える。小型壺は前代と同じく大小あるが、器形は大きく異なり口縁部高が胴部高より低く、口径が胴部径より小さいB類のみとなる。本段階はカマド導入期で、同じ集落内でも炉を持つ住居とカマドを持つ住居が混在する。伝統的な炉を持つ住居は高环が多く、大型品の壺塊類は胴部器形に明確な違いがない。これに対し、後者は壺の割合が高く、壺や小型壺には須恵器模倣があり、大型壺には長胴化の傾向が認められる。

本遺跡では町・東町浦・西町浦地区に集中する。代表例としては、町地区SI2983・3022住居跡・SD3369溝跡（図版644）（宮城県教委1998）、東町浦地区SD172溝跡や西町浦地区SX056～058・

遺跡 or 地区	件	場	遺	高环					計	小型壺	大型壺	小型罐	大型罐	合	量	病	伊・カマド	文献											
				A	B	C	D	E		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C								
八幡・ SE5287									1	1										×	伊	市30							
八幡・ SE5288										3	2	1						1		×	伊	市30							
八幡・ SE5306									1	1										×	—	市30							
八幡・ SH11501																					×	伊	本書						
八幡・ SH11502																					×	—	本書						
八幡・ SH11503	2								1	7	2		1	5	1	5	1	1	6	2	1	×	伊	本書					
A 都上野																					×	×	市30						
																					×	×	市30						
八幡・ 佐1170										1											×	×	本書						
八幡・ SX230	2	Z	Z	Z					1	12	4	1	2	1	1	2	14	5	13	3	4	1	2	18	1	×	×	縣161	
酒ノ里・ S6	2									1	1						2	4	1	2	1					×	伊	都台 市280	
酒ノ里・ S8	4	1	Z								1	1					1	2							×	伊	都台 市280		
酒ノ里・ S18	1	1									2	4	1				1	5	1	1				×	伊	都台 市280			
酒ノ里・ SK132	2									1							1	2						1	×	×	都台 市280		
東町浦・ SD172																						×	×	市史4					
西町浦・ SX058	2	2	3	1	1				1	3	7		1	1	3	3	7	1	1	2	3			(TK208)	×	市史4			
西町浦・ SX056- 057	3																1	1	1		1				(TK208)	×	市史4		
西町浦・ SX060	1																							(TK208)	×	市史4			
西町浦・ SX061	2	1															2				1				(TK208)	×	市史4		
町・ SE2983	3	1							2	1										1					(TK216 ~208)	カマフ	縣175		
町・ SE3022	1	1							1		1						1	1	1	2					(TK216 ~208)	カマフ	縣175		
町・ SD3369	6	2	1													1				2					(TK216 ~208)	×	縣175		
町・ SE3395	1																							(TK216 ~208)	—	縣175			
酒ノ里・ S9	2	1	1														1	1	1		1				×	—	都台 市280		
酒ノ里・ S11	1									4			1	2		1			5	1	1			×	伊	都台 市280			
町・ SE3012	1																1		1		1				×	カマフ	縣175		
町・ S1234	2	1															1									(TK23)	カマフ	市86	
郡前・ SX5025	22	7	5	2	1	8	3	1	2							3	2		1	2	2	6	1			2	TK23	×	縣184
酒ノ里・ 1号住	1	1	3						1	1						1	2		1	1	1			1	×	カマフ	縣35		
酒ノ里・ 2号住	1																1	1							×	カマフ	縣35		
酒ノ里・ S110	1										1						2			2					×	カマフ	都台 市280		
酒ノ里・ S113	2		1								1								2						×	カマフ	都台 市280		
酒ノ里・ S110	2		3														1		1	2					1	×	カマフ	都台 市400	
酒ノ里・ S119	4	5	11													1	1	1	1	1	2			2	×	カマフ	都台 市400		
酒ノ里・ S220	4	3	1														1	2		1	2				1	×	カマフ	都台 市400	

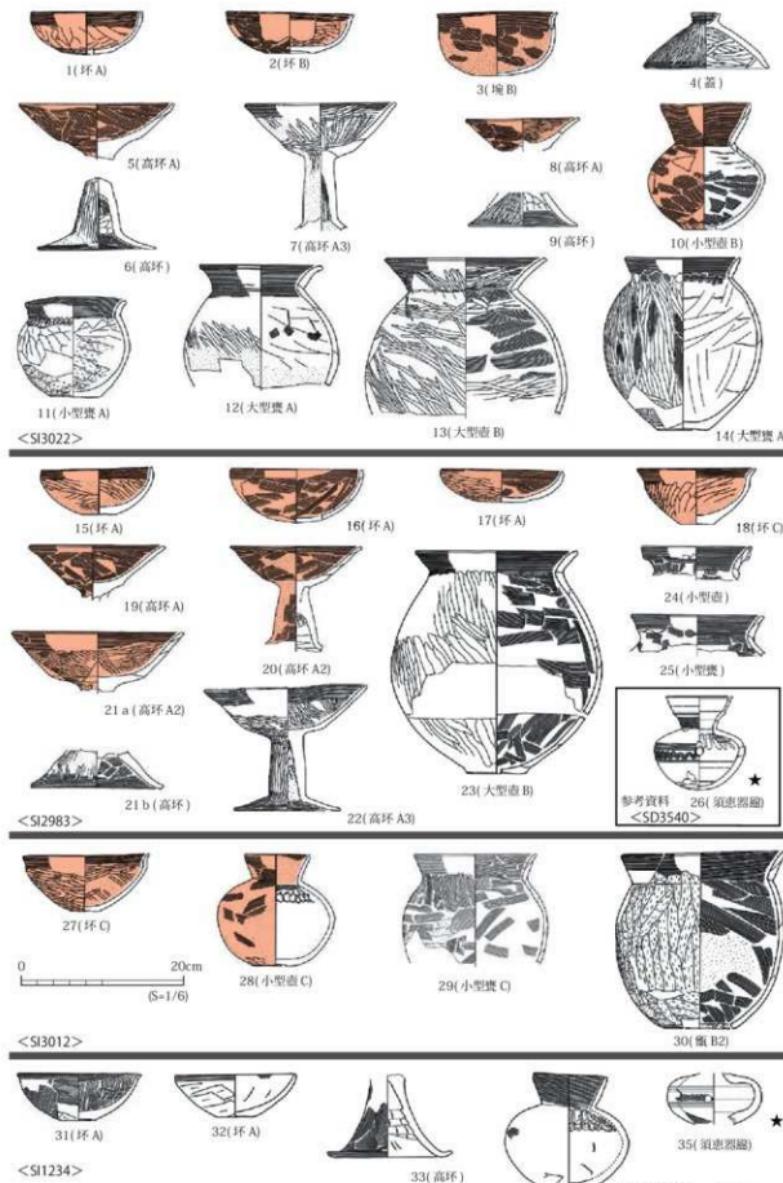
※遺跡or地区で、酒ノ里遺跡は「酒ノ里」とし、山王・市川橋遺跡は遺跡名を省いて地区名のみとした。また山の里の遺跡器で「」としたものは、同じ酒ノ里で同時期の遺跡から出土した型式である。

表中の「○」は有形で、「×」は両者ともないもの。一括は無形が確認できなかつたものである。

◎「市」は宮城県教育委員会の報告書、「市」は多賀城市発行の報告書で、「市史」は多賀城市史第4巻を指す。

※B群土器段階の町地区は、明確な須恵器の作例がないが、近接する遺跡からTK216～208型式の須恵器が出土している。

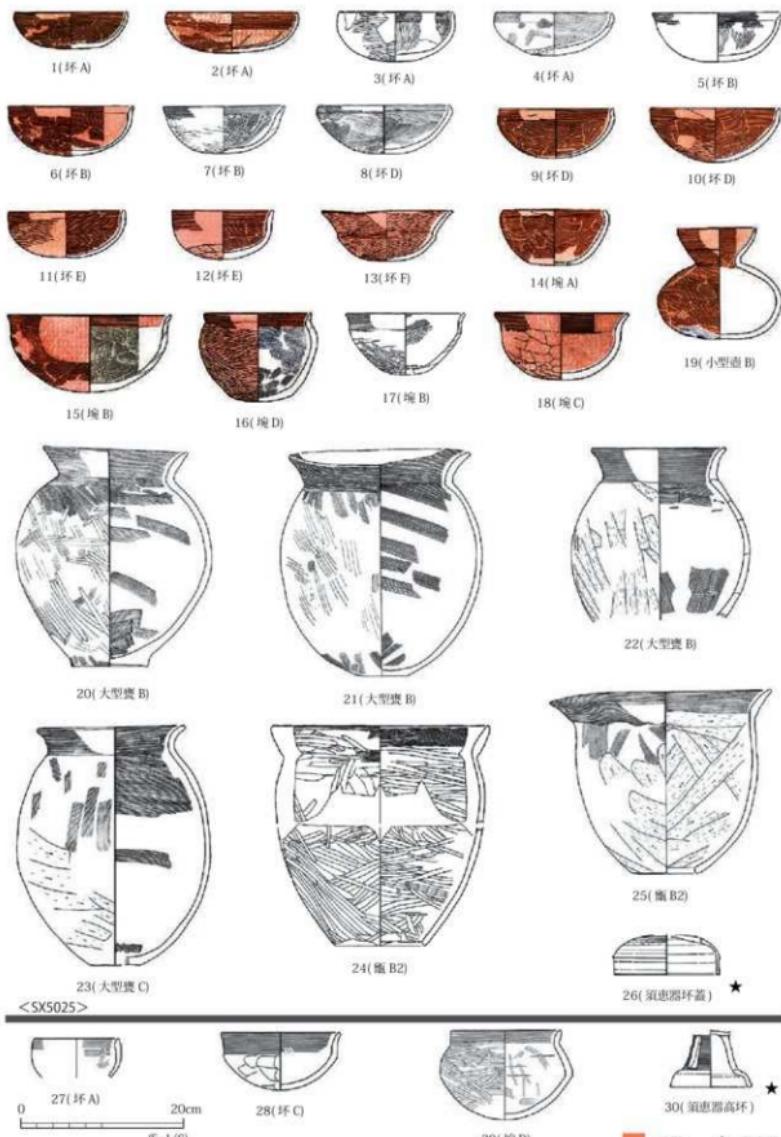
表67 山王・市川橋遺跡と鴻ノ里遺跡における古墳時代中期の主要遺構出土土器



赤彩

★：須恵器

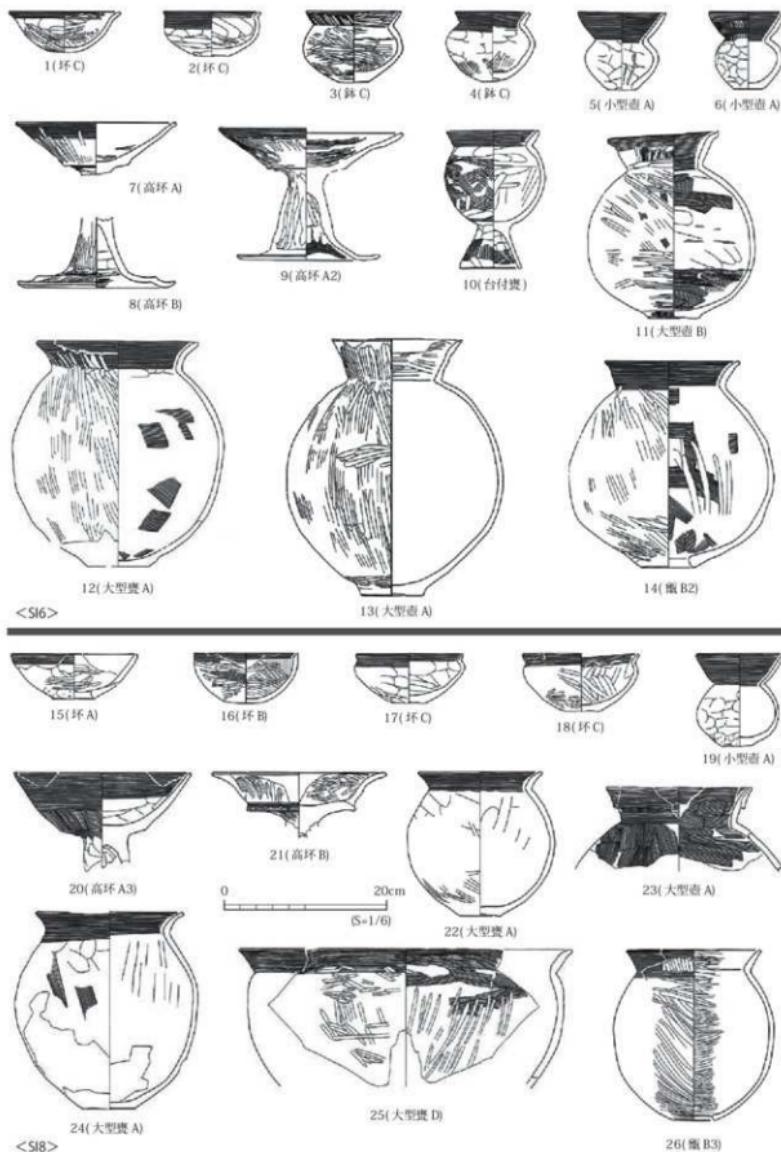
図版644 司地区SI1234・2983・3012・3022住居跡出土土器



<SX1744・1745>

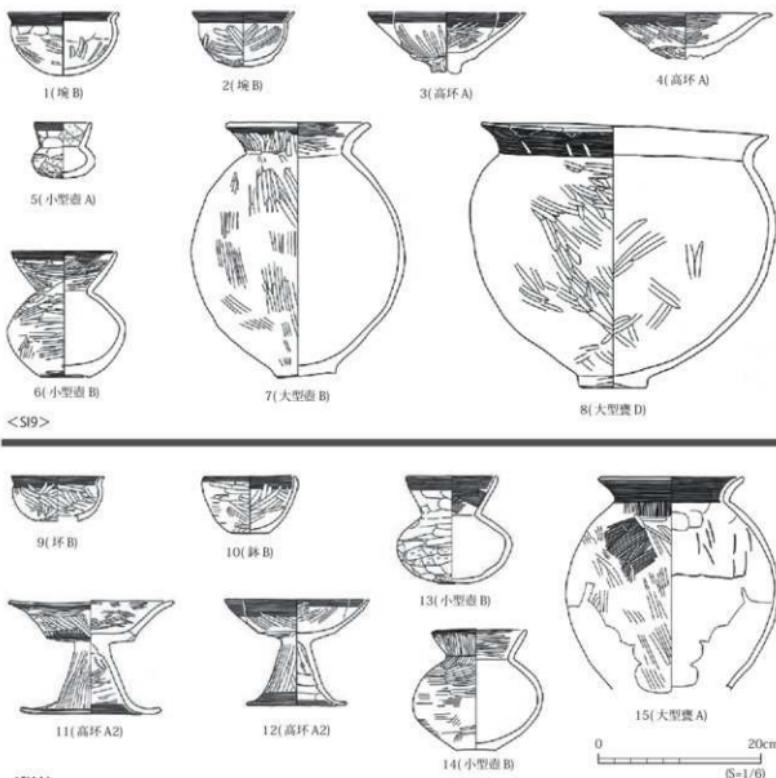
※SX5025：宮城県文化財調査報告書第184集、SX1744・1745：多賀城市文化財報告書第85集

図版645 館前地区SX1744・1745落ち込み、SX5025廃棄跡出土土器



※SI6・8：仙台市文化財調査報告書第280集

図版646 鴻ノ巣遺跡SI6・8住居跡出土土器



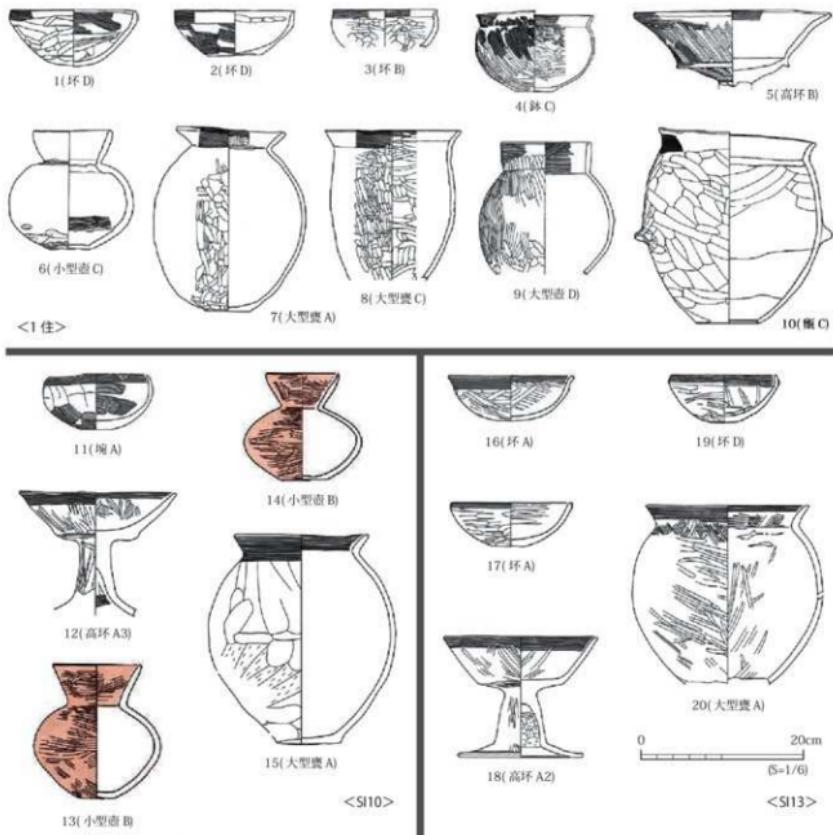
*SI9・11：仙台市文化財調査報告書第280集

図版647 鴻ノ巣遺跡SI9・11住居跡出土土器

060・061遺構（多賀城市史編纂委員会1991）、鴻ノ巣遺跡では1期3段階のSI9・11竪穴住居跡（図版647）（仙台市教委2004）などがあげられる。本段階から須恵器が共伴するようになる（註1）。西町浦地区SX060では、陶邑TK208型式期の把手付壺が共伴し、東町浦・西町浦・町地区では共伴関係は不明だが、本段階の遺構の周辺からTK216～208型式期の須恵器が出土しており、年代観の一端を示すものとみられる。また、鴻ノ巣遺跡では次のC群土器期を含めて須恵器が認められず、本遺跡との大きな違いとなっている。

【C群土器段階】

食膳具は环が急増し、高环が激減する。また、煮炊具は大型壺の長胴化が進み、甑が安定して認められる。その理由としては、本段階に新たな生活様式やカマドが定着したためと考えられる。环はA

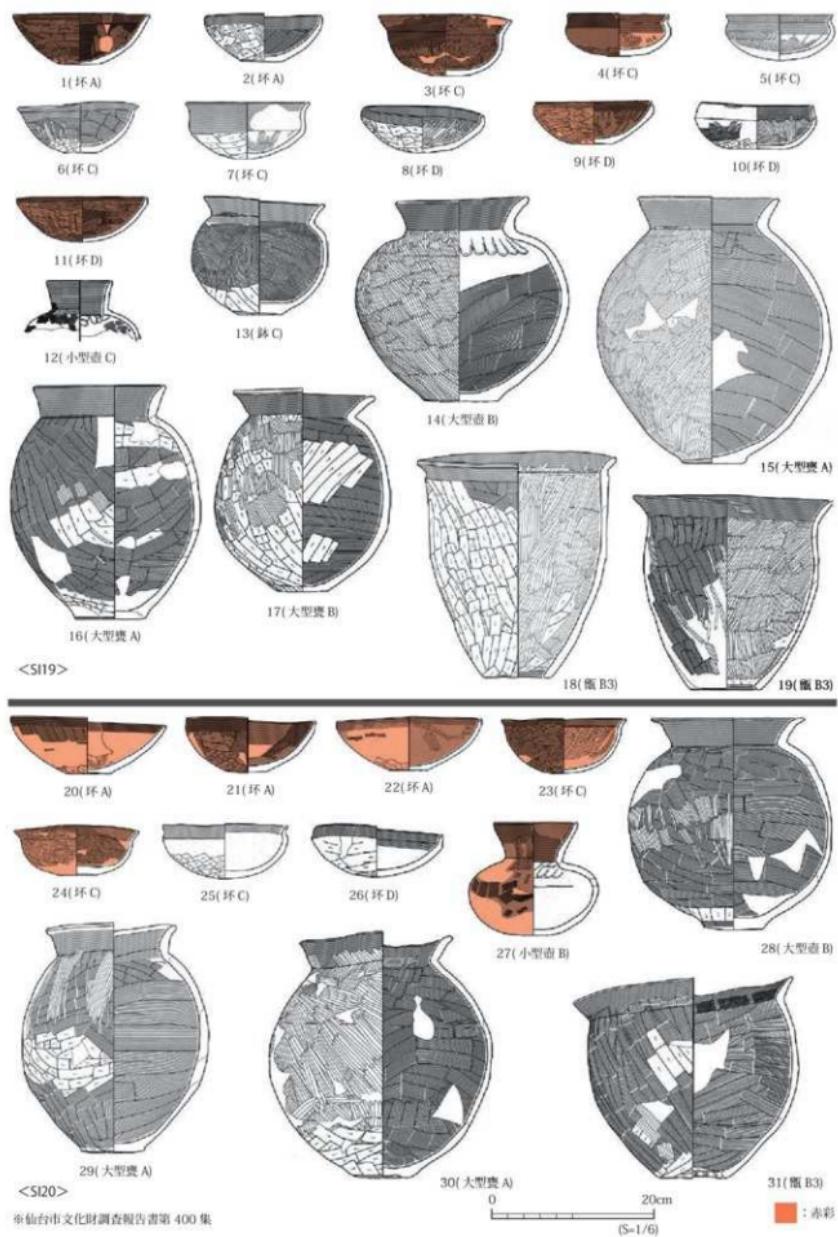


■: 赤彩
※SI10・13:仙台市文化財調査報告書第280集
※1号住居跡:宮城県文化財調査報告書第35集

図版648 鴻ノ巣遺跡1号住居跡、SI10・13住居跡出土土器

～C類に加えて須恵器模倣のD・E類が定量出土するほか、次代以降に盛行するF類も認められ、細別器種が増加する。小型壺は大タイプのみとなり、B類に加えて、口縁部が直立気味となるC類が認められる。B類も口縁部の開きが小さくなり、小型壺全体として胴部径と口径の差が大きくなる傾向がある。大型壺は少なくなる一方、大型甌が増えるとともに長胴化が進む。甌は数の増加とともに器形のバリエーションが増え、その中には把手を持つ須恵器模倣の甌Cが認められる。

本遺跡では町地区と館前地区に認められる。代表例は町地区SI1234住居跡（図版644）（多賀城市教委2006e）や館前地区SX5025一括土器群（図版645）（宮城県教委2001a）、鴻ノ巣遺跡では1・



図版649 鴻ノ巣遺跡SI19・20住居跡出土土器

2号住居跡（図版648）（宮城県教委1974）のほか、第7次調査Ⅱ期のSI10・13竪穴住居跡（図版648）（仙台市教委2004）、第9次調査のSI10・19・20竪穴住居跡などがあげられる（図版649）（仙台市教委2012）（註2）。館前地区SX5025は東流する河川の右岸に形成されており、土師器食膳具が多量に出土したことから、付近に居住域が想定できる。また、須恵器は町地区SI1234で陶邑TK208～23型式期の甕、館前地区SX5025で陶邑TK23型式期の环蓋が共伴するが、前段階に較べて量はない。

七北田川下流域における古墳時代中期の土器は、3段階に分けられた。それぞれの特徴から、A群土器は南小泉式、C群土器が引田式に位置付けられる。B群土器は両者の中間的様相を示すが、食膳具で高环と环の割合が半々となり、大型品は壺が減少する反面、甕の増加と長胴化を促すという変化が起こったことを考えると、B期は引田式の範疇に含めることができる。その背景としては、銘々器の出現と共に器としての高环の減少という食習慣の変化、および住居へのカマドの導入による調理法の変化が指摘されている（辻前掲）。また、C群土器における环・小型壺・甕などの須恵器模倣の増加は、前段階での須恵器普及が大きな要因と考えられる。こうしたことから、B群土器は古墳時代後期土器様式へと繋がる様々な要素の萌芽期と捉えることが可能である。

当教委はこれまで、鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書での指摘以降（宮城県教委1974）、古墳時代中期の土器を南小泉式土器に包括してきたが、藤沢氏による南小泉式と引田式は型式的に区別できるという指摘は妥当であること（藤沢前掲）、その違いは古墳時代の中でも大きな画期となる生活様式の変化を反映していることから（辻前掲）、B・C群土器の型式名は「引田式」と呼ぶことにする。

各段階の年代は、須恵器が共伴するB・C群土器から考える。B群土器にはTK216～208型式、C群土器にTK23型式が伴う。須恵器年代は、近つ飛鳥編年によるとTK216が412年以降の5世紀前葉、TK208が5世紀中葉、TK23は471年前後の5世紀後半である（近つ飛鳥博物館2006）。したがって、B群土器は5世紀中葉、C群土器は5世紀後半と考えられ、須恵器が認められないA群土器はB群以前の5世紀前葉とみておきたい。

註

註1 5世紀の仙台平野では、大蓮寺窯跡（ON46窯段階）と金山窯跡（TK208窯段階）の2箇所で現地生産が確認されている（東北古代土器研究会2008a）。B群土器期にあたり、それより新しいC群土器期よりも古墳や拠点集落から須恵器の出土が多い。両窯跡製品の形態や肉眼的な胎土の特徴に加え、自然化学的な胎土分析を行い、当期における須恵器生産や流通の問題を具体的に考える必要がある。

註2 C群土器段階の鴻ノ巣遺跡SI10・19・20竪穴住居跡は、報告書では古墳時代後期前半、引田式と住社式の中間に位置付けている（仙台市教委2012）。土器様相がC群土器と共通すること、SI10・19・20の確認面がVb層で中期遺構と同じであるのに対し、報告書で同段階としたSD14溝跡は土器が住社式期であり、確認面もVa層（洪水堆積層）と異なることから、C群土器と理解できる。なお、報告書では古墳時代後期前半に位置付けた理由は示されていない。

2. 古墳時代後期の土器

(1) 土師器の分類

土師器と須恵器がある。このうち、出土量の多い土師器については図示した土器を中心に整理・分類し、それらの組合せや特徴、共伴する須恵器との関係から、それぞれの内容や年代を検討する。その際、今回報告するSD2050B河川跡は別地点でも調査を実施しており、住社式期から栗圃式期の土器を報告した（宮城県教委2001b）。ここでは、そうした過去の成果についても述べるため、後期土師器全体について分類を行う。また、宮城県中・南部における6～8世紀の土師器変遷の中でも分類を行なっていることから（村田2007）、3者の対応関係を表68に示した。

器種には、壺・塊・高环・蓋・鉢・壺・小型広口壺・広口壺・小型甕・大型甕・甑・ミニチュアがある（図版650・651）。これらの特徴としては、胎土に海面骨針を含むものが多く認められること、环類の多くが内外に段を持ち内面はヘラミガキのち黒色仕上げが行われること（以下、内黒とする）、壺・甕・甑は頸部に段を持ち胴部外面調整にハケメが多く用いられることなどがあげられる。

壺：器高に対して口径が大きいものを壺とする。器形の特徴から以下のように分類した。器形や内面調整からみてA～F類は内黒で在地土師器、G類は内面ナデ仕上げで関東系土師器と考えられる。在地土師器の外調整は口縁部ヨコナデ、体・底部ヘラケズリを基調とするが、口縁部はヨコナデ前段階のハケメが認められるものや口縁部ヨコナデ、体・底部はケズリのうちにヘラミガキが施されるものがある。

【A1類】丸底で、口縁部が短く外反もしくは外傾するもの（1）。

【A2類】丸底で、口縁部は長く外反もしくは外傾するもの（2）。内面に段や稜を持つものが多い。

【B1類】内外とも有稜もしくは有段で丸底。口縁部は外反もしくは外傾するもの（3～5）。

【B2類】内外とも有段で丸底。口縁部は内弯もしくは内弯気味に外傾するもの（6）。

【C1類】内外とも有段で丸底。口縁部が短く直立もしくは外傾するもの（7・8）。須恵器壺身・蓋の模倣である。

【C2類】内外とも有段で丸底。口縁部が長く直立もしくは外傾するもの（9・10）。須恵器壺蓋の模倣である。

【D類】丸底で、外面のみに段をもつもの（11）。

【E類】口径に対して器高が高い塊状のもの（12）。

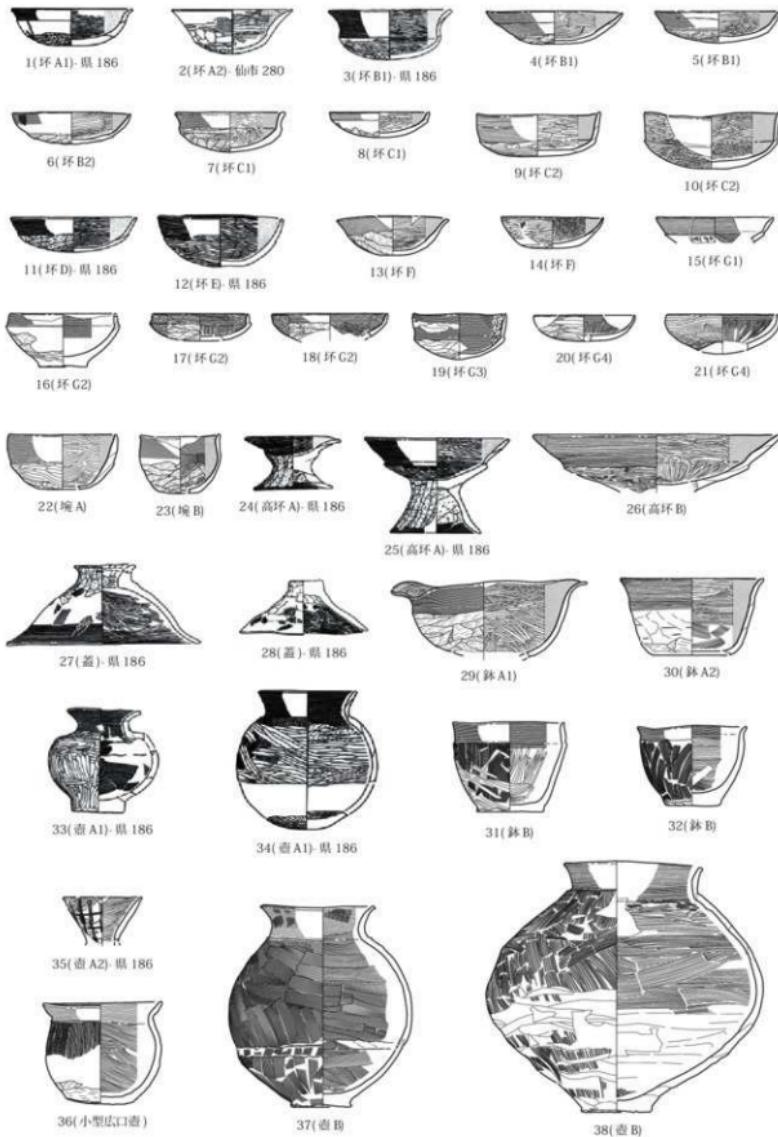
【F類】底部からそのまま口縁部にいたるもの。丸底（13）と平底（14）がある。

【G1類】内面ナデ仕上げで口縁部が外傾するもの（15）。関東系土師器。

【G2類】内面ナデ仕上げで口縁部が短く直立するもの（16～18）。関東系土師器。17・18は内外とも漆仕上げである。16は削りによる丸底仕上げが省略され、平底のままとなったものである。

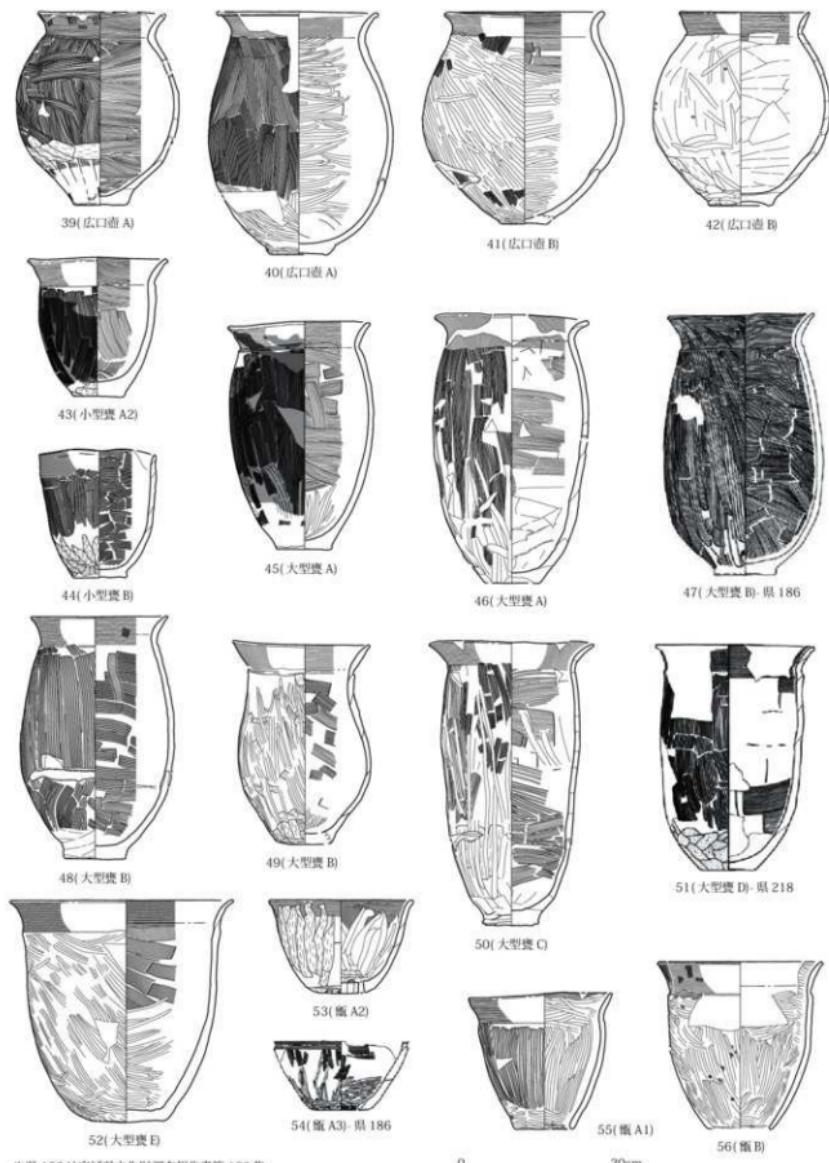
【G3類】内面ナデ仕上げで口縁部が長く直立するもの（19）。関東系土師器。内面は漆仕上げである。

【G4類】内面ナデ仕上げで口縁部が内弯するもの（20・21）。内面に放射状暗文が施される。関東系土師器。



仙市 280 は仙台市文化財調査報告書第 280 集
県 186 は宮城県文化財調査報告書第 186 集

図版650 古墳時代後期土師器分類図 1



図版651 古墳時代後期土師器分類図2

※県 186 は宮城県文化財調査報告書第 186 集
※県 218 は宮城県文化財調査報告書第 218 集

塊：口径と器高がほぼ同じか、器高の方が大きいものを塊とする。内黒で丸底（22）と平底（23）がある。外面調整は口縁部ヨコナデ、体・底部ヘラケズリを基調とするが、その後ヘラミガキが施されるものがある。

【A類】外面に段を持つもので、小型（22）と大型がある。

【B類】外面に段がないもの（23）。

高坏：坏B・F類に脚を付けたものである。坏部の法量で分類した。脚部の調整は内外とも柱状部がヘラケズリやナデ、裾部がヨコナデが多いが、その後ヘラミガキが施されるものがある。

【A類】坏B・F類に短い脚が付くもの（24・25）。脚部は中実と中空があり、後者がほとんどを占める。

【B類】高坏A類を大型化したもの（26）。数は少ない。

蓋：大型（27）と小型（28）があり、前者は蓋類、後者は高坏とセットになるとみられる。

鉢：坏を大型化したもの（A類）と大型甕や広口壺の胴下部と類似するもの（B類）がある。調整や内面仕上げはA類は坏と共に通する。B類は胴部以下が大型甕や広口壺と共に通するが、口縁部はヨコナデとなる。

【A1類】坏B類を大型化したもの（29）。

【A2類】坏F類を大型化したもの（30）。

【B類】大型甕や広口壺の胴下部と類似するもの（31・32）。B類の中には、頸部に段を持つものや胴部外面にヘラミガキ、内面に暗文風のヘラミガキ（31）が施されるものがある。

壺：器高によって2つに分けられる（A類・B類）。中期に較べて数は少ない。調整は口縁部ヨコナデ、胴部はハケメ・ナデ・ヘラケズリを基調とし、その後ヘラミガキで仕上げられるものが多い。

【A1類】器高18cm未満で、頸部のしまりが強いもの（33・34）。

【A2類】器高18cm未満で、頸部のしまりが強く長いもの（35）。数は少ない。35は頸部外面に格子状の文様があり、東北北部系土師器とみられる。

【B類】器高20cm以上で、頸部のしまりが強いもの（37・38）。頸部に段を持つものや胴下部に疑似口縁が認められるものが多い。38は胴部が算盤玉状に大きく膨らんでおり、東北北部系土師器とみられる。

小型広口壺：器高18cm未満で、頸部のしまりが弱く広口となるもの（36）。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面がハケメ・ヘラケズリ、内面はナデである。

広口壺：器高20cm以上で、胴部の膨らみが弱いもの（A類）と広いもの（B類）がある。胴下部に疑似口縁が認められるものが多い。調整はA類が口縁部ヨコナデで、胴部は外面がハケメ・ヘラケズリ・ヘラミガキ、内面はナデやヘラミガキである。

【A類】胴部の膨らみが弱いもの（39・40）。頸部に段を持つものが多い。

【B類】胴部の膨らみが強いもの（41・42）。胴部外面はヘラケズリのものが多い。

小型甕：器高が18cm未満のものである。頸部のくびれの有無でAとBがあり、さらに前者は器高から2つに細分できる。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面がハケメ・ヘラケズリ、内面はハケメ・ナデで

		本町告書 類別	内裏	显示	宮城県 186集				村田 2007
环	A1類	丸底、口縁部が細く外反もしくは外輪、内面のみに段や棱を持つものが多い。	○	×	环 A I	环 A II	环 B I	环 B II	环 A I
	A2類	丸底、口縁部が長く外反もしくは外輪、内面のみに段や棱を持つものが多い。	○	×					环 A II
	B1類	内外とも丸底・有段で丸底。口縁部外反もしくは外輪	○	○	环 B II	环 C I	环 C II		环 B
	B2類	内外とも丸底で丸底。口縁部内面もしくは内側気味に外輪	○	○	环 C III				环 B
	C1類	内外とも有段で丸底。口縁部が細く直立もしくは外輪、环身・直縁部	○	○	环 C IV				环 D
	C2類	内外とも有段で丸底。口縁部が長く直立もしくは外輪、环身・直縁部	○	○	环 C V				
	D類	外縁のみ有段で丸底、内面に屈曲なし	○	×	环 D				环 C
	E類	口縁に対して器高が高く直立	○	×	环 F				×
	F類	底盤からそのまま口縁部でいたる。丸底と平底がある	○	○	环 E				×
	G1類	内面ナジ子上げて口縁部直立。開口系土師器	×	○	环 G				×
周	G2類	内面ナジ子上げて口縁部直立。閉口系土師器	×	○	环 G VI				×
	G3類	内面ナジ子上げて口縁部直立。閉口系土師器	×	○			×		×
	G4類	内面ナジ子上げて口縁部内面、内面に放射状暗文。開口系土師器	×	○			×		×
	A類	外縁に段を持つ、小型と大型がある	○	○	周 A				周 A
	B類	外縁に段がない	○	○	周 B	周 C	周 D		周 A
	A'類	环身下部に短い瘤が付く	○	○	周 A I				周 B I
	B'類	丸輪を大型化	○	○			×		周 C
	C類	小型と大型があり、前者は高环、後者は環類と組合う	×	×	器 A	器 B	器 C		×
	A1類	环身輪を大型化。内里	○	○	大型時				环 A
	A2類	环身輪を大型化。平底、内里	○	○			×		×
鉢	B類	大型度や口縁の脚下部と類似するもの	×	○	鉢 A	鉢 B	鉢 D		鉢 B
	A1類	底盤 18cm未満で、頭部のしまりが強いものの	×	○	鉢 B				鉢 A
	A2類	底盤 18cm未満で、頭部のしまりが弱く直立のものの	×	○			×		鉢 C
	B類	底盤 20cm以上で、頭部のしまりが弱いものの	×	○	鉢 A	鉢 D I			鉢 A
	C類	底盤 18cm未満で、頭部のしまりが弱く直立のものの	×	○	鉢 C II				鉢 A
	A類	底盤 20cm未満で、頭部のしまりが弱く直立のものの	×	○	鉢 C				鉢 A
	B類	底盤 20cm未満で、頭部のしまりが弱く直立のものの	×	○	鉢 B IV				鉢 A
	C類	底盤 20cm以上で、頭部のしまりが弱いものの	×	○	鉢 B I	鉢 C I			鉢 D II
	D類	底盤 20cm以上で、頭部のしまりが弱いものの	×	○	鉢 B II	鉢 C I	鉢 D I		鉢 D I
	E類	底盤 17cm未満で、頭部のしまりが弱いものの	×	○	鉢 B III	鉢 C I	鉢 D II	鉢 D III	鉢 D II
小型甕	A類	底盤 17cm未満で、頭部のしまりが弱いものの	×	○	甕 A I	甕 F I	甕 F II	甕 F III	甕 F IV
	B類	底盤 17cm未満で、頭部にくびれがないものの	×	○	甕 A II	甕 F VII			甕 C I
	C類	底盤 20cm以上で、頭部が鋭いものの	×	○	甕 B I	甕 B II	甕 E I	甕 E II	甕 C II
	A類	底盤 17cm未満で、頭部が鋭いものの	×	○	甕 B I	甕 B II	甕 E I	甕 E II	甕 A I
	B類	底盤 20cm以上で、頭部が鋭いものの	×	○	甕 B II	甕 B III			甕 B II
	C類	底盤 20cm以上で、頭部が鋭いものの	×	○	甕 E III	甕 F I	甕 F II	甕 F III	甕 C I
	D類	底盤 20cm以上で、頭部が円筒状のものの	×	○	甕 E IV	甕 F II	甕 F III	甕 F IV	甕 C II
	E類	底盤 20cm以上で、口縁に対して器高が低い寸胴のものの、甕 B類	×	○	甕 F V	甕 F VI			甕 A I
	F類	底盤が丸過する	×	○	甕 E VII				甕 A I
	G類	底盤が丸過する	×	○	甕 A I				甕 B I
瓶	A1類	环形で無底	×	○	瓶 A I				瓶 B I
	A2類	环形で多孔	×	○	瓶 A II				瓶 B I
	A3類	环形で平甲	×	○	瓶 A III				瓶 B I
	B類	環形で無底	×	○	瓶 B I	瓶 B III			瓶 A

表68 古墳時代後期土師器分類と宮城県文化財調査報告書第186集、村田分類2007との対応関係

ある。

【A1類】 頸部にくびれを持ち、器高が12cm以下のもの。

【A2類】 頸部にくびれを持ち、器高が13cm以上18cm未満のもの（43）。

【B類】 頸部にくびれがないもの（44）。頸部に段を持つものがある。

大型甕：器高20cm以上のものが主体を占める。口縁部はく字状に外反・外縁する。胴部の特徴から以下のように分類した。A～D類は頸部に段を持つものや胴下部に疑似口縁が認められるものが多い。調整は口縁部ヨコナジ、胴部外面がハケメ、内面ナデであるが、その後胴部外面にヘラミガキが施されるものがある。E類は胴部両面にヘラミガキが認められる。

【A類】 胴部が縱長の楕円形のもの（45・46）。

【B類】 胴部最大径が下半にあるもの（47～49）。

【C類】 胴部最大径が上半にあるもの（50）。

【D類】胴部が円筒状となるもの（51）。数は少ない。

【E類】口径に対して器高が低い寸胴のもの（52）。概B類と器形が共通する。

範：鉢形（A類）と深鉢形（B類）がある。底部の特徴から以下のように分類した。頸部に段を持つものが多い。調整は口縁部ヨコナデ、胴部は外面がハケメ・ヘラケズリ・ヘラミガキで、内面はヘラミガキが多い。

【A1類】鉢形で無底のもの（55）。

【A2類】鉢形で多孔のもの（53）。

【A3類】鉢形で単孔のもの（54）。数は少ない。

【B類】深鉢形で無底のもの（56）。

（2）土器の共伴関係と年代

今回の調査で土器が多く出土したのは、SD100・2050B河川跡やSI821B竪穴住居跡、SE7758井戸跡、SK7102・7710土坑である。以下、これらの検討を行なう（表69）。

1992・1993年度に調査を行なったSD2050B河川跡出土土師器は、第6・7層、第2～5層、第1層の大別3時期に分けられた。それぞれの年代は、第6・7層が6世紀後半、第2～5層は6世紀末～7世紀前半、第1層が7世紀中頃～後半である（宮城県教委2001b、村田2007）。大別3層の違いは

遺構・層位	H6										H7			H8					
	A	B1	B2	C1	C2	D	E	F	G1	G2	G3	G4	A	B	A	B	A1	A2	B
SD2050B・5層	3			1													1		1
SD2050B・4層	2			1	2	1			1	3									1
SD100・4層	3	1			1				2								2	1	
SD2050B・4層上部	1	3																	1
SD2050B・3層	2	4		1	2	1	2		1								1	1	
SD100・3層	2			1					1								1	1	
SD100-2050B合造3層	3	3	1	3	1				1	1	2	1	1	1	1	1	2	4	
SD100・2層																			
SD2050B・2層	4	2		1					1	1							1	1	
SD2050B・2層上部	2			1	1				1	1	2								
SD2050B・1層	4	7	1	1	2	1			1								1	4	
SD100-2050B・堆積土	2		2					2									2		4
SBZ15・IK・側方埋土	1																		1
SE7758・堆積土	1																		
SK7102・1層	3	1															2		1
SK7710・堆積土	2		2														1		

遺構・層位	審			小型 広口壺			小型壺			大型壺			瓶			計			
	A1	A2	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	D	E	A1	A2	A3	B	周
SD2050B・5層					1		1	3	1	1			1	1				10	6
SD2050B・4層				1									1					10	5
SD100・4層																		10	1
SD2050B・4層上部				2	1													1	6
SD2050B・3層							1	1										7	11
SD100・3層																		4	0
SD100-2050B合造3層									1									17	10
SD100・2層																		3	0
SD2050B・2層				1			1	3	1	1							2	15	8
SD2050B・2層上部					1	2	1	2	1	1	1	1	1	1				18	3
SD2050B・1層	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1							27	11
SD100-2050B・堆積土																		5	2
SBZ15・IK・側方埋土									1	1								6	0
SE7758・堆積土																	1	2	0
SK7102・1層				1			1	1	1								1	2	0
SK7710・堆積土							1	1	1								1	0	0

■ 報告書で示していない土器の点数

表69 古墳時代後期の主要遺構出土土師器

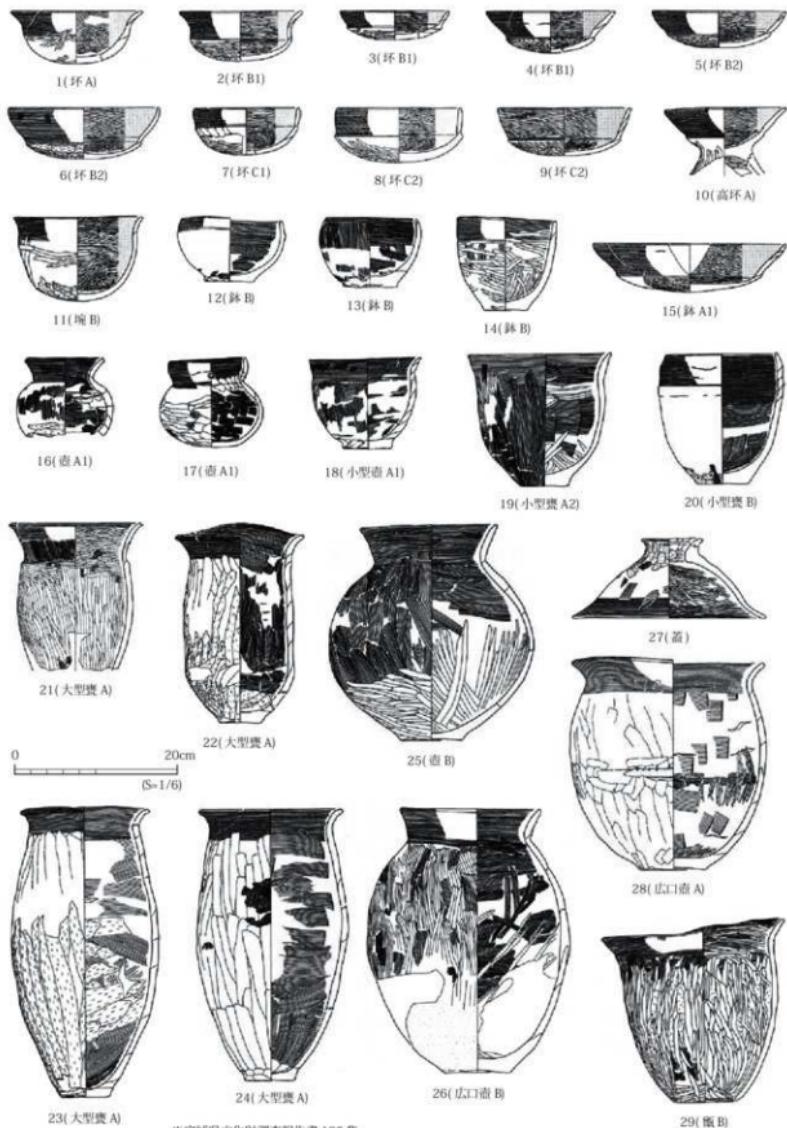
主として环と大型甕に認められ、第6・7層は环B類が多くA・C2類が伴い、大型甕はA類主体である（図版652）。第2～5層は环B類が主体でC～F類が伴い、大型甕はB・C類が多くA類が伴う。第1層は2～5層に較べてD類が増えるとともにB～D類には小型品が認められ、大型甕はD類が伴うようになる（図版653）。こうした成果に基づいてSD100・2050B出土土師器をみると、層位ごとに大きな違いは認められず、第2～5層と共通点が多い（表69）。したがって、今回の報告分は層別とはせず、全体を一つの土器群と捉えて特徴を述べる（図版654～657）。

SD100・2050Bからは、环B1（1～5・31～35・60～66）・B2（6・36・68）・C1（7・8・37～40・69・70）・C2（9・10・41・71・72）・F（14・15・46～48・76・77）・G1（11）・G2（42・43・73～75）・G3（44）・G4類（12・13・45）、塊A（51・81）・B類（52）、高环A（16・17・49・50・78～80）・B類（18）、鉢A1（82）・A2（83）・B類（19・20・84～87）、壺A1（90）・A2（91）・B類（104・105）、小型広口壺（22・92）、広口壺A（25・26・102）・B類（101・103）、小型甕A1（21・89）・A2（23・24・88）・B類（53）、大型甕A（29・54・55・96）・B（98・99）・C（27・28・97）・E類（100）、甑A1（93）・A2（94）・B類（30・95）などが出土している。これらのうち、内面がナデ仕上げとなる环G1～G4類は関東系土師器である。

在地土師器の特徴としては、すべての器種で体部もしくは頸部に段を持つものが多いこと、食膳具のほとんどが内黒であること、貯蔵具や煮炊具の胴部外面調整はハケメが多いこと、环は丸底で内外に段を持ち口縁部が外反・外傾するB1類が主体であること、高环は环B類に脚を付けたA類とそれをスケールアップさせたB類で、鉢は环を拡大したA類と大型甕や広口壺と胴下半部の形が共通するB類で構成されること、大型甕・壺・広口壺で胴下半部に最大径を持つものが認められることなどがあげられる。また、この時期の土師器に特徴的に認められる环類体部の段や壺類の頸部の段は、土器製作時に体部または胴部上端の内側に口縁部の粘土紐を付けてヨコナデを行った結果と考えられる（辻2007a・b）。

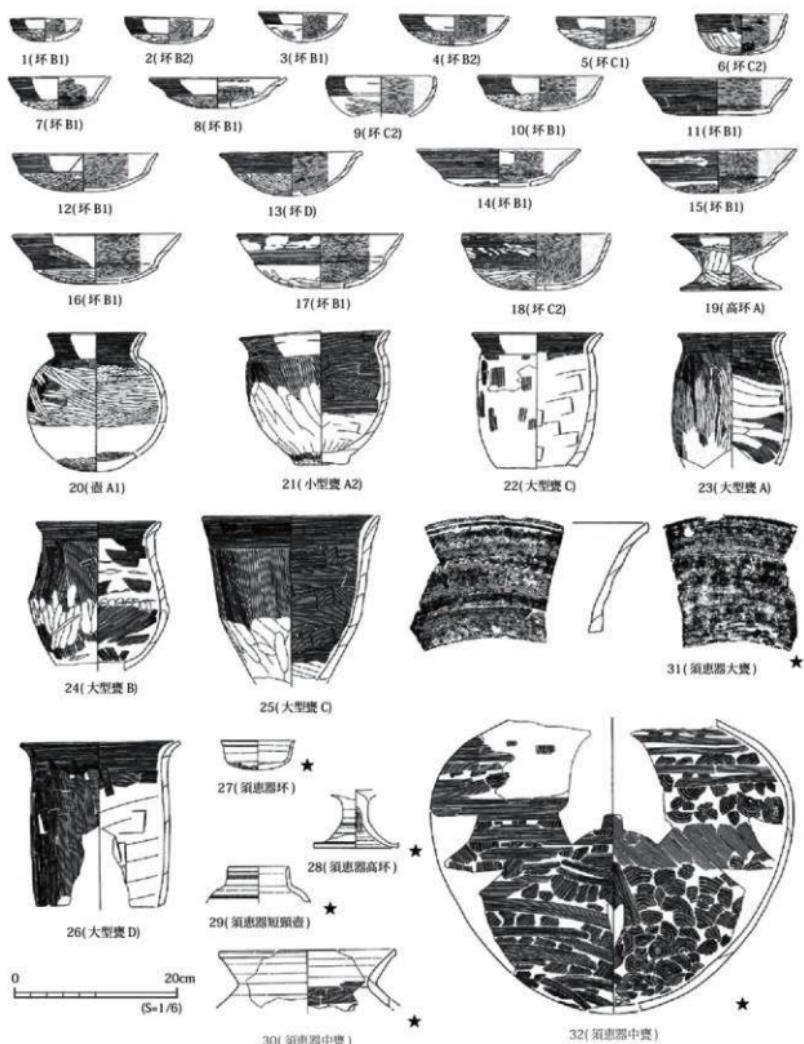
須恵器は环蓋・高环（57・106・107）・提瓶・甕・短頸壺・壺蓋（108・109）・甕（58・59・110～112）などが出土した。高环には長脚二段透かしが認められる（57）。これらは、TK217型式期に比定できる1層出土の环G蓋（第1分冊 図版185-32・33）を除くと、本遺跡の古墳時代後期須恵器の主体であるTK209型式期のものと考えられる。

また、SI821B竪穴住居跡の床面や掘方埋土から环B1、鉢B、小型甕B、大型甕A・C、甑A1、SE7758井戸跡堆積土からは环B1、大型甕D、甑A3・B、SK7710土坑1層からは环B1・B2、高环A、鉢B、小型広口壺、SK7710堆積土からは环B1・C1、鉢A1、広口壺B、小型甕B、甑Bなどが出土しており（図版658）（表69）、その特徴はSD100・2050B出土土器と共通する。こうした土師器は本遺跡内でも類例が多く求められ、代表例は前述したSD2050B河川跡第2～5層（宮城県教委2001b）のほか、SI491（宮城県教委1997）・2246住居跡（図版658）（宮城県教委1994c）、SD6517区画溝跡（図版659・660）、SK6777大土坑（図版661）（宮城県教委2009）などで、村田編年案の3段階、「栗廻式」（氏家1957）に位置付けられる。実年代は須恵器がTK209型式期を中心とし、TK217型式期をごく少量含むことから、6世紀末頃～7世紀前半と考えられる（村田2007・宮城県教委2009）。



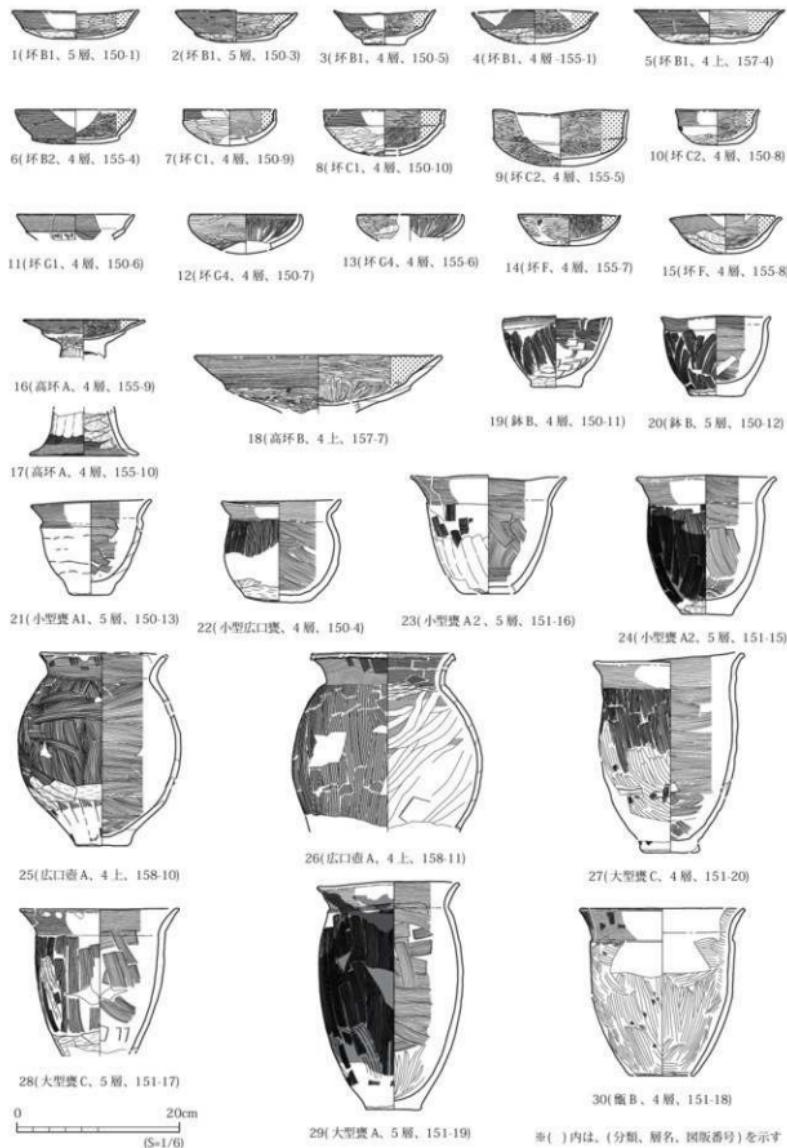
※宮城県文化財調査報告書186集

図版652 SD2050B河川跡 平成4・5年調査第6・7層出土土器

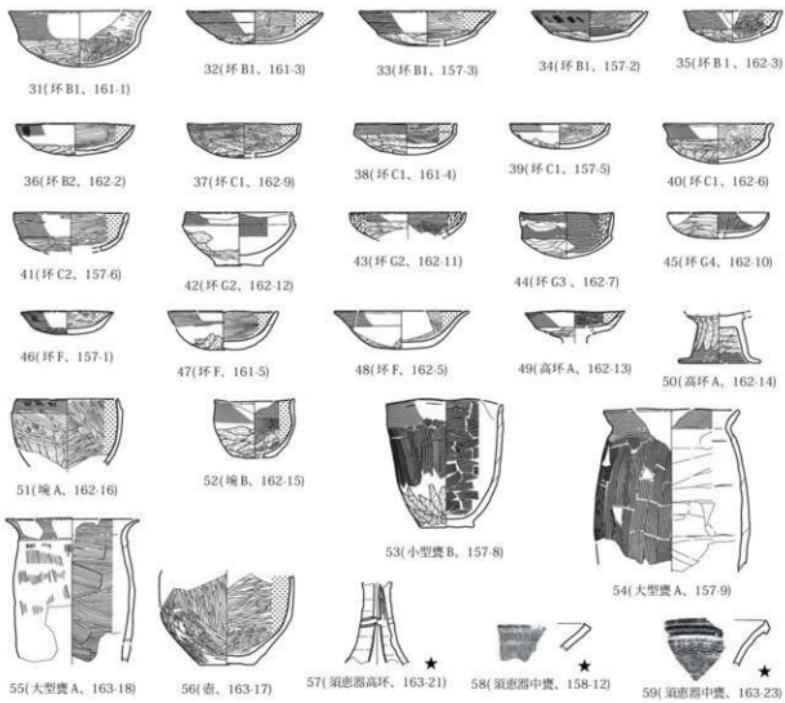


★ : 須済器
※ 宮城県文化財調査報告書 186集

図版653 SD2050B河川跡 平成4・5年調査第1層出土土器

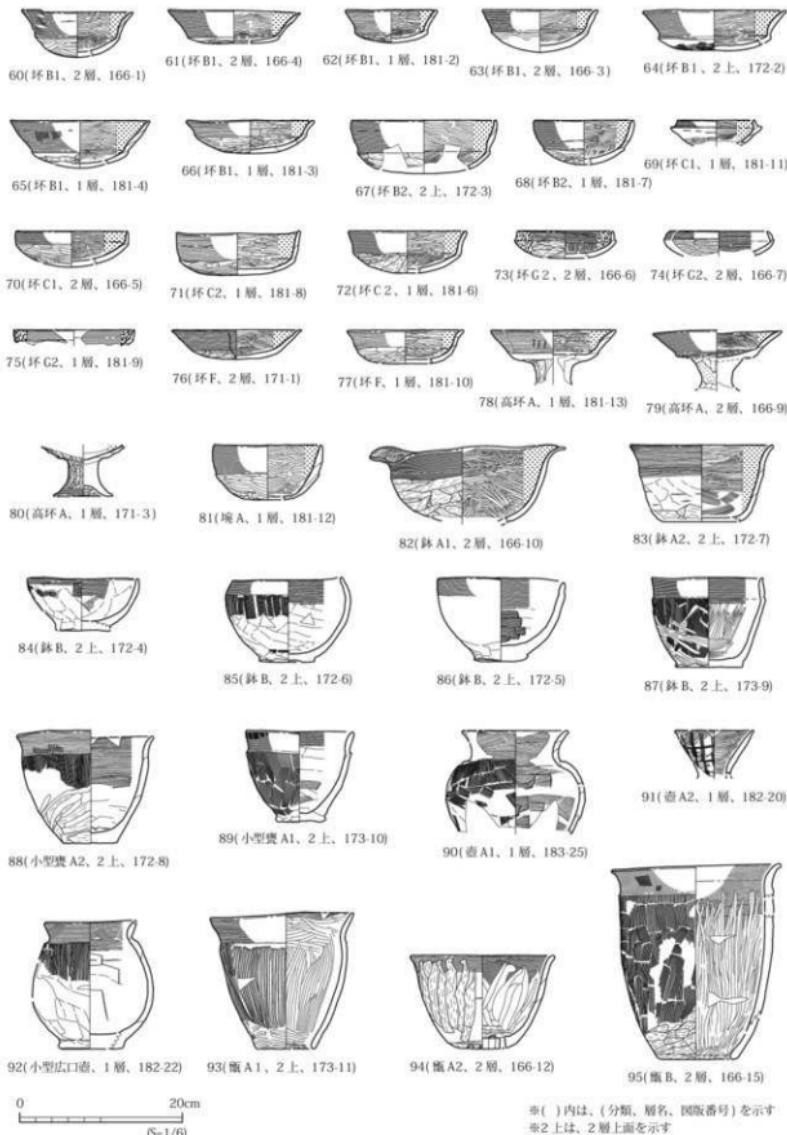


図版654 SD100・2050B河川跡出土土器1 - 4層上面・4層・5層



図版655 SD100・2050B河川跡出土土器2 - 3層

栗圓式土器は器形の規格化と調整の統一に加え、成形技術の転換（辻1990・2007a）によって成立した独自性の強い土師器である。このため、関東系土師器などの外來性の強い土器との識別が容易となっている。関東系土師器については、環G2類が須恵器环身模倣で内面は漆仕上げとなるものが多い。その特徴から鬼高系土師器（仙台市教委2005b）と呼ばれており、松本太郎氏はその出自が霞ヶ浦沿岸一帯にあることから、常陸型環と呼んでいる（松本2013）。環G3類も須恵器环蓋模倣で内面が漆仕上げであることから、出自は常陸南部を中心とする下野南部から下総北部にかけての地域の中に求められよう。



() 内は、(分類、層名、図版番号)を示す
※2上は、2層上面を示す

図版656 SD100・2050B河川跡出土土器3 - 1層・2層上面・2層



96(大型壺 A, 2 上, 175-15)



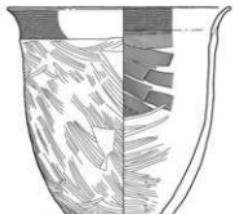
97(大型壺 C, 2 上, 174-14)



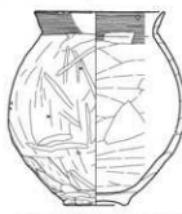
98(大型壺 B, 2 上, 173-12)



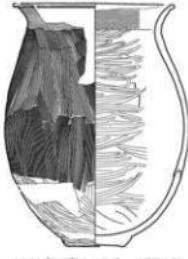
99(大型壺 B, 2 層, 167-13)



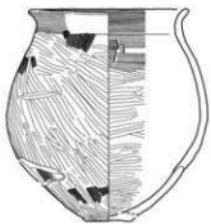
100(大型壺 E, 2 上, 174-16)



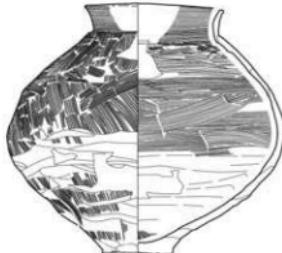
101(広口壺 B, 2 上, 175-18)



102(広口壺 A, 2 上, 173-13)



103(広口壺 B, 2 上, 175-19)



104(壺 B, 1 層, 184-27)



105(壺 B, 1 層, 182-21)



106(須恵器高环, 2 層, 167-2)

0 20cm
(S=1/6)

107(須恵器高环, 1 層, 171-6)

★



108(須恵器高环, 2 层, 171-7)

★



109(須恵器高环, 1 层, 185-34)

★



110(須恵器大壺, 1 層, 171-10)



111(須恵器壺, 1 層, 185-40)

★

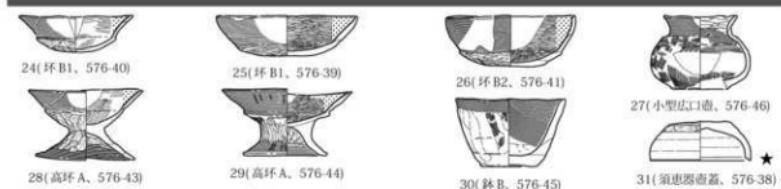
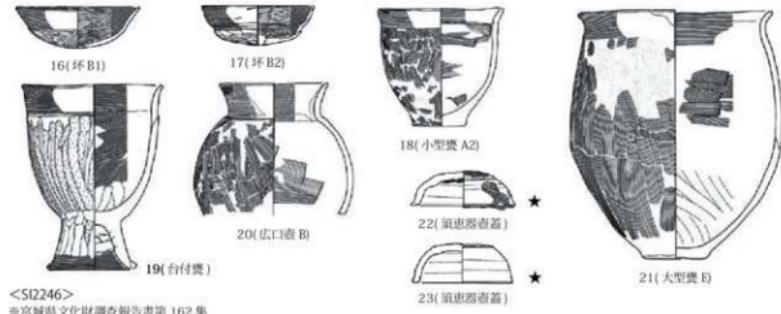


112(須恵器中壺, 1 層, 186-46)

★: 須恵器

※2 上は、2 層上面を示す

※()内は、(上)師器: 分類・須恵器: 器種名、層名、図版番号)を示す

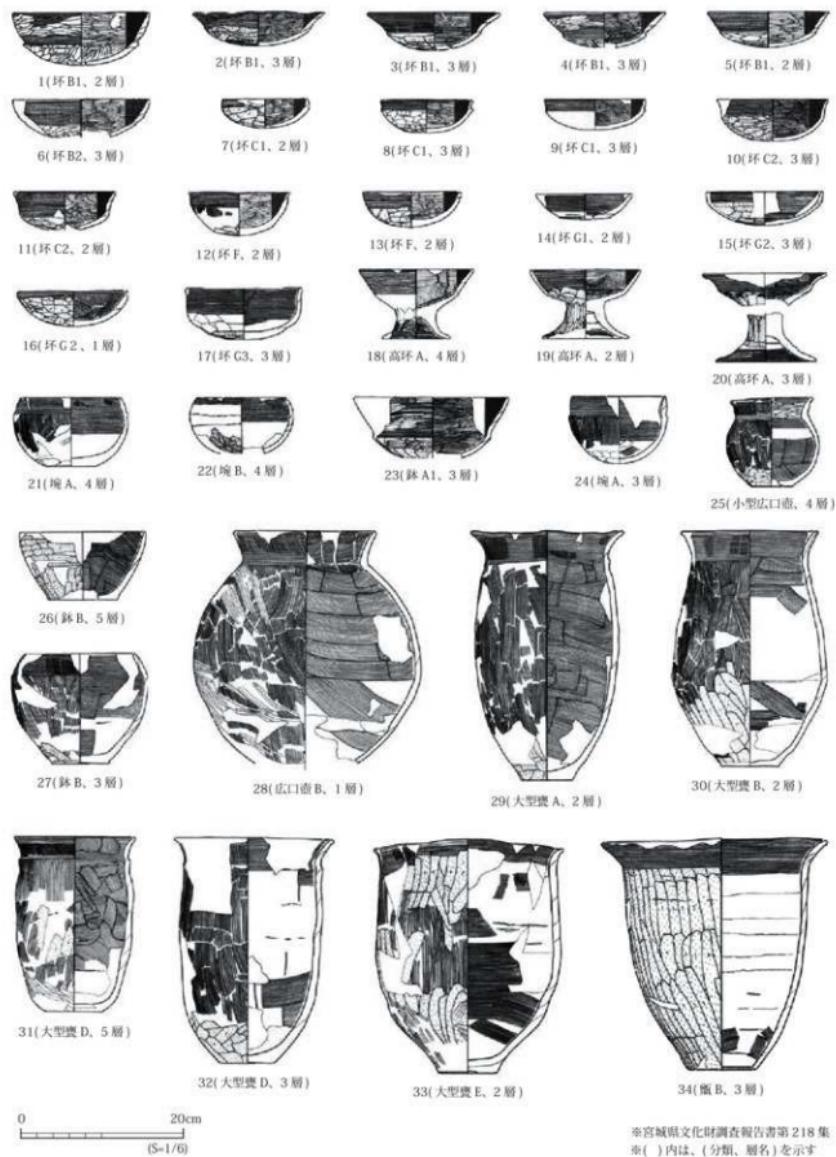


<SK7102>

★ : 須恵器

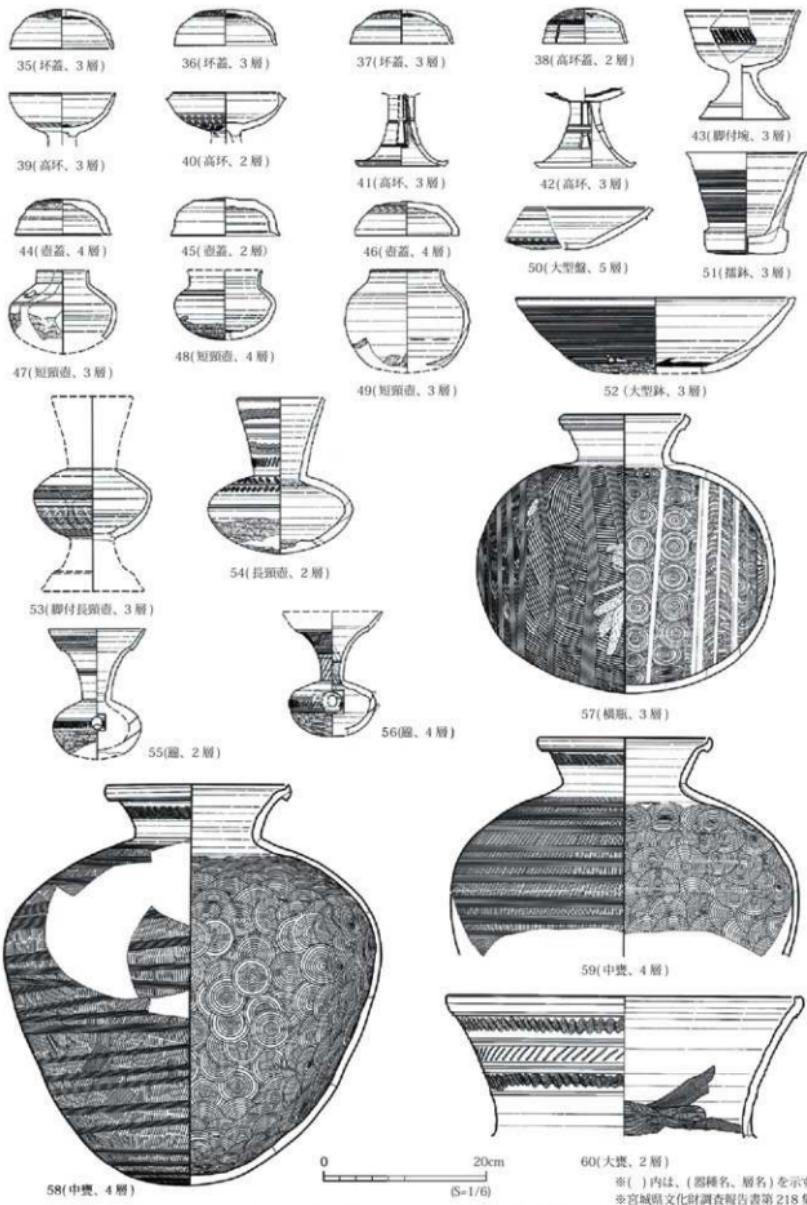
※SK7102は(器種名、本書の図版番号)を示す

図版658 八幡地区SI491・2246住居跡、SK7102土坑出土土器



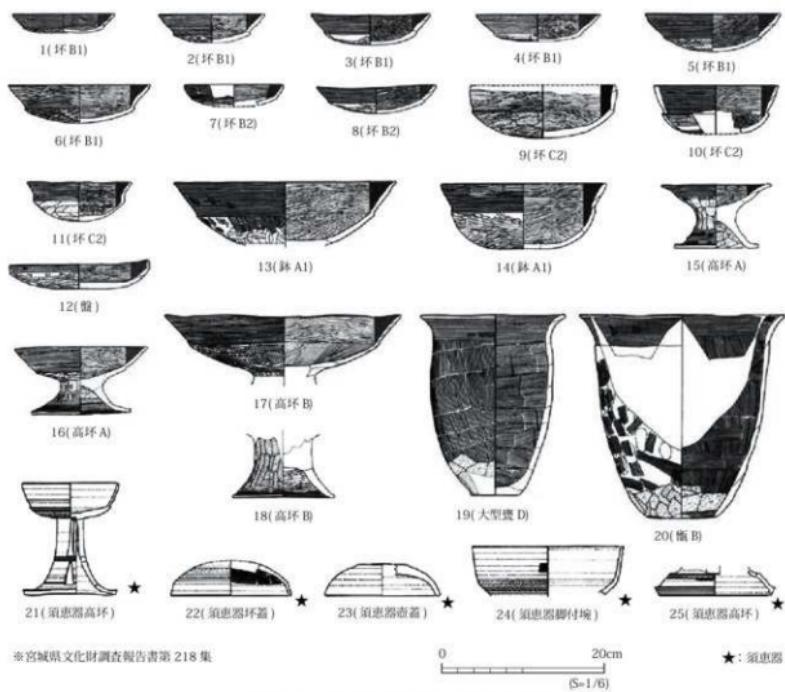
図版659 伏石地区SD6517区画溝出土土器

奈宮城周文化財調査報告書第218集
※()内は、(分類、層名)を示す



図版660 伏石地区SD6517区画溝跡出土須恵器

率()内は、(器種名、層名)を示す
奈良城県文化財調査報告書第218集



図版661 伏石地区SK6777大土坑出土土器

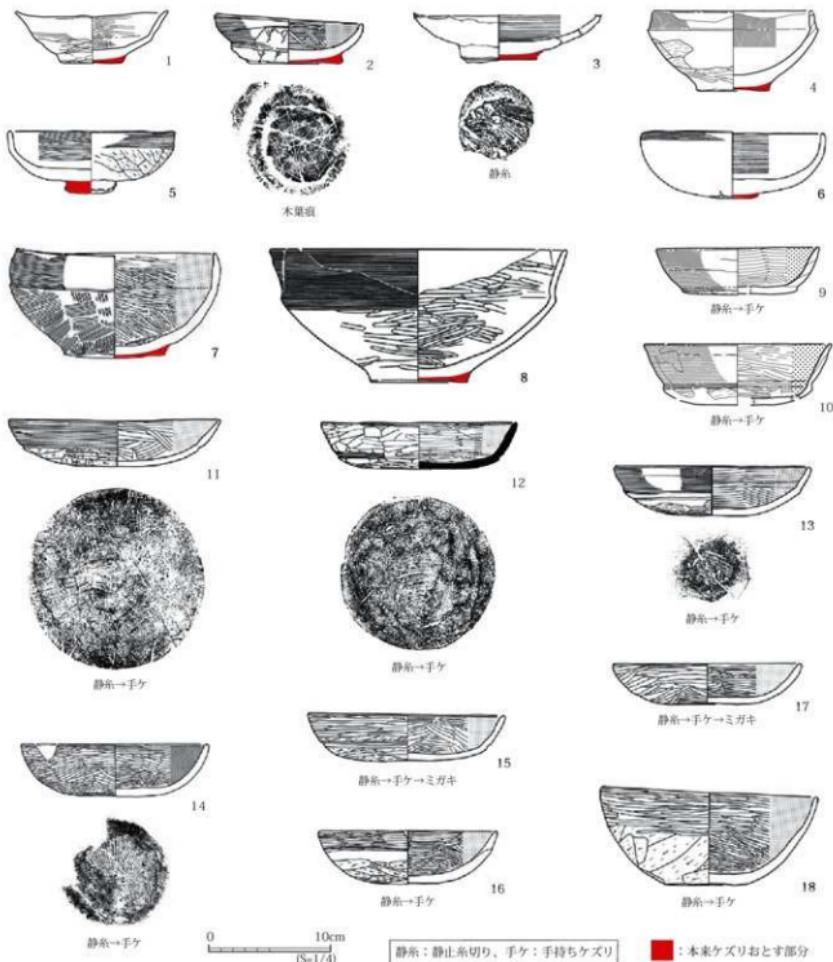
(3) 7世紀から8世紀の土師器製作について

八幡・伏石地区的栗圓式土器を検討する際、山王・市川橋遺跡周辺の土師器を見直した結果、7～8世紀代の環坏類の成形と6世紀末～7世紀中頃の壺瓶類の製作についていくつかの新知見が得られた（註1）。

【环の成形技法】（図版662）

1～8は、底部中央が下方に突出する。これらは本来、平底でつくられたのち粘土円板の周縁をケズリ落として丸底に仕上げられるものが、何らかの理由で突出部を残したまま焼成されたものと考えられる。このうち2や図版528-2（第2分冊）には木葉痕が残っており、作業台上で土器を回転させながら製作されたと考えられる（註2007a）。环のほかに塊（7）や环を大型化した鉢A1類（8）でも認められることから、土師器食膳具は同じ技法でつくられたのち、丸底に仕上げられたとみられる（註3）。

こうした特徴は、在土地上師器だけでなく関東系土師器にも認められ、3・4は粘土円板を残し前者は静止糸切り痕が観察できる。さらに、4の胎土は在地土師器と同じく海面骨針を含むことから、両



図版662 土器師食器の製作痕跡

者は搬入品ではなく現地で製作されたものと考えられる。同様の例は、栗原市御駒堂遺跡でも認められた（宮城県教委2016b）。

9～18は、底部中央に静止糸切り痕を残すものである。扁平な有段丸底坏（9～13・15）や無段平底坏（14・16・17）、塊（18）で認められた。時期は11・13が8世紀前半で、残りは8世紀中頃～後半である。扁平化が進む土師器食器の製作に回転台が使われ（宮城県教委1985）、台からの切り離しに糸切り技法が用いられたと考えられる。須恵器も8世紀前半から静止糸切り坏の生産が開始しており（日の出山窯跡群など）、ほぼ同時期に土師器と須恵器へ糸切り技法の導入が行われた。

土師器に回転台と糸切りが認められることは、非クロ成形とみていた土師器环塊類の中に回転ナデで仕上げられたものが存在することを示しており、今後はこうしたことを念頭に置いて土器の観察を行い、土師器生産に対する須恵器工人の関与のあり方を具体的に検討する必要がある。

【鉢・壺・甌・瓶の製作】

本遺跡出土の土師器煮炊具と貯蔵具には、器種を超えて胴下半の器形が共通するものがあり、大型品の場合、その上端に疑似口縁が観察できたものが多い。そこで、こうした関係を検討するため、本書のSD100・2050B出土土器と過去に報告したSD2050B出土土器（宮城県教委2001b）を同一縮尺で重ねてみた結果、器形の共通性は2つのグループが認められた（図版663・664）。

a) 大型甌A・C・D類、小型甌A類・B類、瓶A類（②・③・⑨）

大型甌A・C・D類の胴下半と小型甌A・B類、瓶A類の器形が重なるもので、大型甌の胴下半上端には疑似口縁があり、細かな刻みが認められる（第1分冊 図版174-14など）。疑似口縁は、大型甌の上半を支える強度を得るために乾燥期間があったことを示しており、刻みは粘土接合部分の表面積を増すための工夫と考えられる。小型甌A類・小型甌B類の場合は、乾燥期間をおかずには口縁部の粘土を積んでヨコナデを行った。また、瓶A類は小型甌A2類の底に穴を開けたか底部円板ごと取り去ったものである。

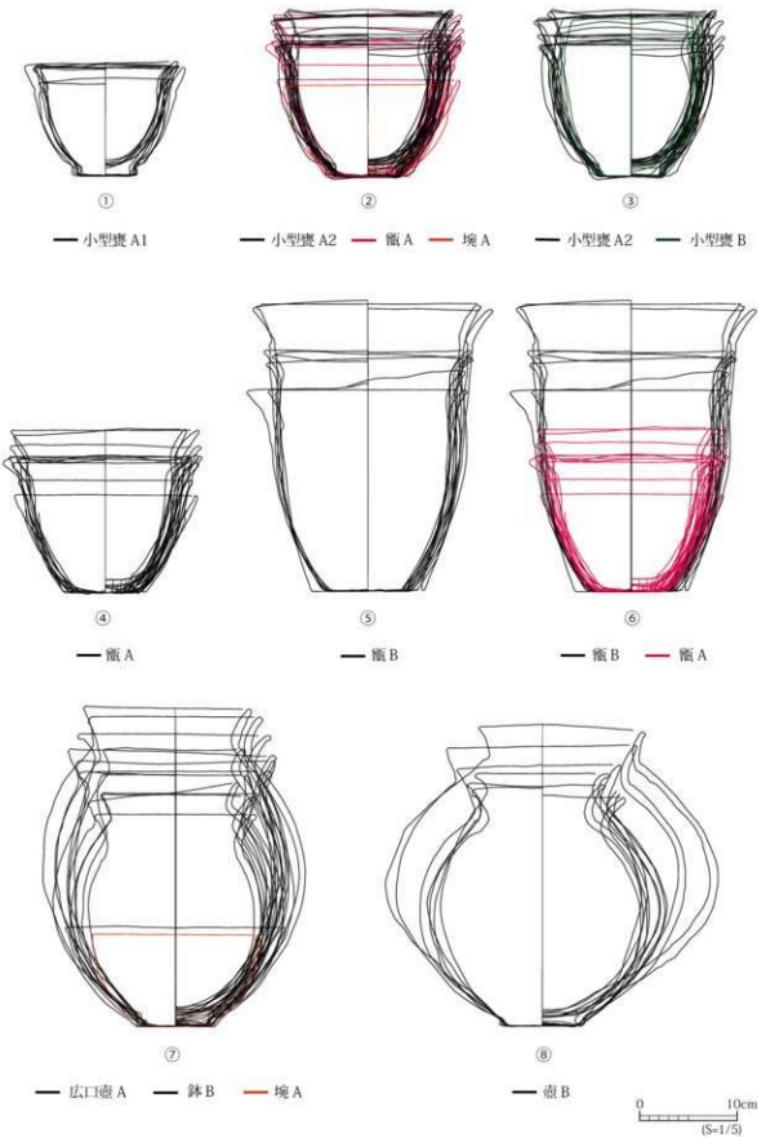
b) 広口壺A・B類、小型広口壺、大型甌B類、鉢B類、塊A類大型（⑦・⑩）

広口壺A類や大型甌B類の胴下半と鉢B類、塊A類大型の器形が重なるもので、広口塊A類、壺や大型甌の胴下半上端には疑似口縁があり、刻みが施された（第1分冊 図版173-12・13など）。鉢B類、塊A類の場合は、乾燥期間をおかずにはヨコナデされたり（鉢B類）、内側に口縁部の粘土紐を付けてヨコナデが行われた（塊A類）。

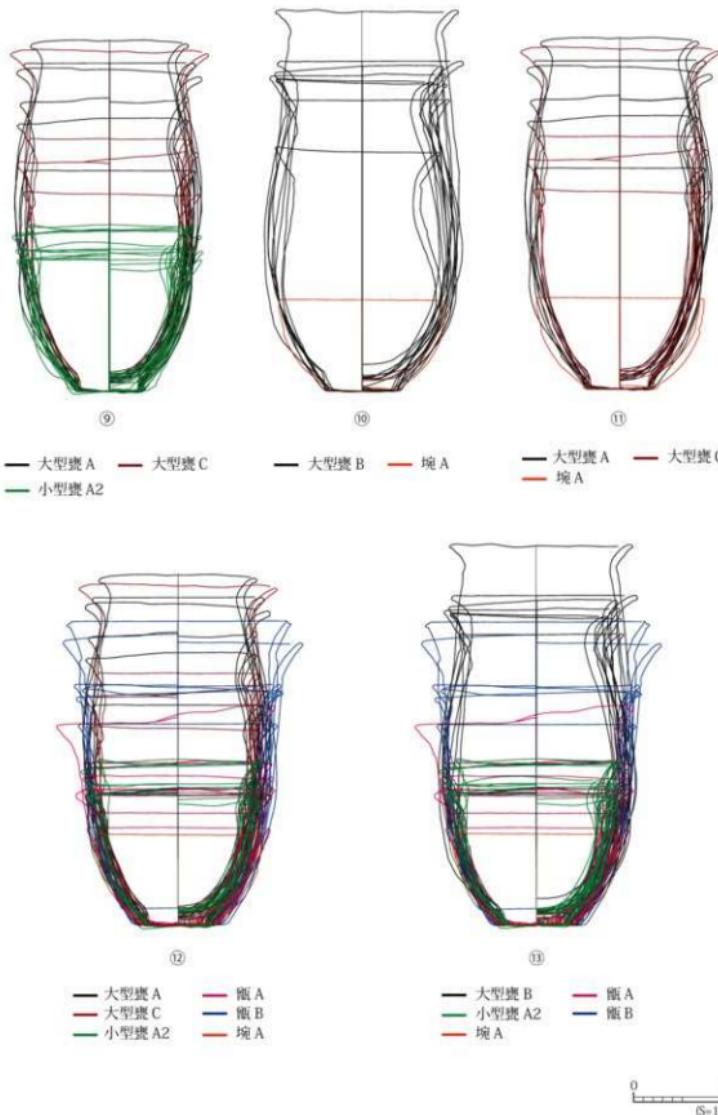
大型甌A～C類、広口壺A類の胴下半と小型甌A・B類、瓶A類、鉢B類、塊A類大型は、器形の共有関係が認められた。そこで、栗原式土器全体についてみると、器種や細別器種、器形との関係は以下の3ケースにまとめることができる（図版665）。

I) 坯と器形が同じかスケールアップするもの：塊A類小型・B類、高环A・B類、鉢A類…坏と器形や製作技法が同じで、それに脚を付けたのが高环A類、全体的に拡大したのが鉢A類、拡大して脚を付けたのが高环B類、器高を増したものが塊A類小型・B類である。

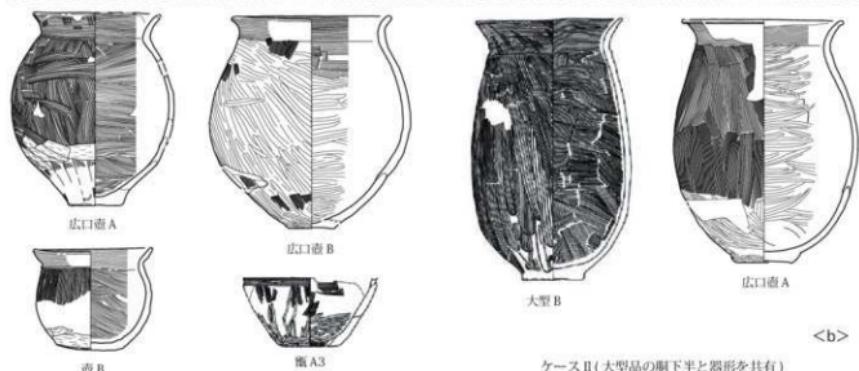
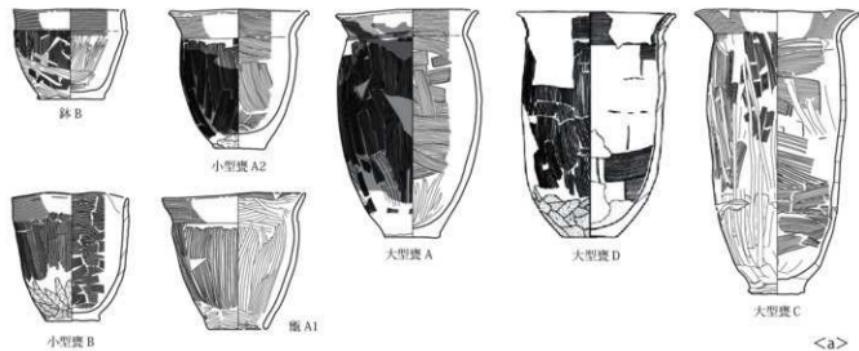
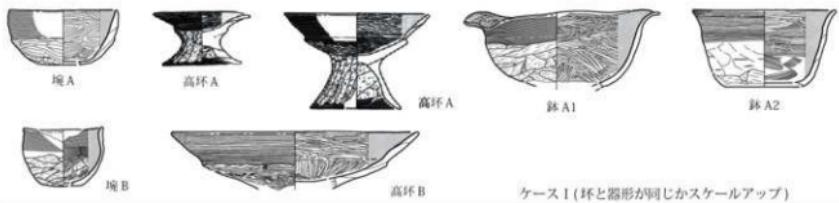
II) 大型品の胴下半と器形の共通性が認められるもの：大型甌A～C類、広口壺A・B類と小型広口



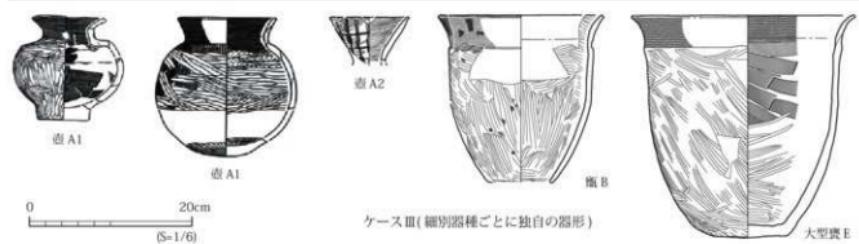
図版663 土器鉢・壺・甕の器形1



図版664 土器器鉢・壺・甕・壺の器形2



ケースII(大型品の脚下半と器形を共有)



図版665 土師器における器形の共有

壺、小型甕A・B類、壺A類、鉢B類、塊A類大型…a・bの2グループに分けられる。

Ⅲ) 他と器形の共通性が認められないもの：壺A・B類、大型甕E類、壺B類

壺A類は数が少ないと、壺B類は器形の重複部分が少なく（図版663-⑧）、個体ごとに異なることから、壺類は貯蔵具としての機能のほかに祭器など特別な用途に使用されたと理解できる。壺B類は胴下部のすぼまりが小さいため他器種との共通性が認められない。これと器形や調整が類似し、数が少ない大型甕E類は、壺としてつくられたものが何らかの理由で底部円板を除去しないまま焼成された可能性が考えられる。

これまでの検討から、栗圓式土器は食膳具に器種の違いを超えた器形の共通性や全体または部分的な拡大（ケースI）、煮炊具や貯蔵具、一部の食膳具については大型品胴下部との器形の共通性=集約（ケースII）が認められ、細別器種ごとに独自の器形を持つもの（ケースIII）は少いことがわかった。このうちケースIは、古墳時代中期の南小泉式以降の土師器に認められるが、ケースIIは栗圓式からの特徴であり、以後の煮炊具や貯蔵具はこの製作ルールでつくられたものが主体となる。

栗圓式土器の成立にあたっては、成形技術の転換・形態の規格化・調整の統一が行われ、東北地方の土師器変遷の中で大画期となったことが指摘されている（辻1990・2007a）。栗圓式土器の規格化は、食膳具の細別器種集約化（村田2007）に加え、煮炊具や貯蔵具における器種や細別器種を超えた下半部の器形統合・調整の統一によって図られた。これにより土器製作技術の共有が容易となり、短期間かつ広範囲に「栗圓式土器様式圈」（辻2007b）が形成されたのである。

（4）仙台平野北東部における7世紀の須恵器生産

山王・市川橋遺跡の古墳時代後期の集落跡から出土した須恵器は、TK209～217型式期のもので前者が圧倒的に多い（宮城県教委2001b・2009）。器種は环H身・环H蓋（660-35～37、661-22）・环G身（653-27）・环G蓋・有蓋高环（660-40）・高环（653-28、655-57、657-106・107、660-39・41・42、661-21・25）・有蓋高环蓋（658-12、660-38）・脚付塊（658-11、660-43、661-24）・大型盤（660-50）・鉢（658-13）・大型鉢（660-52）・短頸壺（653-29、660-47～49）・壺蓋（657-108・109、658-22・23・31、660-44～46、661-23）・壺・長頸壺（660-54）・脚付長頸壺（660-53）・瓶（658-14、660-55・56）・平瓶・提瓶・横瓶（660-57）・擂鉢（660-51）・壺・中甕（653-30・32、655-58・59、657-112、660-58・59）・大甕（653-31、657-110、660-60）などがある。高环の脚部は二段透かしの長脚と透かしのない短脚が認められる。

主体を占めるTK209型式期をみると、高环や脚付塊が多い一方、环類が非常に少なく壺類の貯蔵具が多く、墳墓への供献目的とした生産形態であったと考えられる。同時期の集落に較べて出土量が突出して多く、器種がバラエティー豊かであること（村田2002）、焼き歪んだ製品や他の破片が軸着した製品が認められたこと、本遺跡の東に隣接する高崎古墳群でTK209型式期（SR32窓跡）、高崎遺跡でTK217型式期（SR1678窓跡）の地下式窓窓が確認されたことから、墳墓や拠点集落に隣接して規模の小さな生産地が設けられたと考えられる。以下、胎土やつくりの特徴から本遺跡への須恵器供給について考えてみたい（註3）。

【SD100・2050B河川跡出土須恵器の胎土】

今回報告するSD100・2050B河川跡出土須恵器の胎土を観察すると、6つに分けられた。

- 1) 海綿骨針や白色粒子・黒色粒子を含む。色調は灰色を主とするが、両面または内面がセピア色となるものがある。また、表裏には両面黒色で断面が灰白色となるものが認められる。
 - 2) 海綿骨針は認められないが、他の特徴は1類に似る。
 - 3) 黒色粒子が多く、白色粒子や石英を含む。焼成不良品は灰白色で軟質である。
 - 4) 白色粒子が多く、石英を含む。つくりは稚拙なものが多い。
 - 5) 黒色粒子や白色粒子、石英を含む。3類に似る。焼成不良は灰白色。色調は内面や断面がセピア色となるものがある。
 - 6) 黒色や白色の細粒を少し含むが、混入物が少なく精選された胎土である。薄手で焼成良好である。
- 胎土観察を行った破片数は100で、それぞれの内訳と割合は胎土1 ($24/100 = 0.24$)、胎土2 ($18/100 = 0.18$)、胎土3 ($10/100 = 0.10$)、胎土4 ($7/100 = 0.07$)、胎土5 ($35/100 = 0.35$)、胎土6 ($6/100 = 0.06$)、である。

【高崎古墳群SR32窯跡製品の特徴】

高崎古墳群は、山王・市川橋遺跡東側の丘陵に立地し、円墳1基確認されているが時期は不明である。西側斜面で須恵器窯窓が1基検出された（多賀城市教委2011b・c）。須恵器の胎土は黒色粒子が多く、ほかに白色粒子や石英を含んでおり、3類の特徴と共通する。また、色調は灰色で高崎遺跡SR1678の製品と較べて焼き締まりが良い。器種は壺蓋・中壺・大壺がある（図版666）。

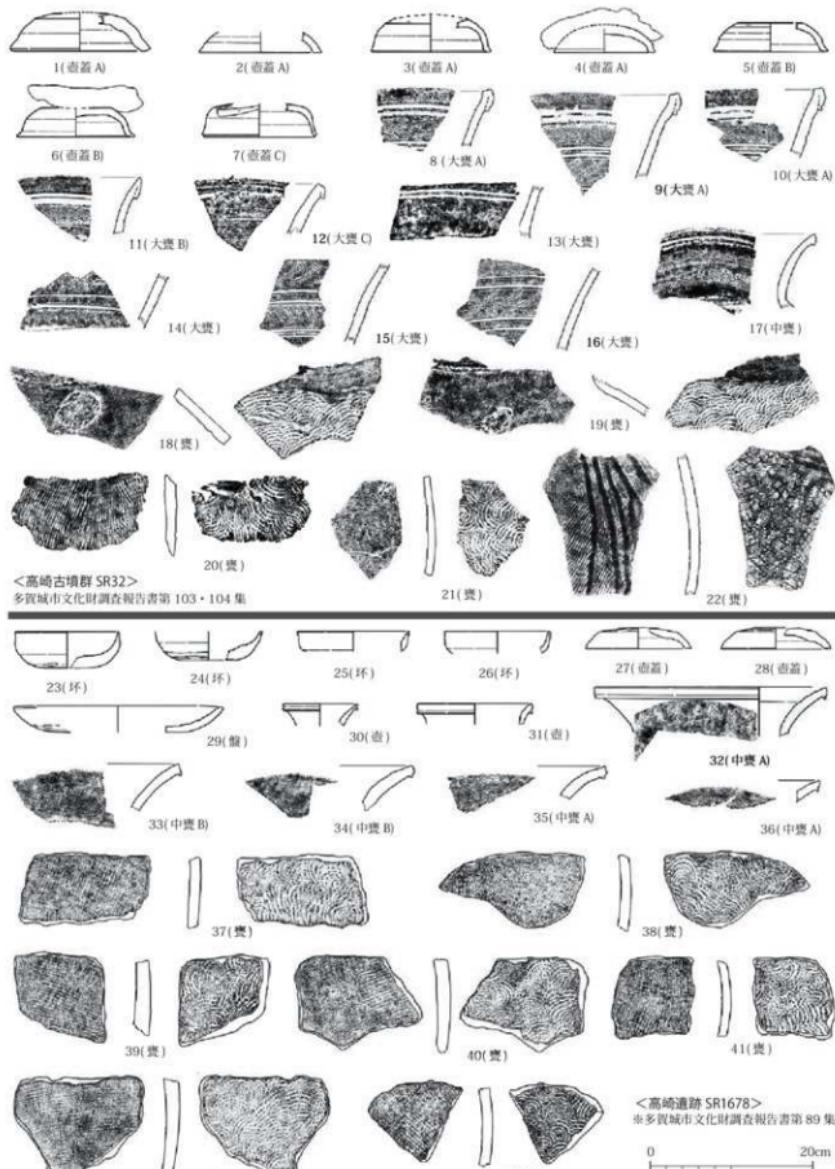
壺蓋には厚手で天井部が丸く、ヘラ切りののち、体部上端が回転または手持ちケズリ後、天井部ナデが施されるA類（1～4）と、天井部は平坦で、回転または手持ちケズリ後、天井部ナデが施され、口縁端部は外につまみ出されるB類（5・6）、薄手で天井部が平坦となり、体部上端は手持ちケズリが施されるC類（7）がある。

中壺や大壺の胴部は外面平行タタキ・内面同心円アテ具、外面平行タタキ・内面同心円アテ具→カキメ、外面平行タタキ・内面格子アテ具が認められる。中壺は口縁上端が上下につまみ出される。頸部は櫛描波状文のみで横位区画沈線がない（17）。

大壺の頸部はカキメが施されるものが多く、補強帶は認められない。口縁部の特徴からA～Cの3類に分けられる。A類は口縁部に粘土を貼り付けて広く肥厚させて断面が四角となり、口縁上端は凹む（8～10）。頸部は1本または2本一組の横位区画沈線間に櫛描波状文や斜位沈線が施される。B類は口縁部に粘土を貼り付けて広く肥厚させるが、断面は先細りとなる（11）。頸部文様はA類と共通する。C類は口縁上端が上下に弱くつまみ出されるもの（12）である。横位区画沈線は1本でその間に櫛描波状文が施される。

【高崎遺跡SR1678窯跡製品の特徴】

高崎遺跡は、山王・市川橋遺跡東側の丘陵に立地する古墳時代から江戸時代の遺跡で、北東部の東側斜面から須恵器窯窓が1基検出された（多賀城市教委2007c）。須恵器の胎土は白色粒子が多いほか、ガラス粒を含み空隙が多い。こうした特徴は4類と共通する。製品は高崎古墳群SR32に較べて、



図版666 高崎古墳群SR32窯跡、高崎遺跡SR1678窯跡出土須恵器

厚手でつくりが稚拙である。器種には壺・盤・壺蓋・瓶・横瓶・甕があり、焼台も認められる（図版666）。

壺は口径13cm以下の小形で底部が厚く、ヘラ切りののち手持ちヘラケズリが施される（23～26）。盤は厚手で、ロクロの回転が弱く、口縁端部が細かく波打つ（29）。壺蓋は厚手で、口縁端部は弱く凹み、体部上端は手持ちヘラケズリ、天井部はナデである。SR32の製品に較べて器高が低く扁平である（27・28）。壺類の口縁部は下につまみ出され、細い隆線状である（30・31）。甕は胴部破片からみて、中甕と大甕がある。中甕の頸部は横位区画沈線がなく、櫛描波状文が1または2段施される。口縁端部の形態から、口縁端部が上下につまみ出されるA類（32・35・36）と、下につまみ出されるB類（33・34）がある。大甕の口頸部の形状は不明である。甕の胴部はタタキによる凹凸が弱い。外面は平行タタキと格子タタキがあり、内面は同心円アテ具である。

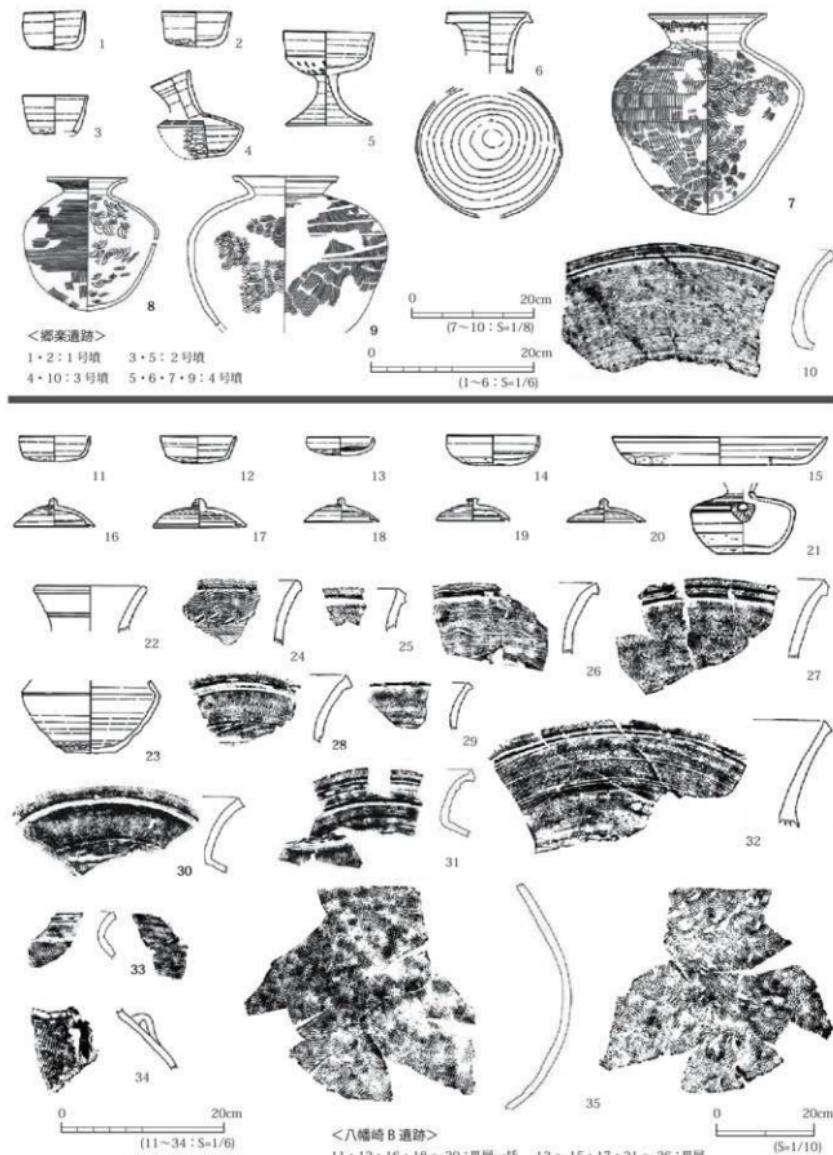
【仙台平野北東部における7世紀の須恵器生産】

SD100・2050B河川跡から出土した須恵器は、胎土から6つに分けられた。3類はSR32窯と共通すること、その中には壺蓋B類（第1分冊 図版185～34・195～5）、大甕A類（同 図版171～10）に類似するものが認められること、さらに甕類で胴部外面にカキメが施される点が共通することなどから、高崎古墳群SR32窯跡の製品と考えられる。4類はSR1678窯と共に共通すること、ともに厚手の盤（同 図版198～1）が認められることから、高崎遺跡SR1678窯跡の製品とみられる。また、5類は3類に似ること、甕類の胴部外面にカキメが施されるものが認められることから、SR32窯跡の製品とみておきたい。

1類は海錦骨針を含むもので、郷楽遺跡1～4号墳や八幡崎B遺跡Ⅲ層などのTK209～217型式期の須恵器（図版667、利府町教委1988、宮城県教委・利府町教委1990）と特徴が似ることから、生産地は山王・市川橋遺跡から北に3km離れた利府町の丘陵地に求められている（村田2002）。2類は海錦骨針を除く特徴が1類と似ることから、利府町域とみておきたい（註4）。また、6類は精選され、つくりも良いことから搬入品と考えられる。

山王・市川橋遺跡の古墳時代後期集落に供給された須恵器は、現地生産品とごく少量の搬入品で構成された（註5）。TK209～217型式期の在地窯は須恵器の胎土と製作技法から、集落東側に隣接する丘陵（高崎遺跡・高崎古墳群）と集落から北に離れた利府町内の丘陵の2箇所に求められる。TK209期の生産形態は、高壺や脚付塊、貯蔵具が多い一方、壺類が非常に少ないとから、墳墓への供獻を目的とした（=葬送儀礼と直結した）短期間かつ小規模な操業と考えられ、需要に応じて窯場が移動したとみられる（註6）。

これに対し、TK217期は本遺跡や八幡崎B遺跡を参考にすると、壺Gを主体とした食膳具と貯蔵具の生産に転換へと変換したとみられる。その契機としては、郡山I期官衙のような律令支配施設の造営が考えられるが、仙台平野北東部では同時期の城柵・官衙の様相が不明であり、窯の位置とともにいかなる目的で開窯されたのかが今後の課題といえる。一方、利府町域の窯業生産は、8世紀前半に入ると東へ移動して多賀城創建期における須恵器生産的一大拠点（硯沢窯跡）を形成した（宮城県教委1987、利府町教委2011）。8世紀末以降はさらに奥へ移って（大貝窯跡・春日窯跡群）、台原・



*郷楽遺跡：宮城県文化財調査報告書第134集
*八幡崎B遺跡：利府町文化財調査報告書第4集

図版667 郷楽遺跡1~4号墳、八幡崎B遺跡Ⅲ層出土須恵器

小田原窯跡群とともに多賀城などへの瓦生産を担っている（宮城県教委1987、利府町教委1991・2011）。したがって、利府町城の古代窯業生産は、現時点で確認できていない8世紀後半代も須恵器生産を継続し、陸奥国官窯跡群の東の拠点として長期間機能していた可能性が考えられる。そして、その基盤形成は、これまで検討したTK209～217型式期の須恵器生産を考慮すると、7世紀代から行なわれていたとみることができよう。

註

註1 当該期の土師器成形技法については、辻秀人氏や群馬県埋蔵文化財調査事業団による先行研究（辻2007a・b、群馬県埋蔵文化財調査事業団1997）があり、本論はそれらの分析視点や成果に基づくところが大きい。

註2 辻秀人氏はこれを粘土円板技法と呼び、栗圓式から国分寺下層式まで継続して用いられたこと、また、本技法は須恵器環Hの成形技術と共通性が求められ、栗圓式の成立は須恵器生産と深い関わりがあることを指摘している（辻2007a・b）。

註3 高崎古墳群SR32窯跡や高崎遺跡SR1678窯跡の須恵器観察にあたっては、多賀城市埋蔵文化財調査センター（当時）の相沢清利氏に配慮いただいた。

註4 1類と地點は同じでも、採取場所や深さによって海綿骨針の含有量に違いがあった可能性も考えられる。

註5 胎土の観察は、時間の関係でSD100・2050B河川跡に限定している。今後は個体数を増やして考察の精度を高める必要がある。

註6 山王・市川橋遺跡のTK209型式期の須恵器の特徴として、壺蓋に較べてセットとなる小形短頸壺の出土量が少ないことがあげられる。使用形態が本来の用途と異なる可能性があり、今後の検討課題の一つである。

3. 奈良・平安時代の土器

（1）主な遺構出土土器の年代

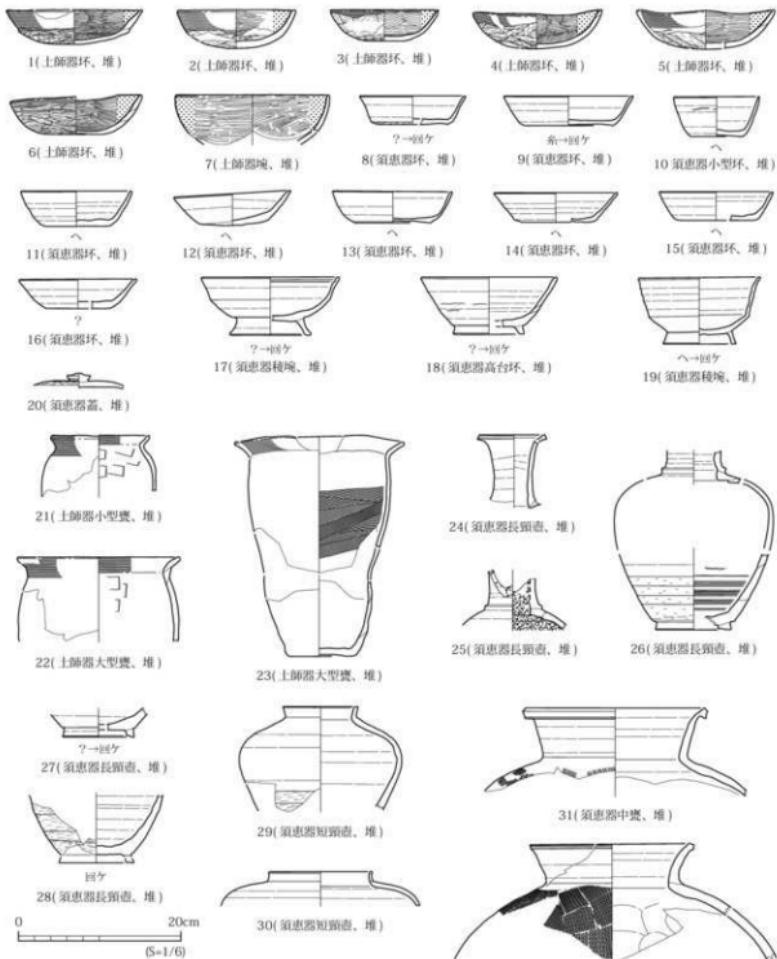
今回の調査で出土した奈良・平安時代の土器は、遺構確認にとどまるものが多く、まとまって出土した例は少ない。一方、本遺跡や隣接する多賀城跡では、長年の調査によって年代観が与えられた資料の蓄積が進んでいる。そこで、ここでは出土数が多い遺構について、それらと比較しながら年代を検討する。

【SD180B・461区画溝跡、SK7090土坑、SX7124・7128整地層出土土器】

土師器環は平底状の有段環と無段平底環が主体を占め、無段丸底環やロクロ調整の環が少量伴う。小型甕や大型甕は頸部に段がなく胴部はナデ仕上げで、後者の胴部最大径は上半にある。須恵器環は皿形が主体で逆台形は少なく、ヘラ切り無調整と再調整のものが半々認められる土器群である。

〈SD180B区画溝跡〉（図版668）

堆積土から多量の土器が出土しているが、土器の特徴は共通することからまとめて検討を行う。土師器は非ロクロ調整で、环・壺・小型甕・大型甕がある。环は内黒で無段平底（3・4・6）が主体を占め、これに外面のみに段がある有段丸底（1）や無段丸底（2・5）が伴う。环はすべて内黒で、壺は両黒（7）である。小型甕（21）や大型甕（22・23）は頸部に段がなく、外面調整はナデである。



後者は胴部最大径が上半にある。

須恵器は壺・小型壺・高台壺・稜塊・蓋・短頸壺・長頸壺・中甕などがある。壺は皿形で（8・9）、底部切り離しと再調整はヘラ切り（10～15）が多く、ほかに回転糸切り後回転ケズリ（9）、切り離しが不明で回転ケズリがある（8）。高台壺の壺部は逆台形で、底部は切り離しが不明で回転ケズリが施される（18）。稜塊は壺部が浅いもの（17）と深いもの（19）があり、前者は口縁部内面に沈線が巡り、高台が高い。底部は切り離しが不明で回転ケズリが施される。蓋は擬宝珠つまみが付く（20）。中甕の胴部は外面が平行タタキで（31・32）、32の内面は無文アテ具である。ほかに短頸壺（29・30）や長頸壺（24～28）が認められる。

〈SD461区画溝跡〉(図版669)

堆積土から多量の土器が出土しているが、土器の特徴は共通することからまとめて検討を行う。土師器は非ロクロ調整がほとんどを占め、ロクロ調整の壺（1）が少量伴う。器種には壺・盤・塊・稜塊・蓋・広口壺・小型甕・大型甕などがある。壺は口縁部が内弯し、外面のみに段がある有段壺（3・5～7・10）と無段平底壺（2・8・9）が主体を占め、これに無段丸底壺（4・13）が少量伴う。有段壺は段の位置が下がるため、全体として扁平となる。これらのすべては、内面がミガキのち黒色処理（以下、内黒とする）が施される。

また、無段壺は両面ともミガキのち黒色処理（以下、両黒とする）されるものが多い。盤は有段平底で内黒（12）と平底で両黒（11）が認められる。塊は弱い丸底（14・18）と平底（15～17）がある。すべて内黒で外面もミガキとなるものが多い（14・16～18）。これに伴う蓋は両黒で、宝珠つまみが付く（39・40）。稜塊は数が少ない。盤・塊・稜塊は両面ミガキ仕上げが多く、無段壺もその傾向が認められる。小型甕（42・45）や大型甕（43）、広口壺（44）は頸部に段がなく、外面はハケメが多い。

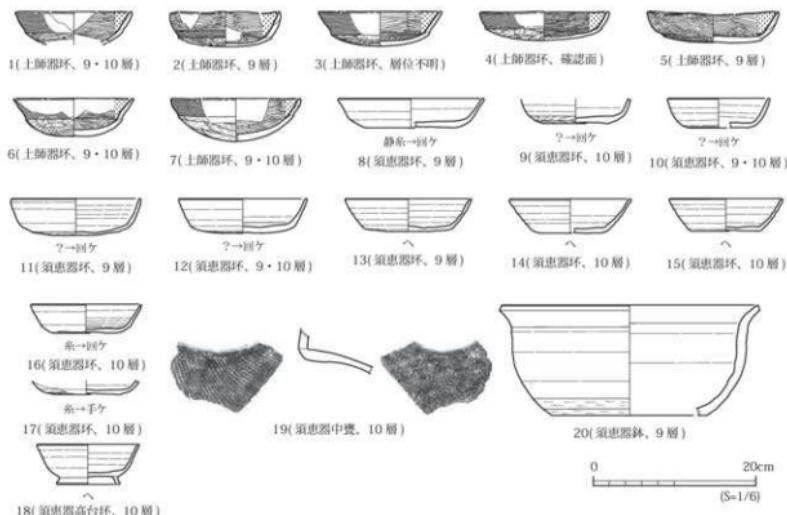
須恵器は壺・高台壺・塊・蓋・短頸壺・壺・中甕などがある。壺は皿形（20～24・26～33）が主体で、逆台形（25）は少ない。底部切り離しと再調整はヘラ切り（27～31）、ヘラ切り後手持ちヘラケズリ（32）（以下、手持ちケズリとする）、回転糸切り後手持ちケズリ（33）、静止糸切り後手持ちケズリ（20）のほか切り離しが不明で回転ヘラケズリ（21～25）（以下、回転ケズリとする）や手持ちケズリ（26）があり、ヘラ切り無調整と再調整のあるものが半々である。高台壺には大（34）・小（35）があり、ともに切り離しは不明で回転ケズリが施される。前者は大戸窯MH33窯式期（会津若松市教委1994）のもので、後者は双耳壺の可能性がある。塊はヘラ切り（36）、切り離し不明で回転ケズリ（38）や手持ちケズリ（37）がある。蓋は扁平で端部の折れが小さくリングつまみである（41）。須恵器壺（47）は猿投産とみられる。中甕の胴部は外面が平行タタキ、内面は無文アテ具である。

〈SK7090土坑〉(図版670)

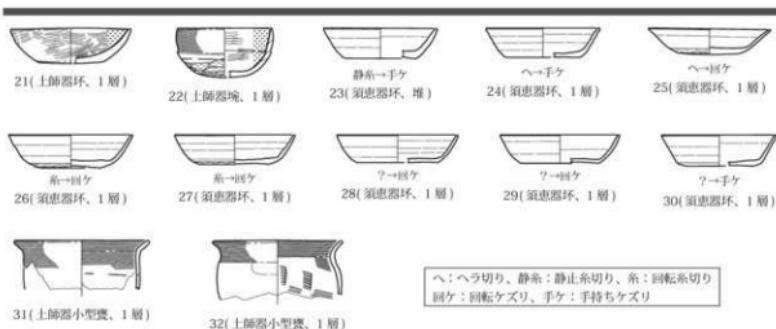
堆積土から土器が出土しているが、土器の特徴は共通することからまとめて検討を行う。土師器は非ロクロ調整で、壺・塊・小型甕・甕などがある。壺・塊は内黒で、前者は無段平底（21）、後者が有段丸底である（22）。小型甕は頸部に段がなく、外面調整はナデである（31・32）。須恵器は壺・高台壺・蓋・壺・甕などがある。壺は皿形で、底部切り離しと再調整は静止糸切り後手持ちケズリ（23）、



※()内は、(器種名、層名)を示す



<SK7124・7128>



<SK7090>

図版670 八幡地区SK7090土坑、SX7124・7128整地層出土土器

ヘラ切り後回転ケズリ（25）や手持ちケズリ（24）、回転系切り後回転ケズリ（26・27）、切り離しが不明で回転ケズリ（28・29）や手持ちケズリ（30）があり、再調整が施されるものが主体である。
 <SX7124・7128整地層>（図版670）

土師器は非ロクロ調整で、环・盤・甕などがある。环は外面のみに段がある有段环で、扁平で平底もしくは平底状のもの（2・4・5）と丸底（1・3・6・7）がある。すべて内黒で、2・5は両面ミガキである。須恵器は环・高台环・鉢・壺・中壺などがある。环は皿形（8～13・16・17）が

主体で、逆台形（14・15）は少ない。底部切り離しと再調整はヘラ切り（13～15）、静止糸切り後回転ケズリ（8）、回転糸切り後回転ケズリ（16）や手持ちケズリ（17）、切り離しが不明で回転ケズリ（9～12）があり、再調整が施されるものが多い。高台坏の坏部は逆台形で、底部はヘラ切りである（18）。鉢は平底で口縁部が外反する（20）。中壺は外面平行タタキ、内面が特殊な枝状アテ具である（19）。

〈小結〉

SD180B・461、SK7090、SX7124・7128出土土器は、土師器坏が外面のみに段がある有段坏と無段平底坏が主体を占め、無段丸底坏やロクロ調整の坏が少量伴う。有段坏も段の位置が下がって平底状となり、坏類は全体として扁平である。盤や稜塊は量が少ないものの、本土器群に特徴的な器種の一つであり、前者には有段平底と平底がある。块は弱い丸底と平底がある。盤・塊・稜塊は金属器模倣であるため両面ミガキ仕上げとなる傾向があり、無段坏にもその傾向が認められる。小型甕や大型甕は頸部に段がなく胴部はナデ仕上げで、後者の胴部最大径は上半にある。須恵器坏は皿形が主体で、逆台形は少ない。ヘラ切り無調整と再調整のあるものが半々である。稜塊は土師器同器種とともに本土器群の特徴的な器種である。食膳具の高台は前代と較べて高い。

こうした特徴は、八幡地区SD180B溝跡（図版671）（多賀城市教委1991b）、同地区的SD677溝跡（図版672）（宮城県教委1997）やSD2124溝跡出土土器（図版672）（宮城県教委1994c）と共に、村田編年案の7段階に比定できる（村田2007）。また、数は少ないがSE844・7258井戸跡からも同じ特徴を持つ土器が出土していることから、これらも同時期とみられる。このうち、SD180Bの下層からは紙背に「百濟王敬福」と記され、作成が天平12年（740）～天平勝宝元年（749）に限定される漆紙文書、上層から天平宝字7年（763）の具注暦が記された漆紙文書が出土しており（多賀城市教委1992b）、年代の一端が8世紀第3四半期に求められること、同時に位置付けられる利府町郷楽遺跡第11・14号住居跡の施設瓦に多賀城跡政府第Ⅱ期（以下、多賀城第Ⅱ期とする）の瓦が使われている（宮城県教委・利府町教委1990）ことから、8世紀中頃～後半と考えられる。

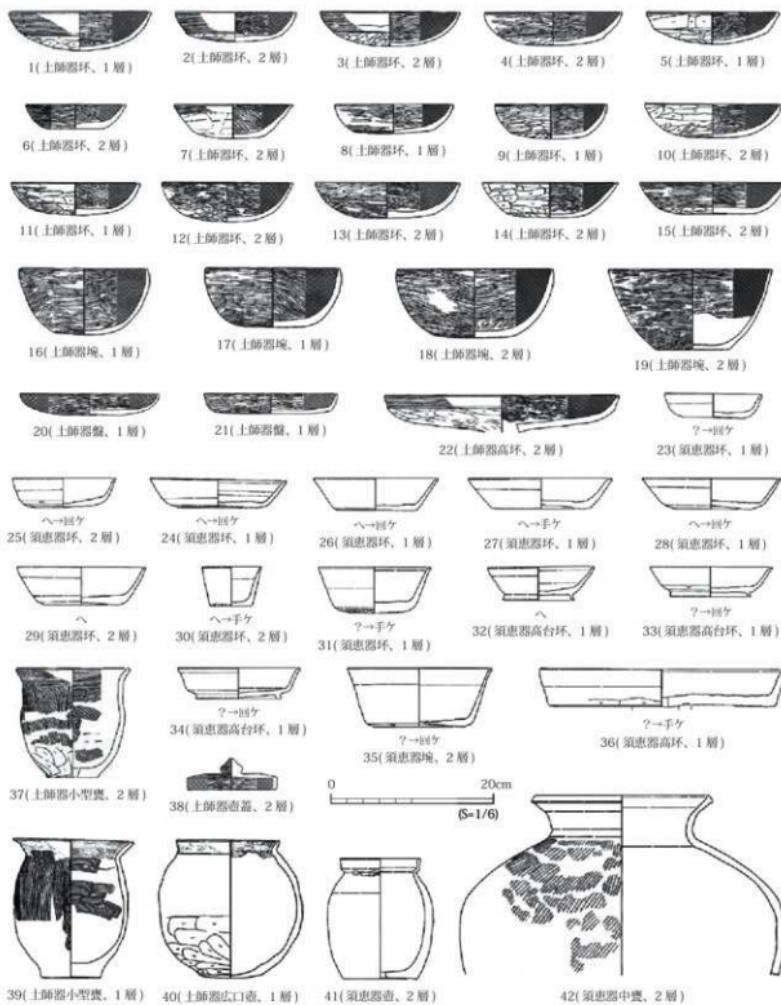
【SI7043 穫穴住居跡、SK7093 土坑、SD786 溝跡出土土器】

再調整が施されるロクロ土師器坏とヘラ切りの須恵器坏などで構成される土器群である。

〈SI7043 穫穴住居跡〉（図版673）

確認面からの出土であるが床面近くまで削平されていることから、本来は堆積土下層に歸属すると考えられる。土師器坏は内黒で非ロクロ調整の無段平底（22）とロクロ調整（21）がある。ともに扁平な箱形で、前者は外面がミガキ仕上げ、後者は静止糸切りの後回転ケズリが施される。須恵器は坏と蓋があり、前者は逆台形でヘラ切り（23）、後者は扁平で端部が短く折れ、擬宝珠つまみを持つ（24）。
〈SK7093 土坑〉（図版673）

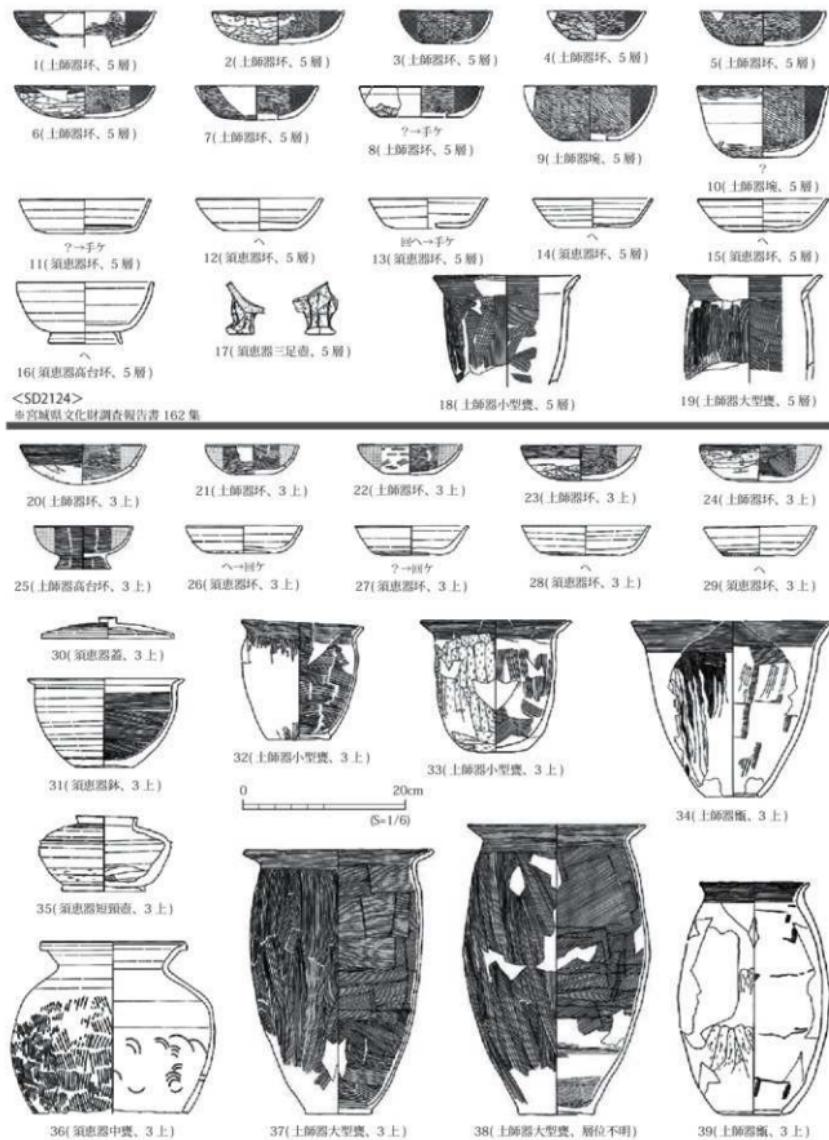
堆積土から土器が出土しているが、土器の特徴は共通することからまとめて検討を行う。図示したのはすべて須恵器である。土師器は非ロクロ調整とロクロ調整があり、食膳具は内黒である。坏・高台坏・小型甕・甕があり、ロクロ調整の坏には回転ケズリが認められる。須恵器は坏・小型坏・塊・稜塊・蓋などがある。坏は皿形と逆台形があり、後者が多い。底部切り離しと再調整はヘラ切り（1～5）が主体である。ほかに静止糸切り後手持ちケズリ（6）、ヘラ切り後手持ちケズリ（7）がある。



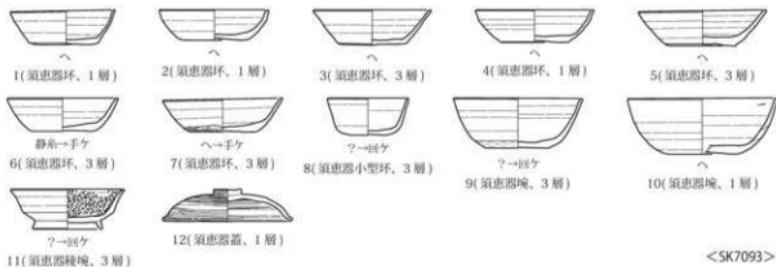
ヘ: ヘラ切り。静系: 静止糸切り。糸: 回転糸切り
回ケ: 回転ケズリ、手ケ: 手持ちケズリ

※()内は、(器種名、層名)を示す

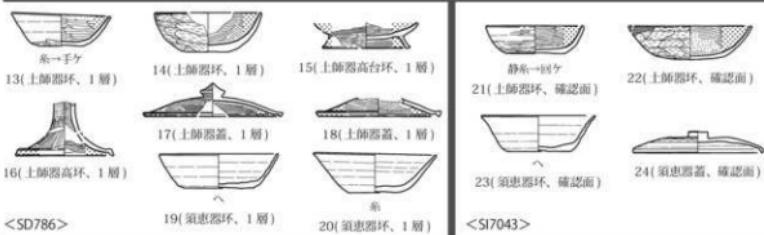
図版671 八幡地区SD180B区画溝跡 平成2年度調査出土土器



図版672 八幡地区SD677溝跡、SD2124区画溝跡出土土器

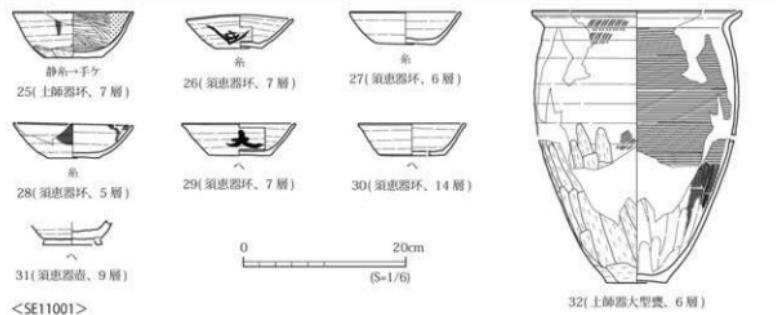


<SK7093>



<SD786>

<SI7043>



<SE11001>



<SI7212>

△:へラ切り、静系:静止系切り、糸:回転糸切り、回ケ:回転ケズリ、手ケ:手持ちケズリ () 内は、(器種名、層名)を示す

図版673 八幡地区SI7043・7212竪穴住居跡、SE11001井戸跡、SK7093土坑、SD786溝跡出土土器

小型环や塊はヘラ切り（10）と切り離しが不明で回転ケズリ（8・9）が認められる。稜塊は大戸産でKA12窯式期（会津若松市教委前掲）のものである（11）。また、蓋は同じ仕上げの稜塊とセットとなるもので、扁平な擬宝珠つまみが付き、両面ともミガキが施される（12）。

〈SD786溝跡〉（図版673）

堆積土から土器が出土しているが、土器の特徴は共通することからまとめて検討を行う。土師器は环・高台环・高环・蓋などがある。このうち、在地の环は内黒で非ロクロ調整の無段平底（14）とロクロ調整（13）があり、後者は逆台形で底部は回転糸切り後手持ちケズリが施される。また、15～18はロクロ調整後両面ともミガキ・黒色処理されたものである。在地土師器に較べて薄手に仕上げられ、胎土も精選されていることから搬入品の可能性がある。器種は高台环・高环・蓋が認められる（註1）。須恵器环は皿形（19）と逆台形（20）があり、底部切り離しは前者がヘラ切り、後者は回転糸切りである。

〈小結〉

SI7043・SK7093・SD786出土土器は、土師器环に非ロクロ調整とロクロ調整があり、後者が多い。ロクロ調整环は再調整が施され、外面にミガキが施されるものがある。また、搬入品とみられる薄手で両黒に仕上げられた高台环・蓋・高环が共伴する。須恵器环は逆台形でヘラ切りが主体を占める。こうした特徴は、館前地区SX1351C河川跡2層（図版674）（多賀城市教委2003a）、SX1351D河川跡3層（図版675）（多賀城市教委2003a）、高平地区SK236土坑（図版675）（多賀城市教委1990a）、多賀城跡大畑地区SI2153住居跡（多賀研1993）、多賀城跡大畑地区SK2321土坑8～10層（多賀研1996）出土土器と共に、村田編年案の8段階に比定できる（村田前掲）。また、数は少ないがSI7364竪穴住居跡やSE11061井戸跡からも同じ特徴を持つ土器が出土していることから、これらも同時期とみられる。

このうち、SX1351C河川跡2層から延暦9年（790）の荷札木簡、SX1351D河川跡3層からは延暦24年（805）の曆が記された木簡、SK236土坑やSI2153住居跡からは長岡京期（784～794年）に盛行した須恵器壺G、SK2321土坑9層から多賀城跡政庁Ⅲ期瓦（780～869年）が出土したことから、8世紀末～9世紀前葉に位置付けられる（註2）。

【SE7105・11001井戸跡出土土器】

再調整が施されるロクロ土師器环とヘラ切りや回転糸切りの須恵器环などで構成される土器群である。

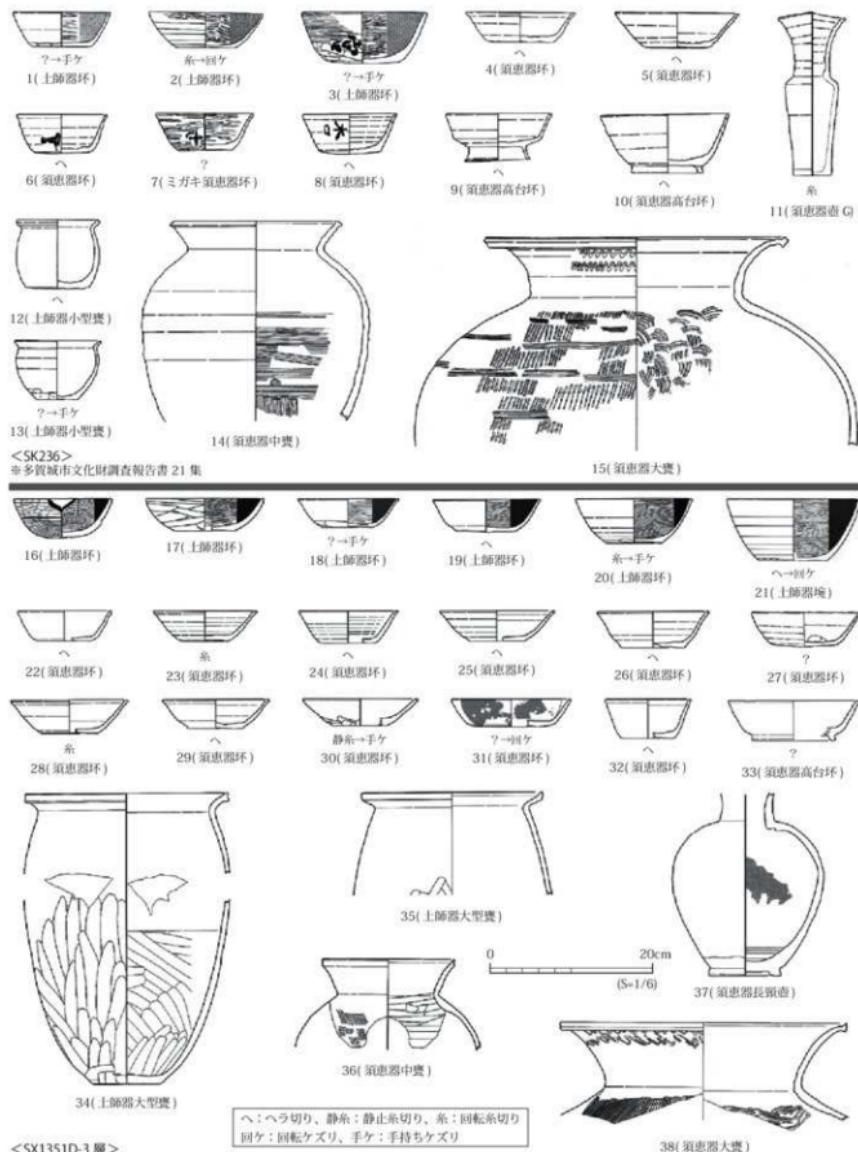
〈SE7105井戸跡〉（第2分冊 図版550～552）

底面や側内堆積土、裏込土から出土したが、土器の特徴は共通することからまとめて検討を行う。土師器はすべてロクロ調整で、环・高台环・蓋・甕などがある。环は逆台形・内黒で、切り離し後回転ケズリが施される（3）。ほかに楕形で回転糸切り後回転ケズリ、回転糸切りなどがある。須恵器は环・高台环・双耳环・稜塊・蓋・長頸壺・横瓶・甕などがある。环は皿形（7・9）と楕形（6）が認められるが、切り離しはヘラ切りが多い。高台环には大戸製品が認められ、KA12窯式期（会津若松市教委前掲）とみられる（12）。



図版674 館前地区SX1351C河川跡2層出土土器

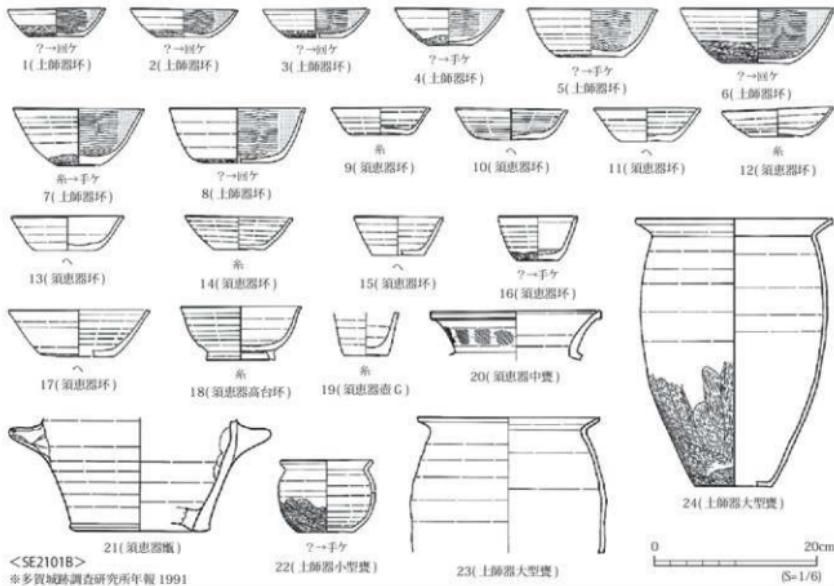
▼：畿内系土器
※多賀城市文化財調査報告書70集



<SK236-3層>

多賀城市文化財調査報告書 70集

図版675 高平地区SK236土坑、館前地区SX1351D河川跡3層出土土器



<SE2101B>

※多賀城跡調査研究所年報 1991



<SK2272>

※多賀城跡調査研究所年報 1994

ヘ: ヘラ切り、静系: 静止糸切り、糸: 回転糸切り、回ヶ: 回転ケズリ、手ヶ: 手持ちケズリ

図版676 多賀城跡大畠地区SE2101B井戸跡第Ⅲ層、五万崎地区SK2272土坑出土土器

〈SE11001井戸跡〉(図版673)

側内堆積土と裏込土から出土したが、土器の特徴は共通することからまとめて検討を行う。土師器はすべてロクロ調整で、壺・鉢・大型甕などがある。壺は逆台形・内黒で、静止糸切り後手持ちケズリが施される(25)。ほかに回転糸切りや回転ケズリが認められる。大型甕は長胴で、外面上半に平行タタキ、内面上半にはカキメが認められる。須恵器は壺・高台壺・長頸壺・甕などがある。壺は逆台形(26・27・29・30)と椀形(28)があり、後者が多い。底部切り離しはヘラ切りと回転糸切りが認められる。

〈小結〉

SE7105・11001出土土器は、土師器壺がロクロ調整で逆台形が主体である。再調整が施されるものが多く、ほかに回転糸切りがある。土師器のロクロ大型甕には、平行タタキが認められるものがある。須恵器壺の器形は皿形・逆台形・椀形で、ヘラ切りと回転糸切りが認められる。こうした特徴は、多賀城跡大畑地区SE2101B井戸跡第Ⅲ層(図版676)(多賀研1992)、多賀城跡五万崎地区SK2272土坑(図版676)(多賀研1995)、伏石地区SE3038井戸跡やSX324・3029工房跡(宮城県教委1997)出土土器と共に通する。このうち、SE2101B井戸跡第Ⅲ層からは天長9年(932)以降に作成された漆紙文書が出土しており、年代の一端が9世紀第2四半期にあることから、9世紀中葉に位置付けられる。

【SI7212竪穴住居跡出土土器】(図版673)

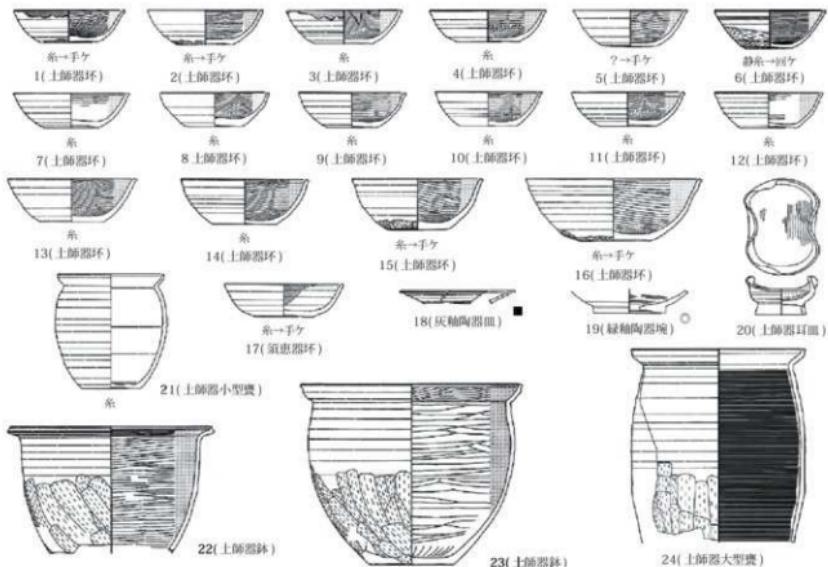
堆積土と確認面から出土しているが、土器の特徴は共通することからまとめて検討を行う。土師器はすべてロクロ調整で、壺・小型甕などがある。壺は椀形・内黒で底部内面は放射状ミガキである(33)。切り離しは不明で回転ケズリが認められる。小型甕は回転糸切りである(36・37)。須恵器壺は椀形で回転糸切りである(34・35)。また、多賀城第IV期の平瓦ⅡC類が出土している。

こうした特徴は、多賀城跡大畑地区SI2306住居跡(多賀研1996)、多賀城跡大畑地区SK2321土坑4~6層(図版677)(多賀研1996)、五万崎地区SK2270土坑(図版677)(多賀研1995)、伏石地区SK6793土坑(宮城県教委2009)、館前地区SI5044・5337・5344住居跡(宮城県教委2001a)出土土器などと共に通する。このうち、SK2270・6793やSK2321-4層、SI2306カマド崩落土や本遺構より多賀城第IV期瓦が出土したことから、9世紀後葉に位置付けられる。

【SE11934井戸跡出土土器】(第2分冊 図版406)

素掘りの井戸跡で、堆積土から出土した。土師器はすべてロクロ調整で、壺・甕などがある。壺は椀形・内黒で底部内面は放射状ミガキだけとなる(2)。赤焼土器は壺と高台壺がある。須恵器は壺・壺・甕がある。壺は椀形・回転糸切りで、内面はコテ仕上げである(3)(註3)。

食膳具が椀形・回転糸切りの土師器・赤焼土器・須恵器で構成されており、こうした特徴は、多賀前地区SK503土器溜(図版678)(宮城県教委1996a)、千刈田地区SX543土器溜(図版678)(多賀城市教委1991a)、東町浦地区SK161土坑(多賀城市史編纂委員会1991)、町地区SK2861土坑(宮城県教委1998)、高崎遺跡SX1080土器捨て場跡(多賀城市教委1995a)出土土器などと共に通する。このうち、SK503・2861やSX543・1080は堆積土中に915年に降灰したと考えられる灰白色火山灰を含み、SK161は堆積土に灰白色火山灰が入る遺構より新しい。したがって、本土器群は915年の前後



<SK2270>

※多賀城跡調査研究年報 1994

◎：綠釉陶器 ■：灰釉陶器



0 20cm
(S=1/6)

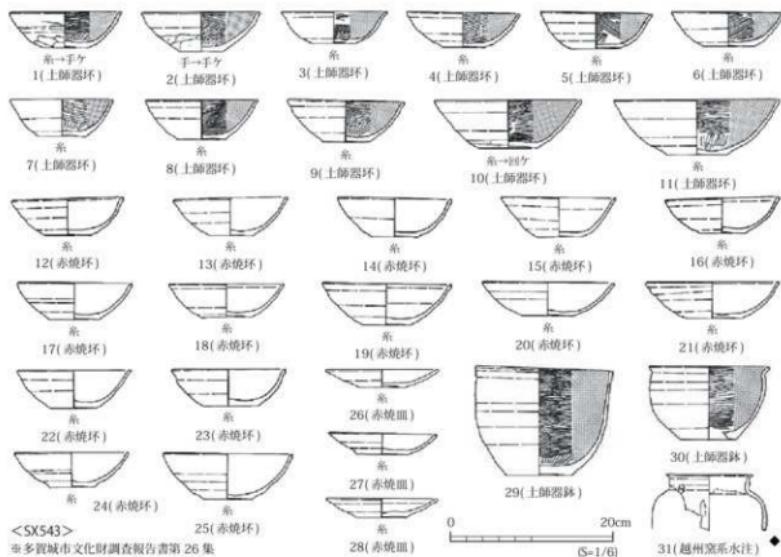
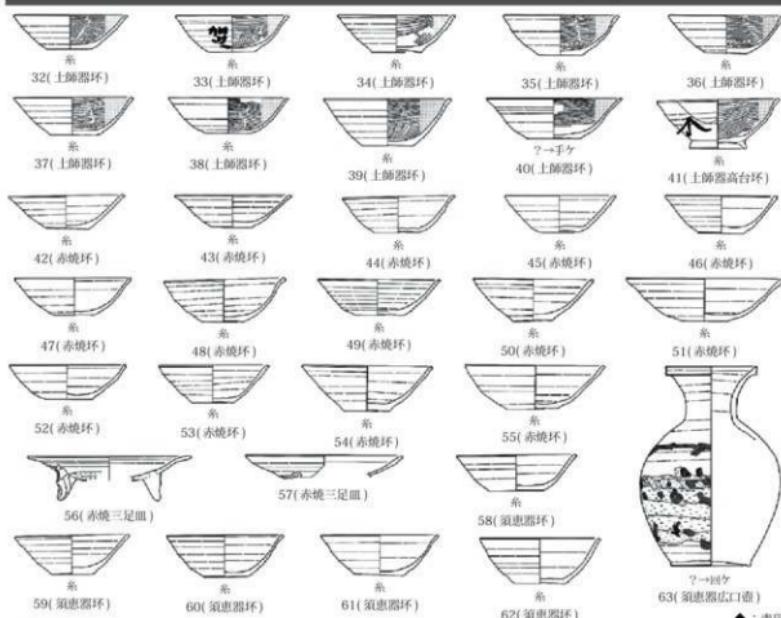
<SK2321>

※多賀城跡調査研究年報 1995

ヘ：ヘラ切り、静系：静止系切り、糸：回転糸切り
回ケ：回転ケズリ、手ケ：手持ちケズリ

※()内は、(器種名、層名)を示す

図版677 多賀城跡五万崎地区SK2270土坑、大畑地区SK2321土坑4~6層出土土器

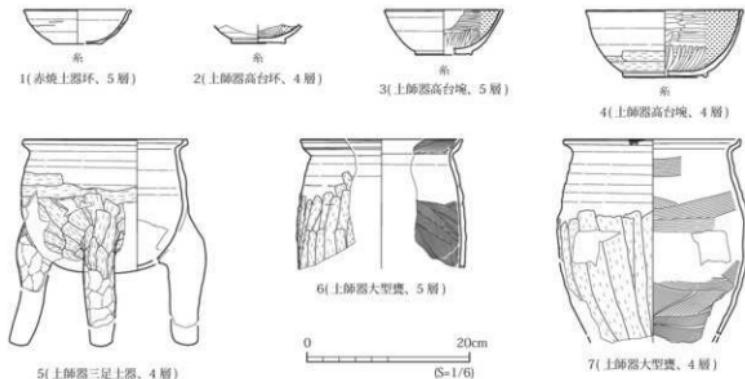
<SK543>
多賀城市文化財調査報告書第26集

<SK503>

多賀城市文化財調査報告書第170集

◆: ヘラ切り、静系: 静止系切り、系: 回転系切り、回ケ: 回転ケズリ、手ケ: 手持ちケズリ

図版678 多賀前地区SK503土器窯、千刈田地区SX543土器窯出土土器



※()内は、(器種名、層名)を示す

図版679 八幡地区SE12205井戸跡出土土器

で認められることから、10世紀前葉に位置付けられる。

本段階から陸奥国府域を中心に食器の大量廃棄が顕著になる。これに伴い、普段使いの器から須恵器が脱落して赤焼土器に替わり、須恵器生産は急速に衰退する（村田1995）。また、多賀城跡でも赤焼土器（須恵系土器）は9世紀第4四半期に出現するが（多賀研1998）、類例は少なく10世紀に入つて急増する。

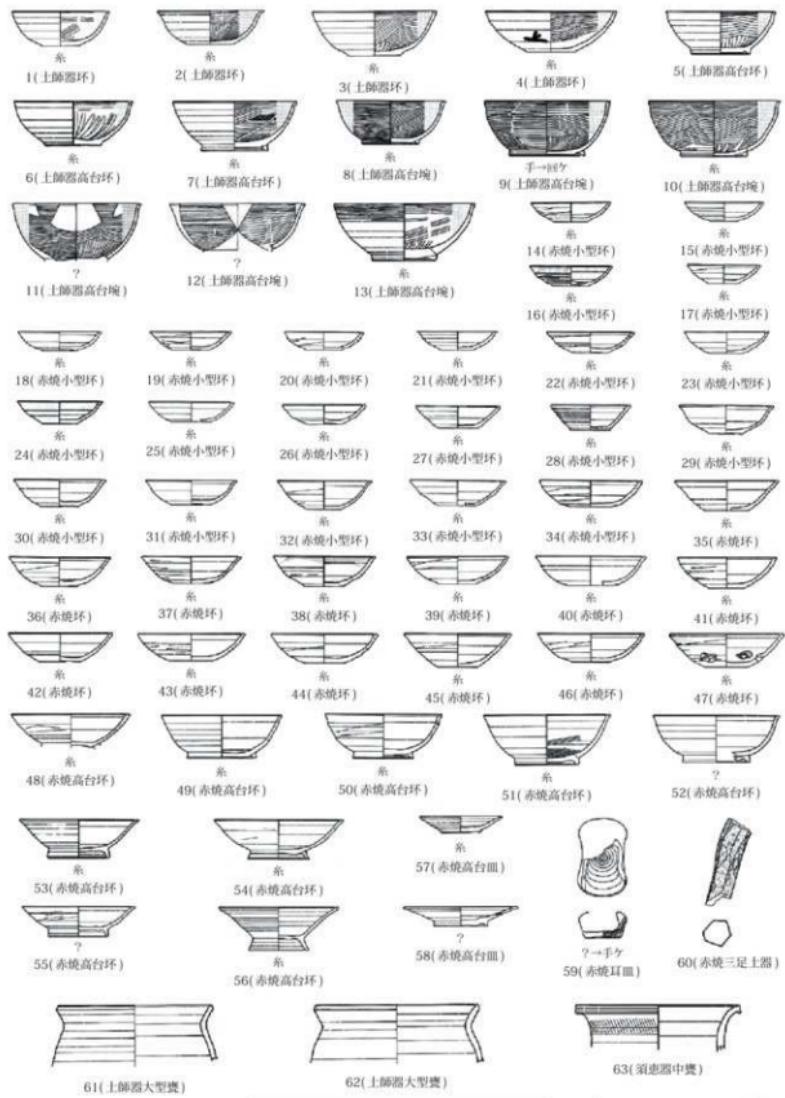
【SE12205 井戸跡出土土器】（図版679）

素掘りの井戸跡で、堆積土から土器が出土した。土師器はすべてロクロ調整で、壺・高台壺・高台塊・三足土器・大型甕などがある。高台壺は楕形でベタ高台の回転糸切りである（2）。大型甕は長胴で最大径は胴部中央にある。高台塊や三足土器は、本土器群から認められる。高台塊は回転糸切りで低高台である（3・4）。三足土器は、小型丸底甕に3本の足を付けたもので（5）、古川氏の分類ではII類にあたる。同氏は三脚土器と名付けて、国衙中枢で執行された儀式に用いられた土器の可能性が高いと指摘した（古川2014）。赤焼土器には壺・高台壺・高台塊・高台甕がある。

こうした特徴は、多賀城跡鴻の池地区第7層（図版680）（多賀研1992）出土土器と共通する。同層は灰白色火山灰とは間層を挟んで上に位置すること、同時期とみられる多賀城跡大畠地区SE2132井戸跡（多賀研1992）や同地区SK2175土坑（多賀研1993）から京都府亀岡市篠塚跡群西長尾5号窯跡段階の縄鉢Dが出土（多賀研2007）しており、10世紀中葉に位置付けられる（註4）。

【SE12205に後続する土器】

今回は良好なセット関係を示す資料がないが、SE798・837井戸跡などで本段階以降特徴的に認められる赤焼土器小皿が出土したことから特徴を述べる。代表的な例は多賀城政府跡SK058土坑があげられる（図版681）（多賀研2010）。赤焼土器を主体とし、土師器が伴う。土師器壺は楕形・内黒である（1～3）。赤焼土器には壺・小型壺・皿・小皿・高台壺・台付鉢・器台などがあり、壺類は法量分

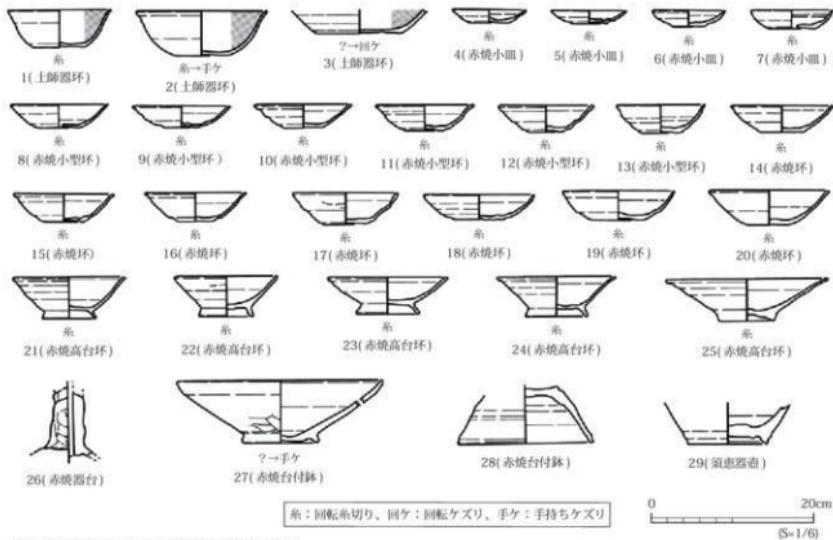


△: ハラ切り、静系: 静止系切り、系: 回転系切り
回ケ: 回転ケズリ、手ケ: 手持ちケズリ

多賀城跡調査研究所年報 1991

0 20cm
(S=1/6)

図版680 多賀城跡鴻の池地区第7層出土土器



*多賀城政府跡補遺編(原図は多賀城政府跡本文編)

図版681 多賀城政府跡SK058土坑出土土器

化が明確である。年代は10世紀後葉と考えられる。

(2) 多賀城周辺における5世紀から10世紀の土器変遷

本節の検討で5世紀、6世紀後半から7世紀中頃、8世紀後半から10世紀代の土器変遷をみることができた。触れることができなかった6世紀前半と7世紀後半から8世紀前半については、村田編年案(村田前掲)で補うと、多賀城周辺における5世紀から10世紀の土器変遷は、表70のようにまとめられる。

註

註1 兩黒土師器は金属器模倣であり、官衙・寺院とその周辺に偏在することから、「官衙的器種」(奈文研2015)と考えられる。また、水入地区西半部からは全体に橙色を呈し、ヨコナデ・ヘラケズリ・粗いミガキで仕上げられた土師器が出土している(多賀城市教委2003a)。器種には环・高台环・塊・皿・高坏・小型短頭壺・甕があり、食器の中には暗文が施されたものがある。畿内系土師器と命名されており、搬入品と考えられているが、都城でも類例が少なく、产地や系譜は不明である。官衙的器種の生産と供給については、考古学的な手法に加えて胎土分析など理化学的手法も併用して検討する必要がある。

註2 村田編年のは8段階は8世紀末~9世紀初頭としたが(村田2007)、次段階の土器群の年代観から下限は9世紀前葉に改めたい。

在《中華人民共和國憲法》第56條規定：「中華人民共和國公民有受教育的權利和義務。」

註3 赤焼土器とは、酸化炎焼成で内面が黒色処理されない食器で、器種には壺・小型壺・皿・小皿・高台皿・高台壺・高台塊・台付鉢・器台などがある。焼き物としては土師器と同一であるが、古代陸奥国の中の土師器食器は、7世紀以降すべて内墨となり11世紀前半まで存続した。これに対し、10世紀初頭前後から内墨としない赤焼土器が急速に普及して、前葉のうちに食器から須恵器が消滅し、中葉に入ると土師器に替わって食器の主体となる。こうした伝統的食器と新型食器の違いを強調できる利点もあること、両者を区別することで、ある程度の年代観がイメージできること、多賀城を中心に胎土・色調・硬度の点で仕上りが良い一群が認められることなどから、赤焼土器や須恵器と呼んでいる。本来は土師器食器の一形態であるが（村田1995）、本書ではこれまでの呼称に従つて「赤焼土器」と呼んでいる。

註4 本土器群の特徴として、土師器や赤焼土器に高台塊や小皿が認められる。以前の見解でその年代観を10世紀後葉としたが（村田1995）、10世紀中葉と改めたい。

4. 土・石製品

(1) 砧

硯は35点出土しており、その内訳は円面硯16、風字硯4・形象硯1・転用硯14である。年代別の点数は8世紀中頃～後半が転用硯3、8世紀末～9世紀前葉が風字硯1、9世紀中葉が円面硯1・風字硯1・形象硯（鳥形硯）1、9世紀後葉は円面硯3・転用硯2、10世紀前半が円面硯1・風字硯1・転用硯1、10世紀後半は転用硯2、他は11世紀以降もしくは時期不明であり、方格地割成立前と終末期は転用硯のみで、8世紀末～10世紀前半は円面硯・風字硯・形象硯・転用硯が認められる（表71）。

このうち、8世紀末～9世紀前葉の風字硯は、生産開始段階の例として貴重である。形象硯は鳥形硯（第2分冊 国版497-1）で、都では動物形象硯の年代は8世紀代に限られる（巽2004）。また、多賀城周辺では亀形硯（宮城県教委1994c）に次いで2例目であり、鳥形硯が北3西5区、亀形硯はその北を通る北3道路跡側溝からと出土位置が限定されることから、同区の性格を示唆する遺物とみられる。陸奥国府から出土した硯については、13節で改めて検討したい。

(2) 凝灰岩切石と切石組カマド

凝灰岩を削って形を整えた切石で、6世紀末頃～7世紀前半のSI7208・7219竪穴住居跡やSD2050B河川跡のほか、井戸跡・土坑などから出土した（図版682）。同様のものは前回調査したSD2050B河川跡でも出土しており（宮城県教委2001b）、今回の出土品と同時代で形態が共通するため、両者を併せて検討を行う。これらは形態や大きさから、I類・II類・III類の断面が方形もしくは長方形を基本とするカマド構築材（4～11）とII類・III類の断面が多角形でI類に較べて小形のカマド支脚（1～3）に分けられる。さらに、カマド構築材は幅が狭いIa類（4～5）と広いIb類（6～11）があり、後者は片面に焼けや顯著なススの付着が認められた。年代は、前回調査したSD2050B河川跡で第1層～第7層まで認められたことから、6世紀後半～7世紀中頃である。

八幡地区SI7208・7219竪穴住居跡では、カマド焚口部の側壁にIa類を据えていた。Ib類はこれよりも大形、片面に焼けや顯著なスス付着が認められたことから天井架構材であり、切石I類はカマド焚口部の側壁や天井に使われたと考えられる（註1）。こうした凝灰岩切石組カマドは、本遺跡周辺

No.	地区名	遺構名	部位	区画	遺構の年代	数	円筒形 種類	周字 規格	形質 規格	軸周 規格	神保・No.	備考
1	八幡	SK7025	北2a西4区	9c 中墳	1	—	?				73-12	馬場・内堤
2	八幡	SK7013	北2a西4区	9c 後葉	1	無文圓足鏡					119-41	馬場ドーム+外腹
3	八幡	SK7001	2層	北3a西4区	9c 中墳	1	透徹切頭圓足鏡				67-44	馬方前スカシ+×縦
4	八幡	SD602	3層	北3西4区	9c 後葉	2	88-33・39	所・瓦の利用				
5	八幡	SD100・2050B	確認面	北3西4区	—	1	透徹切頭圓足鏡				190-17	小舟・十字・円形スカシ+縦縫
6	八幡	SD100・2050B	確認面	北3西4区	—	1					199-16	
7	八幡	SK7026	北2a西5区	8c 末~9c 前葉	—	1					77-6	
8	八幡	SD745	北3西5区	—	1	?					87-11	小形、外堤
9	八幡	SD745	北3西5区	—	1						87-9	
10	八幡	SBT086	北3西5区	9c 後葉	1	透徹削or透徹圓足鏡					92-2	方形透えカシ
11	八幡	SK7103	2層	北3西5区	10c 前半	1	無文圓足鏡?				442-64	馬場ドーム+外腹・内堤
12	八幡	SK7103	確認面	北3西5区	10c 前半	1					442-66	二面鏡?
13	八幡	SK7103	2層	北3西5区	10c 前半	1					443-83	丸の丸形
14	八幡	SD7100	1層	北3西5区	9c 中墳	1					497-1	鳥形鏡の跡地のみ
15	八幡	SD7604	北3西5区	近世→近古	1	透徹圓足鏡					502-12	馬場ドーム+円形スカシ+外腹・凸部
16	八幡	SK7050	1層	北3西5区	8c 可能~後半	1					573-14	高台跡の利用
17	八幡	SI11929	12層	北3西6区	—	1	透徹切頭圓足鏡				390-2	馬方形スカシ+鏡面
18	八幡	SI12331	6層	北3西6区	8c 可能~後半	1					398-3	丸の丸形
19	八幡	SK12538	12層	北3西6区	—	1					402-1	骨の丸形
20	八幡	SE11934	8・9層	北3西6区	9c 後葉	1	透徹圓足鏡				406-1	馬場ドーム+長方形スカシ+外腹・凸部
21	八幡	SK11919	—	北3西6区	—	1	透徹削or透徹圓足鏡				423-7	方形スカシ
22	八幡	SK11919	—	北3西6区	—	1					423-9	鏡の転用
23	八幡	SD1808	3層	北3西6区	8c 中古~後半	1					596-22	井戸の転用
24	八幡	SD1855	北3西6区西端	11c ~	—	1					626-1	鏡の転用
25	八幡	確認面	北3西4区 or 北3西5区	—	1	透徹削or透徹圓足鏡					589-32	圓部水平+栗張状腰+外堤・内堤・凸部
26	八幡	SX750D内側溝	2~5層	—	10c 後半	2	42-40・41	鏡・环の利用				
27	八幡	SX12221上	第Ⅱ相	—	—	1	透徹削or透徹圓足鏡				59-8	方形透えカシ
28	八幡	確認面	—	—	—	1	透徹圓足鏡				252-18	圓部水平+外腹・凸部+長方形スカシ+鏡面
29	八幡	確認面	—	—	—	1	透徹圓足鏡				252-19	円形スカシ+外腹・凸部
30	八幡	確認面	—	—	—	1	透徹削透徹圓足鏡				252-20	長方形スカシ+鏡面
31	八幡	確認面	—	—	—	2	252-21・22	鏡の転用				

表71 本書で報告した現

では同時期の中谷地地区SI27住居跡（宮城県教委2003b）や8世紀後葉の西沢遺跡SI565竪穴住居跡（多賀城市教委2014b）、8世紀末～9世紀初頭の多賀城跡SI2806竪穴住居跡（多賀研2005）、8世紀末～9世紀前葉の多賀城跡SI2153・2159竪穴住居跡（多賀研1993）などで認められる。

宮城県域に目を拡げると、内陸南部の蔵王町では十郎田遺跡で7世紀中頃～後半のSI4・52・215竪穴住居跡から9世紀中葉のSI165竪穴住居跡まで長期間認められる（蔵王町教委2011c）。中央部では、6世紀末の仙台市西台烟遺跡SI182竪穴住居跡（仙台市教委2016b）、7世紀中頃～後半（郡山Ⅰ期官衙段階）の仙台市郡山遺跡SI443住居跡（仙台市教委1984）、長町駅東遺跡SI8竪穴住居跡（仙台市教委2013b）、西台烟遺跡SI55竪穴住居跡（仙台市教委2011）、7世紀末～8世紀初頭（郡山Ⅱ期官衙段階）の西台烟遺跡SI29竪穴住居跡（仙台市教委2010a）などがあげられる。特に、郡山Ⅰ期官衙段階の同遺跡周辺には類例が多い。

内陸北部では大和町一里塚遺跡で7世紀後葉～8世紀初頭のSI03住居跡など7棟（宮城県教委1999b）、同時期の栗原市御駒堂遺跡で2棟（第14・20号住居跡）（宮城県教委1982a）、8世紀後半は伊治城跡でSI40住居跡（多賀研1980c）ほか2棟、同市城下遺跡SI16B・85竪穴住居跡（栗原市教委2014）、同市御駒堂遺跡第11号住居跡（宮城県教委1982a）などがあげられ、宮城県域全体としては、内陸南部・中央部・内陸北部にかけての地域で6世紀後半～9世紀前葉に認められる（註2）。

一方、名取川南の沖積地では6世紀末以降、河原石組カマドが認められる。代表例としては、仙台市栗遺跡の6世紀末～7世紀前半の住居跡12棟（東北学院大学考古学研究部1979、仙台市教委



図版682 凝灰岩切石組カマドと切石

1982b)、名取市清水遺跡での6世紀末～7世紀代の住居跡8棟と9世紀～10世紀前葉の住居跡4棟などがあげられる(宮城県教委1981a)。また、内陸南部の丘陵地に立地する集落では、9世紀以降、白石市御所内・家老内遺跡や蔵王町東山・下原田・赤鬼上・二屋敷・観音堂山・青竹・西浦B遺跡、村田町西原・北沢遺跡などで河原石組カマドが認められる。

さらに、8～10世紀前半の沿岸北部は東松島市亀岡遺跡、女川町崎山遺跡、石巻市角山・山居・須江関ノ入・須江鰐塚・沢田山西・新田東・桃生城・箕輪山遺跡や梨木畠貝塚などで、粘板岩の板状礫を使用したカマドが特徴的に認められる。したがって、9世紀以降の宮城県域は、粘土やシルトで本体を構築したカマドが主体であるものの、内陸南部は河原石組カマド、中央部から内陸北部には凝灰岩切石組カマド、沿岸北部(石巻周辺)は粘板岩板状礫組カマドが分布する、という地域性を指すことができる。

凝灰岩切石組カマドは、6世紀末～8世紀初頭の例が最も多い。この時期の凝灰岩切石組カマドと河原石組カマドについてみると、前者の近くには盛行期と同じくする横穴墓が多く分布する。横穴墓の造営・維持は、集落構成員にとって身近に存在する凝灰岩を利用する契機となるとともに、切石の製作技術を習得・習熟する機会ともなったと考えられる。これに対し、名取川南の沖積地では近くに凝灰岩の路頭がないため、川から河原石を運んでカマドや群集墳の石室を構築した。したがって、6世紀末～8世紀初頭におけるカマドの地域性は、素材の入手し易さと密接に関わるとともに、同様の理由から終末期の墳墓の地域性とも重なると考えられる(註3)。こうしてみた場合、粘板岩板状礫組カマドの分布域につくられた和泉沢古墳群(8世紀の末期古墳)の主体部の素材に粘板岩板状礫が選ばれたのも同じ理由からと考えられる(河北地区教委1972)。

多賀城周辺では、第III-1期以降(8世紀末～9世紀初頭以降)、凝灰岩切石組カマドが減り、かわって瓦組カマドが普及する。その理由としては、780年の多賀城襲撃、869年の陸奥国大地震とその後の大改修によって不要になった瓦が大量に出現し、凝灰岩切石と較べて加工がいらざ、それ以上の強度を持つ素材が容易に入手できるようになったためと考えられる。さらに、第III・IV期の瓦生産地として新たに春日窯跡群が開窯され、それまでの台原・小田原窯跡群と併せた陸奥国を代表する2大官窯群からの供給が余剰分を生み出し易くなった点もあげられよう。

註

註1 凝灰岩切石I類は、基本的な構成としてIa類とIb類両者が使われたが、他遺跡の出土例をみると、側壁のみ、あるいは天井架構材のみという使用例も認められる。

註2 板状の凝灰岩割石でカマドを構築した例は、5世紀中葉の蔵王町都遺跡SI2堅穴住居跡(蔵王町教委2005)、5世紀後葉の同町窪田遺跡SI101堅穴住居跡(蔵王町教委2011)、東松島市亀岡遺跡SI2-3住居跡(多賀研2004b)など、カマド導入期から認められる。また、その特徴の一つに燃焼部幅が狭い点があげられる。板状の割石は、断面方形の切石とは加工にかかる時間や技術が全く異なり、採取場所から運んだ素材をそのまま利用することも可能である。そうした意味では、河原石や粘板岩の板状礫と同じであることから、凝灰岩切石組カマドとは区別している。

註3 大崎地方は県内屈指の横穴墓の分布域であるが、切石組カマドは確認されていない。その理由は、横穴

墓の盛行期である6世紀後半から7世紀代の集落跡の発掘例が極端に少ないと考えられる。同時期の集落は、主として自然堤防に立地しており、今後、沖積地の遺跡調査が進むとともに、類例は増加するとみられる。

また、石組カマドの地域性が素材の入手し易さに関わると指摘したが、全体的に粘土やシルトでつくられるカマドが主体となる中で、石組カマドを採用した理由とは何か、また、カマド構築技法の違いは、他の点でも認められ生活様式の違いにまで反映したのか、しないのかについても考察できなかった。今後の課題としたい。

5. 動物質資源利用の特徴と古墳時代後期の生業

(1) 動物遺存体群の構成

A. 貝類

[全サンプルにおける組成] 4mm試料中の貝類については、あらかじめ全サンプルについて作業員による分類を行なっており、殻頂部・特徴的な破片などを抽出、見た目により分類し、殻頂を数えている。殻頂部の抽出漏れが想定される上、分類の精度も低いものの、マガキ・二枚貝・アカニシ・ウミニナ・カワニナ・小型巻貝・スガイの蓋といった単位でなら有効性があると認められた。各地点におけるNISPを上記の分類単位ごとに集計した(表73)。内容は地点により差異がある。スガイの蓋は多くの地点で一定の比率を占める。マガキはLoc. 1ではほとんど認められず、Loc. 5で最も多く21%である。二枚貝は14~24%で、Loc. 2・3・4では20%以上である。小型巻貝はLoc. 1では18%であるがLoc. 2・3・4・5の順に少なくなりLoc. 5では2%である。

[詳細分析サンプルにおける組成] 各サンプルにおける主要貝類のNISP組成を示す(表72)。ここで主要な捕獲対象と考えられるハマグリ・アサリとマガキに着目し組成を検討すると、各サンプルは以下の組成タイプに分類できる。

A : 干潟に生息するマガキが非常に少ない<潮間帯の砂底～岩礁>

B 1 : 砂底～干潟に生息するハマグリ・アサリがマガキより多い<砂底～干潟>

B 2 : ハマグリ・アサリがマガキと同等かそれ以上で泥底に生息するウミニナが非常に多い<干潟>

C 1 : マガキがハマグリ・アサリより多くウミニナがやや多い<干潟・カキ礁>

C 2 : マガキがハマグリ・アサリよりかなり多くウミニナが少ない<カキ礁>

以上の組成タイプは採取環境を反映していると考えられる。また組成タイプの出現状況はサンプル地

生息域・主な種 組成タイプ	時期 層位 地点 サンプル No.	6C末-7C前半												計							
		3層				3層				4層											
		Loc.1	Loc.3	Loc.4	Loc.5	Loc.1	Loc.3	Loc.4	Loc.5	Loc.1	Loc.3	Loc.4	Loc.5								
潮間帶・干潟	複足綱 スガイ*	53	47	53	17	7	27	13	29	7	15	82	3	2	662						
潮間帶・砂底・干潟	二枚貝綱 ハマグリ・アサリ	191	22	82	45	33	27	32	48	46	29	82	28	16	18	6	4	6	4	1089	
干潟	複足綱 ウミニナ	182	31	65	32	3	6	56	10	77	49	40	83	18	23	4	7	2	1	471	
干潟	二枚貝綱 マガキ	27	21	83	97	25	44	69	118	83	69	110	35	72	108	10	42	21	21	206	
汽水域・砂泥底	一枚貝綱 ヤマトシジミ	8	11	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	29	
河川・湖沼	複足綱 カワニナ	1	35	59	10	19	7	22	32	7	22	15	8	1	4	6	6	28	248		
計		561	533	715	642	81	274	192	294	218	160	468	150	125	133	10	59	28	28	34	4705

*若く

表72 詳細分析サンプルにおける主要貝類生息域別NISP

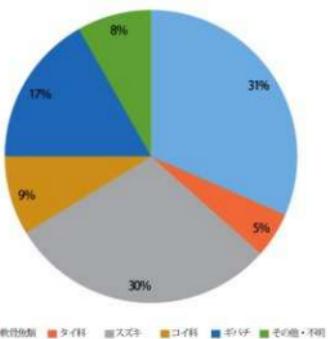
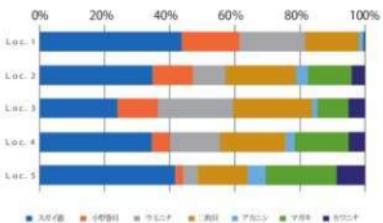
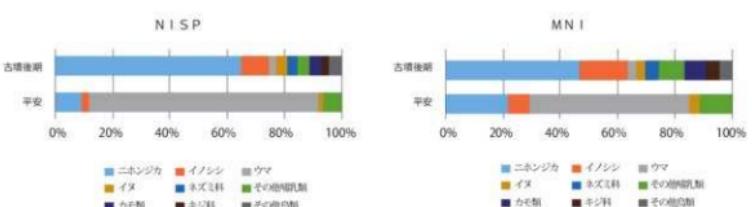
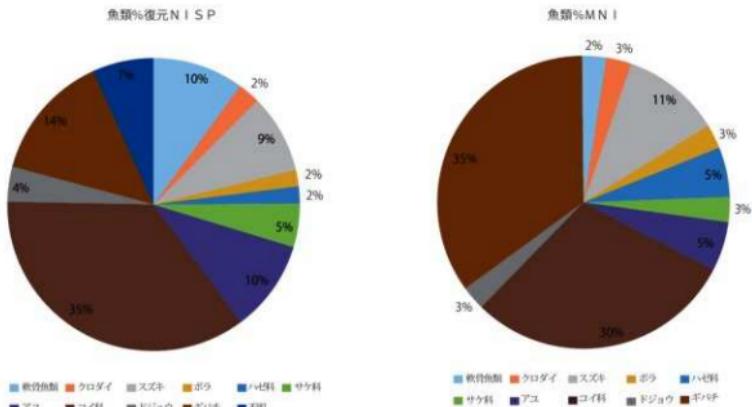


表73 各地点における全4mm試料貝類の分類群構成

表74 目視・4mm試料における魚類組成



点に対応しており、Loc. 1ではAタイプが、Loc. 3ではB1・B2が、Loc. 4ではC1・C2が主体となり、Loc. 5ではC2が認められる。全サンプルにおける地点ごとの貝類組成についても、小型巻貝をスガイ、二枚貝をハマグリ・アサリと見れば、これと対応している。詳細分析サンプルを選択しなかったLoc. 2はLoc. 4に類似し、C1・C2タイプと推定される。

貝層は一様ではなく、実際は採取環境を反映した、より細かな堆積単位から構成されていると判断される。特に、貝層の時期が古いLoc. 1では、カキが主要種になっていない一方、スガイが主要種に加わっており、他の地点と大きく異なる。

B. 魚類

[全サンプルにおける組成] 目視・4 mmでは、同定試料数で見ると海水魚が7割近くを占め、板鰓亜綱とスズキが主体である（表74）。淡水魚ではギバチが多い。大型魚や、頑丈な部位を持つものの割合が高くなっている。大型魚の大半は海水魚であることがわかる。

[詳細分析サンプルにおける組成] 復元NISPで見ると海水～汽水種が25%、淡水種が68%、個体数では海水～汽水種が24%、淡水種が76%である（表75）。次に地点ごとに組成を検討する。種組成は地点ごとに変異がある（表76a）。Loc. 1では魚骨密度が低く、海水魚のみである。Loc. 3～5では海水・淡水両魚種が見られるが、淡水魚

を主体とする。Loc. 3～5内では組成差はあまり明瞭ではない。ここで、さらに組成を検討するため、より多くの組成タイプが認められた貝類の組成タイプごとに各サンプルの内容を見てみると、貝類組成タイプに対応した以下のような特徴が指摘できる（表76b）。

種	貝組成タイプ				
	A	B1	B2	C1	C2
軟骨魚類	2.0	3.0	1.0	8.8	11.0
クロダイ	2.7	1.0			2.3
スズキ	1.0	6.0	1.0	4.0	10.0
ボラ					4.0
ハゼ科		1.0		2.0	2.3
サケ科				10.0	2.0
アユ		2.0		1.0	22.1
コイ科		12.5	3.0	23.9	49.0
ドジョウ		4.2	4.4		1.0
ギバチ		1.0	5.0	10.9	18.9
不明		4.5		6.7	6.1
計	5.7	35.2	14.4	67.2	128.6
海水魚	100%	36%	14%	24%	24%
淡水魚*		64%	86%	70%	70%

* サケ科は淡水魚に含めた

表76b 貝組成タイプごとにみた各魚種復元NISPと海水/淡水比

部位	3層										4層										計						
	Loc.1					Loc.3					Loc.4					Loc.5											
	サンプルNo.	38	41	56	288	77	160	210	97	240	125	123	231	116	190	207	172	124	268	283	223						
組成タイプ	A	A	B2	B2	B1	B1	B1	B1	C1	C1	C1	C2	C2	C2	C2	C2	C2	C2	C2	C2	Loc.1	Loc.3	Loc.4	Loc.5	Loc.6		
軟骨魚類		2.0		1.0	2.0	1.0		1.0	2.0	5.8	2.0	2.0		1.0		1.0	3.0	3.0			25.8						
クロダイ	1.5		1.2													1.0	1.3				1.0	6.0					
スズキ		1.0	1.0		3.0	1.0	2.0			4.0	1.0	1.0	1.0	1.0			3.0	2.0	1.0		22.0						
ボラ															1.0	2.0					1.0	4.0					
ハゼ科						1.0		1.0	1.0	1.0	1.0				1.0		1.3					5.3					
サケ科								1.0	2.2	2.8				1.0				1.0				12.0					
アユ						1.0	1.0	1.0	1.0	1.0				1.0			20.1	1.0	1.0			25.1					
コイ科						3.0	5.5	2.0	2.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	2.6	5.9	4.9	17.2	3.0	88.4					
ドジョウ						3.4	3.2													1.0	1.0	1.0	9.6				
ギバチ		1.0	4.0	1.0		1.0	1.0	8.9	1.0	3.8	2.0	1.0	3.0			1.3	3.9	1.0			35.7						
不明						3.5	1.0	2.9	2.8	1.0	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	1.3					17.3					
計	1.5	4.2	2.0	12.4	16.0	9.2	5.0	22.4	17.7	27.1	9.8	12.7	15.6	8.9	25.2	13.5	17.8	25.2	5.0		251.1						

表76a 各詳細分析サンプルにおける魚類出土表（復元NISP）

A : 板鰓亜綱・クロダイ・スズキの海水魚のみ<内湾>

B 1 : 板鰓亜綱・スズキ・ハゼ科の海水魚がコイ科・ドジョウなどの淡水魚の50%以上でギバチがほとんどない<湾奥部～河口域・下流域>

B2/C1/C2 : 淡水魚のコイ科・ギバチを主体とし、海水魚は淡水魚の30%以下でボラがみられる。

C2 タイプではアユが集中するサンプルがある<下流域～小河川>

以上の組成差は、貝類同様、採取環境を反映したものと考えられる。

C. 鳥獣類

古墳時代中期から近世までの試料がある(表77)。古墳時代後期は河川跡内の貝層・包含層から、他の時期は様々な遺構から出土したものである。遺構出土試料は河川跡と比べると少量であり、ある程度の量があるのは平安時代で、それ以外の時期はほとんどない。ここで、古墳時代後期と平安時代について組成を検討する(表78)。

[古墳時代後期] NISPで見るとシカが65%であり、シカ1種で鳥獣類試料の半分以上を占める。次に多いイノシシは10%である。これにイヌ・ウマが次ぐが少なく、イヌ以外の中型獸はわずかである。鳥類は11%にすぎない。シカが主たる狩猟対象だったと考えられる。

[平安時代] NISPで見ると、ウマが81%で圧倒的であり、個体数でも56%を占める。なおウマ試料の大半は遊離歯である。次に多いのはシカで9%、鳥類は出土していない。

集落外縁の廃棄場所で、貝層が形成され残存状況もよい古墳時代後期の試料と、複数の遺構から散発的に出土し残存状況も悪い平安時代の試料とでは単純な比較はできないが、遺存体構成におけるウマの飛躍的増加を認めることができる。

	NISP										MNI																	
	古墳中期		古墳後期		鹿島		平安		平安山跡		近世		時期不明		古墳中期		古墳後期		鹿島		平安		平安山跡		近世		時期不明	
	1通構	河川跡	3通構	15通構	基本層	NISP	1通構	通構/土石	基本層	NISP	1通構	通構/土石	基本層	NISP	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI			
	NISP	NISP	NISP	NISP	NISP	NISP	NISP	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI											
ニホンジカ	1	301	3	7		1			313						1	31	2	6	1	41								
イノシシ		44		2					47							11	2								13			
ウマ	11	4	62	3		6	86								2	4	15	1		22								
ウシ		1		3					4						1	2				3								
イヌ	19		1						20						2	1				3								
キツネ		1							1						1					1								
タヌキ		1							1						1					1								
ツキノワグマ		1							1						1					1								
ワサギ		1							1						1					1								
ネズミ科		15							15						3					3								
ヒト?		1							1						1					1								
海鷺類			1	2					3							1	1							2				
大型獣		4							4																			
中型獣		7							7																			
小型獣		4							4																			
カモ類: 大型		6							6						1					1								
カモ類: 中型		5							5						2					2								
カモ類: 小型		8							8						2					2								
キジ科: ブ		8							8						2					2								
キジ科: キ		4							4						1					1								
サギ科		1							1						1					1								
シロズリオオハム		1							1						1					1								
ミズクチギリ科?		1							1						1					1								
不明鳥類		17							17																			
ウミガメ科		1							1						1					1								
ヘビ		5							5						1					1								
カエル		15							15						2					2								
計	1	483	8	77	3	1	7	380		1	70	7	27	1	1					107								

表77 時期別鳥獣類出土量

(2) 貝層の形成と漁撈環境の変化

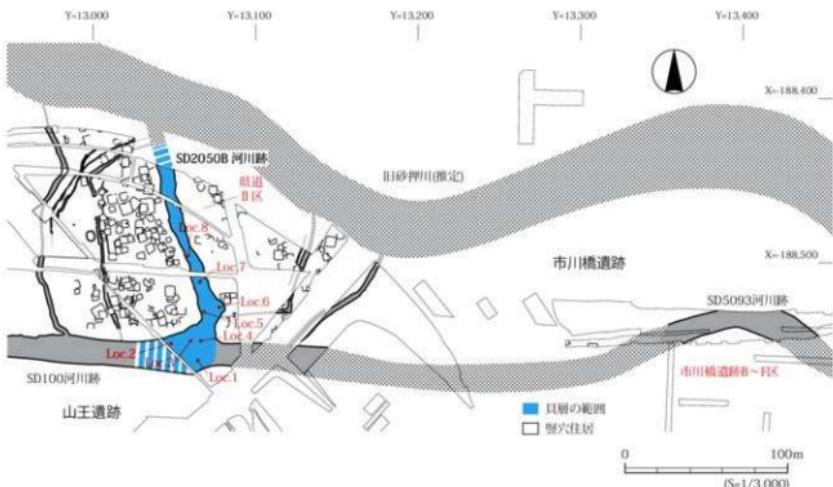
詳細分析サンプルの分析から、地点により貝類・魚類の組成が異なることが判明した。組成は、構成する種の生態から採取環境を反映していると言うことができる。Loc. 1 の貝層と Loc. 3～5 の貝層では時期差があり、Loc. 1 が古い。この間に主たる採取環境は、貝類では潮間帯の砂底～岩礁から干潟やカキ礁、魚類では内湾から湾奥部～下流域および小河川へと変化している。Loc. 3～5 の貝層は同一のものとして捉えられており、各地点間の層位的な上下関係は確認されていないが、これら地点における貝類組成の差は、採取環境の時期的変化と廃棄場所の移動によって生じたと考えるのが自然である。採取環境の海側から陸側へという変化の方向性がみとめられること及び各地点の位置関係から、Loc. 1 → Loc. 3 → Loc. 4 → Loc. 5 と廃棄場所が移動したことが推定される。

なお、今回の調査地点のおよそ 100m 北の II 区 (SD2050B の上流側・図版 683) で行われた 6 世紀末～7 世紀前半の貝層・包含層におけるブロックサンプリングの分析では、マガキが 65% と圧倒的で、スガイ、アサリ・ハマグリが見られ、ウミニナは稀であり (宮城県教委 2001b)、今回の貝類組成タイプ C2 に相当する。

(3) 大型獣の処理と廃棄

まず、シカについて検討する。シカについては、オジロジカ属の各部位の骨密度 (Bone Mineral Density) が明らかにされており (Lyman 1994)、残存状況を考える上でこれを参考にする (1 分冊表 22c)。

頭蓋骨・下顎骨は脳や骨髓を取り出した痕跡が顕著である。頭部骨はともに非常に残存率が高い。下顎骨は骨密度が高く、歯も非常に残りやすい。残存状況は実際の廃棄状況に近いと推定され、廃棄



図版683 古墳時代後期集落と河川跡の位置

量が多かったと言える。可食部もほとんどなく、今回の調査地点付近で処理されその場に廃棄されたと推定される。

椎骨・寛骨はともに骨密度が低く、多くが頭部の50%以下で、残存率も頭部に比べて低い。ただし残存状況には差があり寛骨が比較的多い。椎骨は特に残りの良いもののみを同定したことが影響している可能性がある。椎骨には肉を外した際の切創が、寛骨には脚部を外す目的とみられる打割痕が見られる。

上腕骨・桡骨・大腿骨・脛骨などの重量のある四肢骨は肉・骨髓量が多い。これらには骨髓を取り出した痕跡が顕著に見られる。これら及びこれらに接続する距骨・踵骨はいずれも骨密度が高く、下頸骨と同等であるが残存率は低い。また、骨密度の低い寛骨と残存率が近いことを考慮すると、四肢骨の廃棄量が、頭部のみならず寛骨に比べてもそもそも少なく、多くが持ち出されたと推定される。

肩甲骨・中手/中足骨は骨密度が下頸骨の80%ないし下頸骨以上であるが残存率は低い。鹿角は残存状況の良いものは少なく、骨角器素材として多く出土している。肋骨には胸椎から取り外した痕跡が見られる。骨角器の器種と素材を見ると、素材はすべてシカで、肩甲骨・肋骨は卜骨、中手/中足骨は骨董、鹿角は刀子の柄・漁撈具他と用途が決まっており、これらの部位は素材として需要が高かつたことがわかる。これらは分離後ないし骨端部の除去・素材整形後に持ち出されたことが明白である。

他の種についてみると、イノシシは下頸骨の約半数、上腕骨・桡骨・大腿骨・脛骨のすべてで骨髓取り出しの形跡が認められた。また、ツキノワグマの上腕骨でも骨幹部の打割が認められ、大型の哺乳類については、種類を問わずシカと同様の手法で骨髓の取り出しが行われていたと考えられる。

山王遺跡では、今回とは別地点のII区でも、今回と同時期の試料が大半を占めるSD2050B河川跡出土試料の分析が行われている（宮城県教委2001b）。II区でのシカの状況をみると、四肢骨については、肩甲骨が非常に少なく、中手・中足骨も少ないという点で今回と同様であるが、頭部骨との関係で見ると、上腕骨・脛骨が頭部骨より倍以上多く、頭部骨と四肢骨の関係が逆転している。このことから、集落内でのシカの部位の移動が想定され、その場合、集落外縁において解体・脳の摘出・骨角器素材の分離といった一次処理がおこなわれ、その後、集落内で二次処理・食料資源・加工材料・儀式用品として消費、部位によってはイヌに与えられた後、集落内の捨て場（今回の調査地点も含まれる）に廃棄されるという状況が考えられる。

（4）山王・市川橋遺跡における古墳時代後期生業の特徴

山王遺跡では、古墳時代中期以降、多量の炭化米・農耕具などが出土しており、少なくともこの時期以降の生業は水田農耕を基盤としていたことが明らかになっている（宮城県教委1994ほか）。また、ウマ・ウシも導入された。

古墳時代後期の漁撈活動については、貝層中の魚骨密度は低く、鰐・ヤスといった漁撈具は出土するものの少ない。この時期には漁撈は副業的だったと考えられる。6世紀末以前から7世紀前半までの間に漁撈環境の変化が認められた。このことは、周辺環境が変化したとするには短期間であり、採取場所が変化したことを示している。

6世紀末以前は、貝類は潮間帯の砂底～岩礁、魚類は内湾に生息するものが主体である。また汽水種のヤマトシジミは全時期を通してほとんど採らないが、6世紀末以前の方が多いことから、海岸部など集落から離れた場所での漁撈活動が生業に組み込まれていたと考えられる。ただし、古墳時代中期の炭化物層からはウゲイなどのコイ科が検出されており（宮城県教委1994b）、この時期にも淡水魚の捕獲は行われていたとみられる。

6世紀末～7世紀前半になると貝採取場所は干潟、漁場は淡水域を中心としたものへと変化していく。当初（貝類組成B1形成期）は、内湾に面した場所におけるハマグリ・アサリ採取も一定程度行われていた。スズキがやや多いことから、その漁獲もこれに合わせて行っていたと推定され、漁期は春～夏とすると矛盾がない。その後、貝採取については、ハマグリ・アサリ漁は縮小していき、後半（貝類組成C2形成期）には秋～春の農閑期に行われた干潟でのマガキ漁が中心となる。漁撈活動は河川下流域～小河川を中心に行われるようになる。主な対象はコイ科・ギバチで、アユの集中的捕獲が行われた可能性があり、淡水漁撈への傾注が伺える。淡水漁撈は夏を中心に行われていたと推定される。海岸部での貝採取量は大きく減少し、エイ・サメ類や大型のスズキの漁獲は継続するが減少、海岸部へ向かう人員や機会は限られたものになっていた。そして、7世紀中葉以降は貝層の形成がなくなることから、マガキ漁も行われなくなり、漁撈活動はほぼ集落周辺の淡水域で行われるようになったと見られる。漁撈活動は自家消費的であり、古墳時代後期の間にこのような活動が、他のより優先される活動に取って代わられ、徐々に制限されていったと考えられる。

陸上狩猟では、大型獣、中でもニホンジカ獵に重点が置かれている。野生の中型獣・鳥類はほとんど対象になっていない。シカは利用価値が高く、大型獣としての多くの肉・骨髓に加え、脳や骨角器素材としての骨が利用された。脳の利用については、5世紀頃の牛馬の移入にさほど遅れずして脳漿を鞣し剤として用いる技法が移入され、『延喜式』の鹿皮を鞣す記事となったとの論証があり（松井1987・2003）、本遺跡の古墳時代後期においても、脳漿鞣しによる鹿革の生産が行われていた可能性が高い。骨に残された痕跡と想定される集落内での部位の移動から、処理方法は計画的で、利用は徹底的だったと考えられる。

隣接する市川橋遺跡の8世紀～9世紀初頭を中心とする試料（市川橋遺跡B～F区・図版683）においても、シカは野生獣の中では突出して多く、脳の摘出、四肢骨における骨髓利用、中手骨・中足骨・角の骨角器利用が見られ、この状況はその後も継続する。さらに、この時期にはウマが大幅に増加し、大型獣の規格的な解体方法による脳や骨髓の利用がなされ、「大量の動物を解体処理し、皮・肉・角・脳髄などの摘出を規格的かつ組織的に行う（専業集團による）工房の存在」が想定されている（宮城県教委2001a）。このように、古墳時代後期におけるシカの利用状況は後の段階へと繋がるものであったとみることができる。シカには自家消費的食料資源としての側面に加え産業資源としての側面があり、古墳時代後期には後者の側面が大きくなっていたと考えられる。

以上から、もともと副業的であった自家消費的食料資源獲得活動が徐々に制限されていく一方、産業資源的価値の高いシカ獵への集中とその計画的利用の進行が、古墳時代後期生業の特徴として指摘できる。これは、本集落の機能・性格と関わると考えられる。

6. 遺構の特徴と年代

調査では基本層位第Ⅲ層で掘立柱建物跡・竪穴住居跡・井戸跡などを確認している。本節では各調査区で確認した遺構の特徴や年代・変遷について種別ごとに検討を行う。その結果に基づく主要遺構の変遷については、図版685・686に示した。

(1) 道路跡

道路跡は8条確認した。うち、7条は方格地割を構成する(図版710)。また、施工に伴って整地が認められるものがある。その場合、本節では年代の検討のみを行い、全体の関連性については本章第11・12節で述べることとした。

A. 東西道路跡

【SX500】SX390・710より古い北2a道路跡で、施工に伴ってSX7026・7033整地が行われた。以前の報告では年代を9世紀前半としている(宮城県教委1997)。側溝は掘り直しが認められない。年代は8世紀後半のSD461区画溝より新しいこと、SX7026は8世紀末以降とみられること、SX390・710北2a道路跡より古いことから、8世紀末～9世紀前葉と考えられる。

【SX390】西4道路西側の北2a道路跡で、SX500より新しい。側溝は3時期あり、A期が西4道路跡(SX700・750) A期に接続する。また、C期には10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が認められる。南側溝A期からロクロ調整で逆台形、手持ちヘラケズリの土師器壺(以下、手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリは回転ケズリ、非ロクロ調整の土師器は非ロクロ土師器、ロクロ調整の土師器はロクロ土師器と略す)、同じく逆台形でヘラ切りの須恵器小型壺が出土した。C期の灰白色火山灰下からは椀形で回転糸切りのロクロ土師器や須恵器の壺、火山灰層中からは赤焼土器壺や会津大戸窯跡群(以下、大戸窯または大戸産とする)の広口壺などが出土している。

A期の土器は多賀城跡SK2272土坑と共にすること(多賀研1994)、C期は灰白色火山灰が認められ、上器は千刈田地区SX543上器溜(宮城県教委1996a)に共通することから、A期は9世紀中葉、C期は9世紀後葉～10世紀前半と考えられる。B期は両者の間で、9世紀中葉頃とみられる。

【SX710】西4道路東側の北2a道路跡で、SX500より新しい。施工に伴ってSX7001・7025整地が行われた。側溝は3時期あり、A期はSX7001・7025を掘り込み、C期に灰白色火山灰が認められる。出土遺物は少ないが、A期はSX7001・7025の年代観から9世紀中葉、C期は9世紀後葉～10世紀前半と考えられる。B期は両者の間で、9世紀中葉頃とみられる。

【SX12221】西4道路西側の北2道路跡で、多賀城市教委がF区で確認したSX300と一連の遺構である。SX12100より新しい。側溝は3時期あり、C期下層に灰白色火山灰が認められる。また、西4道路との交差点形状は一貫して開放型である(齋藤2016a)。したがって、年代は西4道路と同じ8世紀末～10世紀後半とみられる。

【SX12100】SX12221北2道路跡より古い東西道路跡である。遺構の重複関係と本道路と同時期に機能したSD461区画溝跡の年代観から、8世紀後半と考えられる。

B. 南北道路跡

【SX700・750】西4道路跡で北2a道路交差点より南がSX700、北はSX750である。8世紀後半のSD461区画溝跡より新しく、8世紀末のSX7026・7033整地を作う。側溝は4時期あり。B期は貞觀11年(869)の巨大地震に伴うイベント堆積物(宮城県教委2014)に覆われ、C期に灰白色火山灰が認められる。

A期堆積土から逆台形でヘラ切りの須恵器壺、C期は回転糸切りのロクロ土師器壺や赤焼土器壺、D期は低高台のロクロ土師器高台壺や赤焼土器壺・小型壺・小皿・高台壺などが出土した。したがって、A～B期は8世紀末～9世紀中葉、C期は9世紀後葉～10世紀前半、D期は10世紀後半と考えられる。B期は、接続する道路の年代観から9世紀中葉とみておきたい。

【SX400】西5道路跡で、8世紀後半のSD417溝跡より新しい(C区、宮城県教委1997)。側溝は3時期あり、C期下層に灰白色火山灰が認められる。B期は回転糸切りのロクロ土師器壺や回転糸切りの須恵器壺、C期は赤焼土器壺・高台壺などが出土した。したがって、A期は8世紀末以降で、B期は9世紀中葉頃、C期は10世紀前半を中心とするとみられる。

【SX2652・12092】西6a道路跡で、SX12092は北2道路との交差点から地形に沿って施工されたため東西方向となる部分があるが、全体的には北東に延び、県道III区で確認したSX2652にいたると考えられる。SX12092の側溝は3時期あり、B期に灰白色火山灰が認められる。B期堆積土から回転糸切りのロクロ土師器壺や赤焼土器壺、C期から赤焼土器壺・高台壺などが出土した。このため、B期は10世紀前半を中心とし、それより前のA期は9世紀代、C期は10世紀後半以降とみられる。以前の報告でSX2652の年代は9世紀代としたが(宮城県教委1994b)、これは遺構の残りが悪く、出土遺物が少なかったためと考えられる。

(2) 区画施設跡

区画施設は、これまでの調査成果を踏まえて特徴と年代を述べることとする。

A. 古墳時代中期

【SA11170】G区で確認した縦板を用いた掘立柱塹跡で、支柱の掘方は布掘り掘方底面から一段下げている。材抜取穴から非ロクロ土師器高壺・小型壺・大型壺・甕などが出土した。高壺や壺類は赤彩されているものが多い。遺物の特徴はA群土器(本章第1節)と共通することから、5世紀前葉と考えられる。

【SD11164】西側に3.2m離れて並行するSA11170に伴う区画溝跡で、堆積土から赤彩された非ロクロ土師器広口壺や石製模造品などが出土した。遺構のセット関係や出土遺物から、5世紀前葉と考えられる。

B. 古墳時代後期

〈材木塙跡〉(図版695)

【SA7621】西側に3.4m離れて並行するSD7848区画溝跡と一体の区画施設である。北側の県道調査区と南側のD区では確認していないため、総長は不明である。6世紀末～7世紀前半のSI7862竪穴住

居跡やSK7710土坑より古いことから、7世紀前半以前と考えられる。区画施設の東側は同時期の竪穴住居が密集するが、西側は数が少ないとある段階の居住域中心部の西を画した堀と考えられる。

【SA7784】県道調査区のSA2521・2547、多賀城市調査L区のSA5577と同一遺構で、西側に5.4m離れて並行するSD7844・7845・7881区画溝跡と一体の区画施設である。総長はSA2521・2547・5577と併せると、77m以上になる。6世紀末～7世紀前半のSI10434竪穴住居跡より新しく、7世紀前半～中頃のSD7773・7823と一連であるSD2539・2634より古いことから7世紀前半頃と考えられる。

SA5577・7784は、SD7844・7845・7881区画溝跡の東側で並行するが、県道調査区では両者の方向が異なり、堀の外側（=北側）に同時期の住居がつくられる。また、県道調査区ではSI10434竪穴住居跡を壊している（宮城県教委2015a）。したがって、両者は一体の施設として機能した時期もあったが、施工時期や存続期間は異なる可能性がある。

〈区画溝跡〉（図版695）

【SD7848】東側に3.4m離れて並行するSA7621と一体の区画施設であること、同一遺構のSD2524が栗園式期であることから（宮城県教委1994b）、6世紀末～7世紀前半と考えられる。本溝はL区北端で直角に折れて北東方向へ延びるが、その先にはSD2050Bが流れることから、河川に接続していた可能性が高い。南側もまた、同一遺構のSD503がSD100に接続していたとみられる。その場合、SD2524からSD503までの総長は121m以上である。

一連の区画溝であるSD503・2524・7848は、SD2050B河川から西に45～55m、SD100河川から北に103～110m離れ、それらに囲まれた内部には、竪穴住居が密集する。一方、外側は住居が少ないとあることから、これらの区画溝や材木堀はある段階の居住域中心部西側の西と北を画したと考えられる。

【SD7844・7845・7881】東側に5.4m離れて並行するSA7784材木堀と一体の区画施設である。年代は、一連の遺構と考えられるSD2563の年代観（宮城県教委1994b）やSD585・589・669・673・674が8世紀以降のSI498竪穴住居跡、SD461区画溝跡より古いことから（宮城県教委1997）、6世紀末～7世紀前半とみられる。SD2563からSD585までを合わせた総長は、130m以上である。

本溝は、D・L区を西へ膨らみながら北へ延びるが、L区の北で北西に屈折する。さらにその先は旧砂押川の本流に、南端はSD100河川に接続したとみられる。SD2050B河川とは最大で約90m離れ、本溝の西側には古墳時代後期の竪穴住居は認められない。一方、本溝と河川の間には竪穴住居が分布するものの、前述したSD7848の東西で密度が異なる。こうしたことから、本溝は居住域中心部西側が最も広がった段階の区画溝であったと考えられる。

C. 8世紀前半以前

〈材木堀跡〉（図版700）

【SA3158】SA3158は多賀城市調査G区SA5636と同一であり、南側に5.0m離れて並行するSD3014と一体の区画施設である（宮城県教委1997）。また、本堀はSA549・5226と、SD3014はSD180AB・5633・11011と一連の施設である。これらは8世紀前半中に位置付けたが（宮城県教委1997）、後

述するように本書で最も遺物が出土したSD180の年代観の見直しの結果、7世紀後半～8世紀前半の間とみておきたい。

【SA7839】SA549・2521・3158・5226・5636材木塀と一連の遺構で、外側にはSD180A・Bなどの区画溝が伴うことから、年代は7世紀後半～8世紀前半の間とみておきたい。

【SA11709】県道調査区で確認したSA2521材木塀跡の西延長上に位置する。SA2521はSA549・3158・5226・5636・7839材木塀と一連の遺構で、外側にはSD180A・Bなどの区画溝が伴う。このことから、本塀の年代は7世紀後半～8世紀前半の間とみられる。

【SA12614】8世紀前半とみられるSI12620・SI12621より古いこと、SA549・5226・7839と同じ方向であることから、7世紀後半～8世紀前半の間とみられる。

【SA7781】SA2521・3158・5636と同じ方向であることから、7世紀後半～8世紀前半の間とみられる。その場合、本塀はSA549・2521・3158・5226・5636・7839で囲まれた内部の北西隅を細分した可能性がある。

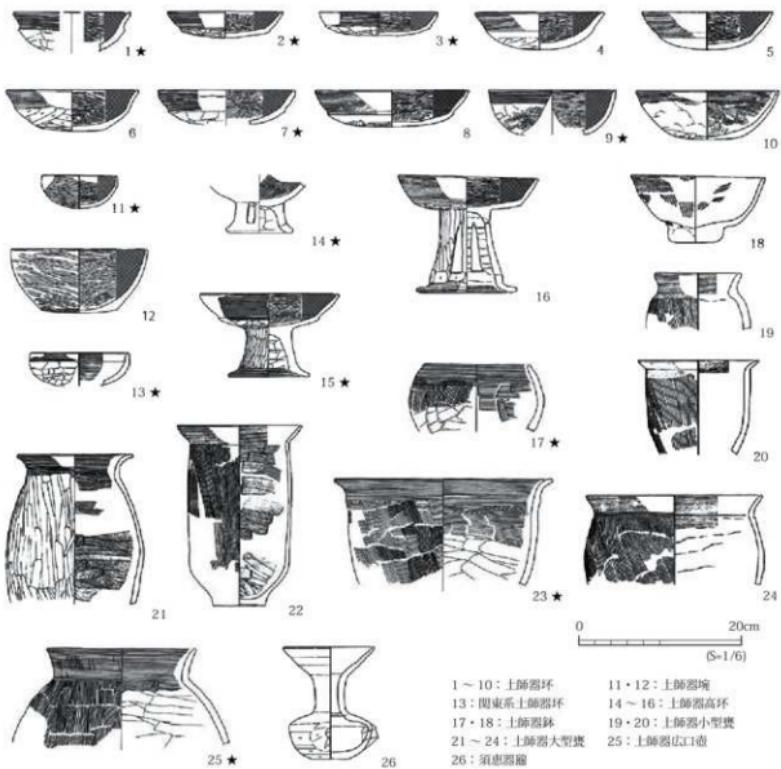
〈区画溝跡〉(図版700)

【SD180AB・11011】SD11011区画溝は、北側に5.0m離れて並行するSA3158材木塀と一体の区画施設で、SD180AB・3014・SD5633と一連の遺構と考えられる(宮城県教委1997)。SD180は2時期(A→B)あり、A期はB期より古いことから8世紀前半中心としたが(宮城県教委1997)、出土した土師器は栗廻式期と報告されている(図版684、註1)(多賀城市教委1992b)。そこで、A期出土土器を再検討すると、在地土師器は村田編年の4・5期が多く、明確に6期と判断できるものはなかった(村田2007)。

特に、脚部に透かしが入る土師器高环(14・16)や少量伴う関東系土師器环(13)は、4・5期に特徴的に認められること、土師器に較べて須恵器が極端に少ないとみるが妥当と考えられる。SD180の方向が西辺中央から北でN-30°~40°-W、南でN-7°-W、南辺(SD3014・5633・11011)がE-20°-Nと、全体的に真北より大きく傾くことも、7世紀末の郡山遺跡II期官衙より古い官衙関連施設と共通しており(村田2016b)、こうした見方を補強する。

B期の年代は、第3層から表文書が天平5年(733)または天平12年(740)の陸奥国戸口損益帳草案、紙背文書の作成は天平勝宝元年(749)年までに限定できる漆紙文書と、第2層から天平宝字7年(763)の具注曆(漆紙文書)が出土したことなどから、出土土器の年代は8世紀中頃～後半と考えられる(図版668、註2)。ここで問題となるのは、B期とSD461区画溝跡やSX12100東西道路跡との関係で、前者とは土器様相が共通し(本章第3節)、後者と位置的に重複する。このため両者が併存する、もしくはA期から継続するSD180がSD461やSX12100に先行する、の2案が考えられる。

ここでは、後述するようにSD461で囲まれる区画の成立とSX12100東西道路との間には密接な関係性が認められること、SD461の方向がN-10°~20°-WでSD180より傾きが小さいこと、B期の8世紀中頃～後半の土器は遺存状態がよく、出土位置が限られること(B・E・F区)、実年代が記された漆紙文書は漆工房でフタ紙として利用されたことから、SD180は7世紀後半～8世紀前半の間に



★: 多賀城市文化財調査報告書 30 集 その他: 多賀城市文化財調査報告書 27 集

図版684 SD180A区画溝跡出土土器

機能し、B 溝出土遺物は 8 世紀中頃に窪地となった部分に対する廃棄と捉え、その後、SX12100 がつくられたと考えておきたい。

【SD12613】堆積土から非ロクロ土師器両黒盤やロクロ土師器杯などが出土した。後者は逆台形で静止糸切りの後毛持ちケズリである。こうした内容は、SD180B・461・2124（宮城県教委1994c）と共通するが、一部分の調査にとどまること、遺物の出土量が少ないと、方向はSD180と直交することから、7世紀後半～8世紀中頃の間とみておきたい。

D. 8世紀後半の区画施設跡と整地層

〈材木堆跡〉(図版 701)

【SA7176・7755・7756・7838】8世紀中頃～後半のSX7124・7128整地層より新しく、8世紀末

以降のSX750西4道路跡より古い。SA670・2089・2564・5475・5476・10402と一連の遺構で、「コ」字状に巡るSD461・2124・2561区画溝内側に設けられた材木塀である（宮城県教委1997）。年代はSX7124・7128とSD461・2124出土土器から、8世紀後半と考えられる。

【SA853】SA853は9世紀前半のSI839より古い。8世紀後半のSA6553・6555・6611・6800材木塀跡と一連の遺構であり（宮城県教委2009）、その西辺と考えられる。

〈区画溝跡〉（図版701）

【SD461・2561】8世紀末～9世紀前葉のSX500北2a道路跡より古い区画溝跡である。県道調査区のSD2124は同一遺構で、北を除く3辺を「コ」字状に巡る（宮城県教委1997）。SD461の堆積土からは多量の土器が出土した（図版669）。土師器は非ロクロ調整の壺・盤・塊・稜塊・蓋・広口壺・小型甕・大型甕などが多く占め、ロクロ調整の壺が少量伴う。壺は外面のみに段を持つ有段壺と無段平底壺が主体を占める。盤は有段平底と平底があり、塊は弱い丸底と平底がある。盤・塊・稜塊は両面ミガキ仕上げが多く、無段壺もその傾向が認められる。

須恵器は壺・高台壺・塊・蓋・短頸壺・壺・中甕などがある。壺は皿形が主体で、逆台形は少ない。切り離しと再調整はヘラ切り、ヘラ切り後手持ちケズリ、回転糸切り後手持ちケズリ、静止糸切り後手持ちケズリのほか、切り離しが不明で回転ケズリや手持ちケズリがあり、ヘラ切り無調整と再調整のあるものが半々である。本章第3節の検討と前述したSD180Bとの関係から、8世紀後半と考えられる。なお、SD2124はSD461に較べて幅が広いが、今回の調査でSX7124・7128整地層との識別が不十分で両者を合わせて掘り下げたことがわかった。

〈整地層〉（図版701）

【SX7124・7128】層中から非ロクロ調整の土師器壺・盤・甕・須恵器は壺・高台壺・鉢・壺・中甕などが出土した（図版670）。土師器壺は外面のみに段がある有段壺で、扁平で平底もしくは平底状のものと丸底がある。須恵器壺は皿形が主体で、逆台形は少ない。切離しと再調整はヘラ切り、静止糸切り後回転ケズリ、回転糸切り後回転ケズリや手持ちケズリ、切り離しが不明で回転ケズリがあり、再調整が施されるものが多い。高台壺の壺部は逆台形で、底部はヘラ切りである。本章第3節の検討から8世紀中頃～後半と考えられる。

E. 方格地割期の区画施設跡と整地層

〈区画溝跡〉

【SD7100】SD11781と同一の東西溝跡である（図版705～707）。A・B2時期あり、SD7940区画溝跡より新しい。A・B期はSX400西5道路跡の側溝B・C期に接続するSD11781のB・C期に対応する。したがって、B期は9世紀後葉～10世紀前半、A期は9世紀中葉頃とみられる。

【SD7836】南北溝跡でA・B2時期あり、後者に灰白色火山灰が認められる。また、それぞれSD7100区画溝跡A・B期、北3道路跡（SX2651）側溝C・E期に接続する。したがって、B期は9世紀後葉～10世紀前半、A期は9世紀中葉頃とみられる（図版705～707）。

【SD7847】北側の県道III区のSD2541と同一の南北溝跡で、SD7100に接続することから、9世紀代とみられる（図版706・707）。

【SD7940】 SD7100より古く、SD11781A区画溝跡に接続する南北溝跡である。同溝はSX400西5道路跡の側溝A期に接続することから、8世紀末～9世紀前葉とみられる（図版705）。

【SD11739】 A・B2時期あり、それぞれSX400西5道路跡側溝B・C期に接続する東西溝跡である。B期堆積土からは赤焼土器杯が出土した。したがって、B期は9世紀後葉～10世紀前半、A期は9世紀中葉頃とみられる（図版706・707）。

【SD11781】 A～C期の3時期あり、それぞれSX400西5道路跡側溝A～C期に接続する東西溝跡である。年代は8世紀末～10世紀前半と考えられる（図版705～707）。

【SD12113】 A・B2時期あり、それぞれSX12221北2道路跡側溝A期とB期に接続する南北溝跡である。SD12161・12162区画溝跡より古い。年代は8世紀末～9世紀中葉頃と考えられる（図版705・706）。

【SD12161・SD12162】 同一遺構の掘り直しで、SD12113区画溝跡より新しい。新しいSD12162には灰白色火山灰が認められることから、SD12162は10世紀前半、SD12161は9世紀後葉頃とみられる。

【SD12324】 A・B2時期あり、それぞれSX12092西6a道路跡南側溝B期とC期に接続する南北溝跡である（図版707・709）。A期に灰白色火山灰が認められる。A期は9世紀後葉～10世紀前半、B期は10世紀後半とみられる。

〈整地層〉

【SX7001・SX7025】 SX710北2a道路に伴う整地層で、SX7033より新しい（図版706）。年代は、混入と考えられる8世紀代の土器や赤焼土器を除くと、食器が逆台形で再調整が施されるロクロ土師器杯や逆台形の須恵器杯が主体で、切り離しはヘラ切りや回転糸切りであり、SE7105・11001井戸跡出土土器と共に通すこと（本章第3節）、大戸窯KA12～MH19期の長頸壺が認められることなどから、9世紀中葉と考えられる。

【SX7026】 SX500北2a道路に伴う整地層である（図版705）。非ロクロ調整の土師器甕、逆台形でヘラ切りの須恵器杯、大戸窯KA12期の須恵器高台杯、風字硯が出土していることなどから、8世紀末～9世紀前葉と考えられる。

【SX7033】 SX700・SX750西4道路とSX500北2a道路に伴う整地層で、SX7001・7025整地層より古い（図版705）。出土遺物は少ないが、遺構の重複関係や同時に施工された道路の年代観から8世紀末～9世紀前葉とみられる。

【SX7103】 SE7105井戸跡やSK7124土坑より新しい整地層で、灰白色火山灰が覆う（図版707）。層中から椀形で回転糸切りのロクロ土師器や須恵器杯、口縁部が屈曲するロクロ土師器長胴甕、赤焼土器三足土器などが出土したこと、灰白色火山灰に覆われることから、10世紀初頭前後と考えられる。

F. 方格地割廃絶後の区画施設跡と整地層

〈堀跡〉

【SD11009】 伏石地区の中世屋敷を巡るSD3150堀跡と一連の遺構で、年代は15～16世紀と考えられる（宮城県教委1997）。

〈区画溝跡〉

【SD2230・7007・11007】堆積土から染付磁器や陶器のほか、漆製品や木製品が多量に出土した。本溝を昭和24年の米軍撮影航空写真に照合したところ、圃場整備以前に砂押川へ繋がる農業用水路として機能しており、近世以降の農業用水路と考えられる。

【SD11910・12337・12338】堆積土は八幡地区的屋敷跡（宮城県教委1997）を巡る堀跡と共に、基本層位第II層を起源とする層が認められたことから、中世屋敷の区画溝と考えられる。遺物が少なく、年代は八幡地区的屋敷が機能した12～16世紀の間に収まる。

〈整地層〉（図版709）

【SX11900・SX12089】SX11900が新しい。埋没した西2道路跡の上を整地していることから、10世紀後半以降と考えられる。

（3）掘立柱建物跡・掘立柱塀跡

掘立柱建物跡はD区で29棟、F区31棟、G区11棟、J区44棟、L区66棟、M区4棟の計185棟、掘立柱塀跡はD区で1条、F区1条、J区3条、L区2条の計7条を確認した。後者は長さが短いこと、建物と方向や柱筋を揃えた例が認められることから、個別の建物や数棟で構成される建物群に伴う塀と考えられる。掘立柱建物・塀は、出土遺物から年代を特定できるものが少ないと見られ、方向や柱筋を揃えた例をグループとして捉え、他の遺構との新旧関係を検討することが有効と考えられる。

八幡・伏石地区の掘立柱建物跡は、方向から4～7グループに大別して年代を考えている（宮城県教委1994c：162集・1997：174集・2009：218集）。その中で174集は、本報告の隣接地を調査しており、広域かつ長期にわたる年代観を提示したことから、同書の検討を中心に対応関係を整理する（表79）。

174集では、八幡・伏石地区的建物群を方向から北で西に偏るもの（A群）、真北を向くもの（B群）、北で東に偏るもの（C群）に大別し、A群とC群は東西への振れ方からそれぞれ3つずつに細分して計7グループに分けた（註3）。これらを遺構期ごとに古いものからまとめる、a期：A3グループ、b期：八幡A2グループと伏石A1・A2グループ、八幡c期：A1グループ=伏石c-1・2期：B・C1・C2グループ、八幡d-1期=伏石d-1・2期：Bグループ、八幡d-2期=伏石d-3・4期：C1グループとなる。

a期が8世紀前半頃、b期が8世紀後半頃、c期は9世紀前半頃、d期を9世紀後半～10世紀中頃と位置付け、a・b期が方格地割成立以前、c・d期は成立後の建物群とした。また、八幡d-2期に対応する伏石d-3期は、柱痕跡や柱抜取穴に灰白色火山灰が入り、同d-4期はそれ以後である。こうしたことから、八幡地区的8世紀前半頃～10世紀中頃の掘立柱建物跡は、方向と変遷に一定の傾向性が認められ、A3→A2→A1→B→C1の5段階に変遷し、西への傾きが大きいものから小へ、その後真北を経て東への傾きが小さいものに変化したといえる。

162集ではA～C群に大別し、A群とC群は東西への振れ方からそれぞれ2つずつに細分して5グループに分け、C1→C2→A1群という変遷を示した。西への傾きが大きいものが新しい点は174集と

異なるが、西へ傾くものから東へという大きな傾向性は共通しており、162集で位置づけが不明としたB群（真北方向）を含めた変遷は、C1→C2→B→A1群と理解できる。したがって、174集との関係は、B群=八幡d-1期、A1群=八幡d-2期となり、C1群とC2群は西への傾きからみてC1群=八幡b期、C2群=八幡c期とみられる。

218集は同一グループに含まれる建物の年代幅が広く、具体的な建物群の時期設定まで踏み込んでいないが、八幡地区の建物群との共通性は概ね認められるとした。その見解に基づいて両者を整理すると、A群=a期、B群=c期、C群=d-1期、D群=d-2期にそれぞれ対応するとみられる。

これまでの検討結果を174集・162集・218集の順に整理すると、a期=x=A群（8世紀前半）、b期=C1群=x（8世紀後半）、c期=C2期=B群（9世紀前半）、d-1期=B群=C群（9世紀後半～10世紀中頃の古段階）、d-2期=A1群=D群（9世紀後半～10世紀中頃の新段階）にまとめられる（xは報告書に対応する群がないもの）（表79）。また、東への傾きが大きい建物群（174集：C3グループ、162集：A2群、218集：E群）は、柱穴の形や規模が他と異なり、掘方埋土に第II層を含むものがあることから中世とみておきたい。

こうした成果に本書の検討結果を加えると、八幡・伏石地区的建物グループはA3：西への傾きが20°以上、A2：西への傾きが11～19°、A1：西への傾きが4～10°、B：真北を中心にして東西3°まで、C1：東への傾きが4～10°、C2：東への傾きが11～19°、C3：東への傾きが20°以上に分けられる。その上で、174集の遺構に基づく時期的な特徴はa期：A3主体=西に大きく傾くものが主体、b期：A1とA2が主体=西に傾くものが主体、c期：A1主体=西に小さく傾くものが主体、d-1期：B主体=真北前後が主体、d-2期：C1主体=東に小さく傾くものが主体、中世：C2とC3が主体=東に大きく傾くものが主体、と整理することができる（表79）。

さらに、a期～d-2期の年代は、a期がSD180の理解から7世紀後半～8世紀前半、b期は8世紀後半で、c期は方格地割を構成する道路とd-1期の年代から8世紀末～9世紀前葉、d-1期は同じ方向を向く伏石地区的SX3024・3029が9世紀中葉であること（註4）、d-2期には、掘方埋土に回転糸切りの土師器壺や須恵器壺、赤焼土器が認められること、柱痕跡や柱抜取穴に灰白色火山灰が入るものがあることから、d-1期が9世紀中葉で、d-2期は9世紀後葉～10世紀後半と考えられる。このうち、d-2期は10世紀後半までとしたが、同時期が方格地割の終末段階であることを考慮すると、9世紀後葉～10世紀前半のものが多いとみられる。

以上のことから、掘立柱建物は時期ごとに主体となる方向が異なるという傾向性が指摘できる。その一方、同時期であっても方向が異なる建物が認められ、方向のみで遺構期や年代を決定することが難しい。このため本節では、調査区ごとに方向と配置の計画性から同時期と考えられる建物群を抽出し、年代は遺構の重複関係や出土遺物に加えて、上記の成果を参考にしながら検討を進めることしたい。

〈D区〉

【SB7012・7094・7126・7131・7157】西に8～10°偏る。中でもSB7094・7157は東側柱列を描えており、同時期の可能性が高い。SB7012・7094は重複するが、同時期の規制にもとづく建替えと

理解できる。年代はSB7131が9世紀以降とみられるSI825竪穴住居跡より古く、方向は八幡地区c期建物群と共通することから、8世紀末～9世紀前葉とみられる。

【SB7161・7162・7430】西に4～17°偏る。同時期の建物が東に振れる傾向と異なるが、道路とは概ね同じである。SB7161は掘方埋土から赤焼土器坏が出土し、SB7430は赤焼土器坏を含むSK883より新しいことから、10世紀前半以降と考えられる。

【SB1606・7045・7087・7429】ほぼ真北を向く。中でも、SB1606はC区SB526と南側柱列を揃えることから、同時期と考えられる。年代はSB526が八幡地区d-1期であることから、9世紀中葉とみられる。

【SB1605・1607・7153】東に6～10°偏る建物にSB1607を加えた。SB1607とSB7153は方向は異なるが東妻を概ね揃えており、同時期とみられる。また、SB1607はC区SB530とも南側柱列を揃えており、同時期と考えられる。こうしたことから、年代は八幡地区c期のSB530と同じ8世紀末～9世紀前葉とみられる。

【SB7155・7156・7158】東に15～18°偏る建物にSB7155を加えた。SB7156・7158は南側柱列を揃えており、同時期と考えられる。SB7155は真北を向くが、西側柱列をSB7156の西妻と概ね揃えており、同時期とみられる。3棟は、SB7156・7158が9世紀後葉のSB7040より古いことから、9世紀後葉以前と考えられる。

【SB7039・7040・7106・7154・7160】東に7～9°偏る。SB7039・7040・7160は、西妻や西側柱列を概ね揃えることから同時期とみられる。4棟は、SB7154が9世紀後葉以降のL区SB7236と西側柱列を概ね揃えること、方向が八幡地区d-2期と共通することから、9世紀後葉～10世紀前半とみられる。

【SB7086・7431】東に7°偏る。SB7086の東妻とSB768の東側柱列、SB7431の東妻とSB768の西側柱列は概ね揃えており、同時期とみられる。年代は、SB7086の掘方埋土から多賀城IV期瓦が出土したこと、SB768は八幡地区d-2期であることから、9世紀後葉～10世紀前半とみられる。

【SB7428】東に10°偏る。9世紀中葉以前のSB7155より新しく、10世紀後半以降のSD796より古い。灰白色火山灰を含むSF809と方向が同じであることから、10世紀前半とみられる。

【SB7035】東へ5°偏る。本建物の西妻とL区のSB7233の西側柱列は柱筋を揃えており、同時期と考えられる。10世紀前半のSE837井戸跡より新しく、10世紀後半のSE798より古いことから、10世紀前半～後半と考えられる。

〈F区〉

【SB5290・5297・5301・5324・11601・11602・11603・11606】西に6～9°偏る。SB5290・5297・5301は東妻や東側柱列を概ね揃えることから、同時期とみられ、SB11601・11602は柱穴が重複しないものの、同位置で建物規模が同じであることから建替えと考えられる。また、SB11603は桁行4間の東西棟であること、規模が最も大きいことから、ある時期の主屋と考えられる。年代はSB11602・11603の掘方埋土から逆台形でヘラ切りの須恵器坏が出土したこと、八幡地区c期建物群と方向が同じであることから、8世紀末～9世紀前葉と考えられる。

【SB5222・5294・5295・5296・5300・5528・5530・11604】概ね真北を向く。SB5222・5294・5295は西側柱列、SB5296・5528は南側柱列と南妻、SB5530・11604は南妻と南側柱列を揃えることから、同時期と考えられる。これらは建物同士が重複するため、すべて同時期ではないものの、L字形の建物配置を維持したとみられる。また、SB5300はわずかに東に偏るもの、真北を向くSB5302・5529より古いことから、本群に含められる。同建物は桁行3間であるが、前段階の主屋であるSB11603の西脇に位置すること、東西棟であること、礎板の上に柱を立てるといった丁寧な工法で建てられたため（第2分冊、図版256）、主屋と考えられる。年代は建物方向が八幡地区d-1期と共にし、9世紀後葉以降のSB5302より古いことから、9世紀中葉とみられる。

【SB5529・5302】真北を向く。両建物は北側柱列を揃えており、同時期の建物と考えられる。年代はSB5302の掘方埋土から楕円形で回転糸切りの須恵器坏が出土しており、9世紀後葉以降と考えられる。両建物は、SB5300と重複してそれより新しく建物方向もほぼ同じであることから、前代の建物を意識して建てられたとみられる。

【SB5496・11605・11607】概ね真北を向く。方向は他の建物と共通するが、柱穴が小さく、柱穴の大きさや柱筋が揃わないことから一つのグループにまとめた。年代は、SB11605が9世紀後葉以降のSB5302より新しいことから、9世紀後葉以降と考えられる。

〈C区〉

【SB3841・11023】西へ8°～18°偏る。建物方向は、SA3158材木塗跡やSD11011区画溝跡に近いことから、年代は7世紀後半～8世紀前半の間とみられる。

【SB11074・11304・11306】真北を向く。建物方向は伏石地区d-1・2期と共にし、SB11304は9世紀中葉のSB11301より古いこと、掘方埋土から逆台形でヘラ切りの須恵器坏が出土したことから、年代は8世紀末～9世紀前葉とみておきたい。

【SB11065・11206・11301】真北を向く。他に較べて柱穴規模が大きく、3棟はL字形に配置される。その中で、SB11065は東西棟で床面積が大きいことから主屋で、その南西にあるSB11301は副屋とみられる。建物方向は伏石地区d-1・2期と共にし、SB11301は8世紀末～9世紀前葉のSB11304より新しく、9世紀後葉以降のSB11302より古いことから、9世紀中葉とみられる。

【SB11005・11067・11302】概ね真北を向く。SB11302はSB11301より新しい。東西棟のSB11067、その南西で南北棟のSB11302の関係は、SB11065・11301を踏襲するが、柱穴規模と床面積は縮小し、建物平面形が台形に変化する。SB11302が9世紀中葉のSB11301より新しいこと、SB11302とSB11005の掘方埋土から塗跡で回転糸切りの須恵器坏が出土したことから、9世紀後葉～10世紀前半と考えられる。

【SB11066・11073・11303・11305】西へ5°前後偏る。方向は伏石地区d-3期建物群と共にしことから9世紀後葉～10世紀前半とみられる。

〈J区〉

【SB12048・12279・12618・12632】西に7°～17°偏る。他の建物より古く、8世紀前半のSI12620・12621と方向が同じであることから、同時期もしくはそれ以前とみられる。

【SB12584・12586、SA12239】西に約5°偏る。SB12279・12618と位置や方向が概ね同じであり、連続的に建替えられたとみられる。8世紀中頃～後半のSI12331と方向が同じであること、SB12584は9世紀代のSI12305より古いことから、8世紀後半とみておきたい。

【SB12039・12045・12046・12053・12258・12498・12616、SA12617】

東に3°前後偏る建物群である。このうち、SB12498・12616とSA12617を除く建物は、西側柱列や西妻を揃えること、SB12498はSB12258と北側柱列を概ね揃えることから、同時期とみられる。年代は建物方向が八幡地区d-1期と共通するため、9世紀中葉とみられる。

【SB11924・11970・11981・12024・12091・12267・12638、SA12640】東に5°前後偏る。SB11924とSB12267は北妻を揃えており、SB11970・12204・12267は西妻や西側柱列を揃える。さらに、SB12024とSB12091は南側柱列、SB12091とSA12640は北妻と柱筋を揃えていることから、これらはほぼ同時期と考えられる。建物方向は八幡地区d-1期に近いが、SB12039などに較べて東へ傾くことから、9世紀後葉～10世紀前半とみられる。

【SB12216・12217・12218・12222】東に12～23°偏る。他に較べて床面積が狭く、柱の通りが悪い。SB12216の柱抜取穴に灰白色火山灰の2次堆積が含まれることから、9世紀後葉～10世紀前半と考えられる。

【SB12031・12497・12563・12564・12615】東に6～20°偏る。SB12497は西6a道路(SX12092)A期側溝より新しく、SB12563の掘方埋土からは赤焼土器杯が出土したことから、年代は10世紀前半と考えられる。また、年代がほぼ同じで、建物方向が類似するSB12216・12217・12218・12222の中には、本群と併存するものがあった可能性がある。

【SB12022・12027・12040・12056・12059】西に25～30°偏る。柱穴の規模が小さく、掘方埋土に基本層位第II層を含む。年代は、方格地割廃絶後の11世紀以降と考えられる。

〈L区〉

【SB7947・7948・7899・7939】西に15～34°偏る。SB7947は8世紀後半のSB7660より古く、建物方向はSD180と概ね共通することから、8世紀前半以前とみられる。

【SB2037・7283・7295・7330・7347・7367・7454・7659・7660・7757・7775・7776・7822・7924・7938・7953・7955】

西に1～15°偏る。SB7659・7660・7775・7938とC区SB1583は東側柱列を概ね揃える。一方、SB7283・7454・7757・7953・7955は西側柱列を揃えるが、建物同士が重複するものが含まれる。また、SB7454はSB7757より古く、SB7367・7953と柱筋を揃えており、SB7454・7367・7953はSB7283・7757・7955に建替えられたと考えられる。このほか、SB7295・7330・7347は西側柱列を概ね揃え、SB7295・7776は南妻と南側柱列を概ね揃える。

これらの建物は、SD461・2124・2561に開まれた区画2内部に位置する(図版701)。したがって、建物の方向にバラツキがあり、建替えや重複があるものの、区画2存続期間中のものと理解でき、年代は8世紀後半と考えられる。

【SB7251・7682・7926・7927・7941、SA7545・7575】西に3～10°偏る。SB7927・7941は東

側柱列を揃えることから同時期と考えられる。方向は概ね八幡地区 c 期建物群と共通すること、8世紀後半の建物より新しいこと (SB7454→SB7251, SB7267・7295→SB7297)、SB7941は9世紀中葉以降のSD7100より古いことから、8世紀末～9世紀前葉とみられる。

【SB7144・7180・7266・7308・7448・7764・7900・7901・7903・7931・7942・7944・7949・7951・7956・7957】

概ね真北を向く建物のうち、規模が小さいものである。平面形は台形となるものが多い。方向が八幡地区d-1期と共通することから、9世紀中葉とみておきたい。

【SB7267・7236・7286・7760・7928・7930・7933】概ね真北を向く建物のうち、規模が大きいものである。平面形は長方形である。これまで述べたL区の建物群と重複する場合、すべて新しい (SB7930→SB7933, SB7942→SB7760, SB7957→SB7928, SB7286→SB7901)。また、この中でSB7286のみ方向がやや東へ偏るが、D区SB7154と柱筋を揃えることから同時期とみられる。年代は9世紀中葉のSB7942より新しいことから、9世紀後葉以降とみておきたい。

【SB7381・7409・7447・7763】東に5°前後偏る。方向は八幡地区d-2期の範疇に含まれること、SB7381が10世紀後半のSB7380より古いことから、9世紀後葉～10世紀前半とみられる。

【SB7241・7272】東に5～7°偏る。両者は北妻 (SB7241) と南妻 (SB7272) をほぼ揃える。方向は八幡地区d-2期の範疇に含まれるが、年代はSB7272が10世紀前半のD区SB7428と西側柱列を概ね揃えることから10世紀前半とみられる。

【SB7233・7380・7935】東に5°前後偏るものうち、前述のSB7241などより新しい (SB7447→SB7935, SB7381→SB7380)。年代は、重複関係とSB7233が10世紀後半のD区SB7035と西側柱列を揃えることから、10世紀後半と考えられる。

〈M区〉

【SB11770・11772・11773】東に5～7°偏る。SB11773はC区SB582と同一建物で、八幡地区d-2期に属することから、年代は9世紀後葉～10世紀前半と考えられる。

【SB11771】西に5°偏る。建物方向は八幡地区c期建物群と共通することから、8世紀末～9世紀前葉とみられる。

権利	宮城県 174集				宮城県 246集				宮城県 162集				宮城県 218集				年代 (174集)	年代 (本番)
	地区名・連携期		建物グループ		地区名・連携期		建物グループ		地区名・連携期		建物グループ		地区名・連携期		建物グループ			
建物名	方向	建物名	方向	建物名	方向	建物名	方向	建物名	方向	建物名	方向	建物名	方向	建物名	方向	建物名	方向	
八幡地区・a期				八幡地区・区画I期				八幡地区				八幡・伏石地区・A群				7世紀後半～8世紀前半	8世紀前半	
A 3.				A2 未体+A3-A1				A3				A1						
SB1666 N - 4W W SB1668 N - 45° W	SB7899 N - 34° W SB7039 N - 18° W	SB1654 N - 42° W SB1580 N - 42° W	SB7047 N - 18° W SB12048 N - 17° W	SB1659 N - 42° W SB1551 N - 41° W	SB7948 N - 15° W SB12618 N - 11° W	SB1510 N - 38° W SB1597 N - 38° W	SB12632 N - 8° W SB12279 N - 7° W	SB1600 N - 37° W SB1617 N - 37° W	伏石地区・I期	SB1509 N - 35° W SB1577 N - 34° W	SB11023 N - 8° W	SB6843 N - 24° W	SB6832 N - 23° W	SB6833 N - 21° W	SB6834 N - 20° W			
SB1505 N - 32° W SB1657 N - 32° W	SB1579 N - 31° W SB1621 N - 28° W	SB1622 N - 21° W	伏石地区・a期 A2	SB3841 N - 18° W														
八幡地区・b期				八幡地区・区画II期				八幡地区・C1群				八幡・伏石地区				8世紀前半	8世紀後半	
A1 - A2				A1 - A2 + A3 - B - C1				A1				A1						
SB1599 N - 22° W SB314 N - 17° W	SB7924 N - 20° W SB7822 N - 15° W	SB1612 N - 16° W SB553 N - 14° W	SB2037 N - 13° W SB7347 N - 13° W	SB577 N - 14° W SB652 N - 13° W	SB7330 N - 9° W SB7659 N - 8° W	SB1560 N - 12° W SB1583 N - 11° W	SB7293 N - 7° W SB7775 N - 6° W	SB1521 N - 5° W SB140 N - 3° W	SB7283 N - 5° W SB7757 N - 5° W	SB7454 N - 4° W SB7367 N - 3° W	SB7953 N - 3° W SB7960 N - 1° W	SB2630 N - 7° W	SB2037 N - 6° W	SB360 N - 5° W	SB2111 N - 4° W			
SB1622 N - 7° E	SB7283 N - 5° W SB7757 N - 5° W	SB7338 N - 1° W SB7955 N - 3° E	SB12586 N - 4° E SB7776 N - 5° E	SB3421 N - 16° W SB3841 N - 11° W	SB12584 N - 5° E SA12239 N - 6° E	SB3416 N - 10° W SB38420 N - 8° W	伏石地区・II期	SB3416 N - 10° W SB38420 N - 8° W	SB3821 N - 8° W SB3852 N - 8° W	SB3418 N - 7° W	SB7157 N - 6° W SB11602 N - 6° W	SB2112 N - 20° W SB2070 N - 16° W	SB2037 N - 13° W SB2109 N - 11° W	SB6659 N - 8° W	SB6656 N - 7° W	SB6531 N - 6° W	SB6531 N - 6° W	
八幡地区・c期				八幡地区・方格地割I期				八幡地区・C2群				八幡・伏石地区・B群				8世紀後半～9世紀前半	9世紀末～9世紀前半	
A1 - A2				A1 - A2 + B + C1				A1 - A2 - A3				A1						
SB576 N - 8° W SB1558 N - 8° W	SB7012 N - 10° W SB7094 N - 10° W	SB141 N - 7° W SB530 N - 7° W	SB7126 N - 10° W SB7545 N - 10° W	SB1548 N - 7° W SB635 N - 6° W	SB7682 N - 10° W SB7575 N - 9° W	SB1619 N - 5° W SB1547 N - 5° W	SB1160 N - 9° W SB11603 N - 9° W	SB1650 N - 3° W SB643 N - 3° W	SB5297 N - 8° W SB7131 N - 8° W	SB759 N - 8° W SB7290 N - 6° W	SB2705 N - 10° W SB2056 N - 10° W	SB2112 N - 20° W SB2070 N - 16° W	SB2037 N - 13° W SB2109 N - 11° W	SB6666 N - 11° W SB6664 N - 10° W	SB6694 N - 10° W	SB6531 N - 6° W	SB6531 N - 6° W	
SB3823 N - 3° W SB3411 N - 0°	SB7012 N - 3° W SB7296 N - 3° W	SB4433 N - 3° E SB38424 N - 9° E	SB7972 N - 2° W SB5324 N - 1° W	SB3860 N - 10° E SB3858 N - 12° E	SB7941 N - 2° E SB7251 N - 5° E	SB3832 N - 19° E	SB7153 N - 6° E SB1005 N - 10° E	SB3821 N - 6° W SB3852 N - 6° W	伏石地区・II期	SB7153 N - 6° E SB1005 N - 10° E	SB2112 N - 20° W SB2070 N - 16° W	SB2037 N - 13° W SB2109 N - 11° W	SB6666 N - 5° W SB6697 N - 5° W	SB6697 N - 5° W SB6687 N - 5° W	SB6653 N - 5° W SB6530 N - 5° W	SB6653 N - 5° W SB6530 N - 5° W		
八幡地区・c-1～2期				八幡地区・方格地割II期				八幡地区・C群				八幡・伏石地区・B群				9世紀後半～9世紀前半	9世紀末～9世紀前半	
B - C1 - C2				B - C1				B - A1 - A2 - A3				B						
SB3823 N - 3° W SB3411 N - 0°	SB7012 N - 3° W SB7296 N - 3° W	SB4433 N - 3° E SB38424 N - 9° E	SB7972 N - 2° W SB5324 N - 1° W	SB3860 N - 10° E SB3858 N - 12° E	SB7941 N - 2° E SB7251 N - 5° E	SB3832 N - 19° E	SB7153 N - 6° E SB1005 N - 10° E	SB3821 N - 6° W SB3852 N - 6° W	伏石地区・II期	SB7153 N - 6° E SB1005 N - 10° E	SB2112 N - 20° W SB2070 N - 16° W	SB2037 N - 13° W SB2109 N - 11° W	SB6666 N - 5° W SB6697 N - 5° W	SB6697 N - 5° W SB6687 N - 5° W	SB6653 N - 5° W SB6530 N - 5° W	SB6653 N - 5° W SB6530 N - 5° W		
八幡地区・d-1期				八幡地区・方格地割III-A期				八幡地区・方格地割II-A期				八幡地区・C群				9世紀後半～10世紀中期	9世紀後半～10世紀中期	
B				B 主体+A1 - C1 - C2				B 主体+C1				B						
SB3118 N - 3° W SB1584 N - 3° W	SB7949 N - 9° W SB5295 N - 7° W	SB526 N - 2° W SB475 N - 1° W	SB7942 N - 3° W SB12496 N - 3° W	SB1555 N - 0° W SB502 N - 1° W	SB5295 N - 2° W SB5222 N - 1° W	SB899 N - 1° E SB1556 N - 1° E	SB5294 N - 1° W SB7144 N - 1° W	SB1571 N - 1° E SB1592 N - 1° E	SB7429 N - 1° W SB7266 N - 1° W	SB5552 N - 0° W SB7944 N - 1° W	SB759 N - 0° W SB7155 N - 0°	SB2629 N - 2° W SB2603 N - 0°	SB2629 N - 2° W SB2603 N - 0°	SB6666 N - 2° W SB6688 N - 1° W	SB6666 N - 2° W SB6688 N - 1° W			
SB526 N - 2° W SB475 N - 1° W	SB7942 N - 3° W SB12496 N - 3° W	SB1555 N - 0° W SB502 N - 1° W	SB5295 N - 2° W SB5222 N - 1° W	SB899 N - 1° E SB1556 N - 1° E	SB5294 N - 1° W SB7144 N - 1° W	SB1571 N - 1° E SB1592 N - 1° E	SB7429 N - 1° W SB7266 N - 1° W	SB410 N - 2° E SB1584 N - 2° E	SB5552 N - 0° W SB7944 N - 1° W	SB759 N - 0° W SB7155 N - 0°	SB2630 N - 1° E SB2655 N - 1° E	SB2630 N - 1° E SB2655 N - 1° E	SB6851 N - 0° SB6852 N - 0°	SB6851 N - 0° SB6852 N - 0°				
SB5554 N - 3° E SB637 N - 3° E	SB7448 N - 0° W SB7595 N - 0° W	SB8410 N - 3° E SB12258 N - 3° E	SB7930 N - 0° W SB7764 N - 0° W	SB440 N - 3° E	SB7045 N - 1° E SB12616 N - 0°	SB1204 N - 1° E SB12046 N - 1° E	SB1204 N - 1° E SB12046 N - 1° E	SB1204 N - 1° E SB12046 N - 1° E	SB759 N - 0° W SB7764 N - 0° W	SB759 N - 0° W SB7764 N - 0° W	SB6851 N - 0° SB6861 N - 0°	SB6851 N - 0° SB6861 N - 0°	SB6861 N - 0° SB6862 N - 0°	SB6861 N - 0° SB6862 N - 0°				
伏石地区・c-3期				八幡地区・方格地割II-B期				八幡地区・方格地割II-B期				八幡地区・C群				9世紀後半～10世紀中期	9世紀後半～10世紀中期	
B				B 主体+A1 - C1 - C2				B 主体+C1				B						
SB3024 N - 0° W SK3029 N - 0° W	SB7106 N - 2° E SB12643 N - 1° E	SB7087 N - 2° E SB5530 N - 2° E	SB7901 N - 2° E SB7900 N - 2° E	SB1245 N - 1° E SB429 N - 1° E	SB7957 N - 4° E SB7951 N - 4° E	SB3417 N - 2° E SB5349 N - 3° E	SB11604 N - 3° E SB5300 N - 3° E	SB3417 N - 2° E SB5349 N - 3° E	SB7180 N - 0° E SB7796 N - 5° E	SB7155 N - 1° E SB7903 N - 11° E	SB2630 N - 1° E SB2643 N - 1° E	SB2629 N - 2° E SB2603 N - 0°	SB6710 N - 1° E SB6711 N - 1° E	SB6710 N - 1° E SB6711 N - 1° E				
SB3826 N - 2° E SB3446 N - 3° E	SB11604 N - 3° E SB5300 N - 3° E	SB12258 N - 3° E SB12045 N - 3° E	SB7901 N - 2° E SB7900 N - 2° E	SB3417 N - 2° E SB5349 N - 3° E	SB7957 N - 4° E SB7951 N - 4° E	SB3786 N - 3° E SB5340 N - 4° E	SB1203 N - 4° E SB12039 N - 4° E	SB3786 N - 3° E SB5340 N - 4° E	SB7180 N - 0° E SB7796 N - 5° E	SB7155 N - 1° E SB7903 N - 11° E	SB2630 N - 1° E SB2643 N - 1° E	SB2629 N - 2° E SB2603 N - 0°	SB6654 N - 2° E SB6655 N - 2° E	SB6654 N - 2° E SB6655 N - 2° E				
SB3415 N - 2° W SB3790 N - 1° W	SB7158 N - 15° E SB7156 N - 18° E	SB7158 N - 1° W SB7156 N - 18° E	SB7087 N - 2° E SB5530 N - 2° E	SB3811 N - 1° W SB3419 N - 0°	SB7901 N - 2° E SB7900 N - 2° E	SB3417 N - 2° E SB5349 N - 3° E	SB11604 N - 3° E SB5300 N - 3° E	SB3417 N - 2° E SB5349 N - 3° E	SB7180 N - 0° E SB7796 N - 5° E	SB7155 N - 1° E SB7903 N - 11° E	SB2630 N - 1° E SB2643 N - 1° E	SB2629 N - 2° E SB2603 N - 0°	SB6652 N - 2° E SB6653 N - 2° E	SB6652 N - 2° E SB6653 N - 2° E				
SB3811 N - 1° W SB3419 N - 0°	SB7158 N - 1° W SB7156 N - 18° E	SB7158 N - 1° W SB7156 N - 18° E	SB7087 N - 2° E SB5530 N - 2° E	SB3826 N - 2° E SB3446 N - 3° E	SB7901 N - 2° E SB7900 N - 2° E	SB3417 N - 2° E SB5349 N - 3° E	SB11604 N - 3° E SB5300 N - 3° E	SB3417 N - 2° E SB5349 N - 3° E	SB7180 N - 0° E SB7796 N - 5° E	SB7155 N - 1° E SB7903 N - 11° E	SB2630 N - 1° E SB2643 N - 1° E	SB2629 N - 2° E SB2603 N - 0°	SB6654 N - 2° E SB6655 N - 2° E	SB6654 N - 2° E SB6655 N - 2° E				
SB3826 N - 2° E SB3446 N - 3° E	SB11604 N - 3° E SB5300 N - 3° E	SB12258 N - 3° E SB12045 N - 3° E	SB7901 N - 2° E SB7900 N - 2° E	SB3839 N - 3° E SB3865 N - 3° E	SB11606 N - 1° E SB1166 N - 1° E	SB3786 N - 3° E SB5340 N - 4° E	SB1203 N - 4° E SB12039 N - 4° E	SB3786 N - 3° E SB5340 N - 4° E	SB7180 N - 0° E SB7796 N - 5° E	SB7155 N - 1° E SB7903 N - 11° E	SB2630 N - 1° E SB2643 N - 1° E	SB2629 N - 2° E SB2603 N - 0°	SB6652 N - 2° E SB6653 N - 2° E	SB6652 N - 2° E SB6653 N - 2° E				
SB3839 N - 3° E SB3865 N - 3° E	SB11606 N - 1° E SB1166 N - 1° E	SB12258 N - 3° E SB12045 N - 3° E	SB7901 N - 2° E SB7900 N - 2° E	SB3829 N - 4° E SB3445 N - 3° E	SB11608 N - 1° E SB11206 N - 1° E	SB3413 N - 8° W SB3430 N - 9° E	SB1204 N - 9° E SB12046 N - 9° E	SB3413 N - 8° W SB3430 N - 9° E	SB7180 N - 0° E SB7796 N - 5° E	SB7155 N - 1° E SB7903 N - 11° E	SB2630 N - 1° E SB2643 N - 1° E	SB2629 N - 2° E SB2603 N - 0°	SB6652 N - 2° E SB6653 N - 2° E	SB6652 N - 2° E SB6653 N - 2° E				
SB3829 N - 4° E SB3445 N - 3° E	SB11608 N - 1° E SB11206 N - 1° E	SB12258 N - 3° E SB12045 N - 3° E	SB7901 N - 2° E SB7900 N - 2° E	SB3413 N - 8° W SB3430 N - 9° E	SB11608 N - 1° E SB11206 N - 1° E	SB3413 N - 8° W SB3430 N - 9° E	SB1204 N - 9° E SB12046 N - 9° E	SB3413 N - 8° W SB3430 N - 9° E	SB7180 N - 0° E SB7796 N - 5° E	SB7155 N - 1° E SB7903 N - 11° E	SB2630 N - 1° E SB2643 N - 1° E	SB2629 N - 2° E SB2603 N - 0°	SB6652 N - 2° E SB6653 N - 2° E	SB6652 N - 2° E SB6653 N - 2° E				

*建物グループは、174集の分類を参考にA3:西への傾きが20°以上、A2:東への傾きが4～10°、C1:東への傾きが11～19°、C2:東への傾きが20°以上としている
*造道明細の記述は、西への傾きが大きいもの～東への傾きが小さいもの～東への傾きが大きい順に並べてある
黄色は構造間に同じ建物となる建物を示す

表79-1 掘立柱建物跡・塙跡の時期と方向（区画I期～方格地割II-A期）

傾向	宮城県 174 集			宮城県 246 集			宮城県 162 集			宮城県 218 集			年代 (174 集)	年代 (本巻)		
	地区名・道標期			地区名・道標期			地区名・建物群			地区名・建物群						
	建物名			方向			建物名			方向						
	八幡地区・d - 2 期			C1 まき・A-B			八幡地区・石 - B 期			八幡地区・A1 群			八幡地区・石 - A群			
				C1 まき・B-A・A1-A2・C1-C2						C1 まき・A1・C2			C1 まき・C2			
SB1588	N - 3° E	SB434	N - 4° E	SB7161	N - 17° W	SB7142	N - 8° W	SB2102	N - 5° W	SB2365	N - 5° E					
SB623	N - 4° E	SB1611	N - 5° E	SB7236	N - 8° W	SB7431	N - 7° W	SB2107	N - 4° E	SB6629	N - 5° E					
SB580	N - 6° E	SB897	N - 6° E	SB11770	N - 5° W	SA12640	N - 5° W	SB2108	N - 5° E	SB6544	N - 6° E					
SB582	N - 7° E	SB636	N - 7° E	SB7430	N - 4° W	SB5529	N - 2° W	SB2280	N - 5° E	SB6648	N - 8° E					
SB648	N - 7° E	SB768	N - 8° E	SB12638	N - 2° W	SB7928	N - 1° W	SB2359	N - 5° E	SB2290	N - 9° E					
SB1564	N - 8° E	SB411	N - 9° E	SB7933	N - 1° W	SB11603	N - 1° W	SB2365	N - 5° E	SB2356	N - 9° E					
SB1605	N - 9° E	SB1607	N - 9° E	SB11607	N - 1° W	SB7760	N - 0°	SB2036	N - 8° E	SB6688	N - 9° E					
	伏石地区・d - 3 期			SB7931	N - 0°	SB7267	N - 1° E	SB2356	N - 9° E	SB6709	N - 10° E					
				SB81267	N - 1° E	SB5302	N - 2° E	SB2361	N - 9° E	SB2281	N - 11° E					
SB3812	N - 4° W	SB3401	N - 1° W	SB5496	N - 2° E	SB11976	N - 2° E	SB2362	N - 9° E	SB6686	N - 17° E					
SB3807	N - 1° W	SB3426	N - 4° E	SB81924	N - 4° E	SB12024	N - 4° E	SB6661	N - 10° E	SB2281	N - 11° E					
SB3427	N - 4° E	SB3423	N - 6° E	SB7272	N - 5° E	SB7286	N - 5° E									
SB3840	N - 7° E	SB3432	N - 8° E	SB7409	N - 5° E	SB7763	N - 5° E									
SB3810	N - 8° E	SB3836	N - 9° E	SB811773	N - 5° E	SB11772	N - 6° E									
	伏石地区・d - 4 期			SB12091	N - 6° E	SB12497	N - 6° E									
				SB7040	N - 7° E	SB7086	N - 7° E									
	A - A2			SB7241	N - 7° E	SB11981	N - 7° E									
SB3835	N - 2° E	SB3789	N - 3° E	SB7106	N - 8° E	SB7160	N - 8° E									
SB3859	N - 15° E			SB7447	N - 8° E	SB7154	N - 9° E									
				SB12563	N - 9° E	SB12564	N - 9° E									
				SB7428	N - 10° E	SB7039	N - 11° E									
				SB12217	N - 12° E	SB12222	N - 12° E									
				SB12615	N - 12° E	SB7381	N - 14° E									
				SB12218	N - 17° E	SB12031	N - 20° E									
				SB12216	N - 23° E											
	伏石地区・E 期			SB7233	N - 3° E	SB7035	N - 5° E									
				SB7380	N - 5° E	SB7935	N - 6° E									
	八幡地区・中世															
	C2・C3 まき・B・A1・A2・C1															
SB1559	N - 36° W	SB1550	N - 13° W					SB2355	N - 27° E	SB6845	N - 23° E					
SB306	N - 7° W	SB1532	N - 6° W					SB2354	N - 36° E	SB6841	N - 27° E					
SB1632	N - 6° W	SB1517	N - 2° W					SB2366	N - 38° E							
SB1616	N - 0°	SB1516	N - 1° E													
SB1571	N - 1° E	SB1565	N - 2° E													
SB1601	N - 2° E	SB1568	N - 3° E													
SB1504	N - 4° E	SB1538	N - 4° E													
SB1505	N - 6° E	SB1567	N - 9° E													
SB1528	N - 15° E	SB1548	N - 15° E													
SB1542	N - 15° E	SB1573	N - 15° E													
SB1664	N - 15° E	SB1543	N - 16° E													
SB1628	N - 16° E	SB1587	N - 17° E													
SB1524	N - 18° E	SB1655	N - 18° E													
SB1625	N - 19° E	SB1537	N - 20° E													
SB1620	N - 20° E	SB1538	N - 24° E													
SB1539	N - 24° E	SB1574	N - 24° E													
SB1638	N - 24° E	SB1546	N - 30° E													
SB353	N - 33° E	SB1618	N - 38° E													
SB1581	N - 39° E	SB1663	N - 42° E													
SB1541	N - 45° E															
	伏石地区・中世															
	C2・C3															
SB3859	N - 15° E	SB3832	N - 19° E													
SB3837	N - 33° E	SB3842	N - 42° E													

* 建物グループは、174 集の分類を参考に A3：西への傾きが 20°以上、A2：西への傾きが 11～10°、A1：西への傾きが 4～10°、C2：東への傾きが 11～10°、C3：東への傾きが 20°以上としている。

* 道標印記の建物は、西への傾きが大きいものから小さいものへ順序で並べてある。

* 黄色は道標印記ごとに立体となる建物方向である。

表79-2 振立柱建物跡・塙跡の時期と方向（方格地割II～B期～中世）

 東への傾き
が大きいもの
が主体

 東への傾き
が大きいもの
が主体

 9世紀
後半～
10世紀
中期
(新規)

 中世
後葉

(4) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は137棟確認した。調査区ごとの内訳はD区40棟、F区5棟、G区3棟、J区15棟、L区74棟である。以下、調査区ごとに年代を検討する。その際、出土遺物や重複関係などを参考にしたが、八幡・伏石地区の竪穴住居は、後世の削平によって壁の残りが悪いものや床面自体が失われたものが多く、前者の場合は確認段階で取り上げた遺物が、本来は堆積土下層に帰属することになり、こうした点を踏まえて年代を考えた。

また、当地区における古墳時代の竪穴住居跡は、本章第1・2節の検討で中期と後期があり、前者はA群土器期の5世紀前葉、後者が6世紀末～7世紀前半に収まることがわかった。これらの特徴と河川との関係は、中期が炉のみでカマドを持たず、SD777河川跡の右岸（南側）に分布する。一方、後期はカマドを有し、SD777とほぼ同じ流路をとるSD100河川跡の左岸（北側）に分布する。したがって、古墳時代の竪穴住居跡は、精査を行わないものについてもSD777河川跡右岸にあってカマドが認められないものや中期の遺構より古いものは5世紀前葉で、SD100河川跡の左岸でカマドを有するものや後期の遺構より古いものは、6世紀末～7世紀前半と考えることができる。

〈D区〉

【SI705】確認面からロクロ土師器壺・甕が出土した。8世紀末～9世紀前葉とみられるSB1605と方向が同じであることから、同時期とみておきたい。

【SI706】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。8世紀末～9世紀前葉のSI705より古い。同住居跡出土土器のうち、古い様相を示す非ロクロ土師器甕やTK209期の須恵器高壺は、古い遺構に帰属すると考えられることから、本住居は6世紀末～7世紀前半の可能性がある。

【SI707】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。確認面から非ロクロ土師器壺・甕および須恵器壺が出土した。土師器の特徴はSD100・2050B河川跡出土土器と共にことから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI708】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI707より古いが、その間に収まとみられる。

【SI715】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。確認面から非ロクロ土師器有段丸底壺・甕・壷・ミニチュアなどが出土した。土師器の特徴はSD100・2050B河川跡出土土器（宮城県教委2001b、本章第2節）と共にことから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI716】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI715より古いが、その間に収まとみられる。

【SI717】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。確認面から非ロクロ土師器有段丸底壺・甕やカマド構築材とみられる凝灰岩切石が出土した。土師器の特徴はSD100・2050B河川跡出土土器と共にこと、本遺跡の場合、凝灰岩切石を用いたカマドは古墳時代後期に特徴的に認められることから（本章第4節）、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI718・719・720・721・722】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI717より古いが、その間に収まとみられる。

【SI737】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。確認面から非クロロ土師器壺・高壺・甕が出土した。それらの特徴はSD100・2050B河川跡出土土器と共通することから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI821A・B】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。非クロロ土師器有段丸底壺・鉢・小型甕・大型甕・瓶、須恵器甕などが出土した。本章第2節の検討から、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

【SI824】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI821よりも古いが、その間に収まるとみられる。

【SI823】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。堆積土や掘方埋土から非クロロ土師器有段丸底壺・甕・須恵器壺・甕が出土した。土師器の特徴がSD100・2050B河川跡出土土器と共通することから、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

【SI825】8世紀末～9世紀前葉のSI826より新しいことから、9世紀前葉以降と考えられる。

【SI826】確認面からロクロ土師器壺が出土した。本遺跡の場合、ロクロ土師器壺は8世紀後半のSD461・2124（宮城県教委1994c・本章第3節）に少量認められ、8世紀末以降は土師器食器の主体となった。また、住居の方向は8世紀末～9世紀前葉のSB7012・7094・7126・7131・7157と概ね同じである。こうしたことから、8世紀末～9世紀前葉とみておきたい。

【SI827】9世紀前葉のSI829より新しく、9世紀後葉のSB7154より古いことから、9世紀中葉とみられる。

【SI839】9世紀中葉のSI827やSX7001整地層より古く、掘方埋土から灰釉陶器が出土したことから、9世紀前葉とみられる。

【SI884】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI737より古く、確認面よりSD100・2050B河川跡出土土器と共通する非クロロ土師器瓶が出土したことから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI885】確認面から楕形で回転糸切りのロクロ土師器壺が出土している。こうした特徴を持つ土器は9世紀後半以降主体となること、赤焼土器が出土していないことから、9世紀後半頃とみておきたい。

【SI886】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。8世紀後半のSD461より古い。確認面から非クロロ土師器有段丸底壺・瓶が出土した。その特徴はSD100・2050B出土土器と共通することから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI7043】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。確認面から非クロロ土師器無段平底壺、ロクロ土師器壺、逆台形でヘラ切りの須恵器壺、扁平で端部が短く折れ、擬宝珠つまみを持つ須恵器蓋が出土した（図版673）。本章第3節の検討から、8世紀末～9世紀前葉とみられる。

〈F区〉

【SI11503】非クロロ土師器壺・高壺・鉢・小型甕・大型甕・小型甕・大型甕や石製模造品などが出土した。食器を中心に赤彩土器が多く認められる。本章第1節の検討からA群土器に位置付けられ、5世紀前葉と考えられる。

【SI11501】赤彩された非ロクロ土師器高环・小型壺・大型甕、石製模造品などが出土した。本章第1節の検討からA群土器に位置付けられ、5世紀前葉と考えられる。

【SI11502】非ロクロ土師器高环・小型壺・大型甕などが出土した。本章第1節の検討からA群土器に位置付けられ、5世紀前葉と考えられる。

〈G区〉

【SI11172・11173】掘方しか残っていない。確認面から非ロクロ土師器高环、环・壺・甕が出土している。遺物の特徴はA群土器と共通することから、5世紀前葉とみられる。

〈J区〉

【SI11936】9世紀中葉のSB12045・12046より新しく、方向は9世紀後葉～10世紀前半のSB11981などと同じであることから、同時期とみられる。

【SI11978】床面から非ロクロ土師器小型甕や須恵器蓋が出土した。後者は天井部が高く盛り上がり、口縁端部は短く折れる。蓋の類例として色麻町日の出山窯跡群C地点第9号竪穴住居跡(色麻町教委1993)、大衡村萱刈場窯跡A地点SR2・3窯跡(宮城県教委1995a)などがあげられることから、年代は8世紀第2四半期以降とみられる。

【SI11979】SI11978より古いことから、8世紀第2四半期以前と考えられる。

【SI12305A・B】B期の周溝からロクロ土師器小型甕やヘラ切りの須恵器環が出土したことから、8世紀末～9世紀前葉とみられる。

【SI12331A・B】B期の堆積土から非ロクロ土師器甕や皿形で回転ヘラケズリ調整の須恵器環が出土した。後者は大崎市次橋窯跡1・2号窯跡(東北学院大学考古学研究部1983)や本遺跡SD180B・461区画溝跡(多賀城市教委1991b、本章第3節)に類例が求められることから、年代は8世紀中頃～後半とみられる。

【SI12620・12621】7世紀後半～8世紀前半のSA12614より新しく、8世紀中頃～後半とみられるSI12331より古い。同位置での建替えの可能性があることから、2棟とも8世紀前半とみておきたい。

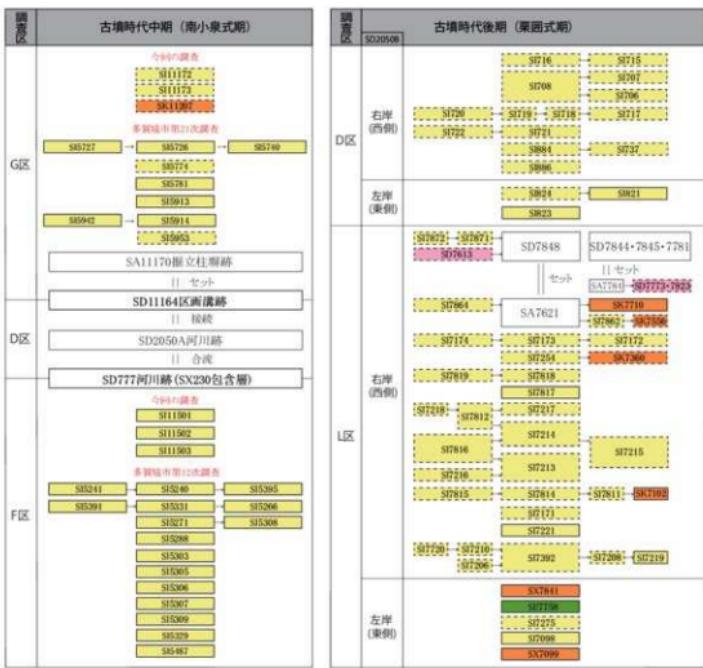
【SI12333】カマド構築材に有段丸瓦を使用していることから、多賀城創建以降の8世紀第2四半期以降と考えられる。

〈L区〉

【SI1098】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡左岸に位置する。堆積土から非ロクロ土師器甕・甕や関東系土師器環などが出土した。土師器の特徴がSD100・2050B河川跡出土土器と共にすることから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI1711】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。堆積土から非ロクロ土師器有段丸底环・大型甕・ミニチュアなどが出土した。土師器の特徴がSD100・2050B河川跡出土土器と共にすることから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI1712】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。非ロクロ土師器有段丸底环・広口壺・大型甕・ミニチュアなどが出土した。土師器の特徴がSD100・2050B河川跡出土土器と共にすることから、6世紀末～7世紀前半とみられる。



* 中期のSI1150は、多賀城市第12次調査のSI5287と同遺構

* 多賀城市第12・21次調査の年代は、多賀城市教委 1997dに基づく。その際、付図に中期と示されたものを特定し、付図になく写真図版に遺物が示されたものを推定とした

図版685 古墳時代中・後期における主要遺構の変遷

【SI7173】 SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI7172より古く、非ロクロ調整の土師器有段丸底杯・鉢などが出土している。土師器の特徴はSD100・2050B河川跡出土土器と共に通することから、6世紀末～7世紀前半の間とみられる。

【SI7174】 SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI7173より古いが、その間に収まるといわれる。

【SI7206・7208・7392】 SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI7219より古いが、その間に収まるといわれる。

【SI7210・7720】 SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI7392より古いが、その間に収まるといわれる。

【SI7212】 堆積土や確認面から出土した遺物は、土師器がすべてロクロ調整で、环・小型甕などがある。环は楕形で回転ケズリが施され、小型甕は回転糸切りである（図版673）。須恵器环は楕形で回転糸切

り、多賀城第IV期の平瓦II C類が出土している。本章第3節の検討から9世紀後葉と考えられる。

【SI7215】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。確認面から非ロクロ土師器無段丸底环が出土した。その特徴はSD100・2050B河川跡出土土器と共に通することから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI7213・7214・7216・7816】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI7215より古いが、その間に収まとるとみられる。

【SI7218・7812】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI7214より古いが、その間に収まとるとみられる。

【SI7219】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。掘方埋土から非ロクロ土師器有段丸底环、床面から非ロクロ土師器壺や須恵器壺、カマドから凝灰岩切石製の構築材や支脚、周溝から土師器大型壺、堆積土から土製紡錘車などが出土した。土師器の特徴がSD100・2050B河川跡出土土器と共に通すること、本章第4節の検討から本遺跡の凝灰岩切石組カマドは古墳時代後期に特徴的に認められることから、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

【SI7221】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。掘方埋土から非ロクロ土師器壺・高环・壺、床面から壺・壺、須恵器壺が出土した。土師器の特徴がSD100・2050B河川跡出土土器と共に通することから、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

【SI7254】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。非ロクロ土師器有段丸底环・壺が出土した。6世紀末～7世紀前半のSK7360より古いが、その間に収まとるとみられる。

【SI7257】SB7927・7941・7251などの建物群と方向が同じであることから、9世紀前葉とみておきたい。

【SI7275】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡左岸に位置する。床面から非ロクロ土師器高环が出土した。高环の特徴はSD100・2050B河川跡出土土器と共に通することから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SI7364】カマド内から逆台形でヘラ切りの須恵器壺、堆積土から非ロクロ土師器平底环、逆台形でヘラ切りの須恵器壺などが出土した。こうした特徴はSD180B・461区画溝跡（多賀城市教委1991b、本章第3節）に類例があることから、年代は8世紀中頃～後半と考えられる。

【SI7811・7814・7815】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSK7102より古いが、その間に収まとるとみられる。

【SI7817】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。県道調査区SI2028と同一遺構で、そこから非ロクロ調整の土師器有段丸底环・壺が出土した（宮城県教委1994c）。土師器の特徴はSD100・2050B河川跡出土土器と共に通することから、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

【SI7818・7819】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSI7817より古いが、その間に収まとるとみられる。

【SI7862】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半とみられるSK7556より古いことから、同時期とみておきたい。

【SI7864】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSK7710より古いが、その間に収まとみられる。

【SI7871・7872】SD100河川跡左岸で、SD2050B河川跡右岸に位置する。6世紀末～7世紀前半のSD7848より古いが、その間に収まとみられる。

(5) 竪穴建物跡

D区で1棟確認した。

【SX7013】竪穴遺構で、堆積土から遺物が多量に出土した（第1分冊、図版116～123）。その中で新しい様相を示すものを取り上げると、ロクロ調整の土師器环・高台环・高台皿・小型甕・大型甕や須恵器环などがあげられる。土師器环は塊形で回転糸切りのほか、逆台形で回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが認められる。土師器高台环は回転糸切りで両黒、高台皿は高脚である。土師器大型甕は口縁部に縁帯を形成しない。須恵器环は塊形、回転糸切りで、赤焼土器は含まれていない。こうした特徴は、SE7105・11001井戸跡やSI7212竪穴住居跡（本章第3節）、多賀城跡SE2101B井戸跡（多賀研1992）や多賀城跡SK2321土坑4～6層（多賀研1996）などと共通することから、9世紀中葉～後葉と考えられる。

(6) その他の建物跡

周溝をもつ建物跡はJ区で2棟、円形周溝跡はJ区で3棟、L区で2棟確認した。ともに平地建物で、前者は建物とその周囲を円形に巡る周溝が設けられた。後者は溝自体が壁の据え方となり、内部に柱穴が認められる場合がある。他に較べて掘り込みが浅い分出土遺物が少なく、年代が推定できたのは以下の4棟である。

〈J区〉

【SB11938】周溝をもつ建物跡で、9世紀中葉以降のSI11936竪穴住居跡より古いことから、それ以前と考えられる。

【SX12566】内部に柱穴は認められないものの、SB11938と周溝の形態が類似することから周溝をもつ建物跡と判断した。年代は8世紀中頃～後半のSK12308土坑より古いことから、それ以前と考えられる。

【SX11905】円形周溝跡で、9世紀後葉とみられるSB12267より新しいことから、それ以降と考えられる。

【SX12538】円形周溝跡で、8世紀中頃～後半のSX12566建物跡より新しいことから、それ以降と考えられる。

(7) 井戸跡

井戸跡は21基確認した。内訳はD区5基、G区4基、J区7基、L区5基である。以下、調査区ごとに年代を検討する。

〈D区〉

【SE709】側抜取穴から龍泉窯系青磁碗が出土した。青磁碗は大宰府分類の碗1類-2もしくは1類-4（太宰府市教委2000）で、12世紀中葉から後葉に位置付けられ、年代はそれ以前と考えられる。

【SE712】側内堆積土から8世紀後半～9世紀前葉に認められるロクロ土師器両黒高盤が出土したこと、側抜取穴の埋戻し土に楕形で回転糸切りの須恵器环が認められることから、8世紀後半～9世紀中葉とみておきたい。

【SE798】堆積土の中層に赤焼土器小皿などが廃棄された。赤焼土器小皿は、多賀城跡鴻の池地区第7層（多賀研1992）などで10世紀中葉以降に認められることから、10世紀後半とみておきたい。

【SE837】側抜取穴から赤焼土器小皿が出土した。赤焼土器小皿は、多賀城跡鴻の池地区第7層（多賀研1992）などで10世紀中葉以降に認められることから、10世紀前半とみられる。

【SE844】堆積土上層から逆台形で回転糸切りと逆台形でヘラ切りの須恵器环が出土した。9世紀後葉になると、ロクロ土師器や須恵器の环は楕形で回転糸切りが主体となることから、9世紀中葉以前とみられる。

〈G区〉

【SE11001】側内堆積土と裏込土からロクロ土師器环・鉢・大型甕、須恵器は环・高台环・長頸壺・甕などが出土した（図版673）。土師器环は逆台形で、静止糸切り後手持ちケズリが施されるほか、回転糸切りや回転ケズリが認められる。大型甕は長胴で、外面上半に平行タタキ、内面上半にはカキメが認められる。須恵器环は逆台形と楕形があり、後者が多い。底部切り離しはヘラ切りと回転糸切りが認められる。本章第3節の検討から9世紀中葉と考えられる。

【SE11016】裏込土から非ロクロ土師器环・甕、須恵器甕、隅切瓦・丸瓦・平瓦、側内の底面と堆積土から、非ロクロ土師器平底环・甕、須恵器环・甕、平瓦などが出土した。土師器の特徴はSD180B・461区画溝跡（本章第3節）に共通すること、平瓦が多賀城第II期であることから、8世紀後半と考えられる。

【SE11061】堆積土3層から多賀城第II期の単弧文軒丸瓦、2層から逆台形で手持ちケズリ調整のロクロ土師器小型环、皿形でヘラ切り後手持ちケズリや逆台形でヘラ切りの須恵器环などが出土した。本章第3節の検討から8世紀末～9世紀前葉と考えられる。

【SE11174】側抜取穴から非ロクロ土師器有段丸底环・広口壺や皿形で回転ヘラケズリ調整の須恵器环が出土した。土器の特徴は、多賀城跡SI1791竪穴住居跡（多賀研1989）と共にすることから8世紀前半と考えられる。

〈J区〉

【SE11934】堆積土からロクロ土師器环・甕、赤焼土器环・高台环、須恵器环・壺・甕などが出土した。土師器环は楕形で底部内面は放射状ミガキで、須恵器环は楕形・回転糸切りで、内面はコテ仕上げで

ある。本章第3節の検討から10世紀前葉と考えられる。

【SE11935】堆積土下層からロクロ土師器壺・須恵器壺・蓋・甕・広口壺、平瓦・丸瓦などが出土したことから、8世紀末以降と考えられる。

【SE11967】堆積土下層からロクロ土師器壺・甕・須恵器壺・蓋・甕・丸瓦などが出土した。須恵器蓋は器高が高く口縁端部が少し折れ、擬宝珠つまみが付く。類例として多賀城跡SI2153竪穴住居跡（多賀研1993）があげられること、ロクロ土師器が共伴することから、8世紀末～9世紀前葉とみられる。

【SE12164】側内堆積土から非ロクロ土師器壺・甕、皿形でヘラ切り後手持ちケズリの須恵器壺、裏込土から須恵器小型甕などが出土した。須恵器壺は日の出窯跡群C地点2・4号窯跡（色麻町教委前掲）に類例が認められることから、8世紀第2四半期以降とみられる。

【SE12192】堆積土下層からロクロ土師器壺・甕・須恵器壺・甕・鉢・壺などが出土した。土師器壺は椀形で回転糸切りであること、赤焼土器を含まないことから9世紀後葉とみられる。

【SE12205】堆積土上層からロクロ土師器壺・高台壺・高台塊・大型甕・三足土器、須恵器壺・甕・赤焼土器壺・高台壺・高台皿、丸瓦・多賀城第IV期の平瓦などが出土した（図版679）。壺類は椀形で回転糸切り、ロクロ土師器高台塊は低高台である。これらは、本章第3節の検討で10世紀中葉に位置付けられたことから、井戸は10世紀後半を中心に機能したと考えられる。

〈L区〉

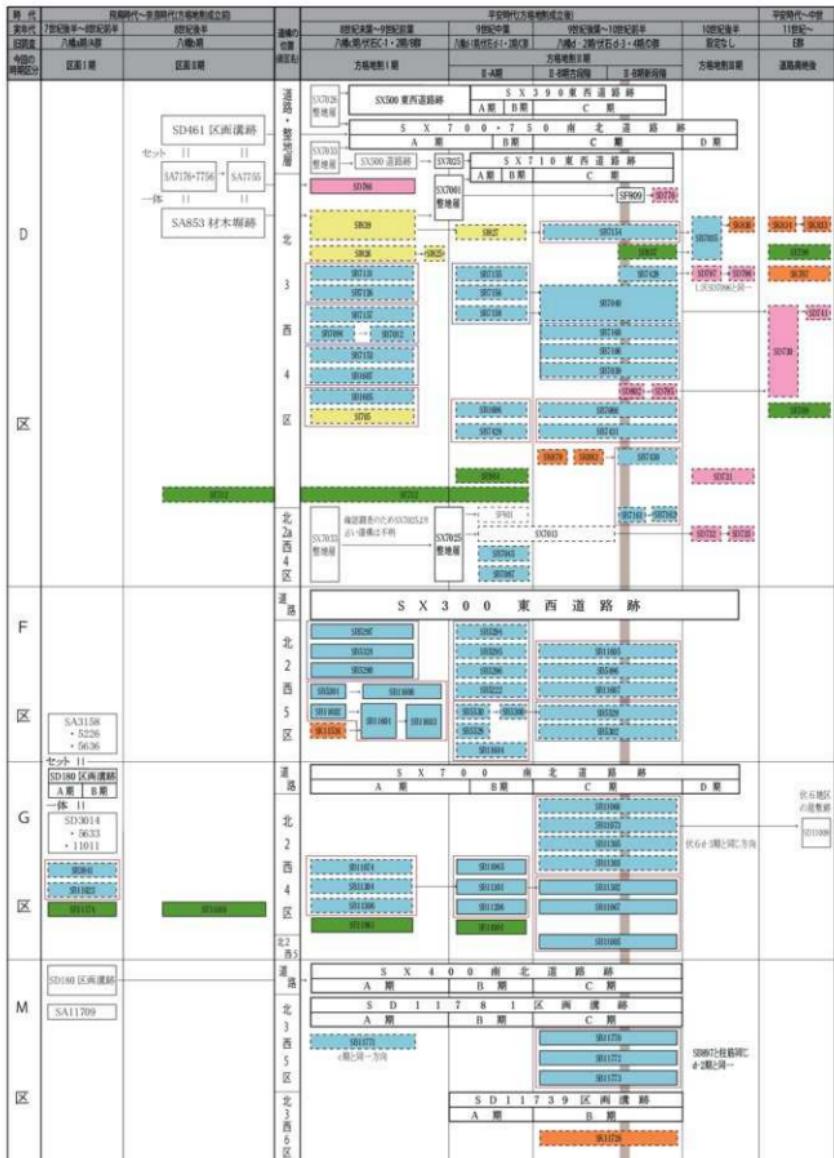
【SE7105】底面や側内堆積土、裏込土から出土したが、土器の特徴は共通する。土師器はすべてロクロ調整で、壺・高台塊・蓋・甕などがある。壺は逆台形で回転ケズリが施されるものほか、椀形で回転糸切り後回転ケズリ、回転糸切りなどが認められる。須恵器は壺・高台壺・双耳壺・稜塊・蓋・長頸甕・横瓶・甕などがある。壺は皿形と椀形が認められるが、切り離しはヘラ切りが多い。本章第3節の検討から、9世紀中葉と考えられる。

【SE7258】堆積土下層から非ロクロ土師器大型甕・甕・須恵器横瓶などが出土した。大型甕の類例として八幡地区SD677溝跡があげられることから（宮城県教委1997）、8世紀中頃～後半とみておきたいたい。

【SE7292】堆積土からロクロ土師器壺や非ロクロ土師器盤・甕・須恵器壺・高台壺・中甕・多賀城第II期の丸瓦・平瓦などが出土した。土師器壺は逆台形で、静止糸切り後回転ケズリが施される。須恵器壺はヘラ切りや回転糸切りがある。類例は、館前地区SX1351C河川跡2層（多賀城市教委2003a）やSX1351D河川跡3層（多賀城市教委2003a）、高平地区SK236土坑（多賀城市教委1990a）などがあげられることから、8世紀末～9世紀前葉とみられる。

【SE7434】8世紀中頃～後半のSE7258より古いことから、8世紀後半以前と考えられる。

【SE7758】堆積土下層から非ロクロ土師器有段丸底壺・大型甕・瓶、TK209期の須恵器高壺、凝灰岩切石などが出土した。土師器の特徴はSD100・2050B河川跡と共に通すること、本章第4節の検討から凝灰岩切石は後期竪穴住居のカマド構築材に特徴的に認められることから、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

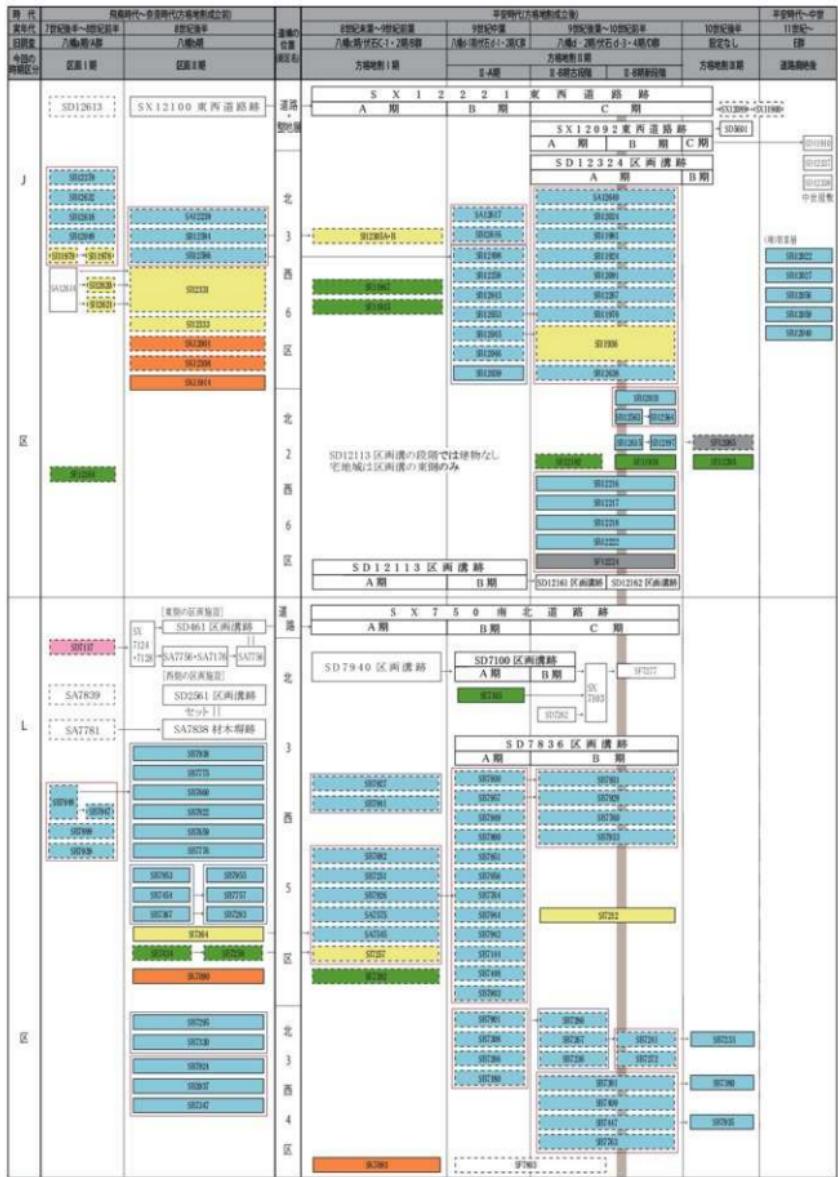


□ 同一方向 □ 両方向 □ 墓碑記録 □ 墓碑名 [] 墓碑名(時期推定)

灰白色火成岩

* 旧調査とは、宮城県174集(宮城県教委1997)および同218集(同2009)の調査期と地物グループ名を指す

図版686-1 古代における主要遺構の変遷 (D・F・G・M区)



図版686-2 古代における主要遺構の変遷 (J・L 区)

(8) 溝跡

区画施設以外の溝跡で121条確認した。内訳はD区40条、F区6条、G区11条、J区39条、L区12条、M区13条である。以下、主要な溝跡について調査区ごとに年代を検討する。

〈D区〉

【SD730・741】SX750西4道路跡より新しいことから、10世紀後半以降と考えられる。

【SD731・732・733】SX710北2a道路跡より新しいことから、10世紀前半以降と考えられる。

【SD776】SF809畑跡より新しいことから、10世紀前葉以降と考えられる。

【SD786】堆積土から土師器坏・高台坏・高坏・蓋・須恵器坏などが出土した（図版673）。土師器食器は在地産搬入品があり、前者は非口クロ調整の無段平底とロクロ調整で逆台形、回転糸切り後手持ちケズリが認められる。また、後者の器種には高台坏・高坏・蓋があり、両黒在地土師器に較べて薄手に仕上げられ、胎土も精選されている。須恵器坏はヘラ切りで皿形と回転糸切りで逆台形がある。本章第3節の検討から、8世紀末～9世紀前葉と考えられる。

【SD795・802】同位置で重複する南北溝跡で、SD795が新しい。SD802から赤焼土器坏が出土したこと、SD795の堆積土に灰白色火山灰が認められることから、10世紀前半と考えられる。

【SD796・797】ほぼ同位置で重複する南北溝跡で、SD796が新しい。堆積土に灰白色火山灰が認められないこと、土師器三足皿などが出土したこと、重複するすべての掘立柱建物跡より新しいことから、10世紀後半以降と考えられる。

〈J区〉

【SD12206】北2道路跡（SX12221）より古いことから、8世紀後半以前と考えられる。

〈L区〉

【SD7095・7096】ほぼ同位置で重複する南北溝跡で、SD7096が新しい。8世紀末～9世紀前葉のSK7093土坑より新しく、SD7096が9世紀後葉～10世紀前半とみられるSB7272掘立柱建物跡より新しいこと、堆積土から回転糸切りのロクロ土師器坏・甕などが出土したことから、10世紀前半以降と考えられる。

【SD7117】SX7124・7128整地層やSD461区画溝跡より古い。堆積土から回転ケズリの須恵器坏が出土したことから、8世紀前半とみておきたい。

【SD7262】SD7100と同時期であることから、9世紀～10世紀前半とみられる。

【SD7604・7260】堆積土から近世陶磁器が出土したことから、近世以降と考えられる。

【SD7613】6世紀末～7世紀前半のSD7848より古いが、SD100河川跡左岸に位置することから、その年代観の中に収まるとみられる。

【SD7773・7823】県道Ⅲ区のSD2634と同一遺構である（宮城県教委1994c）。南半はSA7784材木塀跡と並行するが、北半は交差して壊跡を壊している。SD7779の堆積土から出土した土師器は、SD100・SD2050B出土土器と共に通することから、7世紀前半～中頃とみておきたい。

(9) 土器埋設遺構

L区で2基確認した。

【SX7099】非クロ口調整の土師器大型甕が横位に据えられた土器埋設遺構である。大型甕は胴部が下膨れで頸部に段を持っており、SD100・2050B出土土器と共に通することから、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

【SX7841】非クロ口調整の土師器大型甕が横位で出土していることから、土器埋設遺構である。胴下半が膨らみ頸部に段を持つ特徴はSD2050B出土土器群と共に通することから、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

(10) 土坑

土坑は263基確認した。内訳はD区48基、F区5基、G区17基、J区102基、L区80基、M区10基、N区1基である。以下、主要な土坑について調査区ごとに年代を検討する。

〈D区〉

【SK787・833・834】SX750西4道路跡D期側溝よりも新しく、堆積土から赤焼土器小皿が出土したことから、11世紀以降と考えられる。

【SK836】10世紀後半のSB7035建物跡より新しく、11世紀以降のSK834土坑より古いことから、10世紀後半とみられる。

【SK879・883】堆積土から赤焼土器壺が出土した。赤焼土器壺は多賀城跡第60次調査鴻の池地区第10層出土土器群から認められるが（多賀研1997）、同層を除くと明確に9世紀代に位置付けられるものがなく、10世紀に入って急増すること、小皿が認められないことから、10世紀前半とみられる。

〈G区〉

【SK11207】堆積土から非クロ口調整で赤彩の小型壺が出土した。その特徴はA群土器（本章第1節）と共に通することから、5世紀前葉とみられる。

〈F区〉

【SK11534】8世紀末～9世紀前葉のSB11601建物跡より古いこと、堆積土からヘラ切りの須恵器壺が出土したことから、8世紀後半～9世紀前葉の間と考えられる。

〈J区〉

【SK11914】堆積土から非クロ口土師器平底壺、皿形で回転ヘラケズリ調整の須恵器壺などが出土した。こうした内容はSD461・2124区画溝跡（宮城県教委1994c、本章第3節）と共に通することから、8世紀後半とみられる。

【SK12001】堆積土から非クロ口土師器甕・壺などが出土した。甕はSD677溝跡出土土器（宮城県教委1997）と特徴が類似しており、8世紀後半とみられる。

【SK12308】堆積土や確認面から非クロ口土師器無段平底壺やクロ口調整の土師器稜塊などが出土した。こうした内容は、前述したSD461・2124区画溝跡と共に通することから、8世紀後半とみられる。

〈L区〉

【SK7090】堆積土から、非クロロ土師器壺・塊・小型甕・甕や須恵器壺・高台壺・蓋・壺・甕などが出土した（図版670）。土師器壺は無段平底で、塊が有段丸底である。須恵器壺は皿形で、底部切り離しと再調整は静止糸切り後手持ちケズリ、ヘラ切り後回転ケズリや手持ちケズリ、回転糸切り後回転ケズリ、切り離しが不明で回転ケズリや手持ちケズリがあり、再調整が施されるものが主体である。本章第3節の検討から、8世紀後半と考えられる。

【SK7093】堆積土から、非クロロ土師器壺・高台壺・小型甕・甕やロクロ土師器壺・須恵器壺・小型壺・塊・稜塊・蓋などが出土した（図版673）。土師器壺は回転ケズリが認められる。須恵器壺は皿形と逆台形があり、後者が多い。切り離しと再調整はヘラ切りが主体で、ほかに静止糸切り後手持ちケズリ、ヘラ切り後手持ちケズリがある。小型壺や塊はヘラ切りと切り離しが不明で回転ケズリが認められる。稜塊は大戸産でKA12窯式期のものである。本章第3節の検討から、8世紀末～9世紀前葉と考えられる。

【SK7102】堆積土から、非クロロ土師器壺・高壺・鉢・小型広口壺・須恵器壺蓋などが出土した。これらの特徴はSD100・2050B出土土器と共通しており、本章第2節の検討から6世紀末～7世紀前半と考えられる。

【SK7125】9世紀中葉のSE7105井戸跡より新しく、10世紀初頭前後のSX7103整地層より古い。堆積土より回転糸切りの須恵器壺などが出土していることから、9世紀後葉とみられる。

【SK7291】10世紀初頭前後のSX7103整地層より古い。堆積土から回転糸切りの須恵器壺、猿投産でK90期の灰釉陶器塊などが出土したことから、9世紀後葉とみられる。

【SK7360・7556】堆積土から非クロロ土師器有段丸底壺などが出土した。その特徴はSD100・2050B出土土器と共通することから、6世紀末～7世紀前半とみられる。

【SK7622】9世紀代のSD7847より新しいことから、10世紀以降とみておきたい。

【SK7710】堆積土から、非クロロ土師器壺・鉢・広口壺・小型甕・甕などが出土した。土器の特徴はSD100・2050B出土土器群と共通することから、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

【SK7719】10世紀前半のSD7100Bより新しいこと、赤焼土器壺が出土したことから、10世紀前半以降と考えられる。

〈M区〉

【SK11726】堆積土から回転糸切りのロクロ土師器壺などが出土した。壺は楕形で底径が小さく回転糸切りで、内面放射状ミガキが認められること、灰白色火山灰や赤焼土器が認められないことから9世紀後葉とみられる。

(11) 烟跡

烟跡はD区2面、J区10面、L区5面、M区3面などを確認している。以下、主要なものについて調査区ごとに年代を検討する。

〈D区〉

【SF801】9世紀中葉のSX7025整地層より新しく、歛間から回転糸切りの須恵器环が出土したことから、同時期以降と考えられる。

【SF809】9世紀中葉のSX7001整地層より新しく、歛間に灰白色火山灰が認められること、10世紀前半のSB7428建物跡と方向が同じであることから、10世紀前半と考えられる。

〈J区〉

【SF12085】10世紀前半でも新段階に位置付けられるSB12497より新しいことから、10世紀後半とみられる。

【SF12224】歛間に灰白色火山灰が認められることから、10世紀前半と考えられる。

【SF12234・12235】9世紀以降のSX12092西6a道路跡や10世紀前半のSD12324より古いことから、9世紀以前と考えられる。

〈L区〉

【SF7277】10世紀初頭前後のSX7103整地層より新しいことから、10世紀前葉以降と考えられる。

【SF7358】9世紀中頃～10世紀前半のSD7262溝跡より古いことから、9世紀中葉以前とみられる。

【SF7803】8世紀末～9世紀前葉のSD7940溝跡と同一遺構である多賀城市第17次調査L区のSD5466より新しいことから、9世紀中葉以降と考えられる。

註

註1 図版684は、多賀城市文報27集の第20・21図、同30集の第14・15図から作成した。その際、前者は8世紀中頃以降の須恵器跡、後者はB期堆積土である大別1～3層出土土器を外している。

註2 漆紙文書の年代は文書の作成年代と保管期間に加え、漆工房でフタ紙として利用された後廃棄されるまでの時間を考慮する必要がある。

註3 細分した3グループの真北からの角度は、1：7°前後、2：14°前後、3：30°前後としている。

註4 174集では、伏石地区のSX3024・3029をSE3038とともにc-3期とし、9世紀第2四半期もしくは9世紀前半でも新しい時期とした（宮城県教委1997）。c-3期はc-1・2期より新しく、方向が真北を向くことからd-1期（伏石d-1・2期）と考えられる。本書では、出土土器からこれら3遺構の年代を9世紀中葉に位置付けている（本章第3節）。

7. 古墳時代前期の八幡・伏石地区

本節ではJ区北西部の基本層第V層で確認した古墳時代前期のSF12230水田跡を中心に、山王遺跡で確認した水田跡の構造と水田域の広がり、集落との関係を検討する。そもそも水田を水田工学の見地から定義すると、「アゼ（畦畔）で囲まれた湛水できる農地」とされている（田渕1999）。現代ではその水田を構成する要素として畦畔・用排水路・水口・水尻・農道があるが、発掘調査で確認する古

古墳時代から古代の水田跡は、灌漑方法の違いから、それら構成要素のすべてを満たしているものは少ない。

古墳時代の水田は、区画面積が狭いことから「小区画水田」と呼ばれている（都出1983）。日本列島への水田稲作の伝来以降から古墳時代にかけての全国的に普遍的な形態とされ、大陸の影響を受けたものと考えられている（都出前掲・齋藤2001）。

そして本書の報告には、水田跡の報告に際して「擬似畦畔」という用語を使用している。これは考古学で使用されている用語である。ここで改めて用語の説明をすると、擬似畦畔には2種類あり（擬似畦畔A・B）、擬似畦畔Aは水田畦畔の起伏に影響された畦畔直上の自然堆積土の高まりを指している。擬似畦畔Bは畦畔直下に認められる自然堆積層の高まりで、耕作の影響を受けないことから形成されたものとされている（仙台市教委1987a）。

SF12230水田跡で確認された擬似畦畔は後者に分類される。この擬似畦畔が確認されたところに、水田機能時の畦畔があったと考えられる。以上の内容を踏まえて、古墳時代前期の水田跡と景観について検討を行う。

（1）水田の構造

A. 区画

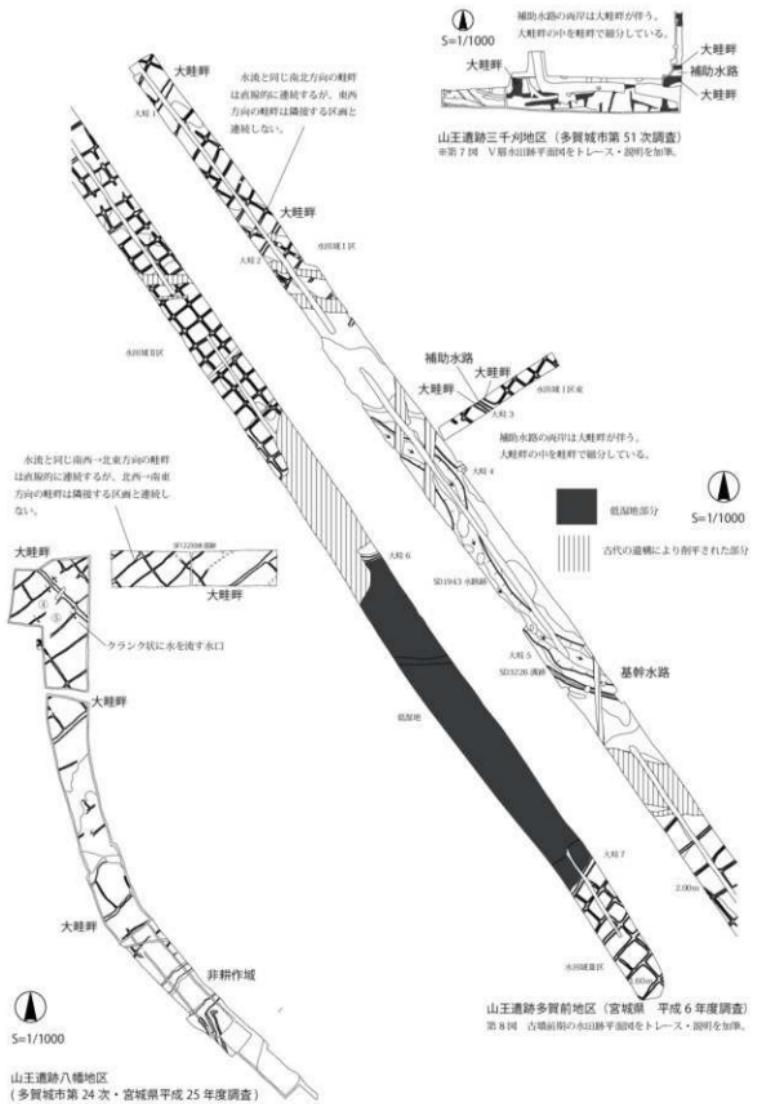
SF12230水田跡は、直交する大畦畔を小畦畔で細分した、区画の面積が30m²以下の長方形を呈した小区画水田である（図版629・687）。長方形区画の長辺にあたる畦畔は、水田面の高低差に則しつつ直線的に接続しているが、短辺にあたる畦畔は隣接する区画の畦畔と直線的に接続していない。この結果、大畦畔の中で細分された小区画水田は平面形や面積にばらつきが認められる。

SF12230水田跡の東側に位置する、多賀前地区で確認したSF3124水田跡も同様の構造をもつ小区画水田である。また畦畔が一方の直線的に接続していく例は、多賀前地区SF3134水田跡（宮城県教委1995）のほか、三千刈地区的水田跡（多賀城市教委2006a）でも認められる。

水田が小区画である理由については、緩傾斜地を大規模に水平化することなく、小さな水平面の累積によって水田に湛水する工夫（都出1983）、水田耕土の保水性の関係（高谷1982）といった理由で説明されている。

区画の配置と畦畔の設定をみると、極端に小さい区画を多数配列する際、不整形の区画を累積させるより、まず縦軸となる畦畔を長く何本も引き、その後直交する畦畔を付加するほうが合理的という指摘がある（都出1983、能登1983、齋藤2001）。このような畦畔の設定では、地形の傾斜や凹凸した微地形に影響されながら横方向の畦畔をつくるため、区画に規格性がなくなる（能登前掲）、とされている。こうした水田区画の造成が、結果的に区画面積の不均一化をもたらしている。

これらを踏まえて山王遺跡の水田跡をみると、区画の規模、畦畔の設定方法は先学の研究で示された古墳時代小区画水田の構造に共通するところが多いと考えられる。なお大畦畔（大アゼ）は、大きな地形変換点・土地所有関係に規定されていたという見解もある（齋藤前掲）。しかし大畦畔で区切られた区画の規模や水田の全体像が不明であるため、山王遺跡で確認した水田の大畦畔についてこれ以



図版687 古墳時代前期の水田跡

上言及することはできない。

B. 水口

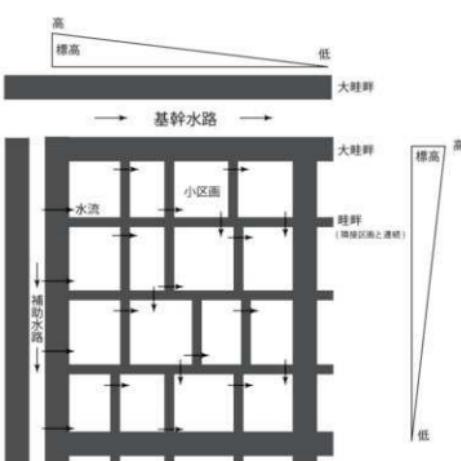
隣接する多賀城市調査区では水口が確認されており、田面の標高値から判断すると、水を西から東へ流していたことが伺える。多賀城市調査区で確認した水田区画④・⑤の水口をみると、用水を上隣の区画から引いており、区画に対して水口を向かい合わせにしていない。これは排水を効率的に行う目的で水口位置を田面標高の最も低いところに設定したため、結果的に水口はクランク状の配置になったと考えられる。

ところで、水口の配置は用排水路に直接繋がるものではないことから、区画から区画へ水を流す目的でつくられたことがわかる。これは多賀前地区のSF3124水田跡で確認した水口でも同様である。こうした灌漑方法は、用水を上隣の区画から引き入れ、排水を下隣の区画に流す「田越し灌漑」で、水口を開放し用水を掛け流していた「掛け流し」という灌漑方法（田渕1999）とあわせて、「田越しあつ掛け流し」として解釈されている（齋藤前掲）。

C. 水路

今回の調査と、隣接する多賀城市調査区では確認していない。しかし多賀前地区のSF3124水田跡の水田域I区大畦3・SD1943水路跡、西町浦地区の多賀城市第51・57次調査で確認したSD1127水路跡、市川橋遺跡SD1748水路跡などの事例から、SF12230水田跡の近隣にも未発見の水路跡が存在すると思われる。これまで確認された水路は、堰もしくは堤防護岸施設を伴うもの（SD1748・1943）と、大畦畔に囲まれた比較的小規模なもの（大畦3・SD1127など）に大別され、それぞれ基幹水路と補助水路に該当すると思われる。この補助水路は、多賀前地区の大畦畔3や三千刈地区のSD1127水路跡とSX1224・1225大畦畔のように、大畦畔とセットで確認されている。補助水路の両岸が大畦畔で構成されていたとみられ、このことから水路が大畦畔による区画と関係しつつ配置されていたことを示唆している。

さらに水路と水口が大畦畔の中で細分された小区画水田のすべてに隣接しているわけではなく、「田越しかつ掛け流し」という灌漑方法であることを踏まえると、基幹水路は用水を標高の低い水田域へ供給するた



- ・大畦畔での区画の設定。
- ・大畦畔で区画された中に、地表の高低差に沿う長い小畦畔を設定。
- ・長い小畦畔に直交する小畦畔を設定。
- ・I区北西部SF12230水田跡では、水路は未確認。

図版688 山王遺跡の水田模式図

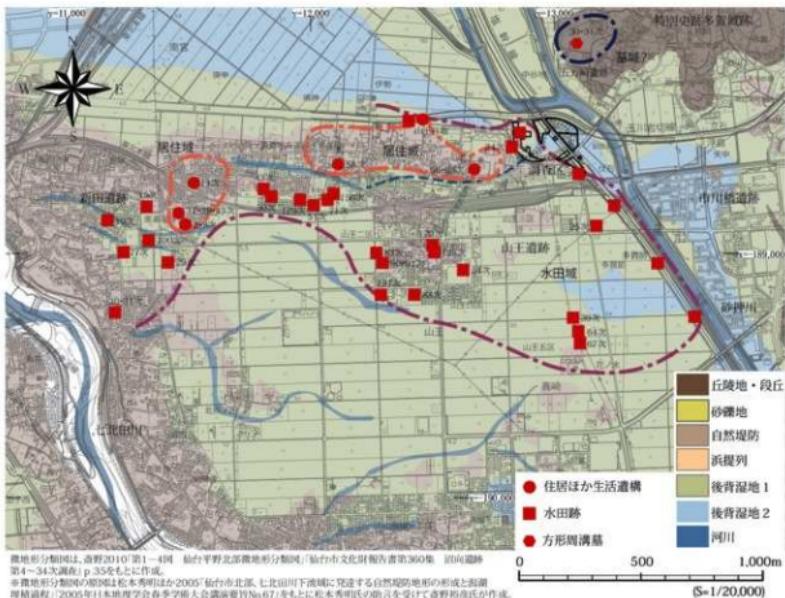
めのバイパスとして存在し、補助水路が大畦畔による区画に隣接して水の供給をしていたと考えられる。

(2) 水田の形態

以上の検討をもとに、山王遺跡で確認した水田跡の構造を図版688で模式的に示した。山王遺跡で確認した水路は、基幹水路と補助水路に大別され、いずれも西から東へ、地表面のコンタに沿った方向に水を流している。基幹水路では堰や堤防護岸が確認されており、一方、補助水路は大畦畔に沿っていることから、大畦畔の区画単位で水を供給していたものと考えられる。大畦畔の中で細分された小区画水田は、水田面の高低差に則した長い畦畔をつくり、それに直交する畦畔が設定されている。そのため区画の面積にばらつきが生じている。小区画水田では「田越しかつか掛け流し」の灌漑方法であったと思われる。宮城県内では、仙台市富沢遺跡で古墳時代前期の水田跡が確認されているが類例は少なく、水利システムなど実態は不明である（仙台市教委1987b）。今後の調査成果に期待したい。

(3) 水田域の広がりと居住域

山王遺跡と、隣接する新田遺跡で、プラント・オパール分析結果を含めて古墳時代前期の水田跡と認定された場所は30地点を数える（図版689・表80）。これを微地形分類図（仙台市教委2010b）上



図版689 古墳時代前期の山王・市川橋遺跡

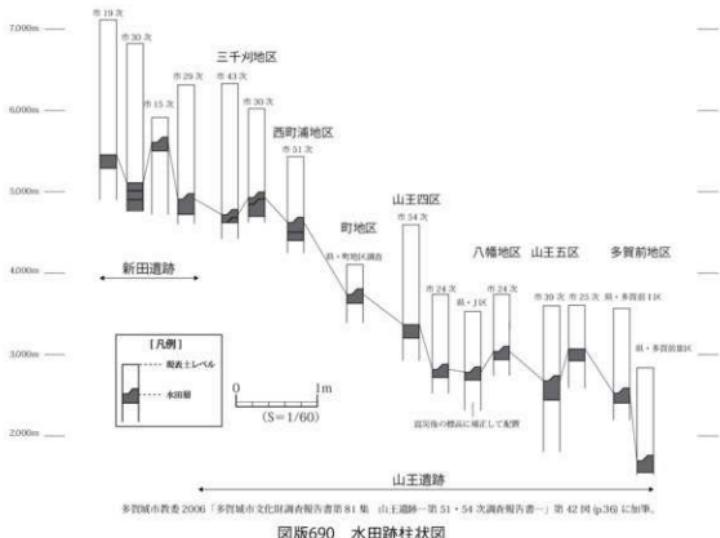
遺跡	調査次数 調査実施地区	調査年度	水田耕作に 関わる施設	出土遺物	プラント・ オバール密度	本塗面の 標高 (m)	文 獻
新田遺跡	第15 次	1996	蛭町	—	平均 5,000 個 / g	5.56 ~ 5.62	多賀城市文化財調査報告書第 43 集
	第19 次	1996	蛭町	土師器	—	5.44	平成 8 年度 宮城県調査成果発表会発表資料
	第29 次	2004	蛭町・水口	—	4,400 ~ 4,900 個 / g	4.92	多賀城市文化財調査報告書第 78 集
	第30 次	2004	—	—	2,900 ~ 3,800 個 / g	5.1	多賀城市文化財調査報告書第 78 集
	第31 次	2006	—	—	—	?	多賀城市文化財調査報告書第 84 集
	第77 次	2012	—	—	1,400 ~ 5,300 個 / g	?	多賀城市文化財調査報告書第 108 集
山王遺跡	第100 次	2014	蛭町・水口	—	3,000 個 / g	3.9	多賀城市文化財調査報告書第 119 集
	第24 次	1994	蛭町・水口	土師器窯・台付甕・壺・ 鉢	平均 94,000 個 / g	2.78 ~ 3.06	多賀城市文化財調査報告書第 45 集
	第25 次	1994	—	土師器窯高环・壺・壺	3,600 ~ 6,400 個 / g	30.8	多賀城市文化財調査報告書第 38 集
	第30 次	1996	蛭町・水口	土師器窯高环・壺	—	4.7	平成 8 年度 宮城県調査成果発表会発表資料
	第39 次	2001	蛭町	土師器窯高环	—	2.66	多賀城市文化財調査センター年報 - 平成 13 年度
	第43 次	2004	蛭町・水口	土師器窯	—	5.02	多賀城市文化財調査報告書第 77 集
	第51 次	2005	蛭町・水口・溝跡	土師器窯・沿台・壺	3,000 ~ 5,400 個 / g	4.16 ~ 4.35	多賀城市文化財調査報告書第 81 集
	第54 次	2005	—	—	7,100 ~ 7,200 個 / g	3.37	多賀城市文化財調査報告書第 81 集
	多賀前	1994	蛭町・溝跡・水口	土師器窯・壺	—	1.6 ~ 2.6	宮城県文化財調査報告書第 167 ~ 170 集
	町	1995	蛭町	土師器窯	—	3.1 ~ 3.5	宮城県文化財調査報告書第 175 集
	第64 次	2007	蛭町	—	1,200 ~ 4,200 個 / g	2.4 ~ 1.9	多賀城市文化財調査報告書第 94 集
	第67 次	2009	蛭町・水口	—	7,000 個 / g 以上	2.0 ~ 2.4	多賀城市文化財調査報告書第 96 集
	第71 次	2009	耕作面	—	4,200 ~ 7,800 個 / g	4.14 ~ 4.21	多賀城市文化財調査報告書第 101 集
	第83 次	2011	大蛭町	—	—	?	多賀城市文化財調査報告書第 104 集
	第88 次	2012	蛭町・水口	—	3,000 個 / g	2.65 ~ 2.77	多賀城市文化財調査報告書第 109 集
	第90 次	2012	蛭町	—	—	3.10 ~ 3.14	多賀城市文化財調査報告書第 108 集
	第91 次	2012	大蛭町・蛭町	—	—	2.75	多賀城市文化財調査報告書第 108 集
	第120 次	2012	—	—	3,600 個 / g	3.56	多賀城市文化財調査報告書第 111 集
	第128 次	2015	蛭町・水口	土師器窯	1,200 ~ 3,600 個 / g	2.2	多賀城市文化財調査報告書第 114 集
	第129 次	2013	蛭町	—	2,400 個 / g	4.15	多賀城市文化財調査報告書第 114 集
	第137 次	2015	—	—	—	2.9	多賀城市文化財調査報告書第 114 集
	第139 次	2013	蛭町・水口	土師器窯	—	2.58 ~ 2.66	多賀城市文化財調査報告書第 115 集
	第150 次	2015	蛭町	—	4,800 ~ 5,400 個 / g	3.71 ~ 3.87	多賀城市文化財調査報告書第 128 集
八幡地区	2014	蛭町?	—	—	—	22.4 ~ 25.4*	本書
八幡地区	2015	大蛭町・蛭町	—	—	—	?	本書

表80 山王遺跡と新田遺跡における古墳時代前期の水田跡

に示すと、七北田川に近い新田遺跡の 2か所（多賀城市第15・30・31次）を除いて、すべて後背湿地 1 で営まれている。この新田遺跡から山王遺跡にかけて東西に延びる水田域の標高をみると、西から東へ緩やかに下がっている（図版690）。これは今回の調査で確認したSF12230 水田跡の水流方向とも矛盾がなく、灌漑用水は七北田川から取水し、砂押川へ排水していたことがわかる。

これまでに確認された水田跡から、水田が営まれた範囲を推定すると図版689の破線部分の範囲になると考えられる。この水田域が東西への広がりに対して、南北への広がりが制約されている。この理由として、北側が標高の低い湿地で耕作に不向きだったことがまず考えられよう。水田は強度の低湿部を避けた選地が行われていたとみられる。さらに、北側の耕作範囲については七北田川の流路も関係していると考えられる。

七北田川は上流域から洞ノ口付近まで富谷丘陵に制約され、流路は方向ほぼ西向きである。現在の都市計画道路泉塩釜線より北は、七北田川流路より北に位置していることから、七北田川から取水できなかった可能性がある。こうした取水上の制約があったことも耕作域を北に広げられなかつた要因と考えられる。ちなみに本遺跡北側の土地利用をみると、中谷地地区で 10 世紀前葉の水田跡を確認し



図版690 水田跡柱状図

たほかは（宮城県教委 1994c）、七北田川の左岸に位置する仙台市洞ノ口遺跡の河川に近い微高地上で、古墳時代前～中期の水田跡の可能性がある堆積層（Ⅷ層）が報告された（仙台市教委 2005a）のみである。したがって、山王遺跡北側の低湿地部分で明確に水田が営まれようになるのは、平安時代前期以降と考えられる。

次に山王遺跡の南側をみると、潟湖が存在したことがわかっている（仙台市教委 2010b）。潟湖は繩文海進によって広がった内湾（松本 1981）が、約 5000～4500 年前に形成された第一浜堤列によって封じられ形成されたもので（松本 1996）、古墳時代前期には弥生時代より縮小・水位低下し可耕地が拡大したと考えられている（仙台市教委前掲）。山王遺跡南側に広がる潟湖の存在が、水田域の範囲に影響を与えたことは十分に考えられる。また、水田域は砂押川の東岸まで展開していない。山王遺跡の北側と同じく、より標高の低い後背湿地 2 が広がることが一つの理由として考えられるが、具体的な理由は不明である。

水田の構造からみると、土木・灌漑技術が未発達のために大規模に水平面を造成することが困難で、必然的に小区画水田となっている。それゆえに水田域は、地形環境の直接的な制約を受けやすい。多賀前地区的 SF3124 水田跡が微高地・低湿地を避けていることからも、水田として利用できる可耕地には大きな制約があったことがわかる。こうした南北の地形環境の制約が、水田域の範囲に影響を与えていたと考えられる。

古墳時代前期の住居跡は、毛上地区で 3 棟（多賀城市教委 2010c）、山王谷地地区で 3 棟（宮城県教委 1998）、町地区で 2 棟（多賀城市教委 2006d）が確認されている（註 1）。そのほか、新田遺跡にお

いても、南寿福寺地区で土坑などが確認されており（多賀城市教委1990cなど）、いずれも出土した土器は塙釜式土器後半に比定されている。したがって、県道泉塙釜線に沿った自然堤防が居住域、その外縁から外側の後背湿地が水田耕作域として利用されたと考えられる。

今回の調査で確認したSF12230水田跡は、毛上地区の住居跡から東に0.3kmほど離れており、両者の関係性が窺える。一方、多賀前地区の南端や山王五区の第39・67次調査で確認した水田跡（多賀城市教委2009bなど）は、最も近い住居跡から、それぞれ直線距離で約1.1km、0.8km離れていること、多賀前地区SD4060河川跡からは、前期の土器や木製農具が出土していることから（宮城県教委1996a）、自然堤防上の居住域はさらに広がると考えられる。

註

註1 山王谷地地区の住居跡は方形周溝墓と掘立柱建物として報告したが（宮城県教委1998）、飯島義雄氏による「周溝をもつ建物」として理解するべきとの指摘（飯島2008）を受けて再検討した結果、同地区の方形周溝墓や竪穴住居は、周溝をもつ建物と改めることとしている（本章第12節参照）。

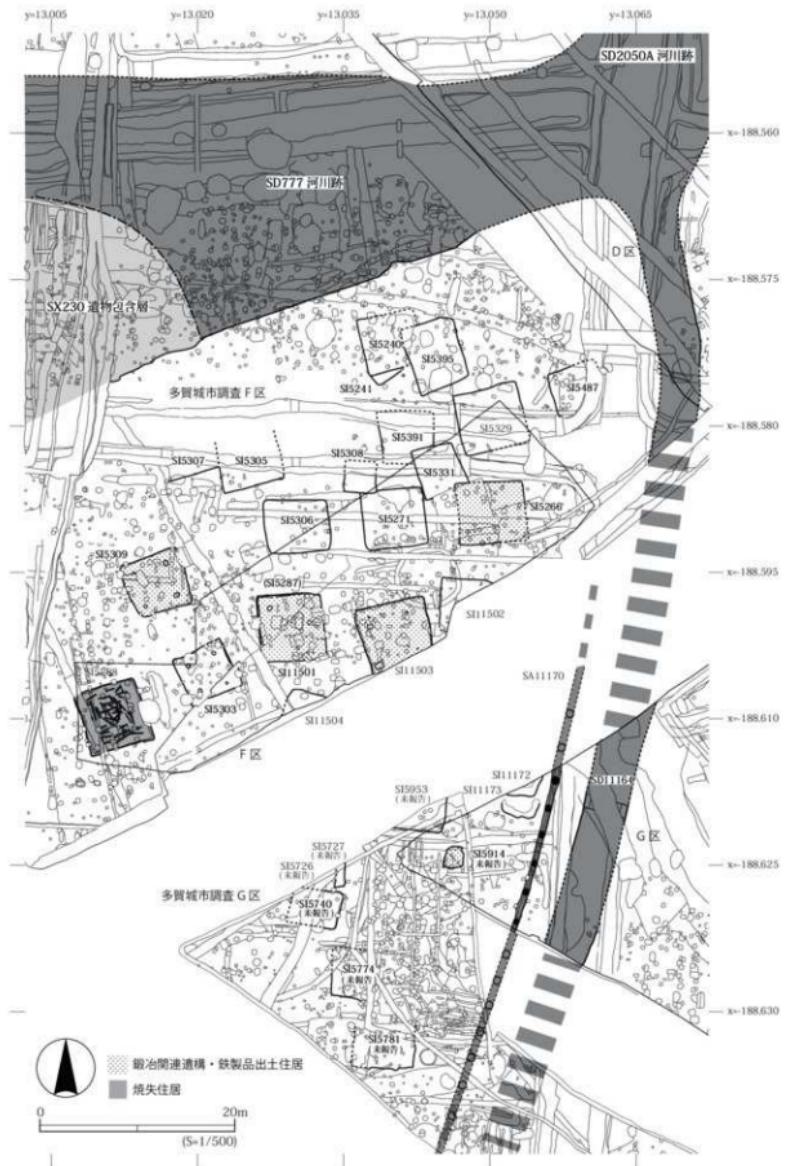
8. 古墳時代中期の八幡・伏石地区

八幡・伏石地区のうちF・G区では、これまでに28棟の竪穴住居跡を確認し、そのうち5棟（SI5288・5303・5309・11501・11503）を調査した。これらはいずれもカマド導入以前に機能しており、F・G区で出土した中期の土器はすべてA群土器の範疇であることから、28棟の竪穴住居は中期前葉に機能していたと考えられる。

竪穴住居群は北側でSD777河川跡、東側で直線的に延びるSD11164区画溝跡・SA11170塙跡によつて区画されていた。区画は平面形が方形を意識していたとみられ、規模は南北72m以上・東西60m以上となる（図版691）。区画内にある竪穴住居の一部では鍛冶炉が確認され、これまでの調査で鍛造剝片や鉄滓、鉄製品が出土している。

竪穴住居や掘立柱建物に塙と溝による方形区画が伴う場合、防御機能や居住者の階層的優位性が想起され、豪族居館である可能性が指摘されている（小笠原・阿部1991、都出1993など）。宮城県内においても仙台市鴻ノ巣・沼向・南小泉・藤田新田遺跡、亘理町宮前遺跡、山元町合戦原遺跡、加美町壇の越遺跡、大崎市名生館官衙遺跡、美里町駒米遺跡などで古墳時代中期の集落が確認されているが、区画施設を有する集落は鴻ノ巣遺跡のみであり、集落に必ず塙と溝による方形区画が伴うわけではない。したがって、山王遺跡八幡・伏石地区や鴻ノ巣遺跡は一般的な集落と異なる性格が想定できる。とりわけ、八幡・伏石地区は区画に伴うゴミ捨て場から鹿角製刀装具・琴柱形角製品など一般集落では持ちえない威儀具が出土しており、「豪族居館」の可能性を考えることができる。鍛冶についても、同時期の東北地方では類例が少ないため一般的な技術ではなく、八幡・伏石地区的豪族居館はそうした先進技術が導入されていたと考えたい。

本節での「豪族居館」の用語についてであるが、東北地方では区画内に大型建物が認められる事例は福島県の折返A・菅保B遺跡のみであり、居住施設に限定されていない活動区域とする指摘（菊池



図版691 古墳時代中期の遺構配置図

2010) も踏まえて、豪族の居住域のみならず祭祀や生産活動に関係する区域も含めて便宜上用いてい
る。以上を踏まえて、確認した区画施設と鍛冶遺構、出土遺物について検討を行う。

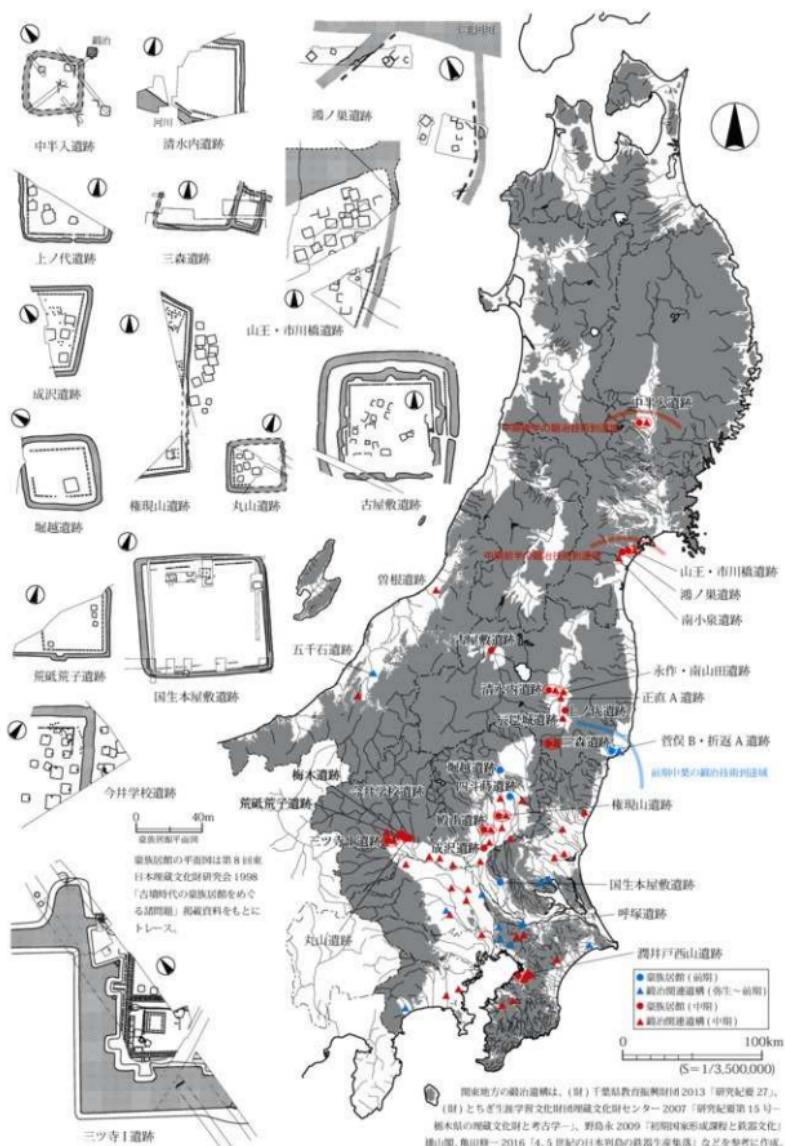
(1) 区画施設の検討

八幡・伏石地区で確認したSA11170 堀跡とSD11164区画溝跡は、約3.2m離れた位置で並行しなが
ら南北へ伸びている。このため、両遺構が一体となって区画施設を構成していたと考えられる(図版
691)。

SA11170 堀跡は布掘り状の掘方(以下、布掘りとする)を掘り、さらにその布掘り底面から支柱部
分を隅丸方形・楕円形に掘る2段階の掘り下げが行われている(以下、「布掘り底面から支柱掘方を掘
り下げる」堀跡と称する)。2.6~3.0mの等間隔に並べた支柱を自立させるため、支柱の掘方を布掘り
より深くしたものであり、支柱間には縦板を並べ、堀の上部は支柱同士を繋いだ横材で押された縦板
棚であったと考えられる。

SA11170と同様の構造を持つ堀(柵列・柱穴列)として、仙台市鴻ノ巣遺跡第7次調査のSA1・
SA2柱穴列、同遺跡第9次調査のSA2・SA3柱穴列があげられる。第7次調査のSA1・SA2柱穴列、同
遺跡9次調査のSA2・SA3柱穴列はSA11170と同じく2段階の掘り下げが認められ、支柱間の布掘り
の中に縦板を据えていたと考えられる。鴻ノ巣遺跡の堀跡は約3m前後離れた位置で直線的に延びる
溝跡(SD20・22・37・45)が並行しており、豎穴住居群の一画を開んでいた(仙台市教委2004・
2012)。年代は第9次調査SA2柱穴列がSA11170と同時期の5世紀前葉、第7次調査のSA1・SA2柱
穴列、第9次調査SA3柱穴列は5世紀中葉～後葉と考えられる。こうした堀の構造は八幡・伏石地区
と共にしており、両者の間には5世紀前葉に特殊な土木技術を共有した関係性が窺える。

ところで、堀と溝による方形区画は、東北地方で古墳時代前期から大郷町鶴館遺跡、登米市佐沼城跡、
栗原市入の沢遺跡・伊治城跡で認められ、中期では奥州市中半入遺跡(5世紀後半)、喜多方市古屋敷
遺跡(5世紀中～後葉)、郡山市清水内遺跡(5世紀前半)、須賀川市上ノ代遺跡(5世紀中葉)、白河
市三森遺跡(5世紀前～後葉)で確認されている(註1)。さらに北関東へ目を向けると、前期には茨
城県石下町国生本屋敷遺跡(4世紀)、栃木県氏家町四斗蒔遺跡(4世紀)、矢板市堀越遺跡(4世紀)
があり、中期は栃木県上三川町殿山遺跡(5世紀)、小山市成沢遺跡(5世紀後半)、宇都宮市権現山
遺跡(5世紀後葉)、群馬県群馬町三ツ寺1遺跡(5世紀)、赤堀町今井学校遺跡(5世紀後半～6世
紀初頭)、前橋市丸山遺跡・荒砥荒子遺跡(5世紀前～中葉)、前橋市梅木遺跡(5世紀末)などがあ
げられる。西日本でも滋賀県栗東町野尻遺跡(5世紀後半)、京都府精華町森垣外遺跡(5世紀前～末
葉)、神戸市松野遺跡(5世紀末)などに認められる。南東北～北関東に類例が多く、いずれも豪族居
館に推定されている(図版692、表81)。



図版692 東日本の堀・溝を有する豪族居館と竪穴鍛冶遺構（古墳時代中期）

都道府県	遺跡名	所在地	立地	時期	区画施設						施設工事有無	文献		
					標高(m)	東西	南北	上幅(m)	深さ(m)	断面形	壁	柱間距(m)	張出	
山王・油川根遺跡	多賀城市山王	最高地	中期(5c前)	60+~72+	3.8	1.1	レシテロ	布掘り	2.6~3.0	—	壁穴住居	○	区间内本道	
油・果園跡	仙台市宮城野区	自然堤防	中期(5c前~後)	40+~43+	2.8~3.7	1.4~1.6	逆行形	布掘り	0.9~1.3	—	壁穴住居	—	仙台市 2009~2012	
伊治城跡	栗原市柴田町	河岸段丘	中期(4c後)	20	18	0.9~3.4	0.7~1.5	逆行形	材木扉	—	壁穴住居	—	栗原市 1992~1998	
入の沢遺跡	栗原市柴田町	丘陵	前期(4c後)	112	43	2.4~3.5	0.5~1.2	V字形	材木扉	—	壁穴住居	—	宮城県 2016	
登米城跡	登米市近石	丘陵	前期(4c後)	7	19+	3.6~3.0	0.4~0.5	逆行形	材木扉	—	壁穴住居	—	辺境 1995	
岩手平入遺跡	奥州市佐倉	河岸段丘 中期(5c後)	27	32	—	—	—	—	—	材木扉	—	壁穴住居	○	区间外岩手県 2002
古屋敷遺跡	喜多方市	自然堤防	中期(5c後)	58	55	外:5.0~7.0 内:3.2~4.0	0.7~2.2	逆行形 矩形	布掘り	1.0~1.5	壁穴住居、掘立柱建物	—	塙川町 1999	
清水内遺跡	郡山市	最高地	中期(5c前~後)	42+	50	2.1~2.5	0.5~0.6	逆行形	布掘り	1.6~1.8	ピット(横掘跡?)	○	区间外郡山市 1999	
上ノ代遺跡	須贺川市	丘陵	中期(5c中)	55	40+	1.8~2.3	0.4~0.7	矩形?	柱穴列・布掘り	1.3~1.6	壁穴住居	—	辺境 1995	
三森遺跡	白河市	河岸段丘 中期(5c前~後)	27+	47	2.0~3.2	0.6~0.8	U字形	布掘り	1.6~4.0	壁穴住居?	○	区间外表那村 1997		
牧道遺跡	会津坂下町	自然堤防(5c末~6c初)	75	40	1.0~1.5	1.8~2.2	逆行形	柱穴列	?	壁穴住居	—	会津坂下町 1994		
駒越遺跡	矢板市東原	低位台地	前期(4c中)	48	50	2.8~4.4	1.0~1.6	逆行形	材木扉	—	壁穴住居	—	桃木町 2005	
西斗野遺跡	福島市氏家町	段丘	前期(4c前~後)	43	52	3.0~4.1	1.2~1.6	逆行形	布掘り	3.0	壁穴住居	—	安永 1992 桃木町 1999~2000	
郡山現山遺跡(SG1区)	宇都宮市東谷町	低地	中期(5c後)	?	100	2.0	0.5	—	柱穴列・布掘り	1.8~2.0	壁穴住居、掘立柱建物	○	区间外桃木町 2013ほか	
成心遺跡	小山市南平田	低位台地	中期(5c後)	56	40+	2.5~3.5	0.8	逆行形	柱穴列・布掘り(横掘?)	2.4	壁穴住居	—	桃木町 1993	
丸山遺跡	前橋市京町	丘陵	中期(5c後)	59	43	2.7	1.2	逆行形	布掘り	2.4	壁穴住居	—	前橋町 1987	
荒砥荒子遺跡	前橋市荒子町	右岸	中期(5c後)	59+	43	2.2	0.5	逆行形	柱穴列・布掘り	2.4	壁穴住居、井戸	○	群馬県 2000	
郡山木道跡	前橋市小室町	最高地	中期(5c末)	85	—	4.0~6.6	1.0~1.2	逆行形	柱穴列	1.8	—	—	前橋市 1986	
三ツ寺I遺跡	群馬郡三ツ寺	台地	中期(5c後)	86	86	3.0~35.0	3.0	—	柱穴列・布掘り	1.4~2.3	壁穴住居、掘立柱建物	○	区间内? 群馬県 1988	
今井学文跡	赤堀町今井	右岸	中期(5c後~6c初)	51	40	5.7~6.6	0.8	逆行形	柱穴列	0.4	壁穴住居	—	赤堀町 1991	
茨城 国生本屋敷遺跡	右下町	右岸	前期(4c)	69	64	4.0	2.0	?	材木扉	—	壁穴住居、掘立柱建物	—	豊博 2006	
千葉 呼辱遺跡	柏市	台地	前期(4c)	46+	7	3.6~5.0	1.0~1.5	逆行形	材木扉(扉と報告)	—	壁穴住居	○	区间外 玄武工房 2008 地城工房 2016	

表81 東日本の塀・溝を有する豪族居館

(2)「布掘り底面から支柱掘方を掘り下げる」塀跡について

「布掘り底面から支柱掘方を掘り下げる」塀跡は、古屋敷遺跡、清水内遺跡、上ノ代遺跡、三森遺跡、権現山遺跡(SG1区)、丸山遺跡、荒砥荒子遺跡、三ツ寺I遺跡で認められる(註2)。清水内遺跡では支柱の間に三角形状の分割材を立て並べ(郡山市埋蔵文化財調査事業団1999)、三ツ寺I遺跡では支柱の間に枝材や板材を立て並べおり(群馬県埋蔵文化財調査事業団1988)、八幡・伏石地区のSA11170の構造と共通する。

「布掘り底面から支柱掘方を掘り下げる」塀跡は、古墳時代前期の北関東で栃木県氏家町四斗蒔遺跡(4世紀)に認められ、福島県では5世紀代から出現することが指摘されている(丹治1998)。南関東以西では古墳時代前~中期の類例が確認できることから、現状ではその系譜を4世紀に事例のある北関東に求めたい。

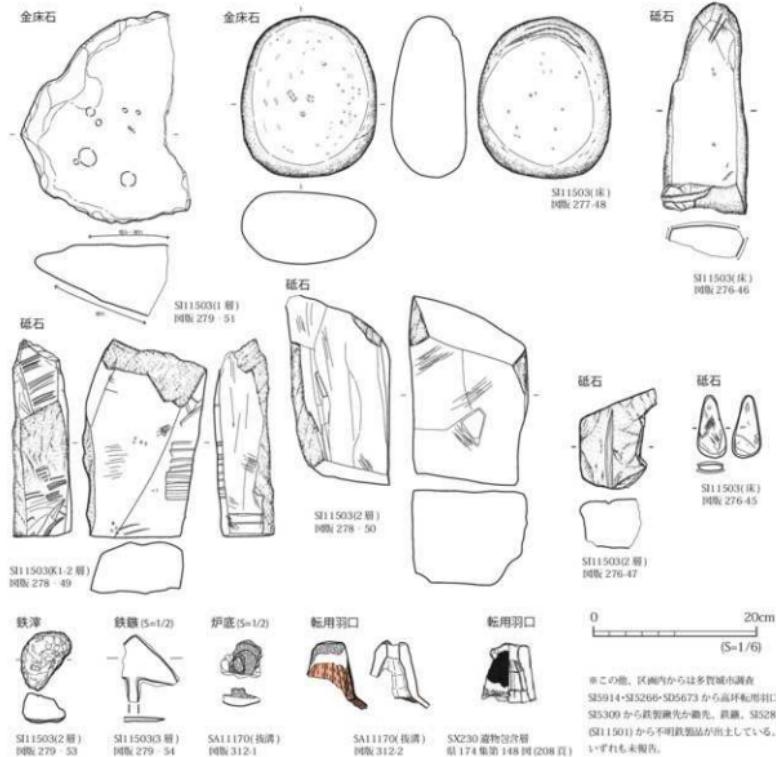
一方、材木塀は柏市呼辱遺跡(4世紀)、茨城県石下町国生本屋敷遺跡(4世紀)、栗原市伊治城跡・入の沢遺跡(4世紀)、登米市佐沼城跡(4世紀)と、中期後半の奥州市中平入遺跡(5世紀)で確認されていることから、前期後半には既に材木塀・溝による区画施設の構成は宮城県を北限として導入され(宮城県教委2016c)、中期後半段階で岩手県内陸南部まで達している。

以上の事例は、東北地方では「布掘り底面から支柱掘方を掘り下げる」塀は材木塀より出現が遅く、中期前半に北関東から東北地方へ伝播したことを窺わせる。塀・溝による区画施設が一般的に豪族居館に伴うものであるとすれば、塀の構築技術が豪族による政治的動向によってもたらされたとみるべ

きであろう。

(3) 壓穴鍛冶遺構について

これまでの調査で、区画の内側に位置するSI5266・5914竪穴住居跡とSX230遺物包含層から高環転用羽口が出土し、SI5266・5914竪穴住居跡では鍛造剝片が確認されている。こうしたことから区画内で鍛冶が行われていたと考えられている（宮城県教委1994b）。今回の調査では、区画内に位置するSI11503竪穴住居跡から鉄滓・鉄鍔・金床石・砥石が出土したことから、存在が指摘されていた鍛冶工房を確認することができた。また、SI11501では床面に焼面が2ヶ所認められ、鉄製品が出土していることから、同様に鍛冶を行っていたと考えられる。このほか、SA11170崩壊の抜取溝から炉底と羽口が出土している（図版693）。羽口はこれまでに区画内から5点出土しており、いずれも高環転用羽口である。



図版693 八幡・伏石地区出土の鉄製品・鍛冶関連遺物

SI11503では鍛冶炉と考えられる炉を2基確認した。1基は炭化物の量が多く、もう1基のそばから金床石が出土している。鍛冶炉が2基以上ある場合、高温で鍛錬鍛治から精錬鍛治に対応する炉と、それ以降の工程に用いられる炉に使い分けされていた（村上2007）。SI11503の調査では鍛造剥片の収集と金属学的分析をしていないため断言できないが、2基の炉はそうした工程での使い分けの可能性を考えられる。また、2基の鍛冶炉は隣接しており、住居中央のやや北西側に工人が座れば一連の工程がこなせる位置にある。鍛冶炉の焼面は床面で確認されたことから、関東地方で弥生時代から発展した掘り込みを持つ地下式鍛冶炉（村上前掲）と考えられる。さらに、SI11503は出土した鍛冶関連遺物の砥石の量と種類が豊富であることが特徴である（図版693）。砥石は石材の種類がすべて異なり、荒砥・中砥・仕上げ砥（花田2004）で工程ごとに使い分けていたと考えられる。

ところで、関東地方の古墳時代鍛冶工房は、内山敏行氏によって茨城県森戸遺跡を典型とする森戸類型<住居兼鍛冶工房>と、東京都中田遺跡を典型とする中田類型<専用鍛冶工房>に分けられている（内山1998）。内山氏によると、古墳時代中期以前は森戸類型<住居兼鍛冶工房>が主体で、1) 竪穴は中・大型で床面積の半分を居住空間とする、2) 生活用・鍛冶用で貯蔵穴を複数持つ、3) 鍛冶炉と通常の炉かカマドを持つ、4) 高環転用羽口の使用など施設・道具の専用性が低いなどの点が特徴とされる。

こうした指摘を踏まえると、SI11503は鍛冶炉などの作業空間が住居の北半分に集中すること、貯蔵穴を複数有し、砥石など鍛冶道具をK2に入れたこと、出土遺物は量・器種ともに多く、甕の外間に煤が付着するなど生活した痕跡が認められること、炉は4ヶ所あり、炭化物の排出量が少ない2ヶ所が通常の炉であったということから、森戸類型と考えられる。また、SI11501竪穴住居跡は炉が2ヶ所であること、SI11503の北東側にあるSI5266は、鍛造剥片が出土したことからみて森戸類型であったとみられる。

（4）東北地方の古墳時代中期竪穴鍛冶遺構

古墳時代中期の東北地方では、これまでの奥州市中平入遺跡と、福島県玉川村辰巳城遺跡、いわき市菅保B・折返A遺跡、郡山市清水内遺跡、永作遺跡、南山田遺跡、正直A遺跡、白河市三森遺跡で鍛冶工房が確認され、仙台市南小泉遺跡では鍛冶関連遺物が出土している（註3）。確認された鍛冶工房の多くが福島県中通りに位置し、郡山市に集中する傾向が窺える（表82）。

中期前葉以前の竪穴鍛冶遺構は、山王遺跡八幡・伏石地区のほか、福島県中通りの清水内遺跡や三森遺跡、福島県浜通りの菅保B・折返A遺跡で確認されており、本遺跡の例は最北に位置付けられる。また、菅保B・折返A遺跡では古墳時代前期中葉の二重構造と竪穴住居から鍛冶関連遺物（鉄滓・金床石）が出土しており、同時期には南東北の一部に鍛冶技術がもたらされていたと考えられる。

清水内遺跡と三森遺跡で確認された竪穴鍛冶遺構は森戸類型が主体で、わずかに中田類型（清水内遺跡8区13号住居・三森遺跡5号住居）が伴うとされる（村上前掲）。八幡・伏石地区的SI11501・11503と清水内遺跡の竪穴鍛冶遺構は森戸類型に属し、両者は鍛冶炉と通常の炉が両方あること、通常の炉が住居の北側に位置すること、貯蔵穴を2基以上有し住居の隅に配置すること、出土遺物が多

遺跡名 (市町村)	遺跡名 (市町村)	時期	分類	平面面積(m ²)		方向	鍛冶炉		炉・カマド	床	支柱	鉄窓穴 数(個数)	周溝	鍛冶関連遺物	文献			
				平面形 (長辺×短辺)	面積 (m ²)		位置	廻り込み 形態										
三森遺跡 (白河市)	1号住居	5c 前葉	森戸 8.5 8.3	正方形	70.5	N-E-W-E	I	中央北	?	鍛冶炉付 中央北	地山	0	1(方)	北西隅 北辺張出	○ 鉄津	白河市 1997		
	4号住居	5c 前葉	森戸 13 12.4	正方形	161.2	N-E-W-E	I	中央か 北西隅	?	炉	中央か 北西隅	4?	1(方)	南西隅張出	○ 高环軸用羽口、鉄津			
	5号住居	(Se中型)	中田 13.5 10	長方形	135	S-Z-W	12	全体に 分離	?	炉	全体に 分離	10.1	1	南辺張出	○ 高环軸用羽口、鉄津			
	10号住居	5c 中~後葉	森戸 8.0 7.6	長方形	60.8	S-E-W	?	-	-	カマド	南辺東 隅張出	4	1(方)	南東隅 (立下型)	-一部 鉄津			
	14号住居	5c 中~後葉	森戸 8.1 8.0	正方形	64.8	N-Z-E	I	中央北	○	鍛冶炉付 中央北	地山	8	1(方)	南辺張出	○ 鉄津			
	20号住居	5c 中~後葉	森戸 8.5 8.3	正方形	70.5	N-E-W-E	I	中央北	?	カマド	近辺中 央	6	1(方)	南辺張出	○ 鉄津、鉄輪先			
	21号住居	5c 前葉	森戸 4.9 4.2	正方形	20.5	N-E-W	?	-	-	?	地山	2	1(横P)	東辺中央	○ 鉄津			
	26号住居	5c 前葉	?	4.5+ 1.7+	?	7.6+	N-W-E	?	-	-	?	-	-	-	○ 高环軸用羽口、鉄津			
	33号住居	5c 中~後葉	中田 4.0 3.2	長方形	12.8	S-H-E	?	-	-	?	-	3+	X	-	×	鉄津		
	18号住居	5c 後葉	森戸 5.5 5.5	正方形	30.3	N-Z-W	I	中央北	?	カマド	南辺東 隅張出	地山	3+	1 (横P)	南北隅 (カマド)	-一部 専用羽口、鍛冶金、 鉄津		
福島 (清水内遺跡 (郡山市))	9号住居	5c 中型	森戸 4.8 4.8	正方形	23.0	S-Z-W	I	中央	○	炉	中央北 隅張出	4	2(方)	北西隅高 窓	○ 高环軸用羽口、鉄津	郡山市理文 1997		
	13号住居	(Se中型) (郡山)	森戸 4.9 3.3	長方形	26.0	S-Z-W	I	中央	X	?	-	地山	4	2 (横P)	南西隅 窓	○ 高环軸用羽口、鉄津	郡山市理文 1999	
	7号住居	(Se中型) (郡山)	?	4.5 4.5	正方形	20.2	N-Z-E	?	-	-	?	地山	0	1(方)	西壁南側	○ 高环軸用羽口、鉄津	郡山市理文 1999	
	15号住居	(Se中型) (郡山)	森戸 4.5 4.3	正方形	19.3	N-E-W	I	中央北	○?	鍛冶炉付 中央北	鍋底	4	2	北西隅 (窓・門・西壁)	○ 高环軸用羽口、鍛冶金 片、窓、鍵石	郡山市理文 1999		
	13号住居	(Se中型) (郡山)	中田 4.4 3.4	長方形	14.9	N-E-W-E	I	南西?	?	?	?	0	1(方)	東辺中央	○ 鍛冶片	郡山市理文 1999		
	無号住居 (9号)	5c 前葉	森戸 8.5 8.0	長方形	68.0	N-Z-W	I	中央	○	炉	中央北 隅張出	4	4 (横P)	南西隅 北辺中央 南東隅	× 高环軸用羽口、鉄津 片	郡山市理文 1999		
	19号住居	(9号)	5c 中型	?	4.1 4.0	正方形	16.4	S-N-W	?	-	-	?	-	?	専用羽口	× 高环軸用羽口、鍛冶片	郡山市理文 1999	
	19号住居	5c 後葉	森戸 8.2 7.5	長方形	61.5	N-Z-W	I	中央	○ (砂質土 入持?)	カマド	北西隅 中央	地山?	4	X	-	専用羽口	郡山市教委 1987	
	24号住居	5c 後葉	森戸 5.4 4.9	長方形	26.5	S-Z-W	?	-	-	カマド	近辺	地山	4	1(方)	南辺中央	○	郡山市教委 1987	
	24号住居	(郡山)	森戸 6.7 6.5	正方形	43.6	N-E-W-E	I	中央北	○ (砂質土 入持?)	カマド	北東隅	地山	4	1 (横P)	南東隅	× 専用羽口、鉄津、鍵 石	郡山市教委 1990	
永作遺跡 (郡山市)	69号住居	5c 後葉	森戸 4.7 3.7	長方形	17.4	?	I	中央	○	カマド	南辺	地山	2	1 (横P)	南東隅	× 金石灰、鍛冶片	郡山市教委 1990	
	33号住居	5c 後葉 6c 前	森戸 9.6 9.5	正方形	91.2	N-Z-W	I	中央	○ (底面 土質持)	カマド	南辺 中央	地山+	5+	1(方)	南辺中央	○ 高环軸用羽口、鉄津	福島県教委 1994	
	37号住居	5c 後葉 6c 前	森戸 4.8 3.8	長方形	18.2	S-E-W	I	中央	○	カマド	北辺 中央	地山?	2	1 (横P)	北西隅 中央	○ 高环軸用羽口、鉄津	福島県教委 1994	
	1号 蔵	5c 後葉 6c 前	?	2.8 2.4	楕円形	6.7	-	I	北壁	○	?	地山?	0	X	-	専用羽口、鍛冶片、 窓	本著	
	4号城跡 (郡山市)	19号住居	5c 後葉 6c 前	森戸 7.8 7.9	正方形	62.4	S-E-W	I	中央西	○	カマド	北辺 中央	地山+	4	2(方)	北東隅 南西隅	○ 高环軸用羽口、鍛冶片	郡山市理文 1991
	山王・ 宮城	SI11501	5c 前葉	森戸 6.6 6.9	正方形	45.5	S-E-W	I	中央	?	炉	中央北	4?	X	-	○ 不明鉄製品	本著	
	SI11503	5c 前葉	森戸 7.3 6.3	正方形	46+	N-E-W	Z	中央北	?	炉	中央北	4	2	北西隅 南西隅	× 鉄津、鉄津、鍵石	本著		
	岩手	中平内遺跡 (郡山市) 住居	105号	5c 後葉	森戸 7+ 6+	?	42+	N-E-W	?	中央北?	?	炉	中央?	?	-	-	× 鉄津、如鉄、鍵石、 金石灰?	岩手理文 2000
	中朝前葉	(5世紀前葉)	5c 前葉	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	-	?	?	?	?

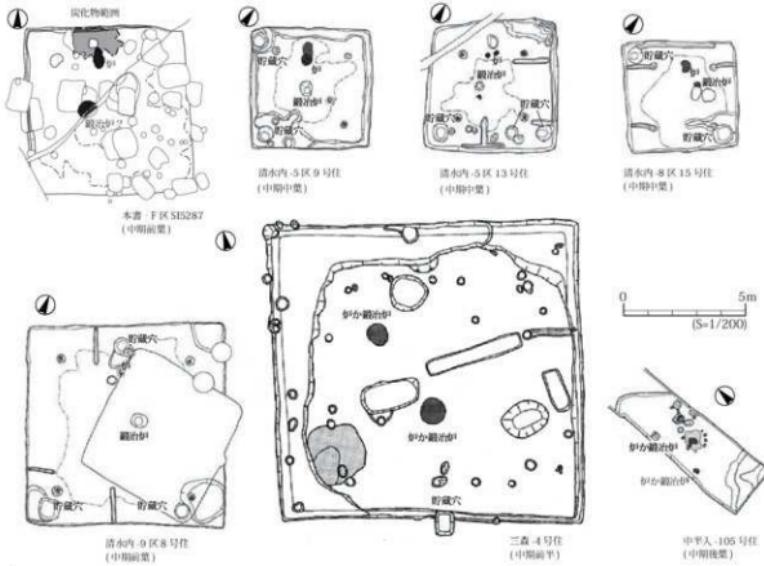
表82 東北地方の竪穴鍛冶遺構

く生活の痕跡が認められることなど共通性が窺える（図版694）。

SI11501の2ヶ所の焼面は鍛冶炉と通常の炉である可能性が考えられ、鍛冶炉と通常の炉を1つずつ持つ例は清水内遺跡・三森遺跡の竪穴鍛冶遺構と共に通する。一方、SI11503のように森戸類型で鍛冶炉を複数有する例は東北地方で認められず²、栃木県壬生町新郭遺跡SI34（5世紀前半）、上三川町殿山遺跡KT-16（5世紀）、茨城県那珂町森戸遺跡70号住居跡（5世紀）、千葉県四街道市小屋ノ内遺跡SI-084（5世紀）など関東地方に類例が求められる。なお、これまでのところ八幡・伏石地区では、中田類型=専用鍛冶工房は確認されていない。

以上の検討から、八幡・伏石地区の竪穴鍛冶遺構は森戸類型を主体とする福島県中通り～関東地方の傾向と共に通性が見出せる。つまり、鍛冶技術の導入には関東地方の強い影響があったことが考えられ、5世紀前葉には仙台平野北西部まで到達していたと考えられる。

森戸類型（鍛冶炉1・通常炉1）



森戸類型（鍛冶炉2～3・通常炉1）



中田類型



森戸類型（鍛冶炉・通常炉併用？）



図版694 北関東・東北地方における古墳時代中期の竪穴鍛冶遺構

(5) 竪穴鍛冶遺構と区画施設の関係

古墳時代中期の東北地方で、塀・溝による区画施設と竪穴鍛冶遺構の両方が確認された遺跡は、山王遺跡八幡・伏石地区と奥州市中半入遺跡、郡山市清水内遺跡、白河市三森遺跡である。竪穴鍛冶遺構の位置は山王遺跡八幡・伏石地区が区画施設内部、中半入遺跡、清水内遺跡、三森遺跡は区画施設の外側に位置する。一方、郡山市永作遺跡、南山田遺跡、正直A遺跡、玉川村辰巳城遺跡は竪穴鍛冶遺構のみで、区画施設は確認されていない。

時期別にみると、中期前葉の山王遺跡八幡地区、清水内遺跡、三森遺跡は区画施設と竪穴鍛冶遺構の両方が認められる。うち清水内遺跡、三森遺跡のように竪穴鍛冶遺構が区画施設の外側に位置する事例は、栃木県宇都宮市権現山遺跡、上三川町殿山遺跡、千葉県市原市潤井戸西山遺跡に認められる。豪族居館の中核を区画内とみれば、竪穴鍛冶遺構は生産活動域として区画に隣接した場所に設けられたと考えられる。これらのことから、八幡・伏石地区的居館では竪穴鍛冶遺構の確認されたF・G区に隣接した別区画に豪族の居住域が想定できる。一方で、5世紀前葉までの例で鍛冶遺構を含む生産活動域を区画する事例は認められず、八幡・伏石地区は特異的な様相を示している。

中期中～後葉には、竪穴鍛冶遺構が確認された福島県の永作遺跡、南山田遺跡、正直A遺跡、辰巳城遺跡は区画施設がなく、岩手県中半入遺跡のみ区画施設が伴う。福島県の例をみると、永作遺跡と南山田遺跡は台地上に立地する一連の遺跡と考えられ、両遺跡合わせて100棟以上の竪穴住居跡があり、南山田遺跡では数十個体分の須恵器が出土した（郡山市教委1990）。正直A遺跡は段丘上に立地し、57棟の竪穴住居跡が確認されている（福島県教委1994）。一辺10mを超える超大型竪穴住居跡（SI17・54・78）の存在から豪族居館とする見解のほか、生産・祭祀施設とその従事者の居住域という見解（菊池2010）がある。辰巳城遺跡は阿武隈川右岸に立地し、竪穴住居跡7棟が確認されている（福島県教委1991）。その中には一辺7m以上の大型竪穴住居2棟（SI13・19）が含まれ、他の住居から須恵器台付壺（TK216）1点出土している。

こうした4遺跡のうち、永作遺跡、南山田遺跡、正直A遺跡は、豪族居館とは認められないまでも、大型竪穴住居や須恵器から在地有力者の存在が考えられる。一方、辰巳城遺跡は大部分が未調査であるが、3遺跡と比較すると一般集落に近い。

関東地方では、既に弥生時代終末期から古墳前期にかけて高温操業の鍛冶が可能となっており（村上2007）、中期前葉に鍛冶関連遺構が増加するなか、千葉市鎌取遺跡、栃木県壬生町新郭遺跡など、中・小規模の集落で竪穴鍛冶遺構が確認されている（千葉県教育振興財団2012・栃木県文化振興事業団1998・とちぎ生涯学習文化財団2007など）。豪族と関係が認められる竪穴鍛冶遺構は少なく、豪族居館周辺で確認された例は、千葉県市原市潤井戸西山遺跡、群馬県群馬町三ツ寺I遺跡、宇都宮市権現山遺跡、上三川町殿山遺跡のみである。こうしたあり方から、集落内に一般的な需要に応じた「村抱え工人」（大塚1956）がおり、鍛冶技術が集落まで普及していたと考えられている（内山1998）。

これまでの検討から東北地方の区画施設と鍛冶技術の関係をまとめると、中期前葉段階で竪穴鍛冶遺構は山王遺跡八幡・伏石地区を北限とした範囲で認められ、区画を有する豪族居館に伴ったと考えられる。これは、鍛冶技術が豪族の政治的動向に密接したものであったことを窺わせる。中期中～後

葉になると、そうした動向は北東北へ波及し、中半入遺跡まで到達したとみられる（註4）。一方、同時期の南東北では、永作遺跡、南山田遺跡、正直A遺跡といった在地有力者の存在を想定できる集落や、より一般集落に近い辰巳城遺跡など、区画を持たない集落でも鍛冶技術の保有が認められるようになる。こうした状況は南東北における鍛冶技術の保有が、関東地方の様相に近づいたものとみておきたい。

（6）出土遺物からみた区画内の生産活動

豎穴住居群の北側を区画していたSD777河川に形成されたSX230遺物包含層から、多様な木製品・骨角製品が出土した（図版718）。その中には一本鎬未成品や骨角製品素材などが含まれることから、区画内では鍛冶のみならず、農耕・漁撈・狩猟などの生業や祭祀に関わるさまざまな道具が生産されていたと考えられる（宮城県教委1994b、表83）。

SX230出土遺物の中には先端に鉄製刃先の装着部がある木製膝柄又鎬がある（宮城県教委前掲）。また、SI5309豎穴住居跡からは鉄製の歛先もしくは鎬先と鉄鎌（多賀城市教委1992b）、SI11503は鉄鎌が出土している。さらに骨角製品では、骨鎌や刀子把に金属器による加工痕から切断や表面加工に鉄製工具を用いており（宮城県教委前掲・藤沢2002）、骨角製品の生産には鉄製品が不可分だったと考えられる。

したがって、区画内の豎穴鍛冶遺構では農具・漁撈・狩猟という生業で用いた道具に装着する鉄製部品や骨角製品生産のための鉄製工具の再生産が行われたと考えることができる。鍛冶は生産活動に組み込まれ、生業を前提として行われたとみることができよう。中期前葉では、鍛冶技術の保持は東北地方で稀少であることから、鉄製品の生産能力は一部の豪族が掌握していたと考えられる。こうしたことから、八幡・伏石地区の豪族居館が保有する技術力が周辺より優位で、地域の生産拠点としての性格を有していたことを指摘しておきたい。各集落への分配には、鉄製農工具のほか、木製品や骨角製品なども含まれていたと推察される。なお、SX230遺物包含層からは、鹿角製剣把装具や琴柱形角製品といった豪族がもつ威儀具が出土している。鹿角製剣把装具をはじめ刀子把装具や刀子把は、完成品に刀身などの鉄製品が伴うが、これまでのところ刀剣生産を示す鍛冶炉は確認できない（註5）。

（7）古墳時代中期の八幡・伏石地区的歴史的評価

これまでの検討から、八幡・伏石地区の区画施設で囲まれた一画は、生産活動域を含む豪族居館の可能性が考えられる。特に塀の構造は同じ七北田川下流域の鴻ノ巣遺跡と共に、福島県中通り・会津地方や北関東に類例が認められる。また、豎穴鍛冶遺構は、古墳時代中期前葉の例としては東北地方最北である。その構造は福島県中通りと共に、ともに関東地方の技術系譜に立脚することから、八幡・伏石地区的豪族居館は福島県中通りや北関東の豪族の政治的動向と関係したとみられる。

八幡・伏石地区の区画施設内側では、鍛冶のほか木製品や骨角製品など生業や祭祀にかかわる道具がつくられた。この一画は、東北や関東地方の事例から豪族の居住域（中柵）ではないものの、それに付属した施設であり、居館の主は鍛冶技術だけではなく木・骨角製品など様々な手工業生産を掌握

大別	中別	細別	種別
土製品	陶器・漆器(漆器)		ミニチュア (2) 高井田型引き口 (1・2), 手底 (1)
	漆器		漆柄文鏡 (2), 一本鉢 (2), 一本鉢4点成 (2)
	漆器		漆灰木製品 (2)
木製品	容器	柳安形容器	動物 (2)
		吉備品	弓 (2), 鞍 (2), 不可逆編織 (2)
	船飾具		黒漆錦襷 (2), 赤黒漆錦 (2)
	琴頭具		衝型舟形 (2)
鐵製品	農具・木工具		鍛先付鍬先 (4)
	武具・骨頭具		鐵鎗 (4)
	その他		不明鉄製品 (4)
鐵鉱開拓	廢棄物		鉄滓 (1・2), 鉄造片 (2)
骨角製品	工具		鹿角削刀子柄 (2), 鹿角削刀子柄未成品 (2), ニホンジカ中足骨製作器 (2)
	道具		ニホンジカ中足骨製作骨突 (2), 鹿角骨やす (2)
	武具・骨頭具		ニホンジカ中手・中足骨製作骨 (2), 鹿角製作 (2), 鹿角製作 (2)
	船飾具		鹿角製作工具 (2)
	琴頭具		琴柱用角製品 (2), ニホンジカ頭甲骨削骨 (2)
	その他		不明骨製品 (2), 鹿角素材 (2), ニホンジカ骨素材 (2)
石製品	船飾具		冠玉 (2・3), 石製鏡成品 (1・2・3), 有孔円盤 (1・2・3), 扇玉 (2), 扇玉未成品 (2), 鏡鉢 (2)
	工具		砥石 (1・2・3), 錐削石 (2), 四石 (2)
自然遺物	動物遺存体	哺乳類 鳥類 両生類 爬虫類 魚類 貝類 植物	ニホンジカ (全体), イノシシ, イヌ, キヌミ ガミカモノ カエル類 ヘビ目 サケ科, ウグイ科, 「鹹水」エイ目: カツオ, マアジ, マフグ科, タイ科, ニシン科, 「成仮過程淡水域」マイワシ, スズキ, クロダイ, 「汽水」ボラ属, 「純海水」コイ科, ドジョウ科 マガロ 「一枚貝類」内向水槽: マガロ, アサギ, カマトシジミ, 「一枚貝類」淡水槽: イシガイ科 ムラサキワニ科 イモ類 (根茎), クリ科植物, コムギ, アサ, メロン アサガホ クリ, オニグリゴミ メバチ, ヒヨウタガリ科卵, ナス属, サンショウ, カナムグラ, メロン仲間

(1): 本遺跡遺物、(2): 市 161 集落遺物、(3): 市 45 集落遺物、(4): 市 30 集落遺物

表83 古墳時代中期前葉の豪族居館から出土した各種遺物

していたことを示唆する。

また、本遺跡の西に位置する鴻ノ巣遺跡では同時期の集落が確認されており、ともに特殊な構造の縱板塀を共有することから両集落の関係性が窺える。しかし、両者を比較すると、鴻ノ巣には鍛冶関連遺構や遺物、威儀具の出土例は認められないことから、八幡・伏石地区の階層的優位性が考えられる。八幡・伏石地区の豪族居館は中期前葉に洪水で廃絶する。一方、鴻ノ巣遺跡の集落は中期を通して存続した（仙台市教委2004・2012）。こうした両遺跡の関係性については、七北田川下流域の動向を踏まえて本章第12節で改めて検討したい。

註

註1　列挙した遺跡のほか、南相馬市桶師屋遺跡の平成28年度調査で、塀と溝で区画された竪穴住居群が確認されている（現地説明会資料参照）。

註2　栃木県成沢遺跡では、堀南東辺の一部で布掘りの掘方が認められ、横板構造の可能性が指摘されている（栃木県教委1993）。しかし、同遺跡の事例は明確な布掘り掘方が認められず、幅15～20cm・深さも10cm前後と他の事例と較べて残りが悪く、2段階の掘り下げが確認できない。こうしたことから、成沢遺跡は類例から外している。

註3　このほか、平成28年度に調査された米沢市元立北遺跡（山形県埋文センター年報・平成28年度）と南相馬市桶師屋遺跡で、鍛冶関連遺物の出土が知られる（福島県文化振興財団2017 桶師屋遺跡現地説明会資料）。とりわけ桶師屋遺跡では八幡・伏石地区と同じく塀・溝による区画施設も確認されており、報告書の刊行が待たれる。

註4 中半入遺跡の南2kmには、5世紀第3四半期の築造の角塚古墳（前方後円墳）があり（藤沢1998・朴沢2001）、その被葬者と中半入遺跡との関係だけでなく、関東地方との関係性も指摘されている（岩手県埋文センター2002）。中半入遺跡・角塚古墳は中期後半における古墳分布域（古墳文化圏）の北端に位置することから（藤沢2015など）、北関東と関係する鍛冶技術を有する集団が同地域の豪族と繋がりをもった、あるいは同地域まで進出した可能性が考えられる。なお、こうした中期の北関東・東北地方の動向は渡来系遺物の分布（亀田2003・坂野2005・草野2013）とおおむね共通しており、渡来系遺物の分布から郡山市や仙台市など、飛び地的に拠点を押さえながら広がったと考えられている（亀田2003）。豪族居館・鍛冶技術・渡来系遺物の関係は今後の検討課題である。

註5 古墳時代前期後半から出現した鹿角製刀装具のうち、本遺跡例も含む初期のものについては、形態と素材取得技術から遺跡ごとに生産され、海浜部に立地する集落からの出土例が多いと指摘されている（山田2016）。

9. 古墳時代後期の八幡・伏石地区

中期前葉の豪族居館廃絶後、八幡・伏石地区では後期後半（住社～栗圃式期）になって再び集落が営まれる。集落は、中期前葉の豪族居館とはSD777河川跡埋没後に同位置を流れたSD100河川跡を隔てた反対側の北側に占地している。過去の調査で竪穴住居40棟以上を有し、北を旧砂押川、南をSD100・5093河川跡に挟まれた東西400m・南北60～120mの範囲に広がることがわかっている（図版695）（宮城県教委1997・2001b・2009ほか）。

今回の調査では、竪穴住居・井戸に加えて、居住域を囲む溝と材木塀を確認した。また、集落の中央を流れるSD2050B河川跡と、居住域南側の境界となるSD100河川跡から多様な遺物が出土した。こうした成果を含めると、古墳時代後期の八幡地区には、竪穴住居跡45棟（可能性があるものを含める）と165棟）のほか井戸や土坑などがあり、それらが材木塀と区画溝で囲まれた大集落が形成されたことが判明した。また、集落内から土器・土製品・石製品のほか、河川跡から骨角製品・木製品・動物遺体・植物遺体といった通常の遺跡では残りにくい生業にかかわる多くの遺物が出土している（図版720～722）。その中には、仏教関連遺物（柄香炉）、関東系土師器、北方系土師器など遠隔地と交流したことを示す遺物も認められた。こうしたことから、6世紀末～7世紀中頃の八幡地区には、遠距離交流を行った宮城県域を代表する拠点的集落が存在したと考えられる（宮城県教委2001b・2009、村田2002・柳澤2010bほか）。以下、これまでの調査成果を含めて集落の様相を検討したい。

（1）集落の区画

区画施設としてSD2208・2524・2563・6517区画溝跡が報告されており（宮城県教委1994c・2009）、集落は東西400m、南北60～130mの範囲が溝で囲まれ、その内部を河川が流れていると考えられた（宮城県教委2001b・2009）。今回の調査では、区画溝跡と材木塀を確認した。このため、両者がセットとなって居住域の中心部を囲んでおり、その西側の状況を明確にできた。したがって、本項では改めて区画施設を整理したのち、集落の変遷を検討する。その際、居住域の中央をSD2050B河川が流れたことから、SD2050Bの西側と東側に分けて述べることとする。

A. SD2050B 西側の区画

SD2050B西側には、2つの南北方向の区画施設が存在する。区画施設の一つはSD2050Bから約90m離れて最も西側に位置するSD555・585・589・637・669・674・2563・7844・7845・7881区画溝跡とSA7784材木堀跡で構成される。区画の平面形は西側へ弯曲した形態である。材木堀は区画溝からみて竪穴住居側に設けられる。また、材木堀は残りが悪いものの中央部から南部は区画溝内側に並行するが、北部（SD2563部分）は区画溝が北へ、材木堀は東へ向かい両者が離れる。

もう一つの区画はSD2050Bから約45m西側に位置し、SD503・2524・2525・7848区画溝跡とSA7621材木堀跡で構成される（図版695）。前述した最も西側にある区画より約35m内側にあり、直線的でSD2525とSD7848の境で直角に折れる。並行する材木堀は北西側のみでしか確認していないが、全域で区画溝と並行したとみられる。

SD7614・7848とSA7621は同時期の竪穴住居・土坑に壊されていることから、区画廃絶後も集落は存続する。一方、SD7844・7845・7881には他の遺構と重複関係がなく、居住域が最も広がった段階の区画と判断でき、2つの区画の年代は異なっていたと考えられる。つまり、SD2050B西側の区画は、竪穴住居や土坑との重複関係があるSD503・2524・2525・7848区画溝跡とSA7621材木堀跡から、そうした遺構と重複しないSD555・585・589・637・669・674・2563・7844・7845・7881区画溝跡とSA7784材木堀跡へ変遷しており、居住域の境界が西側に移動したと考えられる。

B. SD2050B 東側の区画

SD2050B東側でも、西側と同じく南北方向に延びる2本の区画溝（SD2208・6517）が確認されており（宮城県教委2009）、2つの区画が存在する（図版695）。SD6517区画溝跡は、竪穴住居が密集する居住域の最も東側に位置し、SD2050Bから最大で約105m離れ、平面的には東側へ緩やかに弯曲する。並行する材木堀は確認されておらず、SD6517の東側は約120m離れて館前地区的竪穴住居跡3棟が確認されたことから、居住域の中心はSD6517の東側へ広がらないと判断できる。一方、SD2208区画溝跡はSD2050Bから約55m離れており、SD6517より50mほど西に位置する。SD2208はSD6517と比較して直線的に延びて南側で直角に折れる。西側にはSA2290材木堀跡が並行しており、ともに同時期のSK2260に壊されることから、SD2208とSA2290は一体の区画施設であったと考えられる。

SD2208・SA2290が同時期のSK2260、SI6767竪穴住居跡に壊されていることから、区画の廃絶後も集落が存続していたことがわかる。一方のSD6517区画溝は重複関係がないことから、SD2208・SA2290→SD6517へ変遷しており、居住域の境界は東側に移動したと考えられる。こうした区画の拡大は、SD2050B西側の変遷と共通する。

C. 集落の区画施設について

SD2050Bの東西は、方形を基調とした直線的な区画から不整形の弯曲した区画への変遷、居住域の拡大という点で共通する。そこで、西側のSD503・2524・2525・SD7848区画溝跡・SA7621材木堀跡と、東側のSD2208区画溝跡・SA2290材木堀跡を区画Aとし、西側のSD555・585・589・637・669・674・2563・7844・7845・7881区画溝跡・SA7784材木堀跡と、東側のSD6517区画溝跡を



図版695 山王道路における古墳時代後期の集落

区画Bとする（図版695）。規模は区画溝同士で測ると、区画Aが東西129m・南北116m以上で、区画Bが東西207m・南北128m以上である。

区画Aを構成する溝・材木塀は、SD2050B河川から約40～65m離れており、SD2050B河川が区画のほぼ中央に位置する。北西隅と南西隅で屈折することから、区画の平面形態は方形を志向していたと考えられる。一方、区画Bは平面形態がやや丸みを帯びる。これまでの検討から、区画A→区画Bへ変遷することから、後者の時期に居住域の中心が最も拡大した。区画Bの溝・材木塀をみると、西側では溝が2・3度、材木塀は1度改修されたが、東側は改修された痕跡が認められない。

ところで、同時期の拠点集落でこうした材木塀・溝による方形の区画をもつのは、白河市舟田中道遺跡（白河市教委2002）があるのみで、他に類例がない。この2遺跡の形態は、東北地方の古墳時代後期集落の中では特異的である。

（2）竪穴住居跡

竪穴住居跡は、今回の調査で45棟（可能性があるものを含めると93棟）確認し、これまでの調査成果を併せて八幡・伏石・館前・中谷地地区で可能性があるものを含めて172棟認められる（表84・85）。これらのうち、館前地区の3棟、中谷地地区の4棟を除くと165棟はSD2050B河川跡両岸に集中し、区画Bの内側に位置する。こうしたことから、区画A・Bが集落の中心と考えられる。区内の竪穴住居は、重複関係がないか、重複する中で最も新しい住居をカウントすると63棟あり、最大60棟前後が同時に機能していたとみられる。

ここでは、山王・市川橋遺跡で確認した竪穴住居跡172棟のうち、栗廻式期と認定できる竪穴住居跡93棟を対象に住居規模とカマド付設置位置を検討した。竪穴住居跡はどれも遺存状態が悪く、構造について不明な点も多いが、これまでの調査で確認した竪穴住居跡の54%を占めることから、おおよその傾向は掴むことができよう。

A. カマド位置

カマド位置を図版696で示した。計測した竪穴住居の方向は真北ではないが、偏りが真北（0°）～東西45°までの範囲のうち真北に近いものを北辺とし、それに対応して東西南辺と表記している。竪穴住居93棟のうち、カマドの位置が判断できるものは29棟である。カマド付設場所は北辺中央が18棟（62%）と最も多く、北辺東側1棟を併せると約65%を占める。北辺中央に次いで多い付設場所は東辺中央の6棟で20%、東辺北側1棟を併せると24%を占める。この結果からみて、カマドの位置は北辺中央が基本であったと考えられる。

B. 規模

認定した竪穴住居跡のうち、規模のわかるものの長辺と短辺をグラフに示した（図版696）。本遺跡の場合、住居壁の残りが悪いためデータは床面積に近い値を示すと考えられる。グラフをみると、長辺が5.9m以上と5.5m以下にまとまりが認められる。前者は8棟で（SI491・824・2216・2531・6760・7219・7392・7817）（図版697）、これらを大型住居、一辺5.5m以下を中・小型住居と呼称する。大型住居の中でもSI7392は一辺が9.0m前後と隔絶しており、超大型といえる。大型住居の割

調査区	(A) 記述した堅穴住跡											(B) 可能性のある堅穴住跡										
	No.	位置	遺構名	認定根拠	規模 (m)	区分	カマド	本体	埋置	貯蔵	内側	位置	遺構名	規模 (m)	カマド	本体	埋置	貯蔵	内側	位置	備考	
1. 北側	SFT098	★			3.5	2.0+	—	北辺東側	内側	長?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT202 2.9 2.8	
2.	SFT171	★			3.0	3.0	中型	—	—	—	4 △	0	—	—	SFT211 3.8 2.5+							
3.	SFT172	▲			3.6	3.6	小型	北辺中央	立	掘出	×	4 △	0	—	SFT217 3.6 2.2							
4.	SFT174	▲			3.2	2.9	中型	—	—	—	0	△□	0	—	SFT223 4.7 4.6							
5.	SFT206	▲	SFT208より古	2.9 2.8	中型	北辺中央	—	内側	長	—	—	—	—	SFT224 4.1+ 3.9								
6.	SFT208	★			6.5	5.7	—	東辺中央	□	内側	×	4 △	0	—	SFT255 3.9 3.3							
7.	SFT210	▲			3.4	3.0	中型	—	—	—	☆	—	—	SFT261 5.5 4.9								
8. 内側	SFT213	▲	SFT215より古	4.3 4.1	中型	東辺中央	—	内側	長	—	—	—	—	SFT273 3.8 3.7								
9.	SFT214	▲	SFT215より古	4.2 4.3	中型	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT293 3.6 2.5								
10.	SFT215	★			5.2	4.8	中型	北辺中央	—	掘出	×	—	—	SFT416 4.3 1.0+								
11.	SFT216	▲	SFT215より古	3.2+ 0.5+	—	北辺中央	—	内側	×	—	—	—	—	SFT437 1.7+ 0.9+								
12.	SFT218	▲	SFT215より古	3.1 3.0	中型	北辺中央	—	内側	長	—	—	—	—	SFT438 2.2+ 0.6+								
13.	SFT219	★			7.4	7.0	大型	北辺中央	□○	掘出	×	4 △	△	北東隅	SFT439 0.5+ 0.9+							
14.	SFT221	★			4.2	3.5+	—	—	—	4 △	0	—	—	SFT440 1.9+ 0.5+								
L区 (木書)	SFT254	▲	SFT360より古	4.5 4.8	中型	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT776 5.3+ 3.2+								
16. 北側	SFT275	★			3.5	0.9+	—	—	—	—	—	—	—	SFT808 3.7 3.7								
17.	SFT302	▲	SFT208より古	9.3 8.9	大型	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT809 4.3 3.1								
18.	SFT720	▲	SFT210より古	2.5 2.3	中型	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT810 2.9 2.8								
19.	SFT811	★▲	SFT7102より古	4.7 4.5	中型	北辺中央	—	内側	長?	—	△	—	—	SFT813 2.1 1.3+								
20.	SFT812	▲	SFT715より古	4.4 4.1	中型	—	—	—	—	☆	—	—	—	SFT820 1.5+ 7								
21.	SFT814	▲	SFT811より古	5.3+ 4.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT821 4.0 3.5								
22.	SFT815	▲	SFT811より古	2.5 1.3+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT861 3.4 3.1								
23.	SFT816	▲	SFT715より古	3.9 3.6+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT863 5.1 2.7								
24. 内側	SFT817	★	堅造 SFT002	6.1 5.7	大型	—	—	—	—	△	—	—	—	SFT865 3.5 3.1								
25.	SFT818	▲	SFT817より古	1.7+ 0.8+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT866 3.8 3.4								
26.	SFT819	▲	SFT817より古	1.0+ 1.4+	—	南辺中央	—	内側	長?	—	—	—	—	SFT867 2.5+ 1.3+								
27.	SFT862	▲	SFT7556より古	3.9 3.9	中型	北辺中央	—	掘出	×	—	—	—	—	SFT868 3.8 2.9+								
28.	SFT864	▲	SFT7710より古	4.4 3.2	中型	東辺中央	—	掘出	×	—	—	—	—	SFT869 3.6 3.4								
29.	SFT871	▲	SFT7848より古	3.6 2.6+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT870 3.6 3.4								
30.	SFT872	▲	SFT7848より古	2.7+ 1.4+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT873 4.7 3.7+								
D区 (木書)	SFT07	★			3.4	2.7+	—	—	—	—	—	—	—	SFT076 5.7 4.5+								
32.	SFT08	▲	SFT07より古	6.0 4.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT113 3.5+ 2.2								
33.	SFT15	★			4.9+ 4.8+	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT223 1.6+ 0.8+								
34.	SFT16	★▲	SFT15より古	5.6 4.3+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT227 3.6 3.1								
35. 内側	SFT17	★			2.8 2.8	中型	—	—	—	—	—	—	—	SFT336 5.2 4.8								
36.	SFT18	★▲	SFT17より古	5.0 3.7	中型	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT337 5.0+ 4.7+								
37.	SFT19	▲	SFT17より古	5.0 4.5	中型	北辺中央	—	内側	×	—	△	—	—	SFT338 4.3+ 4.2								
38.	SFT20	▲	SFT17より古	3.3 3.7	中型	東辺中央	—	内側	×	—	—	—	—	SFT432 2.7 2.6								
39.	SFT21	▲	SFT17より古	3.9 3.3+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT874 7 7								
40.	SFT22	▲	SFT17より古	5.0 3.5+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT890 3.8 3.4+ 北辺中央								
41.	SFT21	★			4.0 3.4	—	北辺中央	立	掘出	×	4 □○	△	北東隅	SFT891 4.4 3.6								
42. 北側	SFT23	★			3.6 3.2	—	—	—	—	0	△□	0	—	SFT892 2.8+ 1.9+								
43.	SFT24	▲	SFT21+SK855	5.9 6.1	大型	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT893 2.7 ?								
44. 内側	SFT884	★			4.1 3.3	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT894 2.3+ 0.6+								
45.	SFT886	★			4.1 2.9+	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT7005 5.9+ 3.0+ 北辺中央								
D区 (木書)													46.									
46.	SFT464	★			4.0 4.0	中型	—	—	—	—	4 ○	0	—	SFT711 5.7 4.5+								
47.	SFT489	★			4.7 4.4+	—	北辺中央	立	内側	×	4 ○	0	—	SFT713 3.5+ 2.2								
48.	SFT491	★			7.6 7.4	中型	北辺中央	□	掘出	×	4 ○	1	北東隅	SFT721 3.6 2.3								
49.	SFT492	▲	SFT491より古	4.3 3.6+	—	—	—	—	—	—	○	—	—	SFT727 3.6 3.1								
50.	SFT498	★			4.0 3.8	小型	東辺北側	立	内側	×	0	0	2	北西隅 南東辺	SFT736 5.2 4.8							
51.	SFT499	★▲	SFT498より古	4.0 4.0	中型	—	—	—	—	—	4 ○	0	—	SFT737 5.0+ 4.7+								
52.	SFT533	★			2.9 2.9	中型	北辺中央	□	内側	×	0 ○	0	—	SFT738 4.3+ 4.2								
C区 (174集)	SFT560	▲	SFT533より古	5.0+ 5.0	中型	北辺中央	立	内側	×	4 ○	0	—	—	SFT742 2.7 2.6								
53.	SFT46	★			3.8 3.6+	—	—	—	—	—	0 ○	0	—	SFT743 2.7 2.6								
54. 内側	SFT48	★▲			6.0 5.6+	—	—	—	—	—	4 ○	0	—	SFT744 2.7 2.6								
55.	SFT49	★			3.0 3.0+	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT745 2.7 2.6								
56.	SFT54	▲	SFT47より古	4.1+ 2.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT746 2.7 2.6								
57.	SFT56	★			3.5+ 3.1+	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT747 2.7 2.6								
58.	SFT65	★			5.4 4.0+	—	北辺中央	立	内側	×	0	☆	0	—	SFT748 2.7 2.6							
59.	SFT66	▲	SFT67より古	5.3 2.8+	—	北辺東側	?	内側	×	0	△	0 ?	—	SFT749 2.7 2.6								
60.	SFT67	★	★★ SFT64より古	4.5 4.2	—	—	—	—	—	—	☆	0	—	SFT750 2.7 2.6								
61.	SFT68	★			5.6+ 3.9+	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT751 2.7 2.6								
62.	SFT69	▲	SFT66より古	3.8 3.2+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT752 2.7 2.6								
63.	SFT705	▲	SFT56より古	3.8 3.2+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SFT753 2.7 2.6								

表84 山王・市川橋遺跡における古墳時代後期の堅穴住居跡1

調査区	No.	位置	溝番号	認定横幅	(A) 認定した堅穴住居								(B) 可能性のある堅穴住居					
					規模 (m) 南北×東西	区分 位置	カマド 埋設材	土柱 本体	床 埋設	貯蔵室 位置	廻り部 位置	便器	壁 位置	窓 位置	梁	柱	便器	
64 北側	SE2023	★		4.7 × 3.4	—	北邊中央	△?	内側	長	0	△	0	—	—	—	0	—	0
65 西側	SE2028	★		5.9 × 3.2	—	—	—	—	—	△	0	—	—	—	—	—	—	—
66 東側	SE2034	★		7 × 2	—	—	—	—	—	△	0	—	—	—	—	—	—	—
67 西側	SE2044	★		4.5 × 4.4	中型	—	—	—	—	△	0	—	—	—	—	—	—	—
68	SE2211	★		3.5 × 3.5	中型	南邊東側	—	内側	×	0	○	1	南西隅	—	—	—	—	—
69	SE2216	★		5.9 × 5.9	大型	北邊中央	—	内側	×	4	△	0	—	—	—	—	—	—
70	SE2224	▲	SE2211 + Z216より古	3.5 × 3.1	小型	北邊東側	—	内側	×	0	△	1	北西隅	—	—	—	—	—
71	SE2225	★		4.0 × 3.5	—	北邊中央	—	内側	×	0	○	0	—	—	—	—	—	—
72	SE2246	★		3.6 × 3.3	中型	北邊中央	—	内側	短	4	△	0	—	—	—	—	—	—
73	SE2247	★		4.2 × 2.5*	—	北邊中央	△?	内側	×	0	○	1	北東隅	—	—	—	—	—
74 西側	SE2507	★		4.9 × 3.3	中型	—	—	—	—	2△	0	—	—	—	—	—	—	—
75	SE2531	★		6.2 × 6.2	大型	—	—	—	—	4△	0	—	—	—	—	—	—	—
76 西側	SE2507	▲	SK2042より古	3.9 × 3.5	中型	—	—	—	—	0	△	0	—	—	—	—	—	—
77	SE6759	★		4.5 × 3.6	—	東邊中央	△?	内側	短	4	△	0	—	坪貝身	—	—	—	—
78	SE6760	★		6.5 × 6.4	大型	—	—	—	—	2*	△	0	—	—	—	—	—	—
79	SE6761	★		3.3 × 2.9	中型	東邊中央	△?	内側	×	4	△	0	—	坪貝身	—	—	—	—
80	SE6762	★		4.2 × 3.9	中型	東邊中央	△?	内側	×	4	△	0	—	—	—	—	—	—
81	SE6763	▲ ★	SE6762より古	3.6 ?	—	—	—	—	—	—	△	0	—	坪貝 葵 根莖	—	—	—	—
82	SE6764	★		4.3 × 3.5*	—	—	—	—	—	2*	△	0	—	坪貝 葵 根莖	—	—	—	—
83	SE6765	★		2.6 × 1.8*	—	—	—	—	0	?	0	—	坪貝 葵	—	—	—	—	—
84	SE6766	★		7 ?	—	—	—	—	—	?	0	—	坪貝 葵	—	—	—	—	—
85	SE6767	★		4.3 × 2.9*	—	—	—	—	—	?	0	—	坪貝 葵	—	—	—	—	—
86	SE6768	★		3.8 × 3.0*	—	北邊中央	△?	内側	×	4	△	0	—	—	—	—	—	—
87 西側	SI0434	★		3.5 × 7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
88 西側	SI0436	★		4.2 × 7	—	北邊東側	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
89	SE5024	★		6.8 × 7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(18)	SE5045	★		2.8 × 2.7	中型	—	—	—	—	1	△	0	—	—	—	—	—	—
(21)	SE5395	▲ ★	SK5395より古	3.6 × 2.9	中型	—	—	—	—	0	?	0	—	—	—	—	—	—
中存地	SE2323	★		4.5 × 4.3	中型	東邊中央	△?	内側	×	4	△	1	南東隅	—	本南北	SI28	2.5 × 1.9*	—
(10)	SE2308	★		5.3 × 5.2	中型	北邊中央	—	内側	×	4	△	1	北東隅	—	本南北	SE95	?	北邊中央

認定基準 (A) 下表の認定指標に基づき、古墳時代指標と認定した堅穴住居

(B) 古代(奈良時代)以前の遺構に堆されており、両側には古墳時代後期以前の外縁の遺構がないことから当該跡の遺構である可能性が高い住居

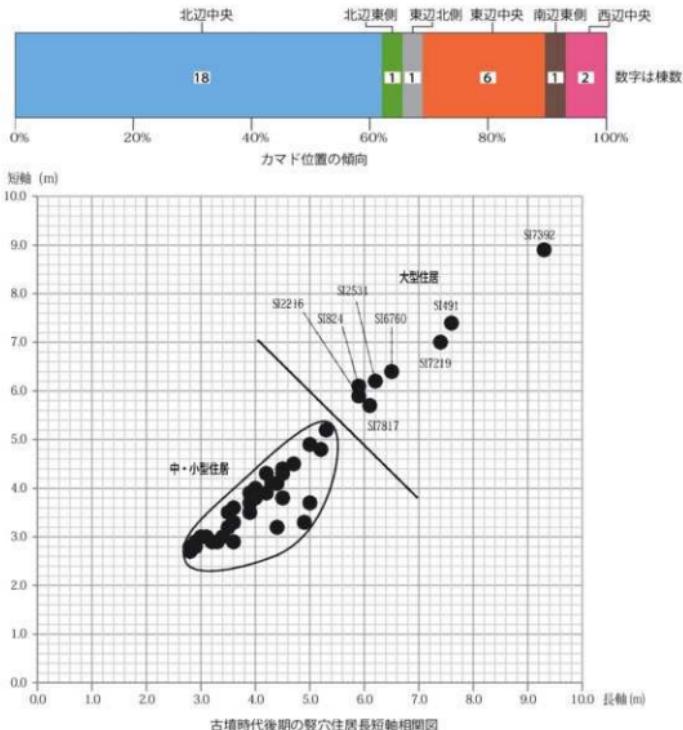
認定指標	カマド埋設材	床面
★出土土器による。	△粘土 (基本形状・各層を 埋設する)	△地山
	△円筒石	△腐泥埋土
▲年代のわかる土器が出土した遺構より古い。	△變形岩	○砂
	△變形岩	△砂

位置: 集落域を東西に分断するSD205008河川時に對して、住居が東側・西側どちらに位置するかを示したもの
埋設: 奥切ら 70cm以上伸びるものと「土」としている
■まとまった出土遺物を示す住居

表85 山王・市川橋遺跡における古墳時代後期の堅穴住居跡2

合は20%以下で、大半は中・小型住居である。なお、一般的には一辺4m以下の堅穴住居は小型に分類されるが、山王・市川橋遺跡では中型と小型の境界が不明確(図版696)であることから、中・小型住居と一括している。

6世紀末~7世紀前半期の集落では、仙台市栗遺跡でも住居規模の検討が行われている。同遺跡では一辺8m前後のCグループ(4・5号住居)と6m前後のBグループ、それ以下のAグループに分かれる(仙台市教委1982b)。C・Bグループが本遺跡における大型住居にほぼ対応する。堅穴住居は



図版696 肪穴住居の規模とカマド位置

規模が小さくなるにしたがって数が増えており、構成比率は山王・市川橋遺跡と概ね同じ傾向を示している。また、仙台市沼向遺跡の後期後半の脂肪穴住居は、一辺8m以上がなく、6m前後の3棟とそれ以下の33棟に分かれる（仙台市教委2010b）。

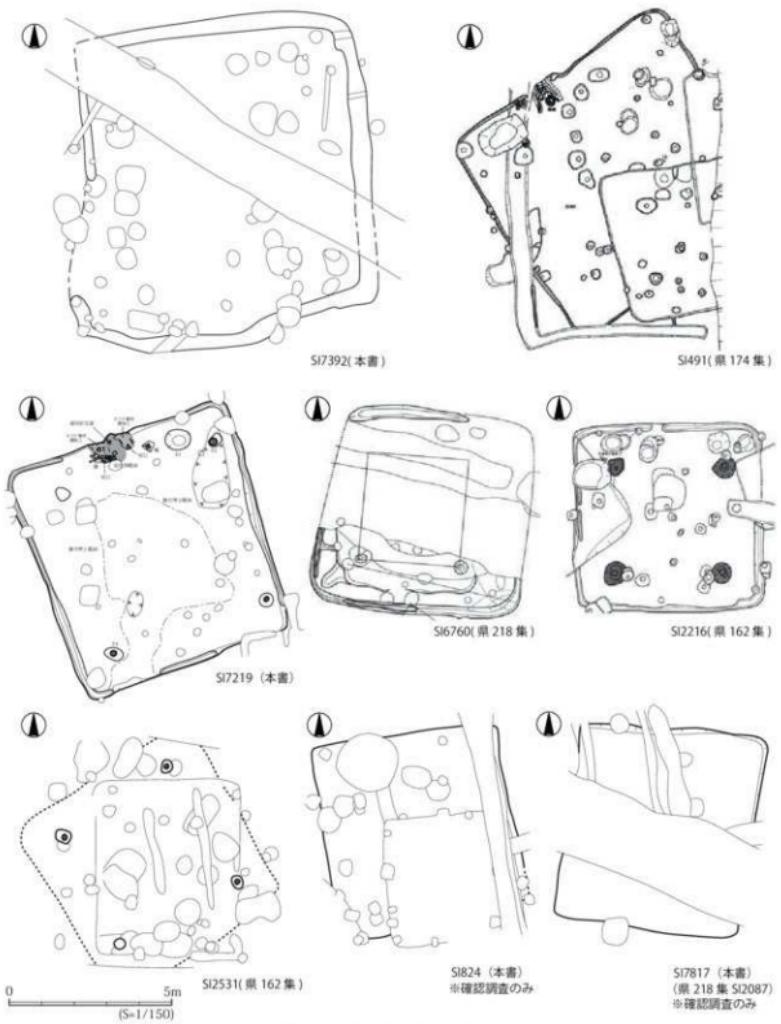
本遺跡の大型住居は、中・小型住居に較べて規模のまとまりは認められない。最も大きいものはL区SI7392の一辺9m前後で、最も小さいのはSI2216の一辺5.9mである。分布は、SD2050B河川跡両岸に分散しており、SI7392・7817を除いて、重複関係にあるもの以外では隣接していない。

以上のことから、脂肪穴住居の特徴としては、1)規模から大型住居と中・小型住居に分けられる、2)大型住居は中・小型住居に較べて数が少ない、3)大型住居は分散する点があげられる。

C. 大型住居

前節の検討より、大型住居は規模と数、集落内での位置といった点で中・小型住居と差別化できるが、カマドの位置・主柱配置・出土遺物では中・小型住居との明確な違いは認められない。

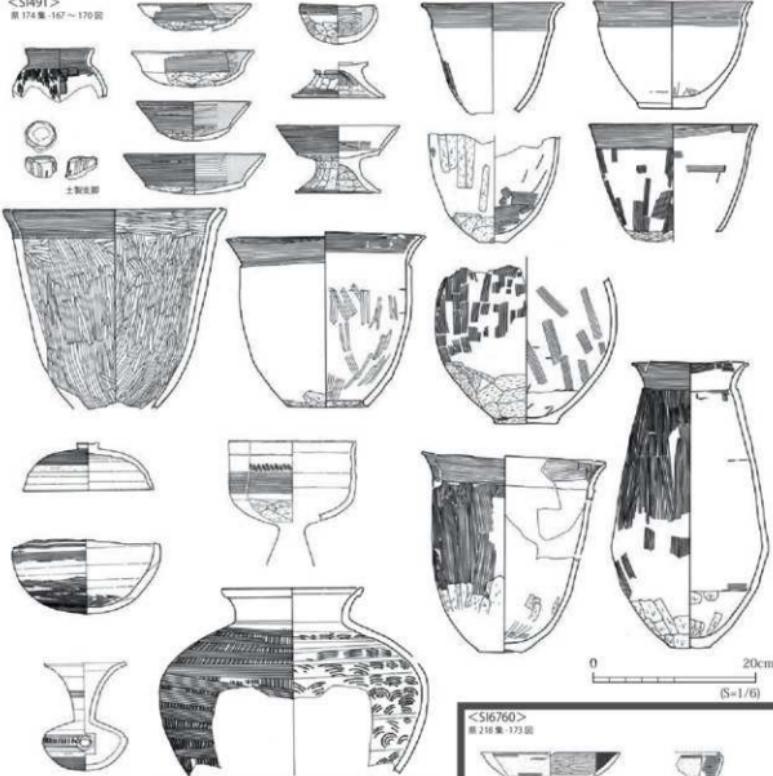
大型住居ではSI491で最も遺物が出土しており、須恵器も多い（図版698）。しかし、それ以外の大



図版697 八幡地区の大型竪穴住居跡

<SI491>

第174集-167~170回



0

20cm

(S=1/6)

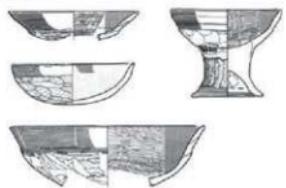
<SI6760>

第218集-173回

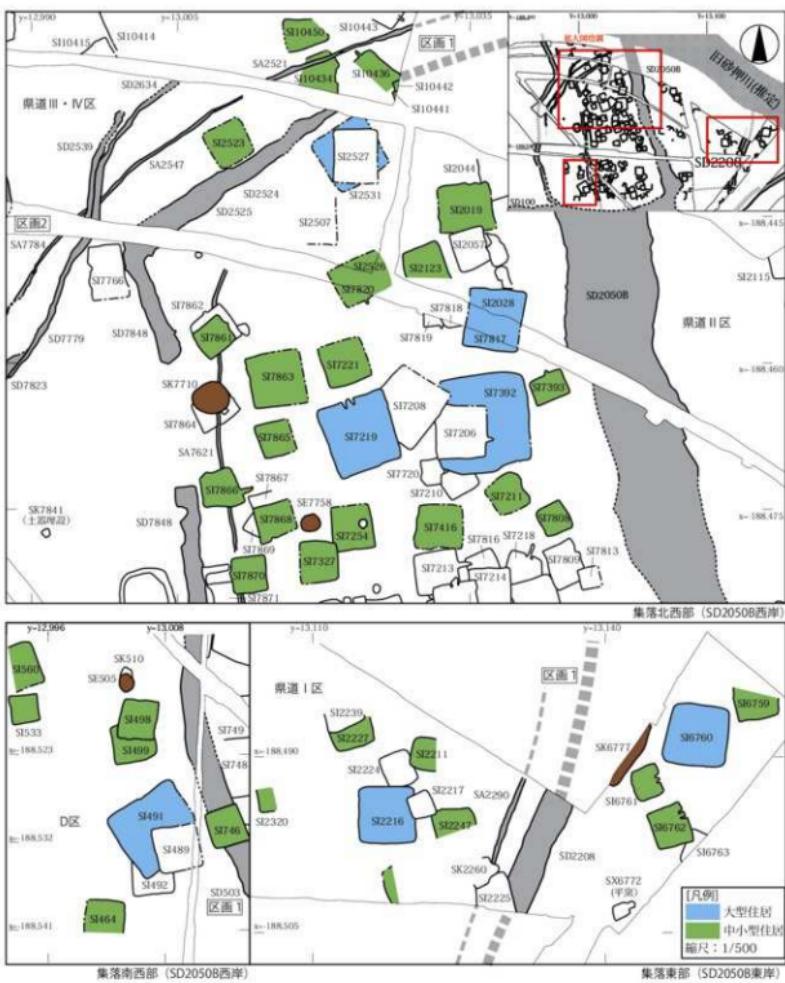


<SI2216>

第162集-15回



図版698 大型竪穴住居跡の出土遺物



図版699 大型と中小型竪穴住居と井戸の関係

型住居では遺物が少なく、特筆すべきものも認められない。住居の遺存状況なども考慮する必要があるが、大型と中・小型の出土遺物に相違点は見出せない。同様の指摘は、前述した栗遺跡でも行われている（仙台市教委 1982b）。他の点で大型住居の特徴をあげるとすれば、中・小型竪穴住居・井戸の位置関係がある（図版699）。居住域では大型竪穴住居を中心として中・小型竪穴住居が周縁に配置された状況がみられる。

加えて居住域では井戸が 2 基 (SE505・7758) 確認されている。古墳時代の東日本の集落では井戸

が殆ど伴われないことが指摘されているが（藤沢2016）、確認した井戸はすべて大型竪穴住居に近い（図版695・699）。確認調査のみの住居が多く、厳密な存続時期の検討をした結果ではないことに留意する必要はあるものの、こうした特徴から集落内の集団単位などが想定でき、大型竪穴住居は中核的な建物であった可能性が考えられる。

（3）集落の生業活動

古墳時代後期のSD100・2050B・5093河川跡からは、多量の土器・土製品・石製品だけでなく木製品・骨角製品・動物遺存体・植物遺体などさまざまな遺物が出土した（図版720・721）。これは、河川がゴミ捨て場としても利用されたためであり、こうした遺物から集落を営んだ人々の生業活動の一端が窺える（宮城県教委2001a・b）。表86はSD100・2050B河川跡を中心に出土遺物をまとめたもので、これらから、後期集落では農耕・漁撈・狩猟・採集・手工業生産が行われていたことがわかる（宮城県教委前掲・柳澤2010b）。

生業活動の実態は稻作農耕が中心であり、漁撈・狩猟活動は農閑期の季節労働であったと考えられる（宮城県教委2001b）。また、馬鍬（宮城県教委2001a）やウシ・ウマの遺存体からは、水田・畑作に牛馬耕が導入されていたことがわかり、同様の指摘は沼向遺跡でも行われている（仙台市教委2010b）。

漁撈活動については、今回の調査で確認した貝殻の魚骨密度が低く、過去の調査分を含めても漁撈具の出土量も少ない点が指摘でき、漁撈が農耕に対して副業的活動であったという従来の見解を裏付ける。今回は、マガキ・ハマグリ・アサリなどの貝類、エイ・サメ類やスズキなど近海の魚類、フナ・ギバチ・アユなど淡水の魚類が確認された。これらの出土状況には時期による違いが認められ、6世紀後半から6世紀末～7世紀前半にかけて、主たる漁撈活動域が海岸部から河川下流域・小河川を中心としたものへ徐々に変化したことが推定される。このことは漁撈活動の場が遺跡周辺へと制限され、過程を示すものと考えられる（本章第5節）。

狩猟活動では、大型獣のニホンジカ獵に重点が置かれている。ニホンジカの骨は、割れた状態で出土しているものが多く、骨角製品への2次利用や脳髄・骨髓の摘出があったと指摘されている（宮城県教委2001b）。また、肩甲骨・肋骨は卜骨祭祀に利用されており、祭祀行為に必要な資源でもあった。今回の資料からも、ニホンジカの計画的な処理と徹底的な利用が看取された。こうしたことから、狩猟は利用価値の高い種の獲得を主眼としたと考えられる。利用価値に基づく特定動物への傾注は、集落の生業活動に自家消費的食料資源獲得と併せて、産業資源の獲得が組み込まれていたことを示唆する。

大別	用途	種別	種類
土製品	製陶具(祭用具)		筒玉(1・2・3)、勺玉(1・2・3)、丸玉(3)、白玉(1・2)、土玉(1・2)
	粘土器		粘土罐(1・3)
	陶冶具		土鍋窯跡和用坩埚(2)、鑄型(1・2・3)
	セマフ用具		支柱(1・3)
	その他		土球(1・2)
	農具・土木具		一束手牛頭(2・3)、一本作り叉頭(2・3)、曲耕牛頭(2・3)、曲耕叉頭(3)、齿柄(2)、反柄(2・3)、鋤柄(3)、土耕棒(3)
木製品	農具		鋤頭破損(3)、鋤柄(2・3)、長柄鋤頭(1・2)、大頭破(3)、鋤柄(2)、馬頭(2)、田舟(2・3)
	工具		刀子頭(2・3)、印彫板(3)、舟柄(1・2・3)、作業台(1)
	防腐具		編竹竹板(2・3)、早乾竹竿(3)、系包樹材(2・3)、木漆(1・2・3)
	舟具		製帆繩(4)、索(2)
	舟具		タモ木舟底(1・2・3)、破舟(2・3)、櫓(2・3)、舟(2)
	船皮製容器		円形容物(2・3)、梢円形容物(2)、圓丸形容物(1・3)、袋状容器(3)
	容器		壺(3)、桶(2)、瓶(3)、杓(2・3)
	製陶具		模頭(2・3)、杵(3)、箒(1・2・3)
	厨房用具		自在舟(3)、机脚(3)、天板(3)
	搬運具		舟舟(2)、天秤(2)
骨角製品	建材		梯子(2・3)、梯脚(3)、各種建築梁部材(1・2・3)
	武具・狩猟具		木鏃(2)、丸矢(1・2)、弓束(2)、箭(2)、木製箭頭矢羽(2・3)、丸矢頭(2)、弓羽(3)、弦竹形木製品(3)
	弓具		柄弓(3)
	箭羽		圓弧狀木製品(4)、齒串(1・2・3)、人形(3)、織形代(3)、月代(1・2)、馬形代(3)、木製狀木製品(3)
	その他の		つば太(1・2)
	不明		柄竹筒狀木製品(3)、くさび状木製品(3)、組み合ひ式台座(3)、黒色漆塗座金杖木製品(3)、棒状木製品(1・2)、把手付筒状刃口人字型桿状木製品(2)、有孔板(2)
	鉄製品		鉄劍(2)
	馬具		耳環(2)
	装飾品		鍔環(2)
	寶鏡類		鍔環(1)
骨角製品	骨製物		骨頭裂刀子柄(3)、鹿角裂刀子柄木製品(3)
	工具		筋膜裂刀子柄(3)、鹿角裂刀子柄木製品(3)
	防腐具		筋膜裂(1)
	酒類		鹿角筒狀六瓣頭活(1・3)、鹿角製ヤシ(1・3)
	武具・狩猟具		ニホンジカ中手・中足骨・鹿角筒骨(1・2・3)、ニホンジカ中手・中足骨脛骨髓末品(1・3)、鹿角製樂器(3)、鹿角筒(3)、不規骨製品(3)
	服飾具		鹿角筒ベンチドット(1)、鹿角筒ベンチドット未品(1)、質玉未成品(1)、環状角製品(2)
	武器		ニホンジカ中手骨(2)、(3)、ニホンジカ前骨裂ト骨(3)、ニホンジカ前骨裂ト骨(3)、鹿角製削骨(2・3)
	その他の		骨栓(1)、不規骨製品(1・2・3)、鹿角素材(1)、ニホンジカ骨素材(1・3)
石製品	陶器		被燒黑瓦(3)、被燒黑瓦飾品(1・3)、磨石(1・2)、手持勾(2)
	工具		砥石(1・2・3)、磨石(1・2)、烈石(1)、片割石(1)、ラウンドスクレイバー(1・2)、火打石(2)
	防腐具		防腐劑(2・3)
	カマド用具(禁口部補強材)		凝灰岩切石(1・3)、文膠(1・3)
	不明		
自然遺物	哺乳類		ニホンジカ(1体)、アシシゾ、ウマ、ウシ、ツヅキ、タヌキ
	鳥類		ウミネコ、ガガカラモ、キジ科、ヒクイ
	魚類		スズキ、ヒメ、ボウズ、マダラ科
	貝類		(二枚貝編: 内肉水槽) マガキ、アサリ、ハマグリ、イガイ、オキシムシ、(腹足編: 内肉水槽) アカニシ、ウニニナ、スガイ、タマガイ
	甲殻類		ガザミ
	棘皮動物		オオバランク二科
植物遺存(食用)	栽培植物		イネ科(穀類)、シソ属
	果实実		クリ、オニグルミ、スモモ、モモ、バラ属、ナシ
	種子		アラクサ科、キイチゴ、サンショウ、タラノキ、トチノキ、ナス属、ノブドウ、トウガル、ヒシ科、ヒョウタン、メロン
	その他		ワラビ

柳澤博明 2010「多賀城布山王・山川集落跡における住居式-粟四式期集落跡の相」(宮城考古学) 第12号をもとに作成
(1): 本番集落遺物、(2): 種 184 集落遺物、(3): 種 186 集落遺物、(4): 種 218 集落遺物

表86 古墳時代後期集落から出土した各種遺物

(4) 集落の存続年代

後期集落の年代は、これまで SD2050B 河川跡出土土器を中心に年代が検討され、6世紀後半～7世紀中頃と考えられており(宮城県教委 2001b・2009・村田 2002・柳澤 2010b)、今回の調査成果もこれを裏付けている。これまでのところ、7世紀後半に比定できる住居は確認されておらず、須恵器は TK209 型式期を主体とし、TK217 型式期は少ないとから、拠点集落は7世紀中頃以降衰退したと考えられる。

10. 古代（方格地割成立以前）の八幡・伏石地区

八幡・伏石地区では、神亀元年（724）の多賀城創建以前のものとして、材木塀や溝で囲まれた施設群があり、8世紀後半になると、区画が複数認められるようになるものの、個々の規模は小さくなつた（宮城県教委1994b・1997・2009、多賀城市埋文センター1991bほか）。このため、8世紀前半以前を区画Ⅰ期、8世紀後半は区画Ⅱ期と呼ぶこととし、これまでの調査成果を含めて同時期の様相を検討したい。

（1）区画Ⅰ期の様相

材木塀と溝で囲まれる区画を確認し（宮城県教委1997・多賀城市埋文センター1991bほか）、平成19年度の報告で区画Ⅰと名付けた（宮城県教委2009）。今回の調査では、区画Ⅰと同時期の建物跡を確認している。これまでの調査成果を含めた区画施設と区画内の様相は、以下のようにまとめられる。

A. 区画施設と区画の規模・平面形

7世紀後半～8世紀前半の区画施設を構成する遺構は、以下のとおりである（図版700）。

〔南辺〕 SA3158・5636 材木塀跡、SD3014・5633・11011 区画溝跡

〔北辺〕 SA2521 材木塀跡

〔東辺〕 SA6538・6539 材木塀跡

〔西辺〕 SA549・5226・7839 材木塀跡、SD180A・B・2552 区画溝跡

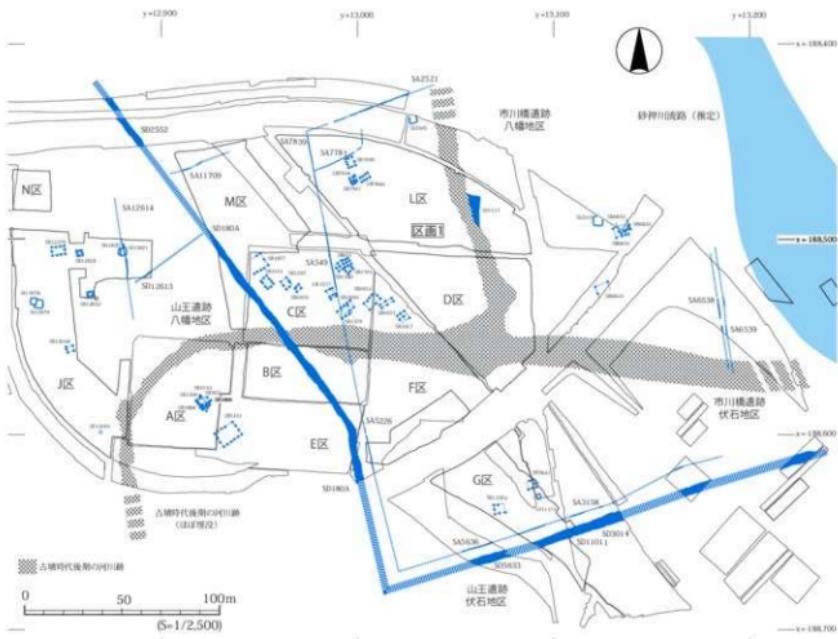
〔その他の区画施設〕 SA7781・11709・12614 材木塀跡、SD12613 区画溝跡

南辺の区画施設は、並行する材木塀（SA3158・5636）と区画溝（SD3014・5633・11011）で構成され、東は市川橋遺跡第2次調査区（多賀城市教委1983）へ延びている。南辺区画施設は東で17°北へ偏り、多賀城市第21調査G区の西側で西辺区画施設（SA5226・SD180A・B）の延長と直角に接続する（宮城県教委1997）。

北辺の区画施設は材木塀（SA2521）で、西辺のSA7839とおむね直角に接続する。方向は東で19°北へ偏り、南辺のSA3158・5636とは約235m北に離れて並行する。一方、東辺の区画施設はSA6538・6539 材木塀である。2条は並行するため、その間は通路と報告したが（宮城県教委2009）、SA6539の東側には砂押川の旧流路が迫ること、塀の東側で遺構が希薄となることから、SA6538・6539は区画Ⅰの東辺で、替えてみられる。

西辺の区画施設は材木塀（SA549・5226・7839）と区画溝（SD180A・B）で構成される。両者は区画南側で並行するが、南西隅から90mほど北で区画溝が角度を変えて北西に延びるため、北へ行くほど離れる。方向は変換点から南側が北で11°、北側は北で37°西へ偏る。こうしたことから区画Ⅰの中心部は東西190m、南北235mほどの南北に長い方形（平行四辺形）の範囲が材木塀に囲まれたと考えられる。方向は北で西に11°偏っており、その内部はSA2521・7839に接続するL字形のSA7781材木塀によって北西隅が細分される。

区画Ⅰの西外には、SD180に直交するSD12613区画溝があるが、部分的な検出にとどまるため、詳



図版700 区画I期の様相

細は不明である。さらに、北辺材木塀の西延長上でSA11709、西辺材木塀の西に110m離れ、それと並行するSA12614という2条の材木塀跡を確認した。前者は、区画1中心部の西辺に接してもう1区画存在した可能性を示唆する。あるいは、両者が一体となって1区画を形成した可能性（その場合、SD180とは別時期となる）などが考えられるが、部分的な確認であり接続部分も未確認であることから、可能性の指摘にとどめておきたい。

B. 区画内外の様相

区画I期の遺構としては、竪穴住居跡が162集で8世紀前葉から中頃とした2棟(SI2049・2210)、本書で8世紀前半とした竪穴住居跡4棟(SI11978・11979・12620・12621)、掘立柱建物跡は本書で8世紀前半以前とした9棟(SB7899・7939・7947・7948・11023・12048・12279・12618・12632)のほか、本書で8世紀前半とした井戸跡2基(SE11174・12614)があげられる。これに、掘立柱建物跡で東への傾きが大きく、材木塀や西辺北側の区画溝と方向が共通する174集のa期18棟(SB302・655・1509・1510・1551・1577・1579・1580・1597・1600・1617・1621・1654・1657・1659・1666・1668・3841)や218集のA群4棟(SB6832・6833・6834・6843)、多賀城市教委27集のSB5151などを加えることができる。したがって、区画I期の主要遺構は掘立柱建物跡32棟、竪穴住居跡6棟、井戸跡2基となり、区画1から西外にかけて認められる(図版700)。

遺跡名	遺跡	地区	位置	年代	標高(m)	傾斜 長邊 短辺	平面形	方向	カマド				床	主柱穴 掘立柱 数	周溝	柱 径	その他の 遺構	建物	備考	報告書 (巻)	
									位置	本体 重量	構築	支脚 位置	埋深(m)								
1 S22049	田園	八幡	8c 前	- × 3.6 30~ 長方形	N10° W	×	-	-	?	-	?	×	×	鉄床	-	-	-	-	鉄床	6162	
2 S22210	田園	八幡	8c 前	- × 4.5 4.5 正方形	N0°	北辺 中央	東壁 内側	粘土	?	?	?	?	○	土師器群ロクロ坪、 丸瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 丸瓦	6162	
3 S22226	田園	八幡	8c 前	- ○ 4.4 4.4 正方形	N11° W	北辺 西側	東壁 中央 内側	粘土・両袖芯 材(右)	?	?	?	?	○	土師器群ロクロ坪、 丸瓦、 丸瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 丸瓦、 丸瓦	6162	
4 SB1978	山王	八幡	8c 前	× 3.2 3.0 正方形	N7° E	東辺 中央	東壁 内側	粘土・両袖芯 材(右)	?	?	?	?	×	土師器群ロクロ坪、 丸瓦、 丸瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 丸瓦、 丸瓦	本書	
5 SB1979	山王	八幡	8c 後	× 4.2 4.0 正方形	N8° E	東辺 南側	東壁 内側	?	?	?	?	?	○	床下土 机	-	-	-	-	床下土 机	本書	
6 SB1920	山王	八幡	8c 前	× 3.2 1.8~ 7 N9° E	?	-	-	?	-	-	?	-	○	ビット	-	-	-	-	ビット	本書	
7 SB1921	山王	八幡	8c 前	× 3.1 0.6~ 7 N16° W	北辺 中央	東壁 内側	?	?	?	?	?	?	○	土師器群、 甕	-	-	-	-	土師器群、 甕	本書	
8 SB1964	山王	八幡	8c 後	× 3.2 3.0 正方形	N6° W	北辺 中央	東壁 内側	粘土	?	?	?	?	○	土師器群ロクロ坪、 丸瓦、 小型坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 丸瓦、 小型坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	本書	
9 SB506	山王	八幡	8c 後	× 3.3 2.8 長方形	N8° W	東辺 中央	東壁 内側	?	?	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6174	
5 SB19	山王	八幡	8c 後	× 3.1 2.9 正方形	N25° W	?	-	-	?	-	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6174
11 SB824	山王	八幡	8c 後	× 3.3 2.2~ ? 正方形	N16° W	?	-	-	?	-	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6174
12 SB44AB	山王	八幡	8c 後	1 × 4.3 4.3 正方形	N1° W	北辺 東側?	-	-	?	-	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6174
13 SB185	山王	八幡	8c 後	× 3.9 3.7 正方形	N3° E	北辺?	-	-	?	-	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6174
14 SB190A	山王	八幡	8c 後	2 × 3.1 3.1 正方形	N3° E	北辺 中央	東壁 南側	?	?	?	?	?	○	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6174	
15 SB668	山王	八幡	8c 後	× 4.0 3.0 長方形	N18° W	東辺 南側	東壁 内側	?	?	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6174	
16 SB2065	山王	八幡	8c 後	1 × 4.0 4.4 長方形	N7° W	北辺 中央	東壁 内側	粘土・両袖芯 材(右?)	?	?	?	?	○	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6174 (10 次)	
17 SB1231	山王	八幡	8c 後	× 3.9 1.2~ ? 長方形	N4° E	?	-	-	?	-	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	本書
18 SB1231	山王	八幡	8c 後	× 3.8 3.4 正方形	N6° W	北辺 中央	東壁 内側	粘土	?	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	本書	
19 SB1231	山王	八幡	8c 後	× 3.0 2.5~ ? 正方形	N10° W	北辺 南側	東壁 内側	粘土・両袖芯 材(右)	?	?	?	?	○	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群有段丸 环坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	本書	
20 SB6619	山王	八幡	8c 後	× 4.0 3.2 長方形	N4° E	?	-	-	?	-	?	?	?	○	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6218
21 SB6645	山王	八幡	8c 後	× 5.4 5.2 正方形	N4° W	?	-	-	?	-	?	?	?	○	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6218
22 SB6520	山王	八幡	8c 後	1 × 3.9 3.2 長方形	N4° W	?	-	-	?	-	?	?	?	○	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	-	-	-	-	土師器群ロクロ坪、 井口ロクロ坪、 瓦器群ハ ラケズリ坪、 甕、壺、 瓦	6218

表87 8世紀の竪穴住居跡

区画I期の建物は、竪穴住居6棟に対して掘立柱建物が32棟と後者が主体である。掘立柱建物跡は桁行3間以下の小型のものが多いが、SB5151は桁行5間、梁行3間あり、他の建物に較べて大きいことから、区画I期の主要建物と考えられる（宮城県教委2009）。また、掘立柱建物は方向から西へ10°～20°前後偏る西辺材木塀と同じものと、西へ40°前後偏る西辺区画溝北側と同じものに大別できる。後者は建物の主体を占め、区画I西辺材木塀中央付近の内外に分布する。その中のSB1579は材木塀と重複するため、区画I期は2時期以上に細分できると考えられる。

竪穴住居跡は2棟が区画I内部、4棟は区画I西外にあり、一边が4m以下の小型である（表87）。

カマドは4棟で確認でき、北辺か東辺に設けられた。本体が残る2棟のうち、1棟(SII1978)では焚口補強材が認められたが、古墳時代後期に特徴的であった凝灰岩切石ではなく、河原石が使われた。

区画1の材木塀で囲まれた部分は東西190m、南北235mほどの南北に長い方形（平行四辺形）で、内部には掘立柱建物跡22棟、竪穴住居跡2棟、井戸跡1基などが認められる。平面形が方形となる点や内部施設で掘立柱建物が主体となる点は、6世紀末～7世紀中頃の拠点集落と明確に異なる。なお、こうした構造は区画北西部や南部中央、東部中央付近で確認できたに過ぎない。中央部の様相が不明であり、今後の検討課題としたい。

（2）区画Ⅱ期の様相

Ⅱ期は区画の数が増えるが、Ⅰ期に較べて個々の規模は小さくなる。北側の2つは平面形が長方形で、東西に並ぶ。これらは、平成19年度の報告で区画2・区画3と名付けており（宮城県教委2009）。また、区画3の南側には空闊地をはさんで東西方向の堀跡が認められることから、区画4と呼ぶこととする。さらに、今回の調査では、同時期と考えられるSX12100東西道路跡を確認した。これまでの調査成果を含めた区画施設と区画内の様相は、以下のようにまとめられる。

A. 区画施設

8世紀後半の区画施設を構成する遺構は以下のとおりである（図版701）。

区画2

〔南辺〕 SA670 材木塀跡、SD461 区画溝跡

〔東辺〕 SA2089・7176・7755・7756 材木塀跡、SD461・2124 区画溝跡、SX7124・7128 整地層

〔西辺〕 SA670・2564・5475・5476・7838 材木塀跡、SD461・2561 区画溝跡

区画3

〔南辺〕 SA6553・6555・6611・6800 材木塀跡、SD6557 区画溝跡

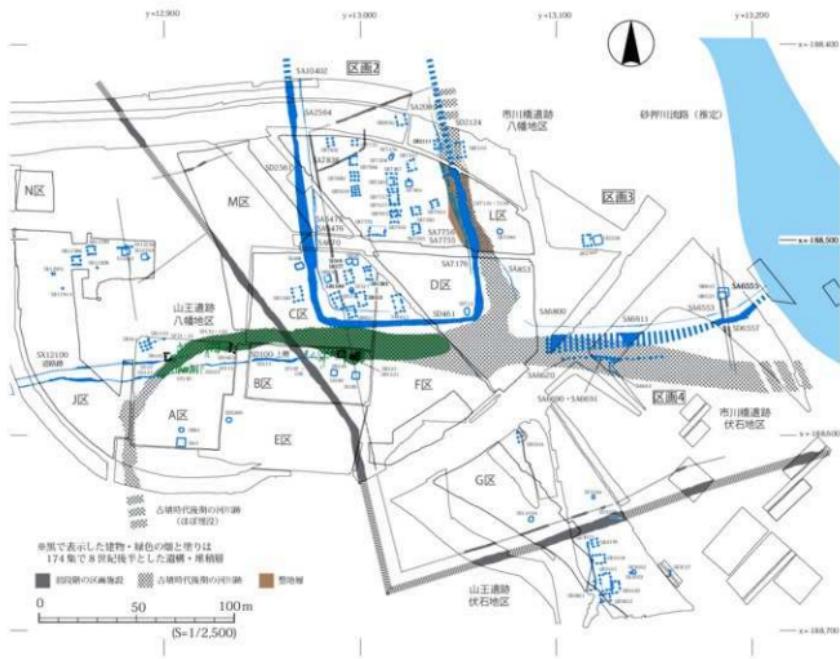
〔西辺〕 SA853 材木塀跡

区画4

〔北辺〕 SA6620 材木塀跡、SA6690・6691 掘立柱塀跡

区画2の南辺は、材木塀（SA670）と区画溝（SD461）で構成される。今回はD区でSA670を確認していないものの、東辺のSA7176が南辺近くまで延びることから、本来は南辺全体に材木塀がつくられたと考えられる。また、SD461は埋没したSD100河川跡の左岸に沿ってつくられ、SD100・2050B合流部分で北へ折れしており、古墳時代後期河川の位置を意識してつくられた。

東辺は、材木塀（SA2089・7176・7755・7756）と区画溝（SD461・2124）で構成される。その際、窪地となったSD2050B河川跡を整地している（SX7124・7128）。SA2089・7176・7755・7756はSD461・2124の西側で並行する。D区では材木塀の南東隅付近を確認していないが、西辺のあり方からみて東辺全体に材木塀がつくられたと考えられる。また、東辺では材木塀が3度改修されている。こ



図版701 区画Ⅱ期の様相

れは、埋没河川上にあるため地盤が不安定だったことに起因するとみられる。なお、SD2124はSD461と比較して溝幅が広いが、調査段階にSX7124・7128整地層との識別が不充分であったためと考えられる。

西辺は、材木塀（SA670・2564・5475・5476・7838）と区画溝（SD461・2561）で構成される。前者は、部分的に2度改修されている。以上のことから、区画2の規模と平面形は、南北に長い方形（平行四辺形）で、塀で囲まれた部分が南北120m以上、東西71m、溝を含めた規模は南北129m以上、東西87.5mとなる。

区画3の南辺は、材木塀（SA6553・6555・6611・6800）と区画溝（SD6557）で構成され、後者は埋没したSD100河川跡の窪地を利用している（宮城県教委2009）。西辺南側はSA853材木塀で、埋没したSD2050B河川跡を避けてつくられた。その北は県道調査区で、SB2103が区画2のSD461・2124に近接することから、塀と建物は別時期で、区画溝はそこまで延びなかったと考えられる。

区画4の北辺は、材木塀（SA6620）と掘立柱塀（SA6690・6691）で、前者から後者に建替えられている。

B. 道路跡

SX12100東西道路跡はSX12221東西道路跡（北2道路）より古い。ほぼ同位置で重複するSX500

東西道路跡とは、本道路が北2道路より古いこと、SX500は北2道路や西4道路と同期に施工されたことから（本章第11節）、SX12100はSX500より古い道路と考えられる。SX12100は東側延長上でSD461の南肩に接する。また、道路の方向は区画2～4の堀や区画溝と同じであることから、SX12100は区画II期の東西道路であり、八幡地区ではその南北に材木堀や溝で囲まれた区画が並んだ。

本道路は、古墳時代後期のSD100河川跡の上に位置する。8世紀後半段階でSD100はほぼ埋没していたが、SD2050Bとの合流点を中心に地盤が不安定であったと考えられる。宅地としては不向きであるが、窪地であるがゆえに排水には適しており、そうした場所を道路用地として選んだ可能性が高い。

SX12100は東西道路であること、8世紀後半段階における多賀城外の関連施設は八幡・伏石地区に集中することから、東山道から分岐し城外の関連施設が集中する地区を通って多賀城外郭南門や西門にいたる道であった可能性が高い。その場合、西門へはSD461・2561に沿って北に延びたとみられる。ところで、SX12100は新田遺跡第3・45・48～50次調査で確認されたSX1900・1905（奈良時代の東西大路、多賀城市教委2010b）の延長上に位置する。両者は路幅が異なり、中間部分の様相が不明であることから、現時点では同一道路と断定できない。調査成果の蓄積を待って改めて検討したい。

C. 区画内外の様相

区画II期の主要遺構としては、各報告書で8世紀後半頃とした竪穴住居跡17棟（162集：SI2226・174集：SI44AB・185・190ABC・468・506・519・624、218集：SI6520・6645、本書：SI7364・12331AB、12333、建替えを含む）、掘立柱建物跡43棟（162集C1群：SB2103・2111・2360・2630、174集b期：SB140・245・246・314・553・577・652・1513・1521・1560・1583・1599・1612・1622・3341・3416・3418・3420・3421・3821・3852、本書：SB7283・7295・7330・7347・7367・7454・7659・7660・7757・7775・7776・7822・7924・7938・7953・7955・12584・12586）（註1）、掘立柱堀跡1条（本書：SA12239）、井戸跡9基（174集：SE84・511・517・3164、本書：SE712・7258・7434・11016、多賀城市教委27集：SE5069）、烟跡6面（174集：SF21（22）・130（138）・131（132）・197・202（206）・213（226））などがあり、他に土坑・溝跡などがある（図版701）（註2）。

これらのうち、掘立柱建物跡5棟（SB140・245・246・1521・1622）や烟跡5面（SF130（138）・131（132）・197・202（206）・213（226））は、8世紀後半のSD100上層より新しいが、SX12100東西道路跡に近接もしくは東延長上に位置すること、SX12100は8世紀末に北2a道路へ造り替えられ両者に連続性が認められることから、区画II期の道路や区画が成立する直前段階に位置付けられ、SD100河川跡上の窪地に形成された遺物包含層を掘り込む暫定的な遺構群と理解したい。

竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、西へ偏るのが主体を占める。こうした傾向はI期と同じであるが、傾きが小さくなり、それぞれの数も竪穴住居17棟に対して掘立柱建物が43棟で、I期より竪穴住居の割合が増える。8世紀後半の多賀城南面は、八幡・伏石・館前地区に建物が集中する。特に八幡地区は東西道路を中心には堀や溝で囲まれた区画が並んだことから、城外の中心的な地区であったと考えられる。その中で、北を除く3辺が判明した区画2は、掘立柱建物が主体を占めており、城外の中心施設の一つであったと考えられる。その中央には桁行5間、梁行3間の東西棟SB7776があり、これ

No.	通称名	位置	平面形	卉戸件	内法(m)	前方距離(m) 東邊 西邊 西邊	調査区(文献)
1	SE511	仙門形	縦板	—	0.5 × 0.3	1.8 1.5 1.4	C 区 (宮城県 174)
2	SE517	円形	—	—	0.8	0.8 1.2	C 区 (宮城県 174)
3	SE712	区画 2	楕丸方形	縦板	0.4 × 0.4	3.9 0.4	1.1— D 区 (本郷)
4	SE7258	不整相円形	縦板	—	2.1	2.1 0.8	L 区 (本郷)
5	SE7434	不整相円形	縦板	—	1.7+	1.3 0.8	—
6	SE3164	区画 4	楕丸方形	南北：縦板 東西：横板	0.8 × 0.5	1.9 1.4	1.5 G 区 (宮城県 174)
7	SE11016	楕円形	縦板	—	0.4 × 0.4+	2.5+ 2.4+	1.4— G 区 (本郷)
8	SE84	区画外	相円形	上段：縦板 最下段：横板	0.6 × 0.6	2.3 1.8	1.5 A 区 (宮城県 174)
9	SE5069	円形	縦板	—	0.5 × 0.5	2.3 2.2	1.4 E 区 (市 27 節)

表88 8世紀後半の井戸跡

井戸跡が確認されており、そこまで広がる可能性も考えられる。

竪穴住居跡は一辺3.4m前後のものが多く、5mを超えるのはSI6645のみである。カマドが認められたのは5棟のみであり、北辺か東辺に設けられる（表87）。区画1期と較べて、主柱を持たないものが多く、平面形は長方形が多い。こうした特徴に加え、SI185・6520から漆付着土器が出土したこと、SD461からも多く漆付着土器が出土したことから、八幡地区の竪穴住居の中には漆工房があったと考えられる。井戸跡は確認した9基のうち、側をもつもの6基、素掘り2基、不明1基である（表88）。井戸側は縦板組4基、縦板・横板併用が2基である。区画2と区画4に多いが、建物集中域からは離れた場所につくられた。

註

註1 162集の掘立柱建物跡C1群（SB2103・2111・2360・2630）は、SD2124区画溝跡より新しく、8世紀後半以降と報告したが、今回の調査でL区以北にはSD461の掘削に先立ち、SX7124・7128整地層が行われたことがわかった。このため、県道調査区のSD2124は整地層との区別を行わずに両者を掘り下げたと考えられる。したがって、SD2124の位置は、報告した幅の西よりに位置し、8世紀後半のSB2103はその東にあって柱穴はSX7124・7128から掘り込まれたと考えられる。

註2 174集の烟跡については、位置が同じで確認面が同一である場合は、方向が異なるものも一面とカウントしている。

11. 古代（方格地割成立以後）の八幡・伏石地区

八幡・伏石地区を含む多賀城南面では、8世紀後半の区画施設より新しい道路や溝・整地層のほか、掘立柱建物や竪穴住居など多数の遺構が確認されている。道路は南北方向と東西方向に延びて、基盤目状に整備され、その内部に建物などがつくられて街並み（方格地割）を形成していた（宮城県教委1991bほか）。八幡・伏石地区では、方格地割成立後に建物数が増加しており、道路に区切られた街区が全体で認められる。ここでは、過去の調査成果を含めて、同時期における八幡・伏石地区全体の様相を検討したい。

（1）道路について

今回の調査では、方格地割を構成する道路跡のほか、整地層、街区を細分する区画溝跡を確認した。整地層は道路の施工や改修と密接に関係しており、街区の整備も行っている。こうした道路・整地層・区画溝の関係を検討したところ、道路は大別3時期（道路①・②・③期）に変遷することがわかった。

を中心として北に開く「コ」の字型の建物配置が認められる。

区画2西外や区画3では、竪穴住居や掘立柱建物などが点在する。区画4の範囲は明確でないが、G区南部から多賀前地区北側（のちの北1西3区）にかけて材木塀・建物跡・

以下、各地点で検討した道路・整地層・区画溝の関係から、方格地割の年代と変遷を考える。その際、第IV章でも触れたが、道路名は南北大路と東西大路を基準とした名称で呼んでいる。また、南北大路から西の街区名は、街区北側と西側の道路名に因んでおり、本節でもこれにしたがっている。

A. 西4道路・北2a道路の関係

D区で確認した西4道路(SX700・750南北道路跡)・北2a道路(SX390・710東西道路跡、SX500東西道路跡)と、SX7001・7025・7026・7033整地層の関係から、これらの道路で構成される街区(北2西4区・北2西5区・北2a西4区・北2a西5区・北3西4区・北3西5区)には3期(道路①・②・③期)の変遷があったと考えられる。

a. 道路①期(8世紀末～9世紀前葉)

〔北2a道路(SX500東西道路)〕

これまでの見解では、SX500東西道路は9世紀前半代で、位置が同じでこれより新しいSX390(北2a道路)は、後者が前者の役割を受け継いだと解釈した(宮城県教委1997)。今回の調査では、西4道路東側で8世紀末～9世紀前葉のSD7015を確認している。SD7015は西4道路側溝A期に接続し、東は平成18・19年度県道調査区の北2a道路南側溝(宮城県教委2009)と一連の遺構であることから、SX500とSX390・710は同じ北2a道路で、その造り替えと考えられる。SX500の年代は、8世紀後半のSD461区画溝跡と同じ方向で、SD461を掘り込んでおり、SX390・710より古いことから8世紀末～9世紀前葉の間と考えられる(図版705)。

SX500は他の道路と位置や方向が異なり、方一町を原則とする方格地割の施工原則と合わない。その理由としては、SX500の西で8世紀後半のSX12100道路跡を確認しており(図版701)、2条の道路は方向が同じであるとともに、時間的連続性が認められる。SX12100は、東山道から分岐して八幡・伏石地区を通って多賀城へ至る道路であり、こうした既存の道路機能を継承したため、方格地割の制約を受けなかったと考えられる。

〔道路と整地層の関係〕

西4道路(SX700・750南北道路)と整地層の関係では、SX7026整地層がSX700・750の西側、SX7033整地層はSX700・750の東側を整地している。このSX7026・7033整地層はSX700・750の東西両側溝内側(路面側)に広がらないことから、整地層造成の際に南北道路を意識していたとみられ、西4道路施工と同時にいったと考えられる(図版702)。一方、西4道路西側のSX500東西道路南側溝はSX7026整地層、西4道路東側のSX500南側溝(SD7015)はSX7033整地層をそれぞれ掘り込んで施工している。このため、南北・東西道路と整地層の関係は西4道路(SX700・750)の施工とSX7026・7033整地層の造成が同時期で、そのうち北2a道路(SX500)が施工されたと考えられる。

〔交差点の形態〕

西4道路-北2a道路(SX500)交差点と、同交差点の約35m南に位置する西4道路-北2道路交差点は、隣接しているものの交差点形態に違いがみられる(図版702)。西4道路-北2a道路(SX500)交差点は、前者の側溝に後者の側溝が接続する「T」字形で、西4道路の側溝が北2a道路の通行を遮

断する。一方、西4道路－北2道路交差点は、両者の側溝が「L」字形に接続して、互いの通行を妨げていない。

多賀城南面の方格地割の交差点は、側溝の接続状況から分類されており、2つの道路側溝が「L」字に接続する交差点形態は、「開放型（A型）交差点」として東西・南北道路が同時に施工された場合に成立するとした。これに対し、「T」字形に接続する西4道路－北2a道路（SX500）交差点は「南北優先（C型）交差点」で、南北道路が先行して施工された可能性が指摘された（齋藤2016a）。つまり、交差点からみると北2道路と西4道路は同時に施工されたが、北2a道路は西4道路より後に施工されたと判断できる。こうした西4道路と北2a道路の関係は、前述した道路と整地層の関係と合致する。

〔道路の施工時期〕

これまでの検討から、西4道路A期と北2道路が施工されたのち、北2a道路（SX500）が西4道路A期に取り付いたと考えられる。西4道路・北2道路と北2a道路（SX500）の施工は、西4道路がSD461区画溝廢絶後であること、SX7026・7033整地層出土上器からみて8世紀末頃であり、この段階に方格地割が成立したということができる。その下限は、北2a道路A期より9世紀前葉であると考えられる（本章第6節）。こうしたことから、街区が成立した8世紀末～9世紀前葉を道路①期とする（表89）。

b. 道路②期（9世紀中葉～10世紀前半）

〔道路と整地層の関係〕

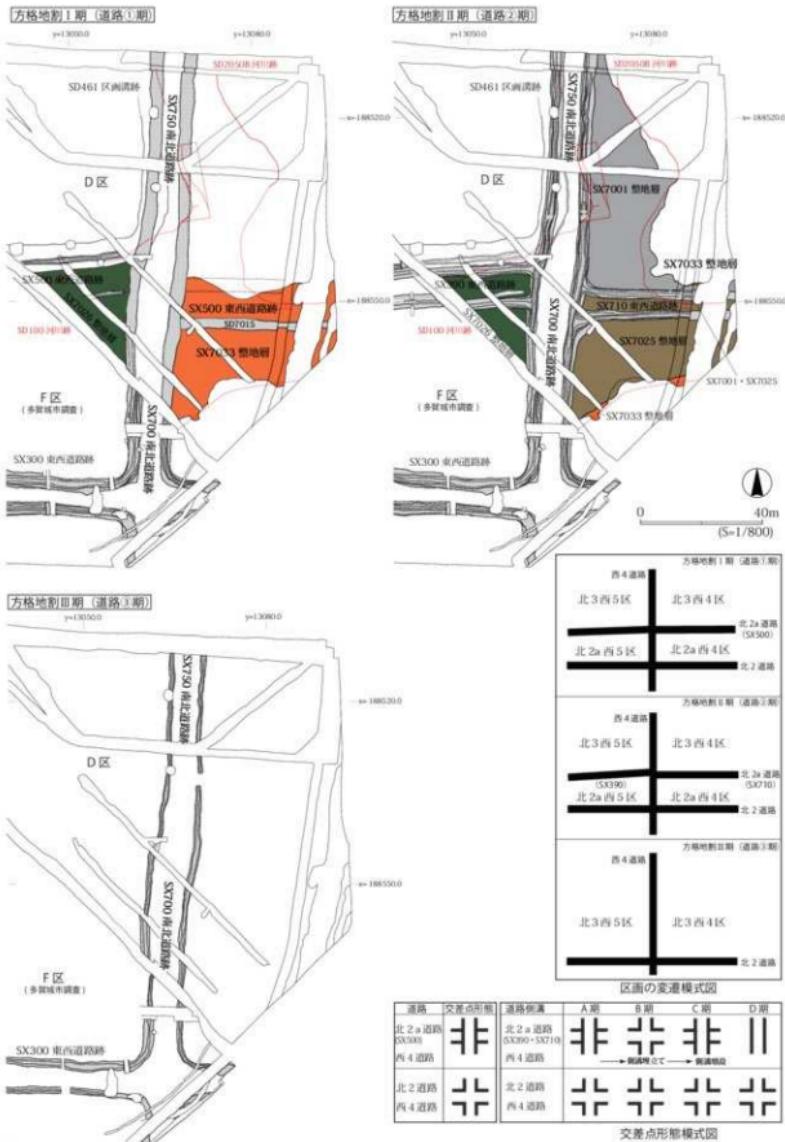
西4道路（SX700・750）の東西で、整地を伴う北2a道路の造り替えが行われた。東側は、道路①期のSX7033整地層と北2a道路（SX500）南側溝（SD7015）を覆ってSX7001・7025整地が行われ、SX500とほぼ同じ位置にSX710東西道路の南側溝が掘り込まれた（図版702）。西側は、道路①期のSX500から側溝1本分南にずらしてSX390の南北側溝が掘り込まれた。東側と異なり、SX390の施工に伴う整地は認められない。西4道路の東西に接続するSX390・710はSX500の上にあり、方向も同じであることから、北2a道路の機能を継承したと考えることができる。

北2a道路（SX390・710）と西4道路（SX700・750）との関係は、SX390・710側溝A～C期は、SX700・750側溝A～C期にそれぞれ接続することから、両道路のA～C期は同時期に機能したと考えられ、SX7001・7025整地層とSX390・SX710の施工は、西4道路A期の機能中に行われたと判断できる。一方、すでに道路①期で西4道路A期にSX500が接続していることから、北2a道路のSX500→SX390・710への造り替えは、西4道路側溝A期の中で行われたと考えられる。その際、西4道路側溝は取り付き部を中心に改修されたとみられるが、調査時点で確認できなかった。

〔北2a道路の改修と存続時期〕

SX7001・7025とSX710側溝A期は、両者の間に間層がなく出土遺物の様相も共通することから、西4道路側溝A期の機能時にSX7001・7025整地を行い、それを掘り込んで北2a道路を施工する工程が一連の作業で行われたと考えられる。こうした道路の道路施工方法は、道路①期と共に通する。

北2a道路のSX500からSX390・710への造り替えに際し、西4道路東側の北2a西4区や北3西4区も、道路沿いを中心に整地が行われた。このことから、北2a道路の造り替えは道路の改修・メンテ



図版702 D区整地層と道路との関係

西4道路				北2a道路				時期			
SX700南北道路跡	SX750南北道路跡	SX500東西道路跡	SX390東西道路跡	SX710東西道路跡	年代根拠	遺構期	年代根拠	遺構期	年代根拠	遺構期	年代根拠
SX700・SX750帶地層(遺物:10世紀末土塁)											
A期	須恵器ハコ切り坏 A期	S0857 S0940 S07015	土師器手持モヘラ ケヌリ主体	-	-	-	-	-	-	8世紀末～ 9世紀前葉	I期 (道路①)
B期		SX390・SX710に接する B期	SX700・SX7025帶地層(遺物:9世紀前～中葉主)	A期	A期	土師器・須恵器モヘラ 急切坏	B期	土師器・須恵器モヘラ 急切坏	9世紀中葉	II～A期 (道路②)	
C期	洪水砂層(イベント堆積物) C期	火山灰堆積 赤燒土器高台塊	-	C期	上層に火山灰堆積	C期	上層に火山灰堆積	9世紀後葉 10世紀前半	9世紀後葉 10世紀前半	B～B期 (道路③)	
D期	D期	赤燒土器小皿	-				廃溝			10世紀後半	廃期 (道路④)

表89 西4道路跡と北2a道路跡側溝の対応関係

ナンスのみでなく、街区をリニューアルした工事の一環と考えられ、この両期を境に街区の土地利用も変化したと考えられる。したがって、街区の変化以後を道路②期とする（表89）。年代は、上限が北2a道路側溝A期と整地層出土遺物からみて9世紀中葉で、下限は北2a道路が廃絶する10世紀前半である。

[西4道路の洪水砂層（イベント堆積物）]

西4道路（SX700・750）では、北2a道路との交差点付近から南側の路面C期（9世紀後葉～10世紀前半）の下で洪水砂層を確認している。この洪水砂層は、珪藻化石の分析から、869年の貞觀津波に伴うイベント堆積物の可能性が指摘された（箕浦・山田・平野2014）。このため、西4道路・北2a道路B→C期の改修は、貞觀津波を直接的要因とした災害復旧であった可能性が考えられる。今後、各地点での分析によるデータの蓄積が待たれる。

c. 道路③期（10世紀後半）

西4道路（SX700・750）のC期からD期への改修は、側溝の掘り直しのみ行われた。灰白色火山灰降下後に改修された西4道路D期の側溝には、北2a道路（SX390・710）の側溝が接続していない。このことから、西4道路側溝D期以前に北2a道路は廃絶しており、西4道路-北2a道路交差点が消滅したと考えられる（宮城県教委1997）。一方、同交差点の南に位置する西4道路-北2道路交差点は、側溝D期段階でも機能している（図版702）。2つの交差点の状況から、西4道路を中心とする北2道路以北の街区は、北2a道路の廃絶によって、北2a西4区と北3西4区、北2a西5区と北3西5区がそれぞれ統合されたと考えられる。

西4道路D期側溝からは、赤燒土器坏・小皿、低台の土師器高台塊などが一定数出土したことから、10世紀中頃以降も道路が存続したと考えられる。10世紀後半のSB7035・7233（北3西4区）が、道路と同じ方向で建てられたことから、西4道路が10世紀後半まで存続したとみておきたい。

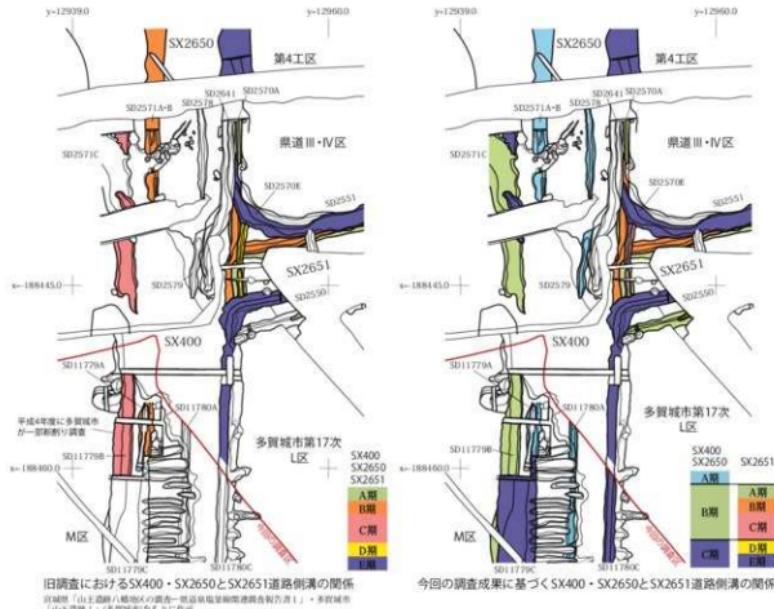
街区規模の変化は、土地利用の変化として捉えることができる。したがって、北2a道路が廃絶し、街区が統合された段階を一つの両期とみて道路③期とする（表89）。年代は、西4道路D期側溝出土遺物の年代観と北2a道路C期側溝が灰白色火山灰（十和田a火山灰：10世紀前葉）降下以降に改修が行われないことから、10世紀後半と考えられる。

B. 西5道路・北3道路の関係

西5道路 (SX400・2650) が北3西5区、北3西6区を分け、北3道路 (SX2651) が北3西5区方格地割外の境界となっている。今回の調査では、西5道路 (SX400) B期路面の下で、並行する2条の側溝と路面を検出し、B期は、先行する側溝・路面A期を一部埋め戻して改修・路面拡幅していることを確認した。この成果を踏まえて県道調査区道路側溝 (宮城県教委1994c)との対応関係を検討する。

これまでの西5道路 (SX2650)に対する理解は、県道III・IV区で東側溝が5時期 (SD2570A～E)、西側溝が3時期 (SD2571A～C)あり、これを南側で確認した多賀城市第17次調査のSX400側溝A～C期を対応させ、東側溝と西側溝B期の間に位置するSD2578・2579は道路に伴わない遺構と捉えていた (宮城県教委前掲・多賀城市教委1997d) (図版703)。

今回、M区の調査で確認したSX400側溝A期 (SD11779A・11780A) は、その延長上にSD2571A・BとSD2578・2579があり、これらは位置関係から同一遺構と考えられる。このため、SD2571A・BとSD2578・2579をSX400A期側溝と判断すると、B期側溝以降の対応関係が修正され、西側溝ではSD2571CとSD11779BがSX400B期側溝、2571Cを壊す溝状の遺構がSD11779Cの延長で、C期側溝となる。東側溝ではSD2570AがB期側溝となり、SD2570EがSD11780Cと対応したC期側溝となる。したがって、これまでSX400側溝A期と北3道路 (SX2651) 側溝A期が接続したと捉え

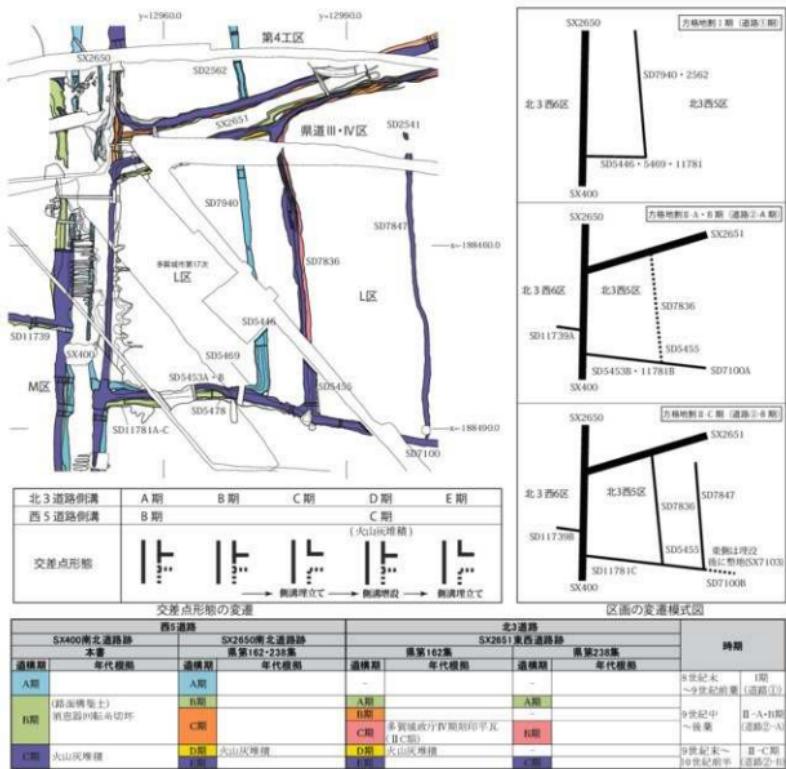


図版703 西5道路における側溝の対応関係

ていたが（宮城県教委前掲）、交差点を形成するのはSX400B期以降と考えられる。

この結果に基づいて、SX400と接続するSX2651道路側溝の対応関係についても検討を行う。これまでSX400A～C期に対して、SX2651は県道Ⅲ・Ⅳ区でA～Eの5時期（宮城県教委前掲）、北側の第4工区で3時期（A～C期）の変遷を確認し（宮城県教委2015a）、両者の対応関係はA期=A期、C期=B期、E期=C期としている（宮城県教委前掲）。県道Ⅲ・Ⅳ区の方が第4工区より改修の回数が多いが、これは前者に交差点があり、その部分を中心とした頻繁な部分的改修と判断できる。これによって、交差点形態が変化することとなり（宮城県教委1994c）、排水対応に苦慮していた様子が伺える。

ところで、SX400は側溝C期堆積土に灰白色火山灰が堆積しており、それはSX2651側溝D期でも認められる。交差点ではSX400東側溝C期とSX2651南側溝E期が交差点で「L」字に接続し、一連の溝となっている。しかし、交差点部分の断面図をみるとD・E期は堆積土の違いで分けており（宮



図版704 北3西5区・北3西6区の変遷

城県教委前掲)、これを同一時期と捉えると、灰白色火山灰の堆積と交差点の接続に矛盾がなくなる。以上のことから、SX400 東側溝 C 期と SX2651 南側溝 D・E 期は同時期と解釈できる。

この SX400 側溝 C 期 = SX2651 側溝 D・E 期を基準として、西 5 道路と北 3 道路の対応関係を整理すると、SX2651 は SX400 側溝 B 期から取り付くため、SX400 側溝 B 期 = SX2651 側溝 A～C 期、SX400 側溝 C 期 = SX2651 側溝 D・E 期と考えられる。SX2651 側溝 B・C 期は、SX400 側溝 B 期機能中に、交差点付近を中心とした低地部の側溝を部分的に改修したものと捉えておきたい。

以上の検討から、2 つの道路の対応関係を図版 703・704 で示した。SX400 側溝 B 期で SX2651 が接続し、街区(北 3 西 5 区)の北側を画する。また、SX400 と SX2651 には、道路側溝に街区を細分する区画溝が接続している。区画溝は道路側溝の変遷に伴って位置が変わることから、区画の土地利用は道路の改修に伴って変化したと考えられる。街区の変遷は、北 3 道路施工の以前と以後で道路①・②期に大別でき、北 3 道路施工後の道路②期は区画溝の変化から道路②-A・B 期に細分できる。

a. 道路①期（8世紀末～9世紀前葉）

[西 5 道路の施工]

西 5 道路 (SX400・2650) は、C 区南側で北 2a 道路 (SX500)・北 2 道路 (SX299・300) と接続し (宮城県教委 1997)、交差点は「開放型 (A 型) 交差点」である (齋藤 2016a)。このことから、西 5 道路の施工は西 4 道路 (SX700・750) 同時期で、8 世紀末～9 世紀前葉と考えられる。SX400A 期には、北 2 道路 (SX299・300) と北 2a 道路 (SX500) が造られて、北 2a 西 5 区まで街区が成立する。一方、北 3 西 5 区は北を画する道路はないものの、南側に多くの建物が認められることから、街区は成立していたとみられる。なお、同区は道路②期の北 3 道路の施工によって北辺が定まった。また、北 3 西 6 区については街区西辺と北辺を区切る道路がなく、街区の遺構も希薄であることから、街区が成立していなかったとみられる。こうしたことから、方格地割の成立 (8 世紀末～9 世紀前葉) をもって、道路①期とする。

[区画溝による街区の分割]

北 3 西 5 区は、SX400 東側溝 A 期に接続した SD5446・5469・11781 区画溝 A 期と、SD2562・7940 によって内部が分割されている。この SD5446・5469・11781A は、北 2a 道路北側溝から北に 64.7m (北 2 道路北側溝から 96.2m) 位置する東西溝で、西 5 道路の東 25.4m 地点で北へ屈曲し、SD2562・7940 として南北溝となる (図版 704)。この一連の区画溝は、北 3 西 5 区を西 1：東 2 ほどの短冊形に分割し、さらに SD11781A は、それを南北に細分したと考えられる。

b. 道路②期（9世紀中葉～10世紀前半）

[北 3 道路の施工]

側溝 B 期で拡幅された西 5 道路 (SX400・2650) に北 3 道路 (SX2651) が取り付く。両者の交差点形態は南北道路に東西道路が取り付く「南北優先型 (C 型) 交差点」(齋藤 2016a) であることから、SX400・2650B 期に続けて SX2651A 期が施工されたと考えられる。SX2651D・E 期は SX400 C 期に接続するため、SX2651B・C 期は部分的改修であり、交差点の形態を変えつつも SX2651A～C 期は一

貫してSX400・2650B期に接続した。

SX2651の施工年代は出土遺物から9世紀中葉以降と考えられ、接続するSX400B期も同時期と考えられる。北3道路が整備されたことにより、北3西5区の平面形と規模が確定する。したがって、北3道路が施工された9世紀中葉以降は、施工以前の道路①期と街区の平面形・規模が異なることから、道路②期と設定する。

〔区画溝による街区の分割〕

SX400・2650B期とSX2651A～C期で区画された道路②期の北3西5区は、SX400B期に接続するSD5453B・7100A期区画溝によって街区の中心で南北に分けられ、さらに、その北半はSX2651A～C期に接続するSD7836区画溝により東西に細分される（図版706）。その後、新たにSD7847が設けられるが、これらは灰白色火山灰降下前後に変化が認められる。SD7100・SD7836・5455・11781は改修されて継続するものの、SD7262・7847区画溝は廃絶し、街区東側は9世紀末～10世紀初頭にSX7103整地が行われSF7274・7277がつくられた。

一方、北3西6区では、SX400B期にSD11739区画溝A期が設けられる。SD11739は北2道路北側溝から約84m離れた位置で街区を南北に分割し、SX400C期にも改修されたSD11739Bが接続する。したがって、北3西6区は道路②期の段階で街区が成立し、灰白色火山灰降下後も存続したとみられる。

北3西5・6区の変化は、道路の新設や廃絶を伴わない街区内の土地利用の変化と考えられる。このため、道路②期中の小期と捉え、SD5453B・7100AとSD5455・7836によって北3西5区内が分割された段階を道路②-A期、SD7100B・5455・7836・7847が継続する一方、SD7262・7847が廃絶する段階を道路②-B期とする。道路②-A期のうち、道路に取り付く区画溝は少なくとも1回の改修が認められる。年代は、道路②-A期が区画溝と接続するSX400道路側溝B期・SX2651側溝C期の出土遺物から9世紀中葉～後葉と考えられ、道路②-B期は、SX7103整地層出土遺物と灰白色火山灰の堆積から、灰白色火山灰降下前後の9世紀末～10世紀前半と考えられる。

〔西5道路・北3道路の廃絶〕

西4道路（SX400・2650）と北3道路（SX2651）は、火山灰堆積後の改修が確認されていない。出土遺物にも10世紀後半を示すものなく、10世紀前半代に機能を喪失していったと考えられる。

C. 北2道路・西6a道路の関係

北2道路（SX12221）・西6a道路（SX582・5600・12092）・西6道路（SX580）の関係から、北3西6区・北3西5区には3期の変遷が考えられる。街区の変遷は道路の施工・廃絶と密接にかかわるため、道路①・②・③期として述べる。なお、本節で検討する西6a道路は、多賀城市第15・17次調査で西6道路としていたSX582・5600を含めている。

a. 道路①期（8世紀末～9世紀前葉）

〔北2道路と西6a道路の施工〕

北2道路と西6a道路は、多賀城市第15次調査区で接続する。北2道路と西6道路・西6a道路の交

北2道路						西6a道路						時期
SX2221東西道路跡	SX299東西道路跡	SX5824東西道路跡	SX579東西道路跡	SX12092東西道路跡	SX5600道路跡	SX582南北道路跡	土着	多賀城市45集	多賀城市29集	多賀城市45集	多賀城市39集	
遺構番	遺構形	年代初期	遺構番	遺構形	年代初期	遺構番	遺構形	年代初期	遺構形	年代初期	遺構形	遺構番
A期		A期		A期								
B期		A期 赤褐色土器片、火口 凹口・火口・火付 器、灰白色火山灰 1件		B期		A期		A期		-		少賀紀 1回 （追跡なし） 土着
C期		大山灰堆積 A期		大山灰堆積 少賀土器片		A山灰堆積		B期 赤褐色土器片・高 火口		SD5600 B期		少賀紀 2回 （追跡なし） 土着
D期		C期		D期				C期 赤褐色土器片・高 火口		-		少賀紀 1回 （追跡なし） 土着
E期						SD5600 D期		B期		-		少賀紀 無年 （追跡なし） 土着

表90 北2道路跡側溝と西6a道路跡側溝の対応関係

差点をみると、北2道路に対し西6a道路は開放型となるのに対し、西6a道路は北2道路に取り付く「一部閉塞型（D型）交差点」である（多賀城市教委1992b、齋藤2016a）。こうした形状の違いは西6a道路の施工が北2・西6道路に遅れることを示唆する。以下、交差点形態に加えて、道路側溝に堆積した灰白色火山灰を基準に対応関係を検討する。

北2道路は各次調査によって異なる遺構番号（SX299・579・5824・12221）が付与され、いずれも側溝に3～4時期の変遷がある（宮城県教委1997、多賀城市教委前掲・1997d）。SX579を除いて、灰白色火山灰はSX299が側溝B期、SX5824は側溝C期、SX12221が側溝C期に認められる。SX299のみ側溝B期で灰白色火山灰がみられるが、A期から赤焼土器壺、須恵器回転糸切环などが出土しており、遺物の様相は他調査区の北2道路側溝B・C期と共通する。したがって、SX299側溝A期は大きな改修が行われないまま長期間機能し、灰白色火山灰は北2道路全体の変遷からみて、C期に堆積したとみられる。

一方、西6a道路は各次調査でSX582・5600・12092として報告され、側溝に1～4時期認められる（多賀城市教委前掲）。灰白色火山灰の堆積は、SX582：SD585・586上層、SX5600：側溝D期上層、SX12092：側溝B期である。北2道路と西6a道路における灰白色火山灰の堆積状況を比較すると、後者が前者より相対的に新しい側溝に認められる。こうしたことから、北2道路は西6a道路より早い段階から機能していたと考えられる（表90）。

〔北2道路の施工年代〕

北2道路は、多賀城市第12次調査F区で西4道路（SX750）、E区で西5道路（SX400）、多賀城市第15次調査区で西6道路（SX580）と交差している。3本の南北道路との交差点は、いずれも側溝が「L」字に接続する「開放型（A型）交差点」（齋藤2016a）であることから、西4・5・6道路と北2道路は同時期の施工で、年代は8世紀末～9世紀前葉と考えられる。この二期を道路①期とする。

道路①期の北3西6区は、街区西側や北側を区切る道路がなく同時期の遺構が少ないとから、街区はまだ成立していなかったと判断しておきたい。一方、北2西6区は、北2道路（SX12221）A期側溝にSD12113区画溝が取り付き、街区を東西に分割しているため、街区は成立していた可能性が高い。したがって、道路①期の段階での西5-西6道路間は、北2道路が最も北に位置した道路であり、街区と地割外を区切っていたと考えられる。

b. 道路②・③期（9世紀中葉～10世紀後半）

[西6a道路の施工]

北3西6区は、西6a道路（SX582・5600・12092）が施工され北2道路に取り付くことで、西・北側が画され、街区が成立したと考えられる。また、SX12092の北側延長については、M区北側から県道調査区で確認されたSX2652道路跡につながるとみられる。その場合、SX12092は北2道路から北東に延びたのち東西方向となり、さらにJ区北東隅で屈折したことから、街区の形は方形とならず「L」状となる。

西6a道路は、北2道路の施工（8世紀～9世紀前葉）に遅れること、北半部分（SX2652）は、側溝に残りが悪いものの堆積土に灰白色火山灰が認められないことから、9世紀中葉に施工され、北半は10世紀前半のうちに廃絶したとみられる。したがって、9世紀中葉～10世紀前半を道路②期とする。

[西6a道路・北2道路の廃絶]

西6a道路南半（SX582・5600・12092）は灰白色火山灰堆積後も改修が行われ、道路機能が維持された。SX12092に取り付くSD12234区画溝A期にも灰白色火山灰の堆積がみられる。灰白色火山灰堆積後の改修から判断すると、西6a道路の南半は少なくとも10世紀前半まで機能していたと思われ、10世紀後半に道路が廃絶したとみられる。

SX12092廃絶後の北3西6区は、SD5601D・11855区画溝が街区北から西側を画した。街区内にはSE12205井戸跡、SF12085煙跡、SX11900・12089整地層など10世紀後半の遺構がみられるものの、道路②期に較べて非常に少ない。街区南側の北2道路も側溝の改修が行われず、その上をSX11900・12089整地層が覆う。北2道路には、SD5601D区画溝が接続している。したがって、北2道路も西6a道路と同じく10世紀後半段階で徐々に機能を喪失し、北3西6区もまた廃絶したと考えられる。こうした変化が認められることから、10世紀後半を道路③期とする。

D. 八幡・伏石地区の変遷

これまでの道路や整地層の検討から、八幡・伏石地区は道路①期：8世紀末～9世紀前葉、道路②期：9世紀中葉～10世紀前半、道路③期：10世紀後半の3時期に大別することができる。さらに、道路②期は側溝と接続する区画溝から細分が可能である（道路②-A・B期）（表91）。

西4道路												西5道路			北2道路			北2a道路			北3道路			西6a道路			時期
SX700	SX750	SX400	SX2650	SX12221	SX299	SX5824	SX579	SX500	SX910	SX710	SX651	SX12092	SX5600	SX582	SX7026	SX7031	SX7026・SX7031		SX7026・SX7031	SX7026・SX7031	SX7026	SX7031	SX7026	SX7031			
本蓋	本蓋	本蓋	本蓋	県162	本蓋	県174	市45	市29	本蓋	本蓋	本蓋	本蓋	市45	市29	本蓋	本蓋	本蓋	本蓋	本蓋	本蓋	本蓋	本蓋	本蓋				
SX7026・SX7031												SX7026・SX7031			SX7026・SX7031			SX7026・SX7031			SX7026・SX7031						
A期	A期	A期	A期		A期		A期	A期	A期	A期	A期	SD8452	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8世紀末～9世紀前葉 （道路①期）				
B期	B期			B期		B期		B期	B期	B期	B期	-	A期	A期	A期	A期	A期	A期	A期	A期	A期	9世紀中葉 （道路②-A期）					
C期		C期			C期			B期	C期	C期	C期	-	B期	B期	B期	B期	B期	B期	B期	B期	B期	9世紀後半 （道路②-B期）					
D期	D期				D期			C期	D期	D期	D期	-	C期	C期	D期	D期	D期	D期	D期	D期	D期	10世紀後半 （道路③期）					
废弃												废弃			废弃			废弃			废弃						
SD5601D												SD5601D			SD5601D			SD5601D			SD5601D						

表91 八幡・伏石地区における道路の変遷

こうしたことから、八幡・伏石地区における街区の変遷は、道路の改修や側溝に接続する区画溝と密接にかかわっていたと考えられる。したがって、道路①・②・③期を方格地割Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期と呼んで検討を進めることとした。

a. 方格地割Ⅰ期（8世紀末～9世紀前葉）

方格地割が成立した時期で、年代は8世紀末～9世紀前葉と考えられる。真北に延びる南北道路（西4・西5道路）と、東西に延びる東西道路（北2道路）が同時に施工された。また、南北道路にはSX12100道路の位置を継承した北2a道路（SX500）が取り付くが、西4道路を挟んだ東西では道路1本分の食い違いが認められる（図版702）。北3道路は未施工である。こうした結果、北2道路以南に北2西4区、北2西5区、北2西6区が、北2道路以北は北2a西4区、北2a西5区が成立するが、北2a道路と北2道路との間は狭いため、北2a西5区の平面形は東西114m・南北23～27mの長方形を呈する。また、北3西4区と北3西5区については、北を画する北3道路はないものの、北2a道路側に施設が多く認められることから街区としての利用は開始したと考えられる。

b. 方格地割Ⅱ期（9世紀中葉～10世紀前半）

新たに北3道路と西6a道路が施工された時期で、年代は9世紀中葉～10世紀前半と考えられる。両者は他の道路と直角に交差せず、距離も一町に近似した値とならないなど方格地割の規制を受けていない。各道路の変化は以下のようにまとめられる。

北2a道路は、SX500からSX390・710に造り直され、西5道路は路面の拡幅が行われた。また、北3道路がつくられた結果、北3西4区と北3西5区は北の境界が明確になるが、北2a道路は方格地割の規制を受けていないため、街区の面積が不均等で、両地区は北2a西4区と北2a西5区に対して少なくとも3倍以上の面積を有する。このうち、北3西5区の規模は東西114mで、南北が西辺で99m、東辺は128mほどと推定され、区画の平面形は台形である。一方、西5道路の西側は西6a道路（SX12092）とそれと一連とみられるSX2652道路が造られて北3西6区が成立するが、街区の平面形は西側が南北64mであるのに対し、東側は西5道路に向けて北東に延びており、方形とならない。

I期から継続する道路は、915年の灰白色火山灰降下前に1～2回、降下後に1回の側溝改修が認められる。中でも灰白色山灰降下前の西4道路側溝には、B期とC期の間に、869年の貞觀津波に起因するとみられるイベント堆積物が確認された（宮城県教委2014）。また、西6a道路北半（SX2652）は堆積土に灰白色火山灰が認められないことから本期の後半に廃絶し、北2a道路や北3道路、西3a道路、北2道路以北の西5道路も灰白色火山灰降下後に側溝の改修が認められないことから、本期には廃絶したと考えられる。

c. 方格地割Ⅲ期（10世紀後半）

方格地割の終末期で、年代は10世紀後半である。本期に機能していた道路は、北2道路、西4道路、北2道路以南の西5道路、西6a道路と考えられる。その結果、北2a西4区、北2a西5区はそれぞれ北3西4区と北3西5区に統合されるとともに、北の境界、のちには両者そのものの境界が不明確となる。

(2) 街区の様相

八幡・伏石地区の方格地割は、道路や整地層の関係から3期に大別できる（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期）。このうち方格地割Ⅱ期（以下、方格地割を省略する）は、道路側溝の改修が915年の灰白色火山灰降下前に1～2回、降下後に1回と共通性が認められ、北2a道路との交差点以南の西4道路で、側溝B期とC期の間に869年の貞觀津波に起因するとみられるイベント堆積物が確認されている。したがって、Ⅱ期はイベント堆積物を介在させて、その前の9世紀中葉と後で期間中に灰白色火山灰が堆積する9世紀後葉～10世紀前半の2期に大別でき、後者への改修・造営は貞觀地震からの災害復旧であった可能性が考えられる。

区画溝は、本章第6節と本節（1）での検討からⅠ期とⅡ期に変化が認められる。Ⅱ期の中でも9世紀中葉と後葉では北2西4区・北3西5区・北3西6区で区画溝の位置や方向が変化する。また、灰白色火山灰降下前後（10世紀前半）になると、北2西4区で区画溝が廃絶する。

一方、街区内の掘立柱建物は、本章第6節の検討で時期ごとに主体を占める方向が異なることがわかつており、両者の間にはⅠ期（8世紀末～9世紀前葉）：西へ傾く、Ⅱ-A期（9世紀中葉）：真北を向く、Ⅱ-B期（9世紀後葉～10世紀前半）：東へ傾く、という傾向性が指摘できる。さらに、Ⅱ-B期は掘方埋土に赤焼土器や灰白色火山灰を含んで、その後半に位置付けられるものがあるものの、数は少ない。

こうしたことから、Ⅱ期は9世紀中葉（Ⅱ-A期）と9世紀後葉～10世紀前半（Ⅱ-B期）に大別し、後者は出土遺物や火山灰の混入、遺構の重複関係から明確に分けられたものについて、古段階と新段階に位置付けることとする。また、北3西5区を細分した道路②-A・B期は方格地割Ⅱ-A・B期古段階とⅡ-B期新段階期に対応すると考えられ、道路②-A期の間に方格地割Ⅱ-A期からⅡ-B期へ変遷したとみておきたい。以下、各報告書で示された年代観や本章第6節で検討した遺構の年代にもとづき、各時期における街区の様相を概観する（註1）。

a. 方格地割Ⅰ期（8世紀末～9世紀前葉）

方格地割形成期で、八幡・伏石地区では北2・北2a道路（SX500）と西3～5道路が街区を構成する。南北道路（西3～5道路）の間隔は不均等で、西4区と西6区の東西幅は概ね等しいものの、両者と西5区の東西幅は最大で25mほど異なる。また、北2道路の北には前代の東西道路を継承した北2a道路がつくられたため、北2a西4・5区は方形基調の他区と異なり東西に細長い長方形となった。街区内外の建物は、今回の調査の他に、八幡c期・伏石c-1・2期（宮城県教委1997）、八幡C2群（宮城県教委1994c）、八幡・伏石B群（同2009）が該当する。本期の建物は8世紀後半の区画Ⅱ期と同じく真北より西へ傾くものを主体とするが、傾きはより小さくなる傾向が認められる（表79-1）。街区ごとの特徴は以下のとおりである（図版705）。

（北2西4区）

伏石地区（宮城県教委1997）と今回調査したG区で、区画溝跡4条（c-1・2期：SD3034・3064・3120・3170）、掘立柱建物跡10棟（c-1・2期7棟：SB3411・3424・3433・3828・3832・3858・

3860、本書3棟：SB11074・11304・11306)、井戸跡1基(本書：SE11061)などを確認している。

街区はSD3064によって東西に分割され、さらに西側はSD3034・3120・3170によって南北4つに細分される。SD3064東側は掘立柱建物が南部に集中する。西側は、北から2つ目の区画にSE11061井戸と掘立柱建物が認められる。井戸は中央にあり、周辺には建物が認められない。その南北の区画には明確な遺構が認められないことから、耕作域もしくは未利用地だったと考えられる。

(北2西5区)

多賀城市第10次調査E区・第12次調査F区・第21次調査G区(多賀城市教委1991b・1992b・1997d)と今回調査したF区で、掘立柱建物跡8棟(SB5290・5297・5301・5324、本書4棟：SB11601・11602・11603・11606)と土坑1基(SK11534)などを確認している。区画溝は認められない。また、E区SB5155とG区SB5761は年代が報告されていないが、建物方向や柱筋が他の建物と揃うことから同時期の可能性が高い。

建物は桁行3間以下の小型が多く、方向はすべて西に偏る。F区では重複する建物があるものの、桁行4間の東西棟SB11603を主屋とし、西脇に副屋のSB5301・11606がL字形に並び、さらに西外にSB5267・5290・5324が縦列に並ぶ配置とみられる。

(北2西6区)

八幡地区A区(宮城県教委1997)と今回調査したJ区で、区画溝跡2条(SD12213AB)、井戸跡1基(SE66)などを確認している。SD12213は北2道路南側溝に接続して南に延びており、街区を東西に2分する。SE66井戸跡は9世紀代としたが(宮城県教委前掲)、出土遺物に須恵器壺Gなどが含まれることから、9世紀前葉から機能した可能性がある。このほかの施設は、中世屋敷を囲む堀跡などで壊されており判然としない。

(北2a西4区)

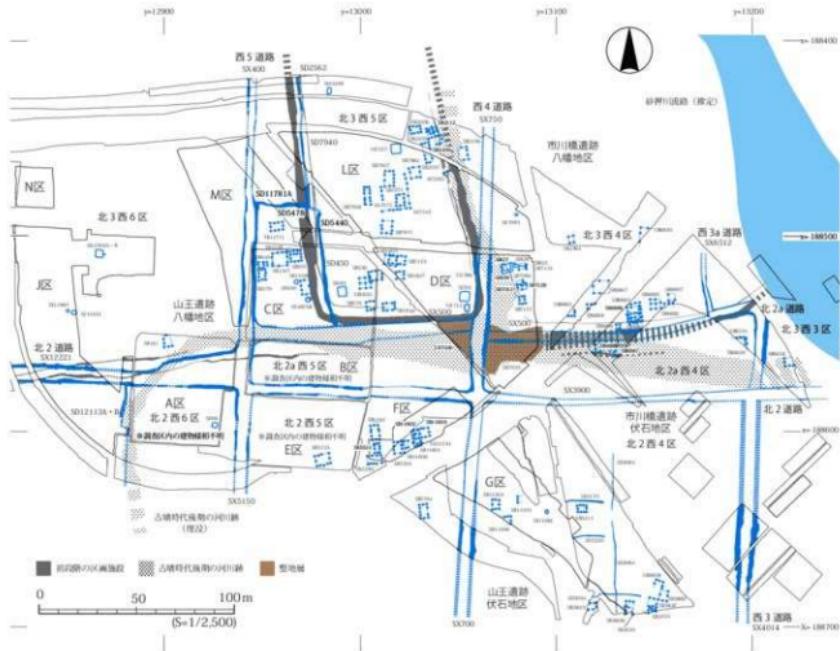
市川橋遺跡八幡地区(宮城県教委2009)と今回調査したD区で、掘立柱建物跡4棟(B群：SB6531・6659・6687・6689)とSX7033整地層などを確認している。区画溝は認められない。SX7033は、西4道路西側の北2a道路(SX500)施工に伴う整地で、街区北西部まで及ぶ。本街区西側は9世紀中葉のSX7025整地層に覆われており、下層については未調査のため、本期の様相は不明な点が多い。

(北2a西5区)

今回調査したD区で、SX7026整地層を確認している。区画溝は認められない。西4道路西側の北2a道路(SX500)施工に伴う整地で、街区北東部まで及ぶ。これまでの報告では遺構の時期について見解が示されていないため、街区の具体的な様相は不明である。

(北3西4区)

山王遺跡県道調査区と市川橋遺跡八幡地区(宮城県教委1994c・2009)、および本書のD・L区東側で、整地層1面(本書：SX7033)、掘立柱建物跡17棟(1994c-C2群：SB2364、2009-B群11棟：SB6662・6663・6664・6665・6666・6694・6697・6830・6847・6858・6862、本書5棟：SB7012・7094・7126・7131・7157)、竪穴住居跡4棟(本書：SI825・826・827・839)、土坑1基(本書：SK7093)などを確認している。区画溝は認められない。



図版705 方格地割Ⅰ期の様相

街区南西隅付近はⅡ-A期のSX7001整地層に覆われており、下層は未調査であるため、本期の様相が不明となっている。SX7033は西4道路西側の北2a道路(SX500)施工に伴う整地で、街区南西隅まで及ぶ。掘立柱建物跡は街区西側と南端東側で確認した。すべて西へ偏り、規模は桁行5間、梁行3間の南北棟SB6664を除くと桁行3間以下の小型である。竪穴住居は一辺5~6m(SI825・839)と4m前後(SI827)のものがある。

〈北3西5区〉

八幡地区県道調査区とC区(宮城県教委1994c・1997)、および今回調査したD・L・M区で、区画溝跡6条(c期:SD450・2562・5440・5478、本書:SD7940・11781A)、掘立柱建物跡24棟(1994c-C2群6棟:SB2106・2037・2056・2070・2109・2112、1997-c期9棟:SB530・576・579・635・643・1547・1548・1558・1619、本書9棟:SB1605・1607・7153・7251・7682・7926・7927・7941・11771)、掘立柱跡2条(本書:SA7545・7575)、竪穴住居跡4棟(c期:SI493・705、本書:SI7257・10409)、井戸跡5基(SE467AB・630、本書:SE712・7292)などを確認している。

本区の南を画するSX500東西道路跡や西側を東西に分けるSD450・7940区画溝跡は、前者がSX12100、後者はSD461と区画Ⅱ期の道路や区画施設の位置・方向を強く意識してつくられており、街区の土地利用のあり方は基本的に前段階を踏襲したとみられる。その結果、街区は東の大区画と西の小区画に分けられ、後者はさらにSD11781A区画溝で南北に細分された。

これらを東区、西南小区、西北小区と呼ぶと、西南小区は主屋であるSB1547・1548を中心としてSB579・635・643・1558・11771がコ字形に配置され、主屋南側は広場であったと考えられる。東副屋SB1558の西にはSE630井戸があり、南のSE467ABもまた、年代が9世紀前半であることから当期から機能したとみられる。その北に位置する西北小区は明確な遺構が認められることから、畑などの耕作域であったとみられる。東区は中央と南西に建物群があり、それぞれに井戸が伴う。前者は部分的に塀を巡らすが、ともに明確な建物配置は認められない。

（北3西6区）

八幡地区A区（宮城県教委1997）と今回調査したJ区で、掘立柱建物跡1棟（SB141）、竪穴住居跡2棟（SI12305AB）、井戸跡2基（SE11935・11967）などを確認している。SB141は9世紀後半以前の建物としたが（宮城県教委1997）、建物方向からみて本期とみられる。遺構が少なく内部を分割する区画施設も認められないが、南半で井戸2基が確認されていることから、北2道路の未調査部分に建物群が展開したとみられる。

b. 方格地割II-A期（9世紀中葉）

方格地割II期は、I期で施工された道路の改修や造り直し（北2a道路）に加え、新たに北3道路や西6a道路が施工された時期である。年代は9世紀中葉で、建物は重複関係から3時期以上変遷する。街区内外の建物は今回の調査の他に、八幡地区d-1期・伏石d-1・2期（宮城県教委1997）、八幡地区B群（宮城県教委1994c）、八幡・伏石地区C群（同2009）が該当する。本期の建物方向は、真北を向くものが主体である（表79-1）。街区ごとの特徴は以下のとおりである（図版706）。

（北3西3区）

本区は、中央を北西から南東に流れる砂押川によって東西に分かれ（図版730）。右岸（西側）は、流路と西3・西3a道路に挟まれて南北に細長く、市川橋遺跡伏石地区で、掘立柱建物跡6棟（C群SB6543・6545・6654・6655・6710・6711）などを確認している（宮城県教委2009）。建物は3時期以上変遷する。中でも、SB6543とII-B期のSB6544は桁行4間以上あり、掘方も1mを超える。特に前者は6間以上の東廂建物と城外の中でも有数の規模を持つ。その東には砂押川が流れることから、これらの建物群は河川交通にかかる施設であった可能性が考えられる。

左岸（東側）は、流路と西2道路に挟まれた逆三角形を呈し、3間以下の小型掘立柱建物跡や竪穴住居跡・井戸跡などが認められる（宮城県教委2001a）。右岸と左岸の施設を比較すると、右岸の建物が大きく3時期以上の変遷が認められることなどから、同じ街区でありながら、砂押川で隔てられた東西で施設様相が大きく異なっていたと考えられる。

（北2西4区）

伏石地区（宮城県教委1997）と今回調査したG区で、区画溝跡5条（d-1・2期：SD3123・3133・3140・3177、本書：SD11013）、掘立柱建物跡25棟（d-1・2期22棟：SB3340・3400・3413・3414・3415・3417AB・3419・3425・3429・3430・3431・3445・3446・3786・3787・3790・3811・3826・3829・3839・3865、本書3棟：SB11065・11206・11301）、竪穴建物跡2棟（c-3期：SX3024・3029）（註2）、井戸跡2基（c-3期：SE3038、本書：SE11011）、土坑1基（c-3期：

SK3016)などを確認しており、これに、出土土器の年代観から竪穴住居跡1棟(SI3634)が加えられる。街区内は、SD3140・3177・11013区画溝で南北に3分割され、中央はさらに同位置で重複するSD3123・3133で東西に細分された。これらを北から北区、中央西区、中央東区、南区と呼ぶと、北区ではSB3839を除く6棟(SB3340・3400・3786・3787・3790・3811)が、南の広場を囲んでコ字形に配置されている。中央西区では、西4道路により3棟の建物がL字形に配置され、主屋であるSB11065の南には広場を挟んでSE11001井戸が設けられた。

中央東区では、区画西よりに廟をもつ建物2棟(SB3413・3446)が南北に並ぶ。南区は東側に施設が集中する。二面廟のSB3445と3×2間のSB3419、2×2間総柱建物のSB3429・3431は東西に並び、その南には3間以下の小型建物3棟(SB3425・3826・3829)がコ字形に配置された。SX3024・3029は鍛冶工房と考えられ、SK3016からは漆付着土器や溶着滓が出土している(宮城県教委前掲)。鍛冶工房は重複するII-A期の建物より古いことから、南区の古段階は生産域であった可能性がある。

南区東側中央にあるSE3038井戸からは、「会津郡主政益継」と書かれた題菱軸木簡が出土し、街区内からは大戸産須恵器が多く出土した(本章第14節)。さらに、本区では多賀城外では数が少ない二面廟が2棟(SB3413・3445)認められる。こうしたことから、北3西4区は他に較べて格が高く、出土遺物から会津郡司が駐在した出張所が置かれた可能性が考えられる(宮城県教委前掲)。

〈北2西5区〉

多賀城市第10次調査E区・同市第12次調査F区・同市第21次調査G区と、今回調査したF区で掘立柱建物跡18棟(市調査区17棟:SB5153・5154・5176・5177・5186・5187・5189・5222・5294・5295・5296・5300・5528・5530・5908・5910・5991、本書:SB11604)などを確認している。区画溝は認められない。

このうち多賀城市調査E・G区の建物は年代が示されていないが、建物方向から判断して当期とみておきたい。区画溝は確認されることから、街区北半の規模は1/2町以上であった可能性が考えられる。建物群は東西2ブロック認められる。前者は、3時期に変遷するものの10棟(SB5222・5294・5295・5296・5300・5528・5530・5908・5910・11604)が中央の広場を囲んでコ字形に配置された。

〈北2西6区〉

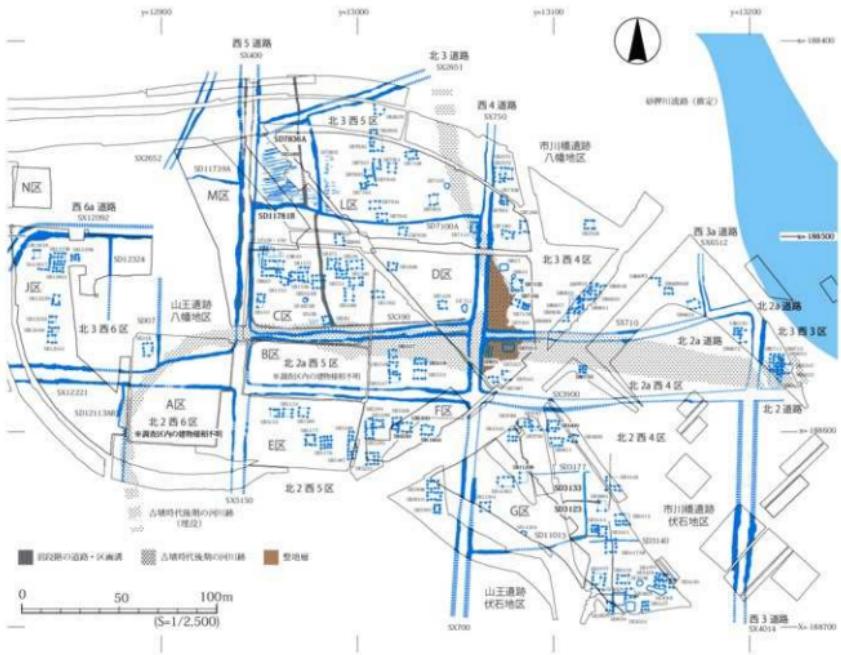
街区北半はSD12113AB区画溝で東西に分けられる。西側は建物などの施設が認められないことから、畑などの耕作域であったか未利用地だったと考えられる。東側は大半が中世期の屋敷に壊されたため、様相は不明である。

〈北2a西4区〉

市川橋遺跡八幡地区(宮城県教委2009)と今回確認したD区で整地層1面(SX7025)、掘立柱建物跡5棟(2009-C群3棟:SB6530・6672・6750、本書2棟:SB7045・7087)、竪穴建物跡1棟(SX7013)、畑跡1面(SF801)などを確認している。区画溝は認められない。SX7025は西4道路東側の北2a道路(SX710)施工に伴う整地で、街区北西隅まで及ぶ。調査面積が少ないため、街区の様相は不明である。

〈北2a西5区〉

多賀城市第12次調査F区と今回確認したD区で、掘立柱建物跡5棟(SB5418・5547・5548・



図版706 方格地割II-A期の様相

5553・5557)などを確認している。区画溝は認められない。多賀城市調査F区の掘立柱建物跡は年代が示されていないが、建物方向から当期と判断した。建物は街区東半にあり、2棟と3棟が南北に並ぶ。西半の様相は不明である。

(北3西4区)

八幡地区の県道調査区（宮城県教委1994c）、市川橋遺跡八幡地区（同2009）と今回調査したD・L区で、整地層1面（SX7025）、掘立柱建物跡22棟（1994c-B群3棟：SB2071・2072・2358、2009-C群12棟：SB6603・6685・6699AB・6848・6850・6851・6852・6855・6856・6857・6861、本書7棟：SB7155・7156・7158・7180・7266・7308・7901）、竪穴住居跡1棟（SI827）、井戸跡1基（SE844）などを確認している。区画溝は認められない。SX7001は西4道路東側の北2a道路（SX7100）施工に伴う整地で、街区南西隅まで及ぶ。建物は中央に少なく、西4道路や北2a道路沿いに多いが、未調査部分が多く、配置は不明である。

(北3西5区)

八幡地区県道調査区とC・D区（宮城県教委1994c・1997）、および今回確認したD・L・M区で、区画溝跡3条（SD7100A・7836A・11781B）、掘立柱建物跡35棟（d-1期19棟：SB410AB・475・

502AB・526AB・554AB・581・637・640・899・1555・1556・1571・1584・1586・1592、B群2棟：SB2603・2629、本書14棟：SB1606・7144・7429・7448・7764・7900・7903・7930・7942・7944・7949・7951・7956・7957)、井戸跡4基(SE467AB・712・SE7105)、畑跡4面(SF426・429(430)・SX5489、本書：SF7803)などを確認している。

街区はSD7100A・11781B区画溝で南北に2分され、後者はさらにSD7836A区画溝で北西隅と他の区域に細分される。これらを南区、北区、北西小区と呼ぶと、南区の東側は掘立柱建物が3棟と井戸1基のみで空閑地が目立ち、中央部は耕作域として利用された可能性がある。一方、西側は建物が集中しており、SB581・899を除く16棟が広場を囲んでコ字形に配置された。その中央にある北廻付東西棟のSB502ABが主屋と考えられ、広場の中央にはSE467AB井戸がつくられる。

北区は中央付近に建物や竪穴住居が集中するが明確な建物配置は認められない。その東西は、西端のSD7836A沿いが畑となることから、明確な遺構が認められない街区東側も生産域であった可能性がある。北西小区は畑が一面に広がる。この場所は、前代が空閑地で次代も畑が作られたことから、方格地割I・II期をとおして耕作域であったと考えられる。

（北3西6区）

八幡地区A区（宮城県教委1997）と今回調査したJ・M区で、区画溝跡2条(SD07・11739A)、掘立柱建物跡9棟(SB318、本書8棟：SB12039・12045・12046・12053・12258・12498・12616・12643)、掘立柱塗跡1条(SA12617)などを確認している。

西6a道路(SX12092)はSX2652につながるとみられ、道路は南北一東西一南北とクランク状に曲がることから、街区は方形とならず北半の東西幅が極端に狭い「匁」状となる。これは、街区の外側に湿地帯が広がるために、こうした地形上の制約から方形にならないと考えられる。街区はSD07区画溝で東西に2分されることから、それぞれを東区、西区と呼ぶと、前者はさらに11739A区画溝で南北に細分されるが、他の施設の様相は不明である。東区の北側は西5道路を挟んだ向かい側（北3西5区の北西小区）が畑であったことから、耕作域の可能性が高い。西区は西側に建物が集中しており、6棟(SB12039・12045・12046・12053・12258・12643)が柱筋を揃えて南北に並んだ。

c. 方格地割II-B期（9世紀後葉～10世紀前半）

街区を構成する道路はII-A期と同じで、側溝改修のみ行われたが、前段階とは道路の一部が廃絶すること、区画溝による分割や建物方向が異なることから、II-B期とした。年代は9世紀後葉～10世紀前半である。本期の建物群は今回の調査の他に、八幡地区d-2期・伏石地区d-3・4期（宮城県教委1997）、A1群（同1994c）、八幡・伏石地区D群（同2009）が該当する。

本期の後半になると、西6a道路北半(SX2652)や区画溝の一部が廃絶し、北2a道路は側溝の改修が行われなくなる（図版708）。また、掘立柱建物の中でも、柱痕跡や柱抜取穴に灰白色火山灰が入る伏石地区d-4期や掘方埋土に赤焼土器が入ることで10世紀前半と考えられるものがある。このため、それらとの重複関係や出土遺物から古い一群（伏石地区d-3期）を特定できる場合があるが、こうした仕分けができない遺構が多いことから、II-B期として括し、限定できた遺構については古段階（9世紀後葉）、新段階（10世紀前半）と位置付けることにしたい。

掘立柱建物は、東へ傾くものが多くなる（表79－2）。また、II-A期に較べて建物規模が大きくなり、廂または縁を持つ建物が増加して柱筋を描えるものが増える。各街区の主要遺構と特徴は以下のとおりである（図版707）。

（北2西4区）

伏石地区（宮城県教委1997）と今回調査したG区で、区画溝跡4条（SD3025・3026・3097・11063）、掘立柱建物跡19棟（d-3期10棟：SB3401・3423・3426・3427・3432・3807・3810・3812・3836・3840、d-4期3棟：SB3789・3835・3859、本書6棟：SB11066・11067・11073・11302・11303・11305）と、井戸跡2基（SE3310・3728）、土器集積遺構1基（SX3012）、土坑3基（SK3040・3047・3111）、烟跡1面（SF3909）などを確認している。このうち、d-4期の建物3棟とSX3012、SK3040・3111、SF3909は新段階の遺構で、同期は区画溝が認められない。

街区はSD3097・11063によって南北に2分され、さらに南側はSD3025・3026によって西2：東1の割合に細分される。一方、北側では区画溝が認められないため、1/2町の区画であったと考えられる。これらを北区、南西区、南東区と呼ぶと、北区は西側に建物が集中する。このうち、二面廂のSB3401が主屋で、その両側には2×2間総柱建物が1棟ずつ置かれた。主屋の南側は広場で、西側にSE3728井戸が置かれた。一方、南西区は中央に三面廂のSB3423があり、その南東に2×2間総柱建物がつくられた。三面廂建物は、北1西3区の国司館主屋など多賀城外の建物の中では一部で認められるのみで、本区の格式の高さを示すものと考えられる。

なお、SD3025・3026は同時期であることから道路としての機能を指摘したが（宮城県教委前掲）、SD3026が北側でクランクするのに対しSD3025ではそれが認められること、他の街区で同様の道が確認されていないことから別時期の区画溝の可能性がある。

（北2西5区）

多賀城市第10次調査E区・同市第12次調査F区・同市第21次調査G区と今回調査したF・G区で、掘立柱建物跡13棟（多賀城市調査9棟：SB5152・5174・5175・5496・5529・5765・5908・5910・5985、本書4棟：SB5302・11005・11605・11607）、井戸跡1基（SE5056）などを確認している。街区北半部には区画溝が認められない。多賀城市調査E・G区の建物は年代が報告されていないが、建物方向から判断して本期とみられる。建物は桁行3間以下の小型で、廂は付かない。

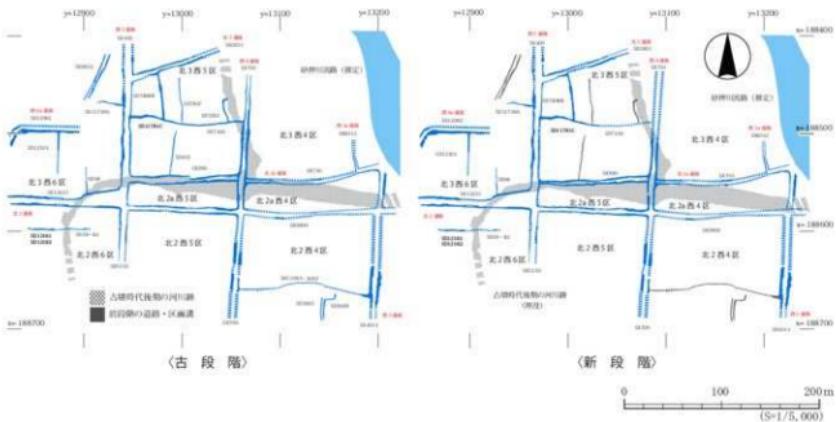
（北2西6区）

八幡地区A区（宮城県教委1997）と今回調査したJ区で、区画溝跡4条（SD59・82・12161・12162）、掘立柱建物跡4棟（SB12216・12217・12218・12222）、井戸跡2基（SE76・12192）、烟跡2面（SF12224・47（48））などを確認している。

街区北半は、II-A期の東西からSD12161・12162区画溝による南北の分割に変化する。これを北区、南区と呼ぶと、前者は、II-A期に畑などの耕作域か未利用地だった西側に桁行2間以下の小型建物やSE12192井戸がつくられる。中央には畑（SF12224・47（48））とSE76井戸があるが、その東側の様相は不明である。南区は、中央に畑が認められる以外は遺構が認められず、耕作域か未利用地だったとみられる。北区、南区とも中央が畑となったのは、街区中央に古墳時代後期の河川跡があり、



図版707 方格地割II-B期の様相



図版708 II-B期における道路・区画施設の変化

周囲に較べて低かったため、耕作域として利用されたと考えられる。

〈北2a西4区〉

市川橋遺跡八幡地区（宮城県教委2009）と今回調査したD区で、掘立柱建物跡4棟（2009-D群：SB6686・6688、本書2棟：SB7161・7162）などを確認している。また、竪穴建物跡1棟（SX7013）は前段階から存続する。区画溝は認められない。建物は東へ傾くもの（SB6686・6688）と西へ傾くもの（SB7161・7162）があり、後者は重複関係や出土遺物から新段階に位置付けられる。

〈北2a西5区〉

八幡地区B区（宮城県教委1997）と多賀城市第12次調査F区で、掘立柱建物跡6棟（SB5492・5549・5552・5554・5556・5558）、井戸跡2基（SE217・5239）、烟跡1面（SF188）などを確認している。区画溝は認められない。このうち、赤焼土器环などが出土したSE5239井戸と畝間の堆積土に灰白色火山灰を含むSF188烟は、新段階と考えられる。

建物跡は年代が報告されていないが、方向から判断して本期とみられる。街区東半は中央に建物が集中しており、その中で最も大きなSB5554が主屋とみられる。井戸（SE5239）は、それらから離れた東南隅につくられた。西半は、北2a道路沿いの古墳時代後期河川跡の上にあたる部分にSF188煙がつくられる。建物は確認できていないが、西南隅に井戸（SE217）がつくられたことから、煙と井戸の間に建物があったとみられる。

〈北3西4区〉

山王遺跡八幡地区（宮城県教委1994c）と市川橋遺跡八幡地区（同2009）および、今回調査したD区で、掘立柱建物跡18棟（A1群・D群7棟：SB2280・2281・2356・2365・6661・6829・6848、本書11棟：SB7039・7040・7106・7154・7160・7236・7241・7267・7272・7286・7428）、井戸跡1基（SE837）、溝跡3条（SD776・795・802）、烟跡1面（SF809）などを確認している。区画溝は認められない。これらの中で、新段階の遺構としては掘立柱建物跡3棟（SB7241・7272・7428）、井戸跡1基（SE837）、溝跡2条（SD776・795）、烟跡1面（SF809）があげられる。

建物はII-A期と比べて規模が大きくなり、街区中央にもつくられた。方向は東へ偏るものが多い。その中で、西4道路沿いのSB7039・7040・7160と中央のSB2365・2281・2356は柱筋を描えている。また、SF809煙やSE837井戸は、西4道路沿いあった。そこは古墳時代後期河川跡の上にあたり、建物をつくるのに不向きな場所に井戸や煙がつくられたと考えられる。

〈北3西5区〉

八幡地区C・D区（宮城県教委1997）と県道調査区（同1994c）、および今回調査したD・L・M1区で、整地層1面（SX7103）、区画溝跡8条（SD402・5453・5455・7100B・7262・7836B・7847・11781C）、掘立柱建物跡31棟（d-2期13棟：SB411・434・580・582・623・636・648・768・897・1564・1588・1604・1611、A1群4棟：SB2036・2102・2107・2108、本書14棟：SB7086・7381・7409・7430・7431・7447・7760・7763・7928・7931・7933・11770・11772・11773）、竪穴住居跡3棟（SI7212・10435・10439）、井戸跡3基（SE413AB・7105）、烟跡5面（SF395・7274・7277・7803・SX5489）、土坑5基（SK879・883・7291・7622・7719）などを確認している。

このうち、新段階の遺構は、北東部の整地層1面（SX7103）とそれに伴う畠跡2面（SF7274・7277）のほか、土坑2基（SK7622・7719）があげられる。

街区は、II-A期の区画溝が継続する（SD7100B・7836B）。このため、細分された街区を前代と同じく南区、北区、北西小区と呼ぶと、北区は古段階にSD7262・7847によって3分割されるが、新段階に継続しない。南区は、SD402によって東3：西2の割合で細分されるが、新旧段階への帰属は不明である。建物は真北と東に傾くものが多く、廟をもつものが増加する。

北西小区は、前代から引き続き耕作域（SX5489）である。北区は前代に較べて建物が少なくなり、その分耕作域が増加したとみられる。また、西側のSD7836BとSD7847の間は、前代からのSF7803畠が継続したとみられる。中央部分は建物や竪穴住居が散在し、SB7933の南は広場となる。一方、SD7262の東や北は建物や井戸が認められるものの、空閑地が多い。古墳時代後期の河川跡の上にあたることから、主として耕作域として利用されたとみられる。

南区のSD402西側は、西5道路よりに建物がつくられた。5棟の建物（SB411・434・580・636・648）はL字形に配置されており、その東端のSB648は規模が大きく、前が広場となることから主屋と考えられる。広場を挟んだ北2a道路沿いには、SB1564とSF395畠が認められる。前者は、内部にSE413井戸を有することから、井戸の覆屋と考えられる。

〈北3西6区〉

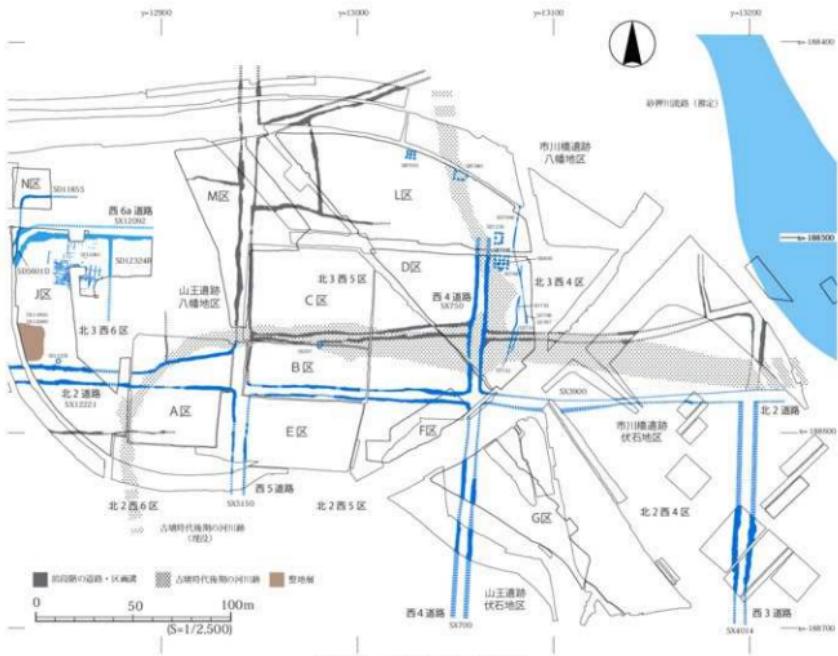
八幡地区A区（宮城県教委1997）と今回調査したJ・M区で、区画溝跡3条（SD08・11739B・12324A）、掘立柱建物跡12棟（SB11924・11970・11981・12024・12031・12091・12267・12497・12563・12564・12615・12638）、掘立柱塀跡1条（SA12640）、竪穴住居跡1棟（SI11936）、井戸跡1基（SE11934）、土坑1基（SK11726）などを確認している。このうち、新段階の遺構として区画溝跡1条（SD11739B）、掘立柱建物跡5棟（SB12031・12497・12563・12564・12615）、井戸跡1基（SE11934）があげられる。

II-A期と同じく、いびつな形状の街区である。区画溝はSD08・12324Aが新設され、SD11739は掘り直しが行われる。街区は、SD08・12324A区画溝で東西に3分された。それぞれを東区、南区、西区と呼ぶと、東区はさらに11739B区画溝で細分されるが土坑1基を確認したにどまり、前代同様、主として耕作域であったとみられる。南区もまた掘立柱建物1棟と遺構が少ない。西区の掘立柱建物の方向は、真北を向くものと東へ偏るもののが認められる。中央に位置する廟付建物のSB11970・12024が時期違いの主屋と考えられ、その南東に位置するSB11981が副屋であったとみられる。

新段階も街区内は3分割されたとみられるが、北区と南区は遺構が認められず、耕作域もしくは空閑地とみられる。西区は掘立柱建物跡5棟と井戸跡1基（SE11934）がある。建物はすべて東へ傾くが、全体に散在する。また、西6a道路北半（SX2652）は、本段階のうちに廃絶したと考えられる。その場合、西6a道路の終点が問題となるが、周辺の調査区で延長が確認されていないことから、J区北側で途切れた可能性を考えておきたい。

d. 方格地割Ⅲ期（10世紀後半）

前代で北2道路より北の西5道路・北2a道路・北3a道路・西6a道路北半が廃絶し、他の道路も本



図版709 方格地割III期の様相

期で側溝の改修が認められなくなる。年代は10世紀後半と考えられる。他の遺構についても顕著な減少傾向が認められる。一方、井戸が認められること、本期以降、土器が普段使いの器でなくなる傾向が強まるため出土土器からの年代特定が難しくなること（村田1995）、時期不明の遺構が多数存在することを考えると、本来の施設の数はもっと多かったと考えられる。街区の概要は以下のとおりである（図版709）。

（北3西4区）

前代で北2a道路は廃絶するため、本区は北2a西4区を統合して拡大するが、同時に西3a道路も廃絶することから、北と東への街区の範囲が不明瞭となる。掘立柱建物跡2棟（SB7035・7233）、溝跡6条（SD733・732・796・797・2014・7096）、土坑1基（SK836）などを確認している。西4道路は灰白色火山灰降下後に大規模な改修が認められないものの、東側溝から赤焼土器小皿が出土したこと、建物の方向は道路と同じであることから、10世紀後半で機能していたと考えられる。また、建物・溝・土坑は西側に分布することから、西4道路沿いに居住域があったと考えられる。

（北3西5区）

前代で北2a道路は廃絶するため、本区は北2a西5区を統合して拡大するが、同時に西5道路や北3道路も廃絶することから、北と西への範囲が不明瞭となる。掘立柱建物跡2棟（SB7380・7935）、井

戸跡1基(SE297)を確認している。SE297は北2a道路を壊してつくられた。その他の遺構は不明であること、L区を中心として時期不明の烟跡を確認したことから、街区の大部分が耕作域となった可能性がある。

〈北3西6区〉

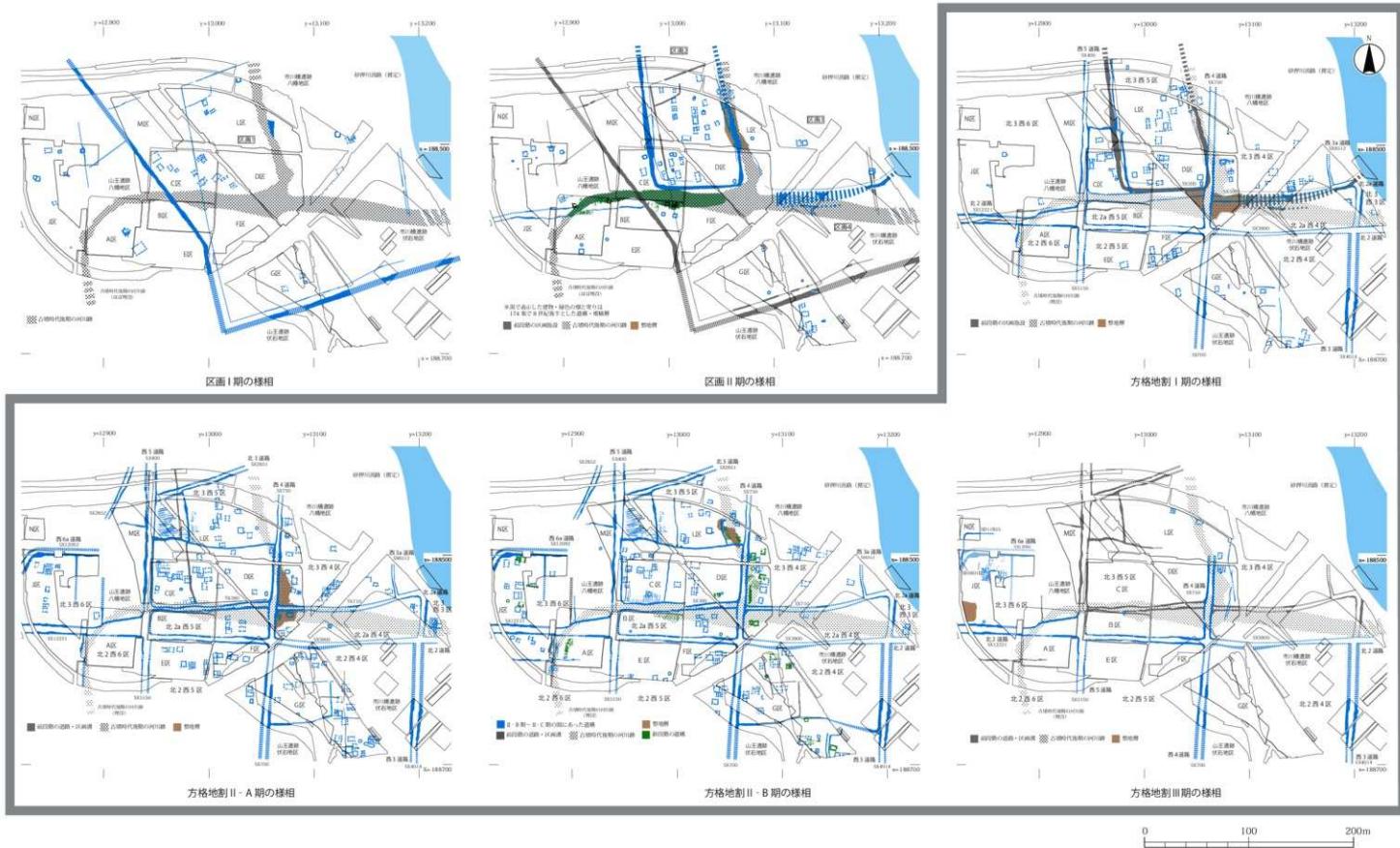
西6a道路存続段階はSD12324B1区画溝が街区を東西に分け、道路廃絶後はSD5601D・11855に替わる。街区の南西隅で整地層2面(SX11900・12089)、烟跡1面(SF12085)、南側で井戸跡1基(SE12205)を確認している。街区北側が耕作域に変化したが、SE12205があることから、北2道路沿いに居住域があったとみられる。

本節と前節で検討を行った八幡・伏石地区の変遷は、図版710のようにまとめることができる。

註

註1 多賀城市教委による八幡・伏石地区の調査成果は、概報のみのものが多く、その部分については位置付けの見通しが付いた遺構についてのみ取り上げている。今後、本報告書が刊行されたのち、今回は不明とした部分を含めて、改めて検討・修正を行う必要がある。

註2 174集では竪穴式の工房跡としたが、本書の内容と合わせるため竪穴建物と呼んでいる。



12. 古墳時代の七北田川下流域と砂押川流域

ここでは、過去の調査成果も踏まえて七北田川下流域と砂押川流域における古墳時代遺跡の動態を概観する。対象とするのは仙台市宮城野区・多賀城市・利府町の遺跡で、そのうち、多賀城跡・同廢寺跡・山王・市川橋・高崎・新田・鴻ノ巣・沼向の7遺跡は長年の調査によって、ある程度内容が明らかになっている。特に沼向遺跡では、仙台平野北部における微地形環境の変遷案が提示されており（仙台市教委2010b）、そうした成果を参考しながら検討を行うことにしたい。

（1）前期

A. 遺跡群の様相

仙台平野の古墳時代前期は、塩釜式土器の前半と後半に大別される（辻1995）。前半は名取川下流域で浜堤に立地する仙台市藤田新田遺跡で居住域が確認されたほか（宮城県教委1994d）、自然堤防上にある戸ノ内遺跡や安久東遺跡などで方形周溝墓が確認された（仙台市史編さん委員会1995）。さらに南の愛島丘陵では、名取市飯野坂古墳群の觀音塚古墳や宮山古墳などがつくられたことから（藤沢2015）、周辺に集落が存在したと考えられる。これに対し、山王遺跡をはじめとする七北田川下流域では、同期の遺跡は確認されていない。

前期後半には名取川下流域で名取市雷神山古墳・仙台市遠見塚古墳という仙台平野で最も大きな前方後円墳が築造された。その頃になって、仙台平野北部でも集落や古墳・水田が認められるようになるため、居住域が北へ拡大したと考えられる。七北田川下流域の集落は、潟湖の北岸と南岸、七北田川と砂押川が形成した潟湖北西側の低地で認められる（図版711、表92）。

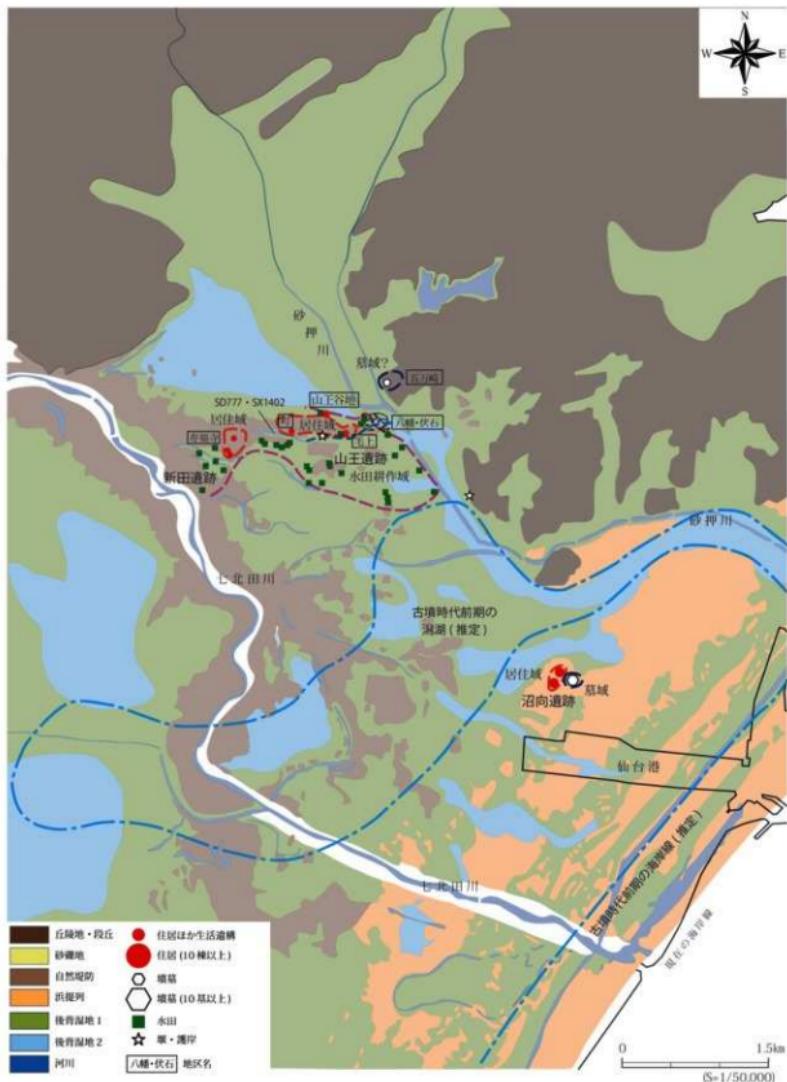
（潟湖北岸）

山王遺跡毛上・山王谷地（註1）・町地区で集落が認められる。それらは、八幡地区SD777と一連の毛上地区SX1402、さらにそこから西へ延びる河川跡の左岸に位置する（宮城県教委1998・多賀城市教委2006d・2010c）。その中で最も東に位置する毛上地区では、居住域から水田耕作域へ変遷すること、北東に位置する山王谷地地区では居住域と水田耕作域が近接することから、居住域の広がりは自然堤防の東端付近から西側の町地区にかけてと考えられる。

居住施設としては、毛上地区で周溝をもつ建物跡（飯島1998ほか）1棟と竪穴住居跡2棟、町地区では竪穴住居跡2棟が確認された。こうした成果と飯島義雄氏の指摘（飯島2008）を踏まえて山王谷地地区の遺構を再検討すると、SX2818方形周溝墓・SB2879建物跡・SX2823方形周溝墓・SI2869住居跡・SD2833溝跡は、いずれも広溝式の周溝をもつ建物跡と考えられた（図版714）（註2）。したがって、古墳時代前期後半の山王遺跡の集落は、竪穴建物と平地建物で構成されたと考えられる。

集落の北・東・南には水田がつくられ、特に南側の耕作域は東西1.9km、南北0.8kmの広大な範囲に広がっていた。また、東町浦地区の堰（多賀城市埋文センター1990b）や堰の口地区の護岸施設を伴う南北溝（多賀城市教委2004b）は、こうした水田耕作に係わる施設と考えられる。

一方、周辺で古墳や方形周溝墓などで構成された墓域は未確認である。八幡地区と砂押川をはさんで北に位置する多賀城跡五万崎地区で方形周溝墓が発見されたことから（多賀研1978）、西に集落を



※地形分類図と沿岸・海岸線の範囲は、仙台市教委2010年1月第1-4回「仙台平野北部地形分類図」「仙台市文化財報告書第360集、沿岸道路第4~34次調査」p.35・601をもとに作成。それに、北側の利府町域や仙巣市域を追加、追加分については丘陵・段丘と低地に大別したのみで、複地形を表現していない。

※複地形分類図の範囲は、松本秀明ほか2005「仙台市北部、七北田川下流域に発達する自然堤防地形の形成と湖沼埋積過程」[2005年日本地理学会春季学術大会講演論文No.67]をもとに、松本秀明氏の助言を受けて當野裕彦氏が作成

図版711 古墳時代前期の七北田川下流域遺跡群

		古墳時代前期			古墳時代中期						古墳時代後期						奈良時代		
		4世紀後半			5世紀			6世紀			7世紀		8世紀			前半		後半	
		前葉	中葉	C	前半	中葉	後葉	前半	中葉	後葉	前半	中葉	後葉	前半	後半	未定	初期	前半	後半
本著者調査		A	B	C	I	2A	2B	3	4	5	6	7							
柏山 2007	四期				引日一古	引日一中	引日一新	佐井一古	佐井一新	御門一	御門二	御門三	御門四	御門五	御門六	御門七	御門八	御門九	御門十
西道跡・仙 280	上田原町八幡第一後半	南小舟	引日一古	引日一中	引日一新	佐井一古	佐井一新	御門一	N-2	N-V中間	V-	V-2	V-3						
浜田跡・仙 360	③B	④A	④B	③A	③B1	⑤B2	⑥A	⑥B1	⑥B2	⑦A	⑦B	⑧	⑨						
須惠器 (近つ飛鳥 2006)		I式			II式						III式						IV式		
須惠器 (山辺 1981)		TK1	TK2	(ON46)TK208	TK23	TK47	MT15	TK10(MT28)TK43	TK209	TK217	TK46						鷹山1期	鷹山2期	多賀城1期
宮 舞																			
山王・市川帆瀬跡																			
<中谷地地区>																			
駒 193集																			
<鶴見地区>																			
駒 184集																			
<八幡・伏木地区>																			
駒 161・174・216集 多 27・30・45集																			
<G丘陵・五・七郎原>																			
自 175集、多 100集																			
集 <船岡通跡(5)>																			
多 2集、多 4集																			
<町・西町通跡区>																			
自 175集																			
多 2・88集、多 24集																			
高崎跡																			
市 61・80・96集																			
西河跡																			
市 115・134集																			
新田跡																			
市 29-45・56-108-132集																			
路 <篠道跡>																			
自 35集、自 280-400集																			
浜田跡																			
仙 360集																			
八幡岐 B道跡																			
利 4-11集																			
古 岩奈・川袋古墳群																			
古 134集、利 1集																			
福岡殿古墳																			
多 安 4																			
道安寺横穴石室																			
利 2集																			
行開塚・入江塚・																			
東光寺横穴石室																			
仙 史 2																			
大代・橋本御城(源平)																			
多 安 4																			
田原堀横穴墓群																			
年 1986-2002																			
高崎跡																			
市 89・103・104集																			
利 200集																			
利 200集																			

* 村山編年 2007 の 2A・2B は、2 種土器を細分した呼称
** 多賀城は多賀城市教委。仙は仙台市教委。利は利府町教委。年は多賀城跡調査研究系年表。多史は多賀城史、仙史は仙台市史を指す

※数字は記述した遺構数の総数

※自 124-126穴住跡、則は則塙古墳跡、則建は則建溝をもつ建物跡、方は方塙、円は円塙、方圓は方圓溝を指す

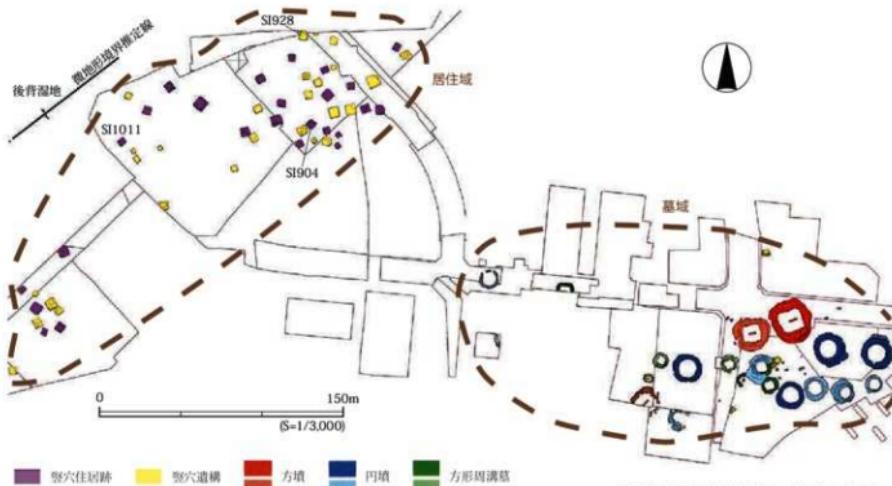
※6世紀より始まる後半の道ノ堀遺跡は、遺構数は少ないが土器が大量に出土しているため、多数の遺構が存在したと考えられる

※城外集落とは、城外外縁として置かれた城外集落遺跡

※前都跡の古墳時代後期の遺構集落、8世紀の遺構集落は八幡、伏木地区と一体となって機能

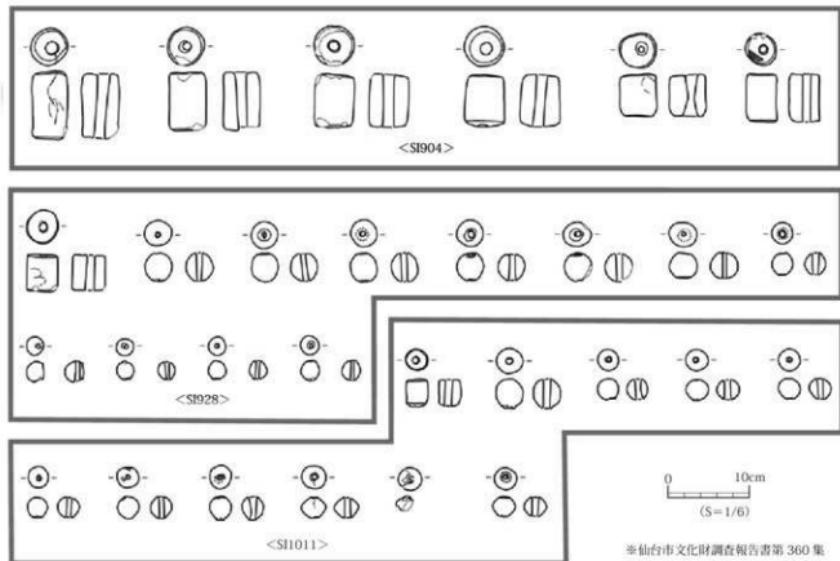
※奈良時代前半の鶴峯跡には遺設が不明だが、河川跡から大量に遺物が出土しているため、多数の遺構が存在したと考えられる

表92 古墳時代前期から奈良時代における七北田川下流域と砂押川流域遺跡群の動態



※仙台市文化財調査報告書第360集(第9分冊)
第11図(P446)と第2図(P479)を合成

図版712 沼向遺跡 古墳時代前期の集落



図版713 沼向遺跡SI904・1011竪穴住居跡、SI928竪穴造構出土土錘

見下ろす丘陵上に墓域が形成された可能性も考えられよう（図版711）（註3）。

〈潟湖北西側〉

多賀城市新田遺跡北寿福寺地区から南寿福寺地区にかけて住居関連遺構が確認されており、潟湖北西側の自然堤防に集落が形成された。このうち、南寿福寺地区に周溝をもつ建物跡1棟、その南側では水田耕作域が確認されている（多賀城市教委2009aなど）。山王遺跡の集落と隣接するが、SD777・SX1402河川の対岸（右岸）に位置すること、古墳時代中期から後期は本遺跡から仙台市鴻ノ巣遺跡にかけて一連の集落が形成されたことから、山王遺跡の集落とは区別して考えたい。

〈潟湖南岸〉

潟湖南の浜堤に立地する仙台市沼向遺跡では竪穴住居跡25棟、竪穴遺構29基、方墳3基、円墳10基、方形周溝墓7基や土壙墓などで構成される集落跡が確認された（仙台市教委2010b）。居住域は浜堤と後背湿地の境界線に沿って設けられ、墓域は空閑地をはさんだ東に形成された（図版712）。同時期の山王遺跡や新田遺跡の集落と比較すると、沼向の集落には周溝をもつ建物がなく、水田耕作域が認められない一方、墓域が居住域に隣接するという違いが指摘できる。

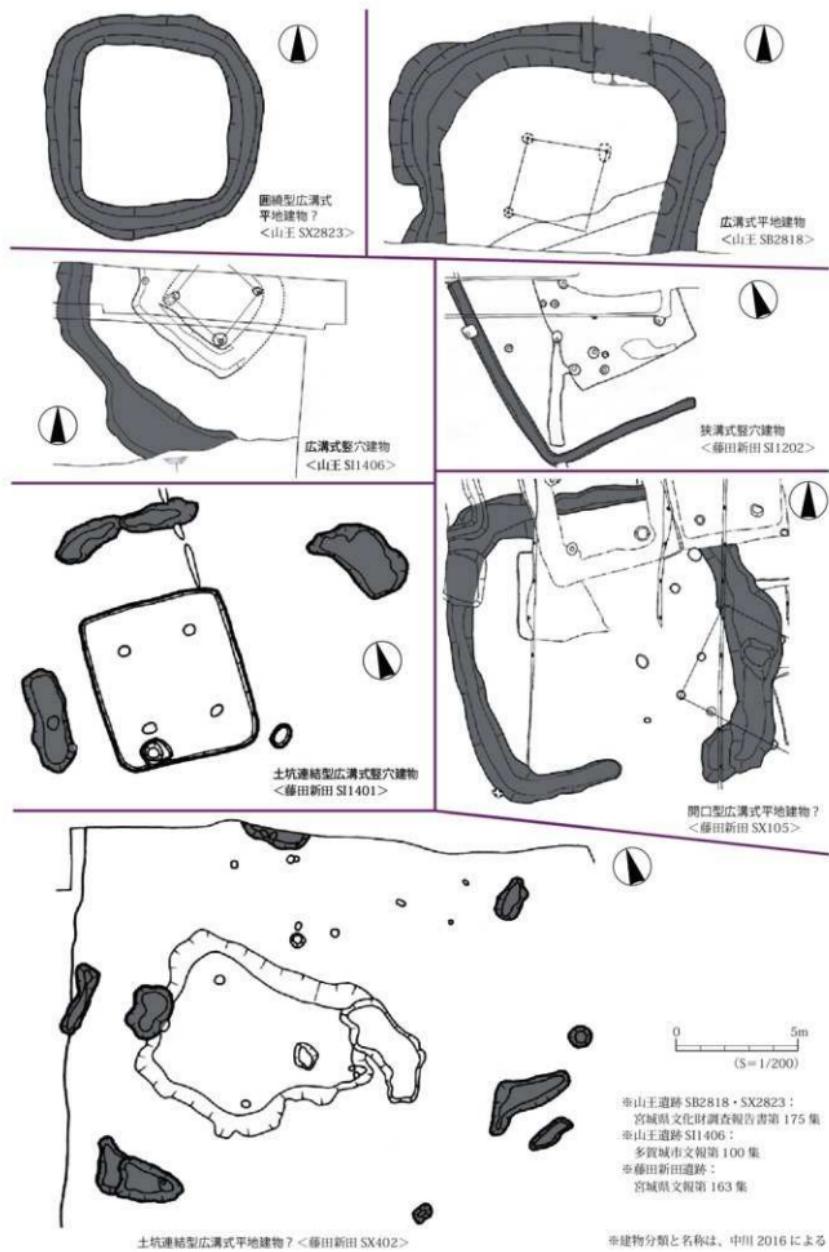
また、沼向遺跡は土器組成中に有孔鉢が安定して認められる一方、水田耕作域が不明で、住居跡や竪穴遺構から土錘が多量に出土した（図版713）。こうしたことから、外海に近い南岸の沼向集落は主たる生業が漁撈であるのに対し、稲作適地となる北岸の山王集落や北西側の新田集落は稲作というように、潟湖をめぐる集落群でそれぞれの環境を生かした組織的な生業体系を形成した可能性が指摘されている（仙台市教委前掲）（図版711）。その場合、広い範囲で居住域や水田耕作域が認められた山王・市川橋遺跡が拠点集落と考えられる（註4）。

B. 古墳時代前期集落の景観について

古墳時代前期後半の山谷地地区SB2818やSX2823は、前述のとおり「周溝をもつ建物跡」と理解を改めている。また、SI2869もその可能性が高いと考えられた。こうした広溝式の周溝をもつ建物跡は、毛上地区のSI1406や新田遺跡南寿福寺地区SB1779（多賀城市教委前掲）でも確認されており、同時期の山王遺跡や新田遺跡では、竪穴住居とともに集落の最も重要な構成要素であったといえる。

そこで、宮城県内における古墳時代前期の集落跡を見直すと、仙台市藤田新田遺跡でも周溝をもつ建物跡と理解できる遺構が認められた（宮城県教委1994d）（図版714、表93）（註5）。SI401竪穴住居跡はSK403・404・410・411土坑が環状に分布すること、うちSK404・410から同時期の土器が出土したことから土坑連結型であり、SI112竪穴住居跡も西側にSD120溝跡やSK137土坑があることから、土坑連結型とみられる。さらに、SI401の北にあるSK402・412～414・416～420土坑は環状に分布すること、うちSK412・414は前期の遺構と考えられることから同じ構造であり、内部に平地建物が想定される。

また、SD105・106は方形周溝墓と報告したが、同時期のSI112・114と近接する点が山谷地地区と同じであること、沼向遺跡では居住域と墓域は明確に分かれることから、周溝墓ではなく周溝をもつ建物と理解する方がよく、その場合、SD105・106は広溝式平地建物と考えられる。このほか、



土坑連結型広溝式平地建物？<藤田新田 SX402>

*建物分類と名称は、中川 2016 による

図版714 古墳時代前期における周溝をもつ建物跡—山王・市川橋遺跡、藤田新田遺跡

遺跡名	地区名	遺跡名	時期	周溝 (m)			周溝 内			建物			備考	文献
				平面	分岐	幅	深さ	平面	高さ	構造	平面	高さ		
1 山王・ 山田新田	山王谷地	SB2818	後半	四角 or 圓口	広溝	1.0 ~ 2.7	0.2 ~ 0.6	圓丸 方形	9.4 × 7.7 ~	平地 (1 × 1)	方形	3.3 × 3.1	SD2818 方形周溝溝、SD2879	宮城県 1998
2 山王・ 山田新田	山王谷地	SB2823	後半	四角	広溝	1.0 ~ 1.5	0.3	圓丸 方形	6.1 × 6.5	平地	—	—	SD2823 方形周溝溝と報告	宮城県 1998
3 山王・ 山田新田	山王谷地	SE2869	後半	四角 or 圓口	広溝	1.0 ~ 3.9	0.1 ~ 0.4	圓丸 方形?	7.0 × 5.0 ~	壁穴	方形	3.5 × 3.4	壁穴住居と報告。圓溝は SD2833 と別溝が一体	宮城県 1998
4 山王・ 山田新田	毛上	SH1406	後半	四角 or 圓口	広溝	1.0 ~ 2.5	0.3 ~ 0.4	圓丸 方形?	—	壁穴	方形	(5.0 × 5.0)	多市 2010c	
5 新田	南寺福寺	SH1779	後半	圓口	広溝	0.3 ~ 3.5	—	圓丸 方形	11.8 × 10.0	平地	—	—	SD1779 + 1780 + 1832 + 1834 + 1877 と報告	多市 2009a
6 藤山新田		SH112	前半?	土坑 溝粘	広溝	0.8 ~ 1.4	0.2 ~ 0.3	不整 円形?	—	壁穴	方形	(5.4) × 5.4	壁穴住居、西側に SK120 + 137	宮城県 1994d
7 藤山新田		SB105	—	圓口	広溝	0.6 ~ 2.3	0.1 ~ 0.3	圓丸 方形	10.2 × 9.6	平地	—	—	SD105 方形周溝溝と報告。同時 代の住居に近接	宮城県 1994d
8 藤山新田		SB106	前半	圓口	広溝	0.5 ~ 1.4	0.1 ~ 0.5	圓丸 方形	7.6 × 11.6	平地	—	—	SD106 方形周溝溝と報告。同時 代の住居に近接	宮城県 1994d
9 藤山新田		ST202	前半	四角 or 圓口	狭溝	0.4 ~ 0.6	0.1 ~ 0.6	方形	—	壁穴	方形	5.2 × 4.9 ~	壁穴住居と報告。圓溝は SD205 だが、土取り幅が狭い。	宮城県 1994d
10 藤山新田		SH401	前半?	土坑 溝粘	広溝	0.8 ~ 2.0	0.3 ~ 0.5	不整圓 形?	10.5 × 12.0 ~	壁穴	方形	6.0 × 6.7	壁穴住居と報告。SK403 + 405 + 410 + 411 が壇状に分布	宮城県 1994d
11 藤山新田		SB402	前半?	土坑 溝粘	広溝	0.8 ~ 2.1	0.1 ~ 0.4	不整 円形	(13.0 × 14.0)	平地?	—	—	圓溝に分布する SK402 + 412 + 414 + 416 + 417 + 420 から推定	宮城県 1994d

*遺構記号は平地建物を SB、壁穴建物を SH とし、報告書で建物と認識していなかった場合、構成する遺構の中で一番若い番号と組合せて名付けている

*前半時は堀溝式開口の前半と後半に分けた

*平地の名前は、中川尾2016に従った

*建物構造の平地は平地建物、壁穴は壁穴建物を指す

*複数層は東西×南北

*文献の多市は多賀城市教委を指す

表93 古墳時代前期の周溝をもつ建物跡

SI202は壁穴住居の西と南をL字形にSD205が囲んでいるが、溝幅が0.6m以下であるため狭溝式壁穴建物と考えられる。

周溝をもつ建物跡は、北陸地方や関東地方で多く確認されている。周間に溝や連続する土坑を掘り、その掘削土を内側に積んで雨水の進入を防いだ建物で、その特徴から低地の集落に多いと考えられている（中川2016ほか）。山王遺跡や新田遺跡は七北田川下流域の自然堤防、藤田新田遺跡は名取川下流域の浜堤にあり、立地傾向は共通する。一方、同時期の浜堤に形成された沼向遺跡では、壁穴住居跡が25棟発見されながらも同種の遺構は確認されていない（仙台市教委前掲）。

このことは、古墳時代前期の仙台平野において、壁穴住居や周溝をもつ建物などで構成された集落と周溝をもつ建物がない集落とが存在したことになり、今後は建物構成の違いと集落の性格との関係性、周溝をもつ建物自体の系譜や消長などについて総合的な検討が必要である。さらに、周溝をもつ建物には平地建物が含まれることから、従来の壁穴建物（住居）のみで構成された集落とは、景観的に大きく異なる。古墳時代前期の低地集落の調査や景観復元にあたっては、こうした点にも留意して作業を進めなければならない。

（2）中期

本章1節の検討から、古墳時代中期の土器は3段階に分けられ、それぞれの年代はA期が5世紀前葉、B期が5世紀中葉、C期は5世紀後半と考えられた。当該期の遺跡分布をみると、前期後半から続く潟湖北岸・南岸と七北田・砂押両河川が形成した低地北側に加え、新たに低地北奥の丘陵上に古墳（八幡崎B遺跡・郷楽遺跡）が認められる（図版716、表92）。これらのうち、潟湖を取り巻く集落群

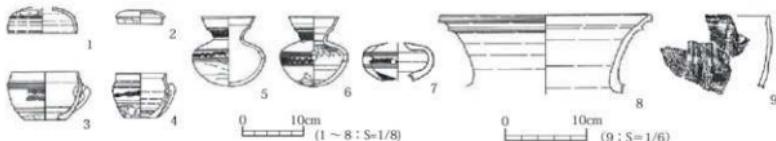
では墓域が確認されていない。以下、この年代観と遺跡のまとまりごとに古墳中期における七北田川下流域と砂押川流域の遺跡群についてみてみたい。

〈潟湖北岸〉

山王・市川橋遺跡では、八幡・伏石地区で5世紀前葉の集落跡が確認されている。東北地方で初現的かつ最北端となる竪穴鍛冶遺構を含む竪穴住居群が特殊な縦板塀と大溝で囲まれること、刀装具や琴柱形角製品といった威信材が出土したことから豪族居館と考えられる（宮城県教委1994b・1997・本書）。また、その北を画する河川に形成されたゴミ捨て場からは卜骨、製作途中の木製品や石製模造品が出土したことから、居館内部もしくは隣接地で祭祀が行なわれるとともにそれらの品々が製作された（図版717・718）。こうした豪族居館と関連施設群は、5世紀中葉以降の施設が認められないこと、前述のゴミ捨て場が厚い砂層に覆われることから洪水による被害で廃絶したと考えられる。

5世紀中葉は町浦・町地区東側で集落跡、丘陵部の高崎遺跡で石製模造品製作跡（多賀城市教委2001b）が確認されている。東町浦地区では大溝がコ字状に囲む一画が確認されていること（図版717）、町浦・町地区より仙台市大蓮寺窯製品（古窯跡研究会1976）を含むTK216～208型式期の須恵器が多く出土していることから（図版715）、東町浦地区の大溝で囲まれた遺構は豪族居館と推定されている（多賀城市史編纂委員会1991）。居館の外は、西町浦地区にかけて祭祀遺構や石製模造品の製作跡が確認され（多賀城市史編纂委員会前掲）、町地区東側ではカマドをもつ竪穴住居群の北端が東西溝で画されていた（宮城県教委1998・多賀城市教委2006d）。このため、町浦・町地区東側の集落は居館に隣接して祭祀遺構や製作工房があり、その北に住居群が展開する構造であったと考えられる。したがって、5世紀前葉の豪族居館を含む集落は、洪水を契機として八幡・伏石地区から西へ700m離れた町浦・町地区東側へ移動した可能性が高い（図版716）。

5世紀後半は町地区で集落、館前地区で祭祀に伴う括廻棄が確認されている（宮城県教委1998・2001a・多賀城市教委2006d）。ともに豪族居館を示唆する遺構・遺物が認められないため、この時期の居館の位置は不明である。また、石製模造品の製作跡は、潟湖北岸の西町浦地区や高崎遺跡（多賀

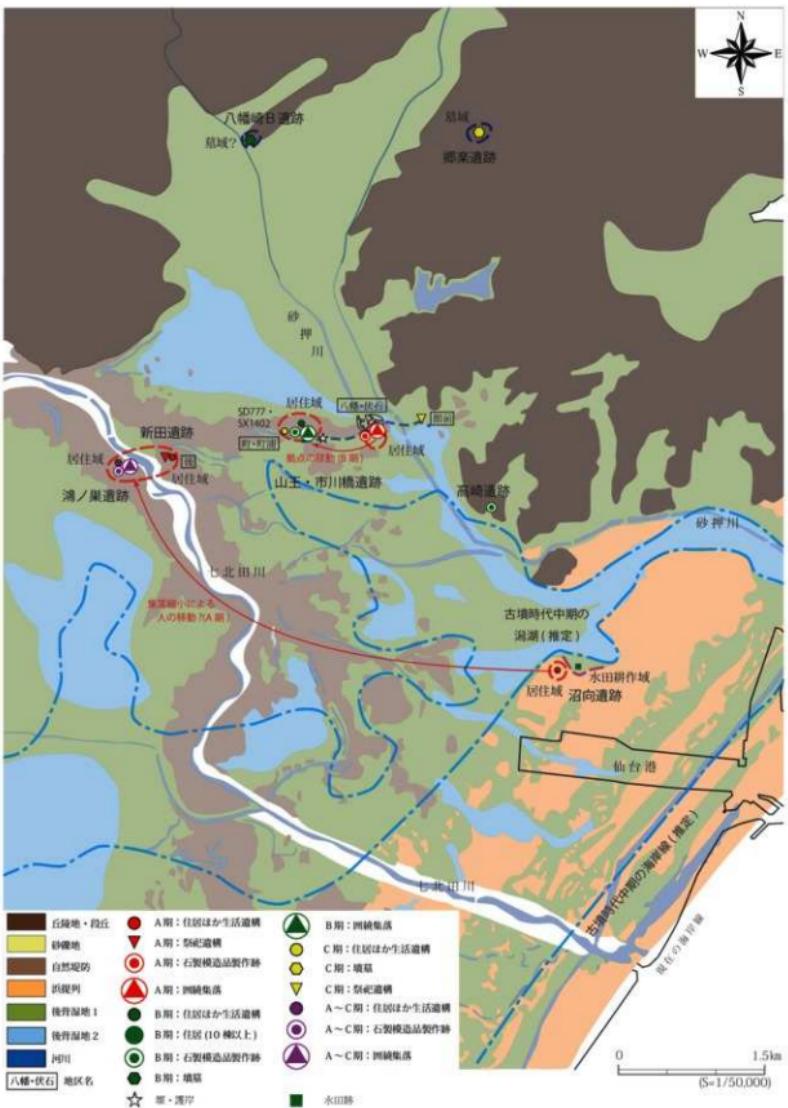


※宮城県文化財調査報告書第175集、多賀城市文化財調査報告書第22・86集、多賀城市史4

No.	種別・器種	通称名・出土遺構	口径	底径	高さ	陶色	報告書	No.	種別・器種	通称名・出土遺構	口径	底径	高さ	陶色	報告書
1	須恵器・环唇	東町浦地区・SX382 竪穴跡 A 斜削丸	11.2	—	(4.2)	TK208	市22	6	須恵器・縁	町地区・SD340 斜跡	(8.2)	(11.5)	TK216	縣175	
2	須恵器・环唇	東町浦地区・遺構不明	7.3	—	2.2	TK21?	多市史4	7	須恵器・縁	町地区・SH324 1号跡	—	—	TK216	縣175	
3	把手付壺	東町浦地区・遺構不明	10.7 (6.6)	7.9	TK208	多市史4	8	須恵器・大型	東町浦地区・遺構不明	34.4	—	—	TK216	縣175	
4	把手付壺	内町浦地区・SN060	8.2	5.2	7.3	TK208	多市史4	9	陶質土器・縁	西町浦地区・SN058	—	—	—	—	多市史4
5	須恵器・縁	東町浦地区・遺構不明	8.8	—	11.3	TK216	多市史4								

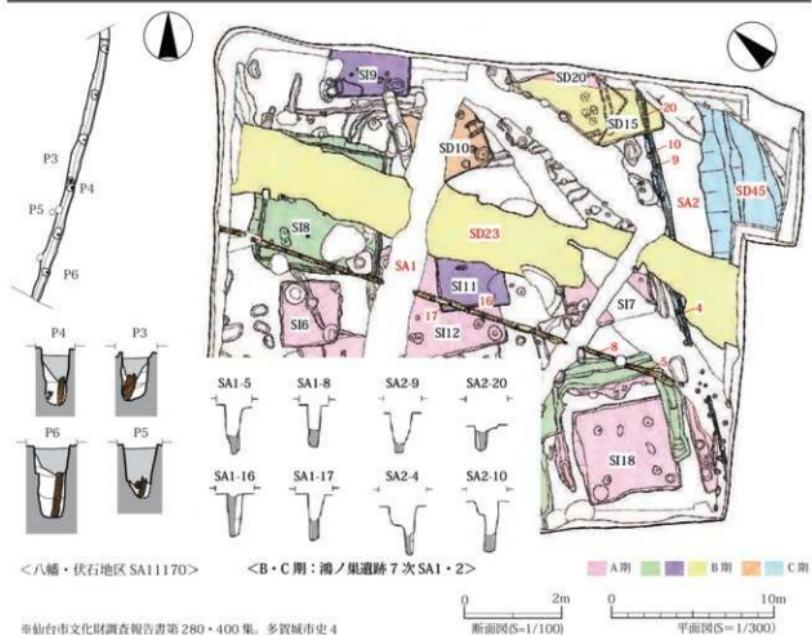
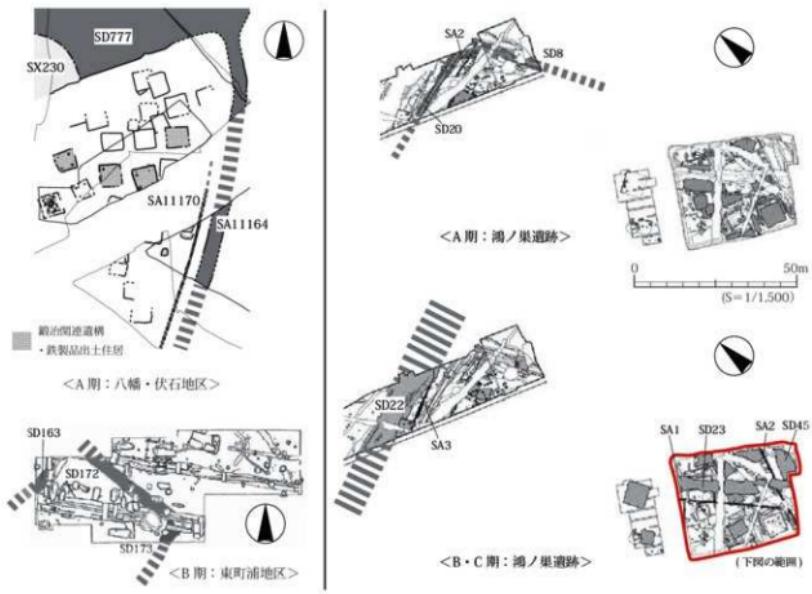
※報告書の「縣」は宮城県文化財調査報告書、「市」は多賀城市文化財調査報告書、「多市史」は多賀城市史を指す

図版715 町・町浦地区出土古墳時代中期の須恵器と続縄文土器



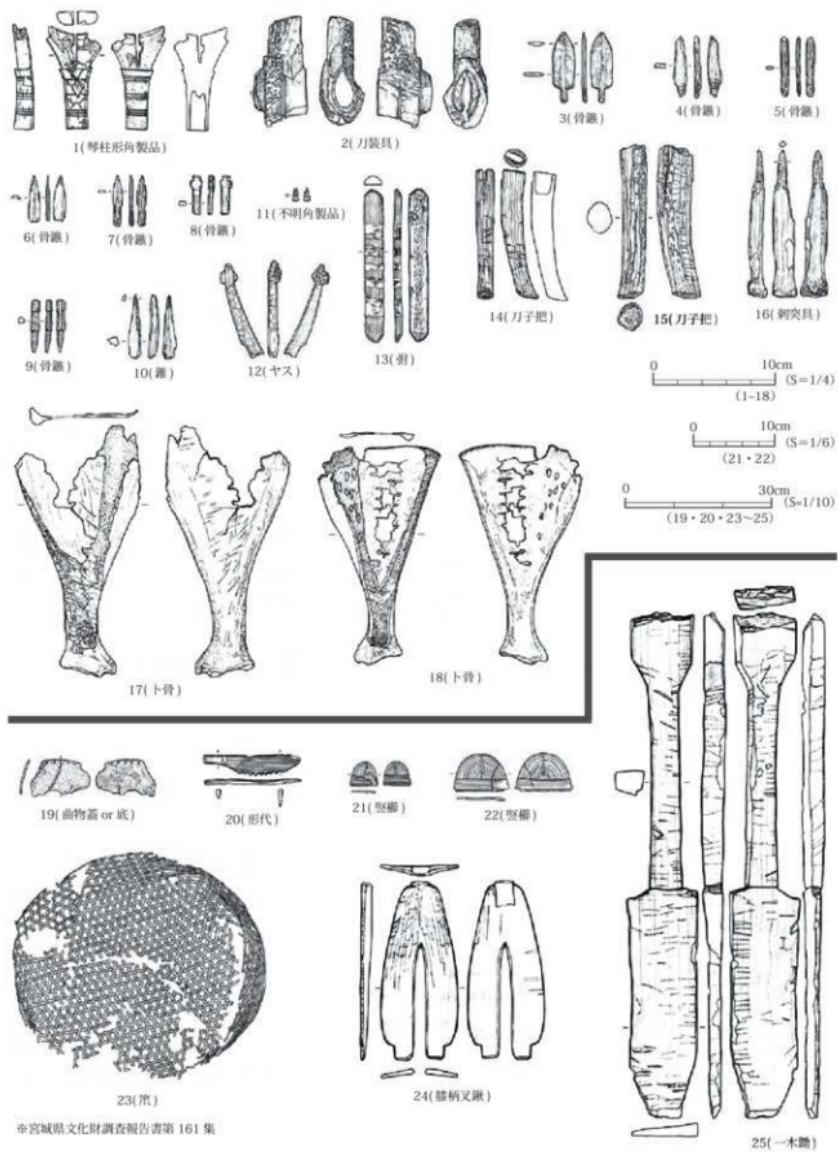
※微地形分類図と潟湖・海岸線の範囲は、仙台市教委2010「第一-4図 仙台平野北部微地形分類図」「仙台市文化財報告書第360集『沿岸道路第4～34次調査』」p.35-601をもとに作成。それに、北郷の町内町域や仙鹿市域を追加。追加分については丘陵・段丘と低地に大別したのみで、微地形を表現していない。微地形分類図の範囲は、松本秀明ほか2005「仙台市北部、七北田川下流域に発達する自然現地地形の形成と潟湖埋積過程」?2005年日本地理学会春季学術大会講演要旨No.67?をもとに、松本秀明ほかの助言を受けて吉野裕彦氏が作成。

図版716 古墳時代中期の七北田川下流域遺跡群



※仙台市文化財調査報告書第280・400集。多賀城市史4

図版717 古墳時代中期の周縁施設—山王遺跡、鴻ノ巣遺跡



図版718 八幡地区SX230遺物包含層出土骨角製品・木製品

時期	地区	遺 墓										備考			
		埋積道	大溝	内部施設	墓石	区画外施設	須恵器	統織文土器	石製模造品	実漆塗漆器	鉄製品	木製品	骨角製品	威儀材	
山王・市川橋	A 八幡・伏石	縦板	○	明住	○	—	×	×	○	×	○	○	○	刀装具	人溝は河川に接続。多様な遺物は、遺物包含層から出土。洪水で堆疊。
	B 重町浦	—	○	—	—	—	TR216	○	○	○	—	○	×	須惠器	八幡・伏石から移動?。突出部?。廟の有無は不明。田南岸に居住。北岸に居住域。
	A 鴻ノ巣	縦板	○	翌住	×	明住	×	○	○	○	×	×	×	—	同位置で造られ。
鴻ノ巣	B 鴻ノ巣	縦板	○	翌住	×	明住	×	○	○	○	×	×	×	—	同位置で造られ。
	C 開ノ原	縦板	○	翌住	×	翌住	×	○	○	○	×	×	×	—	—

※時期はA：群土器段階、B：B群土器段階、C：C群土器段階を指す
※石製模造品（未）は石製模造品の未製品で、既成で製作工房が存在した可能性を示す

表94 古墳時代中期における集落の特徴－山王・市川橋遺跡と鴻ノ巣遺跡

遺跡名	遺跡名	地区名	時期	方向	南北溝開（m）	幅（m）	遺構（m）				備考				
							横造	縦造	柱建物（幅×奥）	支柱間寸法	寄棟（幅×奥）	構造員	上幅		
山王・市川橋	SA11170（伏石）	A	南北/N-15°-E	3.2	縦板	17.1	0.1~0.2×0.7	2.5~3.0	0.5~0.7×0.5	—	—	—	—	—	—
	SDH1164（八幡・伏石）		南北/N-7°~15°-E		—	—	—	—	—	—	—	72.0	3.8	1.1	大溝の北は河川に接続。区画内部は堅穴住居と鍛冶工房
山王・市川橋	SDH172（など）	B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	コヨイ坂/H-38°-S		—		—	—	—	—	—	—	—	北道44.0	3.0	—	北辺と西・東辺の一部を確認
鴻ノ巣	SA2（9次）鴻ノ巣	A	東西/N-72°~81°-E	2.6	縦板	11.0	0.1~0.2×0.8	1.4~1.8	0.3×0.1	—	—	—	—	—	—
	SDH20（9次）鴻ノ巣		東西/N-72°~E		—	—	—	—	—	—	—	25.3	2.2~3.2	1.0~1.2	御は2時期以上。区画内外に堅穴住居
鴻ノ巣	SA2（7次）鴻ノ巣	B	南北/N-22°-E	2.5~2.8	縦板	26.0	0.1×0.9	0.8~1.4	0.3~0.4×0.3~0.4	—	—	—	—	—	—
	SDH45（7次）鴻ノ巣		南北/N-24°~E		—	—	—	—	—	—	—	10.5	5.0	1.4	御は2時期。SD23より古。区画内部は堅穴住居
鴻ノ巣	SA3（9次）鴻ノ巣	B?	東西/N-70°~74°-E	4.0	縦板	11.4	0.1×1.1	2.3~3.3	0.5×0.3	—	—	—	—	—	—
	SDH22（9次）鴻ノ巣		東西/N-76°-E		—	—	—	—	—	—	—	35.3	7.4~9.2	1.7~1.8	御は3時期。区画内外に堅穴住居
鴻ノ巣	SA1（7次）鴻ノ巣	C	東西-N/N-36°	2.5	縦板	41.5	0.1×0.9	1.2	0.3×0.5	—	—	—	—	—	—
	SDH23（7次）鴻ノ巣		南北/N-40°-W		3.5	—	—	—	—	—	—	34.7	3.3	0.7	御はL字で東点の内角は102°。2時期。区画内外に堅穴住居

※時期は A：群土器段階、B：B群土器段階、C：C群土器段階を指す

表95 区画施設の比較－山王・市川橋遺跡と鴻ノ巣遺跡

城市教委2001b)で確認された。八幡・伏石地区や鴻ノ巣遺跡でも未製品や原材料が出土したことから、付近に製作工房が存在したと考えられるが、沼向遺跡では製品のみが出土した。こうしたことから、石製模造品は拠点集落とその周辺で生産されて一般集落に分配された可能性が考えられる。

ここで、豪族居館を含む集落と微地形との関係をみると、5世紀前葉にSD777・2050Aの河川合流点南岸に集落が形成された。同地が選ばれたのは、前期後半に水田耕作域だった八幡・伏石地区まで自然堤防が延びて居住適地となったことに加え、領域支配や物資運搬に河川を活用するという目的があつたためと考えられる。また、居館の北辺が直接河川に面したことから、こうした推定を裏付けるものといえる。5世紀中葉、集落は西へ移動した。前代と異なり東流するSD777河川の左岸となっており、前期後半の集落占地に近い。これは、洪水被害を回避するためより高い場所が選ばれた結果であるが、居館は河川に近い東町浦地区につくられている。前代同様、河川交通との強い結びつきが窺え、居館は八幡・伏石地区と同じく大溝南辺が河川に接続していた可能性も考えられる。また、居住域の近くに水田は認められない。このことは前期後半より高い場所に居住域が設けられたことを示しており、中期に周溝をもつ建物が認められなくなった理由はこうした点に求められるかもしれない。

潟湖北岸の墓域や水田跡は不明である。後者については、東町浦地区ではSD777 河川に設置された灌漑用とみられる堰が確認されたこと（多賀城市埋文センター 1990b）、八幡地区的SX230から膝柄叉鍬や一本鍬未製品（宮城県教委 1994b）、東町浦地区的SD172から叉鍬・横鍬などの木製農具が出土したことから、主たる生業は稲作で、前期後半とは異なり居住域から離れた場所に水田が営まれたと考えられる（註6）。

〈潟湖北西側〉

中期に入るとSD777・SX1402 河川右岸の自然堤防に形成された集落は、新田遺跡後地区から仙台市鴻ノ巣遺跡にかけて拡大した（図版716）。5世紀前葉の鴻ノ巣遺跡は特殊な縦板塀と大溝で囲まれた一画が設けられ、内外に竪穴住居がつくられた（図版717）（仙台市教委 2004・2012）。また、その東の後地区では、竪穴住居跡1棟と祭祀に伴う一括廐棄跡が確認されている（多賀城市埋文センター 1989）。後地区的集落は、同遺跡の前期後半とは水田耕作域をはさんだ西に位置しており、八幡・伏石地区同様、新たに居住適地となった場所に移動したとみられる。

この塀や大溝で一画が囲まれた集落は、本章第8節で検討したとおり八幡・伏石地区的豪族居館と特殊な工法による縦板塀を共有することから、両者の間に強い関係性が窺える。一方、鴻ノ巣遺跡の集落は区画施設を除く遺構や遺物の点で一般集落との間に明確な違いが認められないこと、区画施設自体、同じ場所で方向を変えながら2度造り替えられたこと、5世紀後半まで長期間存続したこと、続縄文土器や黒曜石製石器、方割石といった東北北部や北海道との繋がりを示す遺物が出土したことは、八幡・伏石地区的豪族居館との相違点であり、両者は性格が異なると考えられる（表94・95）（註7）。

〈潟湖南岸〉

沼向遺跡では5世紀前葉に大規模な洪水があり、陸側の浜堤列の一部が抉られた結果、後背湿地が形成され、そこが小規模な水田耕作域として利用された（仙台市教委 2010b）（註8）。中期は竪穴住居が1棟で、墓域も不明であるが、須恵器や石製模造品、黒曜石製石器が一定量出土したことから、集落は前期後半に較べて大幅に縮小しながらも継続したとみられる。その一方、鴻ノ巣遺跡は5世紀に入って集落が急速に拡大しており、沼向から人が移動した可能性が考えられる。

〈低地北奥の丘陵周辺〉

5世紀中葉は、低地北奥の丘陵にある八幡崎B遺跡で古墳の周溝とみられる溝跡が確認され、土師器やTK216～208期の須恵器脛が出土した（利府町教委 1992）。また、東側の丘陵上にある郷楽遺跡1号墳は川西編年V期（川西 1978）の円筒埴輪が出土したため、5世紀後半に位置付けられる（宮城県教委・利府町教委 1990）。こうしたことから、5世紀中葉になると低地北奥の開発が進み、丘陵裾部を中心に集落が営まれ、丘陵上に古墳がつくられたと考えられる（註9）。

(3) 後期

七北田川下流域や砂押川流域で5世紀末～6世紀前半の集落形成は非常に低調で、わずかに鴻ノ巣遺跡で竪穴住居跡が1棟確認されたに過ぎない。6世紀後半以降は、中期と同じ遺跡のまとまりが認められる（図版719、表92）。

〈湯湖北岸〉

6世紀後半に再び形成された八幡・伏石地区の集落は、6世紀末～7世紀前半に東（館前地区）と北（中谷地地区）へ急速に拡大する（本章第9節）。その中心は八幡・伏石地区で、東流するSD100河川と南流するSD2050B河川合流点を中心として北岸を材木塀と溝で囲んだ。集落の周囲施設は新旧2時期あり、新しい時期に拡大する（図版695）。その内部には竪穴住居が建替えを含めて165棟確認され、威信材である太刀や仏具の柄香炉、多量の在地産須恵器が出土したことなどから（図版720～722）、山王・市川橋遺跡は七北田川下流域を統括した首長層が居住した拠点集落と考えられる。

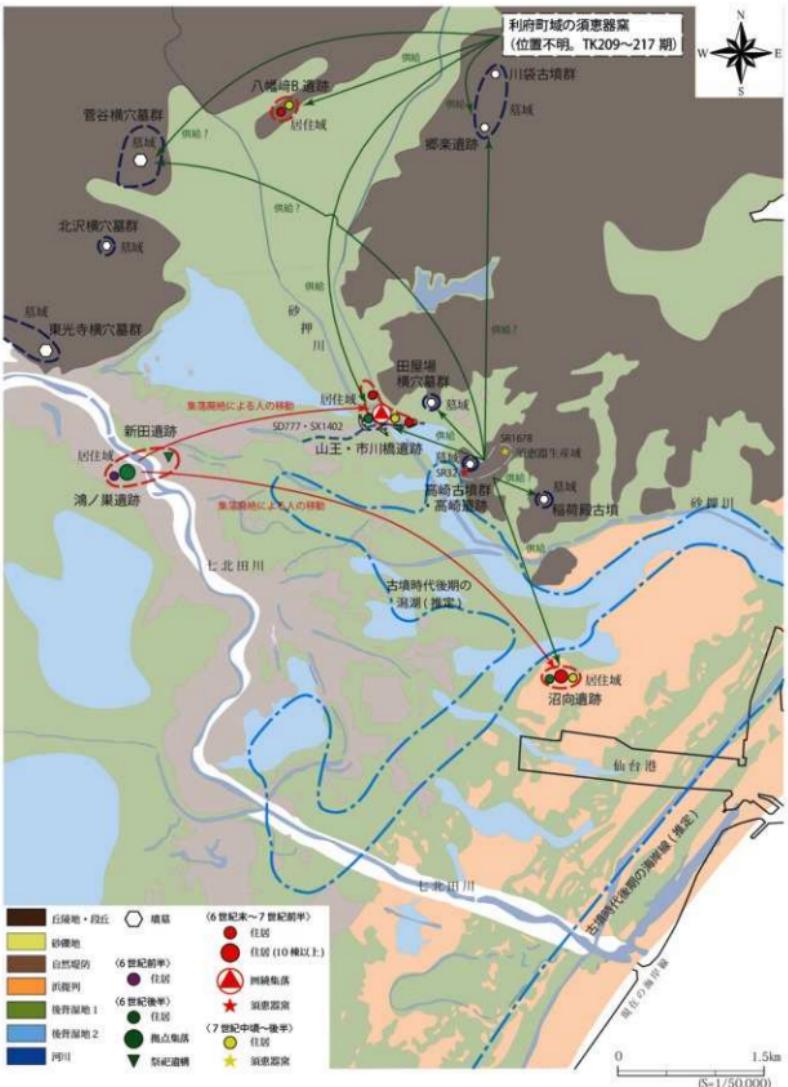
拠点集落は自然堤防の末端にあり、主流である砂押川と支流の合流点につくられた。これは、陸路とともに領域支配や物資運搬に河川を活用したためであり、陸奥南部の6世紀後半～7世紀前半の大規模集落の特徴と共通する（横須賀2005）。また、河川跡に形成されたゴミ捨て場からはト骨や製作途中の木製品が出土したことから、居館内部や隣接地で祭祀が行なわれるとともにさまざまな生産活動が行われた。こうした姿は5世紀前葉の八幡・伏石地区的豪族居館と共に通するが、両者には中期が首長層の居宅や付属施設群を堀や大溝が囲み、その外に集落が營まれて首長関連施設の独立性が高いのに対し、後期は集落内に堀や大溝で囲まれた一画があり、その内部には多数の竪穴住居とともに居宅や付属施設群があったと考えられ、首長関連施設の独立性が低いという違いが指摘できる。

集落内からは、在地土師器と異なり関東地方の系譜を引くと考えられる鬼高系土師器環や東北北部系土師器が出土した。前者は沼向遺跡や八幡崎B遺跡でも認められる。鬼高系土師器環の故地は茨城県南部（松本2009）、東北北部系土師器の故地は栗原・桃生地方以北（辻2007）であることから、拠点集落と両地域との一定の関係性が窺える。なお、集落には堀内側を中心に一定数の掘立柱建物が伴ったと考えられるが、本期への特定はできなかった（註10）。

拠点集落は、7世紀中頃まで存続したと考えられる。その後、7世紀後半～8世紀前半の遺構はみえにくくなるが、八幡・伏石地区的区画1期の年代は該期まで遡る可能性があること（本章第6節）、後期集落の墓域である田屋場横穴墓群は墓前祭に伴う土器の中に村田編年の4・5期が認められること（註11）、館前地区的河川跡から8世紀前半の土器が多量に出土したことなどから、集落は6世紀末～7世紀中頃の拠点集落に較べて縮小するものの、その後も多賀城創建期まで継続したとみられる（註12）。

水田は未確認であるが、集落内部を流れるSD2050B河川跡や集落の南限であるSD100・5093河川跡（図版683）からは、一本鋤・叉鋤・土掘り棒・平鍬・横鍬・曲柄鍬・馬鍬・豎杵・横槌・鎌柄・大鎌・田下駄・田舟など多種多様な木製農具（図版720）が出土したことから、主たる生業は稲作であり、漁撈・狩猟活動は農閑期の季節労働であったと考えられる（宮城県教委2001a・b）。

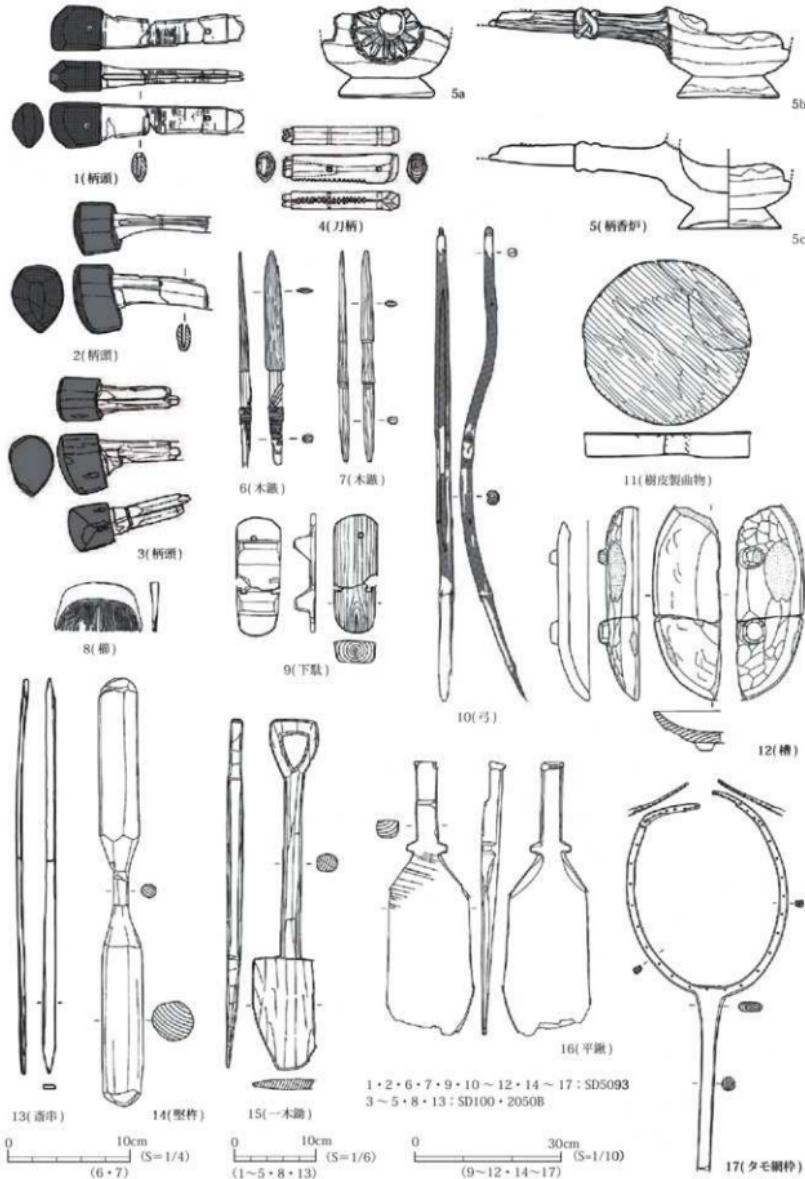
集落東側の丘陵では、墳墓や須恵器生産窯が確認されている。稲荷殿古墳は横穴式石室をもつ円墳



※微地形分類図と湖跡・海岸線の範囲は、仙台市教委2010年「第1~4回 仙台平野北部微地形分類図」「仙台市文化財報告書第360集 沿岸地形第4~34次調査」p.35~601をもとに作成。それに、北側の利府町域や仙台市域を追加、追加分については丘陵・段丘と低地に大別したのみで、微地形を表現していない。

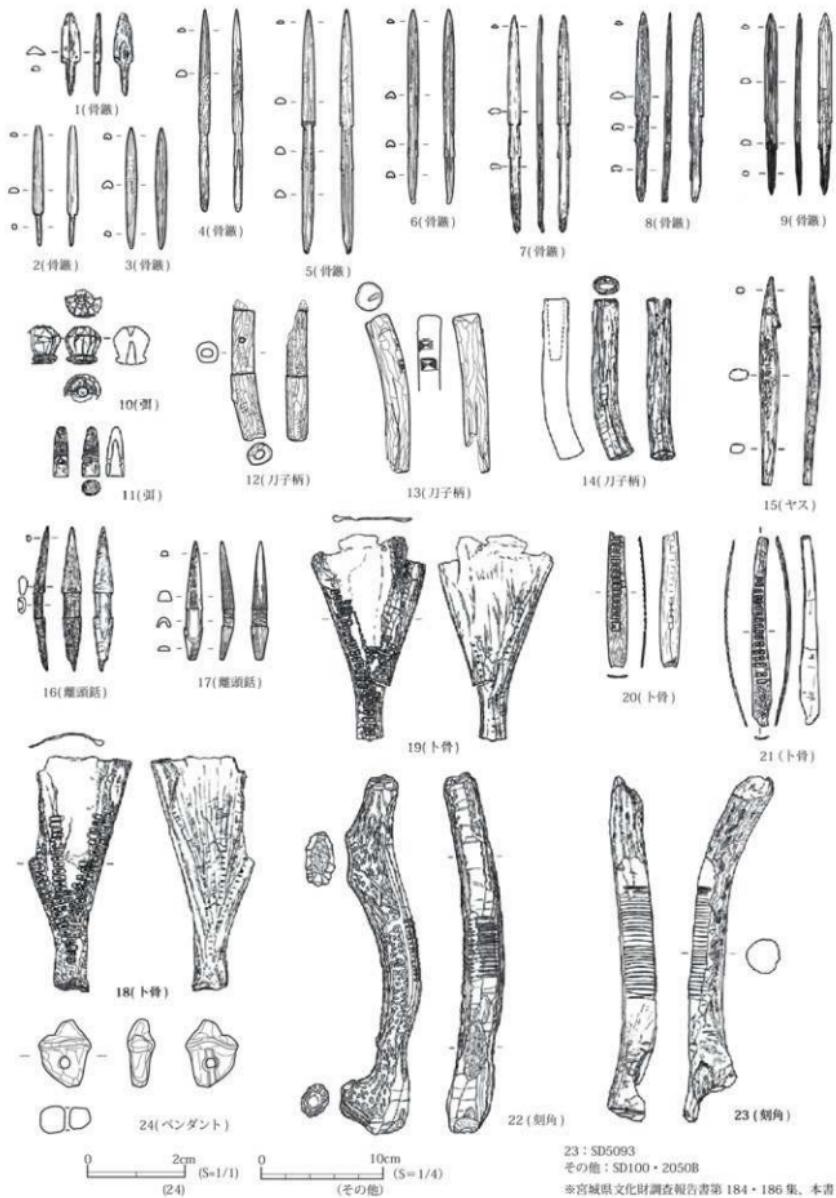
※微地形分類図の範囲は、松本秀日ほか2005年「仙台市北部、七北田川下流域に発達する自然堤防地形の形成と湖跡埋没過程」2005年日本地理学会春季学術大会講演要旨No.67」をもとに、松本秀日氏の助言を受けて森野裕彦氏が作成

図版719 古墳時代後期の七北田川下流域遺跡群



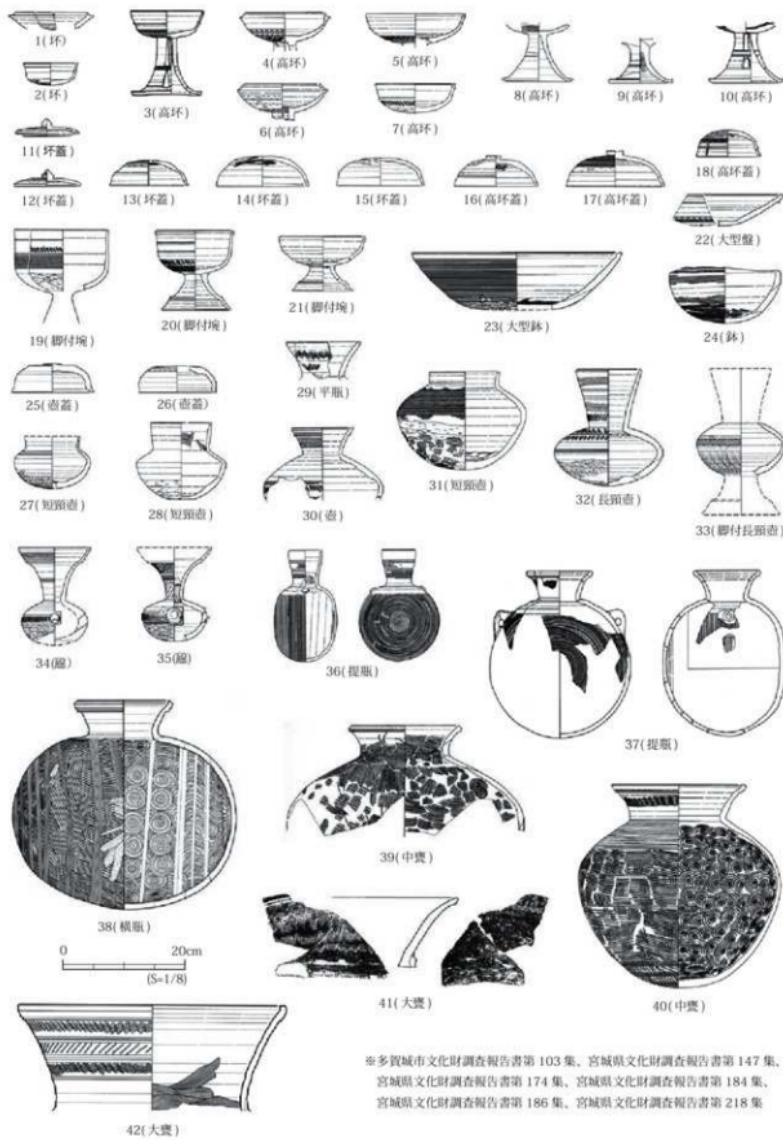
図版720 山王・市川橋遺跡出土古墳時代後期の木製品

奈宮城文化財調査報告書第184・186集



図版721 山王・市川橋遺跡出土古墳時代後期の骨角製品

23 : SD5093
 その他 : SD100 • 2050B
 幸宮城文化財調査報告書第 184 • 186 集、本書



図版722 山王・市川橋遺跡出土古墳時代後期の須恵器

である。高崎古墳群は3基の円墳があったとされるが、現在確認できるのは1基のみで詳細は不明である（多賀城市史編纂委員会1991）。田屋場横穴墓群は5基調査されており、6世紀後葉から7世紀前葉頃につくられた（多賀研1986・2002）。このため、潟湖北岸東側の丘陵は山王・市川橋集落の墓域や後述する須恵器生産域であったと考えられるが、集落規模から想定される数は多賀城内に削平されたもしくは未発見の墳墓を想定しても足りない。一方、鴻ノ巣遺跡西側の入生沢・台屋敷・東光寺横穴墓群や低地北奥西側の菅谷横穴墓群の横穴数は、同時期の周辺集落の規模を遙かに上回る。こうした墳墓数と集落数のアンバランスは、潟湖をめぐる遺跡群全体の中で考える必要がある（註13）。

高崎古墳群と高崎遺跡で須恵器窯が1基ずつ発見されている（多賀城市教委2007c・2011b・c）（図版666）。前者はTK209期、後者がTK217期であることから、須恵器窯は当初、集落に近く製品の搬出が容易な潟湖に面した西側斜面につくられ、その後粘土や燃料を求めて丘陵奥に進出したとみられる。また、生産器種は高环や脚付塊、貯蔵具が多く环類が非常に少ないとみられる。生産器種は高環や脚付塊、貯蔵具が多く环類が非常に少ないとみられる。また、河川跡からは木製の未製品が多く出土した。こうしたことから、拠点集落の首長層は須恵器や木製品などの手工業生産を掌握しており、それらを周辺の集落や墳墓に供給して紐帶を維持したと考えられる。

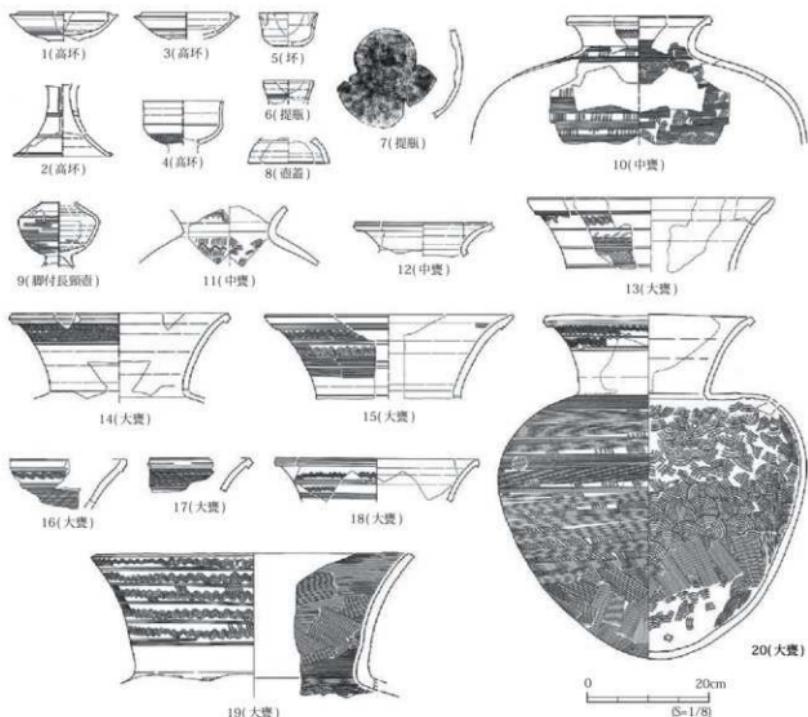
〈潟湖北西側〉

6世紀中頃から後半になると、鴻ノ巣遺跡から新田遺跡後地区にかけて集落が営まれた。前者で竪穴住居跡2棟など（仙台市教委2004・2012）、後者で竪穴住居跡1棟と祭祀に伴う一括廐棄跡が確認されたに過ぎないが（多賀城市埋文センター1989）、両者から同時期の土器が大量に出土したことから、この周辺に拠点集落が営まれたと考えられる。本集落は6世紀末の洪水で廃絶した。7世紀後半には溝などの遺構が認められるようになるが、住居は確認されていない。一方、山王・市川橋や沼向の集落は6世紀末を境に拡大している。こうしたことは、洪水被害を受けた鴻ノ巣集落から、両集落に向けて人が移動したことを示唆する（註14）。

集落北西の丘陵斜面には、東光寺横穴墓群と入生沢・台屋敷横穴墓群があり、後者は70基以上確認されている（仙台市史編さん委員会1995）。両者とも発掘調査が行われておらず詳細は不明であるが、鴻ノ巣集落に隣接しており、その墓域とみられる。

〈潟湖南岸〉

沼向遺跡は、6世紀後半になって再び集落が形成される（仙台市教委前掲）。この時期は竪穴住居が4棟であるが、6世紀末～7世紀前半には竪穴住居14棟、掘立柱建物2棟が認められ、集落が拡大する。そこから出土した須恵器は、同時代の一般集落に較べて量が多く（図版723）、高崎遺跡や高崎古墳群の須恵器窯の製品が認められることから、古墳時代前期後半にもみられた潟湖を介した水上交通によってもたらされたと考えられる。拠点である山王・市川橋集落と沼向集落は、陸路だけでなく潟湖を利用して、双方の人や物資の移動、情報の伝達などが行われた。館前地区の7世紀前半の河川跡から出土した丸木舟は（宮城県教委2001a）、漁撈だけでなく、こうした交通手段としても使われたとみられる（註15）。その後、沼向集落は7世紀後半が竪穴住居3棟、7世紀から8世紀初頭に竪穴住居1棟



*仙台市文化財調査報告書第360集

図版723 沼向遺跡出土古墳時代後期の須恵器

と掘立柱建物6棟と縮小する。墓域としては、砂押川対岸の丘陵西側斜面（沼向側）につくられた大代・橋本圓・舟形圓・砂山・薬師横穴墓群があげられる。

〈低地北奥の丘陵周辺〉

6世紀末～7世紀前半になると、低地北奥の丘陵周辺で集落や墳墓が認められる。中央の丘陵上に立地する八幡崎B遺跡では、堅穴住居跡が6棟確認された（利府町教委1988）。東側の丘陵では、郷楽遺跡で中期古墳の近くに円墳3基（宮城県教委・利府町教委1990）、その北の川袋古墳群で円墳1基（利府町教委1978）確認された。周辺には未調査の古墳があることから、その数はさらに増えると考えられる。これに対し、西側の丘陵斜面には道安寺横穴墓群（利府町教委1980）や北沢横穴墓群があり、東西で墳墓の形態が異なる。また、こうした墳墓のあり方からみて、集落数はさらに増加すると考えられる。さらに、同地域には未確認の須恵器窯跡が存在したとみられる（村田2002）。その製

品は、周辺の集落・墳墓に加えて山王・市川橋遺跡へも供給された。7世紀後半に入ると、本地域の集落や古墳の様相は不明となる。

(4) まとめ 一古墳時代における七北田川下流域と砂押川流域遺跡群の動態一

- ①仙台平野北東部には、約5,000～4,500年前に形成された潟湖が近世まで存続した。七北田川下流域と砂押川流域における古墳時代の遺跡群は、潟湖北岸と南岸および潟湖北西側、北奥の丘陵周辺という4ブロックに大別できる。
- ②仙台平野北東部の遺跡形成は、古墳時代前期後半から認められる。潟湖の北岸と南岸の遺跡は間に中断期をはさむものの7世紀前半まで、潟湖北西側の遺跡は中断期をはさむものの6世紀後半まで存続する。一方、低地北奥の遺跡は5世紀と7世紀前半～中頃に認められる。共通点として、5世紀末～6世紀前半と7世紀後半に遺構が認められない、もしくは遺構数が急減するという中断・縮小期が認められる（表92）。
- ③遺跡別・地区別にみた中断・縮小期は、山王・市川橋遺跡八幡・伏石地区や沼向遺跡が5世紀前葉～6世紀後半、鴻ノ巣遺跡は6世紀末～7世紀後半までで、いずれの場合も起因は河川洪水と指摘されている。

〈前期〉

- ④前期後半は潟湖北岸・南岸・北西側に集落が認められる（図版711）。北岸の山王・市川橋遺跡と低地西側の新田遺跡は、竪穴住居と周溝をもつ建物、掘立柱建物などで構成されたと考えられる。水田耕作域は集落の南北につくられたが、墓域は不明である。

潟湖南岸の沼向遺跡は、居住域と墓域が隣接した。主たる生業は漁撈と考えられる。一方、土器組成の中に有孔鉢が安定して認められることから、穂は稻作適地である山王・市川橋集落などから供給された可能性がある。したがって、潟湖周辺の集落群は立地する地形環境にもとづいて生業が選ばれ、足りないものは互いに補完し合う生業体系を形成していたと考えられる。

〈中期〉

- ⑤中期は潟湖北岸・南岸・北西側に集落、低地北奥の丘陵に古墳が認められる（図版716）。
- ⑥5世紀前葉の八幡・伏石地区は、初現的かつ最北端の竪穴鍛冶遺構を含む竪穴住居群が堀と大溝で囲まれた。刀装具や琴柱形角製品といった威信材が出土していることから豪族居館と考えられる。居館は前葉のうちに洪水で廃絶した。
- ⑦5世紀中葉の町浦・町地区は、東町浦地区に豪族居館があり、それに隣接して祭祀遺構や各種の製作工房が置かれ、その北の町地区にかけて竪穴住居群がつくられた。年代的にみて、居館は八幡・伏石地区から移動した可能性が高い。
- ⑧鴻ノ巣遺跡の集落は、同じ場所で造り替えを行なながら5世紀前葉から後半まで存続した。同時期の八幡・伏石地区とは、特殊な工法による縦板塀を共有することから、両者に強い関係性が窺える。一方、鴻ノ巣遺跡は区画施設を除いて一般集落との間に明確な違いが認められず、豪族居館とは性格が異なる。集落がつくられた5世紀前葉は、仙台平野が統繩文文化と対峙する境界域となってい

たため、隣接する豪族居館の区画施設を取り入れたとみておきたい。

⑨潟湖南岸の沼向遺跡は、5世紀前葉に大規模な洪水のち小規模な水田耕作域が形成されるが、前期後半に較べて集落は縮小する。反対に、鴻ノ巣遺跡は5世紀に入って集落が急速に拡大したことから、沼向から鴻ノ巣へ向けて人が移動した可能性が考えられる。

〈後期〉

⑩6世紀後半は、約半世紀の空白を経て鴻ノ巣遺跡に拠点集落が形成されたが、末頃に起きた洪水で廃絶する。一方、同時期の山王・市川橋遺跡や沼向遺跡では集落が急速に拡大することから、鴻ノ巣から山王・市川橋、沼向へ向けて人が移動した可能性が考えられる。

⑪6世紀末～7世紀前半は潟湖北岸の低地に集落、その東の丘陵に墳墓と須恵器生産窯、潟湖南岸の低地に集落、さらに低地北奥の丘陵に集落と墳墓が認められる（図版719）。

⑫山王・市川橋遺跡の集落の中心は八幡・伏石地区にあり、材木塀と溝で囲まれた。その内部には堅穴住居が建替えを含めて165棟あること、威信材である太刀や仏具の柄香炉が出土し、周辺集落と較べて在地産須恵器の量が突出して多いことなどから、七北田川下流域を統括した首長層が居住した拠点集落と考えられる。

⑬拠点集落は自然堤防の末端にあり、河川合流点に接してつくられた。これは、陸路とともに領域支配や物資運搬に河川を活用したためと考えられ、陸奥南部の6世紀後半～7世紀前半の大規模集落の特徴と共通する。

⑭拠点集落は水田が未確認であるものの、河川跡から多種多様な木製農具が出土したことから、主たる生業は稲作であり、漁撈・狩獵活動は農閑期に行っていたと考えられる。

⑮拠点集落東側の丘陵には須恵器窯がつくられた。生産器種は高环や脚付塊、貯蔵具が多く、坏類が非常に少ないとから、葬送儀礼と直結した操業であったと考えられる。また、河川跡からは木製の未製品が多く出土した。こうしたことから、拠点集落の首長層は様々な手工業生産を掌握し、管轄する集落や墳墓に向けて製品を供給して紐帯を維持したと考えられる。

註

註1 山王谷地地区とは、県道泉-塩釜線調査のIX・X区で確認した遺構群を指す（宮城県教委1998）。これまで、より南で確認した遺構を含めて全体を町地区と呼んだが、場所が離れすぎること、遺構の年代も異なることから、町地区とは切り離し、近くの小字名をとって「山王谷地地区」と呼ぶことにしたい。

註2 周溝をもつ建物跡の分類は、中川晃子2016にしたがった。また、SI2869住居跡については、東から北にかけて不整形のSD2833溝跡が認められる。今回の再検討で住居西側の溝跡は、SD2833と一緒にみた場合、SI2869を中心として環状に巡ることから、その外周溝とみるのが妥当と考えられた。

註3 同時期の沼向遺跡では、居住域の隣接地に墓域が形成された。この点を重視すると、山王集落の墓域は自然堤防上のより高い場所にあり、五万崎地区の方形周溝墓は丘陵上の別集落に属した可能性がある。同様の可能性は、山王・市川橋遺跡や鴻ノ巣遺跡の中期集落についても考えられるが、この時期は宮城県域全体が古墳造営の低調期であり、古墳前期とは条件が異なる。古墳時代前期・中期集落における墓域の解明は、今後の重要な課題の一つである。

註4 山王遺跡を古墳時代前期後半の拠点集落とみた場合、その首長層一族が中期まで連続して八幡・伏石地

区の豪族居館を営んだ可能性も考えられる。

註5 藤田新田遺跡では、時期不明の円形周溝が確認されている。古墳時代前期の周溝をもつ建物は、周溝内側が建物の形を反映して方形となることから、同種の建物跡の可能性は低い。その一方、火山灰や津波・洪水等でバックされた遺跡をみると、周溝の幅が狭い円形周溝や方形周溝は平地建物の壁柱や壁材の据え方となる場合があり、注意が必要である。

註6 八幡・伏石地区的集落は、5世紀前葉～中葉に洪水の被害を受けている。このため、そこより低い鴻の池・水入・樋の口地区や多賀前地区的水田も同じ被害を受け、一定期間耕作が不能となったと考えられる。

註7 報告書では、統繩文文化と対峙する境界部分における特殊な集落形態の可能性が指摘されている（仙台市教委2004）。

註8 この洪水は、時期的にみて八幡・伏石地区的豪族居館を襲ったものと同じとみられる。

註9 古墳時代中期後半に低地北奥の開発が進んだが、このエリアの集落様相は全く不明である。このため、開発の要因が下流域の勢力拡大によるものなのか、別集団によるものなのかについては、今後の課題としておきたい。

註10 沼向遺跡の6世紀末～7世紀前半の集落では掘立柱建物が2棟（仙台市教委2010b）、山元町熊の作遺跡の7世紀代の集落跡では、掘立柱建物が3棟確認されている（宮城県教委2016a）。後者は建物が方向を揃えてL字形に配置され、計画性が窺える。

また、鬼高系土師器環について、斎野裕彦氏は南小泉型関東系土器と呼び、胎土・焼成・色調からA種、B種と区別した。B種はA種の模倣で、A種も基本的に現地生産と考えた上で、仙台平野中北部の住社式新段階を特徴付ける土器で、地域性を示すものと指摘した（仙台市教委2010b）。

註11 田屋場横穴墓群の土師器環は村田編年4～6期が認められる。その中で、口径13cm以下の小型の丸底環は4・5期に特有であり、6期（8世紀前半）になると法量が大きくなり、平底化する。

註12 山王・市川橋遺跡は、その前後の時期に較べて7世紀後半～8世紀前半の集落様相がみえにくい。このため、郡山I期官衙造営に伴う人の移動があったとの指摘（柳澤2010b）や多賀城創建期の城外の様子が不明とされてきた。こうした見方や指摘を行う前に、過去の調査成果の見直しや横穴墓群の年代観の修正など、七北田川下流域遺跡群全体の再検討を行う必要がある。

註13 山王・市川橋遺跡の古墳後期集落の規模と維続期間からみて、周辺で確認できる墳墓の数が少ない。その理由としては、道安寺横穴墓群や東光寺・入生沢・台屋敷横穴墓群など集落から少し離れた場所を墓域とした可能性や多賀城内に削平された古墳や埋戻された横穴が存在した可能性などが考えられる。

註14 同様のことは、仙台市教委2010bでも指摘している。

註15 潮湖を交通手段として利用した点については、仙台市教委2010bでも指摘している。

13. 多賀城南面の国府域について

(1) 多賀城南面方格地割の検討

A. これまでの見解

平成4年度（1992）から行われた八幡地区の発掘調査で、多賀城南面の方格地割が横断的に確認され、一定の計画性に基づく方格地割の存在が明らかとなった（宮城県教委1992）。この成果に基づいて、方格地割はⅠ～Ⅲ期の変遷の中で、東西大路を中心として段階的に北1→北2道路、南1→南2道路と南北へ街区を拡大し、最終段階のⅢ期（9世紀後半～10世紀後半）に完成させたと考えた（宮城県教委1996b）。以後、多賀城方格地割の造営・整備はこの段階的拡大を基盤とした考え（方格地割り段階的拡大説）が主流である。

この方格地割段階的拡大説のもと、鈴木・武田は方格地割の変遷を4期に分け、宮城県教委と同じくⅢ期を地割が最も拡大した時期、Ⅳ期から縁辺部が廃絶していくとした（鈴木2010・武田2010a）。柳澤はこの4時期変遷を概ね踏襲しつつも、Ⅲ期の契機は貞觀11年（869）の陸奥国大地震によると考えた（柳澤2013a・b）。一方、前川は全国の事例から方格地割を対外的な威容誇示のためと考え、古代地方都市の一例として多賀城を紹介した（前川2009）。

こうした考えに対し、齋藤は方格地割を構成する道路の交差点形態に着目し、方格地割の造営は南北大路拡幅と東西大路の施工（方格地割Ⅰ期）、小路による方格地割の造営（同Ⅱ期）、斜め方向・屈曲した小路の造営（≒方格にならない街区の造営：同Ⅲ期）の大きく3段階に分かれるとした。そして、方格地割は38年戦争と対応して方格地割Ⅱ期（8世紀末～9世紀初頭）に東西を南北大路から西9道路まで、南北が南2道路から北2道路までの範囲について同時かつ計画的に造営されたという、新案を提示している（齋藤2016a）。

現在主流である方格地割段階的拡大説に対し、同時造営説が出たことで方格地割の造営・整備について改めて検討する必要が生じている。特に八幡・伏石地区などの大路から離れた縁辺部は、8世紀末から9世紀中頃にどこまで地割が施工されたのかが、街区の様相を検討する上で根本的問題となる。ここでは、本書における八幡・伏石地区の調査成果を踏まえ、改めて方格地割の造営について検討することにしたい。

B. 八幡地区的調査成果と8世紀末～9世紀前葉の遺構分布

八幡・伏石地区の調査成果をみると、東西方向の北2・北2a道路、南北方向の西4・5・6道路に對し、斜め方向となる北3道路や西6a道路は遅れて施工された（本章第11節）。このうち北2a道路は、8世紀後半のSX12100道路機能と位置を継承したため、例外的に道路間距離が一町とならないが、西4・5道路に対し工程的に一段階遅れて施工された点は注目できる。こうした道路の施工順序は、方一町の方格地割を構成する道路（北2道路）と、地割の制約を受けない道路（北2a・北3道路・西6a道路）との違いとして、齋藤が交差点形態から指摘した内容と概ね合致する。

一方、遺構の分布では、北1道路より北に位置する八幡・伏石地区は、8世紀末～9世紀前葉の段

階でも建物跡が多く確認されており、それらは方向や配置の点で道路の制約を受けていたと考えられる。さらに、方格地割南側の調査成果をみると、南1道路以南で最も広く調査した南2西1区のB期（9世紀前葉～後葉）では、SI1508・3435が街区北側を通るSX1400東西道路と同方向であることから、9世紀前半の段階で街区が成立していた可能性を指摘できる。

方格地割西側では多賀城市第8次調査でSX200東西大路跡とSX468西9道路跡を確認している。両者の交差点形状は「開放型（A型）」交差点であることから（齋藤前掲）、東西大路と西9道路は同時に施工されたとみられる（註1）。道路側溝A期では非クロクロ調整とクロクロ調整の土師器環が出土し、後者の割合が高く底部再調整されるものが多いこと、須恵器環は底径が広くヘラ切りや回転ヘラケズリが多いことが報告されており（多賀城市埋文センター1990b）、9世紀前葉には道路が機能していたと考えられる。こうした事例から、北2道路以南と南2道路以北、及び西側の西9道路までの範囲において、方格地割が9世紀前葉以前に成立していた可能性を指摘したい。

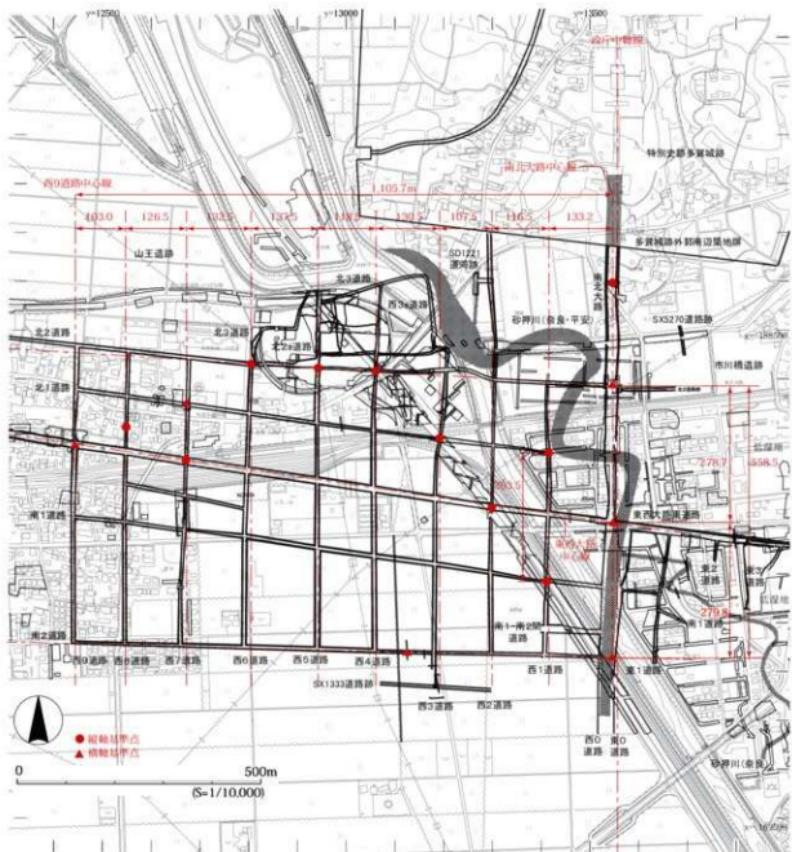
ところで、方格地割の基準と考えられている南北大路の施工は、路幅約18mの段階を8世紀後葉、約23～25mに拡幅された段階を9世紀前葉～10世紀後葉とする見解（多賀城市教委1998・鈴木2006）と、前者を8世紀中葉～末葉、後者を8世紀末葉～10世紀後葉とする見解（宮城県教委2001a・多賀研2008）があり、施工時期は8世紀中葉～後葉の間で見解が異なる。

南北大路の拡幅時期については、宝亀11年（780）を境とする政府－外郭南門間道路、外郭南門と一体の変遷とする見解（多賀研2008）と、遺構と出土遺物から8世紀末～9世紀初頭とする考えがあり（村松2013b）、概ね8世紀末～9世紀初頭とする見解で落ち着いている。さらに、北2道路は施工段階から拡幅された南北大路西側溝に接続しており、方格地割の造営が、南北大路拡幅期の年代観と八幡・伏石地区の成果から8世紀末～9世紀前葉の間に行われたと考えられる。

C. 方格地割の造営プラン

次に方格地割造営の計画性について検討を行う。南北大路から西9道路までの南北道路は、大路からの距離を道路の本数で割った値である約120m間隔で計画された可能性が指摘された（鈴木2006）。このことは、南北大路から西9道路までの街区東西幅が計画段階で定まっていたことを示唆するが、実際の南北道路の間隔は103.0～137.5mと一律ではない（図版724）。その理由は、多賀城南面が居住域として既に利用されていたためであり、その一例として八幡地区では、8世紀後半の区画2を取り込んで北3西5区が形成されており、南北道路が既存の区画を意識して施工された。こうした八幡地区の事例から敷衍すると、造営計画はあったものの、実際の南北道路の配置にあたっては多賀城南面に広がる既存の区画に制約された結果、間隔が不均等になったと考えられる。

東西道路については、東西・南北両大路交差点中心から北2道路交差点中心と南2道路交差点中心までの距離が、前者は278.7m、後者が279.8mとほぼ等しい値となる。また、西1道路でみると、北1道路から南1道路までの交差点中央間の距離は約263.5mで、平均値は131.7mである。南北大路－西1道路間の距離は約133.2mであることから、南北大路西側に面する4つの街区（北2西1区・北1西1区・南1西1区・南2西1区）は、概ね131～139m四方の正方形に近いことがわかる（図



図版724 方格地割造営の検討 1

版724・725)。

一方、西9道路東側に面する4つの街区（北2西9区・北1西9区・南1西9区・南2西9区）は、面積に大きな差が認められる。これは、5本ある東西道路のうち、北1・南1道路はメインストリートである東西大路と並行させたものに対し、北2・南2道路は南北大路西側の方格地割全体が長方形となるように東西正方位で設定したためと考えられる（図版725）。東西道路が異なる目的で施工されたため、南北大路から離れるほど、各街区の面積不均等化と平面形の「ずれ」が生じたのであろう。こうした東西道路の設定理念に加え、既存の区画施設を取り込みながら南北道路が施工された結果、街区平面形と面積の不均等化を招いたと考えておきたい。

ところで、最も正方形に近く計画的と考えられる南北大路に面した4つの街区は、道路の中心から計測すると約131～139m四方である。平安京では、街区が一辺約120m≈400尺四方の正方形で統

一されており（辻純一1994、家原2016）、これと較べて10m以上大きい。しかし、その値は道路幅を含むもので、北2西1区の東西幅約133.2mから拡幅された南北大路路幅（北2西2区に最も近い側溝芯々：約22.1m）の半分（約11.0m）と、西1道路の路幅（約4.8m）の半分（約2.4m）を差し引いたとき、計画上の街区幅は約119.5mとなり、400尺に極めて近い値となる（図版726）。また、南北大路中心から西9道路の中心まで約1,105.7mである。これまで確認されている小路の路幅が概ね4～5mであることから、南北道路8条分の路幅（32m）、西9道路の路幅半分（2m）と南北大路路幅の半分（11m）を差し引き、9で割ると街区の平均幅は約117mとなり、前述した「計画上の街区幅」の約119.5mに近い値を示している（図版725）。

網は長岡京・平安京の条坊制について、街区の大きさが均等になるよう計画線を設定し、条坊を割り振る「計画線閉合型」という地割設定方法を提唱した（網1999）。側溝心々間に概数が得られないことから、南北大路・東西大路は平安京の造営方式でつくられたという指摘もあり（鈴木琢2010）、多賀城南面の方格地割の造営には平安京の条坊造営方法が導入されていたと考えられよう。

以上の検討から、多賀城方格地割の造営は拡幅された南北大路を基準とし、計画上は全体が長方形の方格地割となるよう、南北を北2道路から南2道路まで、東西を南北大路から西9道路まで造営しようとした意図を窺うことができる。なお、これまでのところ街区が平行四辺形となる方格地割は全国で例がなく、東西大路の方位を基準とした方格地割は志向されなかったと考えておきたい。

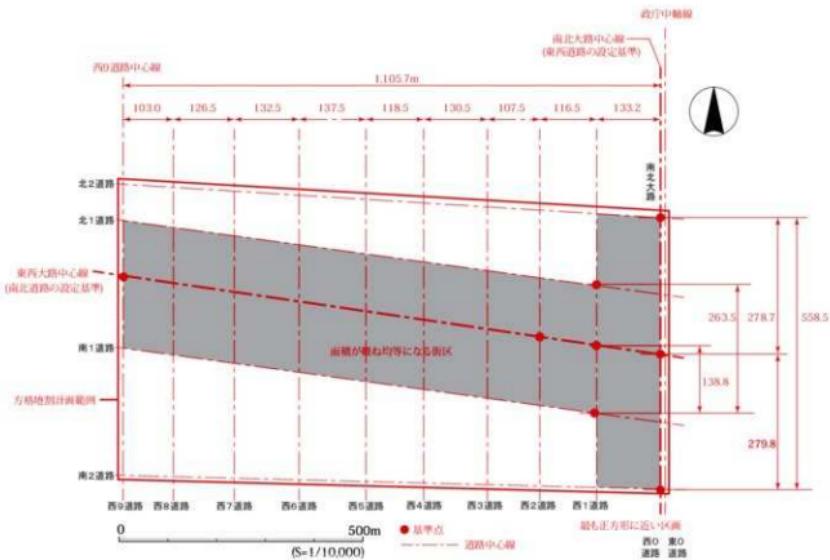
D. 街区面積の不均等について

方格地割を造営する段階では、既に東西大路と拡幅前の南北大路が存在したと考えられる（宮城県教委1996ほか）。このうち、東西大路は西で北に8度傾いており、多賀城政府から延びる南北大路を基準として方格地割を造営する上では、最も障壁であったと考えられる。東西大路の方向はそのままに北1・南1道路を北2・南2道路と同じく南北大路から真西に延ばすと、東西大路に接する街区の面積は不均等となり、西9道路に近いほど街区面積が狭小となる。これまでの調査では、東西大路に接した街区で推定国司館などが確認されており、東山道に繋がる基幹道路沿いは高位者の居住区と位置付けられた可能性が考えられる。このため、北1・南1道路は意識的に東西大路と並行させて、基幹道路沿いの街区の面積均一化を図り、北2・南2道路は方格地割の境界として方向に偏りを持たせず施工したとみておきたい（図版725）。

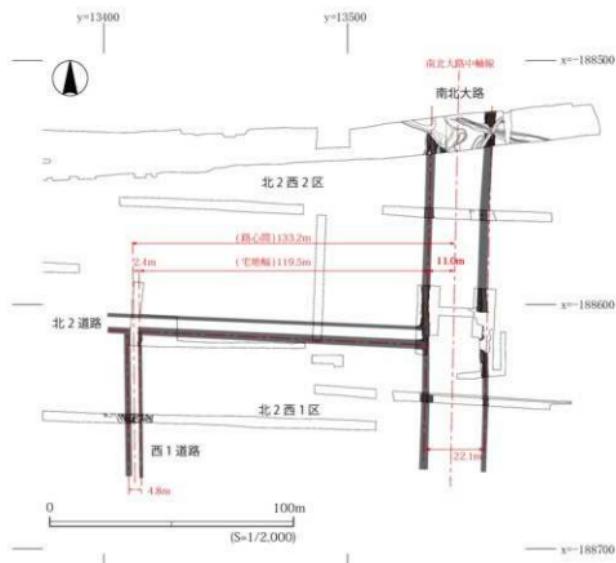
多賀城南面の方格地割は、既存区画や道路に制約・追加されたものであり、都城の条坊造営とは事情が異なる。多賀城南面の方格地割は地域（この場合、陸奥）ごとの限られた情報・技術によって志向されたものという指摘があるが（家原2016）、そうした技術的問題ではなく、都城の条坊造営方法と思想に基づいた造営計画を、既存の施設を踏まえて柔軟に対応させたと考えられる。

E. 南北大路東側の様相

南北大路の東側は、低湿地や旧砂押川から分岐したSX1351河川跡が確認されており、大路西側と較べて地形的に複雑である。そこには、多賀城庵寺（観音寺）に向けて東西大路東道路が延び、それ



図版725 方格地割造営の検討2



図版726 方格地割造営の検討3

に接続する東1～3道路が確認されている（多賀城市教委2003a・2004b）。

東西大路東道路は、東側延長上にある高崎古墳群第6次調査で確認したSX11整地層の年代が8世紀後半以降であることから（多賀城市教委2010b）、東西大路と同じ時期に施工された可能性が考えられる。これに面した街区では、壺Gの出土が比較的多いことも、8世紀末～9世紀前葉の時点で既に街区が成立していたことを窺わせる（本章第14節）。

東西大路東道路から延びる東1～3道路の間隔は、南北大路西側に較べて一律ではなく、道路としての共通性も少ない。東側は低湿地や河川による制約が大きく、西側と同じような施工計画は立てられなかつたと考えられる。また、東1・2道路と東3道路では方向が異なることから、東3道路の造営時期を8世紀末～9世紀前葉（多賀城市教委前掲）より新しくする見解（齋藤前掲）がある。

F. 方格地割の変遷

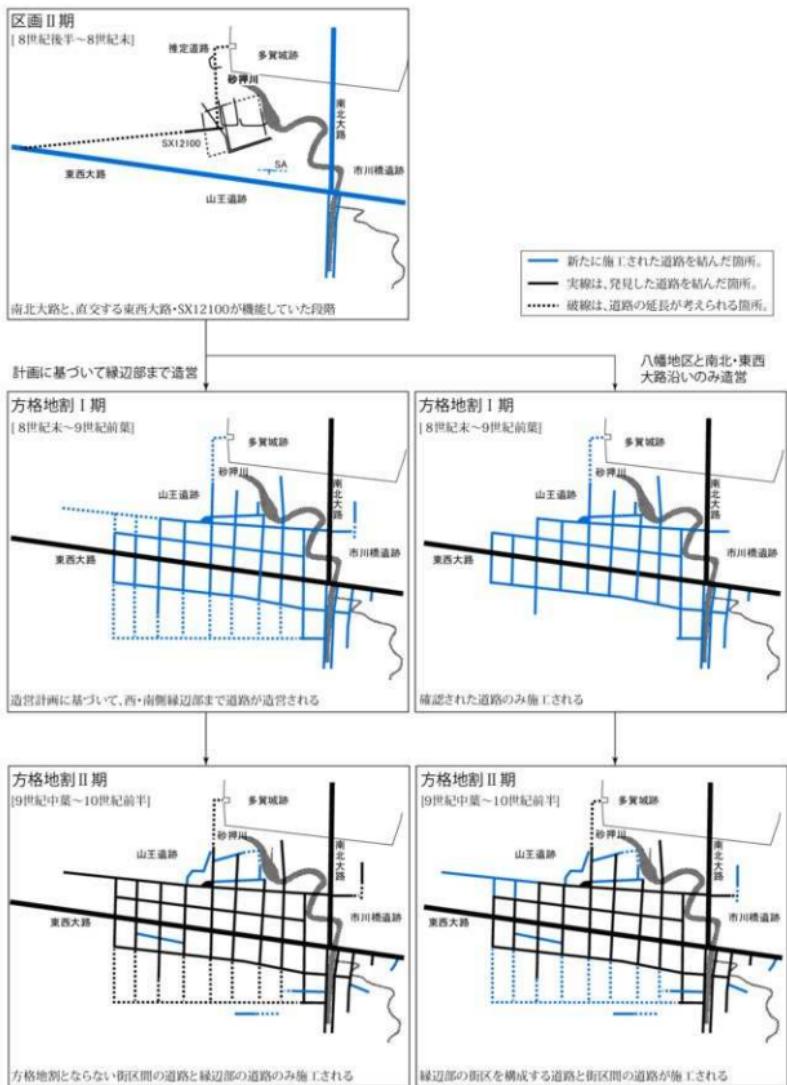
これまでの検討から、方格地割が北2・南2道路と南北大路・西9道路までの範囲を、計画かつ同時期に整備された可能性が指摘できる。しかし、その範囲内でも北2西8区・北2西9区・南2西8区・南2西9区など、地割縁辺に位置する道路や街区の様相は明らかでなく、8世紀末から9世紀前葉に、造営計画に基づいて縁辺部まで施工されたことを示す考古学的成果は充分に得られていない。したがって、ここでは縁辺部の造営が9世紀後半以降とする従来の見解と合わせて2案を提示しておく（図版727）。今後の調査成果に期待したい。

これまでに検討してきた道路のあり方と八幡・伏石・多賀前地区の街区の様相から、多賀城南面の道路施工は、①東西大路・南北大路の造営、②方格地割を構成する道路の造営、③斜め方向・屈曲した道路の造営（および縁辺部の道路の造営）という3段階に大別できる。八幡・伏石地区の調査成果に基づいた変遷（区画Ⅰ期・Ⅱ期、方格地割Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期）との関係は、①が8世紀後半（区画Ⅱ期）、②は8世紀末～9世紀前葉（方格地割Ⅰ期）、③が9世紀中葉～10世紀前半（方格地割Ⅱ期）で、その後各所で道路が廃絶していく段階が10世紀後半（方格地割Ⅲ期）と整理できる。齋藤は以前、斜め方向・屈曲した道路の造営契機を869年の貞觀大津波からの復興と捉えていたが（齋藤前掲）、今回の検討で、そうした道路の造営はそれ以前から行われており、斜め方向や屈曲した道路（および縁辺部の道路）は、方格地割Ⅱ期の中で段階的に施工されていったと考えられる。

（2）陸奥国府域の建物配置

A. 建物配置の分類

伏石・八幡地区では、柱筋や方向から同時性が高く計画的と考えられる建物配置が認められる。それらの中には区画溝や井戸・空闊地と一体となり、一定区域を占有・利用したものがある。こうした建物群は方格地割の各地で認められる。ここでは、主屋や副屋の有無とそれらの配置、空闊地との関係、井戸の有無と位置などを基準としてA型（屋舎並立型）、B型（L字・コの字配置型）、C型（主屋十倉庫型）、D型（建物並立配置+空闊地型）、E型（建物並立配置型）の5つに大別した。こうした計画的な建物配置は、都城や陸奥国内で有力者の居宅とされている事例を参考にすると、多賀城に出仕



図版727 方格地割の変遷（南藤2016aに加筆）

した下級役人以上の居宅や城外官衙であった可能性が考えられる。ここでは、多賀城南面の方格地割施工域とその隣接地（＝山王・市川橋遺跡）を陸奥国府域と呼んで、検討を行いたい。

ところで、多賀城に係る官人層としては、中央からの派遣官である国司（令制上の陸奥国定員は11名）のほか、軍團などに關係する郡領層や有力農民層などがあり（今泉2015）。在任中の国司は法制度上、国庁と別に居宅を構えたと考えられている（鬼頭1986）。また、平城京の建物配置は雁行型・L字型・並列型・コの字型の4類型に分けられ、その違いや居宅の規模は居住者である貴族の階層や官衙の機能を反映したと指摘されている（黒崎1984・1988）。以下、こうした点に留意しながら、建物配置の特徴について述べたい（図版728・729）。

A型（屋舎並立型）

東西棟の主屋（SB02）と向屋（SB03）が、妻を揃えて並立し、その周りを副屋などが囲んでいる。方格地割の北東外にあたる館前遺跡で1例確認した（多賀城市教委1980）。主屋は四面廂建物であり、城外で確認された建物の中で最も規模が大きい。建物規模と構造からみて、城外で最も格式が高く国守館と推定されている。

【位置（年代）・遺構名】

館前遺跡（9世紀前半）：（主屋）SB02、（向屋）SB03、（副屋）SB04・05・06

B型（L字・コの字型）

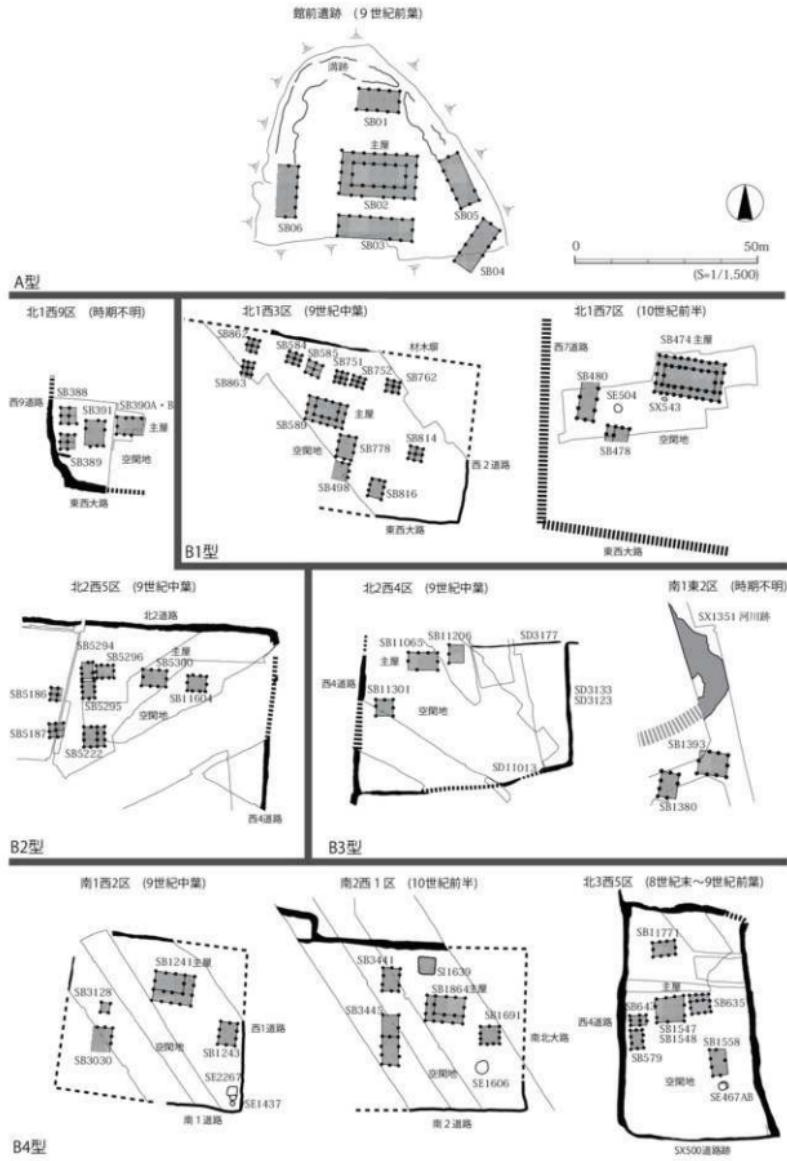
主屋と副屋が「L」字もしくは「コ」の字型となる。占有した敷地全体を調査した事例がなく、L字の中には調査区外に対応する副屋があつてコの字となるものを含むことから、一括して扱う。東西棟の主屋に対して南北棟の副屋が伴うこと、主屋の前が空閑地となることが共通する。

9例確認した。副屋が2列並んで主屋や副屋の背後に倉庫を伴うもの（B1型）、副屋の奥に倉庫を伴うもの（B2型）、「L」の字型のもの（B3型）、「コ」の字型のもの（B4型）に細分できる。それらの内訳はB1型2例、B2型2例、B3型2例、B4型3例である。

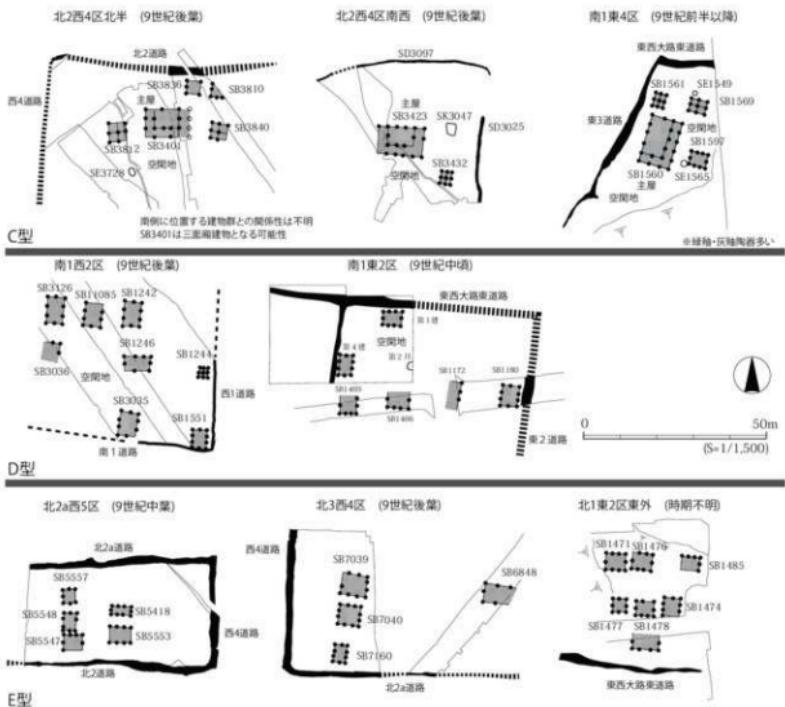
【B1型】（副屋が2列構成で、倉庫を伴うもの）

北1西3区のB2期建物群で、方格地割II-A期に属する（註2）。建物群や出土遺物の内容から国司館と考えている（宮城県教委1996b）。国司館は方一町相当の宅地割であり、材木塀で南北に分割された。南半の建物群は、三面廂の主屋（SB589）の前面が空閑地で、その東に南北に並ぶ副屋が2列認められる。さらに、これらの背後を2×2間の小型総柱建物がコ字型に囲んでいる。

北1西7区は多賀城市第9・18次調査で確認された。主屋となる四面廂建物の規模や出土遺物から国守館跡と指摘されている（多賀城市埋文センター1991a・1993）。方格地割II-B期新段階に属し、街区南西隅の交差点よりに建物群が置かれた。四面廂の主屋（SB474）の前には、儀式または宴会で使用した土器を一括廃棄したSX543土器集積遺構が認められる。主屋と副屋の一部しか判明しておらず、調査区外に副屋や倉庫を伴った可能性がある。



図版728 建物配置の類型1



図版729 建物配置の類型2

【位置（年代）・遺構名】

北1西3区（9世紀中葉）：（主屋）SB589、（副屋）SB498・778・816、（倉庫）SB584・585・751・752・762・814・862・863

北1西7区（10世紀前半）：（主屋）SB474、（副屋）SB478・480、（井戸）SE504、（土器廃棄土坑）SX543

【B2型】（副屋の奥に倉庫が並ぶもの）

主屋は東西棟で、前面に空闊地があり、西側には副屋と倉庫が配置される。北2西5区は、本書のF区と多賀城市第12次調査F区で確認した（多賀城市埋文センター1992b）。方格地割II-A期に属し、街区北西隅の交差点より建物群が置かれた。北1西9区は、多賀城市第8次調査で確認された（多賀城市埋文センター1990b）。建物群は交差点に面した街区南西隅につくられており、調査区外となる主屋北側に倉庫が存在した可能性がある。

〔位置（年代）・遺構名〕

北1西9区（時期不明）：（主屋）SB390A・B、（副屋）SB391、（倉庫）SB388・389

北2西5区（9世紀中葉）：（主屋）SB5300、（副屋）SB5222・5294・5295・5296・11604、

（倉庫）SB5186・5187

【B3型】（建物配置がL字型のもの）

北2西4区は、本書のG区で確認した。方格地割II-A期に属し、街区内外東西区画溝で南北に3分割され、さらに中央は南北区画溝で東西に細分された。建物群は、中央西の小区画の北西隅によせてつくられている。南1東2区は、報告書での指摘はないが、建物配置と方向から同時期とみられる（多賀城市教委2003a）。

〔位置（時期）・遺構名〕

北2西4区（9世紀中葉）：（主屋）SB11065、（副屋）SB11206・11301

南1東2区（時期不明）：（主屋）SB1393、（副屋）SB1380

【B4型】（コの字型のもの）

3例とも交差点に面した街区隅に位置し、主屋前面の空閑地をはさんだ東西に副屋が配置され、井戸が南東隅につくられた。A～E型の中で最も定型的であり、主屋の建物規模もほぼ同じであるが、副屋の位置や規模に画一性は認められない。

南1西2区は方格地割II-A期に属し、主屋（SB1241）は二面廂である（宮城県教委1996b）。国司館と推定した街区の南東隅に位置し、北側の区画溝は造り水遺構と一体である。街区隅に位置し、占有面積は全体の1/6程度にとどまることから、国司の家政機関もしくはそれを司る人物の居住域とみられる。

南2西1区は方格地割II-B期新段階に属し、南1-2間道路によって街区内外は北2、南1に分割される（宮城県教委1996b）。後者に本類型が認められ、主屋（SB1864）は二面廂で、西の副屋（SB3445）は間仕切りを有する南北棟である。また、主屋の背後には工房とみられるSI1639竪穴住居が置かれた。北3西5区は方格地割I期に属し、東西37.5m、南北70.5mほどの小区画に建物群がつくられた（宮城県教委1997）。主屋（SB1547・1548）は3×3間の東西棟である。

こうしたコの字型配置は、平城京で官衙機能が想定されたほか（近江2015）、陸奥南半でも角田市角田郡山遺跡（角田市教委1997b・2002）、福島県郡山市東山田遺跡（垣内2002）、同市正直C遺跡（福島県教委1994）などで認められ、有力者の居宅と指摘されている（菅原2007・2008）。

〔位置（時期）・遺構名〕

南1西2区（9世紀中葉）：（主屋）SB1241、（副屋）SB1243・3030・3128、（井戸）SE1437・

2267

南2西1区（10世紀前半）：（主屋）SB1864、（副屋）SB1691・3441・3445、（工房？）SI1639、

（井戸）SE1616

北3西5区（8世紀末～9世紀前葉）：（主屋）SB1547・1548（建替え）、（副屋）SB579・635・

643・1558、（井戸）SE467A・B

C型（主屋+倉庫型）

副屋が認められず、主屋周囲に倉庫を配置する。主屋は、二面廂もしくは三面廂である。北2西4区の2例は方格地割II-B期に属し、街区は東西区画溝で南北に2分され、さらに南側は南北区画溝で西2：東1の割合に細分される。そのうち北半と南西で本類型が認められ、ともに主屋（SB3401・3423）が同規模の三面廂であることから、居住者は同一クラスとみられる。北半は北西隅の交差点よりに建物群があり、主屋の東西に2×2間の小型総柱建物が置かれた。また、主屋北側の小型建物も倉庫の可能性がある。南西は区画の東によせて建物群がつくられ、主屋の南東に2×2間の小型総柱建物が置かれた。

南1西4区は方格地割の東端に位置する（多賀城市教委2003a）。東3道路は、多賀城廢寺が立地する丘陵裾部に形成された低湿地との境界に施工されたため、街区は方形とならない。北西隅の交差点よりに建物群があり、主屋の南と東に空閑地が認められ、北に2×2間の小型総柱建物2棟、東に3×2間の小型建物が置かれた。

〔位置（時期）・遺構名〕

北2西4区（9世紀後葉）：（主屋）SB3401、（倉庫）SB3812・3840、（倉庫？）SB3810・3836

北2西4区（9世紀後葉）：（主屋）SB3423、（倉庫）SB3432、（工房？）SK3047

南1東4区（9世紀前半以降）：（主屋）SB1560、（倉庫）SB1561・1569、（倉庫？）SB1597、

（井戸）SE1549・1565

D型（建物並立配置+空閑地型）

同規模の建物を「コ」の字もしくは「ロ」の字状に配置し、中央に空閑地を設けたものをD型とした。廂付建物はなく、3間以下の小型建物で構成されるため、主屋の抽出が難しい。南1西2区は、方格地割II-B期古段階に属し、II-A期のB4型から本類型に建て替わる（宮城県教委1996b）。国司館と推定した街区の南東隅に位置し、北側の区画溝は造り水遺構と一体である。街区隅に位置し、占有面積は全体の1/6程度にとどまる。3×2間の建物6棟以上が南に開くコ字型配置をとり、中央に空閑地を設けている。建物配置や主屋の規模・構造が異なることから、前代とは場の性格が変わったと考えられる。

南1東2区は水入遺跡第1・4建物跡と、多賀城市第26次調査18・69区で確認された建物で構成され、方格地割II-A期に属するとみられる（宮城県教委1982b・多賀城市教委2003a）。街区は南北区画溝で東西に分けられ、建物群は東半北西部につくられた。3×2間とみられる建物5棟以上がロ字型配置をとり、中央の空閑地に井戸（第2井戸跡）を設けている。

〔位置・遺構名〕

南1西2区（9世紀後葉）：SB1242・1246・1551・3035・3036・3126・11085、（倉庫）SB1244

南1東2区（9世紀中頃）：SB1466・1469・1172・1180・第1・4建物、（井戸）第2号井戸

E型（建物並立配置型）

同規模の建物3棟を縦列もしくは横列に並べて配置するもので、空閑地が認められないものである。廟付建物はなく3間以下の小型建物で構成されるため、D型と同じく主屋の抽出が難しい。井戸は認められない。

北2a西5区は多賀城市第12次調査F区で確認された建物で、建物に関する報告ないが、建物方向と重複関係からみて方格地割II-A期に属するとみられる（多賀城市教委1992b）。北3西4区は方格地割II-B期に属する（宮城県教委2009）。東西大路東道路北側は建物の関係について言及されていないが、建物方向が同じであることから、同時期とみておきたい（多賀城市教委2003a）。

〔位置・遺構名〕

北2a西5区（9世紀中葉）：SB5418・5447・5448・5553・5557

北3西4区（9世紀後葉）：SB6848・7039・7040・7160

北1東2東外（時期不明）：SB1447・1471・1474・1476・1478・1485

B. 建物配置にみられる倉庫について

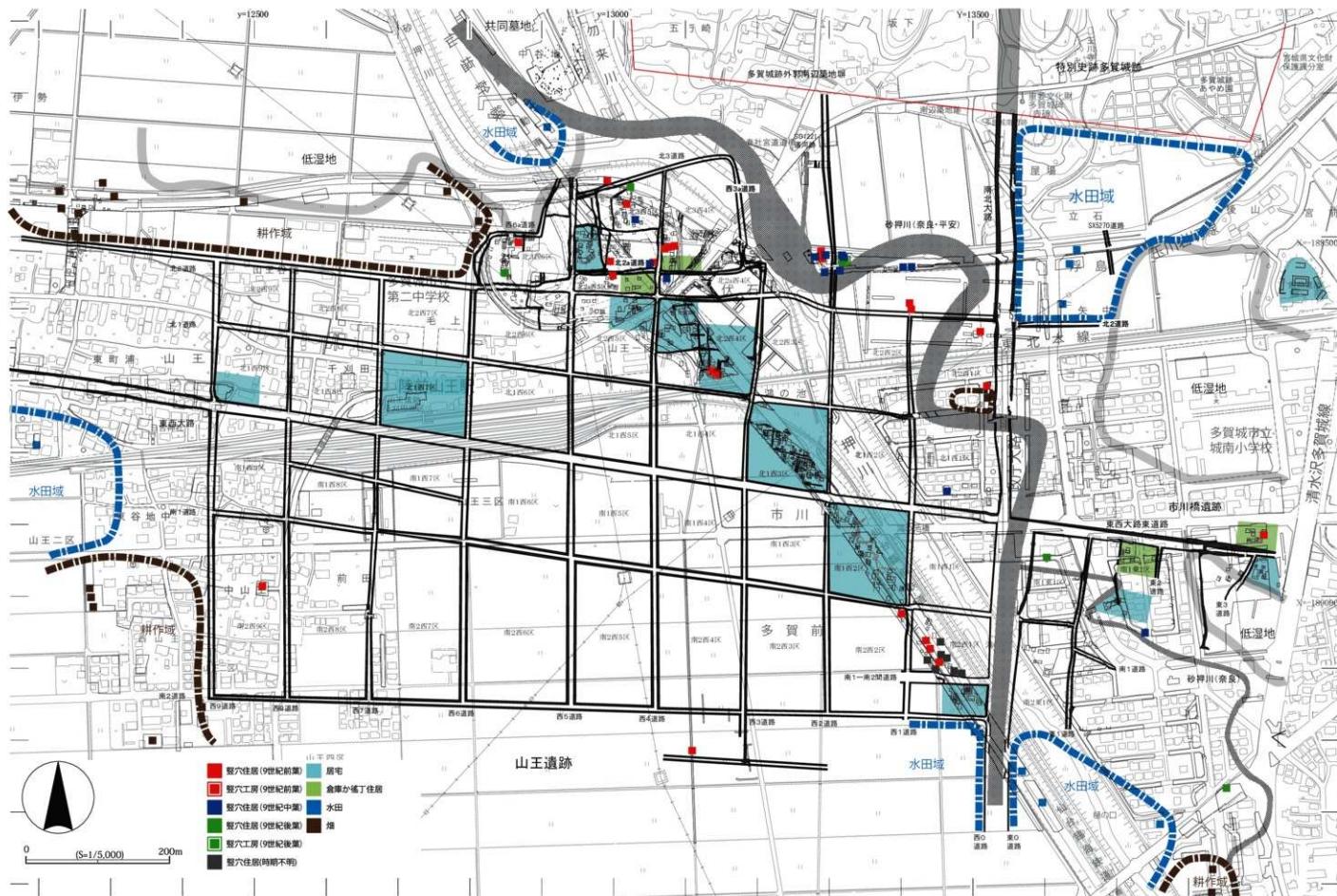
2×2間の総柱建物と2×1間の建物を倉庫と考えると、B1・B2・C・D型で認められる（図版728・729）。倉庫は隣接して複数設けられるものと単独のものがあり、前者が多い。また、複数の場合は縦列もしくは横列に配置され、その中には柱筋を揃えるものが認められる（B1・B2・C型）。小規模倉庫は穎倉の可能性が高く、居宅の特徴の一つとして倉の所有率の高さが指摘されている（山中2007）。また、館には出番・職分田経営の役割があり、倉庫を有する大型建物群は国司館の可能性が考えられている（鬼頭1986）。したがって、陸奥国府域で倉庫群を伴う建物配置（B1・B2・C型）は居宅とみられる。

主屋と倉庫群との位置関係をみると、1) 主屋背後と側面（B1型・北1西3区）、2) 主屋の側面（東西：C型・北2西4区北半、西側：B2型・北2西5区、B2型・北1西9区、北側：C型・南1東4区、東側：C型・北2西4区南西）の2タイプがあり、倉庫は主屋正面の空閑地を避けて側面から背後に配置される。全国的にみて、居宅に伴う倉庫の位置は北側か西側に設けられるものが多く、東西に分置されているものも認められることから（石毛2007）、陸奥国府域でも同じ傾向を示すといえる。

これに、主屋の規模や構造を加えて建物群をみると、主屋が三面廂で倉庫群がコ字状に配置されるB1型が最も格式が高く、次に主屋が二面廂以上で倉庫群が主屋側面に配置されるC型、主屋が廂を持たず倉庫群が主屋側面に配置されるB2型の順となる。B1型は国司館であることから、今後は敷地の占有状況や建物群全体の配置、主屋の規模と構造、出土遺物などから、居住者の階層や性格を考える必要がある。

C. 井戸について

B4型はすべて敷地の南東隅付近にあり、B1型の北1西7区SE504やC型の北2西4区北半は空閑地の西側に配置されている。また、C型のSE1549・1565は建物の間、D型の南1東2区は周りを建



図版730 多賀城南面府域の様相（9世紀～10世紀）

物に囲まれた空閑地の中央に位置する。これら 8 例のうち、6 例は主屋前面の空閑地横に位置しており、井戸位置の傾向性を指摘できる。

側の構造をみると横板（SE467：B4型、SE1549・1565：C型）、縦板（SE3728：C型、第2号井戸跡：D型）、倒り抜き（SE504：B2型、SE1434・2267：B4型）であり、建物類型や主屋の規模・構造と井戸構造との間に明確な対応関係は見出せない。こうした点は、山王・市川橋遺跡における井戸を分析した結果、井戸構造の違いは街区や使用者の格式・階層を示すものではなく、絶対的な規範がないとした指摘と共通する（櫻井 2015）。

（3）方格地割施工後の堅穴住居

多賀城南面で確認された堅穴住居のうち、方格地割施工後と判断できるものは 52 棟である。堅穴住居が多く確認された場所は八幡・伏石地区、館前地区、多賀前地区などで、東西大路に面する街区に少ない（図版 730）。こうしたことから、堅穴住居は地割縁辺部に偏在する傾向があり、格式の高い街区では建てられないか、あっても僅かで存続期間も短いと考えられる。

年代別にみると、八幡・伏石・館前地区は方格地割造営前から継続的につくられるが、方格地割全体では 8 世紀末～9 世紀前葉が多く、9 世紀中葉に減少する。10 世紀に入ると、南 2 西 1 区で工房と考えられる SI1639 以外に確認できず、地割内は時期が新しくなるほど堅穴住居が減少する。なお、今回は街区内で堅穴住居と掘立柱建物が併存する場合、両者の役割について具体的に検討していない。今後の課題としておきたい。

（4）水田・畑

方格地割の外側では、これまで市川橋遺跡矢中地区（宮城県教委 2001a）・中谷地地区（同 1997）、山王遺跡多賀前地区（同 1996b）などで水田の畦畔を確認している（図版 730）。これまで確認された水田跡は、すべて方格地割の外側に位置する。水田はすべて同時期に耕作されたものではなく、方格地割の南側と北側で時期が異なる。方格地割南側の多賀前地区 SF3700 は 8 世紀後半以降から耕作されるが、北側はいずれも灰白色火山灰降下（10 世紀前葉）前後であり、南側に対して北側の整田が遅れている。

方格地割北側では、七北田川に近い仙台市洞ノ口遺跡第 1 次調査の低地 6b 層の水田遺構（9 世紀後葉以降、仙台市教委 2005a）や新田遺跡第 53・54 次調査で水田域（10 世紀前葉以降、多賀城市教委 2010b）が確認されており、10 世紀前葉後に方格地割北側から七北田川左岸が整田されたとみられる。

小溝状遺構群（畝状遺構）は畑跡と考えられ（宮城県教委 1991b）、方格地割内外で確認されている。街区内の空閑地や方格地割外側の微高地上につくられたとみられ、生産作物は陸稲の可能性も考えられる。畑跡は高崎遺跡南外の高崎花の木地区試掘調査でも 10 世紀前葉のものが確認されており、水田と混在しながら広域に展開したと考えられる。

註

- 註1 多賀前地区的調査では、東西大路の拡幅が確認されている。それに伴う側溝から弘仁11年（820）銘木簡が出土しており（宮城県教委1996b）、SX468西9道路と接続したのは拡幅後の東西大路とみられる。
- 註2 多賀前地区的報告書では、北1西3区の9世紀前半～10世紀前半の遺構変遷をB1～B4期に細分している（宮城県教委1996b）。これを本書の方格地割変遷に対応させると、B1期：方格地割Ⅰ期（8世紀末～9世紀前葉）、B2期：方格地割Ⅱ-A期（9世紀中葉）、B3期：方格地割Ⅱ-B期古段階（9世紀後葉）、B4段階：方格地割Ⅱ-B期新段階（10世紀前半）になると考えられる。

14. 出土遺物からみた陸奥国府

1989年以降の大規模な発掘調査の結果、多賀城南面には道路網で方形に区画された方格地割が施工され、大宰府と並ぶ古代地方都市と位置付けられた実態が明らかになりつつある。また、多賀城の東側や多賀城廃寺周辺の丘陵部にもこれらを支えた施設群が展開した。こうした政治的な都市空間は「国府城」と呼ばれており（進藤2010）、多くの人々が集住し、さまざまな物資が集まる東国有数の消費地を形成した。ここでは、多賀城南面の方格地割施工域とその隣接地（＝山王・市川橋遺跡）を陸奥国府域と呼び、多賀城とともに遺物からの検討を試みる。

（1）官衙的器種

今回報告を行った山王・市川橋遺跡の8世紀中頃以降の土器をみると、時期ごとに集落と異なる土器が認められる。これらは、城柵・官衙やそれらの周辺に偏在する傾向があることから「官衙的器種」と呼ばれる（奈文研2015）。時期別にみると、8世紀中頃～後半は土師器盤・高盤・稜塊のほか、両黒食器があげられる。底部に刻書で「官」と記された両黒环は（図版484-20）、こうした関係を具体的に示すものとして注目される。また、この時期のロクロ土師器は集落で出土しないことから、官衙的器種と考えることができる。須恵器は稜塊・高环・双耳环のほかミガキ仕上げの須恵器食器（以下、ミガキ須恵器とする）や搬入品の猿投産須恵器や会津大戸窯須恵器（以下、大戸産須恵器とする）などがあげられる。

8世紀末～9世紀前葉は、前代と同じ土師器盤・高盤・稜塊のほか、両黒食器に加えて、畿内系土師器（多賀城市教委2003a）と呼ばれる搬入品が認められる。一方、ロクロ土師器は集落まで急速に普及したため、官衙的器種とは呼べなくなる。須恵器は前代と同じく稜塊・高环・双耳环・ミガキ須恵器であるが、平城京分類の壺G（奈文研1976）が特徴的に認められる。また、猿投産須恵器が施釉陶器と入れ替わるとともに、壺類を中心に大戸産須恵器が多く出土するようになり、搬入品の様相が大きく変わる。

9世紀中葉になると、土師器・須恵器ともこれまで主体を占めた金属器模倣の官衙的器種は激減し、施釉陶器模倣の皿や耳皿だけとなる。また、蓋を伴う高台付食器が急減して食器全体が大きく変容した。搬入品は施釉陶器と大戸産須恵器があるが、後者は本段階以降ほぼ壺類に限定される。器種の脱落や減少は以後も続き、10世紀に入ると須恵器食器がなくなり、土師器内黒食器が急減して、かわりに非内黒食器（赤焼土器）が急増する。こうした中、土師器や須恵器の官衙的器種は施釉陶器模倣の

塊・皿・壺類に限定（土師器の場合、多くは両黒仕上げ）され、搬入品も大戸産須恵器がなくなり、灰釉陶器が減少する。一方、多賀城や多賀城廃寺では京都府亀岡市篠産須恵器鉢が認められる。

ここでは、八幡・伏石地区から出土した官衙的器種の中からミガキ須恵器、須恵器壺G、大戸産須恵器を取り上げ、さらに硯と腰帶具を加えて、それらが出土した場所や街区の性格、陸奥国府における流通や消費の一端について検討してみたい。それぞれのカウントは報告書の図版に掲載された土器を対象に行った。また、陸奥国府域では街区ごとの点数を示したが、その際、前段階の様相を知るため、表中には8世紀中頃～後半も示している。なお、道路跡や河川跡は区画や街区への帰属が不明であることから、一覧表での紹介に止め、図版上の点数表示は行っていない（註1）。

（2）ミガキ須恵器

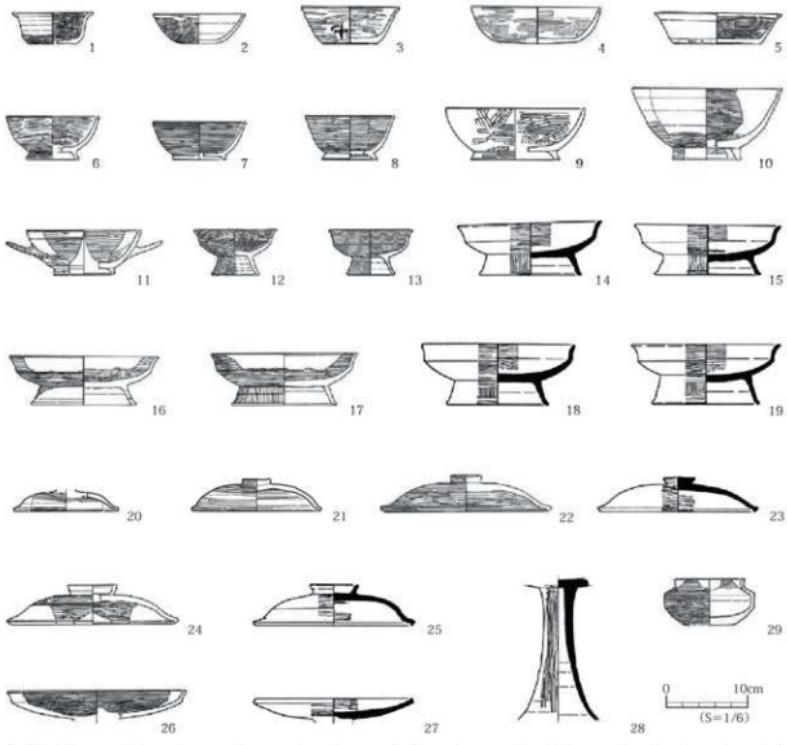
ミガキ須恵器とは、製作工程の最終段階で丁寧なヘラミガキが施された須恵器食器である（図版731）。陸奥国府で特徴的に認められ、両面ミガキが多いが、环や高台环には外面の一部のみ、内面のみのものが認められる。器種は壺（1～5）・高台壺（6～9）・高台塊（10）・稜塊（12～19）・双耳壺（11）・高壺（26～28）・蓋（20～25）・小型短頸壺（29）などがあり、高台付食器は基本的に蓋がセットとなる。中でも稜塊は、高脚で擬宝珠やリングつまみの蓋が伴っており、ミガキ須恵器を代表する器種といえる。胎土は精選され、つくりや仕上げが丁寧であるため他の須恵器との識別は容易である。

生産地については長らく不明であったが、後述する当教育委員会所蔵の会津大戸窯出土サンプルの中にミガキ須恵器の高台盤が認められたことから、産地の一部が判明した（図版738）。残りについては大戸産須恵器のように遠隔地からの搬入品であるのか、周辺の官窯でつくり分けが行われたのか現時点では判断できず、今後の課題である。

陸奥国府から出土したミガキ須恵器は、8世紀末～9世紀中葉のものが多く、生産年代の中心はこの頃とみられる（表97・98）。8世紀後半は壺・高台壺が少量認められるに過ぎないが、8世紀末～9世紀中葉は器種が壺・高台壺・高台塊・双耳壺・稜塊・高壺・小型短頸壺など豊富となり、出土例も多い。この時期は、後述する須恵器壺Gや大戸産須恵器のピークとも重なる。一方、9世紀後葉以降は、良好な共伴例が認められず土器組成から脱落したとみられる。

陸奥国府域では、北2道路沿いの西4～6区と東西大路東道路沿いに分布のまとまりが認められる（図版732、表96）。前者の場合でも、北2西4・6区、北2a西4区では3点以上出土したものの、北3西4区や北2西5区は0点であり、隣り合う区画であっても出土数が明確に異なる。また、後者は多賀城と国府付属寺院（多賀城廃寺）を結ぶ道路沿いに位置する。

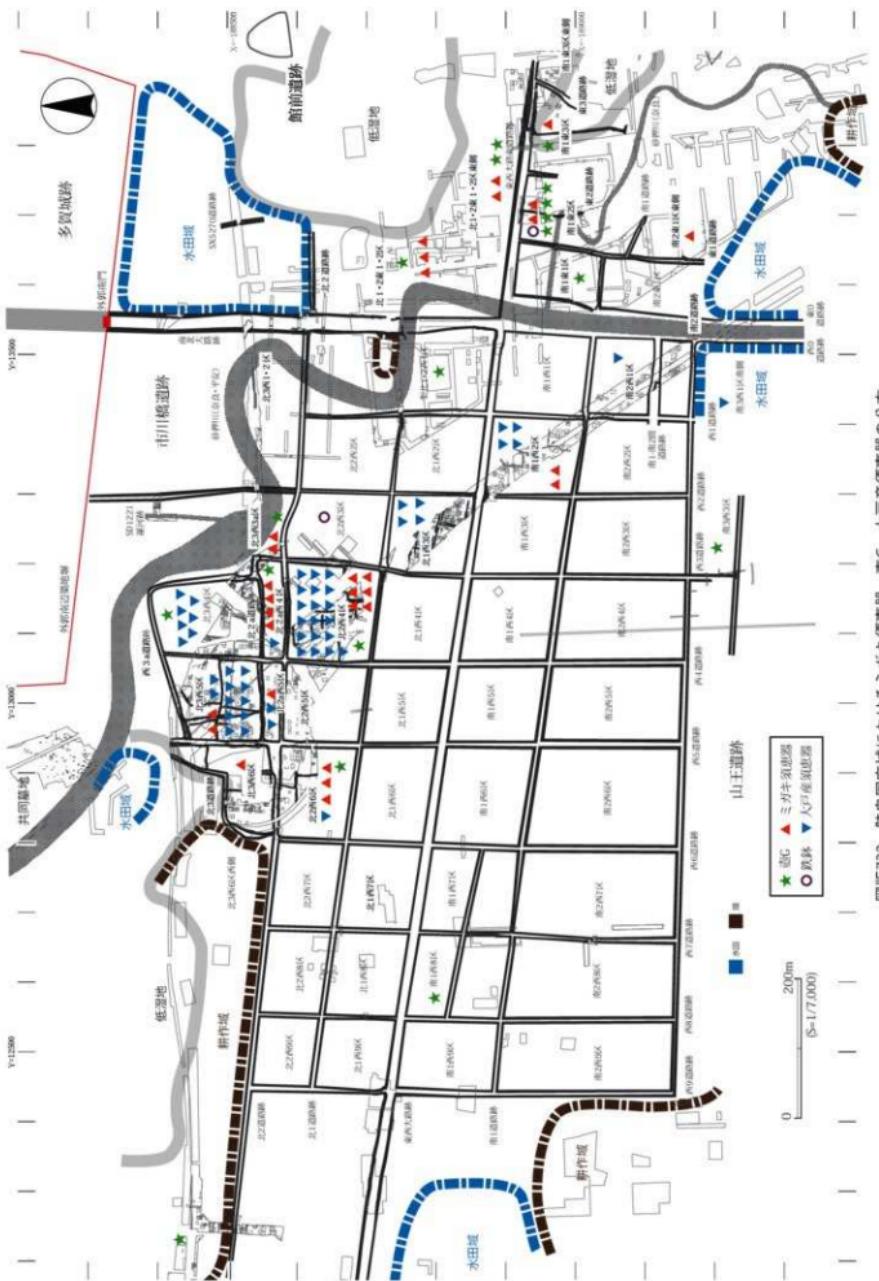
多賀城は政庁が3点と少ない。一方、5点以上出土したのは大畠・城前・五万崎の3地区で、後2者は10点以上と多い（図版733、表96）。特に五万崎地区は、43点と城内出土品の約6割を占める。3地区は外郭東・南・西の各門を入ってすぐの曹司であること、3地区とも城内の幹線道路に面すること、作貫・六月坂・金堀地区の曹司から出土していないこと、政庁からの出土が少ないとから、儀式用の器ではなく外郭門の内側に宿泊施設である館があり、そこで使われた高位者用の特別な食器



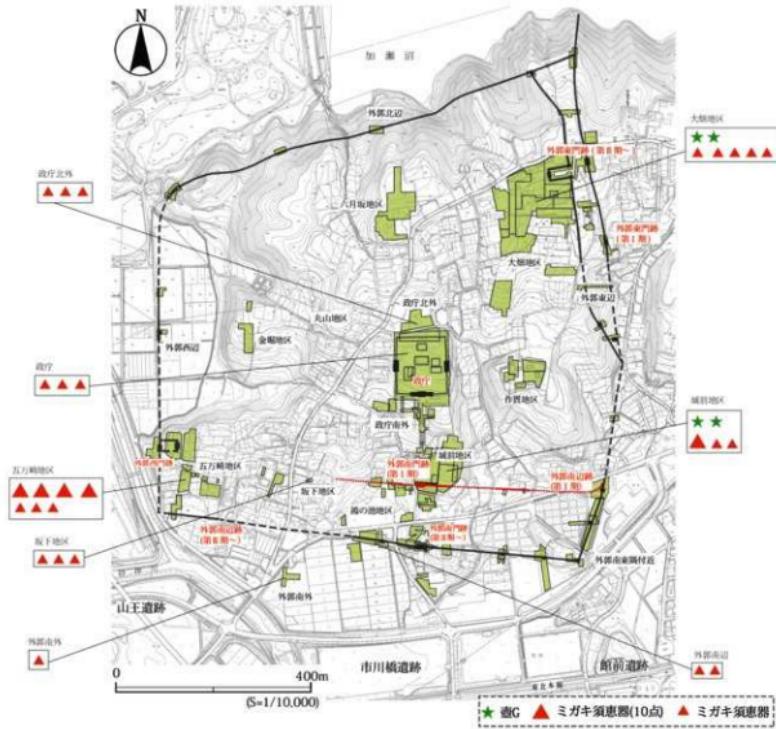
No	器種	遺跡名・出土遺物	遺傳の年代	報告書	No	器種	遺跡名・出土遺物	遺傳の年代	報告書
1	环	八幡地区・SK49	9世紀前半	船174	16	梯形	多賀城跡五力崎地区・SK2272	9世紀中期	年報1994
2	环	熊前地区・SK3720 河川跡	9世紀前半	船218	17	梯形	多賀城跡五力崎地区・SK2272	9世紀中期	年報1994
3	环	高平地区・SK236 土坑	8世紀末～9世紀前葉	市21	18	梯形	多賀城跡五力崎地区・ISO-2期	8世紀末～9世紀前葉	年報1976
4	环	道／池地区・SK3334 土坑	8世紀中期～後半	市91	19	梯形	多賀城跡五力崎地区・ISO-2期	8世紀末～9世紀前葉	年報1976
5	环	熊前地区・SD5021 河川跡	8世紀～9世紀初期	船184	20	环置	八幡地区・北2道跡(SX12221)	9世紀初期～10世紀前半	本書
6	高台环	八幡地区・SD164 漢跡	—	船174	21	环置	八幡地区・SK3727 土坑	8世紀末～9世紀前葉	本書
7	高台环	伏石地区・SK3727 土坑	8世紀末～9世紀前葉	船174	21	环置	八幡地区・SK7933 土坑	8世紀末～9世紀前葉	本書
8	高台环	熊前地区・SK3720 河川跡	9世紀前半	船218	22	环置	多賀城跡五力崎地区・SK2272	9世紀中期	年報1994
9	高台环	熊前地区・SD161A 河川跡	8世紀～9世紀初期	船184	23	环置	多賀城跡五力崎地区・ISO-2期	8世紀末～9世紀前葉	年報1976
10	高台环	多賀城跡熊前地区・SK2545 土坑	9世紀前半	年報1994	24	环置	多賀城跡五力崎地区・SK2272	9世紀中期	年報1994
11	双环	多賀城跡五力崎地区・SK2272 土坑	9世紀中期	年報1994	25	环置	多賀城跡五力崎地区・ISO-2期	8世紀末～9世紀前葉	年報1976
12	梯形	多賀城跡熊前地区・SD6086 住居跡	8世紀後葉	年報2000	26	梯形	多賀城跡・SK2671 梯形	8世紀末～9世紀前葉	年報170
13	梯形	多賀城跡熊前地区・79次古窯	8世紀末～9世紀前葉	年報2007	27	梯形	多賀城跡五力崎地区・ISO-2期	8世紀末～9世紀前葉	年報1976
14	梯形	多賀城跡五力崎地区・ISO-2期	8世紀末～9世紀前葉	年報1976	28	梯形	多賀城跡五力崎地区・ISO-2期	8世紀末～9世紀前葉	年報1976
15	梯形	多賀城跡五力崎地区・ISO-2期	8世紀末～9世紀前葉	年報1976	29	梯形	木人塚地区・SK1176 上部	—	本書

*山王・市川橋遺跡の場合には遺跡名を省略し、地区名のみとする

図版731 陸奥国府出土のミガキ須恵器



図版732 陸奥国府境におけるミガキ須恵器・壺G・大戸産須恵器の分布



図版733 多賀城跡におけるミガキ須恵器・壺Gの分布（多賀城跡調査研究所作成図に加筆）

多賀城跡								
政 府	政 府 北 外	城前地区		大 鎮 地 区		五 万 嶋 地 区		下 下 地 区
計	3	計	3	計	12	計	5	計
不明	3	不明	3	8c 後半	1	8c 末~9c 初頭	5	8c 前半
						1 9c 末~9c 前葉	13	8c 前半
						1 9c 前葉	3	不明
						1 9c 後半	1	2 不明
						1 9c 中葉	11	
						1 9c 後葉		
						1 9c 後葉	1	
						1 9c 前葉	1	
						1 9c ~	1	
						1 9c ~	1	
						1 9c ~10c 初頭	3	
						1 9c 中葉~後葉	1	
						1 9c ~ 10c	1	
						1 9c ~	2	
						1 12c	2	
						1 小口 ~ 腹大	3	
						1 不明	4	

八幡地区					伏石地区			
北 2 西 5 区	北 2 西 5 区	北 3 西 6 区	北 2 西 6 区	北 2 西 6 区 or 北 3 西 6 区	北 2a 西 4 区	北 2 西 4 区	北 3 西 3 区	北 2 西 3 ~ 北 2 西 4 区
計	2	計	1	計	1	計	6	計
9c 末~9c 前葉	1 9c	1 9c	1 9c 後半	1 不明	1 9c 末~9c 前葉	1 9c 末~9c 前葉	2 9c 中葉	2 不明
9c 後葉	1			不明	2	9c 中葉	1	
					不明		2 9c 後葉	2
							不明	1

多賀前地区		高台地区		大人地区			
南 1 西 2 区	北 1-2 東 1-2 東 3 区側	北 1-2 東 1-2 東 3 区側	北 1-2 東 1-2 東 3 区側	南 1 東 2 区	南 1 東 3 区	南 2 東 1 区東側	南 1 東 3 ~ 南 1 東 3 区東側
計	2	計	3	計	2	計	1
9c 末~9c 前葉	1 不明	3 9c 末~9c 前葉	1 不明	2 不明	1 9c 中期~後葉	1 不明	1
9c 後葉	1			不明	1		

表96 陸奥国府における地区別・街区別ミガキ須恵器出土数

No	遺跡名	地区	次数	遺構名	層位	区画	遺構の年代	断面図						文獻	伴圖-No.			
								横壁	内壁	高台	低	窓	壁脚	地盤	細部			
1	多賀城跡	政府		SK1104 土坑			9c 中葉	1								政府跡 本文 135 - 176 國跡 PL13 - 186 - 189		
2	多賀城跡	政府						2 (2)									年 1976 52 - 1 + 2	
3	多賀城跡	五万崎	28・29	ISOB - 2期	9c 末～9c 前半		8 (5)	3 (2)	2								年 1976 47 - 1 + 9	
4	多賀城跡	五万崎	28・29	SK951 土坑			-	1	1								年 1976 42 - 1	
5	多賀城跡	五万崎	28・29		置盤		-			1 (1)							年 1976	
6	多賀城跡	五万崎	28・29	SB896 建物跡	柱穴埋土		10c ~		1 (1)								年 1976	
7	多賀城跡	五万崎	28・29	SD808 建物跡	埋土		9c ~		1 (1)								年 1976	
8	多賀城跡	五万崎	28・29	SD953 清跡			-		1 (1)								年 1976	
9	多賀城跡	五万崎	30 次	SE382 井戸跡	4 箕		10c 中葉～後半	1									年 1977	
10	多賀城跡	五万崎	30 次	SD1006 清跡	1 箕		中世～近世		2 (1)								年 1977	
11	多賀城跡	五万崎	30 次	SD1008 清跡	3 箕		中世～近世	1		1 (1)							年 1977	
12	多賀城跡	政府北外	31 次		置盤		-		1 (1)								年 1977 92 - 5	
13	多賀城跡	政府北外	32 次		北区 2 箕		-		1								年 1978	
14	多賀城跡	五万崎	33 次	SK1076 土坑	2 期		9c ~ 10c		1								年 1978 61	
15	多賀城跡	外郭南北造	37 次		置盤		-	1 (1)									年 1980 74 - 5	
16	多賀城跡	城前	43 次		南区 3 築		-		1								年 1983	
17	多賀城跡	城前	43 次		北区 4 築		-		1								年 1983	
18	多賀城跡	城下	45 次	SI1443 住居跡	1 築		9c 前半			1							年 1984	
19	多賀城跡	城下	45 次	SI1443 住居跡	3 築		9c 前半		1 (1)								年 1984	
20	多賀城跡	城下	45 次	SI1443 住居跡	1 築		9c 前半			1							年 1984	
21	多賀城跡	五万崎	現査	SK2270 土坑			9c 後半		1 (1)								年 1994 45 - 1	
22	多賀城跡	五万崎	現査	SK2272 土坑			9c 中葉		1 (1)								年 1994 51 - 10	
23	多賀城跡	五万崎	現査	SK2272 土坑			9c 後半		1								年 1994 51 - 16	
24	多賀城跡	五万崎	現査	SK2272 土坑			9c 中葉			1							年 1994 51 - 17	
25	多賀城跡	五万崎	現査	SK2272 土坑			9c 中葉	7 (7)	1							年 1994 51 - 8 + 9 - 11 + 15 + 18		
26	多賀城跡	五万崎	現査	SE2273 月戸跡			12c	1 (1)	1 (1)								年 1994 56 - 11	
27	多賀城跡	五万崎	現査	SD2275 清跡			9c	1									年 1994 56 - 14	
28	多賀城跡	五万崎	現査		3 築		9c 末～10c 初頭		3 (3)								年 1994 57 - 11 + 12 + 13	
29	多賀城跡	大堀	66 次	SD2311 住居跡	1 築		8c 末～9c 初頭		1 (1)								年 1995 46 - 26	
30	多賀城跡	大堀	66 次	SK2328 土坑			9c 前半		1 (1)								年 1995 83 - 9	
31	多賀城跡	大堀	66 次	P128			-										年 1995 85 - 5	
32	多賀城跡	大堀	68 次	SB2429 建物跡	柱切穴六		10c 前半			1							年 1997 16 - 12	
33	多賀城跡	大堀	68 次	SB2438 住居跡	柱穴埋土		9c 後半	1									年 1997 20 - 5	
34	多賀城跡	大堀	69 次	SB2456 建物跡	柱切穴六		9c 後半		2 (1)								年 1998 9 - 9 + 9	
35	多賀城跡	城前	70 次	SK2545 土坑	1 築		9c 前半										年 1999 11 - 8	
36	多賀城跡	城前	71 次	SD2608 住居跡	3 築		9c 後半		1								年 2000 14 - 39	
37	多賀城跡	五万崎	現査		3 築		10c ~		1								年 2001 21 - 14	
38	多賀城跡	西側造跡	73 次	SF202 廊下附	崩壊土		-		1 (1)								年 2002 8 - 13	
39	多賀城跡	西側造跡	73 次		表土		-	1									年 2002 17 - 38	
40	多賀城跡	城前	78 次	SD2655 清跡			9c 後半		1 (1)								年 2006 20 - 1	
41	多賀城跡	城前	79 次		1 築		9c 末～9c 前半	1									年 2007 16 - 46	
42	多賀城跡	城前	79 次		II 築		9c 末～9c 前半			1	1	1	1 (1)				年 2007 14 - 20, 16 - 38 + 33 - 54	
43	市川橋遺跡	相前		SD5021 河川跡			8c 末～9c 初頭			1							昭 18 - 21 150 - 4	
44	市川橋遺跡	相前		SD5161A 河川跡			8c 末～9c 初頭		1								昭 18 - 21 221 - 4	
45	市川橋遺跡	伏石		西 3a 通路 (SM0512)	B 期		9c 末～9c 中葉			1							昭 218 - 1 37 - 3	
46	市川橋遺跡	伏石		西 3a 通路 (SM0512)	路面Ⅲ		10c 前半～中頭		1								昭 218 - 1 38 - 12	
47	市川橋遺跡	伏石		北 2a + 西 3 通路	交叉点 C 断面		9c 末～9c 中葉										昭 218 - 1 55 - 17	
48	市川橋遺跡	伏石		北 2a + 西 3 通路	交叉点 A 断面		10c 前半～中頭		1	1							昭 218 - 1 57 - 10 + 12	
49	市川橋遺跡	伏石		SD6557 建物跡	崩下壁		-	8c 中頭～後半			1						昭 218 - 1 80 - 7	
50	市川橋遺跡	伏石		SK6630 土坑	堆積土		北 2a 西 4 区	9c 中葉		1							昭 218 - 1 133 - 19	
51	市川橋遺跡	伏石		SK6502 建物跡	北 3 西 3a 区	9c 中葉	1 (1)	1 (1)									昭 218 - 1 1143 - 3	
52	市川橋遺跡	崩下		SK6720 河川跡	6c 築		9c 前半	2	3 (3)	2	1						昭 218 - 2 254 - 172 + 179	
53	市川橋遺跡	崩下		SK6720 河川跡	6b 築		9c 前半		1 (1)								昭 218 - 2 255 - 194	
54	市川橋遺跡	崩下		SK6720 河川跡	6c 築		9c 前半		1								昭 218 - 2 257 - 224	
55	市川橋遺跡	伏石	1 次		5 築		変 2 号 4 築 or 変 2 号 3 築		1 (1)								市 4 - 16 - 16	
56	市川橋遺跡	高平	7 次	SK236 土坑	4 築		北 1 - 2 東 1 - 2 区全闇	9c 末～9c 前半		1							市 21 - 26 - 7	
57	市川橋遺跡	高平	25 次		B13 区 - I		北 1 - 2 東 1 - 2 区		1 (1)								市 60 - 38 - 1	
58	市川橋遺跡	高平	25 次		B13 区 - I		北 1 - 2 東 1 - 2 区		1 (1)								市 60 - 38 - 2	

番号の場合、() 内に基の数を示した。

年文獻の「年」は多賀城の年報、「址」は呉城駿文化財調査報告書、「市」は多賀城市文化財調査報告書を示す。

表97 陸奥国府出土のミガキ須恵器 1

No	遺跡名	地区	次数	遺構名	層位	区・面	遺構の年代	種種					報告書	伴団-地		
								種別	瓦片	高台坪	坪	窓	施釉	焼造		
59	市川鐵道跡	高平	25次	SD1101 滝跡	1層	北1~2東1~2区	—			1 (1)					市60	125~9
60	市川鐵道跡	高平	25次	SD935C 滝跡	1層	北1~2東1~2区	—		1						市60	171~9
61	市川鐵道跡	水入	26次	SD1207 土坑	2層	南1東2西1	—	1							市70	131~150
62	市川鐵道跡	水入	26次	SK1176 土坑	1層	南1東2西2	—					1			市70	134~184
63	市川鐵道跡	水入	26次	SX11521	1層	南1東2西2	—	1 (1)							市70	219~1306
64	市川鐵道跡	油ノ池	64次	SK3334 土坑	4層	南2東1西6	8c 中頃~後半			1					市91	16~5
65	市川鐵道跡	水入	91次		1層	南1東2西5	—		1 (1)						市127	5~6
66	山王遺跡	多賀前		東西大路・西2道筋 C 施釉陶		—	9c 前半	1							縣170	17~46
67	山王遺跡	多賀前		SE2267 月戸跡	制方	南1西2区	8c 末~9c 前半				1				縣170	70 ②~3
68	山王遺跡	多賀前		SK53 土坑	1層	南1西2区	9c 前半				1				縣170	72 ④~1
69	山王遺跡	八幡		西4道路跡 C 施釉陶 (SD832)	3層	—	10c 前半	1							縣174~1	7~8
70	山王遺跡	八幡		西4 道路跡 (SX700+750)	路面	—	9c ~ 10c		1 (1)						縣174~1	9~5
71	山王遺跡	八幡		西5 道路跡 B 施釉陶 (SD383)	2層	—	9c 後半	1							縣174~1	12~3
72	山王遺跡	八幡		北2 道路跡 B 施釉陶 (SD112)	2層	—	9c 後半		1 (1)						縣174~1	17~11
73	山王遺跡	八幡		S890 建物跡		北2西6区	—	1	1						縣174~1	48~1~2
74	山王遺跡	八幡		SK49 土坑		北2西6区	9c 後半			1					縣174~1	94~5
75	山王遺跡	八幡		SK9 土坑	2層	北3西6区	—	1 (1)							縣174~1	111~7
76	山王遺跡	八幡		SD164 滝跡	1層	北2北西5区	9c		1						縣174~1	131~7
77	山王遺跡	八幡		SD164 滝跡 II 期		—	—	1							縣174~1	271~13
78	山王遺跡	八幡		土方		—	—		2						縣174~1	278~5~6
79	山王遺跡	伏石		北2 道路跡 C 施釉陶 (SD2303 a)	1層	—	10c 前半		1						縣174~2	303~4
80	山王遺跡	伏石		SX3029 工房跡	底直上	北2西4区	9c 中頃			1					縣174~2	337~9
81	山王遺跡	伏石		SD156 滝跡		北2西4区	—			1					縣174~2	380~2
82	山王遺跡	伏石		SK3047 土坑	3~4層	北2西4区	9c 後半		1	1					縣174~2	388~10~11
83	山王遺跡	伏石		SK3637 土坑	1~3層	北2西4区	8c 末~9c 前半	1 (1)							縣174~2	399~13
84	山王遺跡	伏石		SK3727 土坑	4~9層	北2西4区	8c 末~9c 前半								縣174~2	402~16
85	山王遺跡	八幡		北2 道路跡 北隣		—	9c ~ 10c		1 (1)						本著 (県246)	13~4
86	山王遺跡	八幡		西4 道路跡 (SX750)		—	9c ~ 10c		1 (1)		1				本著 (県246)	41~25~26
87	山王遺跡	八幡		SD788 滝跡	確定層	北2北西4区	—		1						本著 (県246)	88~20
88	山王遺跡	八幡		SD7015 滝跡	確定層	北2北西4区	—		1 (1)						本著 (県246)	89~42
89	山王遺跡	八幡		SX7013 壁穴建物跡	堆積土	北2北西4区	8c 末~9c 前半			1					本著 (県246)	118~25
90	山王遺跡	八幡		SX7013 壁穴建物跡	確定層	北3西5区	9c 後半		1 (1)						本著 (県246)	439~22
91	山王遺跡	八幡		SK7093 土坑	1層	北3西5区	8c 末~9c 前半	1 (1)							本著 (県246)	575~24
92	山王遺跡	八幡		SK11769 土坑	埋土	北3西6区	9c					1			本著 (県246)	618~3
計								10 (25)	1	16 (23)	4	3	2	1	1 (1)	1

*有着の場合、() 内に着の数を示した。

*文献の「年」は多賀研の年齢。「県」は宮城県文化財調査報告書、「市」は多賀研城市文化財調査報告書を示す。

表98 陸奥国府出土のミガキ須恵器2

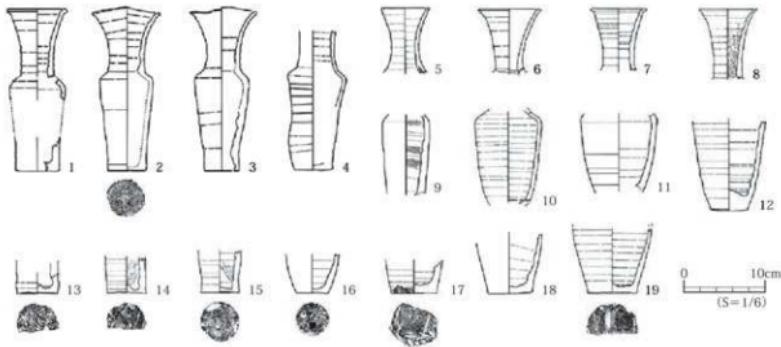
であった可能性を考えたい。五万崎地区は、9世紀後半～10世紀前半の施釉陶器が城内で最も多く出土している点も（多賀研2012）、こうした推定を裏付けるものといえよう。

(3) 須恵器壺G

壺Gは、『平城宮発掘調査報告VII』(奈文研1976)で命名された細長い壺で、形態は一輪挿しの花瓶に類似する(図版734)。単純口縁で最大径は口縁部や肩部にあり、底部は回転糸切り無調整で内外ともロクロナデが明瞭である(佐野1999)。平城宮第V期に出現し、長岡京期に盛行して平安京初期には姿を消しており、生産年代は8世紀後葉～9世紀初頭に限定される(山中1997)。生産地は駿河国助宗窯跡群や伊豆国花坂窯跡のほか、胎土や製作技法の違いから他にも生産地が想定されており、その中には武藏国が含まれる(山中前掲)。いずれの場合でも、陸奥国にとっては生産期間や生産地が限定された輸入品として貴重である。

器形から、口径より胴部径が大きい中大型と胴部径が口径以下の細型に大別されている(山中前掲)。用途としては、堅魚の煮汁運搬容器説(巽1991)や形態的特徴と年代が8世紀後葉～9世紀初頭に限定されるため兵士が携帯した水筒説(山中前掲)、仏具の花瓶説(佐野1998)が提示されているが確定していない。

陸奥国府からは41点出土した(表99)(註2)。8世紀後葉から認められ、8世紀末～9世紀前半に最も多く、10世紀中頃まで認められる。分類可能な28点中6点が中大型、22点は細型で、後者が多いのは陸奥国や下野国の特徴とされている(佐野前掲)。これに対し、多賀城跡は4点、同庵寺跡は



号	通標名・出土場所	分類	通標の年代	報告書	号	通標名・出土場所	分類	通標の年代	報告書
1	高平地区・整地	細型	8世紀末～9世紀前半	多賀城市1990a	11	廻ノ池地区・83丘里塙	中大型	—	多賀城市2004d
2	高平地区・SK236土坑	細型	8世紀末～9世紀前半	多賀城市1990a	12	佐石地区・SH6520葉巻面	中大型	—	同前
3	水入地区・SD283溝跡	細型	—	多賀城市1990d	13	佐石地区・SK3637	細型	8世紀末～9世紀前半	同前
4	酒ノ池地区・SK2509	細型	—	多賀城市2004d	14	木入地区・第1号	細型	9世紀前半	同前
5	水入地区・第1号	—	8世紀前半	同前	15	佐石地区・SK6615	細型	9世紀前半	同前
6	熊前地区・SD1521川河跡	中大型	8世紀末～9世紀初頭	同前	16	酒ノ池地区・SD31426	細型	10世紀前半～	多賀城2005b
7	多賀城大堀跡・SI2153溝跡	—	8世紀末～9世紀前半	多賀研1993	17	佐石地区・丘2・西3交差部分面	細型	10世紀前半～中頃	同前
8	多賀城跡・SI2609仕切跡	—	8世紀後葉	多賀研2001	18	木入地区・SD1184	中大型	8世紀後葉～9世紀前半	多賀城2003a
9	多賀城跡・SI2609溝跡	細型	—	多賀研2001d	19	鶴前地区・SD9021	中大型	8世紀～9世紀初頭	同前
10	同前地区・SD5021河川跡	中大型	8世紀～9世紀初頭	同前	—	—	—	—	—

※壺Gの型式分類は、山中(1997)にまとめてある。

*山王・市川橋遺跡の場合は道替名を省略し、地区名とした。

**多賀研は多賀城跡調査研究会、古窯研は古窯跡研究会を指す。また、教育委員会は省略した。

図版734 陸奥国府出土の壺G

区	地名	地区名	次數	遺 墓	部位	その他遺構・部位	区	地名	分類	遭難の年代	報告書	埠地 No.	
1	多賀城跡	大隈	60 次	SE2108 井ノ跡	4 番	—	—	—	縦型	9c 第2四下期	年 1991	28 - 17	
2	多賀城跡	大隈	62 次	SZ2153 住居跡	2 番	—	—	—	—	8c 東～9c 前葉	年 1992	30 - 11	
3	多賀城跡	城前	71 次	SE6099 日比跡	1 番	—	—	—	—	9c 後葉	年 2000	14 - 45	
4	多賀城跡	城前	復元	SX2705 整地跡	1 番	—	—	中大型	—	年 2002	31 - 59		
5	多賀城跡	河跡	—	—	—	—	—	—	縦型	9c - 10c 初頭	昭 19 - 20	19 - 15	
6	山ノ内城跡	水入	—	—	第Ⅲ層	南1東2区	—	—	縦型	9c 初頭	昭 84	56 - 1	
7	山ノ内城跡	水入	—	—	第Ⅲ層	南1東2区	—	—	縦型	9c 初頭	昭 84	56 - 2	
8	山ノ内城跡	水入	—	—	第Ⅲ層	南1東2区	—	—	縦型	9c 初頭	昭 84	57 - 16	
9	山ノ内城跡	河跡	SD5021 河川跡	—	—	—	—	—	縦型	9c - 10c 初頭	昭 184 - 2	158 - 5	
10	山ノ内城跡	河跡	SD5021 河川跡	—	—	—	—	—	縦型	8c - 9c 初頭	昭 184 - 2	159 - 3	
11	山ノ内城跡	河跡	SD5021 河川跡	—	—	—	—	—	縦型	8c - 9c 初頭	昭 184 - 2	159 - 4	
12	山ノ内城跡	河跡	SD5021 河川跡	—	—	—	—	—	中大型	8c - 9c 初頭	昭 184 - 2	159 - 5	
13	山ノ内城跡	伏石	北2a・西3交差点跡面	—	—	—	—	—	縦型	10c 前葉～中期	昭 218 - 1	56 - 27	
14	山ノ内城跡	伏石	北2a・西3交差点跡面	—	—	—	—	—	—	—	昭 218 - 1	57 - 14	
15	山ノ内城跡	伏石	北2a・西3交差点跡面	—	—	—	—	—	縦型	10c 前葉～中期	昭 218 - 1	57 - 15	
16	山ノ内城跡	伏石	北2a・西3交差点跡面2	2 番	—	—	—	—	—	—	昭 218 - 1	58 - 11	
17	山ノ内城跡	伏石	北2a・西3交差点跡面2	2 番	—	—	—	—	—	—	昭 218 - 1	58 - 12	
18	山ノ内城跡	伏石	SIG620 住居跡	—	—	北3西3a区	—	中大型	8c 中頃～末葉	昭 218 - 1	110 - 19		
19	山ノ内城跡	伏石	SK6615 土坑	3 番	—	—	—	—	—	—	昭 218 - 1	133 - 12	
20	山ノ内城跡	伏石	—	—	平成18年道構築記面	北2a西4区 or 北3西4区	—	—	—	—	昭 218 - 1	147 - 33	
21	山ノ内城跡	伏石	—	—	平成18年道構築記面	北2a西4区 or 北3西4区	—	—	—	—	昭 218 - 1	147 - 34	
22	山ノ内城跡	伏石	—	—	B区南端土壠	—	—	—	縦型	—	昭 218 - 2	215 - 14	
23	山ノ内城跡	河跡	SX6720 河川跡	第6c 番	—	—	—	—	中大型	9c 前葉	昭 218 - 2	254 - 107	
24	山ノ内城跡	森平	7次	整地 2	—	—	北1・2東1・2区外	—	縦型	8c - 9c 初頭	昭 21	6 - 7	
25	山ノ内城跡	森平	7次	SK2386 土坑	4 番	—	北1・2東1・2区外	—	縦型	8c - 9c 初頭	市 21	25 - 1	
26	山ノ内城跡	水入	9次	SD283 滝跡	1 番	—	北1・2東1・2区	—	縦型	—	市 24	9c - 26 - 7	
27	山ノ内城跡	水入	26 次	SD1184 清跡	1 番	—	北1東2区	—	中大型	9c 中頃～9c 前葉	市 70	137 - 103	
28	山ノ内城跡	水入	26 次	—	—	18区第1期	北1東2区 or 南1東2期	—	—	—	市 70	185 - 78	
29	山ノ内城跡	水入	26 次	—	—	18区第1期	南1東2区 or 南1東2期	—	—	—	市 70	185 - 78	
30	山ノ内城跡	水入	27 次	—	—	78区第1期	南1東3区	—	—	—	市 70	222 - 134?	
31	山ノ内城跡	河ノ跡	SX2509	砂砾地	—	—	北1・2西1区	—	縦型	—	市 75 - 2	163 - 924	
32	山ノ内城跡	河ノ跡	28次	—	—	83区第1期	南1東1区	—	中大型	—	市 75 - 2	184 - 1305	
33	山ノ内城跡	河ノ跡	29次	SX1940 (東) 道構跡 B 帯	1 番	—	—	—	縦型	—	市 75 - 2	185 - 1319	
34	山ノ内城跡	河ノ跡	43次	SD31429 (南) 道路	清跡	理土	—	—	縦型	10c 中葉～	市 77 - 7	6 - 6	
35	山ノ内城跡	八幡	SE66 井ノ跡	—	—	北2西6区	—	中大型	8c 東～9c 代	昭 174 - 1	22007		
36	山ノ内城跡	伏石	SK3637 土坑	1 - 3 番	—	北2西4区	—	縦型	8c 東～9c 前葉	昭 174 - 2	399 - 15		
37	山ノ内城跡	伊勢	SD3803 清跡	耕植土	—	北別北外	—	縦型	10c 前葉	昭 198	28 - 7		
38	山ノ内城跡	八幡	SX7001 整地跡	1 番	—	北3西4区	—	縦型	9c 前葉	市 28(昭26)	67 - 41		
39	山ノ内城跡	八幡	SX750 (西3道路) D期清跡	6 - 9 番	—	—	—	縦型	10c 前葉～後一様半	市 28(昭26)	41 - 15		
40	山ノ内城跡	多賀前	72次	—	TG - D9 清跡	南3西3区	—	縦型	—	市 99	6 - 7		
41	山ノ内城跡	山ノ二区	136次	—	—	8层	南1西8区	—	縦型	—	市 114	18 - 15	

*文献の「年」は多賀前の年齢、「區」は宮城県文化財調査報告書を示す

表99 陸奥国府出土の壺G

多賀城跡	
城跡地区	
北2西6区	北3西4区
北2西6区	北3西4区 or 北3西4区
計	1 計
8c 東～9c	1 9c 前葉
不明	1 9c 第2四下期

八幡地区		伏石地区		多賀前地区		山ノ二区	
北2西6区	北3西4区	北2西6区 or 北3西4区	北3西3区	北2西4区	北2西4区	南3西3区	南1西8区
計	1 計	1 計	2 計	2 計	1 計	1 計	1 計
8c 東～9c	1 9c 前葉	1 不明	2 9c 中頃～未頃	1 8c 東～9c 前葉	1 9c 中葉	1 不明	1 不明
不明	1 9c 第2四下期	3	—	—	—	—	—

伊勢地区		高平地区		水入地区		高ノ池地区	
北1-2東1-2区	北1-2東1区東側	南1東1区	南1東2区	南1東3区	南1東2区 or 南1東2区東外	北1-2西1区	
計	1 計	1 計	2 計	1 計	4 計	1 計	1 計
10c 前葉	1 不明	1 8c 東～9c 前葉	2 不明	1 8c 東～9c 前葉	1 不明	1 不明	2 不明

表100 陸奥国府における地区別・街区別壺G出土数

1点の出土にとどまり、前者は城前地区と大畠地区から2点ずつ出土した（図版733）。

国府域はミガキ須恵器の傾向と同じく、多賀城と国府付属寺院（多賀城廢寺）を結ぶ東西大路東道路沿いに分布のまとまりが認められる（図版732、表100）。時期がわかるものは8世紀末～9世紀前半で、同時期の東道路北側からは、竈形土製品や製塙土器などに加えて、「尾張」と記された墨書き土器が5点以上出土した。一方、東道路南側からは国府域では2例しかない鉄鉢1点と竈形土製品や製塙土器が多量に出土している（宮城県教委1982b、多賀城市教委2001a・2003a）（註3）。

生田和宏氏は東道路北側などから出土した文字資料の分析から、9世紀初頭の東西大路東道路沿いには陸奥国衙出先の厨施設、9世紀前葉～中葉には陸奥国衙の曹司または出先機関、あるいは国司クラスの家政機関があったと指摘した（生田2001）。一方、古川一明氏は東道路南北から多く出土した竈形土製品は、官人や僧侶等、上位の限られた階層が行った儀式で使用されたと考えた（古川2014）。

東西大路東道路沿いの場所は、多賀城と国府付属寺院を結ぶ道に面し、双方を見渡せる位置にあることから、さまざまな儀式や行事が行われた可能性は高い。その場合、付近に建つ厨施設は日常的な給食活動とともに、儀式や行事の饗饌を用意したとみられ、製塙土器が多量に出土した（＝塙を多量に消費した）こともこうした推定を裏付けるものといえよう。

さらに、墨書き「尾張」が示すのは、尾張國もしくは上野國綿野郡尾張郷や信濃國水内郡尾張郷であり、いずれの場合でも光仁・桓武朝に物資生産や兵士補給を命じられた東海道8国（尾張・参河・駿河・相模・武藏・上総・下総・常陸）、東山道4国（信濃・甲斐・上野・下野）、北陸道2国（越後・佐渡）に名があり、その中には壺Gの生産地である駿河国の名もみえる。したがって、儀式や行事には兵士を含む陸奥国外からの人々も参加しており、そうした場で壺Gや竈形土製品が使われた可能性を考えておきたい（註4）。

（4）大戸産須恵器

【概要】

大戸産須恵器とは、福島県会津若松市大戸窯跡群で生産された須恵器を指す。同窯は会津盆地南端の標高200m前後の丘陵に立地しており、会津若松市教育委員会の分布調査や発掘調査によって、古代の須恵器窯跡184基、中世陶器窯跡36基が確認された。古代東北では最大級の窯跡群で、未確認の時期を挟むものの、同じ場所で8世紀後半～14世紀前半まで生産が続けられた例は東北地方で他になく、長期にわたる生産地編年が示されている（会津若松市教委1994）。また、壺類を中心に中腹や高台付食器などが国府多賀城を中心とする陸奥中部、さらに壺類は鎮守府胆沢城まで供給されており、陸奥国内における須恵器広域流通の一端を具体的に明らかにした（会津若松市教委1998）（註5）。

こうした成果を受けて、陸奥国府周辺でも1996年前後の発掘調査報告書から大戸製品の指摘を行っている。その結果、大戸産須恵器は环・高台环・稜块・环蓋・長頸壺・広口壺・小型壺・短頸壺・壺蓋・横瓶・中腹・円面硯など多くの器種で認められるが、中でも長頸壺や広口壺といった壺類が突出して多いことが指摘されている（宮城県教委1997、会津若松市教委1998など）。

【特徴】

陸奥国府の大戸産須恵器は、8世紀後葉のMH33期から10世紀前葉のKA112期まで認められる。図版735・736はMH33期～KA112期、表101はMH33期～MH57期の大戸窯における生産器種をまとめたものである。これをみると、MH33期～KA12期（8世紀末～9世紀前葉）までは、环・高台环・高台塊・稜塊・双耳环・高台盤・高环・蓋・鉢・横瓶・小型壺・双耳壺・短頸壺・長頸壺・中壺・大壺・長胴壺・円面硯・焼台など多彩な器種を生産した（註6）。続くMH19期（9世紀中葉）も高环が脱落するのみで、前代と大きな違いはない。

大きく変わるのはKA107期（9世紀後葉）で、高台塊・稜塊・双耳环・蓋・高台盤・鉢・横瓶・小型壺・双耳壺・円面硯・焼台がなくなる一方、大平鉢（153・154）や広口壺（167・168・171）といった新器種が登場する。このあたりはKA112期（10世紀前葉）にツマミのない蓋（166）が認められるものの、基本的にKA7期（10世紀中葉）まで継承されるが、MH57期（10世紀後葉）になると、短頸壺・長頸壺・長胴壺が器種構成から脱落して、环・壺・壺の単純な器種構成となる。

このうち、広口壺は長頸壺から変化したものであり、両者は広い意味で同一器種である。長頸壺・広口壺は生産開始から終末まで一貫して認められ、多賀城や胆沢城といった遠隔地まで流通したことから、大戸産須恵器を代表する器種といえる（会津若松市教委1998）（図版735・736）。

各期の特徴は、MH33期が胴部梢円形で胴部最大径と口径の差が大きく、高台は接地面が内側で、外側が少し張り出す（37）。頸部は3段接合で、环形焼台は高台外側の張り出し部の下で組み合う。KA12期は胴部が球胴状（91）と梢円形（92・93）があり、後者は前代に較べて胴部最大径と口径の差が小さく、口縁部が受け口状となる。頸部は3段接合で、胴部との境にリング状凸帯（図版737-3・4、図版738-18）が巡る。高台は断面四角で、接地面は外側になる。こうした変化に伴い、环形焼台は胴部下端から高台を包み込むようになり、その部分で外面の色調が明確に異なる（図版737-5～7）。リング状凸帯はKA107期まで、胴部下端の环形焼台の痕跡はMH19期まで認められ、ともに大戸産長頸壺の大きな特徴となっている。

MH19期は胴部梢円形のものだけとなり、环形焼台は本期まで認められる。このため、基本的特徴は前代と同じだが、頸部は2段接合となり、頸部のしまりが弱く高台は接地面となる外側から内側

西暦	東式期	环	高台环	高台塊	稜塊	双耳环	高台盤	壺	高环	鉢	大平鉢	横瓶	小型壺	双耳壺	短頸壺	長頸壺	広口壺	中壺	大壺	長胴壺	円面硯	焼台
760	MH33	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
800	KA12	○	○	○	○	○	○	○	▽	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
850	MH19	○	○	○	▽	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	KA107	○	▽				▽			○			○	○	○	▽	○	○	○	○	○	
900	KA112	○								○			○	○	○	○	○	○	○	○		
950	KA7	○								○			○	▽	○	○	○	○	○	○		
1000	MH57	▽								▽							○	○	○			

▽：生産量減少

表101 大戸窯跡群の生産器種

へ向けて斜めに上がる（137）。KA107期になると広口壺が出現する。長頸壺は口縁部が大きく開き（157）、高台断面が三角に近付く（156）。KA112期は高台断面が三角の広口壺（167・168・171）が主体となる。こうした変化に伴い、焼台は环形焼台から馬爪状焼台となる。

次に胎土の特徴についてみてみたい（図版737・738）（註7）。還元状態の表面は灰色や青灰色、断面は外面と同じかにぶい黄色を呈し、小さな黒色の斑点が認められる（1～3・5・7～13・16・17）。さらに高温だと表面は明青灰、断面は外面と同じか青灰色を呈し、小さな黒色の斑点がにじむもしくは気泡状になる（3・18）。還元が充分でない部分は、にぶい黄色かにぶい橙色で小さな赤い斑点が認められる（4・6・8の割れ口）。低温の場合は表面・断面とも浅黄橙色で、赤色の斑点がみえる。

割れ口は、還元・酸化どちらでも高温の場合は細かい凹凸が少なく平坦で（3～6・8・9・13・14・17）、低温の場合は在地窯の割れ口と同じく、細かい凹凸が認められる。焼成が良好なもの割れ口の状況からみて、大戸産須恵器の胎土は、陸奥・出羽の須恵器窯に較べて耐火度が高かったと考えられる。

次に胎土への夾雜物の入り方・色調・焼き締まりと器種との関係をみると、長頸壺を中心とする壺類や双耳壺・盤類・高壺・中甕などは夾雜物が少なく、青灰色を呈し堅く焼き締まり、食器は器壁が薄い。これに対し、坏類・鉢・大甕・長胴甕は夾雜物が多く、青灰色やにぶい黄色を呈し、前者に較べて焼きが甘いものが多い。食器は厚手である（12・14）。これは、前者が官衙的器種として陸奥の城柵・官衙やその周辺に対する広域流通品の性格を有し、作り分けや焼き分けが行われたのに対し、後者は一般集落へも供給されたためと考えられる。なお、16は本来土師器煮炊具であるが、焼成不良品（=須恵器となった製品）が焼台に転用されたものとみられる。

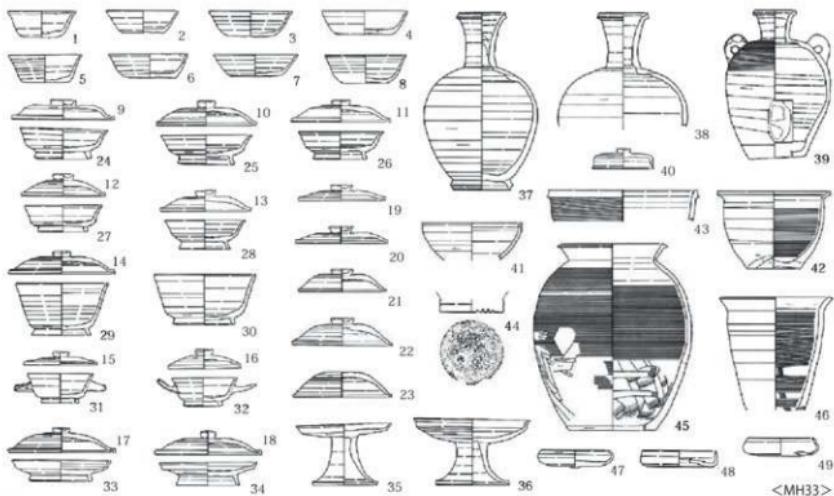
【陸奥国府域における大戸産須恵器】

こうした特徴を踏まえて本報告の須恵器を観察したところ、八幡・伏石地区でも大戸産須恵器が多く認められた。同様の指摘は、過去に刊行された八幡・伏石・多賀前地区の報告でも行っている（宮城県教委1996b・1997）。ここでは、八幡・伏石・多賀前地区の街区内における出土状況から、陸奥国府域の大戸産須恵器について考えてみたい（図版739、表102・103）。出土数が多いのは、以下の5街区である（註8）（図版732、表104）。

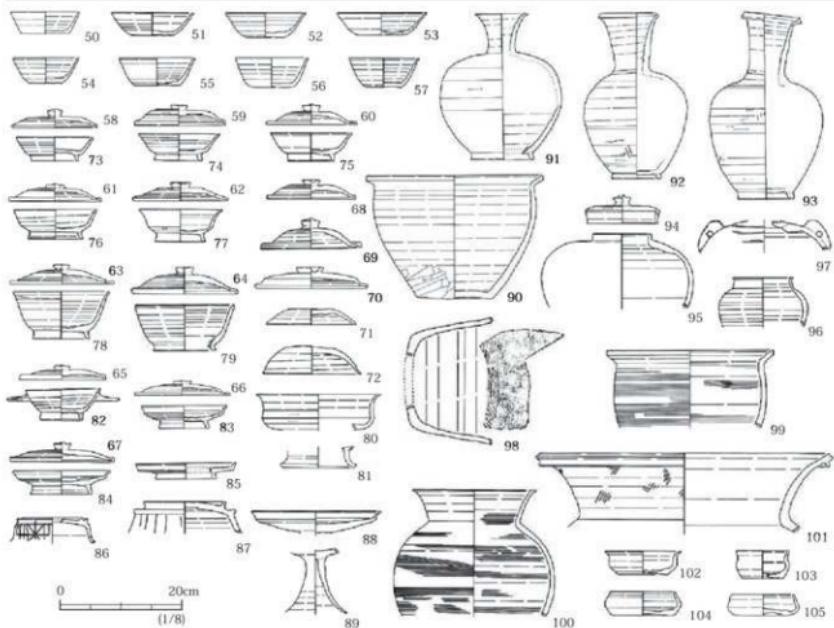
〈北2西4区〉

21点出土しているが、10点は時期不明で、ある程度時期が絞り込めたのは9世紀前葉～中葉の1点、9世紀中葉の1点、9世紀後半の2点、10世紀前葉の2点である。また、須恵器壺類の底部破片に占める大戸産の割合は、0.21（27/130）であった。

街区には区画溝で細分され、主屋と副屋、2間以下の建物、竪穴造構などで構成された建物群が置かれた（図版705～707・728・729）。主屋の多くは廂を有し、二面や三面のものが複数認められる。9世紀中葉の井戸跡より「会津郡主政益縫」「解文案」と記された木簡が出土したことから、会津郡司が駐在した出張所が置かれた可能性が指摘されている（宮城県教委1997、桑原ほか2000）。



<MH33>



<KA12>

1 ~ 8 · 50 ~ 57 : 环

9 ~ 23 · 58 ~ 72 : 坯环

24 ~ 28 · 76 ~ 77 · 80 · 81 : 矢块

73 ~ 75 : 高台环

29 · 30 · 78 · 79 : 高台块

31 · 32 · 82 : 双耳环

33 · 34 · 83 ~ 85 : 高台盤

35 · 36 · 88 · 89 : 高环

86 · 87 : 圆面環

41 · 42 · 90 : 钵

43 · 44 : 捣钵

37 · 38 · 91 ~ 93 : 長颈壺

39 · 97 : 双耳壺

40 · 94 : 盆

95 · 96 : 短頸壺

98 : 橫瓶

45 · 100 : 中壺

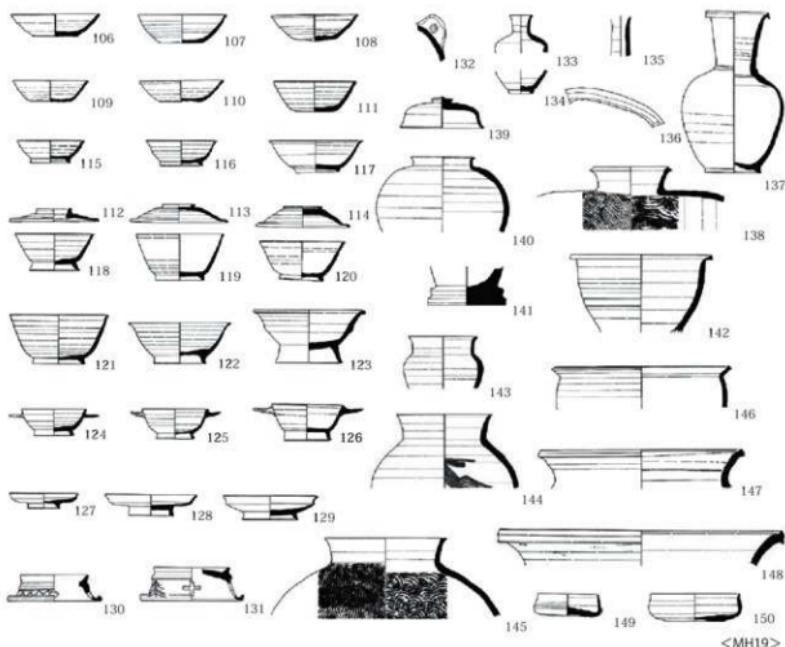
101 : 大甕

46 · 99 : 長颈甕

47 ~ 49 · 102 ~ 105 : 坯形焼台

※会津若松市教育委 1984、会津若松市文化財調査報告書第37号

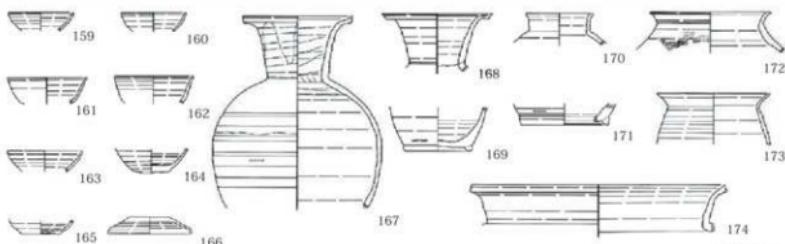
図版735 大戸窯跡群の変遷 1 —MH33・KA12期



<MH19>



<KA107>



<KA112>

- 106 ~ 111・151・159 ~ 165: 环
 112 ~ 114・166: 环盖
 115 ~ 118・152: 高台环
 119 ~ 122: 高台腹
 123: 梭底
 124 ~ 126: 双耳环
 127 ~ 129: 高台腹
 130・131: 内面腹
 132: 双耳腹
 133・134: 小型腹
 135: 水瓶
 136: 平腹
 137・155 ~ 157・169: 扁颈腹
 139: 盔盖
 140: 规颈腹
 142: 钵
 143: 小底
 144・145・172: 中腹
 146・173: 長胸腹
 147・148・158・174: 大腹
 149・150: 环形底台
 153
 155
 156
 157 0 20cm (1/8)
 158

※会津若松市教委 1984、会津若松市文化財調査報告書第37号

図版736 大戸窯跡群の変遷2 —MH19～KA112期



环 (図版 439-36)



残塊 (図版 575-35)



3

長頸壺 (図版 54-7、リング状凸帯)



4

長頸壺 (図版 440-49、リング状凸帯)



5

長頸壺 (図版 599-29、胸部下端に環形焼台痕)



6

長頸壺 (図版 67-39、胸部下端に環形焼台痕)



7

長頸壺 (図版 47-21、環形焼台痕、底面にヘラ書き「×」)



8

横瓶 (図版 618-2)

図版737 大戸窯製品の特徴・胎土 1—山王・市川橋遺跡 (縮尺2/3)



9
高台盤（外面ミガキ、高台周辺はミガキ残し、KA63窯：KA12期）



10
須恵器・高台盤（9の内面、ミガキ、KA63窯：KA12期）



11
蓋（外面、KA63窯：KA12期）



12
高台環（外面、MH33窯：MH33期）



13
中甕（内面カキメ、表採）



14
环（内面、重ね焼き状態で軸首、KA63窯：KA12期）



15
広口甕（外面、KA7窯：KA7期）



16
長颈甕（外面、夾雜物が多い、KA7窯：KA7期）

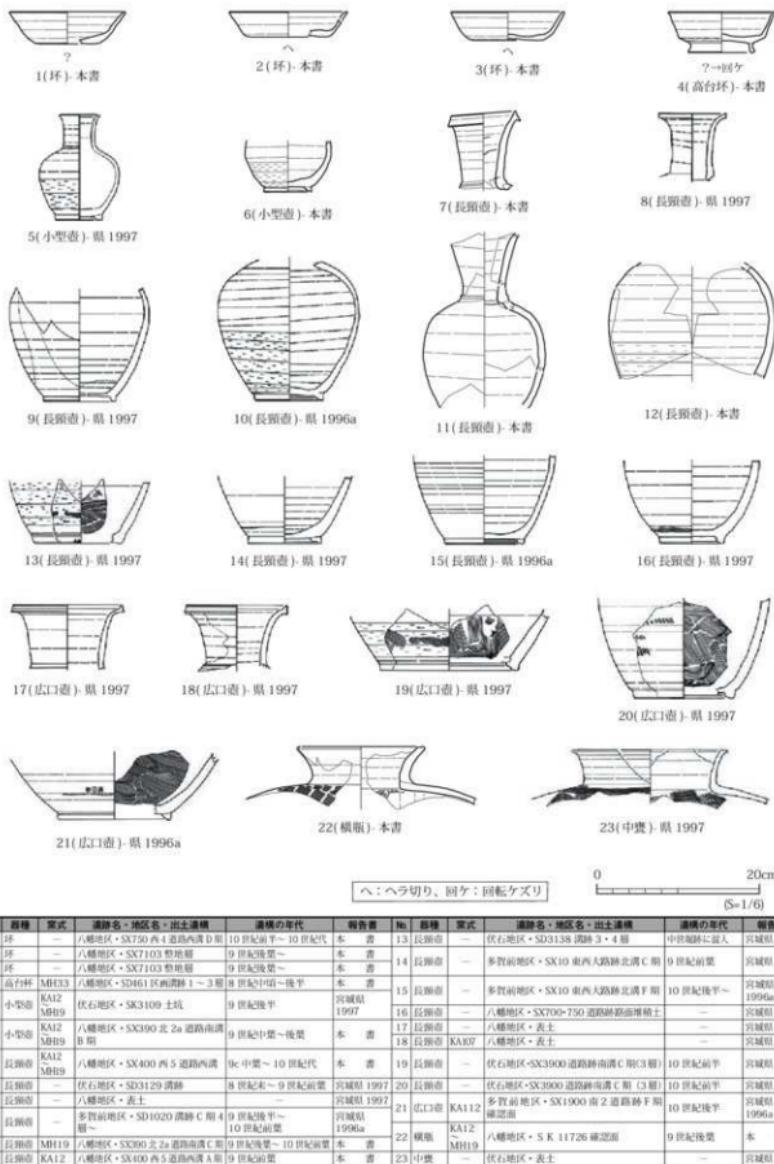


17
大甕（外面：平行タタキ、頭部にヘラ書き「」、表採）



18
長颈甕（外面、リング状凸沿、MH67窯：MH19期）

図版738 大戸窯製品の特徴・胎土2—大戸窯跡群（縮尺2/3）



参考書：市川・根岸著「須恵器の場合は通称名を省略し、地区名とした。
※教科書委員会は省略した

地区	遺構名	区画名	遺構の年代	基壇	既存部位	式変期	報告書	図版	特徴
1	SK700-750 内 4 道路跡面堆積土	—	—	長周廊	口縁～底部	KA12～MH19	県 174 - 1	9 - 7	
2	SK700-750 内 4 道路跡面堆積土	—	—	長周廊	側～側上部	KA12～MH19	県 174 - 1	9 - 8	リング状凸部
3	SK700-750 内 4 道路跡面堆積土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～MH19	県 174 - 1	9 - 9	坪形焼台版
4	SK700-750 内 4 道路跡面堆積土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～107	県 174 - 1	9 - 10	
5	SK299 北 2 道路跡面 延北溝 (SD108)	—	9c 前葉	長周廊	側～底部	KA12～107	県 174 - 1	117 - 5	
6	SKT10 道路跡面	—	—	長周廊	側部	KA12～107	県 174 - 1	22 - 3	リング状凸部
7	SKT10 道路跡面	—	—	円周廊	側部	KA12～107	県 174 - 1	22 - 4	小形、丸形スカラ
8	SK390 道路跡面無頭溝 (SD367)	—	—	長周廊	側～側上部	KA12～107	県 174 - 1	28 - 2	リング状凸部
9	SE217 月・輪溝	北 2c 西 5 区	10c 前葉	小型廊	側～底部	KA12～MH19	県 174 - 1	122 - 2	
10	SK160 土坑・窓	北 2c 西 5 区	9c ~	長周廊	口縁～底部	KA12～107	県 174 - 1	140 - 2	
11	SK474 土坑・窓	北 3 西 5 区	9c 中葉	長周廊	口縁～底部	KA12～107	県 174 - 1	241 - 9	
12	SK474 土坑・窓	北 3 西 5 区	9c 中葉	長周廊	側部	KA12～107	県 174 - 1	241 - 10	リング状凸部
13	SD100 河川跡 A 区 1 槽 (北 2 道路下)	—	—	長周廊	側～底部	MH33	県 174 - 1	261 - 4	
14	SH900 河川跡 B・C 区底物化物 (北 2 道路下)	—	—	長周廊	口縁～底部	KA12～107	県 174 - 1	263 - 16	
15	土坑	—	—	高台跡	底部	KA12～107	県 174 - 1	271 - 1	ヘラ切り
16	窓	—	—	高台跡	底部	KA12～107	県 174 - 1	271 - 2	
17	土坑	—	—	高台跡	側～底部	KA12～107	県 174 - 1	271 - 3	
18	窓	—	—	長周廊	口縁～底部	KA12～107	県 174 - 1	271 - 4	
19	土坑	—	—	長周廊	側～側上部	KA107	県 174 - 1	271 - 5	リング状凸部
20	窓	—	—	長周廊	側～側上部	KA12～107	県 174 - 1	271 - 6	リング状凸部
21	土坑	—	—	長周廊	側～底部	KA12～MH19	県 174 - 1	271 - 7	坪形焼台版
22	第1層	—	—	小型廊	側～底部	KA12～107	県 174 - 1	271 - 8	
23	土	—	—	長周廊	口縁～底部	KA107	県 174 - 1	278 - 11	リング状凸部
24	土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～107	県 174 - 1	278 - 12	リング状凸部
25	土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～MH19	県 174 - 1	278 - 13	坪形焼台版
26	土	—	—	広口槽	底部	KA112	県 174 - 1	278 - 14	
27	土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～107	県 174 - 1	278 - 15	
28	SK12221 北 2 道路跡面堆積土	—	—	高台跡	底部	本書 (県 246)	13 - 3		
29	SK12221 北 2 道路跡面堆積土	—	9c ~ 10c 前葉	沟	側～底部	本書 (県 246)	13 - 5		
30	SK390 北 2a 道路跡面 C 前葉植土	—	10c 前葉	溝	口縁～天井	KA12 ?	本書 (県 246)	21 - 7	
31	SK390 北 2a 道路跡面南側堆積土	—	9c 中葉	地盤	休	KA12～107	本書 (県 246)	22 - 21	
32	SK390 北 2a 道路跡面南側堆積土	—	9c 中葉	地盤	休	KA12～107	本書 (県 246)	22 - 22	
33	SK390 北 2a 道路跡面南側堆積土	—	10c の前	高台跡	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	23 - 31	
34	SK390 北 2a 道路跡面南側堆積土	—	10c 前葉	高台跡	底部	KA12～107	本書 (県 246)	23 - 41	
35	SK390 北 2a 道路跡面南側堆積土	—	10c 前葉	高台跡	側～底部	MH19	本書 (県 246)	24 - 44	リング状凸部
36	SK390 北 2a 道路跡面南側堆積土	—	—	長周廊	側部	KA12～107	本書 (県 246)	24 - 50	
37	SKT10 北 2c 道路跡面東側堆積土	—	—	長周廊	側部	KA12～107	本書 (県 246)	25 - 2	坪形焼台版
38	SKT10 北 2a 道路跡面南側堆積土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	25 - 3	坪形焼台版
39	SKT10 北 2a 道路跡面南側堆積土	—	—	側	側	KA12～107	本書 (県 246)	25 - 5	外側カヌメ
40	SKT10 北 2a 道路跡面南側認定	—	—	中壇	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	25 - 9	
41	SKT10 北 2a 道路跡面南側認定	—	—	側	側	KA12～107	本書 (県 246)	25 - 10	外側カヌメ、内面ハケメ
42	SK750 西 4 道路跡東側 C 前葉植土	—	10c 前葉	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	40 - 2	
43	SK750 西 4 道路跡東側 D 前葉植土	—	10c 後半	長周廊	口縁～底部	KA12～107	本書 (県 246)	40 - 13	
44	SK750 西 4 道路跡東側 D 前葉植土	—	10c 後半	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	40 - 14	
45	SK750 西 4 道路跡東側 D 明治植土	—	10c 後半	長周廊	側～底部	KA12～MH19	本書 (県 246)	41 - 16	坪形焼台版
46	SK750 西 4 道路跡東側堆積土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	41 - 27	側下部に布目痕
47	SK750 西 4 道路跡東側堆積土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	41 - 28	
48	SK750 西 4 道路跡東側堆積土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	41 - 30	
49	SK750 西 4 道路跡東側 C 前葉植土	—	10c 前葉	小型廊	側～底部	KA12～MH19	本書 (県 246)	42 - 33	
50	SK750 西 4 道路跡東側 C 前葉植土	—	10c 前葉	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	42 - 34	
51	SK750 西 4 道路跡東側 C 前葉植土	—	10c 前葉	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	42 - 37	
52	SK750 西 4 道路跡東側 D 前葉植土	—	10c 後半	長周廊	側部	MH19	本書 (県 246)	42 - 45	リング状凸部、一段複合
53	SK750 西 4 道路跡東側 D 前葉植土	—	10c 後半	長周廊	側部	KA12～MH19	本書 (県 246)	42 - 46	リング状凸部
54	SK750 西 4 道路跡東側 D 前葉植土	—	10c 後半	長周廊	側部	KA12～MH19	本書 (県 246)	42 - 47	リング状凸部
55	SK750 西 4 道路跡東側 D 前葉植土	—	10c 後半	長周廊	側部	KA12～MH19	本書 (県 246)	43 - 49	
56	SK750 西 4 道路跡東側 D 前葉植土	—	10c 後半	長周廊	側部	KA12～MH19	本書 (県 246)	43 - 51	
57	SK750 西 4 道路跡東側堆積土	—	—	長周廊	側部	MH19	本書 (県 246)	43 - 61	リング状凸部、一段複合
58	SK750 西 4 道路跡東側堆積土	—	—	溝	口縁～天井	KA12 ?	本書 (県 246)	44 - 64	
59	SK700 西 4 道路跡堆積土	—	—	長周廊	側部	KA12～107	本書 (県 246)	45 - 7	
60	SK700 西 4 道路跡堆積土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～MH19	本書 (県 246)	45 - 8	坪形焼台版
61	SK700 西 4 道路跡堆積土	—	10c 後半	小型廊	側～底部	KA12～MH19	本書 (県 246)	46 - 20	
62	SK700 西 4 道路跡堆積土	—	10c 後半	長周廊	側～底部	KA12～MH19	本書 (県 246)	46 - 21	坪形焼台版
63	SK700 西 4 道路跡堆積土	—	—	長周廊	側～底部	KA12～MH19	本書 (県 246)	47 - 33	
64	SK400 西 5 道路跡東側 A 前葉植土	—	9c 前葉	小型廊	側～底部	KA12～MH19	本書 (県 246)	52 - 2	
65	SK400 西 5 道路跡東側 A 前葉植土	—	9c 前葉	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	52 - 3	
66	SK400 西 5 道路跡東側堆積土	—	—	長周廊	口縁～底部	KA12～107	本書 (県 246)	52 - 6	
67	SK400 西 5 道路跡東側堆積土	—	—	側	側	KA12～107	本書 (県 246)	52 - 7	内面ハケメ
68	SK400 西 5 道路跡堆積土	—	—	面蓋	口縁～底部	KA12～107	本書 (県 246)	53 - 13	
69	西 4 道路・北 2a 道路跡堆積土	—	—	休	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	54 - 2	ヘラ切り
70	西 4 道路・北 2a 道路跡堆積土	—	—	側	側	KA12～107	本書 (県 246)	54 - 5	
71	SK7001 穀堆積	北 3c 西 4 区	9c 前葉～中葉	長周廊	側～側上部	KA12～107	本書 (県 246)	67 - 33	リング状凸部
72	SK7001 穀堆積	北 3c 西 4 区	9c 前葉～中葉	長周廊	側～底部	KA12～107	本書 (県 246)	67 - 34	
73	SK7001 穀堆積	北 3c 西 4 区	9c 前葉～中葉	側	側	KA12～107	本書 (県 246)	67 - 35	
74	SK7001 穀堆積	北 3c 西 4 区	9c 前葉～中葉	長周廊	側～底部	KA12～MH19	本書 (県 246)	67 - 39	坪形焼台版
75	SK7025 穀堆積	北 2c 西 4 区	9c 前葉～中葉	長周廊	側～側上部	KA12～107	本書 (県 246)	73 - 8	リング状凸部
76	SK7025 穀堆積	北 2c 西 4 区	9c 前葉～中葉	高台跡	口縁～底部	KA12～107	本書 (県 246)	77 - 4	
77	SD7007 畑塗跡	北 3c 西 4 区	9c 後葉～10c 前葉	長周廊	側部	KA12～107	本書 (県 246)	79 - 3	
78	SD705 滅溝 2 期	北 3c 西 4 区	9c 後葉～10c 前葉	長周廊	側部	KA12～107	本書 (県 246)	88 - 25	リング状凸部

※知観者はカウントしていない。

※八幡地区・伏石地区・多賀前地区を対象とし、墓地が明記されている宮城県教育発行の報告書から抽出している。

表102 八幡・伏石・多賀前地区出土の大戸産須恵器1

No	地区	遺構名	区画名	遺構の年代	基種	残存部位	式年期	報告書	説明	特徴
79		SQ802 道路 2 路	北 3 内 4 区	9c 前後 ~ 10c 前葉	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	木書(昭246)	88 ~ 34	坪形焼台版
80		SX7013 穴式建物跡堆積土	北 3 内 4 区	9c 前葉	長頸瓶	口縁部		木書(昭246)	116 ~ 36	
81		SX7013 穴式建物跡堆積土	北 3 内 4 区	9c 中葉	長頸瓶	口縁部		木書(昭246)	118 ~ 37	
82		SD100・2050B 河川跡構造遺産	北 3 内 4 区	—	長頸瓶	脚部		木書(昭246)	199 ~ 19	
83		SD1108 両面埋蔵	北 2 内 4 区	9c ~	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	木書(昭246)	304 ~ 4	坪形焼台版
84		SX11900 穴式建物	北 3 内 4 区	10c 後半	小型壺	脚下~底部		木書(昭246)	338 ~ 4	
85		SD2113 両面埋蔵	北 2 内 4 区	9c ~	長頸瓶	脚下~底部		木書(昭246)	347 ~ 4	
86		SX7103 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉	壺	口縁部		木書(昭246)	439 ~ 26	
87		SX7103 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉 ~	壺	口縁部~底部		木書(昭246)	439 ~ 31	ヘラ切り
88		SX7103 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉	壺	口縁部~底部		木書(昭246)	439 ~ 36	ヘラ切り
89		SX7103 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉 ~	長頸瓶	脚部		木書(昭246)	440 ~ 49	
90		SX7103 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉	長頸瓶	脚部		木書(昭246)	440 ~ 49	
91		SX7103 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉 ~	長頸瓶	脚部		木書(昭246)	440 ~ 50	
92		SX7103 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	木書(昭246)	441 ~ 56	坪形焼台版
93		SX7103 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~	木書(昭246)	441 ~ 59	
94		SX7128 穴式建物	北 3 内 5 区	9c 後葉 ~	高円筒	口縁部	MHC33	木書(昭246)	446 ~ 20	ヘラ切り
95		SD461 区画溝跡 1 ~ 3 帶	北 3 内 5 区	8c 後葉 ~	高円筒	口縁部	MHC33	木書(昭246)	482 ~ 34	圓内ヘラケツリ
96		SD461 区画溝跡 1 ~ 3 帯	北 3 内 5 区	8c 後葉 ~	壺	口縁部~底部	MHC33	木書(昭246)	482 ~ 55	ヘラ切り
97		SD7262 渠跡	北 3 内 5 区	—	壺	脚部		木書(昭246)	499 ~ 9	
98		SE7105 井戸跡	北 3 内 5 区	9c 中葉	壺	口縁部		木書(昭246)	550 ~ 11	
99		SE7105 井戸跡	北 3 内 5 区	9c 後葉	高円筒	口縁部	KA12	木書(昭246)	550 ~ 12	ヘラ切り~中壇ヘラケツリ
100		SK7093 土坑	北 3 内 5 区	8c 後葉 ~ 9c 前葉	壺塊	口縁部~底部	KA12	木書(昭246)	575 ~ 35	
101		織痕面	北 3 内 5 区	—	壺	口縁部~底部		木書(昭246)	587 ~ 14	ヘラ切り
102		織痕面	北 3 内 5 区	—	長頸瓶	脚部	KA12 ~ 107	木書(昭246)	587 ~ 19	リンガ状凸部
103		織痕面	北 3 内 5 区	—	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	木書(昭246)	588 ~ 21	坪形焼台版
104		織痕面	北 3 内 5 区	—	長頸瓶	脚下~底部		木書(昭246)	588 ~ 23	
105		織痕面	北 3 内 5 区	—	小型壺	脚部	KA12 ~ MH19	木書(昭246)	588 ~ 24	
106		SD180 区画溝跡構造遺産	北 3 内 6 区	—	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	木書(昭246)	597 ~ 25	リンガ状凸部
107		SD180 区画溝跡構造遺産	北 3 内 6 区	—	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~	木書(昭246)	597 ~ 29	坪形焼台版
108		SD180 区画溝跡構造遺産	北 3 内 6 区	—	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	木書(昭246)	597 ~ 30	リンガ状凸部~坪形焼台版
109		SD180 区画溝跡構造遺産	北 3 内 6 区	—	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	木書(昭246)	597 ~ 30	坪形焼台版
110		SK1728 土壁	北 3 内 6 区	9c 後葉	壺塊	脚下~底部		木書(昭246)	618 ~ 2	
111		SK3600 道路跡構造 C 剥離土 (3 帶)	北 2 内 6 区	10c 前葉	長頸瓶	脚下~底部		紙 174 ~ 2	303 ~ 6	脚下部に布目版
112		SK3600 道路跡構造 C 剥離土 (3 帶)	北 2 内 6 区	—	長頸瓶	脚~底部		紙 174 ~ 2	303 ~ 7	
113		SK3600 道路跡構造 C 剥離土 (3 帶)	北 2 内 6 区	10c 前葉	長頸瓶	脚下~底部		紙 174 ~ 2	303 ~ 8	脚下部に布目版
114		SK3600 道路跡構造 C 剥離土 (3 帶)	北 2 内 6 区	—	圓内壺	外縁		紙 174 ~ 2	303 ~ 14	
115		SK3417 建物跡構造方丈理	北 2 内 6 区	9c 後葉	中壺	脚部		紙 174 ~ 2	316 ~ 3	
116		SK3024 1・2 帶	北 2 内 6 区	9c 中葉	壺	口縁部~頂部		紙 174 ~ 2	339 ~ 13	
117		SD9025 壺	北 2 内 6 区	9c 後葉	壺	脚部		紙 174 ~ 2	351 ~ 5	
118		SD9026 壺 1 帶	北 2 内 6 区	9c 後葉	長頸瓶	脚部	KA12 ~ MH19	紙 174 ~ 2	353 ~ 23	リンガ状凸部
119		SD1318 壺 3 ~ 4 帶	北 2 内 6 区	—	長頸瓶	口縁部		紙 174 ~ 2	362 ~ 3	
120		SD1318 壺 3 ~ 4 帶	北 2 内 6 区	9c ~	長頸瓶	脚部	KA12 ~ MH19	紙 174 ~ 2	364 ~ 4	リンガ状凸部
121		SD1318 壺 3 ~ 4 帶	北 2 内 6 区	9c ~	長頸瓶	脚下~底部		紙 174 ~ 2	362 ~ 5	脚下部に布目版
122		SD1318 壺 3 ~ 4 帶	北 2 内 6 区	9c ~	長頸瓶	脚下~底部		紙 174 ~ 2	366 ~ 2	
123		SD1318 壺 3 ~ 4 層	北 2 内 6 区	9c ~	中壺	脚下~底部	KA12 ~ MH19	紙 174 ~ 2	362 ~ 7	
124		SD1318 壺 3 ~ 4 層	北 2 内 6 区	9c ~	中壺	脚下~底部		紙 174 ~ 2	362 ~ 9	
125		SD1319 壺	北 2 内 6 区	8c ~ 9c 前葉	長頸瓶	脚下~底部		紙 174 ~ 2	371 ~ 13	
126		SD3001 壺	北 2 内 6 区	9c ~	壺	口縁部~底部		紙 174 ~ 2	376 ~ 3	
127		SD3055 壺	北 2 内 6 区	9c ~	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	紙 174 ~ 2	377 ~ 3	リンガ状凸部
128		SD3020 壺	北 2 内 6 区	—	小型壺	脚下~底部	KA12 ~ MH19	紙 174 ~ 2	379 ~ 11	
129		SD4669 壺	北 2 内 6 区	—	壺	脚下~底部		紙 174 ~ 2	380 ~ 4	
130		SK3047 上塙燒痕面	北 2 内 6 区	10c 前葉	長頸瓶	脚部		紙 174 ~ 2	388 ~ 12	
131		SK3109 土坑	北 2 内 6 区	9c 後葉	小型壺	完形	KA12 ~ MH19	紙 174 ~ 2	404 ~ 4	リンガ状凸部
132		SK3365 土坑	北 2 内 6 区	—	中壺	口縁部		紙 174 ~ 2	405 ~ 4	
133		土壺	北 2 内 6 区	—	中壺	口縁部~脚上部		紙 174 ~ 2	408 ~ 4	
134		SD6512 西 2 3 6 通跡南 D 剥離土	北 2 内 6 区	—	9c 後葉 ~ 10c 前葉	脚下~底部		紙 218	37 ~ 9	
135		SD11008 渠跡	北 2 内 6 区	—	長頸瓶	脚下~底部		紙 246	304 ~ 4	坪形焼台版
136		SK10 東西人跡南北 C 剥離土	北 2 内 6 区	9c 前葉	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ MH19	紙 170	16 ~ 18	坪形焼台版
137		SK10 東西人跡 C 2 通跡 E 剥離土	北 2 内 6 区	9c 前葉	長頸瓶	脚部	KA12 ~ MH19	紙 170	18 ~ 18	坪形焼台版
138		SK10 東西人跡南北 C 剥離土	北 2 内 6 区	10c 後半	長頸瓶	脚下~底部		紙 170	22 ~ 14	
139		SK10 東西人跡 C 2 通跡 E 剥離土	北 2 内 6 区	10c 前葉 ~ 中葉	長頸瓶	脚下~底部		紙 170	24 ~ 5	布目版
140		SK3461 南 1 ~ 2 通跡側面 C 剥離土	北 2 内 6 区	10c 後半	壺	脚部		紙 170	34 ~ 3	
141		SK1909 南 2 通跡側面 C 剥離土	北 2 内 6 区	—	10c 前葉	長頸瓶	脚下~底部	紙 170	35 ~ 6	
142		SK1909 南 2 通跡側面 F 剥離面	北 2 内 6 区	—	10c 後葉	長頸瓶	脚部	紙 170	35 ~ 12	
143		SK1909 南 2 通跡側面 F 剥離面	北 2 内 6 区	—	10c 後葉	口壺	脚下~底部	KA112	35 ~ 14	布目版
144		SK1579 穴式壺 1 ~ 4 帶	北 1 内 5 区	10c 前葉	長頸瓶	脚下~底部	KA12 ~ 107	紙 170	48 ~ 28	リンガ状凸部
145		SK1579 穴式壺 1 ~ 4 帶	北 1 内 5 区	10c 前葉	長頸瓶	脚下~底部		紙 170	48 ~ 29	
146		SK828 土坑	北 1 内 5 区	9c 後葉	長頸瓶	脚部		紙 170	60 ① ~ 7	
147		SAB23 木本耕玉 E 附	北 1 内 5 区	9c 後葉	長頸瓶	脚下~底部		紙 170	63 ~ 13	
148		SE2267 井戸跡板一枚穴	南 1 内 2 区	8c ~ 9c 前葉	長頸瓶	脚~底部	KA12 ~ MH19	紙 170	70 ② ~ 7	坪形焼台版
149		SD1020 渠跡 C 4 通跡	南 1 内 2 区	10c 前葉	長頸瓶	脚下~底部		紙 170	84 ~ 34	
150		SD1020 渠跡 C 4 通跡	南 1 内 2 区	10c 後葉	長頸瓶	脚下~底部		紙 170	84 ~ 35	
151		SD1020 渠跡 C 4 通跡	南 1 内 2 区	10c 前葉	長頸瓶	脚~底部	KA12 ~ MH19	紙 170	94 ~ 37	坪形焼台版
152		SE1606 井戸跡内	南 2 内 4 区	10c 中葉	長頸瓶	脚部	KA107 ~ KA112	紙 170	90 ② ~ 9	
153		SD1602 井戸跡内	南 2 内 4 区	9c ~	長頸瓶	脚部	KA12 ~ MH19	紙 170	94 ~ 25	坪形焼台版
154		SE3700 水山跡	南 2 内 4 区	9c ~	長頸瓶	脚部	KA12 ~ 107	紙 170	113 ③ ~ 5 リンガ状凸部	

*括弧部はカウントしていない
※八幡地区、伏石地区、多賀前地区を対象とし、墓地が明記されている宮城県私文書から抽出している

表103 八幡・伏石・多賀前地区出土の大戸産須恵器2

八幡地区			伏石地区			多賀前地区					
北2西6区		北2西4区	北2西5区		北3西5区	北2西4区		北1西3区	南1西2区	南2西1区	
計	1	計	1	計	3	計	17	計	9	計	1
9c 未	1	9c 前～中葉	1	9c 和良	1	9c 中葉～後半	2	9c 前～中葉	4	9c 未	1
北2西4区	北2西4区	北2西5区	北3西5区	北2西4区	北2西4区	北2西4区	北1西3区	南1西2区	南2西1区	南2西1区南側	
計	1	計	5	計	1	計	1	計	1	計	1
不明・深入	1 不明	5	不明	1 不明	1 不明	1 不明	1 不明	1 不明	1 不明	1 不明	

*短頭部はカウントしていない

表104 陸奥国府域における街区別の大戸産須恵器出土数

〈北2西4区〉

9点出土した。時期別の出土数は9世紀前葉～中葉が4点、9世紀中葉が2点、9世紀後葉～10世紀前葉が2点、不明1点である（註9）。街区南半に桁行3間以下の小型建物や竪穴住居で構成される建物群が複数認められるが、内部を分割する溝がなく、主屋も廂を持たない（図版705・706・708・728）。

〈北2西5区〉

17点出土しているが、3点は区画成立前の8世紀中頃～後半である。残りは8世紀末～9世紀前葉が1点、9世紀中葉が4点、9世紀後葉以降が8点、不明1点である。街区は8世紀末～9世紀前葉に南北溝で2分され、さらに西側は東西溝で南北に細分される。東側に3間以下の小型建物や竪穴住居で構成された建物群、南西部に主屋と副屋、3間以下の小型建物などで構成された建物群が置かれた。9世紀中葉以降は東西溝で南北に2分され、さらに北半は南北溝で細分されている。南半部や北東部では主屋と副屋、3間以下の小型建物や竪穴住居で構成された建物群が置かれ、前者の中には片廂建物が認められる（図版705～707・728）。多賀城西門へ至る西5道路に面する街区であることから、城外官衙もしくは官人の居宅とみられる（図版730）。

〈北1西3区〉

図示点数は4点と少ないが、多賀前地区からは整理用テンバコで39箱分の大戸産須恵器が出土しており、そのほとんどは東西大路・西2道路跡、北1西3区、南1西2区からのものであるため（宮城県教委1997）、出土数が多い街区と判断した。

時期別の数は9世紀前半と後半が1点ずつ、10世紀前葉が2点である。須恵器壺類の底部破片に占める大戸産の割合は、0.33（1/3）である。街区は9世紀後半～10世紀前半に場所で南北に3分割され、東西大路に面する南部は5×3間三面廂付大型建物の主屋、東に副屋が置かれ、その周りを小型倉庫群がコ字型に囲んだ（図版728）。南部と中央部からは、輸入陶磁器や灰釉陶器など高級食器が出土しており、こうした建物構成と遺物の特徴から区画全体が国司館と考えられ、先行する9世紀前半も官人クラスの館とみられている（宮城県教委1996b）。

〈南1西2区〉

図示点数は4点であるが、上述の北1西3区と同じ理由から取り上げている。時期別の数は8世紀

末～9世紀前葉が1点、10世紀前葉が3点である。須恵器壺類の底部破片に占める大戸産の割合は、0.30（3/10）である。9世紀～10世紀前半は、街区中央を南北に流れる遣り水遺構を中心に建物群が配置され、輸入陶磁器や施釉陶器などの高級食器が多く出土したことから、区画全体が国司館と考えられている（図版705～707）（宮城県教委1996b、桑原ほか2000）。

【まとめ】

八幡・伏石・多賀前地区から大戸産須恵器は154点出土した。器種は壺・高台壺・稜塊・蓋・短頸壺・壺蓋・小型壺・長頸壺・広口壺・横瓶・壺・中甕・甕・円面硯が認められる。このうち、長頸壺は90点（58%）と突出して多く、これに小型壺11点（7%）・広口壺3点（2%）・その他（5%）を加えると壺類が全体の7割以上を占める。他の主な器種は甕・中甕9点（6%）、高台壺・稜塊11点（7%）、壺7点（5%）などとなっている。また、今回の検討でミガキ須恵器の中に大戸産が含まれることが判明した。

窯式でみると、8世紀後葉のMH33期から10世紀前葉のKA112期まで認められるが、MH33期やKA112期は極めて少なく、長頸壺にリング状凸帯や环形焼台痕が認められるKA12期（8世紀末～9世紀前葉）・MH19期（9世紀中葉）に多く、広口壺の生産が始まるKA107期（9世紀後葉）から減少する。生産年代が8世紀末～9世紀中葉に集中するのは、ミガキ須恵器や壺Gの傾向と同じである。

多賀前地区の大戸産須恵器は、出土土器全体の5%弱を占める。これに対し、八幡・伏石地区からは今回報告分を含めても1%に満たず、多賀前地区的あり方は陸奥国府域全体でも突出した様相を示している（宮城県教委1997）。また、そのほとんどが国司館である北1西3区や南1西2区、またはそれに面する東西大路や西2道路跡から出土した。

これに対し、八幡・伏石地区では北2西4区や北3西5区での出土が多い。北2西4区に多い理由としては、出土木簡から会津郡出張所が置かれたためであり、宇多郡と関わる施設の存在が示唆された南2西1区で大戸産須恵器の出土が微量であったことは（宮城県教委1996b）、この推定を裏付けるものと考えられる。また、隣り合う北3西5区と北3西4区では、廂付建物を有す前者に大戸産須恵器が多いことから、奢侈品としてより格式の高い建物群に多く帰属した可能性を考えておきたい。

大戸製品は、在地須恵器に較べて精良で緻密な胎土を持つことから焼成温度が高く、堅く焼き締まり、青灰色や白色を呈して自然釉が映える器である。こうした優位性は、古代後期の宴会儀礼における身分表徴の道具立てとしての役割（飯村2001）を担う上で重要であり、これに本遺跡の国司館における壺類の出土傾向を加えると、「ハレ」の器には輸入陶磁器－施釉陶器－大戸産須恵器－在地須恵器という階層性があったと考えられる（註10）。また、8世紀末以降に大戸産須恵器の広域流通が可能となつた理由として、平安時代初頭の征夷終了後、陸奥国内での重要度が増した阿武隈川水上交通路とその関係施設の整備が進んだことが考えられよう（村田2017）。

（5）硯

多賀城跡や山王・市川橋遺跡から出土した奈良時代から平安時代前半の硯は、円面硯・風字硯・転用硯を主体とし、他に円形硯や形象硯などがある。須恵器がほとんどを占めるが、風字硯には土師質

(両黒が多い)が認められ、特殊なものとしては金泥用の硯に転用された灰釉陶器がある。

【円面硯の分類】

円面硯は圈足硯・無脚硯・蹄脚硯・獸脚硯などに分けられる(中山1983)(註11)。陸奥国府の陶硯については、多賀城跡の検討(生田2003、北野2006)や陸奥国全体にわたる網羅的な研究(閑根2014)などが知られる。生田氏は硯の法量や時期別出土量から政庁と曹司の硯の使われ方、北野氏は実験研究を踏まえた使用痕の分析から、円面硯・風字硯・転用硯の使用法を考察している。ここでは、

陸奥国府と官窯出土の円面硯について透かしと線刻に着目して分析を行った閑根氏の視点に、外堤・内堤・凸帶と脚端部の形態を加えて以下のように分類した(図版741、表105・106)。そこで用いた硯各部の名称は、図版740に示している。

〈A類〉外堤と内堤を有し、細い長方形の透かしが連続する細透脚圈足硯である(1)。陸部は水平で、内堤は外堤に較べて低い。出土量は少ない。

〈B1類〉外堤と内堤を有し、透かしと線刻が入る透脚線刻圈足硯である(2~7・29・30)。陸部は水平で、脚部は「ハ」字状に開くものが主体である。なお、高崎遺跡から出土した7は筆立ての向かい側に水池を有する小形圈足硯で類例が少ない。

〈B2類〉外堤と内堤を有し、透かしが入る透脚圈足硯である(32)。陸部は水平で、透かしには長方形と十字形があり、両者が交互かつ密に施されている。

〈B3類〉外堤と内堤を有し、透かしと線刻が入る透脚線刻圈足硯である(8・9)。陸部は水平で、外堤は斜め上方に延びる。線刻はB1類に較べて縦線の本数や施文部分が狭くなり、透かし間の空白部が目立つ。

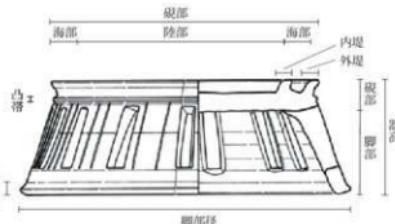
〈C1類〉外堤と凸帶を有し、透かしと線刻が入る透脚線刻圈足硯のうち、陸部が水平のものである(10~13)。脚端部は外反するものが多くなる。斜格子の線刻は、円形透かしの採用で広がった透かし間の空白部分を埋めるものとして考案されたと考えられる。

〈C2類〉外堤と凸帶を有し、透かしと線刻が入る透脚線刻圈足硯のうち、陸部がドーム状のものである(14~17)。脚端部は外反が多い。

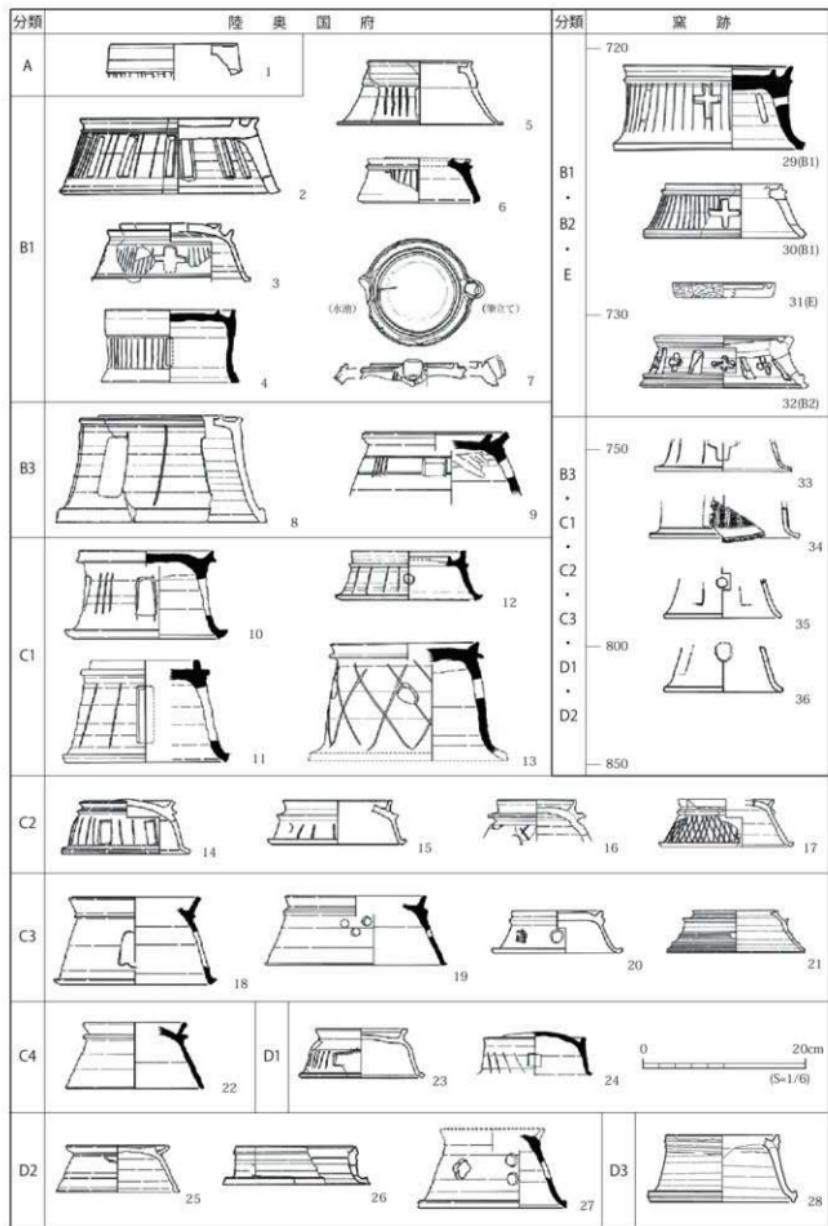
〈C3類〉外堤と凸帶を有し、透かしが入る透脚圈足硯である(18~21)。陸部は水平とドーム状がある。透かしは円形が主体で、ほかに1箇所に複数あるものや(19)装飾透かしが認められる(18)。

〈C4類〉外堤と凸帶を有し陸部はドーム状であるが、透かしや線刻が入らない無文圈足硯である(22)。

〈D1類〉外堤を有し、透かしと線刻が入る透脚線刻圈足硯である(23・24)。陸部は水平とドーム状がある。



図版740 円面硯の各部名称 (多賀城跡55次 南地区2層)



図版741 陸奥国府および窯跡出土の内面観

No.	種類	内縦	外縦	凸帯	透かし		縁割	部屋	備考
					組長方形	×			
	A種	水平	○	○	×			686-1	透かし部足場 内縦は外縦に較べて低い
B1種	水平	○	○	○ ・ ×	長方形	翼板	686-2・4～6	透かし部足場 凸帯は斜く低い 透かしも 傾斜は透かしの間を埋める	
					長方形+十字	翼板	686-3・29・30		
					十字	翼板状			特殊例) 墓立・水道付(高岡遺跡、岡坂 686-7)
B2種	水平	○	○	×	長方形+十字	×	686-32		
B3種	水平	○	○	×	長方形	翼板	686-8・9	透かし部足場 翼板の数は少ない→透かし間の空白部が広い	
C1種	水平	×	○	○	長方形 or 方形 or 内縦	翼板少ない 翼板幅が広い	686-10～12	透かし部足場 翼板の数は少ない→透かし間の空白部が広い	
					内縦	斜格子	686-13	脚部外反が増える傾向 斜格子は内縦の構造で広くなった透かし間を埋める	
C2種	ドーム	×	○	○	長方形 or 方形 or 内縦	翼板少ない 翼板状	686-14・15	透かし部足場 斜め外縦 斜め外縦と凸帯は一体化する傾向強い 脚部外反	
					内縦	斜格子	686-16・17		
C3種	水平・ ドーム	×	○	○	内縦	×	686-19～21	透かし部足場 斜め外縦 斜め外縦	
					裝飾		686-18	外縦は斜めとなり、凸帯と一体化する 脚部外反	
C4種	ドーム	×	○	○	×	×	686-22	無文様足場 斜め外縦と一体の凸帯 脚部外反	
D1種	水平・ ドーム	×	○	×	方型	翼板	686-23	透かし部足場	
						斜格子	686-24	脚部に膨らみ 脚部外反	
D2種	水平・ ドーム	×	○	×	内縦	×	686-25	透かし部足場 斜め外縦	
					方型		686-26		
					装飾		686-27	斜め外縦	
D3種	ドーム	×	○	×	×	×	686-28	無文様足場 凸帯は植継的 脚部外反	
E種	水平	○	○	×	×	×	686-31	無文様	

表105 陸奥国府出土円面鏡の分類

No.	遺跡名・出土遺構	分類	遺構の年代	報告書	No.	遺跡名・出土遺構	分類	遺構の年代	報告書
1	多賀城跡 沼南門付 SD2230 滝跡	A	近世～盛ん	多賀1993	24	多賀城跡 A門跡・不明	C3	—	多賀1980a
2	多賀城跡 沼東北門付 SD1858 滝跡	B1	9c前半	多賀1989	20	小原沢遺跡・SK64 土坑	C3	—	多賀城市 201c
3	多賀城跡沼前地区 SK2873 土坑	B1	8c後半	多賀1908	21	大入沢跡・三層	C3	9c後半	宮城県 1982b
4	多賀城跡五方崎削り SK978 土坑	B1	8c後半	多賀1978	22	多賀城跡 A門跡・SK625 土坑	C4	10c 前期	多賀研 1974
5	八幡地区 87次1号	B1	—	多賀城市 2011d	23	6b平地門・SD951 滝跡	D1	9c前半	多賀城市 2001a
6	多賀城跡 沼南門付 SD12218 滝跡	B1	10c後半	多賀1981	24	多賀城跡 A門跡・SK1076 土坑	D1	9c末～10c前半	多賀研 1979
7	沼北遺跡 SD1149 滝跡	B1	—	多賀城市 1999e	25	6b平地門・水山跡 194	D2	9c末～9c中期	多賀城市 1990a
8	多賀城跡沼前削り SK2631 壁壇	B3	9c後半	多賀2001	26	多賀城跡 A門跡・SK328 土坑	D2	9c後半	多賀研 1996
9	多賀城跡 A門跡・4号	B3	—	多賀1980a	27	多賀城跡 A門跡・不明	D2	—	多賀研 1980a
10	多賀城跡 A門跡・不明	C1	—	多賀1980a	28	八幡城跡・SK703 土坑	D3	9c後葉	本 茜
11	多賀城跡 A門跡・II期壁土塁	C1	8c後半	多賀1978	29	御代田跡・SK132 土坑	B1	9c前葉	利府町 2011
12	多賀城跡の池跡A第5號	C1	10c前葉	多賀1973	30	御代田跡・土塁	B1	9c前葉?	仙城町 1987
13	多賀城跡 A門跡・不明	C1	—	多賀1980a	31	日向山遺跡 B点跡・SK7 土跡	E	9c前葉	多賀研 2011b
14	八幡地区 SK3092 土坑	C2	9c前葉	多賀城市 1991b	32	日向山遺跡 C 地点・4号室跡	B2	8c2P 平頂	色麻町 1993
15	沼ノ池跡 A・100m 北第VI層	C2	—	多賀城市 2004b	33	大橋遺跡・1号平底跡	B3?	9c中頃	仙台市 1983
16	多賀城跡下地区 73次表土	C2	—	多賀2003a	34	神明社跡 3号平底跡	B3?	8c後半	仙台市 1983b
17	多賀前削り SB1176 建物跡	C2	10c前半	河原町 1996a	35	柳江遺跡・2号平底跡	CorD	8c後葉～9c前葉	仙台市 1980
18	多賀城政宁跡 不明	C3	—	多賀研 1973	36	猪江遺跡・2号平底跡	CorD	8c後葉～9c前葉	仙台市 1980

※山王・市川遺跡の場合は遺跡名を省略し、地区名とした

※文献の多賀研は多賀城跡調査研究会を指す。また、教科書委員会は省略した

表106 図版741観察表

〈D2類〉斜め上方に延びる外堤を有し、透かしが入る透脚圈足硯である（25～27）。陸部は水平とドーム状があり、脚端部は外反が多い。透かしは円形や方形が多いが装飾（27）も認められる。

〈D3類〉外堤を有する無文圈足硯である（28）。陸部はドーム状で脚端部は外反する。

〈E類〉脚を持たない無脚硯で、外堤と内堤を有する（31）。

【風字硯の分類】

硯頭の形態と堤の有無から以下のように分類した（図版742）。硯尻は直線的（2・5・8～10）と円弧状（6・12）がある。裏面の脚は硯尻に2個の短脚を付けるものが多い（5・6・8・9・10・12）が、硯頭よりも短脚を1個付けて三脚とするものもある（7）。なお、11は双脚の円形硯もしくは梢円硯と考えられる。

〈I a類〉硯頭が直線的な平頭で、陸と海の境に堤を設けるもの（1）。

〈I b類〉硯頭が直線的な平頭で、陸と海の境に堤がないもの（5・8）。

〈II a類〉硯頭が丸い円頭で、陸と海の境に堤を設けるもの（2～4）。

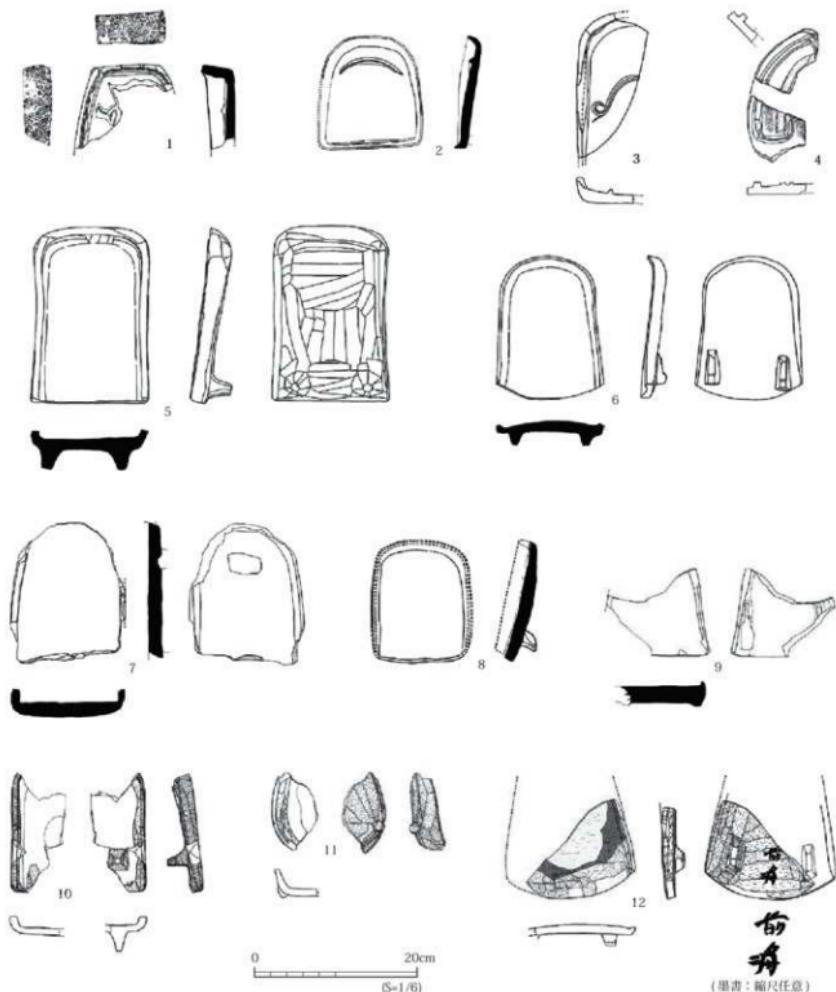
〈II b類〉硯頭が丸い円頭で、陸と海の境に堤がないもの（6・7）。

【陸奥国府周辺の硯生産】

陸奥国府の円面硯は外堤・内堤を有し、脚端部に向けて「ハ」字状に開くA・B類から、内堤が欠落するC類、内堤と凸帯が欠落するD類に変化しており、それとともに陸部はドーム状、脚端部が外反するものが主体となる。文様も細長透かしが全周するA類から、それを長方形として間に十字透かしや線刻を入れたB1・2類、縦線が減るB3類を経て、円形透かしを採用して無文部が増え文様がなくなるC・D類へ変化する。全体的には簡略化へ向かうが、一方でC・D類には円形透かし間を斜格子で埋めたり、装飾透かしが入るもののが認められる（図版741）。

こうした型式的変遷に窯跡と消費地出土品を加えて円面硯の生産年代をみると、最も古いのは7世紀前半の宇治市隼上り窯跡（杉本1987）でも認められるA類の細透脚圈足硯とE類の無脚硯である。前者は郡山遺跡に類例があること（仙台市教委1983a）、後者は日の出山窯跡群古期のF地点SR7窯跡にあることから（多賀研2011b）、両者は7世紀末～8世紀前葉に位置づけられる。B1類は硯沢窯跡B16号窯跡やSR132窯跡（宮城県教委1987、利府町教委2011）や多賀城II期火災直後の暫定的復興期（第III-1期）のSX2631遺構やSK2873土坑（多賀研2001・2008）から出土しており、8世紀前葉～後半と考えられる（註12）。また、B2類は日の出山窯跡群C地点4号窯跡から（色麻町教委1993）、B3類は多賀城跡政庁北のII期焼土層から出土しており（多賀研1978）、それぞれ8世紀前葉～中頃と8世紀後半に位置付けられる。

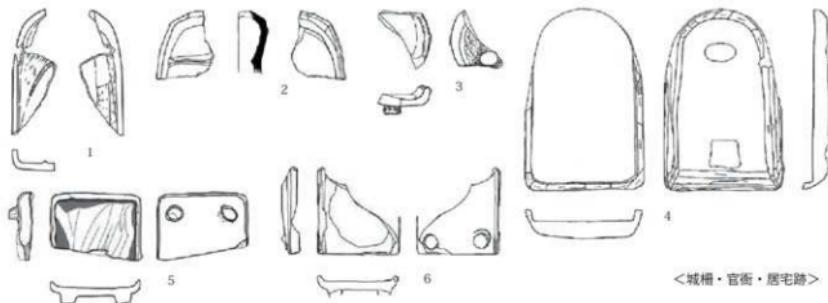
C類やD類は、生産地が台原・小田原窯跡群の神明社窯跡（仙台市教委1983b）・舟江遺跡（仙台市教委1980）に、消費地はC1類が多賀城II期火災直後の暫定的復興期のSX2631整地層（多賀研2001）、C2類は八幡地区SK5092土坑（多賀城市埋文センター1991b）、D1類が多賀城III期のSK1076土坑（多賀研1979）や高平地区SD951溝跡（多賀城市教委2001a）、D2類が多賀城III期のSK2328土坑（多賀研1996）などから出土しており、生産年代は8世紀後葉から9世紀前葉に位置付けられる。



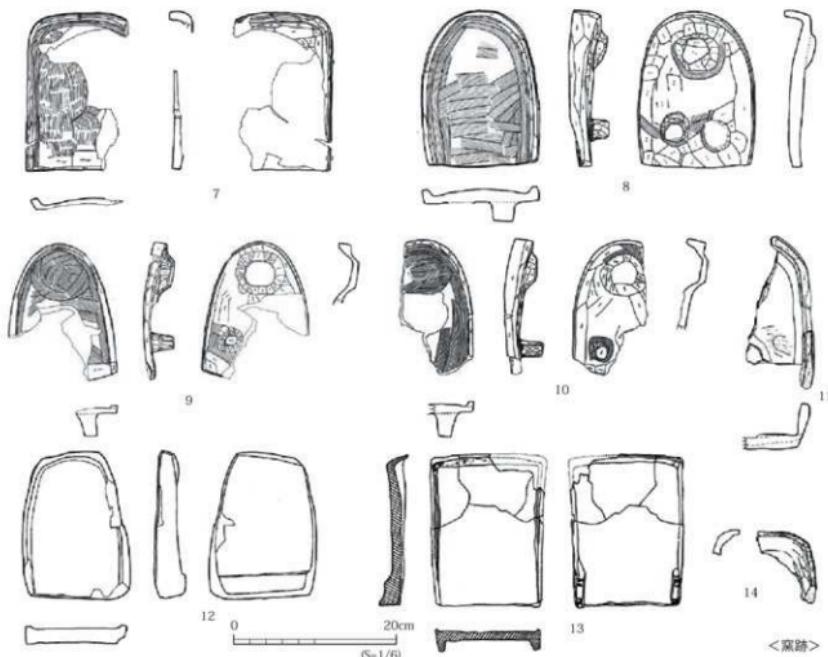
No.	通称名・出土場所	分類	通称の年代	報告書	備考	No.	通称名・出土場所	分類	通称の年代	報告書	備考
1	多賀城跡外郭地区・SD1221B	I a	10世紀後半	多賀研1981		7	多賀城跡外郭地区・SD1221B	II b	10世紀後半	多賀研1981	
2	多賀城跡金鏡地区・SD492	II a	9世紀前葉?	多賀研1974		8	多賀城跡八咫鏡地区・表土	1 b	-	多賀研1972	
3	多賀城跡地区・西区1番	II a	-	多賀研1979		9	多賀城跡外郭地区・SD1221B	-	10世紀後半	多賀研1981	
4	多賀城跡地区・SD1111-SK1021	II a	10世紀後半	河原駿1996a		10	多賀城跡人頭地区・SK2375B	-	9世紀2四半期	多賀研1997	
5	多賀城跡刀跡	I b	-	多賀研1982a		11	多賀城跡城山地区・SK2483	-	9世紀中期	多賀研1999	二世因
6	多賀城跡跡	II b	-	多賀研1980a		12	多賀城跡地区・SK1350E 西側溝	-	10世紀後半	河原駿2014	荀子(前持)

*山王・市川橋遺跡の場合は遺跡名を省略し、地区名とした
**多賀研は多賀城跡調査研究会を指す。また、教育委員会は省略した

図版742 陸奥国府出土の風字印



<城柵・官衛・居宅跡>



<窯跡>

No.	遺跡名・出土遺構	分型	遺跡の年代	報告書	備考	No.	遺跡名・出土遺構	分型	遺跡の年代	報告書	備考
1	熊の作道跡・P285	II a	-	宮城町 2016a		8	与兵衛窑跡・蟹江内地区1号灰原a1 線	II b/c未頃(多賀城Ⅲ期)	仙台市 2010c	2脚	
2	伊治城跡・唐崎地区1号	II a	-	多賀 1980c		9	与兵衛窑跡・蟹江内地区2号灰原a1 線	II b/c未頃(多賀城Ⅲ期)	仙台市 2010c	3脚、前脚が 海	
3	熊の作道跡・SE225(住居跡)	-	9c中～後期	宮城町 2016a	塗刷 井戸網	10	与兵衛窑跡・蟹江内地区2号灰原a1 線	II b/c未頃(多賀城Ⅲ期)	仙台市 2010c	3脚、前脚が 海	
4	(伊治城跡・SE235(住居跡)面)	II b/c未・9c前半	篠原町 1994	2脚		11	大日3800・地点16号室間邊表線	II b/c未頃(多賀城Ⅲ期)	利府町 2004		
5	谷原遺跡・SK220土坑1号	I b/c~	-	山元町 2016	4脚?	12	八幡坂遺跡・9号窯裏土	II b/c後葉	白石市 2009	脚は根元が規 正	
6	猪の越遺跡・37-38区B区中央	-	-	加美町 2005		13	安養寺中畠窯跡・2～4号窯	I b/c後葉(多賀城Ⅳ期)	古奈研 1972	2脚、長方形	
7	与兵衛窑跡・新堤1号灰坑9	I b/c未頃(多賀 城Ⅲ期)				14	坂町窑跡・B地点1号灰土坑6縫	-	仙台市 1982a		

*多賀研は多賀城跡調査研究会、古奈研は古窯跡研究会を指す。また、教育委員会は省略した

図版743 陸奥中部の城柵・官衛・居宅跡および窯跡出土の風字規

平安時代に入ると、陶硯の生産はしだいに風字硯が主体になる（図版743）（註13）。風字硯の生産は、都では8世紀後葉（平城京末期～長岡京期）に始まる（巽2004）。陸奥で最も古い例は、官窯である台原・小田原窯跡群の与兵衛沼窯跡新堤地区や蟹沢地区西地点で、多賀城Ⅲ期（780～869年）の瓦とともに出土した（7～10）（仙台市教委2010c）。同窯の主体を占めるのは、円頭無堤のⅡb類で裏面の硯頭寄りにも前脚を持ち、その中には硯面の海を凹ませて前脚とするものがある（9・10）。また、同時期の瓦を生産した大貝窯跡でも表採品の中に風字硯が認められることから（11）（利府町教委2004）、都とほぼ同じ時期の8世紀後葉には、国府周辺の複数の官窯で風字硯の生産が開始したことがわかる。

9世紀後半になると、台原・小田原窯跡群では堤町窯跡B地点（14）（仙台市教委1982a）、五本松窯跡群D地点B群灰原（仙台市教委1987）、安養寺中圓窯跡2～4窯（13）（古窯跡研究会1976）の3箇所で多賀城Ⅳ期（869年～11世紀前半）の瓦とともに風字硯が出土した。同期は陸奥国大地震からの復興期であり、多賀城や陸奥国分寺・国分尼寺に瓦を供給した官窯では、瓦と須恵器の基本的器種（环・壺・甕）に加えて風字硯が生産されたのである。

【陸奥国府域における硯の使用】

陸奥国府域から出土した硯を街区別にまとめると、以下のようになる（図版744）（表107）。その際、風字硯には二面硯のほか、破片で風字硯と区別できなかった円形硯・楕円硯を含めている。また、道路跡や河川跡は街区への帰属が不明であるため、図版や表に示していない。

8世紀末葉以降は、15街区と1つの街区隣接地で硯が5点以上出土している。それらは、定形硯と転用硯の割合からA～Dの4つに分けられる。

A) 定形硯が主体で転用硯は20%以下の街区

〈北1西7区〉

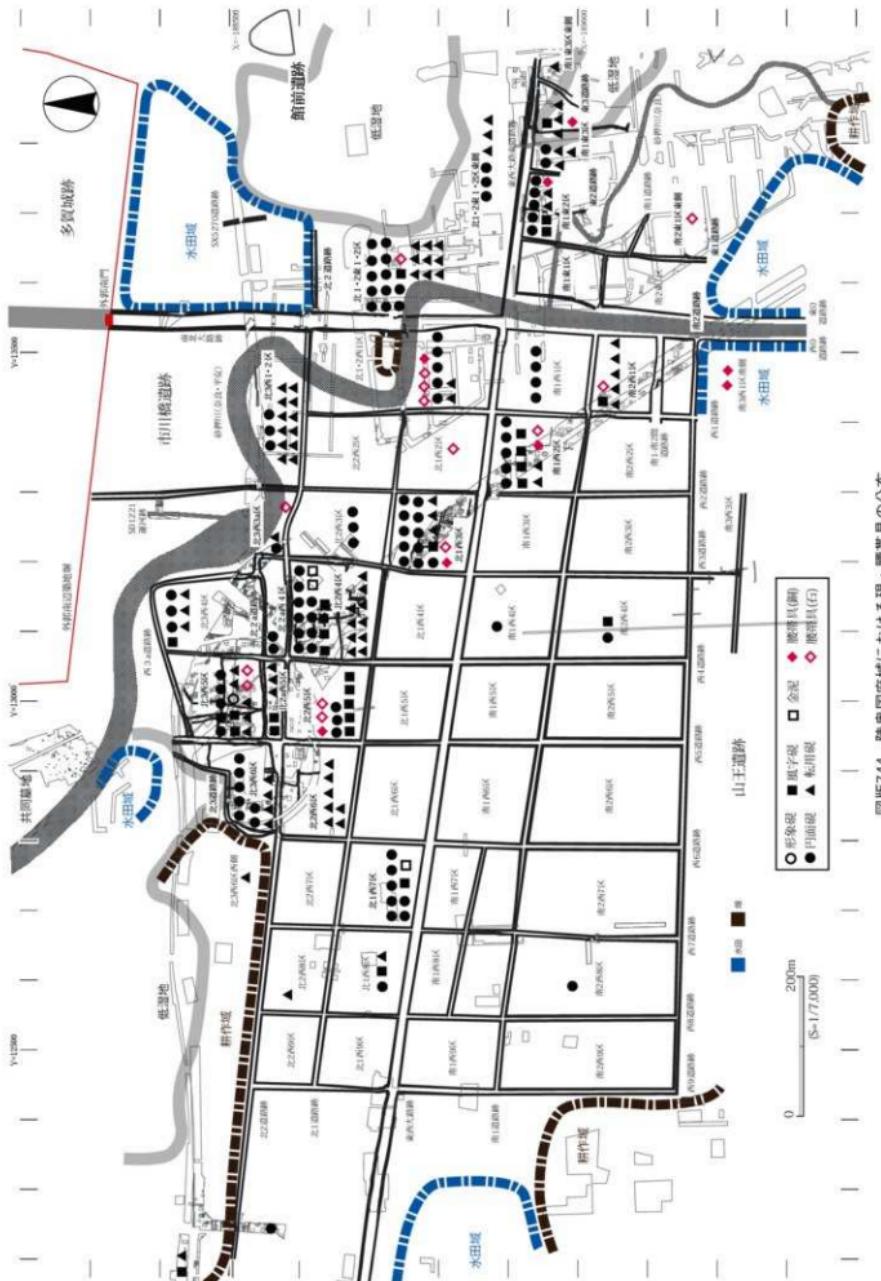
円面硯7点と風字硯1点が出土しており、転用硯の割合は0.00である。このうち、時期が判明しているのは10世紀の円面硯1点である。9×4間四面廊付建物の主屋と副屋があり、広場には井戸や土器食器の廃棄土坑が認められた（多賀城市埋文センター1991a・1993）（図版728）。建物規模が大きいこと、「右大臣殿餞馬取文」と記された木簡が出土し、内容から陸奥国守が右大臣に馬を進上した際の文書に付けられた文書の題簽であること（平川1993）、輸入陶磁器水注が出土したこと、施釉陶器が多く出土したことなどから、10世紀前半の国司館と考えられている。

〈南1西2区〉

円面硯5点と風字硯4点、転用硯2点が出土しており、転用硯の割合は0.18である。このうち、時期が判明しているのは8世紀末～9世紀前葉の風字硯1点、9世紀中葉～後葉の円面硯・風字硯1点ずつ、10世紀前半の円面硯1点（C2類）、風字硯1点（Ia類）、転用硯1点、10世紀後半の風字硯1点（IIa類）である（カッコ内は分類記号、以下同じ）。9世紀～10世紀前半は、街区全体が国司館として使われたと考えている（図版705～707）（宮城県教委1996b、桑原ほか2000）。

〈北1西3区〉

円面硯11点と風字硯1点、転用硯3点が出土しており、転用硯の割合は0.20である。このうち、



図版7-44 陸奥国府城における現・腰帶具の分布

八幡地区																	
北3西4区				北3西5区				北2西5区									
円面鏡	3	扇字鏡	1	軸用鏡	3	円面鏡	5	扇字鏡	2	軸用鏡	4	円面鏡	0	扇字鏡	2	軸用鏡	3
区画II	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I ~ II A	9c 前半	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I B 古	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I B 新	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	2	不明	1	不明	1	不明	2	不明	1	不明	-	-	-	-	不明	1	不明

地に島形鏡1点(9c末~9c中期)

八幡地区																	
北2西5区				北3西5区				北2西5区									
円面鏡	5	扇字鏡	0	軸用鏡	0	円面鏡	7	扇字鏡	0	軸用鏡	4	円面鏡	0	扇字鏡	0	軸用鏡	7
区画II	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I ~ 9c前	1	8c末~9c前	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I B 古	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I B 新	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	4	不明	3	-	-	不明	6	-	-	不明	2	-	-	-	-	不明	5

千利山地区																	
北1西7区(面司鏡)				北3西3区				北2西3区									
円面鏡	7	扇字鏡	1	軸用鏡	0	円面鏡	1	扇字鏡	0	軸用鏡	1	円面鏡	3	扇字鏡	0	軸用鏡	0
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割II B Ⅱ	10c	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	6	不明	1	-	-	不明	1	-	-	不明	1	不明	3	-	-	-	-

伏石地区																		
北2西4区				北2西4区				多賀前地区				南2西1区						
円面鏡	2	扇字鏡	0	軸用鏡	0	円面鏡	11	扇字鏡	3	軸用鏡	10	円面鏡	0	扇字鏡	1	軸用鏡	2	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
区画II	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
地割I A	9c 前半	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
地割I B 古	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
地割I B 新	9c後型	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
地割II B Ⅱ	10c前半	1	10c前半	1	10c前半	1	10c前半	3	10c前半	1	10c前半	1	10c前半	1	10c前半	1	10c前半	1
不明	8	不明	2	不明	3	不明	1	不明	1	不明	1	不明	1	不明	1	不明	1	

多賀前地区																	
南1西2区(面司鏡)				北1西3区(面司鏡)				御前地区				北3西1・2区					
円面鏡	5	扇字鏡	4	軸用鏡	2	円面鏡	11	扇字鏡	1	軸用鏡	3	円面鏡	3	扇字鏡	0	軸用鏡	12
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
区画II	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I B 古	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I B 新	9c中型	1	9c中型~9c後型	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	3	-	-	不明	1	不明	3	不明	1	不明	1	不明	1	不明	1	-	-

高平地区																	
北1-2西1区				南1東2区				高平地区									
円面鏡	5	扇字鏡	0	軸用鏡	2	円面鏡	4	扇字鏡	0	軸用鏡	0	円面鏡	12	扇字鏡	1	軸用鏡	9
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割II A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	5	-	-	不明	1	不明	4	-	-	-	-	不明	11	不明	1	不明	2

高平地区																	
北1-2東1区裏側				南1東2区				南1東3区									
円面鏡	4	扇字鏡	0	軸用鏡	1	円面鏡	6	扇字鏡	2	軸用鏡	2	円面鏡	2	扇字鏡	1	軸用鏡	6
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I + II A	9c末~9c前	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地割I B 新	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	2	-	-	不明	1	不明	5	不明	2	-	-	不明	2	不明	1	不明	2

表107 陸奥国府城における街区別出土数

時期が判明しているのは9世紀後半の円面硯5点、10世紀前半の円面硯3点、転用硯1点、10世紀以降の転用硯1点である。9世紀後半～10世紀前半は街区全体が国司館、先行する9世紀前半についても官人クラスの館があったとみている（図版705～707）（宮城県教委1996b）。

〈南1東2区〉

円面硯6点と風字硯2点、転用硯2点が出土しており、転用硯の割合は0.20である。このうち、時期が判明しているのは8世紀後葉～9世紀初頭の転用硯1点、9世紀前半の転用硯1点、10世紀前半の円面硯1点である。8世紀後半以降、3間以下の小型建物や竪穴住居が継続してつくられた（図版705～707・728・729）。多賀城と国府付属寺院を結ぶ道に面することから、厨などの城外官衙（生田2001）とみられ、付近にはさまざまな儀式や行事が行われた場があった可能性が指摘されている（古川2014）。

〈北1東2区東外〉

円面硯4点と転用硯1点が出土しており、転用硯の割合は0.20である。このうち、時期が判明しているのは8世紀末～9世紀前葉の円面硯1点（D2類）、9世紀前半の円面硯1点である。8世紀後半以降、3間以下の小型建物や竪穴住居が継続してつくられた（図版705～707・729）。多賀城と国府付属寺院を結ぶ道に面すること、方格地割の東端にあり寺域に最も近い建物群であることから、厨などの城外官衙（生田前掲）または寺院関連施設とみられる。

〈北2西5区〉

円面硯5点と風字硯5点が出土しており、転用硯の割合は0.00である。このうち、時期が判明しているのは8世紀末～9世紀前葉の円面硯1点（C2類）、風字硯1点、10世紀前半の風字硯1点である。街区北半は分割する溝が認められず、3間以下の小型建物が主体とする建物群が東西に置かれた（図版705～707・728）。

B) 定形硯が主体で転用硯は50%未満の街区

〈北1・2東1区と北1・2西1区〉

北1・2東1区では円面硯12点と風字硯1点、転用硯9点出土しており、転用硯の割合は0.41である。このうち、時期が判明しているのは8世紀末～9世紀前葉の転用硯1点、9世紀前半の円面硯1点（D1類）、9世紀中葉の転用硯1点である。9世紀前葉～中葉には広場を挟んで11×2間の長大な建物が南北に2棟ずつ並んでいたと推定されている（図版730）。また、北1・2西1区は円面硯5点と転用硯2点が出土しており、転用硯の割合は0.29である。このうち、時期が判明しているのは9世紀前半の転用硯1点である。広場を挟んで7×3間の長舎が南北に2棟ずつ並んでいたと推定されている。

南北大路を挟んだ両地区は、広場を挟んで南北に2棟ずつの長舎が並ぶこと、定形硯の割合が高いこと、さらに建物周辺から「馬券」木簡や「失馬文」木簡（多賀城市教委2004b）、陸奥国司から中央への破壊された馬官舍に関する修理報告控えの漆紙文書（多賀城市教委2011f）、「馬庭」木簡（多賀城市教委2005）など馬に関する文字資料が出土していることから、馬房（長舎）や馬庭などで構成された馬を管理する城外官衙の可能性が指摘されている（多賀城市教委2011f）。

<北2西4区>

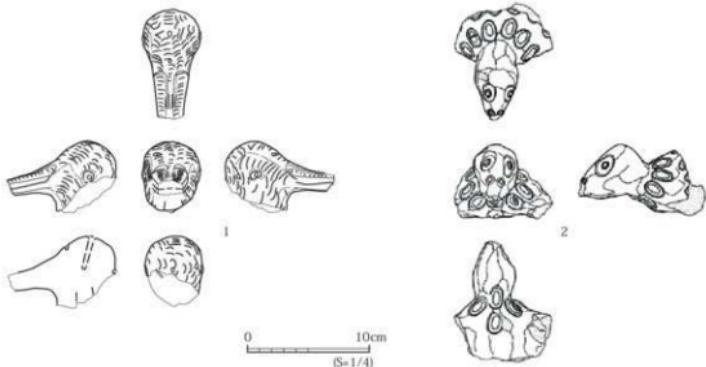
円面硯11点と風字硯3点、転用硯10点が出土しており、転用硯の割合は0.43である。このうち、時期が判明しているのは8世紀中頃～後半（街区成立前）が転用硯2点、8世紀末～9世紀前葉の円面硯1点（B3類）、転用硯2点、9世紀中葉の円面硯1点、10世紀前半の円面硯1点、風字硯1点、転用硯1点、10世紀前葉以降の転用硯2点である。街区内の9世紀中葉の井戸跡より「会津郡主政益繼」「解文案」と記された題箋木簡が出土したことから、会津郡司が駐在した出張所が置かれたと考えている（図版705～707・709・728・729）（宮城県教委1997、桑原ほか2000）。

<北3西5区>

円面硯5点と風字硯2点、鳥形硯1点、転用硯4点が出土しており、転用硯の割合は0.36である。また、隣接する北3道路側溝から出土した亀形硯は、本来当区に帰属した可能性が考えられる（図版745）。こうした動物形象硯は、大局的には8世紀代に限られると指摘されている（巽2004）。これらのうち、時期が判明しているのは8世紀中頃～後半（街区成立前）の転用硯3点、9世紀後半の円面硯1点、風字硯1点、転用硯1点、10世紀前半の円面硯2点である。街区は溝で細分され、南半部や北東部には主屋と副屋、3間以下の小型建物などで構成された建物群が置かれた（図版705～707・728）。多賀城西門へ至る西5道路に面することから、城外官衙もしくは官人の居宅とみられる。

<北3西6区>

円面硯7点と転用硯4点が出土しており、転用硯の割合は0.36である。このうち、時期が判明しているのは8世紀中頃～後半（街区成立前）の転用硯2点、9世紀後葉の円面硯1点（C3類）である。



No.	遺跡名・出土遺構	形 様	遺構の年代	報告書	No.	遺跡名・出土遺構	形 様	遺構の年代	報告書
1	八幡町区・SD7100 溝跡	鳥形硯	8世紀末～9世紀中葉	本・青	2	八幡町区・SK2051 北3道路沿	亀形硯	9世紀後半以前	宮城県1994c

*山王・市川橋遺跡の場合は遺跡名を省略し、地区名とした

*教育委員会は省略した

図版745 陸奥国府域出土の形象硯

街区は南北溝で3分割され、桁行3間以下の小型建物や竪穴住居で構成される建物群が置かれたが、主屋は廂を持たない（図版705～707）。

〈北3西4区〉

円面硯3点と風字硯1点、転用硯3点が出土しており、転用硯の割合は0.43である。このうち、時期が判明しているのは9世紀前半の円面硯1点、9世紀後半以降の転用硯2点である。街区を分割する溝はなく、南半に3間以下の小型建物や竪穴住居で構成される建物群が複数認められるが、主屋は廂を持たない（図版705～707・709・729）。

C) 転用硯が50%以上、70%未満の街区

〈北2a西5区〉

風字硯2点、転用硯3点が出土しており、転用硯の割合は0.60である。このうち、時期が判明しているのは9世紀前半の風字硯1点、9世紀後半の風字硯1点、転用硯2点である。街区を分割する溝はなく、東半に桁行3間以下の小型建物数棟で構成される建物群が認められるが、主屋は廂を持たない（図版705～707・729）。

〈南1東3区〉

円面硯2点、風字硯1点、転用硯6点が出土しており、転用硯の割合は0.67である。このうち、時期が判明しているのは9世紀前半の転用硯2点、9世紀中葉の転用硯2点である。街区は南北溝で3分割され、それぞれに3間以下の小型建物を主体とする建物群が置かれた（図版730）。多賀城と国府付属寺院を結ぶ道に面すること、方格地割の東端付近にあり寺域にも近い建物群であることから、厨などの城外官衙（生田2001）または寺院関連施設とみられる。

D) 転用硯が80%以上の街区

〈北3西1・2区〉

円面硯3点と転用硯12点が出土しており、転用硯の割合は0.80である。このうち、時期が判明しているのは8世紀中頃～後半（街区成立前）の円面硯1点、9世紀中葉の転用硯1点、9世紀後葉の転用硯2点、10世紀前葉の転用硯2点、10世紀の円面硯1点（C2類）、転用硯6点、10世紀中葉以降の転用硯1点である。

東西に蛇行する旧砂押川によって南北に分かれ、南部は9世紀後葉～10世紀前葉に6×2間西廂付床張東西棟と副屋が確認されている。北部は西2道路沿いで3間以下の小型建物と竪穴住居で構成される建物群があり、その中には鍛冶工房が存在した可能性が指摘されている。また、旧砂押川からは奈良時代を中心に羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物や漆付着土器が多量に出土した。川に面するとともに街区の北端で多賀城に接し、そこへ至る西2道路沿いとなる本区や西隣の北3西3a区は、鍛冶や漆などの生産施設域で工房と管理施設で構成される建物群が置かれた可能性が考えられる（宮城県教委2001a）。

〈北2西6区〉

定形硯ではなく転用硯のみ7点出土しており、転用硯の割合は1.00である。このうち、時期が判明しているのは8世紀中頃～後半（区画成立前）の転用硯2点である。3間以下の小型建物で構成される

建物群が置かれ、9世紀後葉以降は東西溝で南北に分けられる（図版705～707・709）。東隣の北2西5区が定形硯のみであること大きく異なっており、転用硯が卓越する北3西1・2区と同じく生産施設であった可能性が考えられる。

【多賀城における硯の使用】

多賀城内から出土した硯を主な地区別にまとめると以下のようになる（図版746、表108）。その際、時期と年代は政府遺構期の第Ⅰ期（724～762年）、第Ⅱ期（762～780年）、第Ⅲ期（780～869年）、第Ⅳ期（869年～11世紀前半）を使用している（註14）。また、風字硯には二面硯のほか、破片で風字硯と区別できなかった円形硯・楕円硯を含めている。

〈政府〉

『多賀城政府跡本文編』（多賀研1982a）には、出土点数が円面硯66個体、風字硯19個体、転用硯200点と記されているものの、遺構期ごとの点数は不明である。そこで、掲載された実測図13点をみると、B3類が2点、C1類が2点、C1類？が1点、C2類が1点、C2類？が1点、C3類が2点、C4類が1点、D2類が1点、C類もしくはD類が2点である。これらは、曹司や国府域で8世紀末以降に認められることから、政府跡出土硯の多くはⅢ期以降とみられる。

また、生田論文の図17・20に示されたグラフから時期別の割合を読み取ると、Ⅲ期は円面硯0.18、転用硯0.82、Ⅳ期は円面硯0.23、風字硯0.10、転用硯0.67で、転用硯の割合が高い。Ⅰ・Ⅱ期の硯が認められない理由の一つは、政府が清浄な場として維持されたためとみられる。一方、Ⅲ期以降に硯が急増するのは、文書等作成実務が増えたためであり（生田2003）、こうした需要に応えるため転用硯が多く使われたと考えられる。

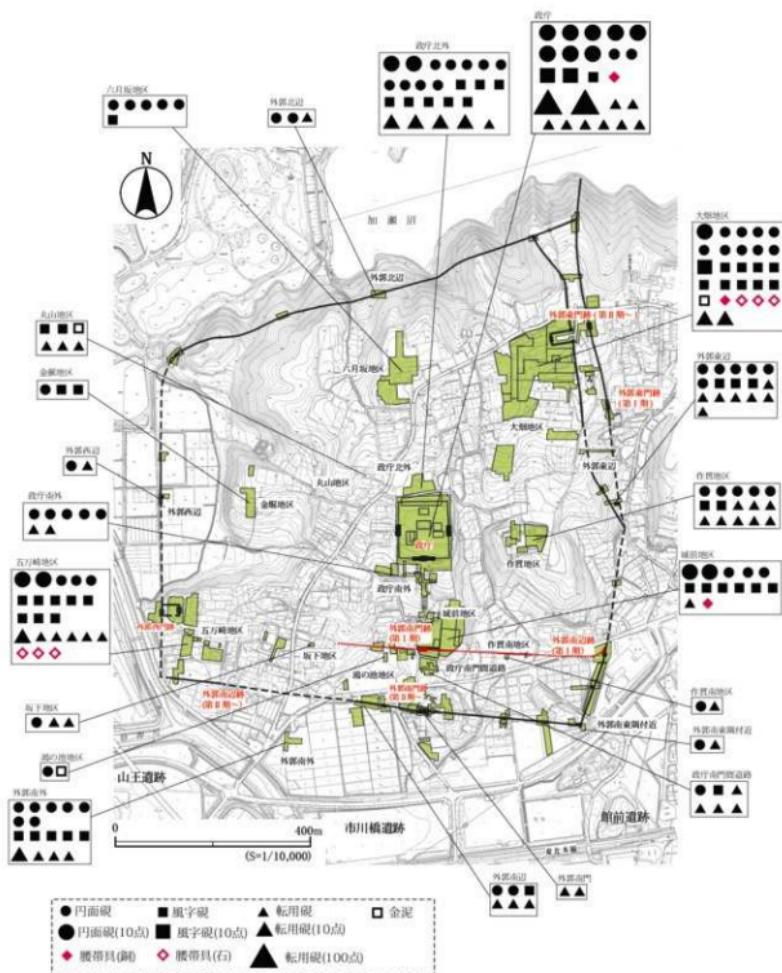
〈政府北隣接地〉

政府北辺築地壝外の隣接地である。円面硯29点、風字硯8点、転用硯41点以上が出土しており、転用硯の割合は0.53である。時期別にみると、Ⅲ-1期は円面硯5点、風字硯2点（うちⅡb類1点）、転用硯5点である。転用硯の割合は0.42である。Ⅳ期は円面硯2点、転用硯7点で、転用硯の割合は0.78と卓越する。Ⅲ-1期は、政府火災直後の復興に関わる一時的な施設として竪穴住居などがつくられた。年代は8世紀後葉に限られることから、風字硯使用例の初期段階として注目される。また、Ⅳ期には政府北門外に7×3間の主屋を三方から長舎が囲む一郭が設けられ、政府と一帯となって機能したと考えられる。

〈城前地区〉

政府南外につくられた曹司で、政府一外郭南門間道路の東側に位置する。円面硯23点、風字硯6点、転用硯1点が出土しており、転用硯の割合は0.03と非常に低い。時期別にみると、Ⅲ期は円面硯6点（うちB1・B3類1点ずつ）、風字硯1点で、転用硯の割合は0.00である。ある。Ⅳ期は円面硯2点、風字硯1点（Ⅱb類）、転用硯1点で、転用硯の割合は0.25である。

曹司の変遷は、Ⅱ・Ⅲ期が東西棟の中央列を挟んで南北棟の西列と東列が並ぶ縱列配置が認められる。特にⅡ期は5×4間二面廂の主屋北側に広場や目隠し塀を設けており、政府側を向いている。Ⅲ期になると広場は消滅するが、廂付建物が増え南入口脇に櫓、南西の道路際に櫓を置いており、Ⅱ・



図版746 多賀城跡における硯・腰帯具の分布（多賀城跡調査研究所作成図に加筆）

	政 府				政 府 北 国 鎮 地				政 府 南 国 鎮 地									
	円面鏡	66	風字鏡	19	転用鏡	200	円面鏡	29	風字鏡	8	転用鏡	41	円面鏡	5	風字鏡	0	転用鏡	2
I期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
II期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
III期	—	—	—	—	—	—	8c.末~	3	8c.末~	2	8c.末~	1	8c.中頃~後半	1	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	8c.末~9c.初夏	2	—	—	8c.末~9c.初夏	4	—	—	—	—	—	—
IV期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	10c.~	2	—	—	10c.~	1	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10c.後半~	1	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11c.後半	1	11c.後半	5+	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	66	不明	19	不明	200	不明	22	不明	5	不明	24	不明	3	—	—	不明	2	—

	城 前 地 区				大 烟 地 区				五 万 鳥 地 区									
	円面鏡	23	風字鏡	6	転用鏡	1	円面鏡	19+	風字鏡	19+	転用鏡	19+	円面鏡	23+	風字鏡	8+	転用鏡	15+
I期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
II期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
III期	8c.後葉	4	—	—	—	—	8c.末~9c.初夏	2	8c.末~9c.初夏	2	8c.末~9c.初夏	2	8c.中頃~後半	2	—	—	8c.中頃~後半	1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	9c.中葉	2	9c.中葉	1	—	—	9c.中葉	—	2	9c.中葉	—	2	9c.中葉	1	8c.末~9c.初夏	4	—	—
IV期	9c.後半	1	—	—	—	—	9c.後半	1	9c.後半	3	9c.後半	3	9c.後半	1	9c.後葉	1	9c.後半	2+
—	9c.後半~	1	—	—	—	—	9c.後半~	1	9c.後半~	1	10c.前半	1	10c.前半	1	—	—	9c.後半~10c.前半	1
—	—	—	—	—	—	—	10c.前半	1	10c.前半	1	10c.前半	2	—	—	—	—	9c.後半~	1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	15	不明	4	—	—	—	不明	10+	不明	6+	不明	5+	不明	12+	不明	6	不明	1

	作 貢 地 区				六 月 重 地 区				下 下 地 区									
	円面鏡	5	風字鏡	2	転用鏡	8+	円面鏡	5	風字鏡	1	転用鏡	0	円面鏡	1	風字鏡	0	転用鏡	2+
I期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
II期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
III期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
IV期	—	—	—	—	—	—	9c.後半	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	10c.前半	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	10c.中葉~	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	5	不明	2	不明	7+	不明	2	不明	1	—	—	—	不明	1	—	—	不明	+

	外 郡 南 門				外 郡 東 邊				外 郡 南 外									
	円面鏡	0	風字鏡	2	転用鏡	0	円面鏡	6+	風字鏡	3	転用鏡	7	円面鏡	7	風字鏡	5	転用鏡	13
I期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
II期	—	—	—	—	—	—	8c.末~	2	—	—	8c.末~	1	—	—	—	—	—	—
III期	—	—	—	—	—	—	8c.末~	1	—	—	8c.末~	1	—	—	—	—	—	—
IV期	—	—	—	—	—	—	9c.前半	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	10c.前半~	1+	—	—	—	—	—	—	—	—	10c.前半	2
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	2	不明	3	不明	5	不明	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1

表108 多賀城跡における地区別鏡出土数

Ⅲ期をとおして城内曹司の中でも最も格式が高い。地区全体の鏡出土数や定形鏡の割合が高いのは、こうした場の性格を反映したためと考えられる。

〈大烟地区〉

外郭東門の南西につくられた曹司で、外郭東門—西門間に結ぶ城内道路の南側に位置する。円面鏡・風字鏡・転用鏡とも、19点以上ずつ出土しており、転用鏡の割合は0.33とみられる。時期別にみると、Ⅲ期は円面鏡4点（うちB3類1点）、風字鏡6点（うち1b類1点）、転用鏡8点で、転用鏡の割合は0.44である。Ⅳ期は円面鏡5点（C2・D2類1点ずつ）、風字鏡7点、転用鏡6点で、転用鏡の割合は0.33

である。

曹司の変遷は、II期が東辺築地壝側に15間以上×4間の長大な二面廂付南北棟建物ほか数棟の建物と竪穴住居11軒などで構成されたが、III期は東辺築地壝の移動に伴って西へ移動するとともに、城内道路側に壝と曹司北門を設け、門から南に延びる通路で東西の曹司に分けられた。西曹司は6×2間建物7棟を北に開くコ字型配置となり、東曹司は廂付東西棟を中心とし井戸がセットになった建物群が複数置かれたとみられる。IV期になると、後者は建物数を大きく増やすのに対し前者は竪穴工房域に変容する。また、一時的に城内道路上から北側に竪穴住居が密集してつくられる。

〈五万崎地区〉

外郭西門の東につくられた曹司で、外郭東門—西門間を結ぶ城内道路の南北に位置する。円面硯23点以上、風字硯8点以上、転用硯15点以上しており、転用硯の割合は0.33とみられる。時期別にみると、II期は円面硯2点（うちB1類1点）、転用硯1点で、転用硯の割合は0.33である。III期は円面硯5点（うちD1類1点）、風字硯（点数不明）、転用硯4点で、転用硯の割合は0.44以下である。IV期は円面硯4点（うちC2類1点）、風字硯2点以上、転用硯9点以上で、転用硯の割合は0.60以上とみられる。IV期に入って転用硯が卓越する状況は、政庁北隣接地と同じである。当期は風字硯生産の末期であることから、転用硯は定形硯の代用として使われたとみられる。

城内道路の南側は、北を東西方向の掘立柱塀、南は外郭南辺築地壝で区画された内部で多数の掘立柱建物が重複しており、その周囲から9世紀後半～10世紀前半の施釉陶器が城内で最も多く出土した（多賀研2012）。さらに、五万崎地区全体からは城内出土のミガキ須恵器の6割が出土する。こうした高位者用の特別な食器が集中するのは、外郭西門の内側に交通路を利用した人々の館が置かれたためとみられる。

【まとめ—陸奥国府における硯の使用】

〈8世紀前半〉

多賀城第I期にあたる。城内の坂下地区で転用硯が2点認められるのみで、出土例が極めて少ない。

〈8世紀中頃～後半〉

多賀城第II期にあたる。城内は政庁南隣接地で円面硯1点、五万崎地区で円面硯2点と転用硯1点が出土した。国府域では八幡・伏石地区の4地点と館前地区の1地点に限定されており、こうしたあり方は当期の城外施設の広がりと一致する。また、4地点が集中する八幡・伏石地区は転用硯のみ出土しており、定形硯は主として多賀城城内で使用されたと考えられる。

〈8世紀後葉～11世紀前半〉

多賀城第III期から第IV期にあたる。城内では第III期から政庁・曹司とともに硯が急増するが、特に前者で非常に多い。これは、政務の場としての政庁の機能がそれまでより重視されたことを示唆する。こうした傾向は同時期の国府域でも認められ、方格街区の整備とともに官人層とそれを支えた人々の集住が進み、文書作成量が増えるに伴って硯の需要が高まったと考えられる。

定形硯の割合が高い街区は東西大路沿いの国司館のほか、大路交差点の北東・北西の城外官衙、東西大路東道路沿いの城外官衙または寺院関連施設、会津郡出張所などの公的施設、さらに、多賀城南

門や西門にいたる幹線道路沿いに多い。その一方、転用硯の割合が高い区画は、鍛冶や漆などの生産施設と結びつく傾向が認められた。

また、風字硯は台原・小田原窯跡群で8世紀後葉に生産を開始している。多賀城は政庁北隣接地の8世紀後葉（II期火災直後の暫定復興期）の竪穴住居跡から、国府域でも北2西5区、南1西2区で8世紀末～9世紀前葉の遺構から風字硯が出土しており、陸奥国府は官窯の生産開始とともに風字硯の使用が始まったと考えられる。

（6）腰帶具

律令官人は、朝服・制服に革製の腰帶を着用した。腰帶は革帶・鉸具・装飾具で構成される。装飾具は巡方・丸鞆・長方形金具・山形金具・鉈尾に分かれ、それぞれ金属製と石製がある。このうち、金属製の装飾具を付けた帯を鈎帶といい、特に六位以下の中・下級役人が着用した奈良時代の鈎帶は、「衣服令」に烏油腰帶と規定され、黒漆塗りの銅鉈であった。

鈎帶は延暦15年（796）に使用が禁止され、その後、大同2年（807）から弘仁元年（810）にかけて再び採用された（田中2003、小林2004）。鈎帶に替わるもののが、石製装飾具を付けた石帶である。鈎帶使用禁止の背景には銅素材の枯渇という問題があったが、その時点で既に石帶が普及していたとの指摘がある（小林前掲）。

通常、鈎帶や石帶は巡方と丸鞆の組合せとなるが、出土例をみると長方形金具は巡方とセット、もしくは単独で用いられた（田中前掲）。また、銅製の鉸具や鉈尾は馬具の革帶にも用いられたため、単独では鈎帶と馬具いずれに伴うものなのか区別できない。

ここでは、帯に装着された鉸具・装飾具を腰帶具と呼んで陸奥国府の状況をみてみたい（註15）。陸奥・出羽国では墳墓を除き、腰帶具は城柵・官衙や周辺集落からの出土に限られ、その中でも陸奥国府は出土数が多いことで知られる。

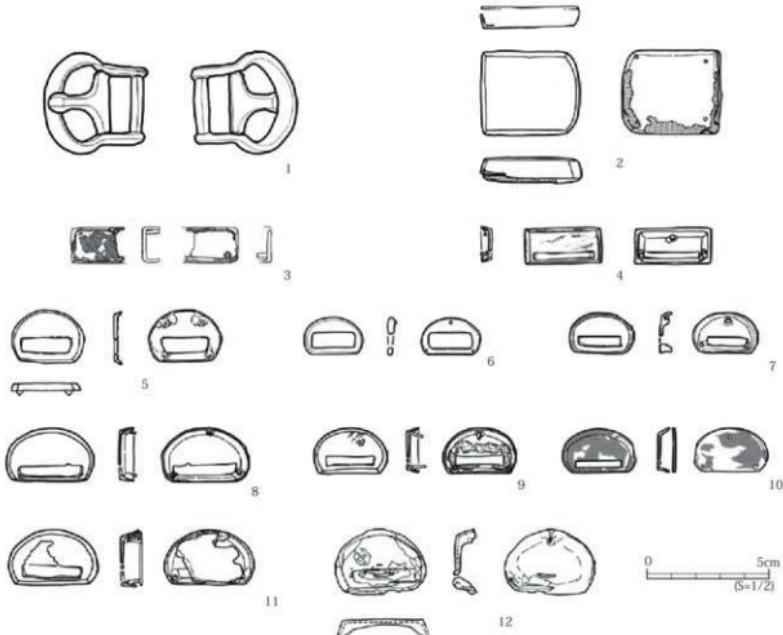
〈陸奥国府城〉

陸奥国府域から腰帶具は38点（銅13・石25）出土している（図版744・747・748、表109・110）。道路跡や河川跡といった帰属が不明なものを除く街区ごとの出土数は、北2西5区3点（銅1・石2）、北3西5区2点（石）、北3西3a区1点（石）、南3西1区南側2点（銅）、南2西1区1点（石）、南1西2区2点（銅・石）、北1西3区2点（銅・石）、北1・2西1区4点（銅1・石3）、北1西2区1点（石）、北1・2東1・2区1点（石）、北1・2東1区東側1点（銅）、南2東1区東側1点（石）、南1東2区1点（銅）、南1東3区1点（銅）である。

このうち、北1・2西1区の4点は2区画分であることから、陸奥国府域における腰帶具は八幡・伏石地区、多賀前地区、鴻ノ池地区、高平・水入地区の街区から1～3点出土したことになり、地区や街区ごとの突出性は認められない。

〈多賀城跡〉

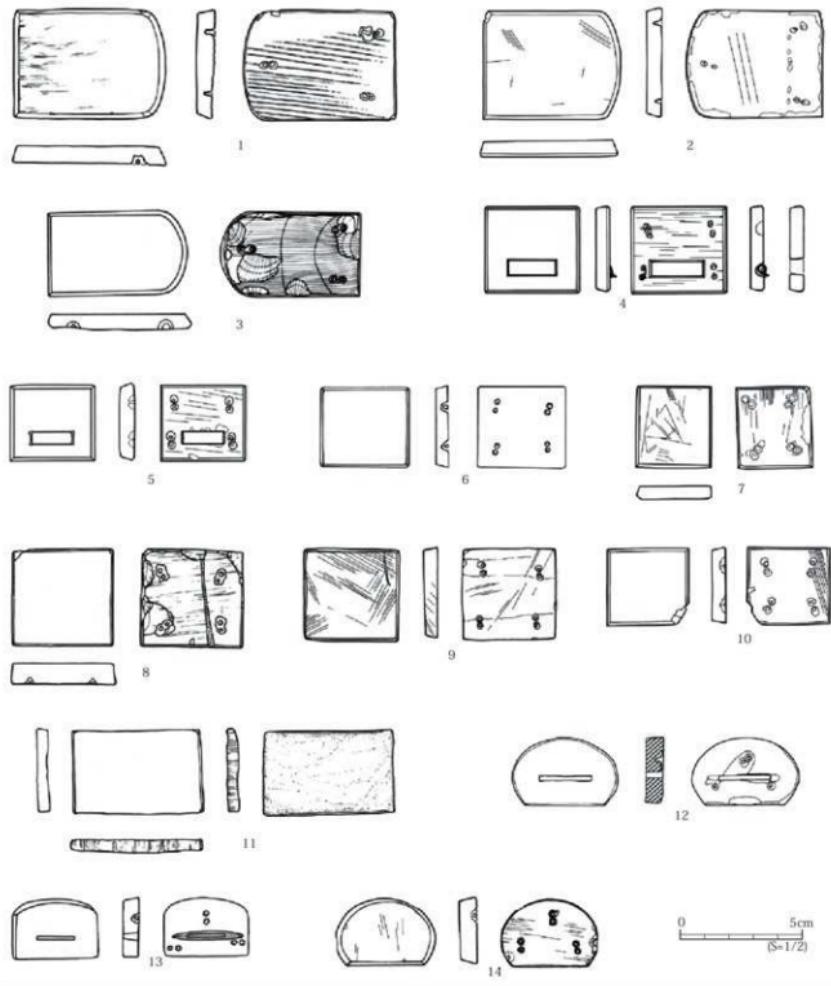
多賀城内から腰帶具は9点（銅3・石6）出土している（図版746～748、表109・110）。地区別の出土数は政庁1点（銅）、大畠地区4点（銅1・石3）、五万崎地区3点（石）、城前地区1点（銅）



No.	遺跡名・出土遺物	種別 / 形孔	黒 材	幅 (cm)	遺跡の年代	報告書	No.	遺跡名・出土遺物	種別 / 形孔	黒 材	幅 (cm)	遺跡の年代	報告書
1	須ノ地跡・SK3057A 井川跡	器具	銅製	3.2	9世紀前葉	多賀城市 2004a	7	水入地区・SK778 遺構	丸鍔 / 朝后孔	銅製 / 黒漆塗	2.6	8世紀末～ 9世紀前葉	多賀城市 2003a
2	多賀地区・SK848 土坑	鉤尾	銅製	3.4	9世紀前半	宮城県 1996a	8	多賀前地区・ SF3627A 井川跡	丸鍔 / 朝后孔	銅製	3.5	9世紀以降	宮城県 1996a
3	多賀跡人埋跡区・ SE2311 住居跡	鉤尾	銅製 / 合金 / ヴィン	1.2	8世紀後葉～ 9世紀初期	多賀町 1996	9	多賀地区・ SK2043 土坑	丸鍔 / 朝后孔	銅製	2.9	—	宮城県 1996a
4	多賀前地区・SK20	長方形 / 内2道鉄筋路頭	銅製 / 耐候性	3.1	10世紀前葉	宮城県 1996a	10	水入地区・ SK1215 土坑	丸鍔 / 朝后孔	銅製 / 黒漆塗	3.0	—	多賀城市 2003a
5	六幡地区・ SK5081 土坑	丸鍔 / 小孔	銅製	3.0	—	多賀城市 1991b	11	多賀前地区・ SF3627A 井川跡	丸鍔 / 朝后孔	銅製	3.6	9世紀以降	宮城県 1996a
6	崩前地区・ 45次之2土坑表面	丸鍔 / 大孔	銅製	2.4	—	多賀城市 2005a	12	高平地区・ 9号整地前b	丸鍔 / 小孔	銅製	3.7	10世紀前葉	多賀城市 1990d

各遺物は当時の名前と分類は、田中広明氏の分類に従った。(田中 2002)
番号は、器具が板金装飾部有り、部分・丸鍔は櫛部を示す
例上、市川鐵筋跡の場合には遺跡名を省略し、地区名のみとする。

図版747 陸奥国府出土の腰帯具 1 - 鎔帶



No.	遺物名・出土場所	種別 / 異孔幅(cm)	遺物の年代	備考	No.	遺物名・出土場所	種別 / 異孔幅(cm)	遺物の年代	備考
1	多賀山地区・SD2000 河川跡	4.5	8世紀中葉～10世紀	吉城県 1996a	8	多賀山地区・SD1602 河川跡	丸釦 / 無孔	4.1	9世紀中期
2	道・曲地区・SD2295 道跡	4.4	10世紀初～後奈	多賀城市 2004b	9	八幡地区・10次1番	丸釦 / 無孔	3.9	—
3	八幡地区・SB1653 田村跡	3.5	—	吉城県 1997	10	道・曲地区・11区1番	丸釦 / 無孔	3.4	—
4	郡前地区・SD5022 田村跡	3.9	8世紀～9世紀初期	吉城県 2001a	11	多賀山跡五方跡地区・C区2番	丸釦 / 無孔	5.3	—
5	伏石地区・西3a 道路C附近	3.5	8世紀末～9世紀中期	吉城県 2009	12	多賀城跡大堀跡地区・SAB10 大穴	丸釦 / 細 丸孔	4.3	—
6	多賀城跡五方跡地区・SK081 土坑4番	3.6	9世紀中葉	多賀研 1978	13	多賀城跡五方跡地区・SD1008 路跡	丸釦 / 細 丸孔	3.4	中世～近入
7	伏石地区・SD6733 路跡	3.4	10世紀後半以前	吉城県 2009	14	八幡地区・SD5029 路跡	丸釦 / 無孔	4.0	中世～近入

各図例と番号の名称と分類は、田中広明氏の分類に従った(田中 2002)
※例は、紋様が複数具装部分、邊方・丸釦は横幅、範尾は基部を示す
糸山主・市川城跡の場合は道跡名を省略し、地区的のみとした

図版748 陸奥国府出土の腰帶具 2 一石帯

であり、政庁が少なく、外郭東西門に接する曹司の大畠地区と五万崎地区に多い。両地区とも石製が多く、Ⅲ期以降に曹司の整備が進む傾向と整合する。これに対し、外郭南門に近い城前地区的曹司で腰帶具が1点のみであったのは、曹司の性格が大畠や五万崎と異なることを示唆する。

No	遺跡名	地区名	次	類	道 構 名	層 位	区 画	遺構の年代	素材 / 仕上 げなど	種類	幅 (m)	重 量	報告書	序号	備 考	
1	多賀城跡	政庁	SB136 重櫻付柱	—	—	銅 / 鎔丸	丸輪	3.93	班目孔	PL135 - 23						
2	多賀城跡	大畠	14次	SK355 住居跡	理土	—	9c 後葉	石	延方	3.60	—	年 1971	22 - 11	大理石		
3	多賀城跡	大畠	23次	SA810 柱穴	—	—	石	丸輪	4.32	班目孔	年 1974	35	大理石			
4	多賀城跡	五万崎	30次	SK981 土坑	4層	—	9c 中葉	石	延方	3.64	無孔	年 1977	41 - 4	鰐形岩		
5	多賀城跡	五万崎	30次	SD1008 清跡	3層	—	中世 - 亂入	石	丸輪	3.43	班目孔	年 1977	44 - 8	鰐形岩		
6	多賀城跡	大畠	56次	SB1900 建物跡	柱頭穴六	—	10c 前半	石	延方	—	—	年 1989	28 - 10	蛇形岩		
7	多賀城跡	大畠	66次	SE2311 住居跡	3層	—	8c 後葉 - 9c 初頭	銅 / 鎔	延方	1.20	無孔	年 1995	48 - 44	金メッキ		
8	多賀城跡	城前	71次	SA2654 杖穴	—	—	銅	延方	1.50	無孔	年 2000	16 - 70				
9	多賀城跡	五万崎	72次	SD1008 清跡	C区 2層	—	—	石	延方	5.30	無孔	年 2001	21 - 27	粘板岩、未成品、種力		
10	市川橋跡	伏石	SD5021 河川跡	—	—	8c ~ 9c 初頭	石	延方	3.88	小孔	私 2001a - 2 263 - 1		蛇形岩			
11	市川橋跡	伏石	丙3a 通路跡 C用	東渠 (SD6682)	—	9c 来 ~ 9c 中葉	石	延方	3.50	小孔	私 2009 - 1	150 - 5	粘板岩			
12	市川橋跡	伏石	SD6733 流跡跡	2層	北2西3区	10c 後半以降	石	延方	3.38	無孔	私 2009 - 2	283 - 4	粘板岩			
13	市川橋跡	高平	9次	整地跡 b	北1・2東1・2区 or 同渠東跡	10c 前半	銅	丸輪	3.71	小孔	多由 1990d	9次第6回				
14	市川橋跡	水入	19次	B区 I層 or Ⅱ層	南2東1区東外	—	石	延方	—	—	多市 1997a	写真P26 - II	圓なし			
15	市川橋跡	樋ノ口	21次	B区 L - 第四層	御湖南東外	—	石	丸輪	—	無孔	多市 1997c	29 - 23	碧玉			
16	市川橋跡	泡ノ池	23-24次	A区 No.4 レンチ	北1・2西1区	—	金属	銅具	—	—	多市 1999b	写真 19 - 5	圓なし、縮尺不明			
17	市川橋跡	高平	24-25次	BL3 区屋根	北1・2東1・2区	—	石	延方	3.48	無孔	多市 2001a	181 - 3	花崗岩?			
18	市川橋跡	水入	—	SX778 立ち込み	南1東2区	8c 来 ~ 9c 前葉	銅 / 鎔油	延方	2.60	小孔	多市 2003a	277 - 1788				
19	市川橋跡	水入	—	SK1215 土坑	南1東3区	9c 前半	銅 / 鎔油	延方	3.00	班目孔	多市 2003a	277 - 1789				
20	市川橋跡	泡ノ池	32-33次	SD3007 清跡	1 - 2	北1・2西1区	9c 前半	銅	銅延	—	小孔	多市 2003b	32-33次 - 5	石材不明		
21	市川橋跡	泡ノ池	38次	SX3057A 河川跡	—	9c 前葉	銅	銅具	3.20	多市 2004a	38次 8 - 6					
22	市川橋跡	泡ノ池	11区 A層	北1・2西1区	石	延方	3.41	無孔	多市 2004b - 2	248 - 210	石材不明					
23	市川橋跡	泡ノ池	SD2516	1層	—	石	延方	4.09	無孔	多市 2004b - 2	248 - 2131	石材不明				
24	市川橋跡	泡ノ池	SD2295	2層	北1・2西2区	10c 中後葉	石	銅延	4.39	—	多市 2004b - 2	248 - 2132	石材不明			
25	市川橋跡	泡ノ池	—	11区 P202	北1・2西1区	—	石	延方	3.71	—	多市 2004b - 2	248 - 2133	石材不明			
26	市川橋跡	城前	45次	2区 池面	北3東1区 or 北1・2東1・2区	—	銅	丸輪	2.40	大孔	多市 2005a	34 - 4				
27	市川橋跡	泡ノ池	61次	SX3279 河川跡	—	—	石	丸輪	3.48	—	多市 2007a	61次 3 - 2	石材不明			
28	市川橋跡	泡ノ池	66次	SX3361 流跡跡	—	10c 前葉	石	丸輪	4.28	無孔	多市 2008b	2 - 1	銅銅留具残存			
29	山王道跡	八幡	SD2124 清跡	北3西5区	8c 中 - 後葉	石	延方	—	—	私 1994d	74 - 2	石材不明				
30	山王道跡	多賀前	SD3627A 線跡	耕作土	南3西1区	9c ~	銅 / 丸輪	丸輪	3.60	班目孔	私 1996a	170 - 5				
31	山王道跡	多賀前	SK2043 土坑	南1西2区	—	銅 / 丸輪	丸輪	2.90	班目孔	私 1996a	170 - 6					
32	山王道跡	多賀前	SF3627A 線跡	耕作土	南3西1区	9c ~	銅	丸輪	3.60	班目孔	私 1996a	170 - 7				
33	山王道跡	多賀前	西2道路跡	(SK202)	路面2層	—	10c 前葉	銅 / 鎔油	良方頭	3.30	班目孔	私 1996a	170 - 8			
34	山王道跡	多賀前	SK848 1坑	北1西3区	9c 前半	銅	銅延	3.40	無孔	私 1996a	170 - 9					
35	山王道跡	多賀前	道側壁認定	南1西2区	—	石	延方	—	—	私 1996a	182 - 1	銅銅留具?				
36	山王道跡	多賀前	内3道跡跡	(SK4024) 東溝	—	9c ~ 10c	石	延方	3.40	班目孔	私 1996a	182 - 2	粘板岩			
37	山王道跡	多賀前	SD2000 河川跡	—	8c 中葉 - 10c	石	延方	4.50	無孔	私 1996a	182 - 3	石材不明				
38	山王道跡	多賀前	SD845A 清跡	北1西3区	9c ~	石	延方	(3.10)	—	私 1996a	182 - 4	銅銅留具?				
39	山王道跡	多賀前	SD1602B 河川跡	南2西1区	9c 中葉	石	延方	4.10	無孔	私 1996a	182 - 5	粘板岩				
40	山王道跡	八幡	SB1653 建物跡	北3西5区	—	石	銅延	3.50	無孔	私 1997	162 - 1	粘板岩				
41	山王道跡	八幡	地区不明表土	—	—	石	延方	4.30	—	私 1997	284 - 17	粘板岩				
42	山王道跡	多賀前	墓1木組皿 a層	—	—	石	延方	—	—	私 2014	38 - 1	粘板岩				
43	山王道跡	多賀前	Pt316	—	—	石	丸輪	—	—	私 2014	38 - 2	粘板岩				
44	山王道跡	八幡	10次	SK5081	1層	北2西5区	銅	丸輪	3.00	小孔	多市 1991b	24 - 1				
45	山王道跡	八幡	10次	SD5029 延跡	2層	北2西5区	中世 - 亂入	石	丸輪	4.00	無孔	多市 1991b	24 - 2	石材不明		
46	山王道跡	八幡	10次	1層	北2西5区	—	石	延方	3.90	無孔	多市 1991b	24 - 3	石材不明			
47	山王道跡	八幡	—	1層	—	—	銅	銅具	—	—	多市 1997d	24 - 190 - 3	圓なし			

*報告書の「図録編」は多賀城跡跡回顧編、「年」は多賀城跡研究所年報、「私」は宮城県文化財調査報告書、「多市」は多賀城文化財調査報告書を示す

表109 陸奥国府出土の腰帶具

多賀城跡		城跡地区		大戸地区		五万歳地区			
	政 府	計	1	計	1	計	1	計	0
銅製品	計	1	1	不明	1	9c 後葉～9c 初頭	1		
	不明	1	1	不明	1	9c 後葉～9c 初頭	1		
石製品	計	0	0	計	0	計	3	計	3
	—	—	—	—	—	9c 後葉	1	9c 中葉	1
	—	—	—	—	—	10c 前半	1	中後	1
	—	—	—	—	—	不明	1	不明	1

八幡堀跡		伏石地区		多賀城跡地区		周ノ口地区				
	北2西5区	北3西5区	北3西3a区	東3西1区南側	南2西1区	南1西2区	北1西3区	北1西2区	北1西2区	
銅製品	計	1	計	0	計	0	計	2	計	0
	不明	1	—	—	9c ~	2	—	不明	1	9c 前半
石製品	計	2	計	2	計	1	計	0	計	1
	中葉	1	—	—	10c ~	1	—	9c 中葉	1	不明
	不明	1	不明	2	—	—	—	—	—	10c 後半

*銅製品で()内の数値は、銅具を示す

表110 陸奥国府における地区別・区画別腰帶具出土数

(7)まとめ 一官衙的器種や硯、腰帶具からみた陸奥国府の流通と消費

これまでの検討から陸奥国府周辺で出土する官衙的器種の生産年代は、須恵器壺Gが8世紀後葉～9世紀初頭、ミガキ須恵器は8世紀末～9世紀中葉で、大戸産須恵器のピークは8世紀末～9世紀中葉であり、ほぼ同時期に陸奥国府へもたらされたといえる。8世紀末頃、国府周辺ではロクロ土師器が急速に普及して、伝統的な非ロクロ成形土師器を駆逐する。官窯でも、定形硯の生産が風字硯にシフトしており、国府全体で土器や硯に大きな変化が認められる。その後、9世紀後半になると須恵器や土師器の官衙的器種は一部を除いてみられなくなり、単純化された器種構成と同一規格に基づいた大量生産に拍車がかかる（村田2007）。硯もまた風字硯のみとなって、平安時代の官衙土器様式が確立する。

国府域での分布をみると、ミガキ須恵器は北2道路沿いの西3～4区と多賀城と多賀城廃寺を結ぶ東西大路東道路沿いに分布のまとまりが認められる。前者は方格地割成立以前から継続的に利用されてきた場所で、西5道路で多賀城外郭西門と繋がっていた。また、後者は壺Gの分布域と一致する。後述するように壺Gは多賀城内からの出土が少ない。したがって、ミガキ須恵器や壺Gは、さまざまな儀式や行事が行われた場で使用された可能性が考えられる。

大戸産須恵器は、多賀前地区からの出土数が突出している。そのほとんどが国司館である北1西3区や南1西2区、またはそれに面する道路跡から出土したため、輸入陶磁器、施釉陶器に次ぐ奢侈品として位置付けられたと考えられる。大戸産須恵器のこうした傾向は、廻付建物が認められる北3西5区で大戸産須恵器が多く、東隣の廻付建物がない北3西4区では少ない点からも裏付けられよう。また、会津郡出張所が置かれた北2西4区からも多く出土した。

高平地区		水入地区		植ノ口地区	
北1・2東1・2区	北1・2東1・1区東側	計	1	計	0
銅製品	計	0	0	計	1
	—	—	10c 前半	1	—
石製品	計	1	1	計	0
	不明	1	—	不明	1

硯は8世紀末以降出土量が飛躍的に増加する。これは、方格地割の整備とともに官人層とそれを支えた人々の集住が進んだためと考えられる。その中で定形硯の割合が高い場所は、東西大路沿いの国司館のほか、大路交差点の北東・北西の城外官衙、東西大路東道路沿いの城外官衙または寺院関連施設、会津郡出張所などの公的施設、さらには多賀城外郭南門や西門にいたる幹線道路沿いの区画である。一方、転用硯の割合が高い区画は、鍛冶や漆などの生産施設と結びつく傾向が認められた。

多賀城での分布は、ミガキ須恵器が政庁に少なく大畠・城前・五万崎の3地区に多い。似たような傾向は腰帯具でも認められ、政庁に少なく大畠・五万崎地区に多い。こうしたことから、外郭門の内側には道路を利用した人々の館が想定され、ミガキ須恵器はそうした場で高位者用の特別な食器として使われたとみられる。また、壺Gは城内で4点、国府付属寺院で1点と少なく、主として国府域での儀式・行事用として使われた可能性を考えておきたい。さらに、城内では第Ⅲ期に政庁・曹司とも硯の出土量が急増する。特に政庁は曹司に較べて出土数が突出して多い。これは、征夷が中止し鎮守府が胆沢城に移った後は、国府として城内や城外の官衙施設が充実するのに伴い、文書作成実務が飛躍的に増大したことを示すものと考えられる。

註

註1 ミガキ須恵器、須恵器壺G、大戸産須恵器は報告書からカウントしたが、掲載にあたっての基準がないため、報告書によって取り扱いが異なる。また、今回は土器の観察を行っておらず、単位面積あたりの比較も行っていない。こうした点は、今後の検討課題である。

註2 報告書に掲載された遺物をカウントしているが、掲載に対する統一基準がないため、報告書によって取り扱いが異なる。搬入品であり、点数が少ないとからできるだけ図化することが望ましい。また、物流を具体的に示す土器なので、今後は胎土分析を含めた產地同定も必要であろう。

註3 多賀城周辺の鉄鉢の出土例としては、ほかに今回の検討から外した高崎遺跡SD1130・1150溝跡（多賀城市教委1999a）などがあげられる。

註4 陸奥・出羽両国の出土例から壺Gの用途を考えると、陸奥国府の41例を除くと東山官衙遺跡に1例、壇の越遺跡に2例、伊治城跡に1例、秋田城跡に2例、払田柵跡に3例のみで、城柵数に較べて出土例・数ともに少ない。多賀城以外の城柵にも多数の兵士が常駐したことは文献に記され、発掘踏査でも兵士の宿舎とみられる堅穴住居が城柵内部から多数検出されている。こうしたことから、兵士の携帯水筒説は考えにくい。仏具花瓶説も国分寺や国分尼寺、国府付属寺院（多賀城庵寺）などの寺院跡からの出土がきわめて少ないことから、こちらも無理であろう。一方、堅魚の煮汁運搬容器説は、固体化した煮汁の方が運搬上・保存上優れており、壺Gに入れて運搬するのは不合理と指摘（山中1997）されているため、いずれの説も成立しないと考えられる。

註5 古代東北最大の窯跡群は、多賀城や陸奥国分寺・国分尼寺などに瓦や須恵器を供給した台原・小田原窯跡群である。大戸窯跡群はこれに次ぐ規模と考えられるが、台原・小田原窯跡群と較べて遺構の保存状況がよいこと、継続期間が長く生産地編年が行えたこと、製品の一部は国府多賀城や鎮守府胆沢城まで供給されており、古代陸奥国内の流通の一端を具体的に考えることが可能となったことなどから、学術的価値は極めて高いといえる。今後も、多方面からの継続的な調査・研究が必要である。

註6 本報告書と大戸窯跡の報告書では、器種名が一致していないものがあり、その場合は本報告書の名称に合わせている。それらの対応関係は以下のとおりである（カッコ内は大戸報告書の器種名）。

深坪（高台塊）、双耳环（双耳塊）、高台盤（盤）、双耳壺（双耳瓶）、長頸壺（長頸瓶）、広口壺（広口瓶）

註7 大戸産須恵器の同定は、会津若松市教育委員会提供による平箱2箱分の大戸窯出土品サンプルと照合し

ながら行った。また、図版737の窯跡出土資料はその一部を掲載している。サンプルの提供および図版への掲載に関しては、会津若松教育委員会から配慮いただいた。

註8 分析の対象とした八幡・伏石・多賀前地区については、当教委による1996年以降刊行の発掘調査報告書において図示遺物の觀察表に「大戸産」等と記している。

註9 報告書に掲載された遺物をカウントしているが、当教委の場合、大戸産須恵器の報告は1996年以降刊行されたものに限られる。また、多賀城内や多賀城市教育委員会による山王・市川橋遺跡調査でも大戸産須恵器は出土しているが、掲載に対する統一基準がないため、機関によって取り扱いが異なる。陸奥国内の物流を具体的に示す土器なので、今後は図化や数値化の基準を設けて統一的に報告する必要がある。

また、須恵器類の底部破片に占める大戸産の割合は、北3西4区と北3西5区についても報告書からカウントを試みたが、掲載遺物に偏りがあるて在地産より大戸産が多くたため、文中に値を示さなかった。

註10 飯村均氏は、9～10世紀の広域流通須恵器窯である大戸窯と五所川原窯の製品のうち独特の形をした長頸壺や甕が遠隔地まで運ばれるのは、都市・平泉に共通する「袋物指向」であり、そうした価値観が古代後期には成立していたと述べている（飯村1999）。

註11 把手付中空甕と高杯形甕は特殊甕に分類されている（巽2004）。

註12 碓沢B16窯跡の年代観は村田1992による。

註13 二面甕・円形甕・楕円甕は破片の場合、風字甕との区別が難しい。このため、二面甕・円形甕・楕円甕は風字甕に含めて検討している。

註14 政府第IV期の年代は、再検討の結果、869年～11世紀前半に改められた（多賀研2010）。

註15 ここでは単独の場合、腰帶具と馬具いずれに伴うもののか区別できない鉄具や鉈尾についてもカウントして検討を行った。

第XV章　まとめ

1. 山王遺跡・市川橋遺跡は宮城県仙台市の中心部から北東へ約10km、多賀城市南宮・市川・浮島・高崎にあり、標高約2～3mの自然堤防から後背湿地にかけて立地する。

2. 山王・市川橋遺跡の範囲は東西2,300m、南北280～1,660mで、本書はその北部中央に位置する八幡・伏石地区の発掘調査報告書である。

3. 遺構確認面は、第III層（古墳時代中期以降）と第V層（古墳時代前期）である。

4. 発見した遺構は、第III層が道路跡6条、整地層8面、区画溝跡37条（掘直しを含む）、堀跡1条、溝跡141条（掘直しを含む）、材木堆積15条、掘立柱堆積8条、掘立柱建物跡189棟、周溝をもつ建物跡2棟、竪穴住居跡128棟、竪穴建物跡1棟、円形周溝跡5基、井戸跡20基、土器埋設遺構2基、土坑250基、烟跡24面、河川跡4条など、第V層は水田跡1面である。

〈古墳時代前期〉

5. 古墳時代前期の水田跡は、直交する大畦畔を小畦畔で細分した区画の面積が30m²以下の小区画水田である。

〈古墳時代中期〉

6. 古墳時代中期の遺構には、掘立柱堆積1条や区画溝跡2条（掘直しを含む）、竪穴住居跡4棟などがある。同時期の竪穴住居跡はこれまでの調査を含めて28棟になる。いずれもカマドは認められない。また、その中には初現的かつ最北端の竪穴鍛冶遺構が含まれる。これらは北辺が河川に面し、

東辺はそれに接続する大溝と材木塀で画された。さらに、河川に形成された遺物包含層より骨角製の刀装具や琴柱形角製品といった威信材が出土したことから豪族居館と考えられる。居館の年代は5世紀前葉で、洪水で廃絶したと考えられる。

〈古墳時代後期〉

7. 古墳時代後期の遺構としては、区画溝跡4条、材木塀跡2条、竪穴住居跡45棟、井戸跡1基、土坑3基などを確認した。年代は6世紀末～7世紀中頃で、集落は八幡・伏石地区から東の館前地区、北の中谷地地区にかけて営まれた。

中心となる八幡・伏石地区は材木塀と溝で囲まれ、2時期の変遷がある（区画A→B）。両者は、方形基調で東西129m・南北116mの区画Aから、弯曲した不整形で東西201m・南北143m以上の区画Bに拡大する。塀の内部は建替えを含めて竪穴住居が165棟以上であること、威信材である太刀や仮具の柄香炉が出土し、一般集落と較べて在地産須恵器の量が突出して多いことなどから、七北田川下流域を統括した首長層が居住した拠点集落と考えられる。

8. 6世紀末～7世紀中頃の拠点集落は、自然堤防末端の河川合流点につくられており、5世紀前葉の豪族居館とは河川をはさんだ対岸に位置する。これは、双方の集落とも領域支配や他地域との交流、物資運搬に河川を活用したためと考えられる。

9. 拠点集落は水田が未確認であるものの、河川跡から多種多様な木製農具が出土したことから、主たる生業は稲作であり、農閑期に漁撈や狩猟を行っていたと考えられる。

10. 拠点集落東側の丘陵では、墳墓や須恵器窯が確認された。後者は生産器種が高环や脚付塊、貯蔵具が多く、环類が非常に少ないとから、葬送儀礼と直結した操業であったと考えられる。また、河川跡からは木器の未製品や骨角製品が多く出土した。こうしたことから、拠点集落の首長層は様々な手工業生産や技術を掌握し、周辺の集落や墳墓に向けて製品を供給したり、技術者を派遣または技術を伝習させて領域支配を維持したと考えられる。

〈飛鳥時代～奈良時代前半〉

11. これまでの調査成果を含めた区画I期の主な遺構は、区画溝跡3条（3）（註1）、材木塀跡8条（4）、掘立柱建物跡32棟（9）、竪穴住居跡6棟（4）、井戸跡2基（2）などである（カッコ内は今回の検出数）。

八幡・伏石地区の中央から東側に材木塀と溝で区画された一画（区画1）があり、その西外にも施設がつくられた。材木塀で囲まれた範囲は東西190m、南北235mほどの南北に長い方形（平行四辺形）で、その内部には掘立柱建物跡22棟、竪穴住居跡2棟、井戸跡1基などが認められる。こうした平面形や内部施設が掘立柱建物が主体となる点は、6世紀末～7世紀中頃の拠点集落と明確に異なる。

〈奈良時代後半〉

12. これまでの調査成果を含めた区画II期の主な遺構は、東西道路跡1条、区画溝跡4条（2）、材木塀跡6条（3）、掘立柱建物跡43棟（18）、掘立柱塀跡1条（1）、竪穴住居跡17棟（4）、井戸跡9基（4）、土坑7基（4）、烟跡6面などである（カッコ内は今回の検出数）。

八幡・伏石地区には、堀や溝で囲まれた区画が道路の北に2つ、南に1つ以上、さらにそれらの西外にも施設が認められることから、東西道路を基準として両側に区画や施設がつくられた。その一方、Ⅰ期に較べて区画個々の規模は小さくなる。最も残りのよい区画2は、南北に長い平行四辺形で、材木堀で囲まれた範囲は南北120m以上、東西71mあり、その内部には掘立柱建物跡25棟、竪穴住居跡3棟、井戸跡4基などが認められる。

13. 道路は、古墳時代後期の河川跡の窪地を利用して東西に延びて区画2の南西から区画3・4の間を通っており、これを基準として区画が設けられたと考えられる。また、遺構の分布状況から区画2の西側で北に折れて多賀城外郭西門へ向かう道が想定可能で、その位置は後世の西5道路とほぼ同じである。

(平安時代)

14. 方格地割施工後の遺構はⅠ期：8世紀末～9世紀前葉、Ⅱ期：9世紀中葉～10世紀前半、Ⅲ期：10世紀後半の3時期に大別できる。今回は8街区について調査を行った。
15. これまでの調査成果を含めた方格地割Ⅰ期の主な遺構は、東西道路跡2条(2)、南北道路跡2条(2)、区画溝跡8条(3)、掘立柱堀跡2条(2)、掘立柱建物跡64棟(21)、竪穴住居跡10棟(8)、井戸跡9基(5)などである(カッコ内は今回の検出数)。本段階では、北3道路や西6a道路はつくられていない。
16. 方格地割Ⅰ期から認められる北2a道路は、おむね一町ごとに施工された他の道路と異なり、北2道路との間隔が非常に狭い。これは、奈良時代後半の東西道路の位置と機能を踏襲したためであり、地割Ⅱ期まで継続した。
17. 方格地割Ⅱ期は、出土遺物やイベント堆積物の検討から2期に分けられる(Ⅱ-A期：9世紀中葉、Ⅱ-B期：9世紀後葉～10世紀前半)。Ⅱ-B期は貞觀11年(869)に発生した大地震からの災害復旧であった可能性が考えられる。また、Ⅱ-B期は道路や区画施設、一部の建物では古段階と新段階に分けられたが、多くの場合、明確な対応関係は確認できなかった。今後の資料の増加や新たな見方によって両者への仕分けができる点で、新段階をⅡ-C期としたい。
18. これまでの調査成果を含めた方格地割Ⅱ-A期の主な遺構は、東西道路跡3条(3)、南北道路跡5条(3)、区画溝跡9条(5)、掘立柱堀跡1条(1)、掘立柱建物跡125棟(35)、竪穴住居跡2棟(0)、竪穴建物跡3棟(1)、井戸跡7基(2)、烟跡5面(2)などである(カッコ内は今回の検出数)。本期は、新たに北3道路や西6a道路が施工されて八幡・伏石地区的街区が確定する。
- 本期は、前代に較べて掘立柱建物が増加するが、その密度は北2西4・5区、北3西4・5区で高いのに対し、北3西6区は低く、前代から継続する街区と新たに縁辺部で成立した街区とでは、利用のあり方に違いが認められる。また、北2西4区は出土木簡の内容や大戸産須恵器の出土数が多いことなどから、会津郡の出先機関が置かれた可能性が高い。
19. 過去の調査成果を含めた方格地割Ⅱ-B期の主な遺構は、東西道路跡3条(3)、南北道路跡5条(3)、区画溝跡12条(6)、掘立柱建物跡107棟(43)、竪穴住居跡4棟(4)、竪穴建物跡1棟(1)、井戸跡10基(3)、烟跡10面(4)などである(カッコ内は今回の検出数)。

掘立柱建物はⅡ-A期とほぼ同数であるが、前代に較べて柱筋を揃えたり、床面積が広くなる傾向が認められ、廂もしくは縁を持つ建物が増加する。その一方で、本段階で西6a道路北半が廃絶したとみられ、北2西4・5区では建物が減少することから、末端部の道路や街区の一部で衰退傾向が認められる。

20. 過去の調査成果を含めた方格地割Ⅲ期の主な遺構は、東西道路跡1条(1)、南北道路跡3条(3)、区画溝跡1条(1)、掘立柱建物跡4棟(4)、井戸跡2基(1)、烟跡1面(1)などである(カッコ内は今回の検出数)。

北2a道路や北3道路、北2道路以北の西3・3a・5道路は廃絶し、西6a道路は本期で廃絶する。建物数が急減し、北3西6区では前代に居住域だった場所に畠がつくられる。こうした道路や街区の衰退傾向は、特に北2道路以北で顕著である。その一方で、西4道路沿いや北3・西5・6区では建物や井戸が認められており、場所を限定した土地利用が行われた。そうした場を結ぶ道路として北2以南の道路は存続したとみられる。

〈多賀城外における方格地割の整備〉

21. 多賀城外の方格地割は、東西大路・南北大路の造営、大路を基準とした方格地割の施工、縁辺部における斜方向や屈曲道路の造営を経て整備され、その後縁辺部から道路や建物などの諸施設の廃絶が顕著となるという4つの段階に大別でき、それぞれの年代は8世紀後半、8世紀末～9世紀前葉(方格地割Ⅰ期)、9世紀中葉～10世紀前半(方格地割Ⅱ期)、10世紀後半(方格地割Ⅲ期)と考えられる。

22. 方格地割は、東西大路を中心として段階的に北1→北2道路、南1→南2道路と段階的に南北へ街区を拡大したと考えられてきたが、今回の検討によって、南北大路から西9道路までの北2道路と南2道路に挟まれた範囲については、8世紀末から9世紀前葉に一斉に施工された可能性が高まった。

23. 多賀城外における方格地割は、Ⅱ-A期(9世紀中葉)に完成する。建物は最も数が多く、その方向は真北を指向する。また、官衙的器種や硯が種類・量ともにピークを迎えている。多賀城も第Ⅲ期(780～869年)に全域が曹司城として使われ、建物数が爆発的に急増する(進藤2010)。こうしたことから、多賀城と場外の方格街区の整備(=官人層とそれを支えた人々の集住)は、一体的かつ計画的に進められたと考えられる。

〈多賀城外における飛鳥～平安時代の土地利用〉

24. 飛鳥時代～奈良時代は、周囲より低い部分を道路や区画溝、畠などの耕作地として利用した。これは、古墳時代後期の河川跡が埋没したのち、窪んだ部分を居住域以外の施設用地としたためであり、同様の傾向は方格地割施工後も認められる。したがって、古墳時代後期の微地形環境が、奈良時代や平安時代の街区の形成や場の使われ方に直接影響を与えたと考えられる。

〈陸奥国府における官衙的器種と硯〉

25. 陸奥国府周辺で出土する官衙的器種のうち須恵器壺Gやミガキ須恵器の生産年代は、前者が8世紀後葉～9世紀初頭で、後者は8世紀末～9世紀中葉とみられる。大戸産須恵器もまた8世紀末～

9世紀中葉に搬入のピークを迎えており、3者はほぼ同時期に陸奥国府へもたらされたと考えられる。

8世紀末頃、国府周辺ではロクロ成形土師器が急速に普及して、短期間のうちに伝統的な非ロクロ成形土師器を駆逐した。また、官窯では定形硯の生産が風字硯にシフトしている。9世紀後半に入ると、須恵器や土師器にみられた多様な官衙的器種は一部を除いて消滅し、単純化された器種構成と同一規格に基づいた大量生産に拍車がかかり、それと表裏をなすように、東海産を中心とした施釉陶器の搬入がピークを迎える。硯生産もまた風字硯のみとなった。こうしたことから、陸奥国府周辺では9世紀中頃を境に土器様式が変化しており、古代前期と古代後期に大別できる。

註

註1 堀や区画溝、あるいはその片方で囲まれた区画は、調査年度によって遺構Noが異なる。このため、方形区画については各辺1条ずつとカウントしている。

掲載図版出典

第1分冊

巻頭図版2：米軍撮影R365-7

図版1：松本ほか2005、仙台市教委2010bを再トレース

図版2：仙台市教委2010bの「仙台平野北部微地形環境想定変遷図」の平安時代を再トレースして加筆

第2分冊

図版286：多賀城市埋蔵文化財調査センター1992bを再トレース

第3分冊

図版638～639：宮城県教委1974・1994b・1994d・1998・2001a、本書、仙台市教委2004、多賀城市教委1981・1992bから作成

図版640：本書から作成

図版641：多賀城市教委1992bから作成

図版642・643：宮城県教委1994bから作成

図版644：宮城県教委1998、多賀城市教委2006dから作成

図版645：宮城県教委2001a、多賀城市教委2006dから作成

図版646：仙台市教委2004から作成

図版647：仙台市教委2004から作成

図版648：宮城県教委1974、仙台市教委2004から作成

図版649：仙台市教委2012から作成

図版650：宮城県教委2001b、本書、仙台市教委2004から作成

図版651：宮城県教委2001b・2009、本書から作成

図版652・653：宮城県教委2001bから作成

図版658：宮城県教委1994c・1997、本書から作成

図版659～661：宮城県教委2009から作成

図版662：宮城県教委1980・1982a・1985・1994c・1997・2001a・2016b、本書、多賀研1985、仙台市教委2004から作成

図版666：多賀城市教委2007c・2011b・cから作成

図版667：宮城県教委1990、利府町教委1988から作成

図版671：多賀城市教委1991bから作成

図版672：宮城県教委1994c・1997から作成

図版674：多賀城市教委2003aから作成

図版675：多賀城市教委1990a・2003aから作成

図版676：多賀研1992・1995から作成

図版677：多賀研1995・1996から作成

図版678：宮城県教委1996a、多賀城市教委1991aから作成

図版680：多賀研1992から作成

図版681：多賀研1982aから作成

図版682：宮城県教委2001b・2003b、多賀研2005から作成

図版684：多賀城市教委1991b・1992bから作成

図版687：宮城県教委1995・2014、本書、多賀城市教委1997dから作成

図版692：本書、仙台市教委2004・2012、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2002、郡山市教委1997・1999、日本埋蔵文化財研究会1998、千葉県教育振興財團2013、とちぎ生涯学習文化財団2007、野島2009、亀田2016などから作成

図版693：宮城県教委1997・本書から作成

図版694：本書、郡山市教委1997・1999、表郷村教育委員会1997、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2002、福島県文化振興事業団1998などから作成

図版697：宮城県教委1994c・1997・2009、本書から作成

図版698：宮城県教委1997・2009、本書から作成

図版711：松本ほか2005、仙台市教委2010bに加筆

図版712・713：仙台市教委2010bから作成

図版714：宮城県教委1994d・1998、多賀城市教委2010cから作成

図版715：宮城県教委1998、多賀城市教委1990b・2006e、多賀城市史1991から作成

図版716：松本ほか2005、仙台市教委2010bに加筆

図版717：本書、多賀城市史1991、仙台市教委2004・2012から作成

図版718：宮城県教委1994bから作成

図版719：松本ほか2005、仙台市教委2010bに加筆

図版720：宮城県教委2001a・bから作成

図版721：宮城県教委2001a・b、本書から作成

図版722：宮城県教委1992・1997・2001a・b・2009、多賀城市教委2011bから作成

図版723：仙台市教委2010bから作成

図版727：齋藤2016aに加筆

図版731：宮城県教委1996a・1997・2001a・2009、本書、多賀研1977・1995・2000・2001・2008、多賀城市教委1990a・2003a・2008bから作成

図版734：宮城県教委1982d・2001a・2009、本書、多賀研1993・2001、多賀城市教委1990a・d・2003a・2004d・2005b・2010dから作成

図版735・736：会津若松市教委1984・1994から作成

- 図版739：宮城県教委1996a・1997、本書から作成
- 図版740：多賀研1989に加筆
- 図版741：宮城県教委1987・1982b・1996a、本書、多賀研1973・1974・1996・1978・1979・1980a・1981・1989・1993・1996・2001・2003a・2008・2011b、仙台市教委1980・1983b、多賀城市教委1990a・1991b・1994a・2001a・2004b・2011c・2011d、利府町教委2011、色麻町教委1993、松山町教委1983から作成
- 図版742：宮城県教委1996a・2014、多賀研1972・1974・1979・1980・1981・1982a・1997・1999から作成
- 図版743：宮城県教委2016a、多賀研1980c、仙台市教委1982a、2010c、白石市教委2009、築館町教委1994、山元町教委2016、加美町教委2005、利府町教委2004、古窯研1972から作成

- 図版747：宮城県教委1996a、多賀研1996、多賀城市教委1909d・1991b・2003a・2004a・2005a
- 図版748：宮城県教委1996a・1997・2001a・2009、多賀研1975・1978・2002、多賀城市教委1991b・2004bから作成
- ※本書で新たに作成した図版を除く
- ※報告書の場合、教育委員会は「教委」と略した

引用・参考文献（五十音順）

- 相沢清利 1999『東北地方続縄文文化小考』『宮城考古学』第1号 宮城県考古学会 pp.55~65
- 会津若松市教育委員会 1984『南原埋蔵文化財発掘調査概報』
- 会津若松市教育委員会 1994『会津・大戸窯（遺物編）』会津若松市文化財調査報告書第37号
- 会津若松市教育委員会 1998『会津大戸窯保存管理計画書』会津若松市文化財調査報告書第59号
- 青森県史編さん古代部会 2001『青森県史 資料編 古代1 文献史料』
- 青山博樹 2010『古墳時代前期の土器編年―仙台平野とその周辺―』『北社』 pp.17~36
- 安達訓仁 2016『発掘調査成果からみた伊治城跡と古代栗原郡』『栗原市伊治城跡から読み解く東北古代史』東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム資料 pp.9~46
- 吾妻俊典 2004『多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代』『宮城考古学』第6号 宮城県考古学会 pp.187~196
- 吾妻俊典 2005『奈良時代における多賀城の土器』『古代の土器研究 聖武朝の土器様式』古代の土器研究会第8回シンポジウム pp.84~99
- 阿部義平 1990『宮殿と豪族居館』『古墳時代の研究』第2巻 集落と豪族居館 雄山閣 pp.115~131
- 阿部義平 1999『蝦夷と倭人』シリーズ日本のなかの考古学 青木書店
- 阿部義平 2006『茨城県常総市国生本屋敷発跡発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第129集
- 安倍辰夫・平川南編 1989『多賀城碑―その謎を解く―』 雄山閣
- 網 伸也 1999『平安京の造営計画とその実態』『考古学雑誌』第84巻第3号 日本考古学会（網伸也2011『平安京造営と古代律令国家』塙書房所収）
- 飯島義雄 1998『古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義』『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 pp.65~78
- 飯島義雄 2008『宮城県仙台平野における古墳時代前期の「周溝をもつ建物」の認識とその意義』『考古・民族・歴史学論叢』六一書房 pp.419~432
- 飯島義雄 2014『所謂「三和工業団地」遺跡型』の「周溝をもつ建物」の構造』『研究紀要』22 群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.251~267
- 飯村 均 1999『東国の大やきもの』『東洋陶磁学会報』第39号 東洋陶磁学会
- 飯村 均 2001『やきものから見える「価値観」』『中世土器研究論集』 真陽社

- 飯村 均 2005『律令国家の対蝦夷政策 相馬の製鉄遺跡群』遺跡を学ぶ021 新泉社
- 家原圭太 2012『平城京における宅地の構造・分布・変遷』『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会 pp.157~192
- 家原圭太 2013『多賀城と古代都城』『宮城考古学』第15号 宮城県考古学会 pp.173~190
- 家原圭太 2016『古代都城条坊制と地方官衙の方形街区』『日本考古学』第41号 pp.17~35
- 生田和宏 2001『市川橋遺跡高平地区出土の墨書き器』『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第60集 pp.219~236
- 生田和宏 2003『城柵官衙遺跡における陶瓦の様相—多賀城を中心として—』『古代の陶瓦をめぐる諸問題』奈良文化財研究所 pp.65~96
- 石黒伸一朗 1988『仙台市東光寺出土の板碑と七北田川下流の板碑概観』『東光寺遺跡』仙台市文化財調査報告書第112集 pp.110~137
- 石毛彩子 2007『古代豪族居宅の構造—官衙・集落との比較から』『古代豪族居宅の構造と機能』奈良文化財研究所 pp.305 ~333
- 石巻市教育委員会 1988『五松山洞窟遺跡』石巻市文化財調査報告書第3集
- 市原市文化財センター 1986『潤井戸西山遺跡』
- 伊藤晶文 2006『仙台平野における歴史時代の海岸線変化』『鹿児島大学教育学部紀要 自然科学編』pp.1~8
- 伊藤一義 2000『鎌倉の御家人たち』『仙台市史 通史編2—古代中世—』pp.214~236
- 今泉隆雄 1992『律令国家とエミシ』『新版古代の日本』第9巻 東北・北海道 角川書店 pp.163~198
- 今泉隆雄・藤沢 敦 2006『古代史の舞台 東北』『列島の古代史1』岩波書店 pp.63~110
- 今泉隆雄・辻 秀人・熊谷公男 2000『陸奥国と仙台平野』『仙台市史 通史編2—古代中世—』pp.66~138
- 今泉隆雄 2005『古代国家と郡山遺跡』『郡山遺跡 総括編(1)』仙台市文化財調査報告書第283集 pp.284~318
- 今泉隆雄 2015『古代国家の東北辺境支配』日本史学研究叢書 吉川弘文館
- 入間田宣夫・大石直正編 1992『よみがえる中世7—みちのくの都 多賀城・松島—』平凡社
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集
- 岩沼市史編纂委員会 2015『資料編II—古代・中世—』岩沼市史第5巻
- 植野浩三 1991『初期須恵器窯の系譜について—大連寺窯跡を中心として—』『文化財学報』第9集 pp.25~35
- 氏家和典 1957『東北土師器の形式分類とその編年』『歴史』第14輯 東北史学会 pp.1~14
- 内山純蔵 2007『禪文の動物考古学—西日本の低湿地遺跡から見えてきた生活像』
- 内山敏行 1998『関東地域の古墳時代の竪穴鍛冶遺構』『新郊古墳群・新郊遺跡・下り古墳』栃木県埋蔵文化財調査報告第214集 財団法人栃木県文化振興事業団 pp.518~528
- 江口 桂編 2014『古代官衙』考古調査ハンドブック11 ニューサイエンス社
- 近江俊秀 2015『古代都城の造営と都市計画』吉川弘文館
- 大塚昌彦 1991『古墳時代前期居宅跡の一例』『群馬考古学手帳』Vol.2 群馬土器親会 pp.21~32
- 小笠原好彦・阿部義平 1991『豪族居館研究と課題』『古代の豪族居館』季刊考古学第36号 雄山閣 pp.14~17
- 岡村道雄 1996『貝塚と骨角器』『日本の美術』第356号 至文堂
- 小田裕樹 2016『古代宮都とその周辺の土器様相—「律令的土器様式」の再検討—』『官衙・集落と土器2—宮都・官衙・集落と土器—』奈良文化財研究所研究報告第18冊 pp.159~201
- 女川町教育委員会 2017『崎山遺跡』女川町文化財調査報告書第7集
- 表郷村教育委員会 1997『建鉢山Ⅱ—三森遺跡の発掘調査—』
- 大冢久雄 1956『歐州經濟史』岩波書店

- 大泰司紀之 1980「遺跡出土ニホンジカの下頸骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13
- 大泰司紀之 1998『哺乳類の生態学②形態』東京大学出版会
- 落合 明・田中 克 1986『新版魚類学』(下) 恒星社厚生閣
- 及川良彦 1998「関東地方の低地遺跡の再検討」『青山考古』第15号 青山考古学会 pp.1~34
- 及川良彦 1999「関東地方の低地遺跡の再検討(2)」『青山考古』第16号 青山考古学会 pp.35~66
- 及川良彦 2001「関東地方の低地遺跡の再検討(3)」『青山考古』第18号 青山考古学会 pp.85~114
- 垣内和孝 2002「陸奥国安積郡小川郷と東山田遺跡」『福島考古』第43号 福島県考古学会
- 角田市教育委員会 1997a『往住遺跡』角田市文化財調査報告書第19集
- 角田市教育委員会 1997b『角田郡山遺跡第10次調査』『角田郡山遺跡V』角田市文化財調査報告書第20集 pp.7~10
- 角田市教育委員会 2002『角田郡山遺跡第27次調査』『角田郡山遺跡Xほか』角田市文化財調査報告書第26集 pp.1~25
- 春日真実 2001「横瓶の製作方法」『北陸古代土器研究』第9号 pp.53~62
- 加藤 孝・野崎 準 1972「台の原・小田原窯跡群の古窯跡分布とその問題点」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第4号 pp.53~66
- 神奈川県教育委員会 1976『三浦市江奈横穴群』神奈川県文化財発掘調査報告10
- 金子裕之編 1988『律令期祭祀遺物集成』昭和61~63年度文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書Ⅱ
- 河北地区教育委員会 1972『和泉沢古墳群』河北地区文化財調査報告書第1集
- 加美町教育委員会 2004『壇の越遺跡Ⅶ』加美町文化財調査報告書第3集
- 加美町教育委員会 2005『壇の越遺跡Ⅷ』加美町文化財調査報告書第5集
- 加美町教育委員会 2008『壇の越遺跡 XIV』加美町文化財調査報告書第13集
- 加美町教育委員会 2010『壇の越遺跡19—考察編—』加美町文化財調査報告書第18集
- 神谷佳明 2016『竈形土製品再考』『研究紀要34』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.101~120
- 亀田修一 2003「陸奥の渡来人(予察)」「古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開」平成12年度~平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(1)研究成果報告書専修大学文学部 pp.55~65
- 亀田修一 2016「4~5世紀日本列島の鉄器生産集落—韓半島との関わりを中心に—」『日韓4~5世紀の土器・鉄器生産と集落』日韓交渉の考古学—古墳時代—研究会 pp.283~332
- 川西宏幸 1978『PJ簡埴輪論』『考古学雑誌』第64巻第2号
- 鬼頭清明 1986「国司館について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集 pp.299~312
- 菊池芳郎 2001「東北地方の古墳時代集落—その構造と特質—」『考古学研究』第47巻4号 考古学研究会 pp.55~75
- 菊地芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
- 菊地芳朗 2015「前方後円墳の終焉と終末期古墳」『倭国の形成と東北』吉川弘文館 pp.164~194
- 北東北古代集落遺跡研究会 2014「9~11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実際的研究」
- 北野博司 2006『硯を研ぐ』『陶磁器の社会史』柏書房 pp.334~345
- 草野潤平 2013「古墳周縁域の交流について—太平洋側の動向と山形県域の特質—」『年報 平成24年度』公益財團法人山形県埋蔵文化財センター pp.66~71
- 工藤信一郎 2010「長町駅東遺跡・西台畠遺跡の集落について」『宮城考古学』第12号 pp.39~58
- 熊谷公男 1992「古代東北の豪族」『新版古代の日本』第9巻 東北・北海道 角川書店 pp.261~288
- 熊谷公男 2000a「養老四年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」『国立歴史民俗博物館研究報告』第84集 pp.61~90
- 熊谷公男 2000b「第Ⅲ章 律令社会と変貌」『仙台市史 通史編2—古代中世—』 pp.140~174

- 熊谷公男 2004a『蝦夷の地と古代国家』日本史リブレット11 山川出版社
- 熊谷公男 2004b『古代の蝦夷と城柵』吉川弘文館 歴史文化ライブラリー
- 熊谷公男 2007a『多賀城創建再考』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 pp.418～442
- 熊谷公男 2007b『城柵と城司—最近の「玉造等諸柵」に関する研究を手がかりとして—』『東北学院大学東北文化研究所』第39号 pp.1～34
- 熊谷公男 2015『蝦夷支配体制の強化と戦乱の時代への序曲』『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館 pp.218～250
- 栗原市教育委員会 2000『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第13集
- 栗原市教育委員会 2014『城下遺跡ほか』栗原市文化財調査報告書第18集
- 黒崎 直 1984『平城京における宅地の構造』『日本古代の都城と国家』培書房 pp.9～50
- 黒崎 直 1988『京におけるコ字型建物配置遺構の性格』『考古学叢考 中巻』吉川弘文館
- 桑原・高野・千葉 1993『掘り出された近世の様子』『多賀城市史』第2巻 近世・近現代 pp.212～238
- 桑原滋郎・高野芳宏・滝川ちかこ・千葉孝弥・菅原弘樹 2000『多賀城の世界一発掘調査40年—』ヨークベニマル
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『三ツ寺1遺跡 古墳時代居館の調査』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『土師器製作技法について』『白倉下原・天狗向原遺跡IV』群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告第221集 pp.193～197
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000『荒砥荒子遺跡 古墳時代中期の居館』群馬県埋蔵文化財調査報告第265集
- 群馬県立歴史博物館 2001『古代のみちーたんけん！東山道駅路一』
- 小池 寛 1996『須恵器・椀に関する基礎研究—生産地を中心にして—』『京都府埋蔵文化財論集』第3集 pp.251～260
- 小池裕子・大泰司紀之 1984『遺跡出土ニホンシカの齡構成からみた狩猟圧の時代変化』『古文化財の自然科学的研究』
- 小池裕子・林 良博 1984『遺跡出土ニホンシカの齡定義について』『古文化財の自然科学的研究』
- 郡山市教育委員会 1987『郡山東部7』
- 郡山市教育委員会 1988『郡山東部8』
- 郡山市教育委員会 1990『郡山東部10』
- 郡山市教育委員会 1999『清水内遺跡－7区調査報告』
- 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1997『清水内遺跡－5区調査報告』
- 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1999『清水内遺跡－6・8・9区調査報告－』
- 国立歴史民俗博物館 2007『企画展示 長岡京遷都－桓武と激動の時代－』
- 小林謙一 2004『腰金具・錢貨・印竜』『古代の官衙遺跡II 遺物・遺跡編』奈良文化財研究所 pp.90～94
- 小山正忠・竹原秀雄 1996『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 古窯跡研究会 1976『陸奥国官窯跡群II』研究報告第4冊
- 齋藤和機 2016a『交差点からみた多賀城の方格地割』『宮城考古学』第18号 宮城県考古学会 pp.95～110
- 齋藤和機 2016b『遺跡速報 宮城県山王遺跡八幡地区の調査概要』月刊考古学ジャーナルNo682 ニューサイエンス社 pp.32～34
- 齋藤英敏 2001『小区画水田・極小区画水田の構造—群馬の水田跡から見た古代東アジア』『研究紀要19』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.1～19
- 齋野裕彦 2000『富沢遺跡・山口遺跡の条里型土地割の復元とその成立要因』『仙台市富沢遺跡保存館研究報告』3 pp.27～40

- 坂野和信 2005「東國の古墳時代中期土器と韓半島系土器」『研究紀要』第20号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.77~102
- 坂 靖 2016『古墳時代の渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究』平成24年度~平成27年度科学研究費助成事業 基盤研究（C）研究成果報告書 奈良県立橿原考古学研究所
- 藏王町教育委員会 2005『都道跡ほか』藏王町文化財調査報告書第3集
- 藏王町教育委員会 2008『六角遺跡』藏王町文化財調査報告書第6集
- 藏王町教育委員会 2009『青竹遺跡』藏王町文化財調査報告書第9集
- 藏王町教育委員会 2011a『西浦B遺跡』藏王町文化財調査報告書第10集
- 藏王町教育委員会 2011b『窪田遺跡』藏王町文化財調査報告書第11集
- 藏王町教育委員会 2011c『十郎田遺跡1』藏王町文化財調査報告書第13集
- 櫻井友洋 2015「多賀城と城下の井戸」『宮城考古学』第17号 宮城考古学会 pp.117~134
- 酒井清治・伊藤博幸編 1995『須恵器集成図録』第4巻 東日本II 雄山閣
- 佐藤 隆 2007『7・8世紀陶邑編年の再構築と都城出土資料の様相』『財團法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥資料館 2005年度共同研究成果報告書』pp.293~321
- 佐藤敏幸 2007『宮城県北部・沿岸部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度~平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 pp.164~209
- 佐藤敏幸 2015『東北の城柵官衛と土器』『官衛・集落と土器1-宮都・官衛と土器-』奈良文化財研究所研究報告第15冊 pp.41~72
- 佐野五十三 1998『須恵器花瓶の成立』『静岡県考古学研究』30 静岡県考古学会
- 佐野五十三 1999『壺Gの成立と伝播』『静岡県考古学研究』31 静岡県考古学会 pp.99~111
- 塩川町教育委員会 1999『古屋敷遺跡 塩川西部地区遺跡発掘調査報告書4』福島県塩川町文化財調査報告第6集
- 色麻町教育委員会 1993『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集
- 七ヶ浜町教育委員会 2016『表浜貝塚』『七ヶ浜町震災復興事業関連遺跡調査報告書』七ヶ浜町文化財調査報告書第11集 pp.25~52
- 白河市教育委員会 2002『舟田中道遺跡II』白河市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 白根晴大・柳原敏昭 2000『第IV章 兵と歌枕』『仙台市史 通史編2-古代中世-』 pp.176~212
- 白石耕治 2000『陶邑窯跡における古墳時代の須恵器 6、7世紀を中心に』『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』第1分冊発表要旨 第1回東海土器研究会 pp.197~219
- 白石市教育委員会 2009『八幡坂遺跡ほか』白石市文化財調査報告書第34集
- 進藤秋輝 2010『古代東北統治の拠点・多賀城』遺跡を学ぶ066 新泉社
- 進藤秋輝編 2010『東北の古代遺跡 城柵・官衛と寺院』高志書院
- 菅原祥夫 2004『古墳時代の集落』『原始・古代日本の集落』山岸良二編 同成社 pp.148~168
- 菅原祥夫 2007『東北の豪族居宅』『古代豪族居宅の構造と機能』奈良文化財研究所 pp.27~64
- 菅原祥夫 2008『東北の豪族居宅(補遺)』『藏王東麓の郷土誌-中橋彰吾先生追悼論文集-』中橋彰吾先生追悼論文集刊行会 pp.139~148
- 菅原祥夫 2015『律令国家形成期の移民と集落』『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館 pp.64~86
- 杉本 宏 1987『飛鳥時代の陶窯一宇治隼り窯跡出土陶窯を中心として-』『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古学會 pp.129~156
- 柏山林継 1991「内裏塚古墳出土の鳴鐘」『宇麻貝多』第4号木更津古代史の会
- 杉山秀宏 2015『鉄鎌に伴う鹿角製装具及び鳴鐘について-金井東裏遺跡出土鉄鎌に伴う鹿角製装具検討-』『研究紀要

33』公益財団法人群馬県文化財調査事業団 pp.57~74

鈴木孝行 2006「多賀城外の方格地割」『第32回城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙検討会 pp.86~97

鈴木孝行 2010「多賀城方格地割の調査」『考古学ジャーナル』604 ニューサイエンス社 pp.14~18

鈴木拓也 1991「古代陸奥国の軍制」「歴史」第77輯

鈴木拓也 1998「9世紀陸奥国の軍制と支配構造」「古代東北の支配構造」

鈴木拓也 2008『蝦夷と東北戦争』吉川弘文館

鈴木拓也 2015「多賀城」「古代の都市と条里」吉川弘文館 pp.56~67

鈴木拓也 2016a「光仁・桓武朝の征夷」「三十八年戦争と蝦夷政策の転換」吉川弘文館 pp.9~56

鈴木拓也 2016b「征夷の終焉と蝦夷政策の転換」「三十八年戦争と蝦夷政策の転換」吉川弘文館 pp.61~86

鈴木琢郎 2010「多賀城の大路造営」『福大史学』第81号 福島大学史学会 pp.15~42

鈴木 雅 2010「十郎田遺跡の7世紀集落」『宮城考古学』第12号 pp.19~38

鈴木 雅 2016「律令国家形成期の陸奥国柴田・莉田地方—藏王町円田盆地遺跡群の検討を中心に—」『宮城考古学』第18号 pp.57~76

閑根章義 2014「古代陸奥国における陶器の受容と展開—城柵官衙遺跡を中心として—」『古代文化』第66巻第3号 pp.3~23

仙台市教育委員会 1980『桟江遺跡』仙台市文化財調査報告書第18集

仙台市教育委員会 1982a『堤町窯跡B地点』『仙台平野の遺跡群!』仙台市文化財調査報告書第37集 pp.3~24

仙台市教育委員会 1982b『栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第43集

仙台市教育委員会 1983a『郡山遺跡III』仙台市文化財調査報告書第46集

仙台市教育委員会 1983b『神明社窯跡』仙台市文化財調査報告書第54集

仙台市教育委員会 1984『郡山遺跡IV』仙台市文化財調査報告書第64集

仙台市教育委員会 1985『南小泉遺跡—第13次調査—』仙台市文化財調査報告書第81集

仙台市教育委員会 1987a『富沢』仙台市文化財調査報告書第98集

仙台市教育委員会 1987b『五本松窯跡』仙台市文化財調査報告書第99集

仙台市教育委員会 1990「南小泉遺跡第17次調査」「南小泉遺跡—第16~18次調査—」仙台市文化財調査報告書第140集 pp.92~168

仙台市教育委員会 1992『土手内』仙台市文化財調査報告書第165集

仙台市教育委員会 1993『大蓮寺窯跡—第2・3次調査—』仙台市文化財調査報告書第168集

仙台市教育委員会 1994『南小泉遺跡—第22・23次調査—』仙台市文化財調査報告書第192集

仙台市教育委員会 2004『鴻ノ巣遺跡—第7次調査—』仙台市文化財調査報告書第280集

仙台市教育委員会 2005a『洞ノ口遺跡—第1・2・4・5・7・10次調査—』仙台市文化財調査報告書第281集

仙台市教育委員会 2005b『郡山遺跡—総括編—』仙台市文化財調査報告書第283集

仙台市教育委員会 2007『長町駅東遺跡第4次調査』仙台市文化財調査報告書第315集

仙台市教育委員会 2008『長町駅東遺跡第1・2次調査』仙台市文化財調査報告書第324集

仙台市教育委員会 2009『長町駅東遺跡第3次調査』仙台市文化財調査報告書第340集

仙台市教育委員会 2010a『西台畠遺跡第1・2次調査』仙台市文化財調査報告書第359集

仙台市教育委員会 2010b『沼向遺跡第4~34次調査』仙台市文化財調査報告書第360集

仙台市教育委員会 2010c『与兵衛窯跡』仙台市文化財調査報告書第366集

- 仙台市教育委員会 2011『西台烟遺跡第3次調査』仙台市文化財調査報告書第388集
- 仙台市教育委員会 2012『鴻ノ果遺跡－第9次調査－』仙台市文化財調査報告書第400集
- 仙台市教育委員会 2013a『西台烟遺跡第4・5・7・9次調査』仙台市文化財調査報告書第411集
- 仙台市教育委員会 2014a『長町駅東遺跡第5・6・7・9次調査』仙台市文化財調査報告書第421集
- 仙台市教育委員会 2014b『長町駅東遺跡第10・11次調査』仙台市文化財調査報告書第422集
- 仙台市教育委員会 2014c『長町駅東遺跡第13次調査』仙台市文化財調査報告書第423集
- 仙台市教育委員会 2016a『西台烟遺跡第9次調査』仙台市文化財調査報告書第441集
- 仙台市教育委員会 2016b『郡山遺跡第243次調査 西台烟遺跡第11次調査』仙台市文化財調査報告書第442集
- 仙台市史編さん委員会 1995『仙台市史』特別編2 考古資料
- 多賀城跡調査研究所 1972『年報1971』
- 多賀城跡調査研究所 1973『年報1972』
- 多賀城跡調査研究所 1974『年報1973』
- 多賀城跡調査研究所 1975『年報1974』
- 多賀城跡調査研究所 1976『年報1975』
- 多賀城跡調査研究所 1977『年報1976』
- 多賀城跡調査研究所 1978『年報1977』
- 多賀城跡調査研究所 1979『年報1978』
- 多賀城跡調査研究所 1980a『多賀城跡－政府跡図録編一』
- 多賀城跡調査研究所 1980b『年報1979』
- 多賀城跡調査研究所 1980c『伊治城跡Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書第5冊
- 多賀城跡調査研究所 1981『年報1980』
- 多賀城跡調査研究所 1982a『多賀城跡－政府跡本文編一』
- 多賀城跡調査研究所 1982b『年報1981』
- 多賀城跡調査研究所 1983『年報1982』
- 多賀城跡調査研究所 1984『年報1983』
- 多賀城跡調査研究所 1985『年報1984』
- 多賀城跡調査研究所 1986『年報1985』
- 多賀城跡調査研究所 1987『年報1986』
- 多賀城跡調査研究所 1988『年報1987』
- 多賀城跡調査研究所 1989『年報1988』
- 多賀城跡調査研究所 1990『年報1989』
- 多賀城跡調査研究所 1991『年報1990』
- 多賀城跡調査研究所 1992『年報1991』
- 多賀城跡調査研究所 1993『年報1992』
- 多賀城跡調査研究所 1994『年報1993』
- 多賀城跡調査研究所 1995『年報1994』
- 多賀城跡調査研究所 1996『年報1995』

- 多賀城跡調査研究所 1997『年報1996』
- 多賀城跡調査研究所 1998『年報1997』
- 多賀城跡調査研究所 1999『年報1998』
- 多賀城跡調査研究所 2000『年報1999』
- 多賀城跡調査研究所 2001『年報2000』
- 多賀城跡調査研究所 2002『年報2001』
- 多賀城跡調査研究所 2003a『年報2002』
- 多賀城跡調査研究所 2003b『亀岡遺跡I』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第28冊
- 多賀城跡調査研究所 2004a『年報2003』
- 多賀城跡調査研究所 2004b『亀岡遺跡II』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第29冊
- 多賀城跡調査研究所 2005『年報2004』
- 多賀城跡調査研究所 2006『年報2005』
- 多賀城跡調査研究所 2007『年報2006』
- 多賀城跡調査研究所 2008『年報2007』
- 多賀城跡調査研究所 2009『年報2008』
- 多賀城跡調査研究所 2010a『多賀城跡 政府跡補遺編』
- 多賀城跡調査研究所 2010b『年報2009』
- 多賀城跡調査研究所 2011a『年報2010』
- 多賀城跡調査研究所 2011b『日の出山窯跡群III』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第36冊
- 多賀城跡調査研究所 2012『年報2011』
- 多賀城跡調査研究所 2013『年報2012』
- 多賀城跡調査研究所 2014『年報2013』
- 多賀城跡調査研究所 2015『年報2014』
- 多賀城跡調査研究所 2016『年報2015』
- 多賀城跡調査研究所 2017『年報2016』
- 多賀城市教育委員会 1980『館前遺跡』多賀城市文化財調査報告書第1集
- 多賀城市教育委員会 1981『山王・高崎遺跡発掘調査概報』多賀城市文化財調査報告書第2集
- 多賀城市教育委員会 1982『高崎・市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第3集
- 多賀城市教育委員会 1983『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第4集
- 多賀城市教育委員会 1984『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第5集
- 多賀城市教育委員会 1985『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第8集
- 多賀城市教育委員会 1986a『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第9集
- 多賀城市教育委員会 1986b『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第10集
- 多賀城市教育委員会 1987『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第13集
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1989『新田遺跡(第9次)』『年報3』多賀城市文化財調査報告書第20集 pp.10~13
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1990a『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第21集
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1990b『山王遺跡-第8次調査-』多賀城市文化財調査報告書第22集

- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1990c『新田遺跡－第4・11次調査－』多賀城市文化財調査報告書第23集
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1990d『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第24集
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1991a『山王遺跡－第9次調査－』多賀城市文化財調査報告書第26集
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1991b『山王遺跡－第10次調査概報－』多賀城市文化財調査報告書第27集
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1992a『山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第29集
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1992b『山王遺跡－第12次調査概報－』多賀城市文化財調査報告書第30集
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1993『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第34集
- 多賀城市教育委員会 1994『市川橋遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第35集
- 多賀城市教育委員会 1995a『高崎遺跡－第11次調査－』多賀城市文化財調査報告書第37集
- 多賀城市教育委員会 1995b『山王遺跡・市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第38集
- 多賀城市教育委員会 1995c『山王遺跡－第17次調査出土の漆紙文書－』多賀城市文化財調査報告書第39集
- 多賀城市教育委員会 1997a『市川橋遺跡－第19次調査－』多賀城市文化財調査報告書第41集
- 多賀城市教育委員会 1997b『新田遺跡－第15・17・18次調査－』多賀城市文化財調査報告書第43集
- 多賀城市教育委員会 1997c『市川橋遺跡－第18・21次調査－』多賀城市文化財調査報告書第44集
- 多賀城市教育委員会 1997d『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第45集
- 多賀城市教育委員会 1998『市川橋遺跡－第11次調査－』多賀城市文化財調査報告書第50集
- 多賀城市教育委員会 1999a『小沢原遺跡・高崎遺跡』多賀城市文化財調査報告書第54集
- 多賀城市教育委員会 1999b『市川橋遺跡－第23・24次調査－』多賀城市文化財調査報告書第55集
- 多賀城市教育委員会 1999c『高崎遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第56集
- 多賀城市教育委員会 2001a『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第60集
- 多賀城市教育委員会 2001b『高崎遺跡－第17次調査－』多賀城市文化財調査報告書第61集
- 多賀城市教育委員会 2002a『西沢遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第66集
- 多賀城市教育委員会 2002b『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査略報4－』多賀城市文化財調査報告書第67集
- 多賀城市教育委員会 2003a『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第70集
- 多賀城市教育委員会 2003b『矢作ヶ館跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第71集
- 多賀城市教育委員会 2003c『市川橋遺跡・高崎遺跡』多賀城市文化財調査報告書第72集
- 多賀城市教育委員会 2004a『市川橋遺跡－第34・35・37・38次調査－』多賀城市文化財調査報告書第74集
- 多賀城市教育委員会 2004b『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第75集
- 多賀城市教育委員会 2005a『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第76集
- 多賀城市教育委員会 2005b『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第77集
- 多賀城市教育委員会 2005c『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第78集
- 多賀城市教育委員会 2005d『市川橋遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第80集
- 多賀城市教育委員会 2006a『山王遺跡－第51・54・57次調査－』多賀城市文化財調査報告書第81集
- 多賀城市教育委員会 2006b『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第83集
- 多賀城市教育委員会 2006c『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第84集
- 多賀城市教育委員会 2006d『市川橋遺跡－縄文・弥生・古墳時代、中世以降の考察編1－』多賀城市文化財調査報告書第85集

- 多賀城市教育委員会 2006e『山王遺跡－第58次調査－』多賀城市文化財調査報告書第86集
- 多賀城市教育委員会 2007a『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第87集
- 多賀城市教育委員会 2007b『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第88集
- 多賀城市教育委員会 2007c『高崎遺跡－第56次調査－』多賀城市文化財調査報告書第89集
- 多賀城市教育委員会 2008a『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第90集
- 多賀城市教育委員会 2008b『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第91集
- 多賀城市教育委員会 2008c『小沢原遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第92集
- 多賀城市教育委員会 2008d『山王遺跡－第60・64次調査－』多賀城市文化財調査報告書第94集
- 多賀城市教育委員会 2009a『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第95集
- 多賀城市教育委員会 2009b『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第96集
- 多賀城市教育委員会 2009c『高崎遺跡』多賀城市文化財調査報告書第97集
- 多賀城市教育委員会 2010a『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第98集
- 多賀城市教育委員会 2010b『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第99集
- 多賀城市教育委員会 2010c『山王遺跡－第66・68次調査－』多賀城市文化財調査報告書第100集
- 多賀城市教育委員会 2010d『山王遺跡－第71・72次調査－』多賀城市文化財調査報告書第101集
- 多賀城市教育委員会 2011a『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第102集
- 多賀城市教育委員会 2011b『高崎古墳群第10・11次調査』『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第103集
pp.78～122
- 多賀城市教育委員会 2011c『高崎古墳群第7次調査』『高崎古墳群ほか』多賀城市文化財調査報告書第104集 pp.3～26
- 多賀城市教育委員会 2011d『山王遺跡－第87次調査－』多賀城市文化財調査報告書第105集
- 多賀城市教育委員会 2011e『高崎山の木地区試掘調査』多賀城市文化財調査報告書第106集
- 多賀城市教育委員会 2011f『市川橋遺跡－第72次調査出土の漆紙文書－』多賀城市文化財調査報告書第107集
- 多賀城市教育委員会 2012a『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第108集
- 多賀城市教育委員会 2012b『山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第109集
- 多賀城市教育委員会 2013a『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第111集
- 多賀城市教育委員会 2013b『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第112集
- 多賀城市教育委員会 2014a『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第114集
- 多賀城市教育委員会 2014b『桜井館跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第115集
- 多賀城市教育委員会 2014c『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第116集
- 多賀城市教育委員会 2015a『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第119集
- 多賀城市教育委員会 2015b『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第120集
- 多賀城市教育委員会 2015c『新田・山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第121集
- 多賀城市教育委員会 2015d『八幡沖遺跡－第9次調査－』多賀城市文化財調査報告書第125集
- 多賀城市教育委員会 2016a『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第127集
- 多賀城市教育委員会 2016b『高崎遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第128集
- 多賀城市教育委員会 2017a『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第132集
- 多賀城市教育委員会 2017b『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第134集

多賀城市史編纂委員会 1991『多賀城市史』第4巻 考古資料

高野芳宏・菅原弘樹 1997「古代都市多賀城」『多賀城市史』第1巻 原始・古代・中世 多賀城市史編纂委員会編 pp.335~367

高橋 透 2016「陸奥国府城における掘立柱廐付建物の特質」『宮城考古学』第18号 宮城県考古学会 pp.77~94

高橋照彦 2015「都と地方の土器」『官衙・集落と土器 I -宮都・官衙・集落と土器-』奈良文化財研究所研究報告第15冊 pp.11~26

高橋誠明 1999「宮城県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第5号 pp.1~20

高橋誠明 2003「宮城県における古墳時代中期の渡来系文化について」『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』平成12年度~平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(1))研究成果報告書 pp.66~75

高谷好一 1982「二つの小仏画水田」『季刊民俗学』第19号

武田健市 2010a「多賀城廃寺と多賀城南面の様子」『第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.115~134

武田健市 2010b「多賀城と城下の木簡出土遺構」『古代東北の城柵と木簡』木簡学会多賀城特別研究集会 pp.1~25

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府市の文化財第49集

館野和己 2001『古代都市平城京の世界』日本史リブレット7 山川出版社

異淳一郎 1991「都の焼物の特質とその変容」『新版古代の日本』第6巻 近畿II 角川書店

異淳一郎 2004「紙・筆・墨・硯」「古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編」奈良文化財研究所 pp.28~33

田所則夫 1997「5世紀の鍛冶工房跡について」『研究ノート7号』茨城県教育財団 pp.94~98

田中則和 2002「陸奥国「国府城」の考古学的諸相」『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院 pp.50~77

田中広明・福田 聖 1999「遺物から見た「豪族居館」」『東国土器研究』5号 東国土器研究会 pp.313~332

田中広明 2003「腰帯の語る古代の官人社会」「地方の豪族と古代の官人」柏書房 pp.15~74

田中広明 2006『国司の館』学生社

田中広明 2008『豪族のくらし』すいれん舎

田測俊雄 1999「世界の水田日本の水田」農山村文化協会

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

丹治篤嘉 1998「福島県における豪族居館関連遺跡」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』第8回東日本埋蔵文化財研究会シンポジウム資料 pp.100~121

地域文化財研究所 2012『呼塚遺跡-第15次-』千葉県柏市埋蔵文化財調査報告書71

近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし-陶邑の須恵器-』

千葉県教育振興財团 2006『四街道市小屋ノ内遺跡2』千葉県教育振興財团文化財調査報告書第557集

千葉県教育振興財团 2012『研究紀要27』

千葉孝弥 1992「武士の屋敷の発見」「よみがえる中世7-みちのくの都 多賀城・松島一」平凡社 pp.66~92

千葉孝弥 1993a「振り出された近世の様子」『多賀城市史』第2巻 近・現代 pp.212~238

千葉孝弥 1993b「多賀城周辺の道路遺構」『古代交通研究』第2号 古代交通研究会 pp.35~40

千葉孝弥 1994「多賀城周辺の道路遺構」『季刊考古学』雄山閣 pp.56~59

千葉孝弥 1995「多賀城城外の道路と方格地割り」『古代文化』第47巻第4号 pp.45~54

千葉孝弥 1997a「多賀城外の方格地割」『空から見た古代遺跡と条里』条里制研究会 p.5

千葉孝弥 1997b「考古学からみた中世の多賀城」『多賀城市史』第1巻 原始・古代・中世 pp.549~591

千葉孝弥 2008「桓武朝期の多賀城」国立歴史民俗博物館編「歴博フォーラム 桓武と激動の長岡京時代」山川出版社 pp.95~96

- 千葉孝弥 2014「考古学から見た多賀国府」『講座 東北の歴史』第2巻 都市と村 清文堂 pp.14~40
- 築館町教育委員会 1993『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第6集
- 築館町教育委員会 1994『伊治城跡 平成5年度発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第7集
- 次山 淳 1992「埴輪式土器の変遷とその位置づけ」『究班 埋蔵文化財研究会』pp.235~248
- 辻 純一 1994「条坊制とその復元」『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所編 角川書店 pp. 103~116
- 辻 秀人 1989「東北古墳時代の画期について(その1)ー中期後半の画期とその意義ー」『福島県立博物館紀要』第3号 pp.1~19
- 辻 秀人 1990「東北古墳時代の画期について(その2)ー7世紀史の理解をめざしてー」『考古学古代史論叢』pp.323~347
- 辻 秀人 1994「東北南部における古墳出現期の土器編年ーその1 会津盆地ー」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第26号 pp.105~140
- 辻 秀人 1995「東北南部における古墳出現期の土器編年ーその2ー」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第27号 pp.39~88
- 辻 秀人 2007a「東北地方土師器成形技法ー丸底の作り方、段の作り方ー」『考古学論究』pp.1083~1100
- 辻 秀人 2007b「楽器式土師器の製作技法」、「總括」「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」平成15年度~平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 pp.411~417, pp.443~458
- 辻 秀人ほか 2007c「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」平成15年度~平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- 都出比呂志 1983「古代水田の二つの型」『展望アジアの考古学』新潮社 pp.394~410
- 都出比呂志 1993「古墳時代の豪族の居館」『日本通史』第2巻 岩波書店 pp.309~330
- 東国土器研究会 1995『東国土器研究』第4号
- 東国土器研究会 1999『東国土器研究』第5号
- 東北学院大学考古学研究部 1975「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」「温故」第9号 pp.1~90
- 東北学院大学考古学研究部 1979「柴道跡発掘調査報告」「温故」第11号 pp.1~147
- 東北古代土器研究会 2008a『東北古代土器集成一須恵器窯跡編 隆奥一』研究報告3
- 東北古代土器研究会 2008b『東北古代土器集成一須恵器窯跡編 出羽一』研究報告4
- 東北歴史資料館 1989『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集25
- 東北歴史博物館 2005『古代の旅一人とものが通るみちー』
- 栃木県教育委員会 1993『成沢遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第138集
- 栃木県文化振興事業団 1998『新郷古墳群・新郷道路・下り遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第214集
- とちぎ生涯学習文化財団 2005『堀越遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第287集
- とちぎ生涯学習文化財団 2007『研究紀要第15号ー栃木県の埋蔵文化財と考古学ー』
- とちぎ生涯学習文化財団 2010『東谷・中島地区遺跡群10』栃木県埋蔵文化財調査報告第331集
- とちぎ未来づくり財団 2013『東谷・中島地区遺跡群14』栃木県埋蔵文化財調査報告第360集
- 富岡直人 1995「動物遺存体」『縄文時代晚期貝塚の研究2 中沢貝塚Ⅱ』
- 富谷町教育委員会 2003『白鳥遺跡』富谷町文化財調査報告書第4集
- 長岡市教育委員会 2011『五千石遺跡ー1区・3区・4区東地区・5区ー』長岡市埋蔵文化財調査報告書
- 中川晃子 2016『新潟県における周溝をもつ建物の分類と変遷ー堅穴遺構建物との比較からー』『新潟県考古学会研究発表会』資料

- 永田英明 2015「城柵の設置と新たな蝦夷支配」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館 pp.15~58
- 永田英明 2016「古代東北の軍事と交通—城柵をめぐる交通関係ー」『日本古代の交通・交流・情報』1 吉川弘文館 pp.206~232
- 中村太一 2000『日本の古代道路を探す—律令国家のアウトバーン』平凡社新書
- 奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告VII』
- 奈良文化財研究所 2002『鉢をめぐる諸問題』
- 奈良文化財研究所 2003a『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』
- 奈良文化財研究所 2003b『古代の陶窯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐって—』
- 奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』
- 奈良文化財研究所 2010『平城京 奈良の都のまつりごとくらし』
- 奈良文化財研究所 2015『官衙・集落と土器Ⅰ 宮都・官衙と土器』奈良文化財研究所研究報告第15冊
- 奈良文化財研究所 2016『官衙・集落と土器Ⅱ 宮都・官衙・集落と土器』奈良文化財研究所研究報告第18冊
- 鳴瀬町教育委員会 1988『里浜貝塚』鳴瀬町文化財調査報告書第3集
- 新潟県教育委員会 2008『延命寺遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第201集
- 新潟県教育委員会 2016『六反田南遺跡V』新潟県埋蔵文化財調査報告書第261集
- 西野 修 2016「平安初期の城柵再編と地域社会」『三十八年戦争と蝦夷政策の転換』吉川弘文館 pp.91~127
- 能登 健 1983『小区画水田の調査とその意義—群馬県同道遺跡ー』『地理』28巻10号 pp.67~74
- 橋本博文 1985「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部 pp.271~298
- 花田勝広 2004「韓鐵治と渡来系集団」『國立歴史民俗博物館研究報告』第110集 国立歴史民俗博物館 pp.55~72
- 坂野和信 2005「東国の大古墳時代中期土器と韓半島系土器」『研究紀要』第20号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.77~97
- 林 良博他 1977「日本產イノシシの歯牙による年齢と性の判定」『日本獣医学雑誌』39~2
- 東日本埋蔵文化財研究会 1998「古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題」第8回東日本埋蔵文化財研究会
- 樋口知志 2013『阿豆流為』ミネルヴァ書房
- 平川 南 1993「多賀城市山王千刈田遺跡の木簡について」『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第34集 pp.51~54
- 広瀬和雄 1990「古代の農村」『日本村落史講座2』雄山閣出版
- 平川 南 1999「古代地方都市論」『國立歴史民俗博物館研究報告』第78集 pp.1~30
- 平川 南 2012『東北「海道」の古代史』岩波書店
- 平川 南・武井紀子 2011「第16号漆紙文書の解説と内容について」『竹川橋遺跡—第72次調査出土の漆紙文書—』多賀城市文化財調査報告書第107集 pp.12~24
- 廣谷和也 2014「東北地方の重圓文軒丸瓦」『古代瓦研究』VI 奈良文化財研究所 pp.381~397
- 福島県教育委員会 1991『母畠地区遺跡発掘調査報告31 辰巳城遺跡(第2次)』福島県文化財調査報告書第246集
- 福島県教育委員会 1994『母畠地区遺跡発掘調査報告34 正直A遺跡』福島県文化財調査報告書第288集
- 福島県教育委員会 1995『母畠地区遺跡発掘調査報告36 正直C遺跡』福島県文化財調査報告書第305集
- 藤木 海 2016『南相馬に躍動する古代の郡役所 泉官衙遺跡』遺跡を学ぶ106 新泉社
- 藤沢 敦 1998「東北南部の古墳と角塚古墳」『最北の前方後円墳』角塚古墳シンポジウム資料
- 藤沢 敦 1992「引田式再論」『歴史』第79号 pp.68~86
- 藤沢 敦 2002「古墳時代の骨角器」『弥生・古墳時代石器・石製品・骨角器』考古資料大観第9巻 小学館 pp.361~364
- 藤沢 敦 2015「不安定な古墳の変遷」『倭国の形成と東北』吉川弘文館 pp.107~133

- 藤沢 敦 2016「古墳時代の農民と集落」『特集 古墳時代の集落研究』月刊考古学ジャーナル№691 ニューサイエンス社 pp.5~9
- 藤本辰子・松本秀明 2012「阿武隈川河口付近における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討」『人間情報学研究』第17巻 pp.29~40
- 二上山博物館 1994『再現・葛城の豪族居館を推理する』
- 古窯跡研究会 1972『蟹沢中瓦窯跡』研究報告第1冊
- 古川一明 1996「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護』 pp.255~272
- 古川一明 2014「古代東北地方における特殊な形態の煮炊き用土器について」『東北歴史博物館研究紀要』第15号 pp.1~32
- 朴沢志津江 2001「角塚古墳の調査成果」『中期古墳から後期古墳へ』第6回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨
- 前川佳代 2009「古代地方都市のかたち」『古代都城のかたち』同成社古代史選書3 pp.75~103
- 松井 章 1987「養老園牧令の考古学的考察—斃れ馬牛の処理をめぐって—」『信濃』39~4 pp.231~256
- 松井 章 2003「歴史時代の動物考古学」『環境考古学マニュアル』同成社 pp.201~209
- 松本太郎 2009「鬼高系の系譜と歴史的背景」『古代社会と地域間交流』国土館大学考古学会編 六一書房 pp.35~54
- 松本太郎 2013『東国の土器と官衙遺跡』六一書房
- 松本太郎 2016「東国の官衙・集落と土器様相—常縦地域を中心にして—」『官衙・集落と土器2—宮都・官衙・集落と土器—』奈良文化財研究所研究報告第18冊 pp.11~43
- 松本秀明 1981「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』54 pp.72~85
- 松本秀明 1984「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論』57A pp.720~738
- 松本秀明 1995「山王遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境」『山王遺跡II—多賀前地区遺構編一』宮城県教育委員会 pp.3~5
- 松本秀明 1996「山王遺跡の地形学的背景」『山王遺跡IV—多賀前地区考察編一』宮城県教育委員会 pp.146~154
- 松本秀明 2000「仙台平野の地形環境変化と高田B遺跡」『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告書第242集 pp.7~13
- 松本英明 2014「山王遺跡多賀前地区におけるイベント堆積物の粒度分析結果」『山王遺跡VI—多賀前地区第4次調査一』宮城県文化財報告書第235集 pp.182~186
- 松本英明・伊藤晶文 2014「七北田川下流域の地形変化と山王遺跡—直観地盤津波来襲時の古地形の復元—」『山王遺跡VI—多賀前地区第4次調査一』宮城県文化財報告書第235集 pp.199~203
- 松山町教育委員会 1983『次橋須恵器窯跡』松山町文化財調査報告書第1集
- 間庭 稔 1997「古墳時代前期の水田跡」『群馬文化』第252号
- 箕浦幸治・山田努・平野信一 2014「山王遺跡多賀前地区、市川橋遺跡八幡地区にみられるイベント堆積物の堆積学的・古生物学的検討」『山王遺跡VI—多賀前地区第4次調査一』宮城県文化財報告書第235集 pp.171~181
- 宮城県教育委員会・多賀城町 1970『多賀城跡調査報告I—多賀城廐寺跡一』吉川弘文館
- 宮城県教育委員会 1974「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書I』宮城県文化財調査報告書第35集 pp.161~272
- 宮城県教育委員会 1980「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第69集 pp.277~347
- 宮城県教育委員会 1981a「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集 pp.1~540
- 宮城県教育委員会 1981b「家老内遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第81集 pp.41~96
- 宮城県教育委員会 1981c「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第81集 pp.135~184
- 宮城県教育委員会 1982a「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第83集 pp.307~584
- 宮城県教育委員会 1982b「水入遺跡」宮城県文化財調査報告書第84集
- 宮城県教育委員会 1983「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集 pp.71~213

- 宮城県教育委員会 1985「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集 pp.1～142
- 宮城県教育委員会 1987『硯沢・大沢窯跡』宮城県文化財調査報告書第116集
- 宮城県教育委員会 1989「薬ヶ崎貝塚」『三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財報告書第131集 pp.219～228
- 宮城県教育委員会・利府町教育委員会 1990『利府町郷聚遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第134集・利府町文化財調査報告書第5集
- 宮城県教育委員会 1990『山王遺跡一仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報一』宮城県文化財調査報告書第138集
- 宮城県教育委員会 1991a『合戦原遺跡』『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第140集 pp.9～119
- 宮城県教育委員会 1991b『山王遺跡一仙塩道路建設関係遺跡平成2年度概報一』宮城県文化財調査報告書第141集
- 宮城県教育委員会 1991c『船南団遺跡 小堤城跡』『船南団遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第144集 pp.5～135
- 宮城県教育委員会 1992『山王遺跡一仙塩道路建設関係遺跡平成3年度概報一』宮城県文化財調査報告書第147集
- 宮城県教育委員会 1993a『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第154集
- 宮城県教育委員会 1993b『狐塚遺跡』『狐塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第157集 pp.3～24
- 宮城県教育委員会 1994a『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第160集
- 宮城県教育委員会 1994b『山王遺跡I一古墳時代中期遺物包含層編一』宮城県文化財調査報告書第161集
- 宮城県教育委員会 1994c『山王遺跡八幡地区的調査』宮城県文化財調査報告書第162集
- 宮城県教育委員会 1994d『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第163集
- 宮城県教育委員会 1995『山王遺跡II一多賀前地区遺構編一』宮城県文化財調査報告書第167集
- 宮城県教育委員会 1996a『山王遺跡III一多賀前地区遺物編一』宮城県文化財調査報告書第170集
- 宮城県教育委員会 1996b『山王遺跡IV一多賀前地区考察編一』宮城県文化財調査報告書第171集
- 宮城県教育委員会 1997『山王遺跡V一八幡・伏石地区一』宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会 1998『山王遺跡町地区的調査』宮城県文化財調査報告書第175集
- 宮城県教育委員会 1999a『発掘ダイジェスト一山王・市川橋遺跡一』
- 宮城県教育委員会 1999b『一里塚遺跡』宮城県文化財調査報告書第179集
- 宮城県教育委員会 2001a『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第184集
- 宮城県教育委員会 2001b『山王遺跡八幡地区的調査2一古墳時代後期SD2050B河川跡編一』宮城県文化財報告書第186集
- 宮城県教育委員会 2002『館内の内遺跡』『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第188集 pp.57～80
- 宮城県教育委員会 2003a『新田東遺跡』宮城県文化財調査報告書第191集
- 宮城県教育委員会 2003b『市川橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第193集
- 宮城県教育委員会 2003c『中野高柳遺跡I』宮城県文化財調査報告書第194集
- 宮城県教育委員会 2004a『沢田山西遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第196集
- 宮城県教育委員会 2004b『中野高柳遺跡II』宮城県文化財調査報告書第197集
- 宮城県教育委員会 2004c『山王遺跡伊勢地区的調査』宮城県文化財調査報告書第198集
- 宮城県教育委員会 2005『中野高柳遺跡III』宮城県文化財調査報告書第201集
- 宮城県教育委員会 2006『中野高柳遺跡IV』宮城県文化財調査報告書第204集
- 宮城県教育委員会 2007『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財報告書第209集
- 宮城県教育委員会 2009『市川橋遺跡の調査一八幡・伏石地区一』宮城県文化財報告書第218集
- 宮城県教育委員会 2012『西石山原遺跡』『西石山原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第230集 pp.5～92

- 宮城県教育委員会 2014『山王遺跡VI－多賀前地区第4次調査－』宮城県文化財調査報告書第235集
- 宮城県教育委員会 2015a『山王遺跡・市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第238集
- 宮城県教育委員会 2015b『涌沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第239集
- 宮城県教育委員会 2016a『熊の作遺跡』『熊の作遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第243集 pp.81～266
- 宮城県教育委員会 2016b『御駒堂遺跡』『御駒堂遺跡・堂の沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第244集 pp.13～160
- 宮城県教育委員会 2016c『入の沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第245集
- 宮城県内水面水産試験場 2004『宮城の淡水魚』
- 宮地博三郎・川那部宏哉・水野信彦 1976『原色日本淡水魚類図鑑』保育社
- 村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 村上恭通 2016『日韓の鉄生産（製鉄）』『日韓4～5世紀の土器・鉄器生産と集落』日韓交渉の考古学－古墳時代－研究会 pp.243～258
- 村田晃一 1988『宮城県黒川郡大衡窯跡群』『研究紀要』第14巻 東北歴史資料館 pp.31～48
- 村田晃一 1992『多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産』『東日本における古代・中世窯業の諸問題』会津若松市教育委員会 pp.103～117
- 村田晃一 1994『土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－』『古代官衙の終末をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会 pp.46～65
- 村田晃一 1995『宮城郡における10世紀前後の土器』『福島考古』36号 pp.47～72
- 村田晃一 2000『飛鳥時代の陸奥北辺－移民の時代』『宮城考古学』第2号 宮城県考古学会 pp.45～80
- 村田晃一 2002『7世紀集落研究の視点（1）』『宮城考古学』第4号 宮城県考古学会 pp.49～72
- 村田晃一 2005『7世紀における陸奥北辺の様相－宮城県域を中心として－』『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』 pp.351～367
- 村田晃一 2007『宮城県中部から南部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 pp.119～163
- 村田晃一 2010a『陸奥・出羽における版図の拡大と城柵』『条里制・古代都市研究』第25号 pp.52～65
- 村田晃一 2010b『古代奥羽の城柵・官衙の門と圓繞施設』『官衙と門』第13回古代官衙・集落研究会報告書 pp.51～89
- 村田晃一 2013『考古資料からみた古代から中世の変化－陸奥国府周辺－』会津坂下町文化財講演会『南奥羽の古代から中世の変化』資料
- 村田晃一 2015a『円福寺の伽藍と中世の松島』『宮城考古学』第17号 宮城県考古学会 pp.135～152
- 村田晃一 2015b『版図の拡大と城柵』『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館 pp.87～118
- 村田晃一 2016a『平安時代における磁の生産と消費（予察）』『三十三間堂官衙遺跡』亘理町文化財調査報告書第19集 pp.157～159
- 村田晃一 2016b『日本古代城柵の検討（3）』『日本古代考古学論集』同成社 pp.638～652
- 村田晃一 2016c『陸奥北辺における城柵の造営と集落・土器－賀美郡と栗原郡の様相から－』『官衙・集落と土器2－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所研究報告第18冊 pp.143～158
- 村田晃一 2017『陸奥国海道南部官衙と交通－近年の日理郡をめぐる成果から－』『考古学ジャーナル』695号 pp.9～13
- 村松 稔 2013a『多賀城跡城外の災害痕跡について』『第39回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.61～72
- 村松 稔 2013b『多賀城城外における南北大路の創建および拡幅時期について』『福大史学』第82号 pp.43～67
- 木簡学会多賀城特別研究会 2010『古代東北の城柵と木簡』
- 八木光則 2001『城柵の再編』『日本考古学』第12号 日本考古学協会 pp.55～68
- 八木光則 2015『古墳時代併行期の北日本』『倭國の形成と東北』吉川弘文館 pp.134～161

- 柳澤和明 2010a「多賀城市田屋場横穴墓群の再検討」『東北歴史博物館研究紀要』第11号 pp.13~42
- 柳澤和明 2010b「多賀城市山王・市川橋遺跡における住社式～栗園式期集落跡の様相」『宮城考古学』第12号 宮城県考古学会 pp.59~85
- 柳澤和明 2011「国府多賀城の祭祀」『東北歴史博物館研究紀要』第12号 pp.29~54
- 柳澤和明 2012a「多賀城の墓制一集団墓地と単独墓」『考古学研究』第58巻第4号 pp.67~86
- 柳澤和明 2012b「『日本三代実録』より知られる貞觀十一年（八六九）陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興」『歴史』第119輯 東北史学会 pp.27~58
- 柳澤和明 2013a「発掘調査より知られる貞觀十一年（八六九）陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興」『史林』第96巻第1号 京都大学史学研究会 pp.5~41
- 柳澤和明 2013b「発掘調査からみた貞觀11年（869）陸奥国巨大地震の被害と復興」『宮城考古学』第15号 宮城県考古学会 pp.81~98
- 柳澤和明 2016a「九世紀の地震・津波・火山災害」「三十八年戦争と蝦夷政策の転換」吉川弘文館 pp.158~187
- 柳澤和明 2016b「陸奥国多賀城の万燈会」『歴史』第127輯 pp.118~138
- 山内忠平 1957「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』7
- 山形県教育委員会 1992「山海窯跡群」「山海窯跡群第2次、山船7・8遺跡、山橋城跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第172集 pp.1~60
- 山形県埋蔵文化財センター 1998「平野山窯跡群第12地点遺跡」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集
- 山形県埋蔵文化財センター 2006「小松原窯跡」「小松原窯跡・長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第147集 pp.1~182
- 山崎忠良 2017「新潟県の古代の堅穴建物について」『三面川流域の考古学』第15号 奥三面を考える会 pp.73~96
- 山田俊輔 2016「鹿角製刀装具の系列」『日本考古学』第42号 日本考古学協会 pp.21~33
- 山中 章 1990「古代都城の交通一交差点からみた条坊の機能ー」『考古学研究』第37巻第1号（通巻145号）考古学研究会 pp.57~82
- 山中 章 1997「桓武朝の新流通構造—壇Gの生産と流通ー」『古代文化』第49巻第11号 pp.52~63
- 山中 章 1999「多賀城方格地割と交通」『古代交通研究』第9号 古代交通研究会 pp.137~150
- 山中敏史 1983「埋蔵文化財ニュース41 陶器関係文献目録」奈良国立文化財研究所
- 山中敏史・佐藤興治 1985「古代の役所」古代日本を発掘する5 岩波書店
- 山中敏史 1994「古代地方官衙遺跡の研究」塙書房
- 山中敏史 2007「地方豪族居宅の建物構造と空間的構成」『古代豪族居宅の構造と機能』奈良文化財研究所 pp.89~218
- 山元町教育委員会 1995「狐塚遺跡」山元町文化財調査報告書
- 山元町教育委員会 2014a「石垣遺跡—常磐自動車道II—」山元町文化財調査報告書第7集
- 山元町教育委員会 2014b「日向北遺跡—常磐自動車道III—」山元町文化財調査報告書第8集
- 山元町教育委員会 2015「日向遺跡—常磐自動車道IV—」山元町文化財調査報告書第9集
- 山元町教育委員会 2016「谷原遺跡II—常磐自動車道VI—」山元町文化財調査報告書第13集
- 山元町歴史民俗資料館 2007「亘理郡の古墳時代～古墳と生きたひとびと～」第57回企画展図録
- 山本 靖 2005「古墳時代に形成された方形環濠」『専修考古学』第11号 専修大学考古学会 pp.19~38
- 結城慎一 1981「奈良の導入と展開の構造について（予察）—ミガキのある須恵器から—」『陸奥国古窯跡群IV』 古窯跡研究会 pp.35~44
- 奈良史研究所 1970「漸谷子窯跡群第2次調査概報」
- 横須賀市教育委員会 1986「鍼切遺跡C・D地点の調査—」横須賀市文化財調査報告書第12集

- 横須賀倫達 2005 「陸奥南部の居館・集落」『日本考古学協会2005年福島大会シンポジウム資料集』 pp.323~338
- 横須賀倫達 2007 「集落を囲む溝」茂木雅博編『日中交流の考古学』同成社 pp.191~208
- 吉田江美子 2004 「鳥形須恵器について」『山形考古』第7巻第4号 山形県考古学会 pp.33~38
- 吉野 武 2015a 「多賀城と陸奥国南部の諸郡」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.79~96
- 吉野 武 2015b 「陸奥国の城柵と運河」『古代日本の運河と水上交通』八木書店 pp.283~302
- 吉野 武 2015c 「出土文字資料と多賀城碑」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館 pp.185~217
- 利府町教育委員会 1978 『川袋古墳群』利府町文化財調査報告書第1集
- 利府町教育委員会 1980 『道安寺横穴古墳群』利府町文化財調査報告書第2集
- 利府町教育委員会 1988 『八幡崎B遺跡』利府町文化財調査報告書第4集
- 利府町教育委員会 1991 『春日窯跡群』利府町文化財調査報告書第7集
- 利府町教育委員会 1992 『八幡崎B遺跡II』利府町文化財調査報告書第11集
- 利府町教育委員会 2004 『大貝窯跡群』利府町文化財調査報告書第12集
- 利府町教育委員会 2011 『硯沢窯跡II』利府町文化財調査報告書第13集
- 涌谷町教育委員会 1972 『長根窯跡群II』
- 亘理町教育委員会 1997 『堀の内遺跡』亘理町文化財調査報告書第7集
- 亘理町教育委員会 2016 『三十三間堂官衙遺跡』亘理町文化財調査報告書第19集

Driesch,Angela.von den.1976. A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES.Peabody Museum Bulletin 1

Grant,Annie 1982 'The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates'.Ageing and sexing animal bones from archaeological sites. BAR British Series 109.pp.91-108

Legge,A.J. and Rowley-Conwy,P.A. 1988 Ster Carr Revisited: A Re-analysis of the Large Mammals. Oxford: Alden Press

Lyman,R.Lee.1994.Vertebrate Taphonomy

報告書抄録

ふりがな	さんのういせき							
書名	山王道路Ⅶ							
調書名	三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第246集							
編著者名	村田晃一・西村力・南藤和機							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3丁目8-1 TEL 022-211-3684							
発行年月日	西暦 2018年3月14日							
ふりがな	ふりがな							
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	发掘原因
山王遺跡・ 市川遺跡	宮城県 多賀城市 南河内八幡、 山王字伏石	042099	18013・18008	38度 17分 55秒	140度 59分 10秒	2011.20.3-26 2013.3.30-7 2014.4.07 2014.6.27	確認調査:8,942m ² 本調査:1,080m ² 確認・記録保存調査 確認調査:14,436m ² 本調査:1,161m ² 確認調査:1,200m ² 本調査:410m ²	確認・記録保存調査 確認・記録保存調査 確認・記録保存調査
	所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
	生産遺跡	古墳時代 前期	水田跡					
	集落跡	古墳時代 中期	掘立柱建物跡1条、区画溝跡2条、 廻穴住居跡4棟など	土器器、石製品、砾石、 鉄製品、瓦片など	5世紀前半の堅穴住居を4棟確認し、それらが掘立柱と大溝で囲まれたことがわかった。住居の中には東日本でも数が少ない縫合繩構が含まれる。			
山王・市川遺跡	集落跡	古墳時代 後期	区画溝跡4条、材木跡2条、 堅穴住居跡45棟、井戸跡1条、 土坑3基など	土器器、陶器、土器製品、 石製品、木製品、骨角製品など	中心部部分が木版と溝で囲まれた集落跡を確認した。年代は、6世紀後半～7世紀前半である。初期の堅穴に較べ堅穴住居が増加しており、面積も、多い。集落内を流れる川河原からは、木製品や骨角製品が多量に出土した。			
	集落跡	飛鳥時代～ 奈良時代前半	区画溝跡3条、材木跡4条、 堅穴住居跡9條、廻穴住居跡4条、 井戸跡2基など	土器器、陶器	中心部部分が木版と溝で囲まれた集落跡を確認した。年代は、7世紀後半～8世紀前半とされる。堅穴の方向性へ大きく傾き、規模は東西190m、南北235mなどどの辺に近い平行四辺形で、内部に掘立柱建物跡や堅穴住居跡、井戸跡などが認められた。			
都市跡	都市跡	奈良時代 後半	東西道路跡1条、区画溝跡2条、 材木跡3条、掘立柱建物跡16條、 堅穴住居跡4条、井戸跡4基など	土器器、陶器、瓦、土器製品、 石製品、鉄製品など	多賀城へ向かう東西道路に沿って、材木版や溝で囲まれた区画が3つ以上設けられ、その外にも施設が展開した。前代と較べて区画個々の面積は小さくなるが、内部は掘立柱建物が中心となる。			
	都市跡	奈良時代 平安時代 前半	東西道路跡3条、南北道路跡3条、 区画溝跡15条、掘立柱建物跡10條、 堅穴住居跡14条、 土坑をもつ建物跡2條、井戸跡12条、廻穴2面など	土器器、陶器、瓦、土器製品、 石製品、鉄製品など	今日は市街方面について調査を行った。それぞれの変遷を捉えるとともに、施設構成や出土遺物から個々の街区の性格について考察を行っている。			
【考古学的中層】年代は5世紀前半で、東芯が掘立柱脚・大溝、北辺は川河原に面した内部に堅穴住居が28棟以上つくられた。その中には、当時の東日本では数少ない堅穴住居跡が含まれる。これらの施設は、河原に形成された遺物包含層より刀装具や呼形舟形器などといった威信材が示したことから豪族居館と考えられる。居館は、河原に形成された木版と溝で囲まれた堅穴住居跡から5世紀前半のうちに廃止された。								
【古墳時代後期】6世紀末～7世紀前半は、中心部分が木版と溝で囲まれた集落が形成された。内部には堅穴住居が165棟以上つくられ、威信材である太刀や其の柄の柄などほか、近接する複数の復元窓からその面積が広がったことから、七北田川流域を核とした豪族が居住した点を想定して考えられる。また、集落内に残れる印削跡からは、土器・土器製品・石製品のほか、木製品・骨角製品・動植物遺体が多く出土しており、当時の閑散人々の暮らしぶりを復元する上で貴重な資料を得ることができる。								
【奈良時代～平安時代前半】7世紀後半～8世紀前半の集落は、中心部分が木版と溝で囲まれた区画が形成された。堅穴の方向は西へ大きく傾く。6世紀末～7世紀中の掘立柱跡は、平面形が方形となる点、内施設が掘立柱建物を主体とする点が異なる。								
【奈良時代後半】8世紀後半になると、多賀城へ向かう東西道路に沿って材木版や溝で囲まれた区画が複数つくられた。道路の北に2区画、南に1区画以上認められる。既に残りのよい区画は南北に長い平行四辺形で、範囲は南北120m以上、東西71mあり、内部には掘立柱建物跡25棟、堅穴住居跡3棟、井戸跡4基などがある。前代は、区画設置の構成が掘立柱建物を主体とする点が異なる。								
【奈良時代末～平安時代前半】方格地剥削工事後の遺構は、8世紀末～9世紀前半（豐）9世紀中葉～10世紀前半（日削）。10世紀後半（畠置）の3時期に分かれている。このうち日削は古墳時代と新規に分けられ、後者は奥羽豪族の大規模な作業場から津波などの災害からの復興地と考えられた。また、方格地剥削によって南北大道路から東西道路までの2主道路と南北2道路に跨まれた範囲については、8世紀末から9世紀前半に一気に施工された可能性が高まった。方格地剥削は、II-A期（9世紀中葉）に完成する。建物は最も数が多く、その方向は真北を指向する。官衙の器物や軒板もまた種類・量ともにピークを迎えている。多賀城は第2層（780～860年）に全層が曾司城として使用され、建物数が爆発的に急増する。こうしたことから、多賀城と城外の方格街跡の整備（官人宿とそれを支えた人々の集住）は、一連のかつ引連れて進められたと考えられる。								



八幡・伏石地区の方格地割と多賀城跡(南西から)

宮城県文化財調査報告書第246集

山王遺跡VII

—三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書—

第3分冊 M区、N区、自然科学分析、総括編

平成30年3月12日印刷

平成30年3月14日発行

発行 宮城県教育委員会

〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 東北プリント

〒980-0822 宮城県仙台市青葉区立町24-24
